リアデイルの大地にて

Ceez

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リアデイルの大地にて

【Ｎコード】
Ｎ１２４７Ｐ

【作者名】
Ｃｅｅｚ

【あらすじ】
事故で半身不随となった”各務桂菜”は、ある日停電により死んでしまい、直前まで遊んでいたオンラインゲームの世界へ。　目覚めてみればゲームをしていた時代より更に２００年後!?　とりあえず生きていく為には何を成さねばならないのか。　ゲームだった世界で、手探りで進む彼女の前に立ち塞がる者は!?

プロローグ（前書き）

初めまして、初心者に毛が生えた程度の文才ですが宜しくお願い致します。

プロローグ

「……まいったなぁ……」

各務（かがみ）　桂菜（けいな）は火照った体を冷ます様に窓際でグッタリしていた。
別に長風呂をし過ぎた訳ではなく。　考えに考え、長考を重ねてひとりで錯乱し、自己完結に至った結果による知恵熱の様なものである。

視界に納まる風景は抜ける様な青い空にぽつぽつと白い雲、一般的には快晴と言える。　その下へ延々と連なる山脈にその麓から広大な面積を占める森。　そして視線を徐々に下げていくと、目前に十数棟立ち並ぶ木造の家屋。

自分の生活していた二十二世紀という時代からは想定出来ない長閑（のどか）と言えばいいのか、寂れていると言ってしまってもいいのか。
そんな光景の一部として存在している自分に、つい乾いた笑いを零す。

彼女が自らの置かれた状況把握に努め、疲れ果てた事の発端は今朝に遡る。

「おきゃくさ～ん、朝ですよ～」

ぱっと差し込んだ強い光と、舌足らずな幼い呼び声に彼女はうっすらと目を開く。　頭上にぼんやりと見えるは木目の付いた木の天井、視線を右へずらせば四角く開かれた鎧戸だった窓、左に向ければ広がる白いシーツ先に胸から上を覗かせた少女が元気いっぱいの笑顔で「おはよーございまーす」と挨拶。

「あ～…、あぁふ……。　おはぉふぅ～…？」

「えへへっ、おねーちゃん朝でっすよ～」

欠伸混じりに返事を返せば、眩しい笑顔で切り返してくれる少女に自然と目が覚める。

朝日に照らされた上半身で陽の光を吸収するように伸ばした桂菜は、自身を見下ろして動きを止めた。　ベット脇に立つ少女が首を傾げて不思議がるほどに。

「朝日の射す……木造の、部屋？」

昨日まで、ついさっきまで目を閉じた場所は白い壁に囲まれ、見飽きる程に過ごした病室だった筈だ。　むしろ一人で起きる事すら不可能な自分の体で起き上がって、伸びをした事実に放心する。

数秒か数分間か呆然とした瞬間は僅かだったのか、朝を知らせに来た少女が顔を覗き込んでいるのに気付いた桂菜は、俯き気味だった体を起こす。

「だいじょーぶ？　おねーちゃん？」

心から心配してくれたのだろう、少女の潤む黒い瞳を安心させるにはどうしたものかと、自身の悩みを横にズラし彼女はアイテムボックスを開く。　中から無造作に掴み上げた飴玉、――ＭＰを微量に回復させる効果、を少女の前に差し出した。

かつて泣いてばかりだった幼少期の頃、よく担当の看護婦に貰った時のように。　少女に笑顔で飴玉を手渡す。

「あ、ありがとう。　おねーちゃん！」

「いいえ、どういたしまして」

ベットから離れて少女の頭を軽く撫でると、頬を軽く染めとびっきりの笑顔ではにかむ少女。　ゆったりとしたスモックに似た服の上から掛けたエプロンのポケットに飴玉を納めた少女は、桂菜の寝ていたベットからシーツと毛布を剥ぐと綺麗に折り畳み、胸いっぱいに抱えて部屋を出て行く。

その際に「朝ごはんだからはやくおりてきてね？」と、告げるの

も忘れずに。

胸にぽわぽわした暖かなものが広がる光景に浸りたかった心中を理性で押さえつけ、桂菜はつい今し方の行動を反芻した。

（……アイテムボックスを開く……？）

意識した途端に視界の右端へ表示される縦長のウィンドウ。いっぺんに並ぶ単語数は１５個、ウィンドウ内右上角にあるスクロールバーを操作すれば、膨大な数のアイテムが下から上へと流れて行く。

「これは……、まさか……」

頬をつねる。　…痛い。

古典的な現実と夢との判別方により直面している此こそが現実（リアル）と認識。

夢、なんて考えたものだからアイテムウィンドウの隣に魔法技能（マジックスキル）用の画面も開く。【夢落し：ナイトメア】がピックアップ表示されるのを見た桂菜の顔からザーッと血の気が引いた。

ここは直前までプレイしていたオンラインゲーム、その世界、リアデイルそのものだと。

プロローグ（後書き）

１６００文字しかありませんでした（汗）
おかしい、こんな短くなるはずではなかったのに……。

1話　現状を把握しよう

腹が減っては戦は出来ぬ。

桂菜はまずは朝食を腹に入れてから問題の対処に当たる事にした。
ギーギー軋む急な階段をおっかなびっくり下り、一階の食堂兼酒場に移動する。
そこに居たのは先程の少女と、宿屋の女将さんと言うべきか恰幅のいい妙齢の女性。　丸テーブルに四脚の椅子が八セット、満席状態であれば間を縫って歩くのが困難なくらいひしめき合って置かれているが、それも今は農夫らしき男性が二名だけ座り、パンとスープで朝食を取っている。

「ほらほらお嬢ちゃん、席に着いとくれ。　スープが冷めちまう」
「あ、はい」

何処に座ったものかと躊躇していたら女将さんにせかされ、カウンター席と言うか調理場に向き合う形で並ぶ席に着く。　すぐに目の前へパンとスープが並べられ、さっき部屋へ来た少女が水の入った木のコップを置く。　既にここに至るまでゲーム内世界にしては疑問点を幾つか発見した桂菜は、食事をしながら考えてみる事にした。

（そういえば、口で食事をするなんて何年振りだろう?）

少々硬めのロールパンを千切り、シチューみたいな味わいのスープに浸して食べる。　久しぶりに使う味覚は彼女の感想を素直に述

べた。

「……おいしい……」

「おやおやお嬢ちゃん、嬉しい事を言ってくれるじゃないかい」

仏頂面だった表情を一転させた女将さんはカウンター前に肘を付き、気さくに話し掛けてきた。

「そんな笑顔になるくらい美味しいだなんて、今までどんな貧しい食事だったんだい？」

「え……？」

知らず知らずの内に顔が綻んでいたらしい。指摘されてから初めて自分が微笑んでいるのに気付く。思い出せば今までの食事と言うのは、口から摂取するのは水と錠剤だけで後は点滴のみ。事故にあってからの生活を省みた桂菜は、人として欠けた食生活を思い出し虚しさを零した。

「まぁ……、進んで食べていたいなんてものじゃ、なかったですね……」

「悲しい事を言うねぇ、食事が侘びしくなっちゃあ人生の半分は損をしてるよ！　サービスだ、どんどんお代わりしとくれ」

「あ、はい。　ありがとうございます」

肩をバシバシ叩かれた後、木皿スレスレまで更に注がれたシチュー兼スープを見た桂菜の笑いは引きつった。

（た、食べきれるかなぁ……）

自分が思ってたより空腹だったのを自覚し、ついついお代わりをする程食べ過ぎてしまった桂菜は、食後の膨れた腹に水を飲んで落ち着きつつ、宿屋の一階を見渡した。　確かこの村は辺境だとしても白の国フェルステスと翠の国グルスケイロの境にあり、交易路として栄えていて商人が行き来する為に馬車が大挙して置いてあり、宿屋も数多く建っていたはず（の世界観設定）なのだが。　この寂れ具合はどうしたのだろうか？

最後にこの場でログアウトした時はあちこちにＮＰＣが存在していたと記憶にあるし、喧騒のＳＥ（サウンドエフェクト）でかなり喧しかった印象もある。
顕著にゲームと違うところは、話し掛けると決まりきったセリフしか返さないＮＰＣが、きちんと感情を伴って反応を示す実状にあった。

ゲームであってゲームと違う世界と桂菜が認識した理由がそこにある。　問題は自分が”何処まで此処で生きていけるか？”であるという結論に行き着いた桂菜は色々調べてみる事にした。

まずはアイテムウィンドウを開き、手持ちの金銭を確認する。

九桁として表示されたそこから２０ギルとする少量を取り出して、使えるかどうかを試す意味で女将さんに提示した。

「あのー」

「ん？　どうしたんだい？」

「しばらく泊まりたいので、これ使えますか？」

チャリチャリンと銀色の大きめの、両面に花の意匠が彫られているコインをカウンター上に盛る。　ゲームの時は数値のみの存在であるお金だが、実際形にしてみると随分可愛いものなんだなと、桂菜は思った。

「ちょっ、あんたっ！？」

これに予想外の反応を見せたのは女将さんとその娘さんである。

少女は目を丸くしてコインの山を見つめ、女将さんは一枚を恐る恐る取ると手のひらでひっくり返したりして吟味、溜め息混じりに元の山へ戻す。

「普通に使えるけどね、お嬢ちゃん。　こんな大金これ見よがしに広げるもんじゃないよ？」

「……は？」

大金？　これが？　そんな馬鹿な。　攻撃力５％上昇の効果が三十分続く丸薬が店売りで１個四十ギルくらいだったはずだ。スコップでさえも十ギルと掛からずの値段で買えたため、これ位あれば一泊に値するかと脳内換算した桂菜の目論見は逆方向へ裏切られた。

女将さんによると四枚もあれば十泊も出来るそうで、改めて金銭

感覚を磨く必要があると痛感する。　初めて会った村人Ａである女将さんが誠実な人で良かったなあと、安堵した。

それにしても……。

「前はもっと賑わってた様な気がするんだけど、この村って……？」
「賑わっていた頃と言うともう四代も前の事さ。　フェルスケイロが建国されてからは随分廃れちまってねぇ、最近はお嬢ちゃんみたいな冒険者も珍しいもんさ」

「……ゑ？」

初めて聞く名称になんだそれはと思考が停止した。　まるで白と翠の国を足して割った国名に「え？　ここってゲームの中じゃないの？」と、再び困惑する。　自分を見失った桂菜を置いてけぼりにした女将さんの語りは止まらない。

「二百年も前は七つの国が大戦を起こして、何処も大荒れだったって話なんだけどね。　あまりの醜い争いに怒った神様が人々の中から指導者を選び出し、その人達が苦労して国を三つに纏めさせ、今に至るって事なのさ」

話し相手に苦労しているのか、食事を終えても残っていた農夫からはヤジが飛ぶ。

「当たり前の話を冒険者の嬢ちゃんに語るなよ…」
「やかましいっ！　さっさと畑仕事に行ってきな！」

迫力ある怒鳴り声に追い立てられ、農夫達は宿屋を後にする。
残った客は桂菜だけだ。

今の会話から得られた情報だけでも桂菜の思考を更に深みへと追い落とした。　二百年前の七つの国って、昨日まで遊んでいたＶＲＭＭＯＲＰＧ・リアデイルの世界設定そのものじゃないかと。戦士や神官や魔術師などの固定された職種が無い替わりに、四千もの数がある技能（スキル）。　種族と装備と技能を自分の方向性に固めて、望むままの仮想媒体（アバター）として自由度の高いプレイ。　あまりの自由度の高さにネットの大型掲示板に放任世界とも皮肉られた事もある。

７国間でひと月に一度、領地の増減を掛けた大戦争イベントがあり、ある色国がそれぞれ決められた領域を占拠すると数限定の特殊イベントアイテムが得られる特典があり。　前日にはサーバーが落ちる程の人数が綿密な戦略集会を行ったが、当日までに復旧せずに辛酸を呑んだ国もあるのは当時の笑い話にもなった。

その白、翠、赤、蒼、茶、黒、紫の七国が存在したのが二百年も前と聞かされた桂菜の常識がガラガラと音を立てて崩れていく。　かつて遊んだゲーム世界の二百年後なんてどうやって生きていけばいいのか……。

まずは世の中の常識を知る所から始めなければいけないのかと、確認しなければならない事案が積み重なっていく現状に頭を抱える。

「……にしてもそんな昔の事を聞いてくるなんて、前に此処に来た

ことがあるのかい？」
「え？　あー、えーと……」

まさか昨晩ログアウトしたのが此処なんですよ、と馬鹿正直に告げる訳にもいかず、答えを濁した。　しかし、気のせいじゃないか、とも言えない証拠は桂菜自身の姿が証明している。

「エルフだろう、お嬢ちゃんは？」
「はぁ、まぁ、そうですね」

桂菜の現在の身体は、ゲームをプレイしていた時点での仮想媒体（アバター）そのものであった。　これは部屋から階下へ下りる前、手持ちアイテムから【真実の鏡】――あるイベントで配布されたアイテムであり、それ以外では役に立たない――、を覗いて確認済みである。名前の通り、真実の姿を映すだけの機能しかなく。　病室で伏せっていたガリガリの自分が映ると思っていたら、アバターのキャラクターが映っていてそれだけで気が遠くなったくらいだ。

前髪を摘まんで引っ張れば見えるくすんだ金色の髪は、肩にやや掛かるくらいのセミロング。　深い碧色の瞳と残る特徴は少々尖った耳だろう、隠しても髪からちょっぴり飛び出る耳は長命種である亜人の証。

とりわけ中でも桂菜が選んだハイエルフ族は普通のエルフよりは後衛職に特化している。　知力（INT）の伸びとＭＰ（マジックポイント）の上限が選択種族内でも最大級に増える特徴だけで選んだだけなのだ。　一部のユーザーには各種族ごとに違う戦闘モーションでも一番ダサいと言われ、リアデイルでも選ぶ者はあまり居らず、桂菜も最近ではあまり見かけない不人気キャラだ。

「そうですね、賑やかな頃に一度だけ……」

隠す理由もないので素直に答える桂菜に女将さんは破顔した。

「そうかい、お嬢ちゃんは昔の村を知っているのかい。　そんな昔からのお得意さんがまたこの宿屋に泊まってくれるなんて、感慨深いねぇ」

勝手にこの宿屋を愛用している客に設定されてしまい、苦笑いで凌ぐ桂菜。

「そうそう、アタシの名前はマレールだ。　この子はリット、暫くは当宿屋でゆっくりしておくれ」

「はい、お世話になります。　私は桂ｎ……ケーナといいます」

場を辞して部屋に戻ったケーナはさっそく自身と手持ちの全ての確認作業に取り掛かる。

ステータスを開くと真っ先に表示される情報が『ケーナ、ＬＶ１００、種族ハイエルフ、称号スキルマスターＮＯ．３』。

リアデイルでの限界ＬＶが１０００、特殊クエストによる限界突破レベルが＋１００。　このクエストが多人数必須の困難なイベントでケーナ達でさえ所属ギルドの内外から参加者を募集、突破した時点では４パーティ２４人による大所帯でやっとこさクリア。　途中でマジ泣きしたメンバーも居るところに作った主催者側の悪意が伺えるとは、通過した全員の総意である。　その後はこのクエストを通過したと言う噂も聞かないので、実質当時のメンバーがリアデイルの誇る最強であろう。

ハイエルフ族のメリットは自然が在る所での戦闘行為や技能行使に１０％のボーナスと鷹目が効くところ。　デメリットは技術技能（クラフトスキル）の際に使用する植物系材料の自力採取不可能な点。　ケーナはギルドメンバーで手の空いた者に頼んで集めてもらったりするか、露天を開く者から買い取ったりしていた。

称号のスキルマスターはスキル数４０００個もある中（その後もデザイナーの意向により増え続けたが）、魔法技能（マジックスキル）１５００個と、技術技能（クラフトスキル）２５００個を修めた者に与えられる栄誉である。　スキルマスター１４人中、史上３人目に当たる為ケーナの称号にはＮＯ．３と付く。

この称号こそケーナが好き好んでこんな辺境でログインログアウトを繰り返している理由。　栄誉と称号と共に自動取得する４００

1個目の問題となるスキル、【スクロール作成】。　これはケーナ達スキルマスター自身が持つスキルを羊皮紙に記して、面倒くさいクエストを経過せずに他のプレイヤーが安易に技能（スキル）を得られる便利な機能である。

……あるのだが、他のプレイヤーと顔合わせる度に「あれをくれ、これをくれ」と催促されまくった結果、ウンザリとしたスキルマスター一同が運営側に「なんとかしてくれ」と嘆願書を出した。　運営側が対処する頃には一人がノイローゼになりゲームから撤退してしまうアクシデントもあったが、解決策としてスキルマスター達にＮＰＣの受け持つ一部のスキル譲渡クエストを肩代わりさせる事になった。

その際には各自が望む拠点が与えられ、到達目標を設定し、突破してきた者に難関クエストで得られる技能（スキル）が何でも得られるという決まりで世界に浸透した。

スキルマスター仲間の拠点は多種多様で、やたらと致死クラスの罠で埋ったダンジョンがあるわ。　水中呼吸の魔法を取得しないと辿り着けぬ海の底の宮殿、通称竜宮城があるわ（勿論途中に海類モンスター生息）。　飛行と鷹目を併用しないと発見できぬ空の城、通称ラ〇ュ〇があるわ。　一日ごとに所在地が変るお堂が入り口で広大な山脈地帯の何処に出現するか分からないわで、もはや半分は嫌がらせのレベルである。

その辺りケーナなどは良心的で、広い森に囲まれた中央にそびえ建つ銀色の塔が拠点だ。　到達目標は塔の最上階まで辿り着ければそれで達成する、但し到達するまでリアル二十四時間掛かるが。　途中で歩みを止めたら即スタートの森の外まで戻されるという、仲間内では比較的温いと評価された罠だ。　最上階まで直通の鍵にな

る指輪もある為、所有者は移動に困らない。

後でその拠点にも行って見なければならないと脳内項目にチェックして、アイテムや装備の点検に移る。

現在のメイン装備、高レベルのハイエルフ女性にしか装備出来ない妖精王のローブ。おそらく装備出来るのはゲーム内でもケーナだけ。膝までのホットパンツと肉厚のブーツ、両方とも幾つかのステータス上昇付加の自作品。左腕にはコマンドで展開する弓付きのアームガード、矢はＭＰ消費の魔法矢を使用。右側のみ羽飾りの付いたカチューシャ、ＭＰ消費で不可視障壁が展開される。武器はアイテム欄の一番上に表示される雷撃の短剣、ちょっとでも傷つけられようものならたちまち麻痺効果を及ぼす、最高級クラスの短剣である。

「自分の事ながらはっきり言ってチート過ぎる……」

基本の戦法は攻撃魔法でドカーンなだけにここまで武装する事も無いのだが、早々ギルド仲間と組む事も無くなった今では準備するに越したことも無い。普通のエルフ族よりは前衛に向いてない種族でも、低レベルの者とパーティを組む場合には充分な壁役が務まる。後は拠点の道具箱の中身と相談して取捨選択をするだけだろう。

「……あ！」

ふとケーナは、自身のサポートＡＩの存在をすっかり忘れていた事を思い出した。

現実（リアル）での自立行動が困難になった桂菜に叔父が特注で造ってくれた、寝たきりでは在るが日常生活のサポートをする補助ＡＩの事である。　病室のベットに接続された”彼”は、ベットの背もたれの上下から時には緊急時のナースコールまで自発的に行動してくれる優れもので、ゲーム内でもコマンドの補助をしてくれたり、検査の時間や見舞い客の有無などを知らせてくれたりしていた。　長い付き合いでパートナーとも言える存在に、答えてくれなかったら如何しようとびくびくしながら呼びかけてみる。

「……キーちゃん、いる？」

『ハイ、ココニ』

過去に母親が飼っていた猫の名前を有する彼の返答に、胸を撫で下ろすケーナ。

簡潔に必要事項だけを述べる彼は、感情を感じさせぬ声色で主に申し立てる。

『緊急ノ案件ガ二件アリマス』

「そうなんだ、何があったの？」

『一件目、病院ノシステムト切リ離サレマシタ。　二件目、リアデイルノマスターシステムトノリンク切断』

「そう、なんだ、……ありがとう」

両方とも此処がゲームの世界であってゲームの世界と違うという

事実からは予想できたことだ。
　問題なのが何故にケーナが此処に居るのかという理由である。
リアデイルというＶＲＭＭＯが今日明日にでもサービスが終了するだなんて噂でも聞いたことが無い。　王都や仲間から離れた場所に居たとしてもだ、何か重要なイベントや知らせがあればログインしているプレイヤーに運営側から知らせがあるし、ギルド通信で仲間が教えたりしてくれるはずだ。

　最後の記憶を思い出してみる。　叔父と従姉妹がお見舞いに来たとサポートＡＩから知らせが有り、一度そこでログアウト。　お見舞いに来た二人と少し喋ってから再びログイン。　結局何かする前に睡眠欲に負けてしまい、そのまま就眠。　ＭＭＯ的に離席状態と言われるままで放置したのが最後の記憶だったはず。　そこから起床となるまでに何かあって今に至ると。

「ん～……、キーちゃん昨夜何か異常はあった？」
『ハイ、一件ダケアリマス』
「あったのっ！？」

　本人（？）も緊急事態とカテゴライズ出来ないので報告する事案か曖昧だったのだろう。

『ケーナガ就寝後ニ、二秒間ノ電力カット。　先ノ二件ハ両方トモソノ時点デ発生シテイマス』
「電力カット？」
『憶測８０％ノ確率デ停電ダト推測シマス』
「あ、停電ね。　……停電ッ！？」

　あきらかに重要な異常事態で、恐らく確実な原因だと予測したケーナは結論に至った事実に目の前が真っ暗になった。

『ケーナ？』

各務桂菜の身体機能は生命維持装置に繋がれていなければ生きられぬほどに衰弱していた。　それは自分でも分かっていたし、医者にも注意されていた。　なんらかの外的原因、落雷とか、によって電力が途切れた装置に病院の緊急発電システムから電力が供給されるまでの僅か二秒間。　現実（リアル）から精神だけがこちらの世界へ逃げ延びたのだろう。

――――つまりは各務桂菜と言う肉体の死である。

1話　現状を把握しよう（後書き）

ステータスの細かい数値については詳細を省きます。　理由は他のキャラクターの数値まで考えが及ばないためです。
トリップした理由がちょっと弱いかも？

2話　魔法を使ってみよう（前書き）

後で見直すと結構誤字脱字が。　そんな文章でもお気に入りが９件も……。
戦々恐々としながら書いています。

2話　魔法を使ってみよう

「ハッ！？」

思いの外ショッキングな事実に意識を飛ばしていたケーナは、目の前に広がった風景がオレンジ色に染まっているのに気付いた。

約丸々半日が無作為に経過してしまったが、同じ様な事実に直面すれば誰でも打ちひしがれるだろうと強制的に納得させ、誰とは言える者も居ないが、記憶から消し去る。

窓などと高尚な物が無い為、扉となる鎧戸を閉めると部屋の中は一気に暗くなる。　一度閉めた鎧戸を半開きにさせ、改めて部屋を見渡し、壁に掛かる備品のランタンに目が向かう。

「此処の明かりって確か、ランタンが灯っていたような……」

サバイバルの訓練を受けた訳でもなく野宿をした事もないケーナには、部屋に備え付けのランタンの灯し方など知るはずもない。

自然と手段に挙がるのは魔法だ。

周囲を照らすライトの魔法は、ダンジョン探索を専門とする者には必須技能で、比較的楽なクエストで手に入る。　ランタンだけと言わず、武器や防具などに掛けて潜る者。　完全後衛援護職と割り切って、全身を七色に光り輝かせる阿呆な行為に及ぶ者もいた。

『我を崇めよ～』
『うわっ眩しっ！』
『後光が、後光が差しているよ』
『阿呆は放って置いて先行きましょ？』
『そだね』
『『『置いて行くなっ！！』』』

当時の会話を昨日の事のように思い出して、ケーナは噴き出す。

先ずは魔法行使の実践にもなると考え、実行してみる事に。

目標をランタンへ決定、脳内から技能を呼び起こして起動。

【魔法技能（マジックスキル）：付加白色光ＬＶ１：ライト：ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ】

「発動」
「ッ！？」

特にゲーム中と変わり映えのしない発動方法に安心したケーナ。
安心出来ない部分は煌々と照らされる部屋の、半開きになった扉から漏れた小さな悲鳴であろう。
恐る恐る隙間から覗く様な気配がして、部屋に顔を見せたのは宿屋の娘、リットである。　壁のランタンが輝く様をギョッとして見た彼女の反応に首を傾げたケーナは、扉まで歩み寄った。

「どうしたの、リットちゃん？」
「あ……、あの…、これ、へいき？」

予想外の怯えようにライトが原因だと理解したケーナは、手を振

って危険の無い事をアピール。

「ああ、これ？　唯の明かりだから、爆発したり人に害があったりしないよ。　大丈夫」

そこまで言われゆっくりと入って来た少女は、それでも壁にぴったり貼り付いたまま前へ出ようとしない。　もしかして普通の村人というのは、魔法を目にする事すら珍しいのではないだろうか？

「リットちゃんは、魔法を見るのは初めて？」

答えは小さくコクリと頷いた仕草によって判明。　ついでに彼女が部屋を訪れた理由も。　手に持った皿に盛られた獣油、浸された糸から蝋燭みたいな灯火が点いている。　宿泊客の部屋を灯すのは彼女の仕事だったのだろう。

「…あ、リットちゃんのお仕事を邪魔しちゃったかな？」

「ううん、こっちの方がずっとあかるい。　おねーちゃんすごい」

「そうなんだ。　このくらいで喜んで貰えるなんて、私も嬉しいな」

顔を見合わせて笑い合う。　従姉妹以外では久し振りの同性同士の交流に、胸に暖かいものが満ちた。

それにしても、かつてこの大陸に蔓延していたプレイヤー達は、一体どうしたのだろうと新たな疑問が湧き上がる。

まさか運営側から「はい、明日から２００年後の世界を始めますよ～」などと発表があったりしたら、「ふざけんなっ！」と言う意

見が大半を締めるである事は想像に難くない。　七国間戦争イベントは間違いなくリアデイルと言うゲームのステータスの一部だったのだから。

「明日は塔まで足を延ばしてみようっと。　……ん？」

予定を心に書き込んだケーナは不意にローブの裾を引かれて、傍に近寄っていたリットに気付く。

「あのねあのね、夕ごはんって言いにきたの」
「あ、引き留めちゃって御免ね」
「だいじょうぶ、お客さんはおねーちゃんだけたから」

ぶっちゃけて言ったらマズいんじゃ、宿屋の娘としてその発言はどうなのよ？　……と一人で葛藤していると、リットは窓を閉め閂（かんぬき）を掛けてケーナの手を引いて階下へと誘う。

朝と違い部屋にまで小さなざわめきが聞こえて来る、夜には村の人達が憩いを求めて集まるのだろう。　階段の途中から食堂の様子を伺うと若者から老人まで２０人程の男衆が席を埋め、飲んだり食べたり陽気に喋ったりしていた。
朝食の時と同じ席に座ると、間を置く事も無く夕食がマレールの手によってケーナの前へ並べられる。

「騒がしくて済まないねえ、特に害になる連中でもないし、気にしないでやっとくれ」

朗らかに笑いながら一言断るマレールの言葉に、すかさずあちこちの席から反論が上がる。

「酷いぜ、女将！」
「そうだそうだ。　売り上げに貢献してやってるだろう！」
「気をつけなお嬢ちゃん、こう見えてコイツは若い頃に村一番の武勇ｄ……ぶぺっ」

最後の発言者にはマレールから直々のお盆の洗礼が飛んだ。　唐突に始まった漫才まがいの喜劇に、さすがのケーナも口を開けて唖然としたままだ。　ソレが可笑しかったのか食堂、いや酒場と言った方が正しいか。　は、ドッと笑い声で埋め尽くされる。

「暖かいうちに食べちまいな、父さんの料理は最高だよ」
「あ、はい、いただきます。　……あれ？」

マレールを若くして細身にした容姿の女性に、未だ湯気の立つ並べられた料理を勧められ首を傾げる。　朝は見かけなかったなぁと、顔に出ていたのだろう、本人も自覚していたのか苦笑いで自己紹介を始めた。

「あたしはルイネ。　この宿屋の長女で夫持ちさ、夕食時だけ手伝いに来てるんだよ。　アンタが珍しい長期宿泊客かい？」
「はい、ケーナと言います。　宜しくお願いします」
「おいおい、客が従業員に対して使う言葉じゃないねぇ。　どこのお嬢様だい？」

丁寧な言葉遣いって程綺麗な喋り方はしてないつもりだったケーナは、なんと答えたものかと言葉に詰まる。　助けは女将から入れられた。

「こーらルイネ、お得意様を困らせるんじゃないよ。　折角の料理が冷めちまうだろ、無駄口開いている暇があるなら酒の一つでも運

びな」
「はいはい、ちょっとくらい良いじゃないのさ。　まったく母さんは……」

ぶつくさ言いながらウェイトレス業務に戻るルイネの背中を見送ったケーナは、カウンターの中のマレールを心配そうに見上げた。
強い口調で娘を叱る様だったマレールは、怒った様子も無く楽しそうにケーナに目をやった。

「ん？　あの娘の相手してくれるんだったら、先ずはソレを食べてからにしておくれ」
「はい、頂きます」

朝のスープに少量の肉と野菜を継ぎ足して更に深い味わいになったものと、小皿のサラダが並んだメニューだった。　朝と同じく始終笑顔で「おいしい」を連発するケーナにマレールは気を良くし、お代わりを勧めてくれた。

幾らかの時間が過ぎて、酔い潰れた村人達が目立ってきた頃、ケーナの隣にはルイネが座っていて親しい友人の様な会話をしていた。

主にケーナが話す側で。　暗黙の了解でこのくらいの時間になると実家のウェイトレス業務からは開放されるらしい。

「ふーん、ケーナは２００年前にもこの宿屋（ウチ）に来た事があるのかい」
「あの時はここも国境の交易路で、馬車だらけだわ、人だらけだわ、村中宿屋だらけだったけどね」

逆に内心大慌てなのはケーナの方だった。　２００年前の事を聞かせて欲しいと尋ねられたが、つい先日までの世界観を語れと言われても周囲の光景なんて有象無象のような感覚で捉えていたので、詳しくは記憶していないのである。　多少の誇大妄想や嘘も交えつつ口にするのには罪悪感が伴う。

「じゃあ、ひい婆ちゃんにも会った事があるんだ。　絶世の美女だったって言う噂なんだけど？」
「さ、流石にそこまでは見ていなかったなあ……」

何故２００年前の容姿が今になって噂になっているのかが恐ろしい謎である。

「そもそもケーナはこんな辺鄙（へんぴ）な場所に何をしに来たんだい？」
「あー、えーと、探し物を……」
「さがしもの？」

空になったジョッキを幾つも抱えたマレールが後ろを通りながらの質問に正直に答える。　リットの首を傾ける仕草が可愛くて、つい頭を撫でてしまったケーナに微笑ましい視線が向く。

探し物とは言ったが、正確には探し場所だ。　サポートＡＩのキーの言によると、マスターシステムと切り離された状態であるケー

ナ達は、ワールドマップの位置特定の恩恵を受けない。　すなわち迷子を通り越して世界の遭難者である。　知りたいのは拠点の塔の場所であり、この村からどれだけ距離があるかと言う問題も含む。
　というのも、暫く世界に慣れる為にこの村に滞在しようと決めていたからだ。　指輪の効果で塔まで行くのは問題無いが、帰りはどうしても塔の建つ外縁の森から村まで戻って来ねばならない。　最初は飛行魔法も考えたが、リットの反応から鑑みるにモンスターと間違えられては敵わない。　平和に暮している人達の迷惑になる行為は避けねば、というのは自己満足なのだが。

「何を探してるんだい？　よければ力になるよ」
「ん～、えっと、森に囲まれた銀色の塔なんですけれど？」
「「ッ！！？」」

　年長者のルイネとマレールが何気無く口にしたケーナの言葉に絶句した。　その表情には驚愕が、瞳には恐れがありありと表れている。

「あ、あんな恐ろしい所に何しに行くつもりだい？」
「や、止めておきなよっ。　あんな得体の知れない所に行くのは！」

　声の震えが彼女達のその場所に対する畏怖を現している。　しかしその発言にはケーナを心配する様子が見て取れていて、多分畏怖相手になるケーナの頭上には疑問符が大量に浮いていた。

（え？　え？　２００年もほったらかしにしていたらドラゴンでも住み着いたとか？）

　さもポピュラーなモンスターの代表格なドラゴンだが、リアディルと言うＶＲＭＭＯ内には領域徘徊敵（アクティブ）でのドラゴンは存在しない。

最も多くドラゴンが存在するのは、プレイヤーやギルド所有ダンジョン等の拠点で、番犬ならぬ番ドラゴンとして存在しているからである。　つまり他人の拠点を荒らす目的以外でドラゴンと戦いたければ、【召喚魔法：ドラゴン】を持っているプレイヤーに呼び出してもらうしかない。　ケーナが辿り着いた結論はそういう意味で、誰かが所有者の居ない状態の塔を占拠して、拠点として使っているかもしれない可能性である。

しかしそういった心配は次のルイネの言葉で裏切られた。　……悪い意味で。

「あそこには恐ろしい『銀環の魔女』が住むって言う伝説があるんだよ！？」

ガヅンッ！！

倒れ込む様にカウンターへ額を打ち付けたケーナにマレール達の空気は凍った。

しばし様子を見ても小刻みに震えているだけで起き上がる気配も無い。　何かの病気だろうかと心配したリットがローブの裾を引っ張ると、ガバァッと上体を起こすだけでなく立ち上がった。

「だ、大丈夫かい？　……具合が悪いんじゃあないだろうね？」

「大丈夫で健康です問題ありませんでは今夜はこの辺で失礼しますおやすみなさい！」

なにやら早口で言いたい事だけを述べ、もの凄い速さで階段を駆け上がって行ったケーナを三人はポカンと見送った。

「どうしたんだろう、おねーちゃん……」
「『銀環の魔女』の名前にトラウマでもあるんじゃないかな？」
「とてもそうは見えなかったけどねぇ。　……まあいいや。　お前達、今日はお開きにするよ」

鶴の一声で片付け作業を再開したマレール達は、直ぐに様子のおかしいケーナの事など忘れていった。

一方、部屋に戻ったケーナは部屋の隅でぷるぷると身悶えていた。

「２００年も経って”アレ”が残っているなんて、……超ハズカシ過ぎる……」

しかもタイミングを合わせたように本人の耳へ入るなんて、まさしく運営側の悪意としか思えない。

『銀環の魔女』はケーナのもう一つの裏側と言っていい二つ名で。
限界突破クエストの副賞に、プレイヤーが望む通りのアーティファクトの譲渡があった、勿論上限はあるが。　彼女の注文したのは魔法関連ステータス上昇と障壁を内装したアイテムで、デザインを運営側に任せたら使い手を囲む様に浮かぶ巨大な銀環となって届いた。　ここまではまだ良かったのだが……。

装備するとサービスで浮遊の魔法が自動起動し、七国戦争時に初めて見た味方プレイヤーから何処かのシューティングゲームの大ボスの様だと言う評価を受けた。　しかし見た目と評価は実に似通っていて、唯でさえ種族効果プラス、スキルマスターな上に限界突破レベル。　威力上昇効果の掛かった大魔法がドッカンドッカン飛んで来るのである。　当然敵に回ったプレイヤーは震え上がり、初お披露目にして不名誉な二つ名が付けられる経緯と相成った。

まさかケーナにとって封印したい黒歴史と言うべきモノが、時空と世界を超えても未だ伝説となって残っていようとは……。　まったく、人の口に戸は立てられないとは良く言ったものである。

暫く羞恥心で震えてはいたが頭を振ってネガティブな考えを追い出し、思考を切り替える。　結局塔の場所を聞くことも出来なかったので、明日また聞き直そうと思う。

しかし、異名が残っていると言う事は明らかに過去、プレイヤーが存在していた証拠に他ならない。　ケーナ以外の他のプレイヤー達が残っていたとして、種族ヒューマンは確実に寿命を迎えているだろうが、種族ドワーフや種族エルフだった者も居たはず……。

「この問題について考えると、確証無い上に終わりが見えないから

止めよう」

思考が同じ所を徘徊する上に相談できる人も居ないので、同士が出来るまで保留にした。

部屋の扉に閂を下ろし、する事もないので就寝しようとした。寝るには早いと思うが。

問題は寝る時に邪魔な、点灯しっぱなしのランタンであろう。ライトの持続時間は六時間、普段ダンジョンで使用する際は切れる頃が探索中断の合図だったので、そのまま外へライトを持ち出して放置するのが定番であった。

結局寝るのだから暗い方が良いかと思って、黒色光ＬＶ２を重ね掛けし、真っ暗闇の中毛布へ潜り込んだ。

「どうせ朝になる前には消えるもんね」

装備品も寝る時には要らないと思ったが、寝間着がある訳でもなく、左腕のアームガードだけ外しアイテムボックスへ入れておく。

マレールに聞いた所、お風呂なんてものは贅沢品に当たるらしく、自身へ汚れを落とす効果の【清浄】魔法を掛けて眠りについた。

夜半も過ぎ、村が寝静まる静寂の中、家屋の裏を縫う様に移動する二つの影があった。

「いやゼナのアニキ、相手は冒険者っつー話ッスよね。　忍び込むなんてそりゃムチャですよ」

「ばっかテメエ、あんなお嬢ちゃんが凄腕なワケねーだろ、俺達にはいいカモだぜ」

村でもチンピラとかこそ泥とか言われ、後ろ指を差されるゼナとライルと言うはみ出し者である。

狙うは昼間に大金をちらつかせたケーナの懐。　はっきり言ってネズミが怪獣に挑む様な無茶振りだが、本人達は気付く余地もない。

農家の納屋から無断で失敬した梯子を、ケーナの宿泊する部屋窓へ続く屋根に掛けて、静かに移動。　鎧戸の隙間から薄い金属板を差し込み、内側の閂を外す。

しかし、繊細な作業に向かない子分のライルは、大仰に開けた部屋の内側から真っ暗闇を照射され、情けなくも小さな悲鳴を上げて仰け反った。　勿論背後には何も無く、真っ逆さまに落下してドスンと痛い音が静寂に響く。

「何をやってんだオメェは……。　って、なんだこりゃあ?」

月明かりの中、部屋から飛び出す闇は異様な光景となって外へ伸びる。　躊躇はあったが、恐怖より欲が勝ったゼナは闇の中へ足を踏み入れようとした。　直後内部から噴き上がった魔力の高まりにも気付かずに。

ケーナの装備は色々と能力付加の掛かりまくったＥＸ（エクストラ）品が多い。
その中の一つ、右腕にある銀輪にはアクティブモンスターに自動対応する仕様の【召喚魔法：雷精ＬＶ３】が仕込んである。　元々は離席状態時の備え用に作られていて、その理由に運営側の突発的な思いつきで、全都市が魔物に襲撃されるイベントがあったりするからだ。　王都に居たとしても安全とは言えない証拠である。

それが今回の賊を敵と認識し、即時自動召喚（術者の最大ＬＶ×召喚ＬＶ×１０％）、ＬＶ３３０と言う脅威で雷精が出現した。
フレームの荒い３Ｄライオンの外殻がゼナの鼻先で収束、放電現象を伴って実体化。　部屋の中に乗り込ませようとした上半身を余波で焼き焦がし、悲鳴を上げ落下したゼナを追って外へひらりと降り立つ。
下でようやっと痛みの取れたライルの前に焦げたゼナが落ちた、後に続いたのが熊程もあるスパーク状態の獅子だ。　二人共泡を食って痛む体に鞭を打ち、脱兎の如く逃げ出した。　雷獅子は二人の後を村中追い掛け回し、村から出た所で追うのを止めてケーナの元へ戻る。

器用に開け放たれたままだった鎧戸を閉め、部屋の中央でお座りをした雷獅子。　黒ライトの持続時間が過ぎる頃には内包した魔力を使いきり、その存在を霧散させ消えて行った。

無論、昨晩そんな事があったとは全く知らないケーナは、翌朝に鎧戸の隙間から差し込む朝日で爽快に目覚めた。　キーの知る所ではあるが、報告する様なモノでもないと分類され事実は闇に葬られた。

「わあ、良い天気」

鎧戸を開けて緑の匂いのする外気を部屋に取り入れたケーナは、初めて見る日の出直後の大自然が醸し出す風景に感動する。　幼い頃家族で登った山の情景を思い出してちょっと涙ぐむ。　飽きずに美しい風景を延々と眺めていたが、その視界の端で妙に反射する物があると気付いた彼女は視線を右へ向け、【鷹目】でズームを掛ける。

「……あ、あった」

視界右の山脈の麓、コチラからだと半分から上部分しか見えないがそびえ立つ銀色の塔がはっきりと存在していた。

「今日はアレが目標かな？」

くすりと微笑んだケーナは、扉を叩くノックの音に窓から離れて

閂を外す。

先ずはリットと挨拶を交わし朝食を食べてからと思いつつ。

2話　魔法を使ってみよう（後書き）

最強チート主人公の片鱗も見えない……。
実際にその威力を開放するのはまだ先の予定ですが。

3話　お出掛けをしよう（前書き）

こんな駄文にお気に入りが16件も……。
お、拝んでいいですか？

3話　お出掛けをしよう

「本当にそんな軽装で大丈夫なのかい？」
「これでもそこそこの腕は持っていますので、ご心配なく」

宿屋の前で、村の外に出ようとするケーナの身を案じたマレールとの押し問答が続いていた。　装備以外に道具袋すら持っていない彼女の格好が原因である。　異空間に膨大な数を収納するアイテムボックスがあるとは言えないケーナは、この窮地をどうやって乗り越えたものかと悩んでいた。
助けは意外なところから出たが。

「じゃあおねーちゃん、これだけでも持っていって……」
「え、リットちゃん？」

リットが持っていた革の水袋をケーナへ差し出していた。　真摯に心配する瞳に絆（ほだ）されたケーナは満面の笑みでそれを受け取る。

「ありがとうリットちゃん。　有り難く借りておくね、お土産探してくるから楽しみにしててて」
「気をつけてね、おねーちゃん」
「はぁ、まったく……。　いいかいケーナ、旦那に気合を入れて夕食を作ってもらうからね。　それまでには帰っておいで」
「分かりました、マレールさん」

村の出入り口まで元気に手を振って行ったケーナを見送った親子は、街道から彼女が見えなくなった時点で踵を返す。　昨日は銀の塔を探すと言っていた割には、今日になって薬草を採取に行って来ると意見を変えたのが腑に落ちなかったが。　娘から話を聞くに魔

法を使えるらしいので、余程の魔物に出会わなければ命の危険は無いだろうと思う。

本性からすると、この近辺の魔物の命の方が遥かに危険に晒されている。……などとは知る由もない。

「此処まで来れば大丈夫かな？」

暫くは普通に街道を進んでいたケーナは村が遠くなったのを確認してから、街道沿いの森へ進路を変更。何かに導かれる様に森の中の開かれた草原に足を踏み入れた。途中何度も空耳にしてはオカシイ程の囁き声を聞いた。おそらく自然な形でのハイエルフの能力で、木々や草花と意思疎通が出来るのだろう。

それはそれで一部の技術技能（クラフトスキル）がとても遣り難いが……。

”守護者の指輪”を高く掲げ、キーワードを唱える。このキーワードが村中でやりたくない理由で、全指輪共通の当時のスキルマ

スター全員で頭をつき合わせて考案した一文である、会議が踊ると後が怖いと言うのはこの時に知った。

【乱世を守護する者よ、堕落した世界を混沌より救済せしめ給え！】

ケーナの周囲を銀色の光が舞う。　光の帯が足元から何本も吹き上がり、繭の様に彼女の周囲に銀光煌く円筒形を造り上げる。　筒の上空で残りの帯が複雑に絡み合い、曼荼羅に似た魔法陣を造り上げた。　銀の粉が粉雪の様に舞う氷原を表して輝いている。　ケーナだから銀色が使用されているのであって、竜宮城の持ち主の場合だと荘厳な滝に囲まれるそうだ。

「毎度の事ながら、いちいちエフェクトが無駄に凝り過ぎだってーの……」

頭上の曼荼羅の中央に黒い空間が開き、回転しながら徐々に高度を下げていく。　円筒形のヴェールもろとも飲み込まれたケーナが暗闇を抜け立っていたのは、何の変哲も無い石壁に囲まれた部屋である。　大きな溜息を吐いたケーナは肩を落として、正面の石壁へ指輪を向けた。　ゴゴゴギリギリとやたら芝居がかった重厚な音を立てて石壁が左右に開いていく。　その先にあるのは特に飾り立てたもののない石壁の廊下である。

「なんでこう内部は質素っぽいんだろう？　運営側のデザインって理解に苦しむなあ……」

背後で開いた扉が再び閉じていく。　閉じきった後に残るのは部屋があった事すら感じさせぬ繋ぎ目もない石壁である。

右へ行くと此処へ続く試練のメイン舞台、この塔は全高５００ｍもあるが内部の階段は人が登り始めると回転して無限に増え続ける。
２４時間回転した所で停まり、来訪者を最上階へと誘う。　飛行魔法でも登って来られぬ様に、最上階以外には魔法無効化の術式が刻まれているが、階段自体に刻まれている術式は、歩みを止めた者を塔の外へ容赦なく転移させてしまう罠付きだ。

左へ向かうと来訪者を迎える大広間、ケーナが足を運ぶと青空が大部分を占めるバロック建築風のベランダ。　天井の存在しない舞台の様な造りになっている、実際には高密度の障壁が張られていて風雨を通さない。　唯一残っている背後の壁にはレンガで刻まれた壁画、不細工な太陽が凹凸で描かれている。　刻まれているはずの眼がギョロリと動き、ケーナの動きを目で追う。

『オウオウオウ、久し振りじゃねーかゴシュジンサマァ。　２００年も俺様をほったらかしで何処へ行って居やがりましたカァ？』
「……はー。　なんちゅー口の悪い変化か……」

ゲームでの拠点を管理する守護者は、もっと事務的な受け答えしかしないＮＰＣも斯くあるべしと言った存在だったはず、なのだが……。　まさかこんなチンピラというか、ヤンキーというか１８０度別物に変化しているとは思わなかった。　呆れてモノも言えない。

「私が留守中に試練を抜けてきた者は居た？」
『いねェなあ、ここんトコ俺様もする事が無くて平和平和でヘドがでらぁ』

動く事も出来ないのに何をしようと言うのだろうか、この素行不良は……。

『ああ～、そういやぁ６０年程前にスカルゴの奴が来やがったナァ。ゴシュジンサマと連絡が取りたいっつー話だったが、あんときゴシュジンってば俺様からのコールを無視しやがったナア、エエオイ？』

「あーまー、ちょっと手が離せなくてねー」

留守中に来訪者が来た場合、指輪を通して拠点主側に守護者から連絡がある事になっている。ケーナがふらふらと外を出歩けるのもこの機能があればこそだ。６０年前どころかここ２００年は何をしていたのか自分でもさっぱり記憶の無いケーナは、適当な答えを返した。

『……、オイ？』

「え、なに？」

『スカルゴの奴が来やがったんだよ、聞こえてるかァ？』

「聞いたけど、……誰それ？」

『ハァ！？』

「え？　ゑ？　あれ？」

胴体があったならば天を仰ぎ、顔を覆ってるのであろう。呆れきった大きな溜息を吐いた守護者は誰にともなく呟いた。

『とうとうボケやがったなこノババァ……』

「あ？　なんですって？」

聞き逃せない単語にアイテムボックスから瞬時に一本の杖を取り出す。三匹の龍が複雑に絡み合い三方へ口を開けていて、それぞれに紅、蒼、金の宝玉を咥えている２ｍ程の杖である。名称を至玉（アルカルスタッフ）の杖。ワンアクションで火炎系と氷雪系と雷撃系の最大級魔法を撃ち出す極悪武装である。但し、使用制限で２４時間に１度し

か撃てない。

『オイ、ゴシュジンサマ？　その杖を如何する気ダァ？』

「口の悪い守護者の性根を叩きなおそうと思って。　いっそのこと２００年くらい凍ってみる？」

『俺様が悪かった許してクレ、ゴシュジンサマ』

誠意の「せ」の字も感じられない謝罪だったが、「まあいいか」と思ったケーナは杖を仕舞う。　実際のところこの塔全部が特殊アーティファクトに設定されていたはずなので、魔法が効果を及ぼすかどうかは不明だ。

「……で、スカルゴって誰だっけ？」

『オイオイ、アイツも報われネェナァ、不憫ナ奴め。　ゴシュジンサマの息子だろウ、忘れンナよ、ナァオイ？』

「え”……？　はぁ？　息子ぉ！？」

素っ頓狂な声を上げたケーナを見て「だめだこりゃ」と呟く守護者。　しばらく首を傾げていたケーナだったが、何か琴線に引っかかったらしく「息子、スカルゴ、息子、スカルゴ」とぶつぶつ呟きつつ考えに没頭する。

「あ、あああああっ！！」

１０分もするとやっと気付いたらしく、手をポンと叩き大声を上げた。

「そうか、里子システムか。　思い出した思い出した」

『……ナんじゃソラ？』

運営側の正式名はＮＰＣ補填要員募集。　プレイヤー側の認識は里子システム。　初期デザイナーの”ＮＰＣの名前を考えるのが面倒になった”、と言うとんでもない要求が通った前代未聞の、使用済みサブキャラクター募集告知である。　リアデイルでは課金一口に作成できるキャラクターの数が二人有り、一般的なプレイヤーは片方を倉庫キャラと称して、重要だけど早々使わないアイテムを入れて使っている。　拠点を持つとそこを倉庫代わりに利用出来る為、自然に忘れ去られていく悲しい境遇の極みたる者だ。

それを要所のＮＰＣとして運営側が買い取ろうという魂胆だった。　特典はキャラクターがそれなりに使える技能を持っていれば、高位の要職に就く事が可能で、給料の半分が提供者に流れてくるというものである。　これにはどうやってゲーム内でお金を稼いだらいいのか？　といった初心者プレイヤーが多く登録した。　登録してもキャラクター枠が無くなる訳ではないので、初心者にも安心設計だ。　提供したキャラクターと提供者には何らかの繋がりの設定を求められるが。

中にはやっぱりオカシナのも居て「俺の妹は１０８式まであるぜぇ」と言う者から、「全部俺の嫁」と宣言する良く分からない者まで出る始末。

ケーナの提供したサブキャラ達の中では、スクロール作成で回復系魔法を習得させまくったので教会へ貰われていったはずだ。　エルフ男性なのでまだ存命しているだろう。　その際にケーナが設定した続柄と言うのが親子である。　守護者の指輪を劣化コピーした物を渡していたので、試練の道を通らずに直接此処に来たのだろう。

「未婚１７歳にして２００歳越えの子持ち、かぁ……」

『あぁん？　ワケわかんねぇェ事言ってンじゃねぇよ』

まあこれはこれで味があって良いのかも？　ちょっとそんな気になったケーナは、守護者の何か言いたそうな視線も気にせず舞台の端へ。　床の窪みに指輪を重ね合わせて９０度回転させ、カチッと音がして収納ボックス位の石棺がせり上がる。　拠点の倉庫となっているそれの蓋を開け、中を確認する。　実際に覗き込めば分かるが、中には何かが入っている様には見えない。

ケーナの視界には右側に自分のアイテムウィンドウが開き、左側に倉庫の品目が大量に表示されている。　この辺はゲームと同じだというのは如何いうことなのだろうか？　疑問は尽きないが考えても分からないので後回しにする。　持って行く物と置いていく物を厳密にチェックしていると、守護者が話しかけてくるので対応はしておく。　こういった者が友人で居たらそれはそれで楽しそうかな、等とも考えながら。

『ナア、ゴシュジン。　ひょっとしてアイテムを取りに来たダケってんじゃネェだろうナ？』

「う～ん、やっぱり植物系材料は少ないか……。　うん、主な目的はそれね。　後最近の状勢とか、知ってる？」

『アア、スカルゴの奴が色々言ってタナァ。　七国が統一されテ三国にナったただとかナントカ』

「あれ？　なんでこんなネタ武器がこんなに？　誰かの預かり物だったかな？　プレイヤーの人達ってどうなったんだろーね？」

『俺様が知るワキャあネーだろっ。　半分は人間だったしナ、墓の下じゃネーノ』

「まあ、そうなるよね……」

ひとしきり移動をし、太陽が中天に昇る頃にはやっと作業が終わったケーナは石棺の蓋を閉め床に押し込んだ。

ついでに壁画の守護者へ歩み寄り、壁に手を付けてＭＰのおよそ９割を守護者へ譲渡する。　ワールド管理とそれに伴うクエストは運営側の仕事だが、守護者自体の維持は塔を受け持つスキルマスターに委ねられる。　もろもろの恩恵でリアデイル史上最大ＭＰ値賞を獲得した事もあるケーナは、何かにつけて守護者用の魔力タンクを満タンにしていた。　だからこそ留守状態で２００年経過してもなんとか動いていたのだろう。　しかし、今確認した時点では枯渇寸前であった。　満タンにはしたい気もあるが、いくらＭＰ常時回復状態の【常時技能（パッシブスキル）・ＭＰヒーリング】があったとしても、いっぱいにするにはここで夜を明かす必要がある。

どうしようか考え込んでいると、守護者側から話を持ちかけてきた。

『ナあ、ゴシュジン頼みがあるんだガ？』

「ん？　貴方がそんなことを言うなんて珍しいね、何？」

『どうも他の守護者の塔ナんだが、機能停止しちまってるらしいンだよ。　時間があったラ見といてくれネェカ？』

「……あ、そっちもほったらかしなのね。　分かったわ、時間があったら探してみる」

守護者の塔同士で通信できる手段も有るが、どちらかの守護者が落ちていてはその機能も宝の持ち腐れだろう。　指輪は全守護者の塔に適応されるので、少なくとも罠は回避することが出来るはずだ。

海は潜らなければならないが……。

そうなると１３箇所の塔を定期的に巡回しなければいけないのだろうか？　当面の目標はそれだとして、実のところケーナも全塔の位置を把握している訳ではない。　ワールドマップすらも当てにならない為、いざ実行に移すには人の多いところで情報を収集する必

要がある。
とりあえずベランダからある方向を指差して、守護者に教えておく。

「しばらくはあの村にいるからね。　なにかあったら呼んで」
『わかったぜ、さっきの件よろしく頼むわ、ゴシュジンサマ』

舞台の中央で守護者に合図を送ると、ケーナの足元に青白い五亡星が現れて眩しい光を放つ。　再び周囲を確認した時には、そこは銀の塔を見上げる位置にある森の外だった。　暫く塔を見上げていたケーナはくるりと踵を返し、先程指差した方向へ向かう。

「んー、しまった……。　転移目標にする物でも置いて来れば良かったなあ」

少なくとも出掛ける前に掛けた【距離測定】魔法によると、直線距離で４０ｋｍも離れている。　山裾をやや迂回しなければならないので、測定よりは少し増えるだろう。　普通に歩いたとしても宿屋の夕飯に間に合うかどうか？

「へェ……ゼェ、ハァー……ヒー……」

思案に思案をしてケーナが選んだ手段は、結局走ることだった。
それはそれでまあ魔法特化フルスペックハイエルフの腕の見せ所、誰も見てくれた人などは居ないのが悲しい所だが。

能動技能（アクティブスキル）で【走行速度上昇】（持続時間1分）を起こし、魔法技能（マジックスキル）から【敏捷上昇（AGI）】、【移動速度上昇】を選択。　あとは道々掛け直しながら爆走してきたのである。　森の中の移動だった為、木々のサポートがあり平地に比べて移動しやすかったのと、走るのに慣れていなかったのもあって、村近辺に辿り着く頃にはお空がオレンジ色に。

きっとケーナを良く知るギルド仲間が、この有様を見れば『お前は馬鹿か？』ぐらい言いそうだ。　飛行魔法と言う選択肢もあるにはあったが、ＭＰ消費の関係上、通常の一割しかないケーナにとっては飛んだとしても五分と持ちそうに無かったからである。　ともかく後は一度街道沿いに出て歩けば、村まで数分で済む。

リットに貸してもらった水袋で喉を潤し、息を整えたケーナが深呼吸を一つ。　さあ帰るかー、と気分を一新したところに、

ゴアアアアアアアッ！

……と獣の吠え声が森に響き渡った。

「は？　え？　どこ！？」

『街道ノ方デス。　ケーナ』

思わず自分が襲われたのかと思って、珍妙な格好で構えたケーナにキーが棒読みで警告する。　ハッとなって自らの格好に紅くなるも、誰かが襲われているんじゃないかと慌てて駆け出した。

林を突っ切ったケーナの前に広がった光景は、街道にへたり込んでいる毛皮服姿のマタギ風と言った感じの猟師。　昨夜、マレールに余計なことを言ったせいでお盆の洗礼を受けた村人である。　その人に襲い掛かろうと両前足を振り上げた熊。　熊は熊でも全高４ｍくらいで、耳の後ろから捻じくれた角が口の辺りまで伸びている、ホーンベアと言う魔物で初心者には辛いが、中級者にはザコ扱いされる。　通称、ツマー。

ホーンベアは新たに横合いから現れたケーナを見るや否や硬直した。　戦闘態勢に意識を切り替えたケーナが持つ能動技能（アクティブスキル）の所為である、本人の意識外で自動起動した【威圧】（敵の回避を大幅に下げる）と【眼光】（敵の行動を遅くする）と【強者の微笑み】（敵の防御を２２％の確率で無効化する）によって。

まあ、駆け寄ったケーナには武器で応戦するといった気も無く、”村人のピンチを救わなければ”くらいにしか考えてはいなかった。
助走をつけたまま倒すとかではなく退かす意味で、立ちつくしたホーンベアのドテっ腹へ飛び蹴りを叩き込んだ。

ゴアッ！？

叩き込んだ瞬間【戦術技能（ウェポンスキル）：チャージ】がオートで起動、筋力最低値を誇る種族だとしてもレベルの後押しもあり、ホーンベアの巨体を地面と平行に軽々と跳ね飛ばした。

吹っ飛んだ熊は街道沿いの森の中へ。　バキバキバキー！　と言った木々を薙ぎ倒す音が響き渡り、薄暗い闇の中へ消えていく。

猟師は勿論、蹴り飛ばしたケーナすらも油汗を流して固まっていた。

しばし静寂が辺りを覆いつくす。

真っ先に再起動したケーナは猟師に駆け寄った。

「大丈夫ですかっ！？　怪我とかありませんか？」

「あ……、ああ。　……嬢ちゃん……、凄い、んだな……？」

「あ、ああ、ええーと……。　ええ！　私に掛かれば熊の十匹や二十匹、敵ではありませんよ！　はっはっはー」

本当に敵にもならないのが誇張でもない真実だ、胸を張りやけくそに笑い飛ばすケーナに毒気を抜かれたのか、猟師のおじさんは立ち上がり礼を述べる。

「ありがとう嬢ちゃん、あやうく命を落とすところだったよ。　何か礼が出来ればいいんだが、生憎と持ち合わせが無くてな」

「礼なんてそんな、困っている人が居たら助けるのが当たり前じゃないですか？」

「あ、ああ。　じゃあ、そうだなあ……」
「じゃあ礼の代わりに、私の名前はケーナです。　嬢ちゃんじゃなくてそっちで呼んでもらえると嬉しいです」
「ああ、そうだな。　俺の名前はロットルだ、改めてありがとうなケーナちゃん」
「はい、ご無事でよかった」

はー、と安堵したケーナは熊の消えていった森の暗闇を覗き込む。
飛び蹴りが決まった瞬間、敵のＨＰ（ヒットポイント）バーは黄色から赤を通り越してゼロになったのは確認できた。　つまり即死である。

「どうしましょう、あの熊？」

たしか公式ＨＰ（ホームページ）の説明文には「肉は美味」とか書いてあったはず、村では良いご馳走になるのではと思い、森の中へ足を踏み入れた。
角や毛皮も武器等の材料になるし。　それをロットルが慌てて追う。

「待て待て、生きてたらどうするんだ？　森の中で熊と戦うなんて死にに行くようなもんだぞ」
「大丈夫ですよ、死んでますから。　ちょっと待っていて下さいね？」

ケーナは銀貨にライトの魔法を掛け森の奥に踏み込む、四本の樹木を薙ぎ倒したホーンベアは、血泡を吹いて絶命していた。　角を掴んで試しに持ち上げてみたが、意外にも軽かった為そのまま引きずって街道まで戻る。

ケーナを見たロットルが更に度肝を抜かれたり。　村に着いた時にはとっぷりと日が暮れていて、心配そうなリットが帰って来たケ

ーナに泣き付いたりしたが、ドデカイ獲物に急遽村の広場で焼肉宴会が開かれた。

当然猟師のロットルからはケーナの武勇伝が披露され、紅くなって縮こまるケーナを村人達が褒め称えた。　意識する事無く、村公認の凄腕冒険者にされたケーナは強引に進められて飲んだ酒であっさり酔っ払い、宴の終わりを迎える事無く眠りにつく事になる。

3話　お出掛けをしよう（後書き）

ちょっと戦闘っぽいものを入れてみました。　難しいですね……。
しかし、目覚めてから2日しか経過していない…。

4話　技術提供をしてみよう（前書き）

これで書き溜めてあった分が切れました。

4話　技術提供をしてみよう

一杯の酒で翌朝、多少の頭痛を起こしたケーナは、もう二度と飲酒はすまいと誓った。

「あー……」

お酒で身を持ち崩すってこういう意味なのかな？　とでも言いたそうな、ウンザリした顔で顔を洗いに井戸に行った彼女の前で、リットがうんしょうんしょ、と釣瓶（つるべ）で水を汲んでいた。

汲んだ水を小さめの桶に移して持ち上げようとした所でケーナに気付く。

桶とケーナを見比べていたが、お客優先と思い立って桶を差し出そうとし、ケーナがそれを制した。

「いいよーリットちゃんはお仕事でしょ？　私は自分でやるから」
「え…、でも……」
「それよりもそれ、着けてくれたんだ。　気に入った？」
「うん！」

それとは星型の髪飾り、銀ラメ色でキラキラと光加減によって輝く。　昨日倉庫から持ち出した一品で、こんなのでも防具の一種であり防御力1に毒無効の効果を持っている。　お土産としてリットに献上したのだ。　満面の笑みで頷くリットの頭を撫でたケーナは井戸に歩み寄り、するすると縄を引いて水を汲む。

それなりに冷たい澄んだ水を見ていたケーナは「やっぱお湯かなあ」と呟いて釣瓶へ手をかざした。

【魔法技能（マジックスキル）：付加温水：Ｓｔａｒｔ】

かざした掌から注ぎ込まれた不可視の光が、桶の水を瞬時に温めた、だいたい４２度くらいに。　湯気の立つ桶を見たリットの眼が丸くなる。　持ってきたタオルを浸したケーナに惜しみない拍手を送るリット。

娘の仕事が遅いと文句を言いに来たマレールは妙な光景に首を傾げた。

「はあ、そんな魔法も有るのかい？」

「すみません、リットちゃんのお仕事の邪魔をしてしまって……」

朝食後の席でリットが怒られない様に頭を下げたケーナに、マレールは呆れた返事を返す。　一晩経ってケーナはその容姿から村のアイドルと化していた。　村人が彼女に会うと気さくな挨拶をしてくれたり、パイをおすそ分けしてくれたりするのである。　若い女性の少ない村なので、年配の人に構われる孫娘といった立ち位置になっていた。

もうキャラの実年齢を口にする気もなくなったケーナは、その立ち位置を素直に受け入れていた。　病院でお爺さんやお婆さんの話

し相手になるようなものである。　慣れてるし平気平気。

「ふーん、便利なものなんだねえ。　その魔法ってのは私等にも使えるのかねぇ？」

「【温水】の魔法ですか……。　えーと、あれはたしか火魔法のイアとイア・ラ覚えて、水魔法のオゥタが必要ですから……」

「分かった分かったから！　流石にこの歳で魔法の勉強に使える時間も無いよ」

　指折り数えて魔法を幾つか挙げると、マレールは手を振ってそれを否定した。

　そもそもケーナのスクロール作成でモノを譲ったとして、村人は技能を覚えられるのか？　それを言ったらやはり建築業に従事している人は建築系の技能を有している筈なので、まったくないとは言い切れない。

　むむむ、と考え始めたケーナを苦笑いで見たマレールは、肩を叩いてその場を離れる。　それと同時に開けっ放しの外へ続く扉からロットルが入ってくる。　片手に何かを携えて。

「おはよう、ケーナちゃん。　昨日頼まれたクマの角持ってきたぜ」

「え、いいんですか？　この村の貴重な収入源なんじゃないんですか？」

「いいさいいさ、何より仕留めたのはケーナちゃんじゃないか。所有権は君にあるだろう」

　フェルスケイロ公国でも地図の端にあり、リアデイルの地に於いて外側の交易路に掛かるこの村には、コレといって特筆したものが無い。　その為に数ヶ月に一度、定期的にやって来る移動商店団に穀物や狩りの獲物や毛皮などを売り、日用品を補充するのだそうだ。

「うーん。　じゃ、もう一匹狩って来ましょうか？」
「いやいやいやっ、村の者でもないケーナちゃんがそんな事をする必要はないだろう」
「でも、村の皆さんには凄くお世話になっていますし、お礼くらいしたいんです」

手渡された荒縄で縛られた二本の角。　真摯に訴えるケーナの頭にマレールの手がポンっと乗せられる。

「そんなに気を使わなくて良いんだよ。　ケーナはお客なんだから、皆見返りを求めて親切にしたい訳じゃないんだよ」
「そうそう、ケーナちゃんも昨日言ったじゃないか『困ってる人が居たら助けるのは当たり前』って」
「……でも、好意を受けるだけなのも申し訳なくて……」

誰かに何かをしたい、返したいと言うのは事故で入院してから四年間、自分で出来ることが何もなかった桂菜の我侭である。　叔父や従姉妹、看護婦や医者、同じ入院患者の子供達や年配の人達。暇が出来たらゲームの合間に尋ねてきてくれて、両親を失った痛みや自身の境遇を呪わずに済んだ。　最早返すことも出来なくなってしまったけれど。

「ま、アンタは自分の好きな事をやっていればいいさ。　私等はこの村で特に不満はないんだからさ」
「そうそう、流石は年の功、良い事を言ｕ……ばぷっ！」
「アンタはさっさと仕事に行きなっ！　のたのたしてるんじゃないよっ！」

お盆と怒鳴り声でロットルを追い出したマレールは、一転した笑

顔でケーナの背を気にするなとでも叩き、中へ戻って行った。

ホーンベアの角をお手玉風に弄びながら村をひと通り回ったケーナは、道端に置いてあった岩に腰掛けて、畑仕事をしている村人達を眺めた。　考えることのお題は、何か役に立つことは出来ないか？　だ。

そんなケーナの視界へとマップウィンドウが表示される。　記されたのは銀の塔からこの村へ続く、昨日ケーナが移動した道程とその周辺。　衛星写真の様に上空から見下ろした風な村の一望だ。

「キーちゃん？」

『辺境ノ様ニマップヲ作リマシタ。　後ハ行動範囲ヲ増ヤシテ詳細ナ地図ヲ作リマショウ』

「まあ、そういうやり方しかないかー。　それにしてもー、この村って何かに似てるなあ？」

村の中央に集まる形で建っている家屋、その外側を占める畑。何処かで似た物を見た記憶のあるケーナは、うーんと考え込んだ。

程なくして答えを導き出す。

「あ、オフラインモードの出発地じゃん」

オンオフ両方のモードがあるＶＲＭＭＯＲＰＧ・リアデイルは双方とも出発地点が違う。　オンラインは所属国の王都、オフラインは適当に配置された辺境の村。　その村に住む者達の依頼をこなしていく事で、最終的には村が砦になってしまう。　経過中に１５個の魔法と３０個の技能を手に入れられるプレイヤーのクエスト登竜門だ。

リアデイルの技能（スキル）は基本の七種魔法以外では、クエストをこなさないと一つも手に入らない仕組みになっている。　４０００と＋αのクエストを残さず実行した者だけが、スキルマスターの称号を受け取れるのである。　スクロール作成で得た技能が一つでもあると資格を失ってしまう。　勿論一度取得した技能は破棄出来ないし、そのクエストを受けようとしても技能がある以上はクエストが発生しない。

βテストからリアデイルに付き合った桂菜を含む一部の廃人はそれを思い知ったが、軌道に乗った世界へ後から入ってきた者はそれを知らずに脱落して行った。　ちなみにこの事実は運営側がネットに挙がり次第消しているので、１期の登録者以外で知るものは少ない。　その労力をもっと別のものに使えと古参のプレイヤーは言いたいが。

だったらこの村もオフラインモードの村みたいに発展させてしまえばいいんじゃないか？

ケーナの脳裏にそんな言葉が浮かんだ。

「しかしそれでまた迷惑になるのもどうかなぁ……」

ブツブツと考え込むケーナに畑仕事をしていた者から声が飛ぶ。
「よう、ケーナちゃん。　畑にまで何の用だい？」
「……え？　ああ、ええと、何かこの村のお役に立てないかなあ、と思って」
ケーナの言葉に畑仕事をしていた村人達は、顔を見合わせて笑い出した。
「え、えええええっ。　なんですかその反応っ？」
「いやいや、ケーナちゃんはこの村のって言うか、宿屋の客だろう」
「そーそー、村の事は村に住む俺達の仕事だしさー」
「アンタがそんなことを気にする必要はないんだよー」
わははははーと、朗らかに笑う皆に口々に言われてしまっては、流石に口を出すわけにはいかない。
頭を下げて其処を離れ、腕組みをしながら頭上を見上げて脳内を流れていく技能（スキル）を一つ一つ確認していく。　これにもピンからキリまで多種多様有り、そのクエストで1度使えば後は全く使わない奴、先程の【魔法：温水】がそれに当たる。　その後に続く上位の技能（スキル）を得るために必要で、手に入れたものの1度も使ってないモノ。あるけれども早々使うにはやや問題があるモノ、【建築：城】とか。後々まで頻繁に使うモノなど全体の半分である。
技術技能（クラフトスキル）とあるが作成専門だけで２５００個も有る訳ではない。
この中には戦術技能（ウェポンスキル）、能動技能（アクティブスキル）、常時技能（パッシブスキル）、特殊技能（エクストラスキル）も含まれる。
村の外縁をぐるりと回り村の入り口から過去、馬車の待機場所だ

った広い野原を通り、宿屋の裏手に出る。　そこでまたしても釣瓶で水を汲んでいるリットを見掛けた。　マレールから娘の仕事は奪わないようにと断言されている為、見ているだけしか出来ないケーナには、小さな体で一生懸命に釣瓶の縄を引っ張る彼女の姿にハラハラしっぱなしだ。

【筋力(STR)増強】の効果を持つ腕輪でも渡すよりは、まず井戸の構造から変える必要があるなー。　と思ったケーナの脳裏に丁度良いものが閃いた。

村を進化させる途中で砦内の台所に設置する、簡単に木組みの水車みたいな汲み機である。　単純に手押しポンプがこの場合適切なのだが、金属系の材料が足りないので自動的に却下。　手回しハンドルを動力にして、歯車で駆動させる水車とキャタピラの合いの子で水を汲み、樋(とい)に流す装置で。　作成には少量の金属と大量の木材が要るが。　これなら現状の井戸の上に乗せてしまえばいいので、壊れた場合にも撤去が可能だ。

「よし、悩むよりは先ず行動。　マレールさんに許可を取ろう」

いきなり飛び込むように戻って来たケーナに「井戸を改造したいんですー！」と詰め寄られ、マレールは困惑した。　理由を聞くとリットだけでなく、誰でも簡単に水が汲める装置を作ると、身振り手振りで説明されても全く理解不能だ。　最初は戸惑っていたマレールだったが、朝方とは違い妙に活き活きとしていて楽しそうなケ

ーナの様子についてOKを出してしまった。

「マレールさんの許可ゲットーッ！　ひゃっほー！」

「あ、ちょっとケーナ、昼飯を食いに来たんじゃないんのかい！？」

水を得た魚の様に飛び跳ねて出て行こうとしたケーナは、マレールの呼び掛けに我に返る。　一泊に付き出るのは朝食と夕食だけで、昼食は別料金だ。　面倒になったケーナは、当初に提示した銀貨２０枚を渡して村を出るときに差額を返してくれれば良いや。　と言ったら、「だったらキチンと昼食も食っていきな」と言われてしまったのである。

妙な醜態を見られてしまった為、紅くなったまま昼食を終えたケーナは井戸の周りをぐるぐる回りながらアイテムウィンドウを睨んでいた。　理由は手持ちの材料不足で、例の物を作成するのに量が足りないといった悩みである。　必要な材料の大半は材木で、農村ならば材木イコール薪になるだろう。　だとすると、自力でなんとか都合しなければならない。

「うーん、切り倒すしかないか？」

昨日の森の感じからすると、樹木達に断りを入れても切り倒せるかどうか、果てしなく疑問。　そこまで考えて、はたと気付く。

「あ、そうだ。　切り倒さなくてもへし折れたのがあるじゃん」

熊退治の時に、予想外の勢いで飛んで行った熊が作り出した無惨な光景を思い出すケーナ。　善は急げとばかりに、昨日の現場へ行ってみることにした。

街道沿いのそこには、ドミノ倒しみたいに木が折り重なって倒れていた。　手前側の一本が消えているのは村人が持って行ったらしい。　おそらく数量的には一本丸々で事足りると思うが、他に何か使うかもしれないし、後々こんな機会もあるか分からないので、全部加工してしまう。

【技術技能（クラフトスキル）：木材加工ＬＶ３：ｓｔａｒｔ】

ケーナの周りから轟風が巻き起こり、倒れた3本の木の枝を纏めて打ち払う。　そして皮を剥き、輪切りになった物が眼前にドンドンドンッ！　と積まれる、轟風に揉まれて葉ズレの音でざわめいていた森は風が収まって、やっと静けさを取り戻した。

ケーナは予想外の工程を目にして、唖然としていた。　おもむろに肩を落として溜息をひとつ。

「いや、確かに必須事項に風魔法が要るけどさあ……、実際に目にするとまさかこんなんだったとは……」

植物系材料の場合、自分では採ってこれない為、店で買うかギルド員に頼んだりしてはいたが。　初めて目にする伐採方法に目が点である。　技術技能（クラフトスキル）には前提条件に地水火風氷光の初期魔法が加工に必要で。　今のように木材の加工には風魔法で裁断を行うが、ゲーム画面上ではここまでの工程は表示されない。　精々対応する魔法のエフェクトがデフォルメとして発生するくらいだ。　今の奴だと小さい竜巻がくるくると出るだけである。

出来上がった輪切り、ひとつの大きさがトラックのタイヤくらい、を１ダース１個として、計１４個をアイテムボックスへ放り込む。　１０トントラック一台分の容量が綺麗サッパリ消え去った。

「……考えるな私、考えたら終わりだから、うん……」

質量保存の法則なんぞ軽く超越する出来事に、自分が仕出かした事だけど、額に手を当てて頭痛を抑える。

アイテムボックスからネタ武器を抜く、【恐怖】（敵の行動を一時的に止める）と【威圧】を内包した惨劇（ジェイソンブレード）の夜、一見すると唯の鉈。　打ち払った枝の細かい枝葉を削ぎ落とし、ロープで纏めてアイテムボックスへ放り込む。

「これはマレールさんに渡しちゃえばいいや」

今は野宿をする必要もないので、薪とかは持ち歩かなくて済む。　後は大掛かりな物を組むために、技能（スキル）のウィンドウを表示して各自材料を確認した。　各々（おのおの）の部品はある程度作っておいて、現場で組み上げてしまう為に、今此処で部品毎に加工する。

そして再び轟風が吹き荒れ、切り株が空を舞い、頭痛の種が増え

た。

1時間後には宿屋の裏に手の空いた村人が数人集まっていた。宿屋の住人を中心として輪を作り、井戸に奇妙な木組み細工を設置するケーナを物珍しそうに眺めていた。

井戸に掛かる土台部分を置き、車輪みたいに二個連結した歯車を起動輪として掛ける。そこに等間隔で枡（ます）のついたクロウラーをくっつけて連結させる。この時点では縦長なキャタピラで、最後に手回しハンドルのついたモーターのギアボックス機構を起動輪と繋げ、回ってきた枡が水を落とす所へ樋を設置して終了である。

ケーナは先ず自分でハンドルをくるくる回して、誤動作が無いのを確認し、その場所をリットに譲った。

「え？　えっと、どうすればいいの？」

「そこのハンドルを右回りに回せばいいのよ。がーって回しちゃって」

リットは言われた通りに右にハンドルを回してみた。最初に少し力を入れてみたものの、やたらと早く回ってしまう。クロウラー部分がガラガラと音を立てて回転し、汲み上げられた水が樋を伝わり、あっさりと桶から水が溢れた。これには周囲で見物してい

た村人も詰め寄って、我も我もと一人ずつハンドルを回転させて試してみる。

「おおっ！　ロクに力を入れていなくても水がたくさん汲めるじゃないか」

「なるほどこりゃ便利だ、凄いなケーナちゃん。　こんなモノを作れるなんて」

「こりゃあウチの婆さんでも楽に水が汲めるじゃないか！」

マレールや夫で宿屋の主人ガットもしきりに感心して頷いている。

村人達の好感触にガッツポーズを取ったケーナに、村長が詰め寄った。

「すまんがケーナちゃん、村の中央にある井戸にも同じものを置いてくれんかの？」

「ええ別に構いませんよ。　直ぐ作れますし」

この村には３つの井戸があって、宿屋の裏の井戸は村の南側の家が使う分担。　中央の井戸は北側の分担になっている。　もうひとつの井戸は村の外側の柵近くにあり、かなり昔に崩れて使えなくなったらしい。　掘り直しても良いのだが、水の匂いで魔物が寄ってくるかもしれないので、封鎖されたままにしておくとか。

「後は最後の仕上げー」

村人達にちょっと下がってもらって、脳内から術を二つ選択。

瞬時に足元から３ｍの高さまで燃え上がった炎が、頭上で火の粉を散らし、赤い光が霧の様にケーナの周囲を舞う。　コレには流石に村人達からも悲鳴が上がったが、神秘的な光景にあっさりと静かになった。

【魔法技能（マジックスキル）：炎系自己付加：増幅（ブースト）：ｓｔａｒｔ】
【魔法技能（マジックスキル）：付加保存ＬＶ９：幾千の夜（エンドレスナイト）：ｓｔａｒｔ】

続いてかざした掌から黄金色の粒子が放出されて、水汲み機にキラキラと纏わり付く。　しばらく金色に染まった様に輝いていたが、ケーナが深呼吸をして姿勢を戻すと同時に消えていった。

先に唱えたのが、次の魔法の効果を１．３倍に引き上げる【増幅】の魔法。　後に唱えたのが術者のＬＶ×魔法ＬＶ分の日数だけ、錆びない腐らない壊れないコーティングをする魔法である。　つまり１２８７０日分、３５年と３ヶ月に渡りこの新品状態のまま保存される。

その後は日が沈む前に、中央の井戸にも水汲み機が設置され、村人に歓声をもって迎えられた。

そしてまた『ケーナちゃんの偉業を称える会』という宴会が催される事になった。　昨日と同じ様に村人達に酒を勧められたケーナだったが、断固として断ったら場が静かになったので、結局泣く泣く酒を飲む羽目に……。

次の日にまた酒を飲むまいと断腸の思いで誓ったのだが、マレールの「なあに酒なんて飲み続ければ慣れるもんさ」と言う言葉に戦慄を覚えたという。

4話　技術提供をしてみよう（後書き）

しかし時間の進みが遅いですね…。

5話　人助けをしよう（前書き）

難航しました。
ＰＶ５５００突破にユニーク１０００越え、誠にありがとうございます。

5話　人助けをしよう

「……」

静かに緊迫した空気が流れていた。

目標となるべきモノは、落ち葉の中に潜ったまま身動き一つしない。

片や、左腕に身長ほども有る巨大な弓を装備した狩人。　落ち葉の中の視認出来ない目標にぴったり狙いを定め、じりじりとすり足でミリ単位進み、前に移動していく。

かすかにシュー、シューと落ち葉の中から呼吸音が聞こえて来る位置まで移動したその瞬間。

落ち葉の中に潜んでいた巨躯がバネ仕掛けのように跳ね上がった、そのまま迂闊にも近付いた餌に鋭い牙を突き立てる。

……突き立てるはずだった。　目標が瞬時に体ごと飛び上がった襲撃者の下へ、足元から滑り込んでいなければ。

「雷光（ザン・アロー）の矢！」

無情にも最後通告が柔らかい腹側の皮膚を突き破り、全身の神経を焼き切られた森の脅威は絶命した。

「ふひー、おっかなーい。　っていうかびっくりしたー。　何でこんな所にリバースボアがいるのよ？」

傍に放電現象を放ちつつ静かに消えていく矢に貫かれた、１０ｍはあろうかと言う蛇が転がっていた。　ニシキヘビの様なこれは上下の模様が逆についている蛇で、腹を上に向けて死んでいるように見せかけて餌を安心させ、騙されて近寄ってきた哀れな獲物を胃袋に収める。　腹に見えている部分はやたらと硬いので、上に見える模様の有る腹側を狙うほうが倒しやすい。

薬草採取に来たら周囲の樹がしきりに「キヲツケテー」だの「コワイヨー」だの囁くから、周囲を【能動技能（アクティブスキル）：探索】してみたら落ち葉の中で長い腹がうねっていたと言うわけだ。

矢が消えたのを見計らい、くるくるっとホースみたいに束ねてロープで縛る。　とりあえず薬草採取については良心が痛むが、普通に採れるのだけは確認したし、何処へ行っても大丈夫だろうと言う結論に達した。　但し採取する度に、「ゴメンナサイ、ちょっとくださいね？」等と断りを入れつつだったので、些か心が挫けそうになったり……。

「って言うか結構魔物がいるんだねえ……」

ケーナの手にぶら下がるロープにぶら下げられた獲物はリバースボアだけではない。　針のように進化した歯を飛ばし敵を打ち倒すカメレオン、フォワリザード。　一見するとハチドリだが、蜜じゃなくて血を吸うリーチバードが三羽。　角と毛皮と肉に分解してアイテムボックスに放り込んだホーンベア。　ちょっと森の奥深くに入っただけでコレである、あの村がいままで無事に済んでいるのが不思議だが、どうしてかは判明している。　村を囲う柵に魔物避けの呪い（まじな）がかかっているそうだ。

流石に呪いまでは手持ちのスキルにないケーナは、後々作られたスキルなんだろうと納得した。

ケーナが辺境の村の宿屋で目覚めてから優に九日が経過している。

あれから塔にも三度足を運び、蓄積魔力をほぼ満タンにした。

そして他に生き残っている守護者の位置を交信によって特定してもらってからそこへ向かう予定だ。　どっちにしろ守護者にとっては、自分のスキルマスターの管理する領域以外の部分は無頓着なので、この際外にもある程度興味を持ってもらわないと、辿り着くことさえ出来やしない。

流石に海中や天空は仕方がないので、情報を集めていくしかないというが。

他にも隠れて飛行魔法を使い、村周辺や塔周辺の地図を埋めていくことにした。　ヘクスマスで行動範囲を探検していくシュミレーションゲームの様に。

村にも少々貢献した。　マレールに言われたとおりに自分のやりたい通りに。　この話を聞くとは無しに聞いた銀の塔の守護者は、

呆れて『スキルマスターが自分を安売りすんじゃネェヨ』と呟いた。

何をしたかと言うと総檜風呂を公共浴場として作ってしまったのである、持っていても使わない技能（スキル）を駆使して。オフラインクエストで得た【小屋作成】で二軒作り、男風呂、女風呂に分け。【魔法：水脈探知】によりもう一つの井戸を作って水汲み機を設置し、仕切りの中央に岩を置いてそれに【魔法：鉱泉】（水が温泉になる効果）、【魔法：保温】（一定の温度に保つ）を掛けて【魔法：効果永続】（保存効果上位魔法専門）も使った。管理は村人が持ち回りでするそうだ。苦労したのは檜っぽい樹を探す作業だ。

さすがに石鹸までは作れなかったが、風呂へ入ることの重要性をケーナが説いたので村の年配の女性陣にえらい好評である。

その日の探索を終えてマレールの前へ獲物を並べていると、ロットルがやって来て唖然とした。

「まーたアンタはこんなに色々穫ってきて……。どうするんだい村中総出でも食べきれないよ」

「ええっ！？　これ全部食べられるんですかっ！　鳥はともかくトカゲもヘビもーっ！？」

などと穫ってきた本人すらも、マレールの言葉を忌避したいものがある。

「おいおい、なんだよこの量と種類……」

ロットルが宿屋裏に並べられた六匹と凍った肉の山を前に肩を落とす。　これはあれか、猟師のプライドを打ち砕く陰謀か？　とでも言いたそうな顔で。

「こっちの肉の山は何だい？　なんだか白くなってて冷たいけど……」

「それはホーンベアです。　でっかいんで切り分けたんですが、生肉のまま（アイテムボックスに入れて）持ち運ぶのが嫌だったので、魔法で凍らせました。　あ、これ毛皮と角です」

森を一歩進む毎になにかしらの、魔物なんだか普通に生息している動物なんだかが現れるので、途中から飛行魔法に切り替えて帰ってきた。　それなのに空でも鷲に襲われて、ウンザリしてしまう。

仕留めたが、エンカウント率が高すぎるのも考え物だ。　ゲーム中ではアクティブモンスターと言えど自分のＬＶより低ければ襲われなかったのに、平時だと能動技能（アクティブスキル）が意識しないと立ち上がらない為、本能で襲いかかってくる動物には関係ないのだろう。

ちょっと大変だったのは熊の解体で、初めて穫った時に宴会で切り分けられるのを見て、ウロ覚えでやってみた。　抵抗感はあったが、血の臭いが凄いわ、やたらと時間がかかるわ、途中で吐いたりもしたがなんとかバラバラにして【魔法：凍結】で凍らせた。　どっちにしろこの地で生きていくのなら、避けては通れない道と諦めて慣れるしかない。

「あと、商団が来てからなんですけれど、そろそろこの村を離れようかと思います」

姿勢を正しかしこまって告げたケーナに、マレールとロットルの二人は沈黙した。

「そうかい、寂しくなるねぇ……」
「まあ、ケーナちゃんも冒険者だし、ひとつ所に立ち止まっていられないものな……」

しんみりした雰囲気に包まれるその場に、首を傾げてリットが加わる。　水を汲みに来て、母親とケーナとロットルが顔を突き合わせ、お通夜みたいな空気を漂わせているのだ。　不思議に思わない方がおかしい。

「どうしたの？」
「あー、リットちゃん。　うーんとね……」

口にしようとした時にマレールが制した。　眼を合わせたケーナに首を振る。

「マレールさん？」
「いいよケーナ、言わないでおいとくれ。　するのは当日で充分さ」
「え？　……でも？」
「こんな商売だ、会ったら別れるのは当然さ。　あの子にはその辺りキチンと慣れてもらわなきゃいけないからねえ」

話しかけようとしたのを母親に遮られたケーナを見て、子供の聞く話じゃないと勝手に判断したリットは、いつものようにハンドルを回して水を汲み始めた。

マレールに止められた為、結局切り出せなかったが意外にもその

別れは早くやってきた。
次の日の昼頃になって、五台の馬車で構成された移動商団隊が到着したのである。

それは丁度昼食を取ってる時に聞こえてきた。
馬の嘶く声、荒々しい蹄の音、馬車の車輪が大挙して地面を踏み鳴らす音、大勢の人が押し寄せる喧騒。それと同時になんとなく村から膨れ上がる期待感。ケーナには「あ、なんか人がいっぱい来たな」といった感じに聞こえたのだが、マレールには何時もと違ったモノに聞こえたらしい。

「んん？　なんか妙に慌てて来たねぇ？」
「はー……。慌てて？」
「あんな慌ててやって来る様な連中じゃあないんだけどね。道中何かあったのかねぇ？」

疑問符を浮かべたケーナが食堂の出入り口に目を向けると同時に、男が飛び込んで来た。革鎧と長剣で武装した男は慌てた様子でカウンターまで駆け寄る。

「女将！酒だ！あとお湯か水！」
「なんだい何だい慌ただしいねぇ、一体どうしたって言うんだい？」

いきなり注文して待ち焦がれているかにその場で足踏み。確かに誰が見ても妙に慌てている。
マレールは奥から酒瓶を取り出すついでにリットを呼び「井戸の使い方を教えてやんな」と指示をした。酒を受け取った男は駆け足で外へ。その時に舌打ちをして「くそっ」と悪態をついたのが気になったケーナは、残った昼食を詰め込んで行ってみることにし

た。

外にはケーナの初めて見る光景が広がっていた。
四頭立ての箱馬車が二機に、二頭だての幌馬車が三機。　野原の隅に並び次第次々に馬を外し、荷物を卸しながら準備を整えて店舗を広げていく。　馬車から下りてきた者達が一丸となって、みるみる露天商売らしくなっていく様を感嘆しながら見ていると。

商人とは別の一団、武装している１０人弱が纏まっている方から切羽詰まった叫び声が聞こえてきた。　誰もが口々に余裕がなく、ある一角を取り囲んで声を飛ばしている。

「おいっ！　しっかりしろ！」
「ケニスン！　おい！　聞こえてるんなら返事をしやがれ！」
「薬草を早く持って来い！」
「畜生！　血がとまらねぇ」

その様子から、唯事でないのはケーナにもはっきり理解できた。

「……怪我人？」
「ええ、まあ」

動こうとしたケーナの足元で第三者の知らない声が返ってくる。
いつの間に寄って来たのか隣には地面に引き摺るくらいのぶかぶかな茶色いローブに身を包み、眼鏡を掛けた犬人族（コボルト）が居た。

「ここに来る途中でオーガが出ましてね、護衛の傭兵団が撤退をさせたんですが、重傷者がでたらしく。　あれでは保たないでしょう」

心配している感じは受けたが諦めた様子にケーナの眉がつり上がる。

「……死んじゃうのを容認するんですか？」

「あの傷ではもう……」

首を振って切り捨てるしかないといったコボルトを睨んで、ケーナは怒声を上げている集団へ駆け寄った。

「どいて！」

「え、おい、嬢ちゃんなんだ一体！？」

固まった傭兵達を掻き分けた先には、地面に敷かれた毛布に横たえられた年若い青年が。　革鎧の脇腹が裂け、包帯が当てられてはいるが真っ赤に染まったそこからは血が滴り落ちている。

【サーチ】によって状態を確認したケーナにはＨＰバーが徐々に減っていくのが見える。　黄色から赤に切り替わった所で症状を理解したケーナは「毒か！」と口にした。

仲間の命が刻一刻と死に瀕している危機的状況に、輪の中に飛び込んできた女をどかそうとした傭兵は、傭兵達のみならずその場に居た者全員がケーナの次なる行動に度肝を抜かれた。

【特殊技能（エクストラスキル）：ｌｏａｄ：二重詠唱（ダブルスペル）：ｃｏｕｎｔ　ｓｔａｒｔ】

青いリングが二つ、横から見て両肩の高さでバツになってケーナ

の回りを高速回転し始め、クロスポイントに数字が浮かび上がった。

――【９】

【魔法技能（マジックスキル）：毒浄化：パ・ニル：ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ】
【魔法技能（マジックスキル）：単体回復：デュールＬＶ９：ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ】
「癒せ！」

顔色が青から土気色になりかかっていた青年を淡い緑の光が包み、輝く光がその身に吸い込まれていく。

「なっ！？」
「だ、ダブルスペルだとおっ！」
「国内でも遣い手なんか三人もいねぇぞ！」

目の前の到底信じられない現実に硬直していた傭兵達や商人は、茫然と呟いてその光景に見入った。

――【６】

【魔法技能（マジックスキル）：持続治癒：デュライト：ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ】
【魔法技能（マジックスキル）：範囲回復：ラ・デューラ：ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ】
「いーからさっさと動け！」

青年の頭上に五亡星に二重円の法陣が固定化。　煌めく輝きが絶え間なく降り注ぐ。

後者の魔法は白い半透明の漣（さざなみ）が周囲に広がっていく。　傭兵達のみならず商人達や見物していた村人にまで影響を及ぼし、掠り傷から戦闘で受けた傷に至るまで徐々に治癒していった。

――【3】

――【2】

――【1】

【ｃｏｕｎｔ　ｅｎｄ：効果終了】

甲高い音と共に青いリングが砕け散り、中空に溶けて消えた。

「はふ」と深い溜息をしたケーナを凝視していた傭兵達は今さっきまで土気色になっていた青年の顔色が正常に戻り、裂けた脇腹の包帯の出血が止まってる事を確認すると、信じられない表情から喜びに変わり、歓声を上げて互いに無事を喜び合った。　村人達は流石はケーナちゃんだ、といった感じだが、商人達は開いた口か塞がらないといった表情で動きが止まっている。

「はー、やれやれ良かった良かった」

……と肩を叩いて、場を離れようとしたケーナは先に宿屋へ飛び込んできた壮年の戦士に呼び止められた。

「済まないお嬢さん、仲間の命を助けてくれた事、深く感謝する。ありがとう」

「はい、ギリギリ間に合って良かったです。　法陣はしばらくその人の上に出てますけど、動かしても平気ですよ」

壮年男性の指示で青年を担架に乗せ、宿屋の方に数人で運んでいく。　ケーナには傭兵達に次々にお礼を言われ、紅くなって恐縮

した。　そこへ先程ケーナに声を掛けてきたコボルトが拍手をしながら近寄ってくる。

「いや～、大変珍しいモノを見せて頂きました。　さぞかし名うての術士の方とお見受け致しますが、名前をお聞きしても宜しいですか？　私、この移動商団を纏めているエーリネ、と申します」

「ケーナです。　ただの引きこもりの田舎者ですので、お気になさらず」

色々人に説明するのもアレなので、ケーナは自分自身を森に引き篭もっていた世間知らずの隠居人とすることにした。　ケーナが知っているのはプログラムされたゲーム世界だけであるから、この理由なら現状の世界の事を知らなくても、田舎者と称するだけで済みそうだから。

（にしてもコボルトって商人もできるんだねぇ）

ＮＰＣの小間使い的な役割で、ゲーム世界をちょろちょろ走り回っていたのを良く見ていたケーナは特に気にしなかった。　逆にエーリネの方は初対面の者には大抵「こんなのが？」といった色眼鏡で見られるため、特にそういった反応のないケーナの態度に好感を持った。

「もし辺境でモノがご入り用の際は、私共の商団をご利用くださいますよう」

彼女の実力を〝それなり〟だと判断したエーリネはここで売り込んでおくのが得策と判断し、頭を下げた。

少し経ち、先の緊迫感が払拭された広場は活気に満ちていた。
畑で採れた穀物や野菜を売る者、物々交換で日用品の値段交渉をする者。　護衛の傭兵達は一部を残し、酒を飲みに宿屋へ。　ケーナはリットと一緒にロットルが並べた、狩りで得た毛皮などを換金するのを座り込んで眺めていた。　商人は随分と目を白黒させて算盤を弾いている。

「ホーンベアの毛皮が三枚って……、そこそこの冒険者でも苦労しますよ、これ。　こっちはリバースボアの革じゃないですか！？　リーチバードの羽根！？　村の猟師に狩れるなんてもんじゃありませんよ。　一体どんなインチキを使ったんですか、ロットルさん？」

「ふっふっふー」と腕を組んで胸を張ったロットルはビシッと傍らでリットと談笑していたケーナを指さして。

「これは全部ケーナちゃんが獲って来た獲物なのだー」
「わーぱちぱちー」
「てへっ」

リットとロットルに賞賛されて、素直に照れるケーナ。
商人は世界が４５度傾ぐ音を聞いた。

「さ、参考までにどうやって？」

先程の行使していた魔法からケーナを神官職と誤解した商人が、

毛皮に剣などの斬り傷や、魔法などの焼き傷がないのを疑問に思ってからである。　聞かれたケーナはロットルと顔を合わせ、異口同音に、「「蹴って」」と返答した。

「いやー、1回目はともかく2回目は凄い技だったなー」
「言わないでください忘れてください若気の至りだったんですーっ！」

2回目はロットルと出かけた時に、つい調子に乗って「スーパーウルトラデンジャラスバーニングキーック！」などと叫んだ為に。
実際は唯の【チャージ】の入っただけの、1回目と代わりばえのしない蹴りだっただけである。　夜になったらその勇姿を酒場で吹聴した彼は「女性の嫌がる事をするんじゃないよ」とマレールに撃沈されている。
楽しそうな会後とは裏腹に、商人はあまりの非常識さに卒倒していた。

「楽しんで頂けてる様でなによりです」

傭兵が詰め掛けた為に宿屋が忙しくなったのでリットがマレールに招聘され、一人で商品を見て回っていたケーナはエーリネに声を掛けられた。

「先程、私も貴女の作品を拝見させて頂きまして、今の世に無いような素晴らしい物でありました」

ホーンベアの角で三又槍を作って、武器商担当に鑑定させた事だろうか？　やたらと感動していて、交渉の末に2本で銀貨６０枚で

売れた。　それか別の商人が「これを作ったのは誰だあっ!?」とか言って、井戸の水汲み機について詳しく聞きに来た時のことだろうか？　それでもなければ共同風呂の件だろうか？　判らなかった彼女はぶっちゃけて言ってみる。

「２００年前はよく見たんですけどねー（……クエストで）」
「ほう、２００年前。　なるほど、しかし今になって引き篭もりを止めて出てきたんですか？」
「そうですねー、まあ、色々です」
「そうですか……。　それで、何かお買い求めになりたいモノはありましたか？」

　基本的にケーナは探って来るような言い回しをする人の対処に慣れていないので、適当に言葉を濁す。　ゲームでは最初から信頼する仲間関係のみだったので。　苦手なのだ、質問から的確にコチラの事情を探ってくる話し上手の看護婦のように。

「あー、地図が欲しいんですけれど」
「なるほど、２００年も経てば確かに地図も変っていますからね。　それなりの御代は頂くことになりますが？」
「あとついでに王都の事とか教えてもらえると。　あ、情報料とか要りますか？」
「いえいえ、でしたら先程の魔法の見物料としてオマケしましょう」
「見世物にしたらお金が取れますかね？」
「少なくとも二重詠唱（タブルスペル）なんて使える人間は此の世に数人いるかどうかですよ？」

　エーリネの面白そうな言い回しに、早まったかとする顔をするケーナであった。

「ほう、人捜しですか？」

宿屋の夜酒場では村人に加え、商人達とその家族、護衛の傭兵まで加わって、普段の数倍の喧騒で賑わっていた。　その中でカウンターの定位置に座るケーナ、隣にエーリネが自分で持ち込んだ高めの椅子に座って、フェルスケイロ王都の様子を語っていた。

途中でケーナの「あの子も其処にいるのかなあ？」と言った事から、エーリネが聞き返したのがこの後の騒動の始まりだった。

「どんな方か聞いても構いませんか？　もしかしたら私共の知っている方かもしれません」

そう言えば容姿ってどんなだっけ？　と考え込む。　キャラクター作成の後、少し成長させて里子に出した後は殆ど接触しなかったので、完全に容姿を忘れ去っていた。　世の中の人が聞いたら呆れるくらいもの凄い薄情者である。

「ええとね、エルフの男性で……」
「ほう、エルフの。　ふむ……」
「神官でー、」
「ふむふむ、神k……、え？」

なんとなしに口にしたエーリネと、聞き耳を立てていた傭兵達の動きが止まる。　エルフ、男性、神職、この単語が当てはまる人物なんて王都でもかなり限られる。「いやそんなまさかー」、などと考えた一同だった。　しかし……、

「スカルゴってゆー子なんだけどー」
『えええええええええええ――っ！？！』

聞いていた全員、勿論村人は除く、が動転して一斉に驚愕の叫び声を上げた。

「スカルゴ殿って言えばおまっ！？」
「あのスカルゴ殿とお知り合いなのですかっ！」
「いやー、こんな田舎ですげー話聞いちまったなぁ」
「あんな雲の上の人とこんなお嬢ちゃんが……、一体どんな関係が？」
「おいおい、聞き捨てなんねぇな、ケーナちゃんがどんだけ凄い腕前なのか知らねぇのかよ！」
「こんな田舎のお嬢ちゃんがどんな腕前だと言うんだ！」

端の方で突然始まった自分を品評する村人と商人の口喧嘩。　マレールを見上げると、にこやかな表情でお盆を手にしたので、見なかった振りをする。　まあ、視界の端を円盤が飛んでいった。

「あの子そんなに有名人なんだ、へー」

「いやいや嬢ちゃん、スカルゴ大司祭と言えば、王様、宰相に次ぐ発言力をお持ちの方だよ。　そんな『へー』って言葉で片付けられるようなお方じゃないよ」

「そうそう、２００年前の激動の時代からの生き字引。　美青年、そして国のＮＯ．３。　彼の魅力に酔わない人はいないよー」

「……大司祭、大司祭ねぇ？」

ゲームの偉い人と言うとケーナの覚えている限りでは、出入り自由の王城、ＮＰＣ、イベントムービー、クエストくれる所、この程度である。　なんとなく可笑しくなって、くすりと噴き出す。

「……おいおい」

そんなケーナを見た傭兵達が突っ込んだ。

エーリネは本能がこの先を聞くなと囁いていたが、好奇心に負けて、つい尋ねてしまった。

「さ、差し支えなければ、いったいどんな関係なのか聞いてもよろしいでしょうか？」

「うん、別に隠すようなモノじゃないしー」

精々友人止まりだろう、はーやれやれびっくりさせやがってー……、と外野が飲み食いを再開した丁度そのタイミングに、

「息子だし」

ゴハッばぶふうっ！！？！

その場にいた全員が一人の例外もなく、口の中のモノを噴き出し

た。
　村人達、マレールやリット、ロットルやルイネなどは顎を落として目を見開いて凍っているし。　傭兵達は互いに噴き掛けた酒でびしょびしょだし、商人達の家族は皿をひっくり返したり食器を取り落としたり、エーリネに至っては椅子から転げ落ちていた。

「……け、ケーナ……」
「はい？　どうしましたか、マレールさん？」
「あ、あんた……、そんなナリして、１児の母だったのかいっ！？」

――――――　１児の母！？

　単語にされると目の前の１５～１７歳くらいに見える少女の存在が疑われる瞬間だった。　これほどミスマッチな言葉もない。

「あ、いえ、まだ（サブキャラクターが）後二人居るんですけどー」
『『ウエエエエエエエエッ！？！？』』

　技能別に特化させるとどうなるかの実験みたいな形で里子に二人出している。　８０個程の攻撃魔法を覚えさせたエルフ女性マイマイと、砦や城やダンジョン等の建造物作成技能に特化させたドワーフのカータツである。　後者はさすがに義理の息子になっているが。
　因みに三人共名前の元は、雨の日に病室から見つけたカタツムリから。

酒場の中には驚愕と困惑と混乱と乱心と気絶の嵐が吹き荒れていた。

5話　人助けをしよう（後書き）

命を奪う事について葛藤を入れると進まないのでドライになっています。
あと今回はやたらとシーンごとにバラバラに書いたので繋げるのに苦労しました。

6話　旅に出てみよう（前書き）

残酷描写ありは、今のところ保険です。
ＰＶが前回の終了時より倍に増えているのですが……え？ええ？
とてもありがたく感謝でいっぱいですが、え？　なんで？

6話　旅に出てみよう

「……は？」

エーリネは今まさに聞いた言葉を反芻して、狐につままれたように聞き返した。

辺境の村で1泊してから早朝、目の前で一緒に朝食を取る、自称田舎者の冒険者ケーナにである。

昨夜の衝撃の告白から一夜明けた朝、宿屋の1階では食事を取る傭兵やエーリネの纏める移動商団の仲間達がその家族と共に、味わい深いシチューにパンで朝食を取っていた。　シチューには勿論惜しみなくゴロゴロとした肉がふんだんに使用されている。　辺境の牛肉と称されるホーンベアの肉が、何の苦労も無く大量に在庫があり、食べるのに困らないとは何の冗談であろうか。　この際それは置いといて、問題は目の前の女性にある。

「もう一度お聞きしますが、一緒に王都に行きたい。　……と？」

「うん、一人で行ってもいいんだけれどー。　道がよく判らなくて。頼めますか？」

しばし思案したエーリネは特に否定もせずに了承し、ケーナの肩口から後ろに視線をやる。

「とりあえずこちらは問題ありません、歓迎しますよ。　其方のお嬢さんには問題あるようですが？」

「は？　……あ”」

エーリネの視線を追って背後に振り向いたケーナは、お盆を抱え

て泣きそうな顔をしたリットに気付いて脂汗を垂らした。

流石にそのまま放置すると良心が痛むので、マレールに言付けて宿屋の裏手まで少女を連れ出した。

「ケーナおねーちゃん、行っちゃうんだ……」
「う、うん。　流石にずーっとこの村に居るわけにもいかなくてね」

少女の潤んだ上目遣いに自分のＨＰが大きく減った錯覚を覚えるケーナ。
しゃがみこんで膝を立て、リットと目線を同じにする。　両手で彼女の手を取ってから語りかけた。

「大丈夫、これでもう永遠のお別れなんてことはないから」
「ほんとうに？」
「うん、約束するよ。　きっとまた会いに来るから」

それでも残念そうな悲しい顔のままのリットを抱きしめて、耳元に小声で囁く。

「約束の証に凄い事を教えてあげる」
「え？」
「誰にも言ったらダメだよ、マレールさんにもガットさんにも。ルイネさんにも言ったらダメ」
「う、うん……わかったヒミツにする」
「山の向こうにある銀色の塔、知ってる？」
「うん、おかーさんがわるいまじょがいるんだよって」
「あの塔のわる～い魔女が、何を隠そうこの私なの」
「え？　ええっ！？」

大して力を入れてなかったケーナから体を剥がしたリットは、マジマジと顔を見つめ、「ケーナおねーちゃん、わるいひとじゃないもん」と呟いた。　その一言で嬉しくなったケーナは少女を再び腕の中へ。

「絶対に秘密だから、時々戻ってきてリットちゃんが誰にも言ってないのを確認するからね？」
「うん、おねーちゃんがずーっと来なかったらだれかに言っちゃうからね」
「ん、じゃあまた塔に戻ったら、この村に顔を出すようにしないと大変だ」

顔を見合わせて笑いあう姉妹のような二人に、物陰から隠れて様子を見ていた村人達はそっと涙した。

それから二日程して商団の出発＆ケーナ旅立ちの日がやってきた。

商団が村を離れる時刻には村人が総出で送り出すという事態に…。「たっしゃでなー」「また来いよー」「次は息子さんも連れてなー」とか口々に言う村人を見て、田舎に帰ってから都会に戻る若者のようだとケーナは思った。

「随分な人気だな」
「お世話になりましたから」
「逆だと思うんですけどねえ」

両手を振って皆に別れを告げるケーナを見ていたエーリネと護衛傭兵団の団長は、思った。ひょっとしたらこの嬢ちゃんは他人の好意に鈍いのでは？

「そう言えば自己紹介を忘れていたな、傭兵団〝炎の槍〟団長のアービタだ。王都までしばらくはよろしく頼む」

御者台の端で足をぶらぶらさせていたら、脇を歩いていた壮年男性に声を掛けられた。それから次々に傭兵団のメンバーに挨拶されて、名前を覚えきれず目を白黒させる。

一通り名前交換が終わるとエーリネによって箱馬車内に連れ込まれた。

その際にエーリネとアービタは視線を交わし、重々しく頷き合う。二人の心は今一つの使命で燃えていた。

即ち「この金銭感覚の破綻した嬢ちゃん（ケーナどの）をこのまま王都に入れる訳にはいかない」と。

そこまで強い想いを抱かずにはいられない理由は二つある。

――事例？

ケーナに地図を売るときにエーリネは思った。　この御仁となら面白味のある値段交渉が出来るのではないかと。

「銀貨８枚でしょうかね」

これには丁度近くで聞いていたアービタでさえも、おいおいボリ過ぎだろう、と内心突っ込んだ。

……しかし、

「ああ８枚ですね、じゃあこれで」

彼女は素直に８枚の銀貨をエーリネに渡し、二人は唖然として銀貨を見つめた。

エーリネが慌てて他の国分の地図を渡したのは言うまでもない。

――――事例？

それはまた王都まで同乗したいという交渉の、ケーナがリットのご機嫌を取った後に発生した。　エーリネに言わせれば、ケーナ程の腕前を持った魔導師なら同行して貰えるだけでもとても幸運で、逆に此方からお願いしたいくらいだと。　それでもつい商人魂の観点から、

「銀貨１０枚ですかね」

……と言ってしまい、馬鹿正直に払おうとした彼女を慌てて二人掛かりで止めた。

「何を考えているんですか!?」
「そうだ、ちょっと待て嬢ちゃん。　少しは疑え!」
「え?　今風には相場これ位じゃないんですか?」

この発言に二人は思った。「「ダメだこの人、価値観が２００年前で止まってやがる」」

そういった経緯もあって冒険者の一般常識をアービタが、金銭の常識をエーリネが教える事に。　いやむしろ教えさせて下さいと頭を下げたいくらいである。　村での所業を見る限りでは、これだけ経済感覚の破綻した人間を世に放ったら、たちまち一般市場が崩れ落ちる可能性があるからで。

箱馬車では適当な小さい木箱に布を敷き、エーリネ先生の経済教室が始まっていた。　上には三枚の硬貨があり、一番端から茶色、銀色、金色とある。

「いいですかケーナ殿。　まずこの茶色いのが銅貨、５０枚で銀貨１枚になります。　そして銀貨が１００枚で金貨１枚になるんです」

銅貨には種類は分からないが鳥の意匠がされ、銀貨は花、金貨は何かの建物がそれぞれ刻まれている。　更にエーリネは無色透明だが微妙に輝く硬貨を取り出し、金貨の隣に置く。　こちらには何かの紋章が、なにやら桂菜的に身近に感じられたモノが彫り込まれている。

「これは水晶貨、世界を取り纏めよと任命した神の紋が意匠されています。　これが金貨１０枚分ですね」

手にとって眺めてみたケーナはおもむろに術を使う。　【魔法技（マジックス）能（キル）：解析】

「は？」

そしてどこに仕舞っていたのか、無色透明な棒きれを取り出すと【技術技能（クラフトスキル）：複製】を実行。　いきなり光の奔流が馬車内を席巻し、唐突に収まったと思ったら、ケーナの手にはもう1枚の水晶貨が増えていた。

「なんだー、見たことあると思ったら、これ家紋だわ」

自分で作った水晶貨をこねくり回し、仏壇にあるような紋を納得しながら見つめる。　それをエーリネは顎を落として戦慄していた。水晶貨の製造については門外不出、一部のドワーフに伝わると言う技術をもって作られると聞いているからだ。　それをあっさり目の前で作られては、開いた口が塞がらない。

それでも心を奮い立たせて、

「ケーナ殿！　お金を勝手に作るのは犯罪です！」

「はい、すみません」

あっさり頭を下げてくれなかったらどうしようかと思った……。

商団は夕刻、まだ日の明るい内に街道沿いの開けきった場所へ辿り着き、夜営の準備を整えていた。　エーリネの話によると、街道には大抵この様な宿泊に適切な場所がいくつかあり、時には全く他人でもここで身を寄せ合って一夜を明かすのだそうだ。

夜営は商人の一部と傭兵団が結託して行う。　近くには小さいながらも綺麗な小川が流れていて、水には困らない。　水汲みは主に子供の仕事だ。　アービタは幌馬車の車輪に座りながら、虚空を見つめてぶつぶつ呟いているケーナに近付いた。

「銅貨が1枚2まーいさんまーいよんまーい……、そのうち井戸からお岩さんがいちまいたりなぁ～い、とか出てくるのかしら？」
「その様子だと、色々言われたみたいだな。　勉強にはなったか？」
「ええ……、エーリネさんがスパルタ教師だったとは、思いませんでした」

グッタリした感のあるケーナを豪快に笑いとばす。

「ま、少しはお金のありがたみが理解できたか？」
「これで理解できませんって言ったら教師が二人になりそうですよ～」

銅貨１０枚あれば大人が１日満ち足りて過ごせるのだそうだ、主に食欲面で。　マレールの宿屋が１泊銅貨２０枚で１０日で銅貨２

００枚、銀貨に換算して４枚。　道理で銀貨２０枚で卒倒されるはずである、銅貨に直すと１０００枚にして５０日分になる。

「その割には槍１本３０銀貨とかだったけど、その辺の価値がなあ？」

「いやあれは俺も見せてもらったがいい出来だったぞ」

そのアービタが背負うのは１本の槍、先端が炎が揺らめいた形の蒼い刀身になっている。

「王都の武器屋でなら３５以上で買ってくれるんじゃないか？」

「そんなものなのか、それとも過剰評価なのか、いまいち判断が付きにくいですね」

「お嬢ちゃんは魔術師だから武器は使わないんだろうが、実際のところ名工が作ったとされる武器は金貨２枚とかザラだからなあ」

しみじみ腕組みをして頷くアービタにそれとなく相槌を打つケーナ。

どちらにしろ現在の銀貨１枚が、ゲーム中の最低金額１ギルだった彼女にはピンと来ない。　名工といっても武器防具の類は技能さえ覚えてしまえば、材料に吟味するだけで殆どは自作出来たのだ。

創れないのはイベントで配布されたネタ武器くらいである。

覇王の鎧（なんちゃってまおう）やら、餓狼の剣（かみつきちゅうい）やら、惨劇の夜（ジェイソンブレード）やら、騒音の盾（くちをとじろ！）とか、一部を除けば効果が微妙で、ほぼコレクター専用装備だった。

「さて、そういえば冒険者志望だったな」

「まあ、お金も稼がないといけませんし。　無職でふらついているのもどうかと……」

「大司祭様に養ってくれって頼んでみたらどうだ？」

「嫌ですよ、息子のヒモになるだなんて。　母親失格じゃないです

か」
「世の親子はそんなものだと思うが……」
エルフと人間は考え方が違うのかもなと、アービタは勝手に納得した。
「大体、ぶっちゃけて言ってしまえば冒険者になる事自体は簡単だ。冒険者ギルドに行って登録をしてから登録カードを受け取ればいい。こんな感じのな」
と、アービタが提示したのは厚さ１ｍｍ程のクレジットカードに似たモノである。全体的に紅く、表面には虹色の文字でアービタの名前と種族と職業と傭兵団の名称が表示されていた。
「本来ならば白いんだが、俺達の様に色付きはある程度の人数が集まってグループを作っている場合に限られる。これを持っていればそいつは冒険者だ。失くして再発行しようとすると銀貨２枚取られるから注意するこった」
ふむふむと頷きながらケーナは納得した。
リアデイルＶＲＭＭＯＲＰＧは純粋な日本製で、ほぼ国内のみで展開していたのが影響を及ぼしているのか、この地で使われている言葉は漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字、英語。それとゲーム中では設定上だったアルファベットを９０度傾けて崩した、と言っていい雰囲気な文字である。判りやすく表現すると墨汁をたっぷりつけた筆で、アルファベットを縦に書き、横にして垂らす。あとはたっぷりの墨汁が紙を下に流れて行く、と言う形で。これが一部では日常に使われていて頑張れば読めるレベル。
あとごく偶に古語として漢文があるらしい。

アービタのカードは全文カタカナで『アービタ：ヒューマン：センシ：ホノオノヤリ・ヨウヘイダン』と書かれていてケーナには微妙に読みにくい。　この文法からすると自分もカタカナにするしかないのだろうか？　と悩むケーナだった。

「後は何処の冒険者ギルドでも似たようなもんだ。　壁に依頼内容を書いた紙が大量に張ってあるからな、そこから自分に出来そうな依頼を剥がして受付に持っていくだけ。　中には期日のあるものがあるからそいつだけは注意だな、受けてから出来ませんでしたじゃ違約金を払わされる。　……こんなところか？」

違約金うんぬんはなかったけれど、その辺りはゲームと変りはないんだなあと、ケーナは思った。　自分がここで一番注意するのは、これがゲーム違い現実というところであると。　死んだとしてもゲームの時と同じ様にギルド本拠地で復活できるとは限らない事だ。

細かい事の諸注意や質問を答えてもらっているうちに日が沈み始め、団員の一人が二人の居る所へ夕飯が出来上がったと言いに来た。　そのまま皆の場へ戻ろうとした団員、青年を呼び止めたアービタはケーナへ顎をしゃくった。

「ケニスン、この嬢ちゃんがお前の命の恩人だ。　よく礼を言っておけ」
「え？　と、ああ。　そういえば元気になったんだ、よかったねー」
「忘れてたんかよっ！」

今気が付いたがそう言われて見ればー、といった様子のケーナに突っ込むアービタ。　青年は団長とじゃれ合うケーナに羨望の眼差しを向けると、姿勢を正して頭を下げた。

「ケーナ様、先日は自分の為に手を尽くしてくれまして、ありがとうッス！」
「け、けけけ、けーなさまあぁ！？　そんな様付けしなくてもいいよ、ふつーで、呼び捨てで！」
「じゃあ、ケーナさんにするッス」
「う……、それでもオーバーな気がするなあ」

赤くなってしょんぼりするケーナの様子にアービタは噴き出した。
わっはっは、と笑いながら人の集まっている、いい匂いのするほうへと向かう。　ポカンと去る団長をみつめていたケニスンは、同じく悔しそうなケーナとアービタを交互に見る。

「ケーナさん凄いッスね。　団長がこんな時に笑い出すなんて初めてッスよ」
「人がいっぱい居るから楽しいんじゃないの？　だからっていきなり人の顔見て笑い出すとかは無いと思うけどなー」
「いやいや、こんな夜営の時ならもっとピリピリした調子で俺等怒られるッスよ」
「人間だもん、誰だって息抜きくらいしたいっしょ？」
「だから、そうじゃないッスよ」

何を言われているのか判らないケーナと言いたい事が全く伝わらなく項垂れるケニスン。　アービタはもっと厳格で安全に依頼主を守るためなら、いつもケニスンのみたいな新人はもたもたしていると直ぐ怒鳴られる程厳しいと伝えたいのだが、ケーナは今の所彼のそういった場面を見ていない。
また別の団員が結局呼びに来て、ケニスンは怒られる羽目になったとか。

夜の帳（とばり）が下りる時分に、夜番の団員の割り振りをしているアービタの元へエーリネがやって来ていた。

「何か気になる事があるような話でしたが？」

「ああ、村へ寄る前のオーガ達の事だ。　アイツ等結構しつこいからな、もしかして襲撃されるかもしれん」

当初、馬車を周到に狙おうとしたオーガが二匹。　それに取り巻きのゴブリンが四匹、こちらは団員で二匹潰した。　オーガ一匹をアービタ含む3人で相手をしていた隙を突かれて馬車に寄ったもう一匹に、無謀にも注意を引き付けようとしたケニスンが死に掛けたのは記憶に新しい。　咄嗟にエーリネが売り物のマジックアイテムを使っていなかったら、ケニスンは治療も受けられぬ程の怪我を負い死んでいたのかもしれない。

「一応、警戒を厳重にしておくのと、あの嬢ちゃんにも協力を頼めないものかな？」

「ケーナ殿をですか？　今は普通に客なのですが……」

確かに術師のバックアップがあるのと無いのでは取れる戦法にも幅が出来る。　そこへ噂をすれば影、とても言うようにケーナがやってきた。　手には枯れ掛かった枝をそれなりの数抱えて。

「あ、いたいた。　アービタさーん」

「ケーナ殿、何を持ち歩いているんですか、寝床は性に合いませんでしたか？」

「ああ、ハンモック？　うん、あんなのがあるんだねえ、私初めてだよあんなので寝るのって」

馬車の中は大抵荷物で埋まっているので、人が寝れるスペースなど無く。　エーリネは背が小さいのでそれでもギリギリで荷物の隙間で寝れるが、ケーナくらいになるとそうもいかない。　そこで馬車と馬車の間にハンモックを吊り下げてそこで毛布に包まって寝ることになった。　地面に直接寝床を作らないのは、毒虫毒蛇対策である。　そんなのがなくとも本人は楽しそうだが。

持っていた枝を地面に置いたケーナは何処からともなく小ぶりな筒を取り出した。　アイテムボックスから出しただけだが、知らない人には何時の間にか手に持っていた、と見える。　それを二本アービタへ渡した。

「はいこれ、一応の備えで作っておきました。　危ない時に使ってくださいね？」

細い若竹を容器にしたちゃぽちゃぽ言う液体らしい。　変な顔をしたアービタに笑いながら説明するケーナ。

「ポーションですよ。　拙い腕前で悪いですが、皆さんに配っておきました」

「ああ、わざわざ済まないな。　しかしこれは高いんじゃないか？」

「大丈夫ですよ、村の周辺で普通に生えていた草が原料ですし、特別な材料なんか全然使ってませんから。　効果は保障します」

軽く受け取ってしまったアービタだが、後日それなりの所で鑑定してもらい、結果にぶっ飛ぶ事になる。　すでに絶えてしまった製法で作られたそれは、単価が銀貨２０枚もすると判明した。　本人にしてみればＬＶ１１００からして『微ポーション』で作ったつもりが、今の世の中だと『上位ハイポーション』な効果だったからである。

「で、そっちの枯れ枝はどうなさるおつもりで？」
「こっちは、夜警備のお手伝いでもしようかと思いまして。　ちょっと待って下さいね」

そう言って地面に置いてあったそれを纏め、手をパンッと打ち鳴らすと、魔法陣が枯れ枝の山の下に出現した。

【魔法技能（マジックスキル）：ｌｏａｄ：木人形作成（クリエイト・ウッドゴーレム）ＬＶ１】

「……おいおいちょっと待て」
「もう一生分驚いた気がしますね、私は」

ぐねぐねと生き物の様にからみあった枯れ枝が形を変え、統合し、寸胴の珍妙な人形を作り上げた。　背は１ｍ程、足は蟲のように数本、腕はまさに枯れ枝と言うべきガリガリ。　眼らしき空洞がぽっかり二つ空き、ピノキオみたいな鼻、その下に小さな口らしき穴。
何の予備知識も無しに夜道で出会ったら悲鳴を上げたくなる不気味さだ。

ぼー

どうやら鳴き声がそれらしい。　鼻の下に腕を回し体全体を傾げた。　……中々理解に苦しむ行動だが、執事風に挨拶をかましているらしい。　流石に創造主のケーナもこんな不気味なものになるとは思ってなかったみたいで、微妙に顔が引きつっている。

「え、えーとね、君はこの野営地に近付く人間以外のモノが居たら、倒しちゃってね？」

ぼー

やや尻込みしながらケーナが命令すると、両手らしき部位をたしたしと打ち鳴らし、足をへれへれと動かしつつ闇の帳が下りる森の中へ消えていった。

一時、その場に沈黙が降臨する。

「……だ、大丈夫かあれ？」

「……た、多分大丈夫だと思います。　それともアービタさん、やりあってみます？　無茶苦茶強いですよ、熊の倍くらい」

「げ、マジかよ……」

【特殊技能（エクストラスキル）：サーチ】で見たところ、ホーンベアはＬＶ３５～４０位である、今のウッドゴーレムがＬＶ１で作ったので最低でもＬＶ１１０と言うことになる、熊なんぞ相手になる訳がない。　欠点は火に弱いことだが問題は無いだろう。

「それで、お二人で顔をつき合わせて何の話ですか？」

「いや、ケニスンが嬢ちゃんのお世話になる原因になった奴等についてな」

「ああ、あのオーガ達ですか？」

「あいつ等は悪知恵が回る分結構しつこいからな……。　ちょっと待て今『あの』っつたか？」

自然な会話の流れに聞き逃すところだったアービタは、のほほんとしているケーナに聞き返した。

「ひょっとしてケーナ殿、もうケリをつけてしまわれたとか？」

「あ、倒したらマズかった？　ケニスンさんの仇ーとか突っ込みたかったとか」

「よくもまあ一人で倒せたもんだ」
「あー、まあ、うん、そこそこね」

口を濁すケーナに突っ込むのは止めようと二人は思った。これ以上非常識な場面は聞きたくないと言った有様である。真相は薬草を探しに行ったら、村近くの森に潜んでいるのを見つけて【召喚魔法：雷精】でさんざん追い掛け回し、追い掛け回し、追い掛け回したからである。正確には追い払ったとも言う。何せ相手が土下座して命の懇願をしてきたから。片言の言葉で二度と村に近寄らないと誓わせ、痺れ魔法を呪いの様に見せかけ恐怖心をあおって放逐した。

一応、村の方にも対策は施してある、リットに限定数だけ雷精を召喚できるアイテムを渡し、理由を話しておいた。これは自分の素性を知るのがリットだけだった事もあるが、他に適任者（ＭＰ持ち）が居なかったのも理由である。

どっと疲れた男衆二人はケーナに就寝の挨拶を告げ、自分達に迷い込んで来た女神に感謝した。些か常識とか平凡とかを何処かに置き忘れてきた人物だとしても、幸運には違いない。

この後、１０日の行程を経て商団と共にケーナは、フェルスケイロの王都に到着することになる。

7話　王都を散策しよう　（前編）　（前書き）

お気に入り件数１５０突破。ＰＶ２万２千以上、ユニーク３千以上。
予想し得ないほどの伸びに感謝致します。　ありがとうございます。

7話　王都を散策しよう　（前編）

かくして、昼を大幅に越えた頃になって商隊は王都へ到着した。

フェルスケイロの王都は幅広のエッジド大河を、中洲も含めて跨ぐ形で建築されている。

エッジド大河は大陸の中央を流れ、豊かな恵みの宝庫となっていて、民の生活とは切り離す事の出来ない生活の基盤だ。　川の手前で都市の東側には商業地区を含む住宅地区、ここが全体の六割を占めていて、そこに住む民草の種族も多種多様。　街壁の外にもスラムを含む貧民層達の住む町が建ち並んではいるが、夜になると街壁の外には魔物が出る場合があり危険度が増す。

中洲はドーム球場三つ分程の広さを誇り、教会や王立学院などが立ち並ぶ。　丘に面した対岸西側には貴族街と、それを一望する王城がそびえ立つ。

川は緩やかな流れを保っていて、行き来は主に小舟か大型のガレー船、または観光用の帆船などがある。　急いでいる人にはトンボ便がお勧めだ。　これは最大でも全長八mに達するライガヤンマと呼ばれる原生生物で、幼虫はワニ並みに河の脅威ではあるが、成虫は大人しいために飼い慣らされ移動や観光用に街のあちこちを飛んでいる。　乗員は虫使いと呼称される飼い主の他、一人ないし二人。ただし、王城や貴族街の上空を飛んではいけない、命が惜しければ。

そして川の跨ぐこの王都こそが、かつて白の国と翠の国が争う主戦場で、中洲が争いの種である特殊アイテムが穫れるポイントでもあった。

「うっわ～……あらあらあら～、こんな所に街をよくもまあ……。　今の人達は何を考えているのよ？　あーあ～あ～ぁ、大丈夫なのかなぁ……」

事前にエーリネから教示されてはいたが、百聞は一見に如かずと言われる通り、都市を目に入れたケーナの感想は呆れたと言うか、口が塞がらないと言うか、感心したというか。　直接的な感想は避ける。

反応を見たエーリネとアービタは揃いも揃って頷いて満足そうだ。

「どうです？　これが景観都市と謳われるフェルスケイロの街ですよ」

「どーだビックリしただろう驚いただろう素晴らしいだろう、う～んうんうん」

何故か異様に一人で盛り上がるアービタ団長。

仲間の者が小声で「団長ここの出身だから、いつもこうなんだよ」とか「慣れると気にしなくなるから」やら「視界の外に置いとけばいいぜ」と忠告してくれた。

既に馬車ごと街の中に入っていて、エーリネ達の移動商隊とは別れを告げる直前であり。　馬車溜まりを避けて街の大通りに出る所まで来ていた。

「ではケーナ殿、お暇になったら何時でも私共の商隊へいらしてください。　最優先で護衛として頼らせて頂きます」

「おいおいエーリネの旦那ァ、俺達との長期契約はどうする気だよ」
「勿論、ケーナ殿が優先で」
「抜け目ねぇなあ。　嬢ちゃん、行くところに困ったら俺達の所に来いや。　歓迎してやるぜ」
「あ、あはははは……。　光栄です、二人にそんなに買って貰えるなんて」
「なんだよ、脈無しかよ。　つれねぇなあ」
「いえいえ、する事が無くなったら頼らせて頂きますって」
「私共としては今からでもいいですよ？」
「あー、済みません」
「冗談ですよ。　ではケーナ殿、楽しい旅でした。　またご一緒出来ますように」
「はい、色々ありがとうございました」
「じゃあなー嬢ちゃん。　っと、おい！　ケニスン！」

礼をして踵を返したエーリネ。　アービタは別れの言葉を口にした後、自分達の仲間から1人呼びつけた。　忠犬の様に駆け寄ってくる青年。

「なんすか、団長？」
「嬢ちゃんを冒険者ギルドまで案内してやれ」
「了解ッス」

必要な事だけ言い付けると仲間の元まで戻る。　その際には手にひらひらさせ、別れを告げて。　ケニスンに先導されたケーナは雑多な種族ひしめく大通りを進み、すぐに白い塔を三本固めた建物へ案内された。

「これがギルドっすよ」
「案内ありがとうございます、ケニスンさん」

「いえ！　礼を言うのはこちらっス。　ケーナさんに助けて頂いた命、大切にしまス」
「そうですね、次も私がその場に居られるとは限りませんから。皆さんにもよろしく」
「はい、それでは失礼するッス」

彼の後ろ姿が雑踏の中に消えていくのを見届けたケーナは肩を落として、溜息。

「お礼って言ってる側だったからなぁ、言われ慣れないと言うか、肩が凝ると言うか……」

首を鳴らしながらギルドへ入る。
目に付くのは椅子無しの床に固定されたテーブルと、幾人かの屈強だったり荒くれだったりする風体の冒険者。　その奥に宝くじ売り場みたいなカウンターが二つ、三つ。　一番手前にあるそれに向かうと、赤毛の女性、大体二十代後半ぐらい、がにっこり微笑んで対応してくれる。

「冒険者ギルドへようこそ、本日は何の御用事でしょうか？」
「ここに冒険者として登録したいんですけどー」
「冒険者志望の方ですか。　それでしたら先ずはこちらの用紙に名前、種族、職業をお書き下さい」

実に淡々とした事務処理的なお姉さんだなあ、とケーナは思った。
少々探られている節がある所から、冒険者の適性チェックも兼ねているのだろうと判断する。　渡された用紙とペンでその場でさらさらと記入し、直ぐにさし返す。　職業は少し考えて、魔道士とした。　疑問なのが渡されたペンが鉛筆だった点について。　もう少しファンタジー定番の羽ペンみたいなモノだと思っていたケーナで

ある。

「はい、お預かりします。　……あら？」

用紙にざっと目を通したお姉さんは、一点を見詰めて目を丸くする。

「何か変ですか？」

「いえ、ハイエルフの方なんて珍しいですね」

「え？　他には居ないんですか、同族の人とか？」

「少なくとも、私がこの仕事を始めてからは貴女だけですよ」

言われてから内心「やっべー」とか思ったケーナ。　希少種族とかで売買される危険性とかあるのかなあ、と心配になる。　顔に出ていたのだろう、業務用の顔から一転して素で微笑んだお姉さんは、パタパタと手を振ってケーナの考えを否定してくれた。

「大丈夫よ、王都では奴隷なんかは条例で取り締まっているし。何よりもハイエルフの方に粗相をしたなんて、大司祭様に知られたら大変だわ」

用紙と引き換えに現地言語で「4」と書かれた番号札らしき物を渡された。

（つか、何を一般人脅しているんだ我が息子……）

「カードが出来上がるのは明日になると思いますから、また明日何時でもいいですので、取りに来て下さいね。　後はギルドの仕事要項等の説明は要りますか？」

「あ、そっちは多分大丈夫です。　炎の槍の団長さんに説明して貰

いましたから」
「あら、アービタさんの紹介なのね。　それなら先に言ってくれれば良かったのに」

ご免なさいネ、と謝られたのは最初に探る様な目線を向けた事についてらしい。　特に気にしてない旨を告げたケーナはカウンターを離れ、脇の壁に目を向けた。　そこには、縦二ｍ横四ｍのスペースいっぱいに所狭しと葉書半分くらいの紙が張ってあった。　依頼内容と報酬金額と依頼主の名前が書いてあるそれを、端から適当に眺めていく。

（何々、魔物を捕獲して下さい、闘技場運営委員会？　……緊急護衛求む、仕事内容は調査の護衛任務？　……私達と一緒に桃源郷探しに行きませんか、なんだこれ？　……夫の浮気を調査してください、これは冒険者の仕事なのかなぁ？　……あれあれ、これは）

その中で不意に目に付いたその紙には、シンプルに『ポーションを下さい。報酬銀貨２枚』と書かれていた。　すかさずアイテムボックスを開き、中の物を確認する。

（ありゃ？　アービタさん達に渡した薬が微ポーションの最後か……。　随分前に作ったハイポーションがあるけれど、二百年前の物とか鑑定されたりしないかなあ～）

１ダース一個として纏めてある中から、赤い液体のガラス瓶（内容量１００ｍｌ強）を一つ取り出して剥がした紙と一緒に、今離れたカウンターへと持っていく。

「すみませーん」
「はい。　あら、ケーナさんでしたよね、どうかなさいましたか？」

「カード無くてフライングみたいなんですけど、この依頼でこのポーション。　受けられますか？」

受付のお姉さんは紙とポーションを受け取ると、瓶を振ってじっくり眺める。　どうやら【技能：道具鑑定】をしているらしい。おもむろに深く頷くと、丁寧に仕舞い込み、依頼書にポンっと判子を押した。

「はい大丈夫です。　でもこれいいんですか、何かいいポーションみたいなんですけれど？」
「もう随分使っていませんから、賞味期限が切れていないのを祈るばかりです」
「この透明度ならそれも無いと思いますよ。　では、はい。　報酬の銀貨二枚です」
「ありがとうございます」

銀貨を受け取ると手の中でアイテムボックスに放り込む。　礼を言ってカウンターを離れて、ギルドの外に出た。

「さてと、まずは宿屋かな……。　たしかエーリネさんが、ギルドから出て左へ……、何軒目だったかな？」

どうやらギルドの周辺に宿屋が固まっているらしく、左右に見える看板のほとんどは宿屋っぽいんだかないんだか。　寝具や戸口をデザインした絵と文字ばかりである。　人込みを避けて道の端を少し歩くと、犬が骨を咥えている看板を見つけた。　ひとつ頷いて、そこに入ると辺境の村、マレールの宿並みの空間が広がっていた。

そこはマレールの宿と比べると人の入りが正反対で、言っちゃあなんだが人数が多い。　と言っても純粋に人と呼ばれる者は見渡し

てもほぼ見つけられなくて、背の低い犬顔の犬人族（コボルト）、細身で髪と同じ色の猫耳を持つ猫人族（ワーキャット）、直立したドラゴンのような竜人族（ドラゴイド）、ドワーフ、エルフ、と色々揃っていた。　宿屋の女将さんと言えそうな、やや太目のエプロンを着けた妙齢の猫人族が伺う様な目付きで、ケーナを迎える。

「初めての子だね？　エルフのようだけど、泊まりかい？　それとも食事かい？」

「両方で、エーリネさんから長期に泊るならばここがオススメだと、聞きましたもので」

　それまで警戒していた女将はケーナの言葉に一転、素の笑顔を浮かべると胸を撫で下ろした。　しかし、宿屋の女将さんという職業は、恰幅が良くないと勤まらないのだろうかと思わずにはいられない。

「なんだい、ダンナの紹介かい。　ビックリさせるんじゃないよ」

「人間お断りでしたか？」

「まあ、私達みたいな者には、未だにキツイ視線向けている人間（モノ）が多いからね」

　安心した女将はカウンターの内側に回り、カウンター席に座るように促した

「泊りは銅貨三十になるけれどいいかい？　ちょっと高いかもしれないけど」

「じゃあとりあえず、五日分くらいでお願いします」

　銀貨三枚を渡し、当分のねぐらを手に入れたケーナは久し振りに見る多種族との交流を楽しみ、女将さんの料理に舌鼓を打って、そ

の日は早くに就寝した。

次の日、早めに起き出したケーナは女将さんの呆れた顔を背に、王都見物へと繰り出した。　一言で言うと修学旅行に来て羽目を外しすぎた生徒の如く。　まあ、学園生活らしきものを経過した覚えの無いケーナには、新しい心境には違いないが、生憎と止める者も止められる者も居なかった。

「まずは取るものもとりあえず、……あっちからかねえ」

ケーナの目線は建物の影からでも、その向こう側に燦然とそびえ立つ教会の建物を捉えていた。

しかし途中に立ち寄った市場に珍しい物が多いので、ケーナの足は止まってしまった。　小道具、織物、アクセサリーと露店を冷やかした彼女は、市場の大部分を占める食料を扱う店が多い一角で足を止めた。

「あ、キリナ草だ。　丁度いいから買って行こうかな?」

白い水仙に似た花をつける丸い球根を持つそれ、露店の人によると臭みを取るのに刻んで使うらしい。　あっさりその場にあった全部を買い上げて売り場の人をビックリさせていた。　あとはコルトバードと言う肉がピリリとして旨い鳥を売っている所では、使わない内臓から心臓を選んで買い上げたり。　早くもエーリネ達の懸念

が現実のものとなっていた。
何に使うのかというとポーションを作る為だ。　昔は全部自分で採取しなければいけなかったので、随分と楽になったなあと感慨に耽（ふけ）る。

時折頭上をブーンと飛んでいくライガヤンマを見上げたり、串焼肉を買ってみたりしているうちにエッジド大河の船着場に出る。
船着場といっても、川の住宅地区沿い全域に桟橋が出ていたり、船があちらこちらに繋がれていたりして何処からが河の境界線なのか実に判り難い。　それでもその中から観光用だとか、普通に一般市民を乗せた乗り合いの小さい帆船が出ていたりする。
ここは川側に船着場を増築に次ぐ増築で重ねながら伸ばし、川幅が一番狭くなっている場所だそうだ。　それでも向こう岸まで四百メートルぐらい幅はある。

魔法を使って水面を歩いていく手段もあるが、折角なので乗り合い帆船（フネ）を使って対岸側に行く事にした。　此方の岸側から見ると、対岸の中洲部分はちょっとした島クラスの大きさがある。　右側にサン・ピエトロ大聖堂からドームを削ったみたいな白い建造物がでーんと建っていて、クリームをたっぷり盛ったホールケーキの様だとケーナは思った。
中央に綺麗に植林された公園が広がって、左側には何処か修道院に似た、回廊で繋がった建築物が建っている。　資格がある者なら種族貧困に限らず入学できる王立学院らしい。　さらにその左側に体育館のような建物が並ぶ。　船を専門に作る工房が建ち並んでいるとか。　全部、昨夜宿屋で聞きかじってきた中州の情報である。

往復料金銅貨二枚を払い、定員二十名の幅広の帆船に乗る。　帆船と言うが川下りに使う全長の長い船を横に三隻ムリヤリ繋ぎ合わせ、支柱を立てて帆を張っただけの簡単なものだ。　川の水は深い

紺色で透明度は低い。　かつて大戦時には迎え撃つ側が水底に潜み、渡ろうとした者達を水中下から撃墜した事もあったくらいだ。　時々味方の攻撃で感電事故が起きたりしていたのは笑い話になっていた。

　そうこう思い出に浸っているうちにのんびりと進んだ船は対岸に辿り着き、乗っていった乗客はあちこちに散って行く。　学院側に向かう若者たちも居れば、教会へ向かう年配の人達も居る。　周囲の景色を見ながらゆっくり歩いたケーナは、教会の開かれたままの大扉をくぐってホールへ足を踏み入れた。

「……なんというか、西洋時代めちゃくちゃな建造物だなあ」

　ギリシャ式の大理石の石柱からビザンティン建築に似たもの、ゴシック建築に至るまでパーツの寄せ集めみたいな内装に、流石日本製混合ＭＭＯとか思い知った。　聖堂の綺麗な作風の違うステンドグラスが並ぶ前では、若いシスターが観光客を前に添乗員の真似事をやっている。　少し考えたケーナは「だめもとで聞いてみるか」と、近くを通った年配のシスターに声を掛けた。

「どうかなさいましたか？」
「あの～、スカルゴって人がここに居るって聞いたんですけど？」
「大司祭様ですね、たしかにいらっしゃいますが……」
「会う事って出来ませんか？」

　手を合わせて懇願するようなポーズを取ったケーナは、目の前のシスターが天を仰いで溜息を付いたのを見て頬を引きつらせた。

「大司祭様は多忙なお方です。　前以て約束が有る方でなければ会う事もかないません」

「むう、やはりだめか。　しょうがない、あの子の生活を私の我が儘で壊すわけにもいかないし」
「？　あの子？」
「じゃ、お邪魔しましたー」
残念そうでありながら楽しそうなエルフ少女が、「チャオ」とか敬礼して去るのを見たシスターは怪訝な顔をして見送った。

教会から駆け足で撤退したケーナは王立学院の建物を横に見上げながら、港湾工房区へ足を向けた。
「折角だし見ておこうっと」
こちら側は製作現場はオープン状態で、邪魔をしなければ特に中に入っても問題ないらしい。　但し時折、材木が飛んで来たり金槌が飛んで来たりするので注意が必要だとかなんとか。　同じ宿に泊まっていた職人志望だと言う竜人族（ドラゴイド）が熱く語っていたのを思い出す。
建築を学ぶ学院の生徒だそうで、冒険者と片手間に両立しているそうな。
「しかしそれにしても。　……採取ポイントは何処に行ってしまったんでしょう？」
基本的にケーナが所属していた国は黒だったり紫だったりする国なので、こちら側の実状はあまり知らない。　ゲーム内でギルドの話題として聞くか、談話室のスペースで流される各国戦況実況中継くらいである。
ここの採取ポイントは少々危険で、先ずは特殊アイテムを材料か

き集めて作り、ポイントに投下。　しかるに飛び出てきたモンスターを倒してソイツからアイテムを得る方法しかない。　飛び出してくるモンスターも固定化されてなくて、鳥だったり魚だったりと別ギルド員の友人の話を聞く限りは実に大変そうだった。　それでも黒の国ライプラスみたいに、いきなり闇夜に包まれてから出てくるモンスターを倒し続けるよりは遥かにマシだろう。　ドカ湧きが四十分以上も続いた時は、仲間一同どうしようかと途方に暮れたくらいである。

　この際ケーナが一番懸念事項としているのは王都そのものだ。その理由として、出現するモンスターのレベルが百や二百ではない部分にある。　対応できるのは大体三百や四百レベルのプレイヤー達であるのが普通だったからだ。　その割にはこの地の冒険者は比較的にレベルが足りなさ過ぎる。　例として熟練の戦士と見えるアービタで、言っちゃなんだが百レベルにもいってないからだ。　彼にも確認したが今の冒険者の使う【サーチ】は具体的な強さが表示されないらしい。　ちなみに彼からケーナを見ると「不明」と表示されるとか、さもありなん。

　閑話休題。　とにかく、もし何らかの偶然によりモンスターが出現する時は、せめて自分が王都に居る時であって欲しいと思うケーナだった。

　外周の川っぷちをぐるりと歩くと、暫くしてデカイ体育館と見るべきか、川と直結する工房へ辿り着く。　入り口の端から顔をのぞかせてみると、船の水面下部分の船型と呼称される所は既に水に浮き、その上に水上に出る乾玄部を繋ぎ合わせている作業のようだ。

　よく港などで係留されている漁船を二倍くらいに拡大した大きさ

で。

「……なんだ見学者か、あぶないから近付くな」

何時の間にか随分と身を乗り出して見学していたようで、角材を抱えた健康そうな上半身肌を晒した青年に注意された。

「あははー、すいません」

「女の見学者ってのは珍しいな。　親方に弟子入り希望って訳でもなさそうだけど？」

「ん？　親方？　弟子入り？」

青年は顎をしゃくって船を指す。　船上に目を向ければ一人のドワーフが声を張り上げてあちこちに指示を飛ばしていた。

「なにをやっとるかー！　そこは違うといっとろーが！　てめえ、そこも何やってやがる！　二回も三回も手順を説明しねえと分からねえのかー！　ぐだぐだやってんじゃーねーっ！　さっさと運べーっ！」

とにかく怒声しか聞こえてこない。　乾いた笑いを零した青年はケーナに向き直ると「あんまり近寄ると親方の雷が飛ぶぞ」と仕事に戻ろうとした。

「てめえも見学者ごときにぐちぐち言ってんじゃねーよ」

と、背後から掛けられた野太い声に飛び上がった。

ケーナの肩位しかない背の、灰色の頭髪と髭を持ったごっついドワーフが睨む眼で立っている。　青年は慌てて角材を抱えたまま逃げ出すように中へ走っていった。　それを見送ったドワーフは後ろ

頭を掻いてケーナに向き直る。

「すまねぇな、嬢ちゃん。　柄の悪いのが……、え？」

「ん？　……あれ？」

何か言いかけたドワーフがイキナリ稼動停止し、汗がたらーりと垂れたのを見たケーナは、少し考えた後にそのドワーフを上から下まで眺め、ピンと来た。

「ああ！　カータツじゃないの。　久し振り、元気してた～？」

「……お、おおおおお、……お。　おお？　お……おふくろっ！？」

すてーん！　とケーナはスッ転んだ。　主に予想外とか予想外とかの反応で。

「だ、だだだ、大丈夫かお袋っ！　何かあったのか？」

「い、いやいや、なんちゅーか。　予想外とか、予想の斜め上の呼ばれ方だったもんで……」

手を貸してもらい立ち上がったケーナは、改めてドワーフを見る。

確かにあの時自分の作ったサブキャラだなあ、と。　多少トウが立っている気がするけれど。　それがちゃんと自分の意志で動き、選んだ道を進んでいるのが少し嬉しくなった。　子供が居た記憶は無いが、つい病院で出会った小さい子を慈しむような気持ちになり、頭を撫でた。　まあ入院中はそんな事を出来る体でもなかったが。

真っ赤になったカータツはその手を振り払うと、そっぽを向いて腕を組んだ。

「い、いいい、いきなり頭なんか撫でるんじゃねえよっ！　ち、小さな子供じゃねえんだからなっ！」
「うふふふ、なんか面白い仕様になってるなあ。　可愛い」
「と、年寄りに可愛いなんて言うんじゃねえよっ！　気持ち悪いだろーがっ！」

と、じゃれ合いを続ける二人の背後。　工房の出入り口に鈴なりに連なって様子を伺う、職人や弟子達の顔があった。

「お、おい。　誰だあの女性？」
「お、親方とあんなに楽しそうに……」
「あ、師匠が頭を撫でられている……」
「あんなことをしても殴られないなんて、随分親しげだなあ」
「ま、まさか親方にもついに春がっ！？」
「おいおい旦那が幾つだと思ってんだ？　歳が離れすぎじゃねーか」
「と、年下の恋人だとぉっ！　な、なんてうらやましい……」
「あ、やべ……」

「なにやってんだてめーらあああああああっ！！！」

「「「

「……なんだってえ！　塔を出てきて冒険者になっただあっ！？」
「うん、今日カード取りに行くの、この後。　なんかもう色々二百年前と違うから大変ね」
「お袋が冒険者になる事態ってーと、どこかの国を滅ぼすのか？」

かくかくしかじかと説明すると、唐突に物騒な事を何の疑問も無しに口した息子に、べしぃっ！　とケーナはチョップをかました。
一瞬で地面に突っ伏し、顔面を地面に打ち付けるカータツ。

「あれ？　カータツどうしたの？」
「『どうしたの？』っじゃねえよ！　馬鹿力でいきなり脳天が潰れると思ったじゃねえかっ！？　って静かに怒りながら物騒な獲物をだすんじゃねえっての！」
「そういえば、ここに来る前に教会に寄ったんだけど。　見事に門前払いだったよ」
「さも自分の行動を省みないように会話すり替えやがったな……。つか兄貴ントコ行ったのかよ、当たり前だろう、そりゃ」
「あとマイマイが何処に居るのか知らないかな？」
「姉貴なら隣の学院で校長やってるはずだぞ。　って普通の奴はしらねぇなこれ。　あと行ってもそっちも校門で止められるぞ」
「ふーん。　そか、判ったわ、カータツ」

一歩下がって踵を返した母親を慌てて追う。　腕を掴んで引き止める息子にケーナは首を傾げた。

「す、すまねぇお袋、俺今なんか気に障ること言ったか？」

今のそっけない返答に何か勘違いする所があったらしい。　厳つい容姿がうろたえる様子を見たケーナは、再び安心させる為に頭を撫でる。

「大丈夫よ、私は貴方を嫌ってなんかいないから。　とりあえず今日は帰るわ、人間お断りの宿に泊ってるから、何かあったら来て」
「お、おお。　頭は撫でなくていいと言うに！　でも兄貴達には言っとくぜ」
「うん、お願いね」

スキップをしながらここを去る母親を見ながら、カータツは大きな溜息を吐いた。　くるりと振り返ると、物影からこちらを爆涙したり、ジト目になったりしながら凝視する作業員の一団と眼が合う。

「……（怒り」
『……（引き』

間髪入れずに船着場まで良く通る大音声が、中洲全域に響き渡ったのは言うまでも無い。

対岸に戻り、即冒険者ギルドに向かったケーナは、番号札と交換した白地に『ケーナ：ハイエルフ：魔道士』と書いてあるカードを手にしてご満悦だ。　気分は初めてＩＮして、冒険者としてフィールドに一歩踏み出した時の高揚感に近い。　当時は丁度同じ場所に

出現した、その後腐れ縁となった仲間に蹴り飛ばされた記憶しかないが。

依頼書が張ってある掲示板を早速眺めていると、『求む護衛、エルフ女性魔道士：エーリネ』とか『求む新メンバー、エルフ女性魔道士だと尚良し：アービタ』と書かれた紙を見つけてしまい、苦笑する。

「確信犯か二人とも……」

どっと空虚な疲れに包まれたケーナは、依頼書と向き合うのを諦めて大通りへ出る。……と、横合いからいきなり声を掛けられた。

「これこれ其処のお嬢さん」

「はい、……私？」

7話　王都を散策しよう　（前編）（後書き）

なにやらＰＶがどかーんと増える事態に何事が！？
……と思ったら理想郷で提示してくれた方が。　ＰＶが倍に増えるとか、恐ろしい……。
他にもブログで紹介してくれた方、はてなアンテナで紹介してくれた方、ありがとうございます。

8話　王都を散策しよう　（後編）　（前書き）

日に日に評価とＰＶがもの凄いんですが……。本気で自分の文章が理解に苦しみます。

8話　王都を散策しよう　（後編）

呼ばれたのが自分にしろ、その辺に居た誰かにしろ、声を掛けられれば振り向いてしまうのであって。　ケーナの振り向いた先に居たのは、男女の二人組であった。

「今、私を呼びましたか？」
「うむ、呼んだとも。　お嬢さん冒険者じゃろ？」

ケーナの問い掛けに満足そうに頷いたのは、白い無精ひげを生やして、頭髪にも白いものが混じり始めた五十代くらいの全身鎧の騎士だった。　騎士と言っても、着ている鎧は白よりも結構煤けていて年代物っぽく。　腰より提げた剣は、白い鞘もない普通の長剣だ。

一緒に居るのは見た目がケーナくらいの、革鎧にローブとマントを装備し、先端に蒼い球の浮いている杖を持つ銀髪の女性。　男性が呼び掛けた時分からケーナの方をぽーっと見ていて、目が合った瞬間にあわあわと両手を振って赤くなると、慌てて男性の背後に隠れた。

それをはっはっはと、腕組みをして笑うと男性はケーナに近付いてきた。

「ワシはアガイドと言う。　ほれお主も隠れていないで自己紹介でもせんか！」

後ろに隠れていた女性は、俯きながら男性の横に並び小さく頭を下げる。

「あ、あのぅ、ロンティ、です」
「……はあ、ケーナと言います？」

何の主旨で声を掛けられたのかさっぱり読めないケーナだったが、その場の、特にアガイドの雰囲気に流されるように、返事を返した。
病院で快適に過ごす為の法則第一条、『相手が年配の場合、話の主導権を取られたら流されるしかない』である。

「お主、見たところ腕が立ちそうじゃのう？　少々手伝ってくれんか？」
「何を手伝うのかは判りませんが、それって依頼って事ですか？　生憎とさっき冒険者になったばかりなので、都市を案内してくれと言われても困りますけれど……」
「安心せい、ワシ等はこの王都の出身だからそんな事は頼みはせんよ。　手伝って欲しいのは荒仕事じゃ」
「荒仕事？　魔物退治とか、盗賊退治とかー、ですか？」
「うむ、人探しじゃ」

深刻な問題か？　と思ったところへあっさりと帰って来た返答に肩透かしを食らい、軽くよろける。　そんな態度のケーナに手を振ってアガイドは修正を入れた。

「人探しは人探しでも、相手は結構腕が立つでの。　油断は禁物じゃ」
「はあ、犯罪者か凶悪犯って事ですか？　それを捕縛しろと？」
「ふむ、まあそんな感じの認識でいいじゃろ。　頼めんかの？」
「構いませんよ、報酬さえ払っていただければ」

これがつい辺境の村に居た頃のケーナであれば、報酬の話など持ち出さなかっただろうが。　エーリネ先生とアービタ軍曹のご教授

を受けた今では、『貰える物は銅貨一枚でも増やして要求しろ』との教育が脳内リピートで流れていた。

「報酬なら任せておくとええ、無事に任務が成功すればお主が見た事も無いような金額を、ポンと払ってやるわい」

「よし、言質は取った。　その依頼受けましょう！」

互いにサムズアップを交わし、ガッチリと硬い握手を交わす老騎士とケーナ。　ロンティはひとり置いてけぼりになっていた。

「……と、言いましても広いですよ、この街……」

「一応、標的は比較的にも町のこちら側へ出没する事が多いからの。手分けすればどうにかなるじゃろう」

「はあ、三方に別れるんですか？」

周囲を見渡して人の多さにうんざりするが、アガイドは自分も含めた三人を指差して告げる。

「いや、ワシは一人で探すからの。　ロンティは標的の顔を知っているから、ケーナ殿と捜して貰おうかの？」

「け、ケーナさんと、わ、私がデスカァ？」

「ケーナ殿は探す相手の顔を知らんじゃろう？　こやつの事は頼んだぞ」

「はい、いいですよ。　依頼主の意向には従いましょう」

片手をシュタッと上げて人込みに消えていくアガイドを見送ったケーナはロンティに向き直った。　途端に「ひゃっ！」とか悲鳴を上げて、一歩離れる彼女に、自分はそんなに怖い顔をしていたのか、と心配になるケーナ。

「んー。　エルフは、嫌い？」
「あ、あああ、ゴ、ゴメンナサイっ。　べ、別にケーナさんが怖いとかじゃないんでふ」

言葉途中に噛んでしかめっ面をしたロンティにくすりと笑うと、病院の子供達との交流と似たような感じで、手を差し出した。　意外なものでも見るように、差し出された手とケーナの顔を交互に見つめる。

「冒険者初日、ハイエルフ族のケーナです。　どうぞよろしく」

ポンと真っ赤な頬を上気させて、おずおずとその手に自分の手を重ねるロンティ。

「冒険者暦1年、ロンティ・アルバレストです。　こ、こちらこそよろしくお願いします……」

二人はしばし見つめ合って笑い合うと、早急に赤い顔のロンティが俯いた。　……が、何かに気付きハッと顔を上げた。

「って！　ケーナさんハイエルフなんですかっ！　エルフの王族が何でこんな所にぃ！？」
「あら、何処の世界にも例外は居るものよ？　それよりも行きましょ。　日が暮れちゃうわ」

午前中丸々観光に使っていたために、今日と言う日は残り半日しかない。　夕方になったら人の数も増えるので、人探しには向いてない。　何故か初々しい恋人のように手を繋いだ二人は、アガイドと逆の方向に歩みを進めた。

「ところで、どういった人物を探せばいいのかな？」
「あ、す、すみません。　ええと、私より少し年下の赤毛の少年です」
「それはまた随分と曖昧な……」

少し考えて大通りから一本隔てた裏通りへ。　民家や商家の裏口側、入り組んだ細い道が続く辺りへ、子供の遊び場なら桂菜が生きていた街のように公園などが主流なのだが、そんな物の無さそうなこの都市では、こういった裏通りの方かと思ったからだ。

しばらくロンティと共に子供の隠れられそうな所を探し、かなりの速度で裏通りを駆け抜ける。

「隅から隅まで歩き回ったわけじゃないから、どこがどうなっているのやら……」
「え？　無目的で裏通りまで入ったんですか？」
「一応子供には”秘密基地”なるモノを持つのがセオリーなのよ」
「せ、せおりい？　……ですか？」

取得技能から何か探し物に使えそうなモノをピックアップしていると、大通りの方から悲鳴が上がったのが聞こえた。　慌てて方向転換をして二人で裏路地から出る。

そこには野次馬達が頭上を見上げて、口々に「危ないぞ」やら「

きゃーっ！」とこの世の終わりを見た感じな状況で叫んだり、悲鳴を上げたりしている。　理由は頭上にあった。　家と家の間、大通りを挟んで渡してあるロープ、その中央に子猫。　それを助けようと、少年が芋虫みたいにズリズリと綱を渡っている最中であったからだ。

「なんちゅーかこう、必死の救出劇を見守る群集って何処も変わらないんだなあ……」

呟いて、その群集の一部となって上を見上げる二人。　周囲の人々は時折小さな悲鳴を上げつつ、赤毛の少年の健闘を静かに、彼の集中力を乱さないように見守っていた。

（ん？　赤毛の少年？）

嫌な予感がしたケーナは隣のロンティを制止しようとしたが、時既に遅く、

「あ、あああああっ！？」

唐突に絞り出された素っ頓狂な悲鳴は、場の空気を霧散させるには充分で。

ビックリした子猫は、辛うじて引っ掛けていた爪を外してしまい空中に投げ出された。　それを追って少年も空へダイブ、空中で子猫をキャッチ。　群集から悲惨な未来を予想しての悲鳴が上がった。

事前に最悪を想定し、準備だけはしていたケーナだけは騒がす慌てず。　予め準備してあった魔法を少年に向って解き放つ。

【魔法技能（マジックスキル）：ｌｏａｄ：浮遊】
「ええっ！？」

隣からの驚愕の叫び声は無視して。　子猫を抱えた少年はふわりふわりと羽毛の様に軽やかに、すんなりと地に足を付けた。　途端に周囲の野次馬からはワッと拍手喝采が少年とケーナへ浴びせられる。　くるくる回りながら「どーもどーも」と頭を下げるケーナ。
子猫を抱いた少年には心配そうな子供達が駆け寄り、周りを取り囲んだ。

「大丈夫かよ、大将？」
「おおよ、ぴんぴんしてらぁ」

心配を掛けた仲間達に応える赤毛の少年は、礼を言おうとしてケーナの隣に居たロンティを発見し、バツの悪い顔で一歩下がる。

「ろ、ロンティ……」
「やっと見つけましたよ。　でん……、じゃなくて…。　ええと、坊ちゃま」

それだけを聞いたケーナは全てを理解し、ニヤケた表情で頷いた。
成る程、こういうイベントにぶち当たったかー、てな感じである。

（クエストを四千個を経過してもこんなのはなかったなー）

内心納得しているケーナを余所に、赤毛の少年は腕に抱えた子猫をロンティに押し付け、子供達に「いくぞ！」と声を掛けて走り出した。

「あっ！　ちょっと！　こ、これってどうすれば？」

「ううむ、素早い。　逃げちゃったよ、あの子達」
「ちょっ、ケーナさん！　感心してないで捕まえて下さい！」
「はいはーい、とりあえず四肢が繋がってりゃあいいよね」
「ええっ！？」

ロンティが何か反論するより先に、野次馬の壁を【能動技能（アクティブスキル）：跳躍】でぴょーんと飛び越え、少年グループの後を追う。　顔は今の内で覚えたし、いざとなったら魔法【引き寄せ】でとっ捕まえればいいやと思いながら。

一方、追われる側の少年達は、裏路地の迷路的な入り組んだ所で一休みしていて、ケーナの接近に気付いた。　彼女は、彼等みたいに細かい道に精通している訳ではないので、障害物の多い地面を走るのが面倒になり、……壁を歩いていた。

「「「「なんだそりゃあああああっ！？」」」」

一斉に突っ込む少年達。
綺麗サッパリ無視したケーナは、指を鳴らしながら歩み寄りつつ黒い笑みを浮かべた。　横向きなのでちょいと様にはならない、寧ろ不気味感漂う。

「さあ、雇い主の依頼でね。　手足の十本や二十本は覚悟してね？」
「「「「人間に手足そんなにねーし！」」」」

再び逃亡の道を選ぶ少年達の後を追いながら、実際のところケーナは困っていた。

（どうやって捕まえよう？）

無駄に数ある技能だが、相手を無傷で捕獲出来る手段が少ないからだ。　魔法【麻痺の網】は相手を麻痺させるが、ダメージも入る。

今のケーナでは最小威力で撃ったとしても対象は子供だ、一瞬で炭化するだろう。　大型のクモの召喚獣を呼び出して、クモ網に捕らえるという方法もある。　……が、そのクモ自体が四ｍもある為、逆にコッチが討伐対称になってしまう可能性がある。　仕方がないので、少年達が疲れ果てて動けなくなるまで鬼ごっこに付き合おうと考えた。　まずは説得から入ろう。

「コラー！　逃げられませんよデン助ー、神妙にお縄につきなさーい！」

「誰がデンスケだ、誰がー！」

「さっきロンティにデン坊ちゃまって呼ばれてたでしょーがー！」

「ロンティ許すまじぃー！」

壁を歩くわ、障害物を『飛び』越えるわで、路地裏を知り尽くした少年達を追い詰める軽装の女性冒険者に、赤毛の少年率いるグループは遂に切り札を発動する事にした。　今まで幾多の兵士を振り切ってきた最終兵器をだ。

方向転換で住宅地区の更に奥、再開発区域と呼ばれる人が住まなくなった無人の民家が建ち並ぶ界隈へ。　通称ゴミ溜めと呼ばれる所に移動する。。　増築に増築を重ねた家屋の細い通り、左右に木箱やら廃材などが積み重なっている山を、女性冒険者が近付いて来たところで一気に倒す。

ゴワッシャアアァアアァ！！！

轟音が響き、埃が舞い、路地はあっさり埋まってしまう。

「よっしゃー！」
「やったー！」
「みたかー！」

……と歓声を上げる仲間達。　額の汗を拭いながら仲間達を労おうとした赤毛の少年は……、

「危ないから山に近付くんじゃないよ～」

廃材の山の向こうから聞こえて来るのんびりとした声に驚いて振り返った。

〝【戦闘技能（ウェポンスキル）：跳ね上げる兎（ラビッドストリーム）】〟――――

――――　バッカアアァアアァンン！！

今その場に山と積まれた木箱や廃材が、一瞬で木っ端微塵となって上空へと打ち上げられた。

もうもうと煙る埃のカーテンの向こう、仄かに青白く光る剣を下から上へ振り抜いた姿勢のまま、不適に笑う女性冒険者が姿を現す。

遅れてバラバラと辺りに降り注ぐ残骸の欠片。

「ちょっちょっと待て、今その剣どっから出したーっ！？」
「ば、化けもんだ……」
「ちょっとー、人を見てモノを言いなさいよー。　何処が化けもんなのよー」

「逃げろっ！」
「うわ、しぶとーい……」

てっきり今ので戦意喪失したのかと思っていたケーナは、完全に当てが外れてがっかりだ。　ＭＰを注ぎ込めば威力を増す効果を持つルーンブレードを仕舞い込み、途中で彼等を探す為に呼び出した”風精霊”に先行させて後を追わせる。

再び追う者と追われる者が街中を駆け抜ける。　大河に面した街の上流側に出た少年達は、増築されてジャングルジムの様になった桟橋を伝い、その下にある下水溝に潜り込んだ。　元々は街を増築する前にあった支流の一部が合流していた場所で、今は川に生活廃水を垂れ流すだけの水路になっている。

其処に隠してあった小船に飛び乗った少年達は、オールを手にもの凄い勢いで漕ぎ始めた。　王都の祭りに小船漕ぎ競争があるが、毎年彼等は大人に混じって良い勝負を見せる。　そこで培った才能を遺憾なく発揮する時、……とばかりに水上を高速で岸から遠ざかっていく。

中洲を越えた所で、「どーだ、ざまあみろ！」と宣言する為に振り返った彼等の表情が凍りついた。　全く何の問題も無く水上を歩いて彼等に迫るケーナの姿を視認したからである。　これには桟橋側から「何の騒ぎだ？」などと野次馬に出て来た者達も、目を丸くしてどよめいていた。

「私から逃げられると思うなー。　さっさとお縄に付きなさーい！」

何処からともなく取り出した黄色のメガホンを片手に降伏勧告を

付きつける。　少年達はカクカクした動きで首を前に向けると、猛然とオールを動かし始めた。　もうなりふり構わずといった感じである。　しょーがないかーと頬を掻いたケーナは、小走りに付かず離れずの距離を取って小船の後を追い始めた。

結局、中州を四周した所で精も根も尽き果てて、死人の様にグッタリした少年グループから赤毛の少年を捕獲した。

空がオレンジ色になる頃に、ロンティ達へ襟首を摘み上げ、ついでに縄でぐるぐる巻きにした少年を引き渡す。　先程の騒動の一部始終を二人とも目撃していた様で、ロンティだけはあんぐりと口を開けたままだった。　「はっはっはー凄いのうお前さん」と笑うアガイドは特に何も言わなかったが。

「ほれ、報酬じゃ」

小袋にみっちり入った銅貨を渡されたケーナは首を傾げた。　確かに今までで見た事も無い銅貨の数だが。

「なんですか、これ？」
「うむ、さっきの水上捕り物レースで野次馬相手に賭けをしてのう。儲けは５：５でよろしいじゃろ？」
「うわ、抜け目ないわ、このお爺さん……」

縄でグルグル巻きに縛られた赤毛の少年もぐったりして、ぷるぷると小刻みに震えていた。

「くっそー、何なんだよお前ー。　この俺を誰だか知ってこんな事してんのかよー」
「だいたい判るけど、デン助でいいや。　そっちの事情には巻き込まれたくないしー」
「ほう、お前さんこの坊主の事情が判るのかの？」
「さっきロンティが『でんナントカ』って言いかけてたんだもん。　窮屈なお城の暮しに逃げ出してきた王子様、とかでしょ？　定番過ぎて判りやすいわ。　だから唯の悪餓鬼捕獲と考えて耳と目は塞いでおきますよっと」
「こらーっ、ロンティ！　お前のせいでデンスケなんて呼ばれる羽目になったじゃないかーっ！」
「ううう、すみません」

貰った小袋ごとアイテムボックスに仕舞い込み、「依頼は完遂でいいよね？」と聞く。
何故か満足そうな笑みを浮かべたアガイドは、コートについていそうな大き目の丸い金属のボタンを渡してきた。

「今度はなんですか、これ？」
「この王都で困った事があったら、それを示すと良いじゃろう」
「いや、それはそれで騒動の種の様な気がしますけど？」
「ほっほっほ、ではな。　依頼御苦労じゃったな、嬢ちゃん」
「すみませんケーナさん、今日はありがとうございました」

老人とは思えない豪胆な動作で芋虫状態の少年を肩に担ぐと、ふぉふぉふぉっとエコーを響かせて端の方に泊めてあった小型の立派な帆船に乗り込む。　一度深々と礼をしたロンティもその後に続く。

「どこの宇宙忍者よ、あの御爺さんは……」

悠々と大河を渡り始める帆船を眺めていたケーナは踵を返して宿に帰る事にする。　まだこの時までは平和だったとケーナは後に知る。

ドンッ！

宿屋のドアを潜った途端、ケーナを迎えたのは歓声と大ジョッキになみなみと注がれた酒であった。　自然と顔が引きつるのはもはや条件反射だ。

「おかえり、遅かったねえっ！」

茶色い猫耳がピンと立った女将さんが嬉しそうに大ジョッキをケーナに渡した。　つい受け取ってしまったケーナに一気コールが掛かる。　イマイチ事情が飲み込めないケーナは女将さんを振り返った。

「アンタ川の方で面白い事やってたって話じゃないかい。　皆に聞いたけれど良く分からなくてねえ。　それなら本人に聞けば全部判るだろうってみんなが言うもんだからさあ。　あ、その酒はみんなのオゴリだよ」

……つまり、皆の酒の肴にするために、今日の捕り物を全部話せと？　一瞬で理解したケーナの顔色が真っ青になる。　とくにこのジョッキが原因で。　そうこうしていても終わらないコール声援に、投げやりになったケーナは諦めてジョッキに口を付けた。

――ちなみにその後の記憶は無い。

8話　王都を散策しよう　（後編）（後書き）

ちょっと勢いを失ったかもしれません。
これで呆れられないといいなあ……。

幕間　子供達の会合（前書き）

主人公出ません。

幕間　子供達の会合

――――王立学院

これはケーナが丁度カータツと出会っていた頃。

練金科教授室に今、一人の女生徒が呼び出されていた。　理由は授業の一環であるポーションを遅れて提出した彼女に問題はあったが、それよりも重要なのは提出物にあった。　練金科の教授、ボサボサ頭にヨレヨレの教員用ローブと白衣。　前髪で顔の半分が隠れて無精ひげも目立つ、ロプス・ハーヴェイ教授。　やる気のない肘を付いた姿勢で、脇に立つ女生徒を見上げた。

「おう、お前が出した事になっているこのポーションだがな……。本当にお前が作ったのか？」

「は、はあ……」

「本当か？　これをお前が作ったとなれば、俺はお前を王宮に推薦してやれるんだが……」

「え！　本当ですか！？」

途端に目の前に広がる出世コースに喜色満面になる女生徒。　しかしロプスは昼行灯な態度を崩さずに、机にあったポーションをつまみ上げ、先を続けた。

「そこでお前はコイツを作らされるだろうぜ。　コイツのレシピ、お前はちゃんと知っているか？」

「あ、は、はい。　カジュの根に……」

「はい、アウト。　コレはそんなチャチな材料で作られた代物じゃねえ。　既に誰も知り得ない製法で作られた、古代の遺物（アーティファクト）級だ」

前髪の間から覗く鋭い眼光に女生徒は真っ青になって後ずさった。

「……で、コイツを作ったのは誰だ？」

再び最初に戻り、姿勢はダルそうだが漲（みなぎ）る気迫は別物なロプス教授の詰問に、とうとう女生徒は半泣きになって頭を下げた。

「ご、ご免なさい！　材料がどうしても揃わなくて、それで、ぼ、冒険者ギルドに依頼して、作ってもらいました！」

「そうか、分かった。　お前には後で別に追加の課題を出す。　行っていいぞ」

手でシッシッと追い出す仕草に、再び頭を下げた女生徒は逃げるように教員室を退出した。

赤い液体瓶を前にしばらく考えていたロプスは、扉のノック音に顔を上げた。

「はぁ～い、お邪魔するわよ～？」

入って来たのは典型的な金髪碧眼のエルフ。　腰まで届く髪は三つ編みにして、赤い足元まで届くローブに身を包んでいた。　王立学院長マイマイ・ハーヴェイである。

「学院長（オマエ）か……、練金科まで足を運ぶなんて珍しいな」
「今そこで泣きながら走っていく女子とすれ違いましたもので。昼行灯の上に生徒虐待なんて査定に響くわよ？」

悪戯を問い詰める楽しそうな顔を近付ける学院長をスルーして、その鼻先に赤い液体瓶を押し付ける。

「つれないわねぇ。　……ナニヨコレ？」
「課題で提出してきたポーションだ」
「ふーん、誰が作ったの？　貴方にも作れるような代物じゃなさそうじゃない」

チャポチャポ振りながら、内容物を一瞬で見抜く。

「流石に解るか……、冒険者、だそうだ」
「なあんだ～冒けｎ……、ってはあぁ！？」

言われた意味を脳内でシミュレート、してその非常識さに絶句した。

その様子を見て大袈裟な溜息を吐いたロプスは、元宮廷魔導師マイマイ学院長の手から赤い液体瓶を取り上げると、机に置く。

「こんな物を世の中に出回されちゃあ市場が大混乱になっちまう。とりあえず明日、ギルドまで行って作った奴に釘を差しておく」
「ものぐさな貴方が動くなんて相当よね。　どうせならその作った人、連れて来ちゃってよ」

その発言に呆れた溜息を吐くロプス。

「なんだ教師にでも迎えるのか？」
「先ずは面接が先になるわ、それから結果待ちかしらね」
手をひらひらさせながら部屋を出て行こうとして、足を止め振り返る。
「あ、悪いけど今日は兄さん達と食事会があるから。夕食は要らないって言っといてくれる？」
「判った。しかしよくもまあ、大司祭の都合が空いたもんだな……」
すすっとロプスに寄り添い、その頬に触れるだけのキスをしたマイマイは、にこやかに手を振って部屋を出て行った。
「ウチの愚弟から緊急報告があるんだそうよ～」

――貴族街高級料理店〝黒兎の白尾〟

「……てな訳だ」
「な、な、な、なんですってえぇぇ～～」
「成る程、母上殿が……」

昼間不意にケーナと遭遇し、その一部始終を兄姉へ報告したカータツは、食事の手を止めて鬼の形相で詰め寄ってきた姉。マイマイに掴み掛かられて、ガックンガックン揺さぶられる羽目になっていた。

「ど・う・し・て・そ・の・場・に・私・を・呼・ば・な・い・の・よぉ～！」
「ふむ、教会を挙げて歓待をすべきなのだろうか？」

三人の長兄、長身の麗人、一々動作に『しゃらーん』とか『キラーン』とか音が鳴って光り、薔薇の舞うエフェクトを背負う。レモン色の金髪に翠に輝く瞳のスカルゴは細い指先を口元に、そして思案した。

ちなみに音やエフェクトは空耳や錯覚ではない。これこそが無駄に数ある技能（スキル）の内、掲示板で散々叩かれて運営側の正気を疑われたモノ第一位、【特殊技能（エクストラスキル）：薔薇（オスカル）は美しく散る】である。効果は自分の好きな時に発動出来る耽美効果全般だ。だからといって覚えさせる母親（ケーナ）にも問題があるのだが……。

カータツを揺さぶっていた手を止めたマイマイは、長兄の発言に肩をすくめた。

「止めた方がいいんじゃないの？　そもそも御母様が人にうんざりして森の奥に引っ込んだのは、何の為よって感じね～」

妹の言葉にそうだったかと頷き、『さらり』と髪をかき上げる。
弟妹二人はスルースキルを得ているので、今更突っ込まない。

「それにしても御母様が冒険者かぁ……。　ってあれ？　まさかあのポーションって？」
「んん？　お袋は冒険者今日初日だとか言ってたぞ？」
「ちょーっとね。　製法の絶えたポーションが持ち込まれてねぇ～」
「ふむ、母上殿も来たなら来たと知らせて下されば宜しいものを」
「門前払い食らったと言ってたぞ。　教会には俺ントコより先に行ったらしいがな」

カータツの説明に額をコツンと小突き、細い切れ長の流し目を無駄に『キラリーン』と光らせ、考え込んだスカルゴ。

「母上殿の訪問を知らせもせずに切り捨てるとは、私の敬愛する母上殿に対する冒涜よな」

ゆらりと黒い霧を背後に『たぎらせて』黒い笑みを浮かべた彼の瞳は赤く『ギラーン』と不気味に輝く。　それをマイマイはぺしっと叩いて中断させた。

「兄さんも物騒な事を早々口にしない！　御母様に知られたらそれこそ大目玉よ。　あの優しい御母様がそんな事、推奨するはずないじゃない」

「それもそうか」と呟いたスカルゴは黒い霧を霧散させ『ファサ』と長い髪を手櫛で梳く、そして『シャラン』と流した。

「それでは母上殿がこの王都に腰を落ち着けるのならば、我々の立ち位置を如何するのかが問題であろうな？」
「いや兄貴、今の立場に何か不満でもあんのかよ？」
「決まっていよう、我々にとって主上とは母上殿に他なるまい。全ての営みを母上殿主流にすべきであろう。　いやそうに違いない！」

長兄の背後で荒波が『どどーん』と打ちつけられたのを見て、弟妹は溜息を付いた。　どうやら２００年経っていても母親至上主義は直っていなかったらしい。　むしろ悪化している。

こうなってしまった長兄を止める手段は唯一つ。

「御母様に叱って貰わないとダメね」
「こんなのが大司祭で、この国は大丈夫なのかよ……」

さもありなん。

幕間　子供達の会合（後書き）

連続投稿。　実は前編と後編のあいだにこれを入れて「ちょっ、おま、何考えてやがる！」とか言われたかった。

9話　学院に行ってみよう（前書き）

主人公二日酔いこじつけに悩みました。　今回は説明文ばっかりです。
ちょっと化けの皮が剥がれたかもしれないナア……。

9話　学院に行ってみよう

くわんくわんと鳴り響く頭を押さえ込んで、もそもそと朝食を取っていたら同宿の客に二日酔いの薬などを貰ってしまったケーナ。

いくらスキルマスターなケーナであっても酔う時は酔っ払う。

【常時技能(パッシブスキル)：毒耐性】では完全に防ぐにはいかないからだ。これはリアデイルゲーム内で、過半数のプレイヤーから猛反発された結果でもある。

リアデイルではプレイヤーキラーが出来るのは戦争期間中だけで、微々たるものであるが経験値も取れるとあっては低レベル者も必死にもなる。その結果、徒党を組んで限界突破者を狙うのだ。初期に【異常状態無効】であったスキルは【異常状態耐性】になり、最終的には【毒耐性】【麻痺耐性】【沈黙耐性】など各異常状態耐性に最終分類(バージョンアップ)された。

上位者達からは「何もソコまでしなくても……」と言う意見も出たが、大部分を占める低レベルプレイヤーからは歓迎された。ケーナみたいな魔法重視型になると、物量で戦略戦に持ち込まれて何度か敗北しているし。彼女は「完全無欠なんてないなー」などの考えでいたが、一時期は限界突破者やスキルマスター、高レベル者が一国に集中して所属し、国無双になった時には公式サイトが随分荒れたものだ。

そんな経緯と、おそらくは現在の状況がケーナに酒が効く理由だろう。仮想媒体(アバター)の時は確率とプログラムの編纂で毒が通用するかしないかだったが、生身になったケーナには『お酒は二十歳から』とか『未成年』とか精神的な思い込みが色々と【毒耐性】の効果を

半減していると思われる。

他にも、マレール曰く「二日酔いも酒を楽しむ上で通る道の一つ」とか言われて【毒浄化】を禁じられてしまった為、素直に二日酔いを享受するケーナだった。　何故素直に言われた事に従うのかというと、マレールがケーナの中でこの世界でのおっかさん的ポジションにいるからである。

（ううむ、私此処に何しに来たんだっけ？　そもそも塔を探すと言ってもなー、守護者の塔と言って通じるのかな？）

早朝から市場へ行って、キリナ草とコルトバードの心臓を買い、宿屋で朝食を食べた後にギルドへ向かう。　途中、道で出会う幾人かに「水面を歩いてた嬢ちゃん」とか言われるのは勘弁願いたいところではある。

（わたしゃあアメンボかっちゅーの）

一概に否定出来ない魔法なので仕方が無いだろう、人口が多ければそれだけ噂の伝達速度が早い。　伝言ゲーム化して間違った情報となるのも多いが……。

（むしろ街の中で情報を探すよりは外へでてる人や、エーリネさん達みたいな商隊の方が辺境の話に詳しいんじゃないのかなぁ？　先に馬車溜まりまで行って、聞いてみよう）

ギルド直前で方向転換し、馬車停泊所に向かう。　まだ出発していなかった為、エーリネの商隊はそこにいた。　顔見知りとなった商隊の人々と挨拶を交わしていると、エーリネが直ぐに出て来て開口一番。

「聞きましたよケーナ殿、大河を割ったそうですね？」
「誰だ此処まで噂流した奴！？」
「冗談ですよ」

遊ばれてるのが分かってガックリと膝を付く。　滂沱の涙を流してにじり寄った。

「ええぇりねぇさあぁぁん～」
「分かりました分かりましたから、機嫌を直してください」
「ぐすっ……」

恩人にそんな力任せな人物だと思われているのかと考えたら泣きたくなる。　涙を拭いて改めて向き合う。

「それでどうしました？　護衛に雇われに来たって感じではなさそうですが……」

スキルマスターの所はぼかし、辺境の村（そう言えばあの村の名称を聞いてなかった……）近辺にある〝銀の塔〟を例に出し、似たような建造物の情報は無いかと聞いてみる。

「成る程、ケーナ殿の旅の目的はそれを探す事なのですね？」
「まあ、最終目的はそれでしょうかね。　今は他に〝これだ〟と言うのもありませんから」
「そうですね、北のヘルシュペル国には湖に浮かぶ誰も入る事の出来ない美しい城があるそうですが……、それ以外は特にないですね」
「北の国ですかー」

北にあった国と言うと、かつて白の国の北東に紫の国ヘルベール、

西に黒の国ライプラスがあって、毎月三国入り混じっての大激戦地であった。　スキルマスター同士の大魔法の撃ち合いや戦闘技能（ウェポンスキル）での潰し合いで、むしろ周囲が被害甚大に終わることが多かったのを思い出す。　ゲーム世界の大地にまでは影響が出なかったが、今同じ事になったらこの王都等は一瞬で廃墟を通り越してクレーターになるだろう。　流石に限界突破者二十四人やスキルマスター十三人に其処まで遣りそうな人格破綻者は居なかったと思うが……。

それを考えると自分の力の使いどころが非常に難しいのがよく分かる。　何も考えずに力を振るえば、人など呆気なく死んでしまうからだ。

「ケーナ殿？」
「あ、はい、……と、すみません」
「昔のことですか？　差し支えなければどういった世界だったのか聞きたいところですね」
「あー、まあ戦争ばっかりの殺伐とした世界でしたね」

兎に角その辺りの情報を見つけたら知らせてくれるとの約束を取り付けて、エーリネと別れた。　今回はサービスだが次に情報を得たら料金は頂くと言われた。　冒頭から料金の話を持ち出されなかっただけ、彼には譲歩されているのだろう。

当初の目的地である冒険者ギルドへ。　入って依頼書の壁に向かおうとしたらカウンターから声を掛けられた。

「あ、ケーナさん。　こちらへ来て頂けますか？」
「はい？」

カウンターに向かうと、賞状を小さくした型で金の縁取りの紙を一枚渡された。　現地語であった為に、解読するのも面倒になり素直に聞く。

「なんですか、これ？」

「名指しで依頼と言いますか、学院から召喚状です。　先日のポーションの件でお話があるそうですよ」

「学院って、中州に建っているあの学院ですか？」

「はい、あの王立学院ですよ。　期日は無いようですけれど、なるべく暇な時にいらして下さい、だそうです」

なんにせよ学院であれば、マイマイに会うチャンスもあるから問題ない。　学舎は小学校しか行った事の無い桂菜は、違う世界の違う学校がちょっと楽しみだった。

中州に渡る時には船着場にいた人々に「今日は歩いて渡らないのか？」と不思議そうに聞かれたが、努めて聞かなかった振りをして乗り合いの帆船で中州へ渡った。　なんか既に船着場の有名人になってしまったようで、ちょっとショックである。

学院の門番に召喚状を見せると、水晶球に何事か話しかけて門を開けてくれた。　誰か案内人が来るそうなので、暫く待っていて欲しいと言われ、大人しく待つ事数分。　校舎の方から見覚えの有る人物がパタパタ走ってきた。

「お、お待たせしました。　召喚状で呼ばれて……、ってケーナさん！？」

「や、ロンティ。　昨日ぶりだねー。　ここの生徒さんだったんだ？」

昨日とは違って、杖も無く緑のローブに身を包んだロンティは息を整え、頭を下げた。

「昨日はありがとうございました。　騎士団の人達がびっくりしてましたよ、早いって」

「しょーがないデン助だねえ。　次も街中で見つけたら問答無用で捕獲していいのかな？」

「あ、はい。　お願いします。　それよりも召喚状って、何やったんですか？」

「んー、それを聞きに来たんだけど。　とりあえず案内お願いね」

「はい、先ずは学院長室まで連れて来てと言われましたので、こちらです」

ロンティの先導で校舎に入る。　途中幾つか学院について説明をしてくれた。　先ず彼女は実践魔道科に所属していて、授業の一環として冒険者ギルドに登録している事。　他にも回復魔法や浄化魔法を学ぶ神聖科や薬品を調合する錬金科などがある事。　魔道の素質があれば誰でも入学できること（お金は最低限、国が補償してくれるらしい）。

「調合？　合成じゃなくて？」

「はい？　薬を作る場合は、磨り潰したりして混ぜ合わせるのが主流ですよ。　もしかしてハイエルフ族は違うんですか？」

「……ああ、なるほど、プレイヤー人だけの技術はＮＰＣから後世に伝わらなかったのね」

「……はあ？」

この場合実際の現場を見ないと確信的な事は判らないが、かつてのプレイヤー達で使用していたスキルは今の世では失われていると

思った方がいいと推測した。　だとすると昨日、ロンティの前で【浮遊】を使った時にびっくりしていたのは……。

「ケーナさん、ここが学院長室ですよ」

考え込んでいる内に、他とは少し違う立派な扉の前に案内されていた。　ノックをすると「どうぞ」と女性の声がしてから、ロンティがドアを開けて中に入っていく。　後に続いたケーナは、大きなガラス窓を背にした重厚な机のこちら側に腰掛けた、赤いローブのエルフ女性。　それがが誰かと判別するより先に、いきなり眼前に迫った柔らかい物に”ひしぃ”っと抱きすくめられた。

「……あーと、マイマイ……ね……」

「あーん、お久し振りぃ～、御母様あぁ～！」

「えええええええええええええええっ！？！」

甘えた声が頭上からするのと、隣からロンティの驚愕が伝わってくる。

（背は高いし、柔らかいし腰細っ、何で私はこんな小さいんだろう？）

キャラ作成の時の弊害はいかんともしがたいが、当たり前である。手の届く所にあった頬をつねって引き剥がす。

「ううぅっ、御母様酷いです～。　二百年振りの再会なのにぃ～」

「学院長が今更人前でなにやってんのよ……。　ほら、ロンティ大丈夫？」

「……はっ」

眼の焦点が何処かに行ってしまったロンティの前で手を振り、彼女を正気に戻す。　幸い魂ごと飛んで行って無かったようで、直ぐに我に帰った。　即詰め寄って来たが。

「あああ、あの、あの、ケーナさんが学院長の母親なんですかっ！？」

「うん、そう。　これでも二百年以上年を重ねていますから」（大嘘）

「わーい、御母様～」

背後からケーナ抱きついて、大きな子供みたいな様相を晒す学院長（犬耳尻尾付き）に唖然として言葉も無いロンティ。　流石にどうしていいのか分からずにそのままにさせていたケーナは、手の中に雷を生み出した。　慌てて距離を取ったマイマイは姿勢を正すと、咳をして体裁を取り繕ってからロンティに声を掛ける。

「御免なさいね、アルバレストさん。　もう授業に戻って良いわよ」

「あ、はあ……。　はい、し、失礼、します……」

いささか現実と幻想の間に迷い込んだ感じがしないでもない雰囲気のロンティが、一礼をして学院長室を退出して行った。　再び母親の背に抱きつこうとしたマイマイは、母親が暗黒のオーラ（【威圧】＆【眼光】）を纏っているのに気がついて凍りつく。

「ねえ、マイマイ？」

「は、はいっ！　な、何でしょう、お、御母様……」

「私は何の為に此処に呼・ば・れ・た・の・か・し・ら？　もしかして貴女に抱きつかれる為？」

「い、いいえっ。　キチンとしたお話があります！」

「甘えるなとは言わないけれど、そういった事はプライベートでや

りなさい。　責任ある立場なんでしょう？」
「うう、はい、わかりましたー」

突き放すのに気の毒になるほどしょんぼりしたマイマイは、自分の机に戻り、引き出しから赤い液体瓶を取り出した。　それを持ったまま「着いてきて下さい」と言うと、学院長室から出て移動して行く。　流石に先程より暗く沈んだ様子に可哀相になったケーナは、強く言い過ぎたかと反省した。

「マイマイ？」
「は、はい。　何でしょう御母様……」
「貴女は他の守護者の塔を知らないかな？」
「守護者の塔と言うのは、御母様の所有する銀の塔みたいなのですか？」
「そうそう、それそれ。　他に同じ様なものが世界に１２本あるの」

少し思案したマイマイは首を振ると「聞いた事が無い」と答えた。

「そう、分かったわ。　ありがとう」

プレイヤーが沢山存在していた時代を知っているマイマイですら知らないと。　当時サブキャラは倉庫として居るだけでなく、ある程度の行動パターンを入れておくとアヒルの雛みたいに後を着いて来て、多少の戦闘経験を積ませることが出来た。　コンシューマーゲームのＲＰＧの仲間の様に使え、レベルアップをさせる事が出来、三人とも三百ＬＶにはしておいた記憶がある。　これは技能や魔法はＬＶが低いと使えない物があったからで、バラバラにしておくよりは並べた方が綺麗かもと思ったから。

当時レベルアップさせる途中で確か誰かの塔に寄り、召喚魔法で

モンスターを呼んで貰ってそれを倒して経験値にしていた記憶がある。　しかし、それをマイマイは覚えてないというのは、どういうことなのかと考え込む。　これも情報が無く確証も無いので脳内から削除。

後はまあ、スカルゴにも確認する必要があるかということだ。

連れてこられたのは何やら授業中な教室だった。　娘は全く躊躇する様子もなく扉を開け、「連れて来たわよ～」と中へ入って行く。

中は幅広い机が幾つか並び、ハーブよりは強い刺激臭が漂い、二十人程度の生徒が材料をすり潰したり混ぜ合わせたりしていた。

いきなり入って来た二人にはチラリと目線を向けるくらいで、作業からは目を離さない。

娘（マイマイ）が声を掛けた教卓の随分とヨレヨレな格好をした男性教師は、生徒に「作業を続けておけ」と言い放つと、二人を伴って廊下へ。

「おいおい、まさか来たのがこんな嬢ちゃんだとは、マジか？」

「つーか、なんで誰も彼も私を見るなり嬢ちゃんとしか言わないのかと……」

ボサボサ頭に不精髭の浮浪者みたいな男に「こんな嬢ちゃん」と言われ、ちょっとカチンと来たケーナを表情から察したのだろう、マイマイがどーどー、と諫める。

「ちょっとロプス、こんなの言わないでよね。　私の御母様なのよ」

「な……に？」

唐突に告げられた衝撃の事実に言葉を失うロプス。

「で、こちらロプス・ハーヴェイ。　練金科の教授で私の旦那なの」

「……は？」

なんとなく特殊効果で氷原を表したくなったが、思いとどまったケーナ。　自分の発言でくねくねしながら「きゃ、言っちゃった」などと照れて、ハートと音符を振り撒いているマイマイ。　母親と夫は顔を見合わせて盛大な溜息を吐く。

「ゴメンナサイ、私の教育が行き届いてなくて。　あんなので苦労しているでしょう？」

「いや……、あの脳天気さに救われた事もあるから、一概にはどうとも言えん」

再び顔を見合わせて苦笑いを同時に浮かべる。

「貴方、良い人ね。　末永くあの娘を頼むわ、ロプスさん」

「嬢ちゃんではなかったな……。ケーナ殿でいいか？　流石に義母上とは気恥ずかしくてとても呼べん」

「ちょっ、何を私を差し置いてがっちり握手交わしてるの！？　何二人して生暖かい目でこっち見るのーっ！？」

自分のお陰で夫と母が仲良くなったとは知らず、歯軋りして悔しがるマイマイだった。

「で、これなんだが……」

よよよと泣き崩れ、廊下に滂沱の涙川を作る学院長をスルーし、二人は本題に入った。　ロプスが赤い液体瓶をケーナに差し出す。

「ポーションくれって依頼だったから出したんだけど、これはマズいのかな？」

「こんなもんを流通されたら、既存の調合の観点からひっくり返っちまう。　表に出すのは自重してくれ」

やはり今の世の中とは作り方から違うようだと確信する、先程の授業風景を見る限りでは。　手持ちのスキルにはあのような面倒な手順を踏む必要がないからである。

「……マイマイ」

「はい！　なんですか御母様？」

パブロフの犬みたいに駆け寄ってきた娘に呆れ返ったが、疑問点を問いただす。

「貴女には【ポーション作成？】とか教えてなかったかな？」

「え？　いえ、教わってませんわ」

「あれ？　じゃあ持ってるのはカータツか？」

「さあ？　ぐて……じゃなくて、カータツが造るものでそう言ったものは見たことがないですよ」

思い違いかなと考えたケーナだったが、母娘の会話を面白そうに聞いていたロプスにつつかれた。

「なあ、ケーナ殿。　どうせなら一度その作り方を見せて貰えないか？」

「は？」

返答を待たずに教室へ戻るとドアを開けたまま、「さあ」、と促される。「いいのかなあ？」と娘を振り返ると、問答無用とばかりに教室へ押し込まれた。

「ロプスが良いって言ってるから平気よ」

生徒達は出たり入ったりしている公認バカップルはまだしも、自分達と同じくらいの女性が一緒に行動してるのに不審顔だ。　机には調合器具の他、小瓶に入ったお茶みたいな色をした液体が人数分。

どうやら授業のメインは終了したようだが、ロプスは生徒達に出来上がった物は後で提出するように告げ、教卓へケーナを招く。

「これから少々デモンストレーションをやってもらうので、お前達良く見ておけ」

（いやちょっと待てやロプスさん！　今市場に出したらマズい代物だとか言わなかったか？）

ケーナの内心の突っ込みは勿論理解せず、授業で使った材料を教卓に並べたロプス。　先ずは教卓に引っ張り出した女性を生徒達に紹介した。

「こちらは魔導士のケーナ殿。　そこの学院長の母親だ」

唐突にぶっちゃけた真実にその場の全員が石化した、一瞬遅れてロンティと同じく『えええええええーっ！？』と悲鳴が上がる。それをサッパリと無視したロプスは手を振って静かにさせる。

「ではどうぞ」

「いや待て、こんな材料私のレシピにはないんだけど……。これは何？」

「カジュの根にキリナ草の球根だが、足りないか？」

机に並ぶ材料と調合器具に根本的にやり方が違うと判断したケーナは、戸惑う生徒達を見て開き直った。アイテムボックスからキリナ草丸々三本と凍ったコルトバードの心臓を抜き出す。そして手元にあるものが何かを説明した後に、【ポーション作成？】を実行させた。

――――教室をどよめきが満たした。

空気中から染み出した青い点がケーナの手前に結集する。青い回転する羽を描く様に、ケーナの手にあった材料諸共瞬く間に水球と化し、色彩を青から赤へ変化させながら。やがて水球から分離した余計な水分は、赤い手の平大の圧縮された水球の周りでリングを作り上げる。青と赤に光り輝くミラーボールみたいなそれは、ひとつの命のような神秘性を放っていた。

幻想的な光景に生徒達が溜め息を漏らした瞬間、パキィン！耳につく音と共に水球ごと砕け散った。驚いて声を失った生徒達とロプス。マイマイだけは「流石御母様」、などと一人で喜んでいる。

ケーナの手に残るのはロプスの手に有るものと同じく、赤い液体瓶がひとつ。

「以上、ハイポーションの作り方でした」

それだけ告げて、出来上がった瓶をロプスへ投げる。　危なげなく受け取った彼は、両手にあるものを見比べて同じモノだと理解し、手を上げた。

「……ちょっと聞きたいんだが？」
「モノによる」
「瓶はどこから出て来たんだ？」

――沈黙が降りた。
ケーナの頬を一筋の汗が、つーっと滴り落ちる。

「そういうものだから！　……仕様なの！」

言うべき事だけを声を大にして。　つかつかと早足で教壇を後にする。

「え、あ、ちょっ、お、御母様、何処へ？」
「帰る」
「ええっ！？」

突然に機嫌を損ね、一言で状況を切り捨てたケーナを目を白黒させたマイマイが追う。　まだ幾つか聞きたい事があったロプスは義母の焦った態度を理解して小さく噴き出した。　昔の賢人でも想定外の事があるらしいと。

「まだ会ったばかりなのにぃ～」
「会いたきゃ、こっちくればいーでしょーが！」
「そんなぁ～」

翌日、再びギルドへ顔を出したケーナは、再度カウンターからの呼び掛けを受けて、赤毛の受付嬢から召喚状を渡された。

「なんでも今度は学院の教師として迎えたいんだそうよ。凄いわね」

感嘆の思いで彼女は言ったのだろうが、ケーナの脳裏には娘の脳天気な笑顔が浮かび上がった。

【魔法技能（マジックスキル）：ｌｏａｄ：呪い（カース）：Ｔｙｐｅ・Ｂ（パーティ・グッズ）】

カウンターから離れて小声で行使した術で、一瞬紙上に黒い髑髏が浮かび、紫の炎が召喚状を灰に変える。

「なんでウチの子は変なのばっかりなんだろうか？」

慕ってくれるのは嬉しいが、甘えん坊なのもどうかと思う。　長兄が一番問題児なのを母親（ケーナ）が知るのはまだ先の話である。

――夕刻、宿屋にて。

同宿で仲良くなった竜人族（ドラゴイド）の学生から聞いた話によると。

「今日は学院長室で爆発騒ぎがあったらしいんですよ」

「危ないねー」

「何があったんだろうって学院中噂が飛び交ってました。　幸か不幸か怪我人は居なかったんですけど」

「へー」

9話　学院に行ってみよう（後書き）

なんと言うか街に入って二日間でこの騒動の爆心地はなんでしょう？　やはり詰め込みすぎでしょうか。

ＰＶが８万９千とユニークが１万越えとか、ありがとうございます。

作者としてはとても信じられない……。

Ｂは爆発のＢ

しかし瓶はホントに何処から出てくるのだろうか？

１０話　幽霊を退治しよう（前書き）

キャラが増えてきたので一覧を作ろうか迷っています。
ＰＶ１２万５千とかユニーク１万４千とか、初心者に付く数字じゃないですよね！？
ありがとうございます。ありがとうございます。毎度毎度拙い文章やわけわからん言い回しでごめんなさい。

１０話　幽霊を退治しよう

ケーナが王都にやって来て１０日が経過した。

ギルドの依頼では長期に残っていて中々面倒なものをやってみた。適当に選んだ中で特殊な植物からの染料の抽出の為、植物の捕獲。捕獲ってところに嫌な予感がして、依頼人とともにそれが生えている王都より上流の湿地帯へ向かう。　そこで見たものは、全高五メートルはあろうかというモウセンゴケみたいな食虫植物だった。流石に気持ち悪かったので、岩人形（ロックゴーレム）を三体作り出し引き抜く方法で退治。　その後もゴーレムがロープで纏めて依頼人に引き渡したのだが、どうやって抽出したのかは甚（はなは）だ疑問である。

次にギルド前で待ち伏せていたアガイドに直接依頼された珍注文。

「実はワシはこの国の宰相での」
「へー、ふーん」
「ものすっごい興味無いくらいに流しおったの……」
「そんな体育会系の宰相が何処の世界に居ますか。　隠居した水戸の爺じゃあるまいしー」
「タイイクカイケイ？　ミトノジジイ？　お主、時々妙な言葉を使うのう」
「それでご注文は？」

なんでも再開発地域をなんとかしたいが、国費がないとかでどうにも出来ず困ってるそうだ。　放っておくとデン助みたいなのが溜

まったり、治安にも影響するというのでなんとかならないか？　と相談された。

「……ところで何で私に白羽の矢が立つのよ？」

「聞いたぞ、お主。　王立学院の学院長と、あの大司祭の母親だそうじゃな。　オマケに学院で古代の御技を使ったと、報告が来ているぞ」

「特には突っ込まないけど政治材料にするってんなら、怒るわよ」

「それについては大司祭から猛反発を喰らっとる最中で、よく出来た息子じゃの」

「あの子にはまだ会ってないからなあ……」

兎に角依頼を受けてどうしようか考えた。　村おこしで城を建てたとかいう話を病院で聞いた覚えがあったので、それを参考に。廃屋を全部分解して出来た材木を材料に【技術技能（クラフトスキル）：建築：城】を実行。　一晩で誰も知らないうちに更地になった廃屋区域へ、材料の関係上高さ８ｍ位の日本式の城を建造した。

翌日、王都をひっくり返す程の大騒ぎになり、騎士が派遣され、危険性が無いと判断された頃には野次馬や屋台が集まり、謎建物まんじゅうやら謎建物焼きやら、謎建物ミニチュアやらで連日大賑わいとなっている。

当の依頼人は愉快痛快と大喜びで、２０銀貨を報酬としてくれた。

最近では厳つい冒険者達にも『実力は計り知れないが、世間知らずで抜けている嬢ちゃん』などと認識され、何かと助言を貰ったり雑談に混ぜて貰ったりと、積極的に交流を測っている。　勿論、嫌

みややっかみを言う奴は何処にでも居るが、その辺りは努めて気にしない方向で。
時折興味深い情報が混じっていたり、美味しい屋台の場所を聞けたりするので、暇なときは大抵ギルドに居たりしていた。

「あれ？」
「おう、どうした嬢ちゃん？」

ここの馴染みの冒険者に疑問を聞かれ、声を掛けられたので、下の方に張ってあった依頼書を指差した。

「これってこの前誰か受けてませんでした？」

ケーナが指した紙を、彼女に声を掛けた大柄な男が仲間を呼んで覗き込む。他にも残っていた冒険者にも声を掛けたりして情報が飛び交う。

「結局、失敗して違約金を払ったって話だぜ」
「四人組だったけど、あいつら外から来た奴らだろ？」
「金額だけで選ぶから痛い目をみるんだろう」

依頼書には『幽霊をなんとかして下さい・闘技場運営委員会・銀貨８枚』とある。

「ふーん」

なんとなく面白そうだと判断したケーナはそれを手にとった。

「おー、嬢ちゃん受ける気か」
「ほう、幽霊に会ったらよろしく言っといてくれ」

「ま、気を付けていけ」
「うん、ありがとう」

依頼書を持って「アルマナさーん！」（赤毛の受付嬢）と声を掛けるのを、厳つい男達は微笑ましく見送った。

翌日ケーナは闘技場を訪れた。
これが町の中には無く、何処に建っているのかと言うと、丘の上に建つ王城の更にその向こう側にあった。

一度大河を渡り（川から直接町の内外にでるのは禁止されている為）、貴族街の東の街壁門にいた衛兵に依頼書を見せて外へ。　其処から丘を迂回して、テクテク歩く事二十分。　闘技場に到着した。

ギルドで聞いた情報によると、一年に一度闘技祭とか言う勝ち抜き戦が開かれて、大陸中から猛者が集まったり、騎士団の模擬戦に使われたり、学院の試験場所になったり、サーカスが来たりするそうだ。

入り口の衛兵に依頼書を見せると、実に頼りなさそうな顔をされた後、中へ案内された。　まあ四人組やら五人組やらが失敗した依頼に、小娘が一人で来れば誰もが同じ反応をするだろう。　中にいた責任者と言う細面のマクスと言う青年も似た様な反応だったが、藁をも掴む気持ちだったのだろう。　「なんとかして下さい」と苦悩した様子だった。

問題の幽霊だが、十日位前から通路や舞台に不意に現れたりするのだそうな。　中には後をずっと着いて来たりして、気味が悪いと感じた関係者が辞めたりして仕事に支障が出たりしているとか。出て来る幽霊も老人だったり子供だったりと、統一感がないのだそうだ。　そんな情報を一通り貰ったケーナは、二～三日泊まり込む許可を貰って依頼に備える事にした。

先ずは構造を把握するのにぐるぐると歩いてみる。　見た目はテレビで見た事のあるローマの円形闘技場コロッセウムに酷似。　あれを完全に白い大理石で修復した感じのすり鉢状だ。　話によると王都が出来る前から此処にあるそうで、誰が立てたのか不明だとか。

「なんかそれだけで嫌な予感がするなー」

今回は対アンデット（？）と言う事でいつもの装備に、赤い宝玉が柄にハメ込まれた長剣が一本。　剣自体にサラマンダーを宿す名称エターナルフレイム。　場合によっては剣ごとトカゲ形に変形し、敵と戦う事が可能なＳＴＧビット剣である。　なんで剣型の必要性があるのかが不明な、ネタ武器であったりする。

後は索敵関連の【能動技能（アクティブスキル）】を全部立ち上げてゆっくりと通路を進む。　闘技場を運営管理する人達はしばらく此処には入らないらしいので、中に居るのはケーナだけだ。

昼になる前にあらかた回り終えたケーナはアイテムボックスから食材を取り出し、闘技場の中央で火を起こして焼き始めた。　燃やすのは例の城を作った時に使用に耐えられない廃材。　食材は市場で買い求めたコルトバードだとか、人参と大根を足して割ったよう

な根菜とかである。

なんでこんな所で焼いているかと言うと餌の為で、稚拙な隠遁で後を付けてきた者が居たからに他ならない。（見つけたのはキーだけど）幾つかの罠も仕掛けたし、ほっとけば捕まるだろう。

程なくして、「ぎゃあああああっ！」と言う悲鳴が聞こえ、闘技場の選手入場口から、馬くらいの大きさの三頭犬（ケルベロス）が口に侵入者をくわえて尻尾をパタパタ振りながらやって来た。ちなみに中央頭がくわえていた侵入者はみすぼらしい服を着て一般人に変装したデン助だった。

「ちょっ、おまっ、何だよコイツはっ！？」
「唯の召喚魔法だけど？」
「こんな魔法があるなんて聞いたことがねーぞ」
「そりゃまた随分とモノを知らないねー。ああ、学がないんだっけ？」

デン助に関しては王族とかでなく、唯の子供として扱うとアガイドとも交渉が済んでいて、見つけたらぞんざいな扱いで衛兵に連絡して引き取って貰うようになっている。

わんこーズに下ろされたデン助から、ぐうぅ～、と腹の虫が聞こえて来る。ひもじそうなので鳥の足を一本差し出してやると、奪い取って食い始めた。ホントに王族なのかと疑わしくなる程の欠食児童っぷりだ。

何で此処に居るのかと聞いたら、見掛けたからと答えが返ってきた。「毛糸に群がる猫じゃあるまいし……」と思ったものの、流石にここの衛兵さんに持ち場を離れさせる訳にもいかず、暫くは預

かることにする。

わんこーズにデン助を守れと命令しようとしたら、本人がどうしても着いてくると言うので、仕方なく連れ回す羽目になった。　恐れを知らない所には好感が持てるけれど、それが無謀から出たのか蛮勇から出たのか。　只でさえ今現在のコロッセウムの内部は色々な物が跳梁跋扈しているので、逆に目を離した途端襲われないか心配になる。

「それにしても何だよこの犬…」

デン助を優先するようにと命令を出し、二人の後ろを『へっへっへっ』と三重奏で着いて来るわんこーズ。　黒い体躯に赤く爛々と輝く瞳、生暖かいを通り越して時折熱い息。　後ろを振り向く度に、鋭い牙がゾロリと並んでいるのが見えるので、ビクビクしているデン助に噴き出すケーナ。

一系統と言う分類からすると、召喚魔法がおそらくはリアデイルの魔法の中で一番種類が豊富であろう。　現にこれは【召喚魔法：獣】をひとつ覚えれば、単独で打ち勝った獣系のモンスターを片っ端から登録できる。　唯一の制限としては、呼び出すモンスターは倒した時のレベルだけしか呼び出せない所だろう。　わんこーズは魔界エリアで捕獲した時点で四百八十レベル。　これに関しては一通り試してあるが、ゲーム中は『攻撃しろｏｒ戻れ』しか命令出来なかったのが、かなり細かい命令まで聞くようになっているので、実に便利だと実感している。

他にも【召喚魔法：竜】があるが、これはスキルを取得した時に

出現する竜を国と同じ色7種類、大中小の中から選んで固定登録する。　コレクター魂を持つものはわざわざスキルマスターの所に通い詰め、全２１種類を呼び出せるようにした人が居るらしい。　趣味人には呆れるばかりである。　こちらは召喚する時のＬＶ×術者ＬＶ×１０％で呼び出せる。

――――　一方デン助ならぬこの国の王子は……。

この王都に来て日が浅いのに、なにかと宰相や大司祭の口に上がるケーナと言う冒険者に不信感受けまくりだった。

口もきつくて手も早いと言われる、老骨ながら肉体派の宰相から「あの嬢ちゃんは面白いのう」とか聞くし。　一度とんでもない手段で捕まった時を思い出し、嫌味(ひとりごと)を言ったら大司祭に聞きとがめられて、『母の愛は如何に偉大か』と言うお題目の説教を通り越した論法を三時間延々と聞かされる羽目になったりと。　自業自得なところで恨みの念が募って行く。

せめて自分だけでも化けの皮を剥がしてやろうと思って、彼女の後を付けたり、調べたりしてみたのだが。　調べれば調べるほど分からない。　先ずハイエルフである所。　エルフの中でも至高(ひきこも)の王族(り)とかと言われている純粋の一族が、なんでこんな所で冒険者なんぞをやっているのか？　次にあんなんでも三人の子持ちらしい。

大司祭と学院の校長、港湾工房の名工ドワーフが彼女の子供だとか。　それだけ聞くと国の重要ポストの半分が身内の手に落ちている事になる。　更に冒険者ギルドで聞き込みをした結果、見た目に

も関わらず手練れの戦士らしい。　あとは自分の王族とかを差し置いた友人であるロンティが、異様に尊敬しているところとかが許せない。

そんな私的な理由で後を付けて来たのだが、忍び込んで腹が空いたと思ったらいい匂いがしたからそっちに移動したら、巨大な三つ首犬に見つかって喰われかけた。　悲鳴も上がろうというものである。

ゴァウゥ
わうぅ

背後で何か恐ろしい重圧感と共に、犬と何かが言葉を交わす気配が伝わってくる。「振り向くな振り向くな」と自分に言い聞かせた王子は、何か重量のある物が床を振動させた気がして、つい背後を振り返ってしまった。

黒い体躯をした犬の向こう側。　更に巨大な天井まで届くかという巨躯で、燃えるような赤い鱗の、人などひと飲みに出来そうな凶悪な口腔、チロチロと赤い灯火が見え隠れし、牙の噛み合う――。

それが何なのか理解するよりも縦に裂けた金の瞳と視線が交差、直後どっぷりとした闇に包まれ意識が混濁した。

ドサッと何かが倒れる音にケーナが後ろを振り向くと、床に伸びているデン助が目に入った。

「え？　あれ、どうした……の……」

鼻面をつけてふんふんと匂いを嗅ぐわんこーズは良いとして、その背後から「容態はどないや？」とでも言うように通路にギリギリなレッドドラゴン。　それだけで何で倒れたのか理解したケーナだった。

低レベルで呼び出すならともかく、高レベルで呼び出されたモンスターはそれに相応しいスキルを有している。　今回は対アンデットの対策用に火系モンスターを何匹か呼び出した。　一応ケーナがゲーム中で遭遇した最大レベルのアンデット、デュラハンが八百レバルオーバーだったので、予備兵力にドラゴンを七百七十レベル（最大九百九十で呼び出そうとしたら巨大すぎて無理とキーに言われた）で出現させたのが拙かった。　有様を見る限りでは【威圧】（対象の回避を下げる）か【気圧】（戦闘意欲を削ぐ）、【魔眼】（気絶効果）にやられたのだろう。

結局、うろうろしているうちに夜になってしまったので、闘技場の中央で夜を明かす事にした。　それはそれとしてこのデン助はここに居ていいのだろうか？　と疑問はつきない。　今まさに誘拐にあったとかで王宮が大騒ぎになっていなきゃいいなと思うケーナだった。

「しかし、アンデットとも思えないんだけどー……」

一応最大レベルでの【召喚魔法（サモンマジック）：屍せる人形（クリエイト・アンデット）】も唱えてみたが反応が無かった為、相手がアンデットで無いと確信されただけである。

この魔法はリアデイルのゲーム内でも禁忌に指定されている訳でもないが、極端に毛嫌いされている魔法で。　街以外のフィールドには何処も隠しパラメーターとして、不浄度と言うものが設定され

ている。　この数値がそこでどれくらいのアンデットが呼び出されるか、夜間のアンデットの発生率を示す。　しかし、ココにはソレが無い。　つまりはこの闘技場には不浄なるものは存在しないことになる。

召喚したモノ達の継続存在時間は最大６時間。　何があるか分からないので三頭犬（ケルベロス）だけは再度召喚し、残りは時間が過ぎたので自然に消えてしまっている。　【捜索】やら【探索】なども虱潰しにしてみたが何も見つからず、隠し扉の一つも無し。　完全に何処からどうすればいいのか、お手上げの状態だ。

いっその事、穴でも掘って地下空洞でも探してみるかとアイテムボックスを開くと、普段は使わないから仕舞ってある守護者の指輪が点滅していた。　慌てて引っ張り出してみると仄（ほの）かに蒼く瞬いている。

「……って、まさか、此処がそうか！？」

三頭犬（ケルベロス）にデン助を頼むと、指輪を掲げてキーワードを唱える。

【乱世を守護する者よ、堕落した世界を混沌より救済せしめ給え！】

瞬間、足元から噴水の如く十字に光輝く無数の星がケーナを取り囲み、霧散して彼女もろとも瞬き消えた。　強い光のお陰か気絶していた王子が眼を覚ました頃には、そこには焚き火とケルベロスが大人しく鎮座しているだけだった。

強い光に囲まれたケーナの視界に光が戻ると、周囲の情景は一変していた。
五十メートル四方の完全な半円ドーム、足元には緑のラインで区切られたグリッドのような無機質な床。頭上は青い空に雲を備えた映像、その中空をデフォルメされたヌイグルミの様な太陽がふよふよと浮いている。なんと言うか昔の天動説のミニチュアセットのようだった。

部屋の中央には腰までしかない大理石の柱みたいな、ホームセンターで売っている白い彫刻状の植木鉢。敷き詰められた土には半分枯れ掛けて茶色い葉を晒す、小さな椛（もみじ）。これが守護者の中核かと確信したケーナは自身の半分ほどのＭＰをそれに注ぎ込む。
みるみるうちに半分くらいの枯れた葉が瑞々しさを取り戻すと、中核を挟んだ対面に煙が噴出し、凝り固まって白い人型が姿を現した。

右手を腹に添えて腰を折った白い人型は、煙の固定出来ない感じの姿をゆらゆらと淀ませながら言葉を紡ぐ。

『ようこそいらっしゃいマした。此処はスキルマスターＮＯ．９、京太郎様の管理すル守護者の塔です。お客様のお名前を伺ってモ宜しいデしょうか？』
「スキルマスターＮＯ．３、ケーナよ。貴方のマスターはどうしたの？」
『これはケーナ様、失礼致しマした。我が主は不在デございまス。いいえ、二度とこの地に戻る事は無いでしョウ』

「なんですってっ！？　どういうことなのそれは！」

スキルマスターＮＯ．９、京太郎はケーナと同様の限界突破者で竜人族（ドラゴイド）であった。　ケーナの所属していたギルドとは別で、自ら立ち上げたギルドのマスターを務めていた男だ。　主に近接戦闘の完全前衛型で、ケーナの戦闘スタイルとはほぼ対極に位置する。　その彼は塔が活動を止めるに至ったある日、「最後だから」とここにやって来て「もうすぐ僕達の夢も終わりが来る。　今までありがとう、楽しかった。　最後にスキルマスターが十二人でしか集まれなかったのは寂しい事かもしれないけど、また別の舞台で出会えるかもしれないから」とだけ言って此処を去ったそうだ。

その後は塔ごとスリープモードにあったが、最近近くで守護者の指輪反応（ケーナの事である）があったのでメッセージだけでも伝えようと思ったら、ＭＰ枯渇で上の施設である闘技場で幽霊騒ぎを起こすのがやっとだったらしい。

ケーナの方は文章から導き出された答えに大体の事情を察した。

『スキルマスターが十二人でしか集まれなかった』＝各務桂菜の死後。

『僕達の夢も終わりが来る』＝リアデイルの終了。

つまり今居るこの世界は”リアデイルの未来”じゃなくて”プレイヤーの撤退したリアデイルの未来”であって、何処をどう探してもケーナの様な長命種のプレイヤーは見つかるわけが無いと、言うことだ。

「……いやはや、参ったねこりゃ……」

ちょっとはそんな存在に会う事を期待していなかったと言えば嘘になるが、陰で心を支えていた気がした柱が木っ端微塵に砕ける音を聞き、ぐんにゃりと座り込んでしまう。「はあ～あ～ぁ～～」と聞いてる者がいたら脱力してしまいそうな大きな溜息を吐く。

その目の前に白い手に乗せられた守護者の指輪が差し出された。

ケーナのとは色が違う空の青さを持つそれは……。

『ケーナ様、私の塔のマスターはもう居ませんガ。　貴女を我が守護者の塔ノマスターと認識しマス。　これを』

唖然とそれを見るケーナの手を取って、指輪を握らせる。　そして一歩下がって膝を折り、頭を下げた。

『マイマスター、どうぞ御命令を』

自分の手にある指輪と渡された指輪を見比べて、自分の守護者を思い浮かべる。　あの壁画とはこの対応は違い過ぎる、二人の落差にうんざりして、溜息を付きながら立ち上がる。　なんと言うか落ち込んでいても現状が変る訳でもないので気合を入れた。

「んー、これと言ってお願いするものはないなあ。　とりあえず上の闘技場を誰かが使っていても使わせてあげてね？」

『は、了解致しマした。　この辺りにはソレ程人が住んでなかった様に思えルのですが？」

「あー、アレから二百年程経っててねー。　この直ぐ向こう側に新国の王都が出来てるのよ」

『成る程、分かりマした。　とこロで、上の闘技場で子供がひとり騒いでイルようですが？』

「そう言えば置きっぱなしだったのを忘れていた。　気が付いたのか……」

あまりのショックにすっかり意識外に追いやられていた、いや存在ごと忘れていた。　色々と生意気で小憎らしいが、子供のうちから言いたい事も言えないような、押さえつけるみたいな教育を教え込む気は無いし。　なんにせよ他人の子供だ。　教育に関してはそれ相応の教育係が居るのだろう。

此方の依頼は大体終了したし、後で衛兵にでも突き出そうと意識を切り替える。　とりあえず話をしているうちにある程度回復したMPの残りを核に注ぎ込むと、お暇（いとま）する事にした。

「そろそろ戻るわ、また今度にでも補給には来るから」
『分かりマシた、御送りしましょウ。　お気をつけて』

視界が瞬時に切り替わる。　ケーナの出現場所は闘技場のフチの部分、観客席の一番高い場所に出た。
闘技場の舞台となる所を見下ろすと、思わず首を傾げてしまう程の妙な光景が広がっていた。

先ずはデン助、これはまだいい。　わんこーズの背後で焦った表情でおろおろしている。　次に三頭犬（ケルベロス）、デン助を背後に庇い、三つ首の牙を剥き出しにして唸る唸る、そして三重奏で吠える。
命令を見事に遵守する忠犬っぷり。　最後に抜刀した白い鎧姿の騎士が三人。　わんこーズを取り囲み、その卓越した剣捌きを障害に対して繰り出しているが、悲しいかな掠り傷一つ付けられないでいる。

「なによこれ？」

観客席を下ってからその下の舞台へと軽やかに飛び降りる。　土を踏む音に気付いたデン助が大慌てで駆け寄ってきた。

「おいこら！　あれをなんとかしろあれをっ！」

「いやいや、一体全体何がどうしてこうなったのか？」

「俺を迎えに父上の騎士が来たんだ、でもお前のペットがそれを邪魔しやがって。　あいつらは俺に近づけないでいるんだ！」

なるほど、この世界にも隠密とかそれに似た様な者は居るらしい。アガイドが堂々と「ケーナ殿にも一人付けさせて貰ってるぞい」とか申告してきたので、それから此処に至ったのだろう。　でもケーナが『デン助を守れ』と命令した為に連れて行くことは出来なかったと。

「三頭犬（ケルベロス）！　もういいわ、止めなさい！」

それを聞くや否や、わんこーズは戦闘態勢を解除してケーナまで走り寄ってきた。　体を摺り寄せてくるので、首元を軽く撫でてやる。　毛皮があっても硬いのでもふもふにはならず、ごわごわだが。

それと一緒に抜刀したままの騎士も警戒するように近付いて来た。

わんこーズと一緒に道を空けるように脇に退いて、デン助を前に押し出してやる。

「すみません、ウチの子が粗相を致しまして。　夜の野外は危険だからその子を守らせていただけなのですが……」

「貴公か、宰相殿が言っていた冒険者と言うのは？」

「そのような危険な魔物を野放しにするとは何事か！？　大事の無かったから良かったものの！」

「君の行動は我々の眼に余る物がある、すまないが騎士団詰め所まで来て頂こう」

なんとなくケーナは察した、「だめだこいつら、典型的な頭の固いお役所仕事人だ」と。

「申し訳ありませんが、今は依頼をこなしている最中なのです。見逃して貰えません？」

「我々に逆らうのか、たかが冒険者ごときが！」

不穏な空気を察してか、わんこーズは再び唸り始めた。手綱を離したら一瞬のうちに勝負が付くだろう、それをやると後に禍根が残りまくりそうだが……。デン助に至っては騎士達の後ろで「そうだもっと言ってやれ」と煽っている。

やれやれ、権力に対抗するには矢張り権力しかないのか。溜息を付いたケーナは腰のポシェットから、鈴ストラップの付いたボタンを取り出した。真逆こんなに早く使う羽目になろうとは……。

あとでくれた本人に聞いたところ、これを提示するだけでアルバレスト侯爵の代理人のような役割が出来るのだそうな。罪過を無理矢理放免しているようで気分は悪いが。つーか牢に入れたなんて聞いたら息子と娘の反応が怖い、いやマジで。

ケーナの提示したボタンひとつで騎士達は恐れ戦(おのの)いた。膝を折って非礼を詫びるのを押し止め、デン助を連れ帰るように頼む。直ぐに彼等は要求を飲んでくれて、ジタバタ暴れる子供を引っ張って闘技場を去っていく。姿が見えなくなるのを待って、焚き火の傍にケーナは座り込んだ。それを支えるようにわんこーズが背後に回る。

「あー、もうなんか疲れたー。　色々考えてたのが馬鹿らしいわ…」

毛布を取り出すと包まってさっさっと寝る事にする。　朝になったら依頼終了だ。

くぅ～ん

翌朝、焚き火を綺麗さっぱり片付けて、わんこーズを送り返した後、代表者のマクスに会いに行ったケーナは、「原因は取り除きました」と告げた。　一概には信用して貰えないので、報酬は完全に幽霊が出ないのを確認してからと言うことになった。

結局、三日後にキチンとアルマナさんから銀貨８枚は受け取れたのである。

１０話　幽霊を退治しよう（後書き）

病院の待合室で思いついた事をメールにしてポチポチ打っていたら怒られました（↑当たり前だ！）

くそうあの婦長めー、過去ドジっ子看護婦だったくせにー（＃

土日なので結局更新は変らなかったという……。

11話　落ち込んでみよう（前書き）

美辞麗句の慣用句が足りない脳みそに嫌になります。
朝からポチポチと打っていたら出来上がったので投稿、次は遅くなるでしょう。

11話　落ち込んでみよう

事の起こりは教会の大聖堂から始まった。

早朝のお勤めの後、意外な客を迎えたスカルゴは意味の通らない質問に首を傾げた。

「……、うむ。　その様子だとそちらはまだ気付いてなさそうじゃな」

「なんなんですか？　アガイド殿。　質問ならせめて分かりやすく掻い摘んでお願い出来ますか」

ついと横に向けた視線を無駄に『キラリーン』と輝かせ、その先に居て誤解したシスターがバターンと倒れた。　それを苦笑いでスルーしたアガイドは口髭を撫で付けながら、もったいぶった様に口にする。

「先程、隠者から連絡があってのう。　なんでもケーナ殿が二日も宿屋の部屋に閉じ篭っているそうじゃ、もしかしたら何かの病気……」

「な！　なななななっ！　ぬわぁんでぇすってえええええええええっ！！！？」

その場に居た者が硬直するほどの、ありえないうろたえっぷりを晒す大司祭に驚いた。　神官が震える声で大司祭に声を掛けようとするが、もの凄い勢いでその場を走り去ったスカルゴに目を白黒させていた。　アガイドですらその消失っぷりに呆れ返るほどである。

――――　一方、そんな話題に上げられているとは知らぬ本人は。

宿屋の部屋に篭り、毛布に包まって力無く硬いベットに横になっていた。

衝撃の事実から数日。　色々考えていた事が全部吹っ飛び、どうしていいか分からなくなった。　というか遅ればせながら五月病と言うか、ストライキと言うか、ぶっちゃけただの不貞寝である。宿屋の女将さんにも随分心配を掛けてしまっている、申し訳ないけれど立ち直るまで暫く放っておいて欲しいと思う。

だからと言ってこのままどうやっていれば良いのだろうか？　いっそのこと、このまま冒険者家業を続けたものか、もうすっぱり現世との接点を切り離して塔に引き篭もるか？　辺境の村にずっと骨を埋めるか？　探した所で他のプレイヤーが居ないんじゃ、全塔を蘇らせたとしても誰にも会わないのは確実だ。

「なにかこう気分の晴れるものでもないものかなあ……」

ボソっと呟いた時、階下が突然騒がしくなった。　被っていた毛布から頭だけを出して首を見回す。　なにかとんでもなく慌てた者が取る物もとりあえず階段を駆け上がっている、といった音が聞こえ、扉ごとふっ飛ばす勢いで開かれた……

――――　同時刻。

宿屋の猫人族（ワーキャット）の女将さんは天井を心配そうに見上げた。

原因は宿屋に長期宿泊しているエルフの女性、ケーナである。

数日前から何か沈み込む理由があったらしく部屋に閉じ篭って出て来ない。　様子を見に行ったら病気でもなく、やる気がごっそり抜け落ちていると言った感じで、ぐったりしていた。　こりゃもう時間が解決するしかないと、放置しておく事に。

「ケーナちゃん大丈夫なのかなあ？」

「まあ、病気じゃないって言ってるんだから平気じゃね？」

「何か悲しい事でもあったのか？」

よく夕食で固まっているメンバーが心配して、色々な憶測を上げている。　なんだかんだ言いつつも、異種族間での連帯感が高まってはいるらしい。　それだけでもこの宿屋を立ち上げた甲斐はあったかなと思わせる光景ではある。

しみじみと女将さんが食堂の会話を黙って聞いていると、通りの外側がおもむろに騒がしくなった。

宿屋に残っていた者達が気付いた時には遅く、出入り口の扉が豪快に吹っ飛んだ。　……かに見えた。

「くぉこぉかあああああああっ！！」

一言に清涼感を含んだ風が内部を席巻し、レモン色に煌く麗美な髪が弧を描いてその者を彩る。　目立つ蒼い法衣が人目を引く、有名人も有名人。　王都の女人誰もが憧れる絶世の麗人、こんな場所

に来るような身分ではない。　王都の権力者ＮＯ．３、大司祭スカルゴ様その人であった。

『どえええええええええっ！？』

その場に居たもの全てが壁際にまで後退するショックを受け、素っ頓狂で異口同音な悲鳴を上げた。

宿屋の中の人々の慌てようなども眼中に無く、『しゃらーん』と鳴った法衣の帯に星の瞬きが背後をから彼を際立たせる。「フッ」と髪をかき上げ、流し目で男女構わず魅了する笑顔を漏らす。

宿屋の女将は揉み手で以って彼に礼をして、その場をとり繕った。

「ど、どうなさりました……か？　大司祭様、この宿には何もやましいものなど……」

「確かに、宿には何もありませんし。　それに付いては咎める気もありません。　私の問題は唯一点、此処の客一人だけなのですから」

キラキラと潤いの視線が、百戦錬磨の女将さんの心をドッギャーンと揺さぶった。　ふらりと倒れかけた自分をなんとか根性で押さえ込み、カウンターに手を付いてその身を支える。

「ここに私の母上殿が泊っている筈です。　何処ですか？」

『……は？』

女将さんだけではなく、その場に居た者全てが疑問符を浮かべた。

今この有名人は何を言ったのだろう？　母とか言わなかったか？

いやそんな馬鹿な事が……？　そんな高貴な方が何処に？

「単刀直入に言いましょう。　私の母上である所のケーナと言う女

性は何処にいらっしゃいますか？」

――――空気が凍りついた。　いや、空間が停止した。

確かに居るケーナと言うエルフ女性、冒険者、……大司祭の母！？

皆の脳裏に浮かんだ言葉が現状を理解し、目の前の存在と等符号で結ばれ……、なかった。

『えええええええええ――――っっ！？！？』

例によって例の如く悲鳴にも似た叫び声が宿屋を揺るがした。

それを受けても揺るがない大司祭は『ギラーン』と獲物を狙う眼で二階に続く階段をターゲッティングする。　『サラサラ』たなびく髪を手櫛で整えると咳をひとつ。　両手を広げ軽やかに『希望にキラめいた背景』を背負い、階段を爆走して行った。

残されるのはデッサンが狂って原型を留めない宿屋の女将と、宿泊客だけ。

階下から謎の悲鳴と言えばいいのか怒号と言えばいいのか意味不明の叫び声が聞こえ、静かになったと思ったら爆走してきた、と思

われる人物が扉を吹っ飛ばして室内へ入り込んできた。　ストーカーか強盗じみた行いにベットから飛び起きたケーナの目前には、レモン色に煌く長髪に柔らかい翠の瞳、細面の顔にすらりとした長身を、金の縁取りが編まれた青い法衣を纏った麗人が立っていた。

　ケーナが心当たりのあるその容姿に声を出そうとした瞬間。「おおっ！」クイックムーブで接近、「母上殿！」その両手を取り自らの手に包み、「ご無沙汰しております」手の甲に口付けを。　背筋に何か冷たい物がゾゾゾッと駆け上がる感覚に引きつるケーナ。

『フラッシュ効果』でまぶしい笑みを浮かべたそれは、一歩下がって臣下の礼を取ると、「遅ればせながら」重厚な管楽器系の『音楽を纏わらせ』、「長兄スカルゴ」面を上げた細い切れ長の目筋には『真珠色の涙』がぽろぽろと、「母上の愛に報いるべく」たちまちケーナもろとも周囲に『薔薇の園』が咲き誇り、「参上致しました」と申告した。

　もはや無言で表情を失ったケーナは、ベットから起き上がった体勢のまま真っ白になっている。

「な……な、……ななな…、……こ……」

「お体の具合が悪いとお聞きしまして参った次第です」『キラーン』

　真摯な瞳がケーナを捉える。　ケーナはベットの中で震える腕にそっと力を込めた。　そんな母親の様子を体調が悪いのだろうと決め付け、『ヒマワリの咲き誇る草原』をバックに両手を広げ、諸人を迎えるかに満面の笑みを浮かべたスカルゴ。

「さあ、この様な宿ではなく我が家でそのお疲れになった心と体を癒しましょう」

「こ、……こここここ、この変態がああああぁあ――――っ！！！！！」

嫌悪感いっぱいのパニックになったケーナからの渾身の拳が、満面の笑みの中心を捕らえた。

「ちょっと兄さん！　大司祭が町のど真ん中を爆走して行くなんて責任ある立、ば……と、して……ぇ？」

数分後、事態に慌てて身内を回収に来たマイマイは宿屋のケーナの部屋にて、天井に頭を刺してぶら下がる自分の兄と。　現実逃避して毛布にくるまった挙句、【遮断結界】で完全に外界と隔離された自分の母を見た。

「いやー、そりゃもう無理じゃねえか？」

「カータツも真面目に考えなさいよ！　御母様がこのまま閉じ篭っちゃったらどーするつもりよ！」

色々とあちこちに人の眼があるので、三兄弟で相談するのに相応しいスカルゴの執務室。　すなわち教会に、母親の一撃を受けた兄

を連れて逃げ込んだマイマイは、カータツを呼び寄せて対策会議を開いた。　長兄は自分の執務机で難しい顔をして考え込んでいる。
　流石に久し振りの邂逅の結果があれでは大分堪えたらしい。　自業自得だと思ったが、今の問題はそっちでは無く母親にあった。

「いや、だからってなあ。　姉貴はお袋が全力で閉じ篭ったら、結界破れる自信があるのかよ？」
「くぅ……」

　弟の正論にマイマイは反論を封じられた。　確かに七国時代には二十四人しか居ない最高峰の超越者中のひとりとして君臨し、神代の時代より存在する遺跡神殿の主、と認められている上位大魔道師。（↑息子達視点から見た美化しすぎの経歴）　とても自分の様な普通の魔道士がかなう相手では無いと分かりきっている。

「姉貴の腕前で普通なんて言ったら、今の人間達は最低ランクなんじゃ……」

　ブツブツ口にしたマイマイの独り言に突っ込んでみたが、本人は気付かない。　「どーすりゃいいもんかなあ」と頭を掻いてカータツが長兄に声を掛けようとした時。　「そうか！　分かったぞ」苦悩していた彼は、揺るがない決意をたぎらせ立ち上がった。

「ど、どーしたんだよ兄貴。　何か結界でも破る手段が？」
「いや、母上殿に殴られた理由がだ！」どどーんと背後で『荒波が舞った』

　彼はクローゼットから式典用の正装法衣を取り出し、――金色に煌くので王様より目立つからマイマイに止められた――、『水の飛沫』を散らせながら羽織ってポーズを決めた。

「母上殿に会うのだ！　やはりみすぼらしい格好では至上の母上殿には御目汚しだったのだな！」『がらぴっしゃーん』背後に『雷が落ちた』

「ある意味、兄貴が一番潔いかもしれねえなあ……」

隣で姉の魔力が高まるのを肌で感じ、巻き込まれないうちに部屋を退出する。　カータツの持つ技能（スキル）は低位の回復魔法と補助魔法と建築関係の技術技能（クラフトスキル）くらいなので、二人の喧嘩に巻き込まれると命がいくつあっても足りなくなってしまう。　とりあえず話せば通じるのではないかと問題の宿に向かってみることにした。　閉じた扉の向こう側で轟いた爆音はきっちりと聞こえないフリをして。

……が、途中の市場で運良く、それとも間が悪かったと言うべきか。　買い食いして肉串を頬張るケーナの姿を見かけてスッ転んだ。　妙な視線を向けてくる市場関係者の視線に耐え、全身の筋肉をフルに使い、プルプルと立ち上がった。　最後の気力を振り絞って母親に突っ込みを入れる。

「おおおお、おおお、お袋っ！？　閉じ篭ったんじゃなかったんかよっ！？」

「あれ、カータツ。　どうしたのこんな所で？　貴方もお肉食べる？」

「おじちゃーん、串もうにほーん！」と楽しそうな母親を見たカータツから、ガックリと最後の気力が抜け落ちた。　俺達の苦労はなんだったんだ？　と背中が語っていた。

その辺に転がっていた木箱に並んで腰掛け、肉串を喰ったり果物をかじったりするケーナに心底から溜息を吐くカータツ。　心配する元になった本人はちょっと吹っ切れたような清々しい笑顔で、義息子に頭を下げる。

「うーん、御免ねー、なんか心配させちゃってー。　ちょっとショックな事があったんだけど、お腹が空いて甘い物とか食べたらその考えがどーでもよくなったんだよ。　ふふふ、馬鹿みたいだよねー」
「姉貴がもうこの世の終わりみたいな顔してたぜ。　後で顔出してやってくれよ」

「ごめんねー」と笑っていたその表情が曇る。

「ところで、さっき飛び込んできた金色の変態だけど……」
「ああ、なんか兄貴が暴走したとか、突っ込んだとか言ってたな」
「あー、やっぱアレ、スカルゴなんだねー……」

母親の眼が死んでいるのを見たカータツは大体を悟った。　アレを見たのか、的な同情で。　自分達も通った道だし、母にも知っておいて貰いたい性癖だったから、この機会も丁度いいのだろう。

「まー兄貴もお袋至上主義だもんなー。　あの状態が普通だから覚悟してくれよ」
「あ、あれでふつーの状態なんだ……。　育て方間違えたかな？」

勿論、スキルの覚えさせ方の点で。　まさかああも【特殊技能（エクストラスキル）：薔薇（オスカル）は美しく散る】を真っ当に使いこなす人材だとは思ってもいなかった。　ある意味天性の才能なのだろう、人格は残念な方向だけど。

むしろお陰様と言えばいいのかショックは違う方向にぶっ飛んだか霧散したか。　あんなものを目前にするとプレイヤーうんぬんの存在はどーでもよくはないが、問題としては息子の方が然るべき処置が必要だ。

「そう、一度思いっきり人格ごと破壊してやってから、真っ当な性格を再インストールしてやれば良いのよね！」

あの娘にしてこの親有りな発言に、腰掛けていた木箱からカータツはずり落ちた。　但し危険度で言うならば、コチラの方がその腕前から言って王都諸共灰にしかねない。　腕を掴んでその考えを真っ向から否定する。

「待て待てお袋っ！　何考えてやがる、兄貴を殺す気かっ!?　あれでも兄貴はこの国の事を考えて今までやってきたし、何時かお袋が安心して人前にも姿を見せれる様に、人心の平定に心情を注いで来たんだ。　頼むからその兄貴の思いやりまで否定しないでやってくれ！」

「……カータツ」

いきなり息子の口から飛び出した裏事情に、胸が熱くなるケーナ。　カータツが本気でその点についてはスカルゴを信頼している事も、自分がそのスカルゴの人となりを一面だけで判断していたという恥ずべき行為をしていたと知った。

「そう、……だよね。　変、って、一面だけで……、里子に出しちゃった私が、スカルゴの事を判断しちゃいけないよね……」

「はあああぁ。　わ、分かってくれりゃーいいんだよ。　あー吃驚した。　っておぅわっ！」

隣の母親にいきなり抱きすくめられたカータツが素っ頓狂な声を上げる。　じたばた暴れるカータツを博愛固めにしたケーナは、「ごめんね」と小さく呟いた。

「そう思うんなら人目を気にしてくれっ！」

「ん？　……あれ？」

市場の客や、手の空いた市場の売り子さん達が、こちらを隠れ見ながらひそひそとしている光景が目に入る。　良い歳をしたドワーフが可憐な女性に抱きすくめられているのだ、邪推もしようと言うモノである。　少し赤くなったケーナであるが、自分達は何もやましい事はしていない。　それは自信を持って言える。　唯、親子で抱き会っているだけなのだから。

「ふふふふ、良かった」

「『良かった』じゃ、ねーよ！　好奇の視線に晒されるこっちの身にもなってくれ！」

力にモノを言わせて無理矢理引き剥がしたカータツが、ケーナの笑顔を見て首を傾げた。

「お袋、なんかちょっと変ったか？」

「……うん、そーかも。　だって私には貴方達が居るモンね」

「何を言っているのかよく分からねえよ？　お袋が居れば俺達が居るのは当たり前だろ？」

「ふふふ、そーだね。　……ありがとう、カータツ」

（そうだ、プレイヤーの仲間が居なかったからって何を嘆いてたんだろう。　私にはまだ家族が居るモンね、それだけで今は充分だ

し。　私は此処に居ても良いんだもの）

「じゃ、スカルゴの所に行こうか」
「え”？」

兄姉大戦が勃発しているあの場所へ？
何度か巻き込まれているから分かる。　混沌の光景を思い出してカータツの表情は凍った。

「ん？　どうしたの。　スカルゴってば落ち込んじゃってるの？」
「いや……。　姉貴ととんでもない喧嘩の真っ最中だったかと……」
「兄妹喧嘩？　……まあそういう事もあるかー」

母親にとっては達人レベルの魔法の撃ち合いは「そういう事」で片付けられるくらいに低レベルのことらしい、実際はどう思われているのだろうか知らない。　教会が吹っ飛んでいないといいが、などと考えた息子の心親知らずのケーナは早く行こうと促した。

先程出てきたばかりの教会に戻ったカータツとケーナを、先日ケーナを門前払いした年配のシスターが出迎えた。

「まあ、カータツ様。　スカルゴ様でしたら未だマイマイ様とお部屋で……」
「まぁだやってんのかよ……」
「そ、それで、あのう、そちらの女性は？」
「ああ、そういやーシスターに以前、門前払い食らったんだっけなー、お袋」
「……え？　えええ？」

どう見ても年若い女性にお袋と呼びかけるここの大司祭の弟に、たらーりとシスターの背筋に冷たい物が落ちた。　当の本人は髪をかき上げて、その小さく尖ったハイエルフの証である耳を見せ、「どもー」と一礼する。

「一応言っとくか。　コレが俺達のお袋だから、ぞんざいに扱うと兄貴から雷が落ちるぞ」
「カータツ……。　お母さんコレ扱いは流石に傷つくんだけど……」

親子の漫才を聞くどころではないシスターは、以前自分のやらかした無礼にいきなり平伏した。

「も、申し訳ございません！　知らぬとは言え大変失礼な事を！　お許しください！」
「あ、いえいえ。　知らなかったことですし、私は特に気にしてませんから頭を上げてください」
「そーだぞ、お袋はなんかの地位に就いている訳じゃねーし」

二人してなんとかシスターや騒ぎを聞きつけた神殿騎士をなだめ、スカルゴの執務室前までやって来た。　扉に特に異常は無いが、時折この辺りの廊下を『ズズン』と軽い揺れが襲う。

「以前、兄貴と姉貴がこの部屋に結界を張ったんだよ。　そのお陰で外まで被害は及んでいない」
「ふーん」

ケーナはアイテムボックスから黄色い液体の入った瓶を取り出すと、扉を少し開けて瓶を中に放り込んで扉を閉める。　直後、中から　――　どっぱあああああん！　――　と、珍妙な炸裂音が響い

た。　音と光で敵を麻痺させるフラッシュグレネードみたいなアイテムである。

後頭部にでっかい汗玉を垂れ流すカータツが、シーンと静まりかえった部屋の扉と母親を交互に見やる。　たっぷり1分待ってからケーナは扉を開ける。　中から床を這うように流れ出してくる黄色い煙と。　ケーナは【風魔法】を使い、風圧で窓を押し開けて換気をすると、部屋の床を這う黄色い煙を追い出した。

部屋の中はそんな惨憺（さんたん）たる有り様ではなかった。　調度品などにも保護魔法を掛けてあったのだろう。　椅子や机やソファーが部屋のあちこちに転がっているだけだ。　その中に眼を回したスカルゴとマイマイが混じっているくらいである。　二人を部屋の隅に追いやるとケーナとカータツで椅子などを綺麗に元の位置に戻す。　カータツが襟首掴んで持って来た兄妹へ、小さな氷を作り出したケーナが二人の背中にソレを突っ込んだ。

「「ふひょおおお～ぉおおおっ！？」」

奇声を上げて飛び起きた二人は、有り様に爆笑している弟と母親に気付き唖然とした。

「母上殿！」「御母様！？」

「や、二人とも。　御免ね、なんか心配掛けちゃったみたいでさ」

カータツがソファーに座り、スカルゴとマイマイを床に正座させたケーナは、その前に自分も正座して深々と頭を下げた。

「二人とも心配掛けました。　ごめんなさい」

「ちょっ、御母様！？　なんで頭なんか下げてるの！　謝るのは私

達っ！」

「そうだぞマイマイ疑わしきはお前だ、母上殿に心労を掛けるなどとはあってはならない……」

「兄貴はちょっと黙ろうな？」

洒落の無い黒い笑みを浮かべたカータツの獲物、首狩り（ギロチン）の斧を首筋に当てられては流石のスカルゴも黙る。　頭を下げたままケーナは謝罪を述べた。

「私は自分本位の考えに囚われて、自棄になり貴方達の存在を邪険に扱いました。　母親として失格な行為です、申し訳有りません」

そのままの真摯な謝罪の姿勢を貫く母の姿に兄弟達は顔を見合わせる。　カータツは斧を仕舞い兄達と同じく床に正座。　マイマイは頭をコツンと叩き、かぶりを振って姿勢を正したスカルゴと握手を交わす。　妹と握手を交わしたスカルゴは法衣の上着を脱ぎ、ケーナの肩を叩いて起き上がらせた。　そして三人揃って頭を下げる。

「母上殿、また昔のように宜しくお願い致します」

「うん、よろしく御母様」

「俺達のお袋はひとりだけだしな」

「うん、うん！　宜しくね三人とも」

目尻に浮かんだ涙を拭ってケーナは笑った。　たちまち三人にも伝染し、部屋は明るい笑いに包まれる。

「は――、最初に兄貴が暴走した時はどうなる事かと思ったわよ、私は！」

「自分は唯、アガイド殿から母上殿が病気かもしれないと聞いてだな、心配になるだろう」
「なんでアガイド様がそんな事が分かるのよ？」
「隠者がどーとか言っていたな、そういえば……」
「隠者！？　御母様、監視されているの！？」
「私の知覚範囲外から様子を見てるってくらいじゃないかな？　あんまり近付くくらいだと【自動召喚：雷精】に迎撃されちゃうみたいだし、私は特に気にしないよ。　唯でさえお目付け役みたいなキーがいるもの」
「はあ、それは母上殿が御契約なされている聖霊だそうですね。相変わらず規格外な……」
「やれやれ、俺はもう呼び出された時はどーなることかと思ったぜ……」

ここでポンと手を叩いたケーナが「あ、そうそう」と呟いた。

「これとは別に二人にお話が有ります。　あ、カータツは仕事放って来たんでしょ？　もう戻って良いわよ」
「ああ、じゃあお暇させてもらうぜ。　さすがにあいつ等に一から十まで任せるわけにはいかねえ」
「とりあえず二人とも其処に正座」

一度立ち上がった二人はケーナが【威圧】【眼光】【魔眼】【気圧】【恐怖】を立ち上げて黒いオーラを纏ったのに、兄妹は表情を引きつらせた。

「お、おおお、御母様。　い、いいい、一体何を……」
「は、母上殿！？　い、い一体何をそんなに御怒りに……？」
「カータツに色々聞いたわよ、今後は喧嘩の度に魔法で撃ち合うとか禁止。　その辺りの常識に付いて貴方達に言い聞かせなくちゃ。

勿論、スカルゴのその過剰な【特殊技能（エクストラスキル）】の使用に付いてもね？」

悪鬼羅刹のような黒い表情に赤い三日月みたいに哂う口に兄妹は戦慄した。

仕事に戻るために部屋の扉を閉めて、世にも恐ろしい悲鳴をシャットアウトしたカータツは大きく伸びをして首を鳴らした。

「自業自得だ兄貴達は」

11話　落ち込んでみよう（後書き）

私のイメージするドワーフはロー○ス島のギ○リと言うよりは、伊東岳彦さんの書くリューナイト（アデューレジェンド）に出てきた大賢者ナジー的なイメージでございます。　なんかそれだけで画面がコミカルに。

12話　魔法の利便性を追求しよう（前書き）

サブタイ考えるのが辛くなってきました。
うーん、うーん、と悩んで変なものが……。

12話　魔法の利便性を追求しよう

その日は宿屋へ訪れたエーリネから始まった。

「ケーナ殿、北の国へ行きませんか？」

「んー、北の国ですか？」

なんとなく気乗りしない、と言った様子で赤い楕円形の果物、ルシュと言う。　をシャクシャク食べながらケーナは今ここを離れるかどうか考えた。　少し思案したエーリネは頭から切り札を提示する。

「先に辺境の村に寄ってからですけれど？」

「行きます！　……って、あ」

つい聞こえた単語に反応して了承していまい、犬人族（コボルト）の表情は分かり難いが、密かに含み笑いで肩を震わせている商人を恨めしそうに見やる。

「うう～、ずっるいですよ」

「何を人聞きの悪い事を。　私は唯、途中で立ち寄る村を述べただけじゃないですか」

「もう、エーリネさんてば上手いんだから……。　ええと、村まで銀貨4枚でしたっけ？」

王都に来るまでに乗せてもらった料金を思い出して、それより伸びるとなるとどれくらい増えるのかと、エーリネに聞く。　しかし彼は眉間に皺を寄せて首を振った。

「いえ、村まではお客様扱いでも構いませんが、その先は護衛として着いて来て貰いたいのです……」
「え…？　北の国ってそんなに物騒な所なんですか？」

黒の国（別名、魔族の国）なんかを併合すれば危険かもしれないな。　と思っていたケーナにエーリネは、実はと最近の流通事情を話し始めた。　地図を開いてから大ざっぱな通商路を指で描く。

「先ずは大陸の外側を大きくぐるりと回る外殻通商路。　次に国の境を横に走る内殻通商路、この国は大河の南北に二本ですね。　最後に国の王都同士を結ぶ、大陸大動脈です」

都市間を走る電車みたいだなあと思ったが、口には出さず素直に頷いておく。　エーリネは西の国境をトントンと叩いて続きを説明する。

「今、フェルスケイロの王都と北のヘルシュペル国の王都を結ぶ大動脈。　西側を走る外殻通商路が通行止めになっています。　なので、今回は内殻通商路から東側の外殻へ出て大河を渡り、それからあちらの国の内殻通商路を外れて王都を目指します」
「通行止めって、崖崩れでもあったんですか？」
「いいえ、盗賊です」

間伐入れずに返された言葉が若干の緊張感を孕んでいるのを感じとり、ケーナは息を飲んだ。　エーリネは西側の国境よりやや上を指す。

「ここに古ぼけた砦があるんですが、最近そこを盗賊団が根城にしてあちこちに手を伸ばし始めたらしいんですよ」
「はあ……」

「なんでもその盗賊団の頭が強力でな、騎士団も手を出し難いんで、膠着状態に陥ってるっつー話だぜ」
「へー、そんな強い人がまだこの世k……、って、アービタさん。何時から居たんですか…？」
「んー、『のし』からか」
「「どこだかわかりませんよっ！？」」

「ええっ！　御母様この国を出るの！？」
「さも出奔するみたいな言い方は止めなさい、マイマイ。　仕事よ仕事、商隊護衛のお仕事」

翌日には王都を出るのでスカルゴを訪ねたら仕事で居なかったので、王立学院までマイマイに知らせに行った。　ちなみに教会も学院も子供達の権限で顔パスである。　教会のシスターが言うには、大司祭様も先日以来落ちついて来た、んだそうな。　未だに遠目で見かけると、びかぴか光って鳴って唸り薔薇が咲き乱れるので教育的指導が功をそうしたのか、理解に苦しむところだ。

「んー、でもヘルシュペルに行くのかー、だったら丁度いいかな。御母様ちょっと手紙の配達を頼んでも良い？」
「手紙くらいなら別に問題ないけど、向こうの国にお友達でもいるの？」
「んっふふふ～。　ちょーっとね、御母様に紹介したいと思ってたから。　いいタイミングかなって」

何か企んでいそうな笑みを浮かべた娘の姿に最大限の警戒をする母親。　それを分かっていながら普段と同じに振舞うマイマイ。

――――翌日、エーリネの商隊。

二台の箱馬車と三台の幌馬車を見送ったマイマイとカータツ。

街道を東に消えて行く一行に弟は難しい顔をして、姉は涼しい顔をして、見えなくなるまで手を振っていた。

「うーん、お袋が護衛って……。　世界で一番安全な一行だな……」

「むしろ御母様なら盗賊の根城を一撃で破壊できるわよね？」

「まあ、今のお袋は冒険者だからなあ。　益にならないと動く理由にはならねえだろうよ」

「ええ、そういう事にはなるわよね」

「それよりも手紙渡したって、あれか、あいつらか？」

「そうよ、ふふふ。　きっと御母様ビックリするわよね～」

「いや、俺はきっとお袋が卒倒すると思うんだが……」

「おう、嬢ちゃん、さっきの姉さんに何を渡されたんだ？」

出発する直前になってカータツを伴って見送りに来たマイマイは、一通の封書をケーナに託した。

「恋文ですか？　ケーナ殿。　貴女の魅力は女性にも人気なのですね？」

「いや、アービタさんもエーリネさんも何言ってるんですか！？

手紙ですよ手紙！　あっちの王都に知り合いが居るって言うので、郵便配達を頼まれたんですよ。　けしてそこにやましい気持ちは入ってませんよ」

「ふーん、ま。　話半分には聞いとくか」

「話半分も無いんですってば。　自分の娘と交際なんかしたらおかしいでしょうっ！？」

「え”？　あれが嬢ちゃんの娘さんか？　じゃあ、一緒に居たドワーフさんは？」

「あっちは末の息子です」

別の商人からの質問に素直に答える。　ひゅー、と商隊全域に冷たい風が吹き荒んだ。　その後はいかにしてドワーフを息子にしなければならなかったのか、……を即興で語る羽目になった。　口八丁で取り繕う技能はないものかなと思ったのは秘密である。

辺境の村までは前回は１０日、今回は試験的にケーナが魔法【行軍速度上昇（レーブアップ）】を使ったので８日で済んだ。　これは戦争時に全軍の行軍速度を２０％ＵＰするもので、本来ならばいっぺんに３００～４００人へ掛け、５分程度持続するくらいだった。　馬１４頭と護衛の炎の槍傭兵団１１人プラス、ケーナをひと纏めて使用したところ、１時間強まで効果が続いたので嬉々として使っていたら、全行程が短縮された。　これにはエーリネもビックリで、真剣な表情で商隊に勧誘されたのは言うまでもない。

久し振り、と言ってもケーナがこの村を離れて大体５０日ぐらいしか経っていない。　それでも村の様子は少し変わっていた。　村の入り口の過去馬車溜まりだった所に平屋が一軒建てられていて、見た目は開放された工房の様。　中からは大工作業的なトテカントテカンなる音が響いてくる。　村の奥の人が住まなくなって廃棄されていた家からは、食事の支度をする煙が上がっていた。

夕刻にも関わらず商隊を迎えに出て来た村人達は、一行にケーナが混じっているのを見つけると、次々に挨拶を交わす。　あっという間に囲まれた彼女が人混み諸共宿屋に連行されるのに、エーリネとアービタは苦笑いで見送った。

「まあまあまあ！　ケーナじゃないのさっ、久し振りだねぇ！　元気にしていたかい？」
「おねーちゃん、こんにちは」

マレールとリットに暖かく迎えられ、ケーナは「ほぅ」と安堵した。　肩の力が抜けられる家に帰って来たといった感じである。
注文したでもないのにパンとシチューを出されて、口を付けて変わらない味にほっこりしたところで、慌ててお金を持ち出したりするケーナの姿に二人は笑い出す。

その晩は王都で過ごした日々や、依頼の事や子供達の話などで宿屋は大いに盛り上がった。

翌朝、日も昇らぬうちから銀の塔へ飛んだケーナは壁画の守護者へＮＯ．９の塔を再起動させた事を告げ、改めて２００年前に起きた事を尋ねた。

『他の守護者カら聞いたくらいしか知らネエが、ほぼマスターから別れを告げラレたってぐれぇしかわからネエな』

結果は特に変わらず。　元々この地域は白の国の端、東に行けば

マップ無しの未踏エリアが広がっていたくらいで、銀の塔の試練を受けに来た者以外ではプレイヤーを見た記憶はない。　東側は何時かバージョンアップで新エリアになるんじゃないか？　とかギルドメンバーと話し合ってたりはしたが、結局それは実装されたのかは不明。

　その後はアイテムの補充をしてから塔を出て村へ戻ったのだが、宿屋で朝食を食べていると見なれぬ顔が近づいて来た。　ドワーフが三人に、眼鏡をしたひょろ長い印象の女性が一人。　彼女と彼等は自分達がヘルシュペルから来た技術屋である事を告げると、単刀直入に井戸の水汲み機について質問して来た。

「あれは貴女が作られたと御聞きしたのですが、どの様に造られたのですか？」
「え、普通に【技術技能（クラフトスキル）】でレシピ通りに実行しただけですけれど？」
「おお、くらふとすきるなる方法があるのですか！？　でしたらその製造方法をぜひ伝授して頂きたい」
「伝授しろといってもなあ、前提条件が色々必要ですけれど？」

　アイテムボックスから一本の人の腕ほどもある丸木を取り出すと、その場で【技術技能（クラフトスキル）：加工：仏像】を実行。　丸木を包み隠すように翠の小さな竜巻がケーナの手の中に発生し、僅かな時間で消えた後には全高２０ｃｍくらいの木彫りの観世音菩薩が出来上がっていた。　前提条件で覚える技能ではあるが、覚えた後は使わないスキルの内のひとつである。　クエストは人身御供の代わりに湖の主に人形を納める依頼で、造ると何故か日本古来の仏像がランダムで出来る。

「最低コレくらい出来ないと、教えたとしても使えませんけど？」

ウインクして格好つけたつもりのケーナの前で、四人は恐れ戦いていた。　耳を澄ますと「こ、古代の御技だ」とか「アレは伝説の！？」とか聞こえてきたので、大体の事情をケーナは察した。　カータツが【技能（スキル）】を使わないで弟子や職人を使って舟を作っている理由を思い出したからである。

（そういえば、技能がすたれてるとか退化してるとかマイマイが言ってたっけ？）

などと思い出すケーナの裾をリットが引っ張るのに気が付く。

「どうしたの、リットちゃん？」
「おねーちゃん、それはなあに？」

彼女の指差す方向はケーナの手にある木彫りの観世音菩薩。　デモンストレーションで造っただけだし別にいいかと思ったケーナは、リットにそれを「はい、あげる」と差し出した。　当然ソレはマレールにも目に入るもので。

「なんか随分こまかい意匠をされてそうだけど、いいのかい？」
「構いませんよ。　特に何かに使うって訳でも有りませんから」

リットはキラキラした眼でそれをテーブルの上に置き、うっとりと眺めている。　朝食の席だったので商隊の皆や、炎の槍団員の目にも止まる事となり、何を例えて彫った物なのかしつこく聞かれた。

故郷で慈悲の女神だったと言ったら、当然ハイエルフの崇める女神だと勘違いをされたが、訂正するのもアレなので勘違いさせておく事に。　最終的にはエーリネが「これは売れる」宣言をし、薬師如来や阿修羅像や弥勒菩薩、御地蔵様が幾つかテーブルに並ぶ羽目

に。　その後、技術者達にはケーナが地面に絵を書いてギアの仕組みを伝えたが、キチンと理解してくれたかどうかは不明である。

　翌日には村を出て、今度は過剰なお見送りは無かった。　二日も進むとエッジド大河の本流にぶち当たる。　これより下流に幾つか支流が合流するとはいえ、王都辺りの川幅まではない。　それでも対岸までは２～３００ｍもある。

「どうやって渡るんですか、これ？」
「半年くらい前までは、丸太を繋ぎ合わせただけの橋があったんだがなあ……」
「大水で流されてしまったんですよ」
「はぁ……」
「……で、ここからがケーナ殿を雇い入れた本題なのですが」
「任せた」
「は！？」

　一瞬呆気に取られたケーナ。　彼等の言わんとする意図を徐々に理解して、額に手をやり頭痛を抑えた。

「丸投げですか……」
「ケーナ殿程の魔導士でしたらこの程度、困難には入らないでしょう？」
「うーん」

　けして早くはないが、水量が膨大な流れに悩むケーナ。　アービタの手がポンと肩に置かれた。

「ま、軽い気持ちでやれや。　無理だったら無理で仕方がないと、

旦那も理解してる」
「ここまで来てそれはないでしょう？」
むむむ、と腕組みして川に向かって唸る彼女の姿を見たアービタも失笑した。

――とりあえず、第一案。橋を架ける。

「架けられるのかっ！？」
「なんですって！？」

そんな莫迦な。驚く一同の中で、発案したケーナだけが眉間に皺をよせて、物凄い嫌そうな顔をしていた。そんな表情から察したエーリネは即却下、ケーナが安堵したのは言うまでもない。理由は言わずもがな、木を数十本単位で切り倒さなければならないから。

「凍らせたりはできねーのか？」
「やってやれない事はないですけれど、堰止める形になりますから、その内諸共に流されるかも……」
「やってやれない事は無い、ってトコにビックリッスよ……」

当人は無難なところを述べただけなのだか、聞いてる方はあまりの規格外さに苦笑するしかない。

――第二案、魔法で【引き寄せ】るか、【水上歩行】。

「その【引き寄せ】ってのは何だ？」
「見える範囲の個人を手元まで引き寄せるんですよ。　断崖絶壁とか登るのに使います」
むしろそんな感じのクエストから取得した。　しかし、アービタは一点に引っ掛かりを覚える。
「個人？」
「ええ、今まで人以外を引き寄せた事はないもので。　馬車に掛けたら馬車だけが来るのか、中身も無事なのか、その辺が不明です」
これにはエーリネが難色を示す。　商品を蔑ろにしては商人の名折れだからだ。
「じゃ、【水上歩行】しかないですね」
【飛行】は自分にしか使えないし、乱暴なところで【召喚魔法：ドラゴン（大）】で運ばせる手段も考えたが、1日も進まずにヘルシュペルの関所があると聞き、目撃された場合の釈明が面倒なので諦めた。
【水上歩行】の利点は、水上であれば、一度掛けた効果が永続な所。　欠点は平坦な場所に限られる所と、途中で水以外の物を踏めば効果が切れる事だ。　数人が首を傾げるので、ケーナは例を上げてみた。
「つまりは、この魔法を掛ければ寝っ転がっていても流れに乗って、王都まで辿り着けますが。　途中で石とか流木を踏んだら溺れます」

これだけ聞ければアービタが自分の団で割り振りを決める。　馬車一台につき、先導で露払いに1名と上流側からなにかが流れてこないかを警戒する者を1名配置。　真っ先にアービタとケーナが対岸側の安全確認に一度渡り、セフティスペースを確保する。

「って言うか、真っ先に歩きたかっただけじゃないの？　アービタさんは」

「いや、こりゃすげえな。　嬢ちゃんの魔法は何でもあるんだなあ」

おそるおそる水上に足を踏み出したアービタに、残った者達から「おお～！」と感嘆の声が上がる。　そのまま水中に何か居ないかを確認しつつ対岸まで移動。　とは言え透明度はソレほど高くないので伺うくらいしか出来ない。　対岸に着いたら周囲を警戒してみるが、それ程危険そうな物は見当たらないのでアービタが残る。もしもの時があるので【召喚魔法：水精】でアービタを守らせる様に命令しておく。

「うーん、これに守られるかと思うと自分が情けなくなるな……」

見た目は手に乗るくらいの水魚な為、アービタは疑わしそうに自分の周りをぴょんぴょん跳ねるソレを見ている。

「危険が迫ったら、アービタさんがその危険の前に身を投げ出せば、その子が守りますから」

「冗談じゃねえ。　そんなの自分の名折れになるじゃねえか」

先ずは1台目に箱馬車が、エーリネ自ら先陣を切って行く事に。　馬三頭と馬車と団員二人に魔法を掛けて、用心の為ケーナが後ろを着いていく。　皆がはらはらと見守る中、特に問題なく渡りきった。　水魚ファンネルを纏ったアービタが「騒がしい方が野生動物

も避ける」と言い出したので、残りは二台づつ。　護衛対象を長時間分割させる訳にもいかないと言う観点から。

箱馬車と幌馬車が渡りきったところで、残りの幌馬車二台と団員へ魔法を掛けて、ケーナが再び最後尾やや後方に着く。　異変は渡りきる直前。　対岸１０数ｍ手前で、五台目に繋がれた馬がいきなり甲高い嘶きとともに棒立ちになった。　団員やケーナが反応するより速く、水中から伸びたアームの様なモノが下流側の馬の首を捕らえ、水面下へ引きずり込んだ。　当然馬具で繋がれたままの馬車すらも斜めに傾くし、片方の馬もムチャクチャに暴れ出す。　対岸からアービタが「綱を切れ！」と叫んだ所で、困惑していた団員も慌てて水中に沈み掛けた馬側の綱を斬る。　追いついたケーナが【獣遣い（ビーストマスター）】で片方の暴れ馬を静かにさせ、早々に岸に上がらせた。

「び、ビックリした……」

突発的な事態に慣れてないケーナは、緊張感が切れて地面に座り込む。　事前警戒用に幾つか能動技能（アクティブスキル）を立ち上げてはいたが、直接ケーナに向かう脅威ではなかった為、殆どが意味を成さなかったらしい。　しかし、団員達からは「いい対応だった」や「助かった」とねぎらいの声を掛けられていた。

団員へ対応の遅さをたしなめたアービタは、多少色の変わった水面を苦い顔で見つめる。

「何ですか、今のは……」

「ライガヤンマのヤゴだろう」

チラリと水中に見える影だけでも馬よりも大きい。　スーッと深みへ消えていく影にケーナは身震いした。

「こっわぁ……」

「あれだけデカいと騒いでも無駄だったか…。　すまん旦那、見通しが甘かったらしい」

「人命や品物に被害もない様です、結果だけみれば上々でしょう。　ケーナ殿のお陰もある事ですし」

馬車内の商品チェックを済ませたエーリネが頭を下げたアービタを労る。　問題は減った馬と、繋がれたまま暴れたせいでびっこを引くもう片方の馬だ。

「ケーナ殿、治療とかは？」

「はい、できます！」

【魔法技能（マジックスキル）：単体回復：デュールＬＶ１：ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ】

ぽわんと薄青く灯った手中の光が、馬の怪我をみるみるうちに癒やす。　皆がケーナの魔法に興味津々な中、アービタとエーリネは減った馬の代わりを箱馬車を引く三頭から間に合わせで使う話をしていた。

「多少全体の速度は落ちますが、ケーナ殿のお陰で日数は短縮されています。　構わないでしょう」

「仕方ない、この失態の埋め合わせは後に回すか」

「アービタ殿が卑下するものでもないでしょう」

打開策の話し合いの最中、背後からどよめきが聞こえ、振り返った二人の視界の中。　ケーナが手前に白い魔法陣を展開していた。

「おい、嬢ちゃん。　何をする気だ？」

「馬代わりになるモノを喚びます」

「は？」

魔法陣から膨れ上がる白い炎、黒い影がそこから皆の前へ躍り出た。

12話　魔法の利便性を追求しよう（後書き）

主人公の使う材木や植物素材などは基本的には、市場などで仕入れたもの。

13話　国境を越えてみよう（前書き）

初めてのシーン。色々と酷い、そして短い。

13話　国境を越えてみよう

そして喚び出した二頭目をほぼ全員が遠巻きにして見ていた。

くぅ～ん

「ええっ！？　駄目ですかー？」
「他の馬が怯えるからダメだ！」

かろうじて前に出てきたアービタにダメ出しされて落ち込むケーナ。　その頬を元気付けるように舐める三頭犬（ケルベロス）。

馬サイズと言う共通点から喚び出されたコレ、全員が見た瞬間慌てて逃げ出したのだ。　暴れかけた馬共々幾らか離れた場所で此方を伺っている。

「仕方有りません殿（との）。　所詮人、我等とは相容れぬ身なのです」

仰々しい言い方でケーナを慰めるのは、赤毛で天パな髪に口周りの立派な髭も雄々しい壮年の男性。　革の軽装に槍を持った出で立ちで、下半身は馬。　一頭目に喚び出された人馬（ケンタウロス）だ。
ゲーム中で従順だった彼は、召喚した理由を説明すると。

「申し訳ありませんが殿。某（それがし）、荷馬の真似事をするのは遠慮したい」

……と拒否られてしまった。　と言うか、実際に召喚すると普通に会話出来る仕様に、喚んだ側がビックリしている。　「話し方が武士っぽいのは仕様なのだろうか？」と自問するケーナだが、他の者が気にして無いので聞くわけにもいかない。

仕方なく三頭目に着手するケーナ。　アービタが落ち着けとネゴシエイトする中、もこもこのうり坊が出現してケーナに「ぴー」と挨拶をかわす。

「どーです、これなら愛らしくて文句ないでしょう？」

つぶらな瞳、口元からちょこんとのぞく小さな牙にまるまると肥えたサツマイモのような体躯、お尻にちみっと生えた尾。　可愛いもの好きな人なら問答無用で駆け寄って、抱き締めたい愛らしさだ。

しかし、アービタは一蹴した。

「……そんだけデカくなければな」

喚び出したケーナの身長の倍程もある大きさ、体高は軽く３ｍで一回り小さい幌馬車サイズ。

「ごめんね、ぴーちゃん。　申し訳ないんだけど、馬車曳いてくれないかな？」

ぴぴー！

鼻を上向きに胸を張ろうとしているが、ころころな体型の為ままならず。　ケーナに頭を撫でられて「ぴー」と喜んでいた。　大きさを除けば特に怖くないので、炎の槍団員は安堵しながら馬車影からでてくる。　ケルベロスとケンタウロスは【姿隠し】で最後方に配置し、何かあった時に備えさせた。　うり坊は馬車と繋げないので、綱をくわえて引っ張ってもらう。

団員の一人がおっかなびっくりうり坊を撫でて、ケーナに尋ねた。

「見た事の無い獣ですけど、なんて奴です？」
「まだ残ってるか知らないけど、クリムゾン・ピグの子供だよ」

アービタ諸共群がっていた団員達がビシッと硬直した。　何人かは恐る恐る周囲を伺う。

クリムゾン・ピグとは大陸に生息する野生動物の中で最大級の大きさを誇る猪で、南の山脈地帯に僅かな数が時偶に目撃される。頭から尾にかけて鬣（たてがみ）が炎を纏うのでその名がついた。　成獣は体高１０m、体長２５mぐらいまで成長し、見かけによらず随分大人しい。　但し、母子に手を出した場合は報復を覚悟せねばならない、彼等の突進は街壁ですら紙の様に引き裂く。　そんな獣の子が目の前にいる、つい親を探して目が泳ぐのは仕方が無い条件反射だろう。

ゲーム時代はレアモンスターで、『硬い・痛い・しぶとい』とその強力さにみんなの嫌われ者であった。　ケーナすらも単独で戦うのは遠慮したい相手だ。

気にはなる問題であるが、一行には日程が大事なのでもたもたするよりは早々に出発する事になる。　ケーナは命令やらしなければならないので、うり坊の曳く幌馬車の傍に立つ。　それよりやや後方に姿の見えない三頭犬（ケルベロス）と人馬（ケンタウロス）がついて商隊は出発する。

アービタやエーリネの話によると直ぐにヘルシュペルの関所が存在するらしいので、今夜は其処で一夜を明かさせてもらう事になると説明されている。　ケーナは野営になると炎の槍の団員の話が楽しみになっていた。　今まで何処に行き何があったのか、皆がそれはもう面白おかしく脚色しながら話すから。　団欒の様に焚き火に囲まれた場が毎晩待ち遠しくて、今からでも頬が緩む彼女だった。

ふと、その耳が囁く木々の声を捉えた。

――キヲツケテ、――アクイアル。

風に揺れる葉ズレの音に混じって静かに周囲の樹木が騒ぎ出す。
それは進むにつれて大きく、そして増えて行く。　うり坊の背を軽く叩いたケーナは、近くを歩いていた団員に断って先頭へ向かう。
集団戦闘に慣れていない彼女は、一時的に傭兵団に組み込まれる形で護衛のなんたるかをアービタに教わっていた。

「アービタさん！」
「おう、嬢ちゃんも気付いたか。　どうもおかしい気配が流れてやがる、おそらくはあそこからだな」

既に色々と察していたアービタは、目前に見えてきた門戸の無い馬車が二台は並んで通れそうな間隔の門柱と、左右に広がり森の中まで続く白い壁を指差す。　槍を持った歩哨が二名、微妙に揺れながら立っている以外は誰も見当たらない。
副長に声を掛けて商隊を止めさせたアービタは、エーリネの乗る箱馬車に近付いて襲撃の危険性がある事を伝える。

「まさかヘルシュペルがですか……？」
「そうとは限らねえな、国同士がどうにかなったってんなら国境なんか呑気に開けてられねえ」

街道はそれ程幅がないのでエーリネは手早く指示を出し、斜めに重なる様にして停車させる。　アービタはケーナと他二名を、常に

馬車の護衛に付かせてから国境門へと声を飛ばした。

「おい！　さっさと出て来な！　種は割れてるぜ！」

風に乗って舌打ちが重なり、警備兵の横から黒いローブを纏う杖を持った顔色の悪い男が姿を現す。　幾つかの舌打ちが森の中から響いたのを感じ取ったケーナは副長にそれを伝え、自分に【姿隠し】を使ってから後ろへ移動する。　三頭犬（ケルベロス）に右側の森の伏兵を排除しろと命令を出し、人馬（ケンタウロス）に馬車左側の警護を任せた。

本人は箱馬車の上に移動、【姿隠し】を切って補助魔法で援護に徹底する。　狙い撃ちされやすいがこの中では一番防御力が高い為、囮になるつもりだ。　その旨は既にアービタも了承済みで、普段は嬢ちゃん呼ばわりしているが、仕事になると男女関係なしに役割を振ってくれるのはケーナにとっても有り難い。

ゲーム時代は範囲でも敵味方の区別が付いていた攻撃魔法だが、流石に乱戦で使うのは躊躇われた。　周囲が森のせいもあるので、今回は自粛する。

「勘がいいのがいるようだな。　だが生憎とお前達はここで終わって貰う。　女と荷物は俺達が有効活用してやろう」

下卑た笑いを浮かべた男が杖を振り回して降伏勧告らしきものを告げてくる。

アービタは首をすくめて鼻で笑ってやった。

「そんだけ下品じゃ、モテるわきゃーねーな。　なあ嬢ちゃん？」

「レベルも低そうだし……」

「きっ、貴様等ァ！　暴言を吐いた事を後悔させてや……」

「ぎゃあああっ！？」

顔色の悪い男が言い終わるより先に、森の中から恐怖と絶望がない混ぜになったかの悲鳴が轟いた。　同士に足元からぞっとする獣の咆哮も響き渡る。　【恐怖】の効果を持つ三頭犬（ケルベロス）の範囲攻撃【地獄（テラーハウル）の遠吠え】は、団員達にはちょっとビックリする程度でしかなかったので、敵味方の区別は付いてるようだ。

恐怖に囚われた伏兵達、胸当て程度の革鎧に短剣や弓矢を持った者達が、片側の森から次々に飛び出してくる。

【魔法技能（マジックスキル）：上位物理防御（ラガ・プロテク）上昇：ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ】

同時に詠唱待機していたケーナの魔法が味方全体へ効果を及ぼした。　瞬く蒼い輝きが傭兵団員のみならず、商隊メンバーや馬、果ては馬車にまで降り注ぐ。

自分の身体が仄かに蒼く光るのに驚いたアービタだったが、やるべき事を忘れてはおらず、団員へ発破を掛けて恐怖に駆られた野盗達へ止めを刺す。　馬車の上からその光景をモロに眼にするケーナは、すっぱい思いが湧き上がるのをなんとか心の内に押し返した。

今後の憂いを断つ為と事前に説明されていたのもある。　今の世の中を良く知らない自分が口出していい問題だと思えなかったからだ。

ケーナの葛藤などは関係無しに襲撃はまだ終わりを見せていない。

功を焦ったのかチャンスと見たのかは分からないが、反対側の森から同じ様に数人の野盗が飛び出して来た。

しかし、視認出来ていないがケーナの召喚獣の防衛陣の只中だ。

馬車に近付いた者が唐突に真上に吹き飛び、顔面に衝撃を受けて横へ弾かれ、空間にいきなり出現した槍に串刺しにされる。　瞬時

に三人を無力した中央に人馬(ケンタウロス)が姿を現し、人を串刺しにしたままの得物を掲げ、高らかに名乗りを上げた。

「やあ、やあ！　遠からん者は音にも聞け、近くば寄って目にも見よ！　我こそは部族にその人ありと言われた人馬(ケンタウロス)のヘイゲルなりーっ！！」

これには敵味方呆気に取られた。　アービタなどは槍を振るう手を止めて「おいおい、お前の独壇場じゃねえよ」と苦笑い。　顔色の悪い男は「な、……なんでこんなところにあんな者が！？」と腰が引けて。　ケーナに至っては「名前、あったんだ……」とおそらくこの中で一番酷い事をポツリと零した。

歩哨の格好をしていた野盗が、頭を潰せば終わると判断してアービタ目掛けて付き進む。　しかし、彼の守護を命じられていた【水精：水魚】から飛んだ【水の刃(ウォーターカッター)】に至極あっさりと胴体を両断され倒された。　槍を構えて迎撃体制を取ったアービタは肩すかしをくらってがっかりする。

馬車の上から降りたケーナに、森の中から姿を見せた口の周りを真っ赤に染めた三頭犬(ケルベロス)が近付く。　少々おっかなびっくりに頭を撫でてやると「くぅ～ん」と満足げだ。

「で、アンタはどうするんだ？　手下はいなくなったぜ」

「く、くそっ！　……だが俺にはまだコレがある！」

ニヤニヤ余裕の表情で、顔色の悪い野盗の頭を挑発する炎の槍傭兵団全員。　憎々しげに顔を歪めた男は片手に持った杖を、見せつける様に掲げた。　アービタが負け惜しみと思って口を開こうとした時、顔色の悪い男は起動呪文(コマンドワード)を紡いだ。

【内包する猛き炎撃（ブートアップ　ファイヤーボール）】

一瞬でその頭上に形成された赤、朱、紅を混ぜ込んだ炎の球体が出現する。　誰かが何かを言いかけるよりも早く回転しながら直径１mに成長したそれは、施術者の命に従い射出された。　……ケーナ目掛けて。

二頭の召喚獣を労（ねぎら）っていた為に背を向けていた彼女が、異変に気付き振り向いた瞬間。　爆撃の使徒は着弾、衝撃波を伴い爆発。周囲の鼓膜を無音にさせつつ黒煙と火の粉を撒き散らす。　商隊からも悲鳴が上がる中、ケーナの居た所は燃え盛る炎と黒い煙に包まれた。

「嬢ちゃんっ！？」

「は、ははははっ！　どうだ、この俺様に逆らうことがどういった意味か分かったか！」

団員が憎々しい視線と共に獲物を握り締め、今にも飛びかからんと怒声を張り上げる。　逆に闘争心を煽ったのに気付かない男は満足気に高笑いを続ける、……滑稽なほどに。

「馬鹿かお主。　殿がこの程度の炎でどうにかなる訳ではなかろう？」

わうん！

男の表情が笑ったまま固まった。　アービタ達も声の聞こえてきた方向を振り返る、常人には死が訪れていたであろう爆撃の場所を。

青白い燐光が炎と煙を吹き飛ばした。　槍を気だるげに持つ人馬（ケンタウロス）と、三つ首全部が牙を向き出して威嚇する三頭犬（ケルベロス）。　その中央に左

腕に手甲ごと装着された銀の弓を構えるケーナの姿があった。　足元には白い魔法円。　陣から青白い燐光がとめどなく溢れ、上昇し、左腕の弓と弦の間に収束して行く。

　大地に白い霜を振り撒きながら周囲が氷原に変わっていき、顔色の悪い男もアービタ達も恐ろしい現実離れした魔力がその左手に統合されるのを見た。　強力な術式が構築、何色をも寄せ付けない純白の矢がそこに完成される。

「な……、なんだ、き、貴様っ！　そ、その……魔力は！？」

「私に……、傷をつけたかったら！　せめてコレくらいの術を使いなさいっ！！」

【魔法技能（マジックスキル）：ｃｏｎｖｅｒｔ：青氷の白夜（リザ・ラ・ギガ）】

　シュカッ　……と射出音はあっさりとあっけなく、見る者が見ればモノに対する音としてはあまりにも簡単に。　しかし着弾する方はそんなモノでは済まされない。

　自分で捻りだそうだなんておこがましい程、強力な魔力で編まれた至宝のブツが。　万人に死が訪れると言いきれる具現化された絶望が、自分に刃を向けているだなんて誰が信じようか。　こんなものは御伽噺の中で魔王に向けて放たれるモノだろう、クライマックスに。　それが話の過程はどうあれ今正に目の前に！

　ガラスが砕け散る音が多重奏に響き、森に囲まれた国境の街道沿いに真っ白に彩られた華が咲く。

　大小の氷の六角柱で構成され、大地に根付いた華の様に透明な純白のその中央。　恐怖に顔を歪めた、先程まではたしかに人だった雪像が立っていた。　その左右に広げた腕がぽっきりと折れて落下し、氷の花びらに当たってコナゴナになったのを皮切りに、全身が雪解けに晒された雪達磨のごとく崩れた。

「……、ふぅ……」
「お見事です、殿」
わううん
ぴー

召喚獣に褒められてちょっぴりニヤけつつも手を振って謙遜するケーナの姿に、重苦しい空気を感じていたアービタは頭を振って彼女の背中を引っ叩いた。パシーンと響くいい音に、光景に飲まれていたその場の皆はハッと自分を取り戻す。

「ふぎゃっ！」
「すげえな嬢ちゃん！　あんなものを食らって無傷だなんてよう！」

そう褒めたつもりのアービタは、彼女の表情に暗い影が差したのを見てうろたえる。

「ど、どうした!?　何処か怪我でもしたのか?」
「ええ、髪の毛が火にちょっとやられて……」
「……なんだよ。ビックリさせんなよ、重症かと思ったじゃねーか」
「ちょっ……、女性にそんな事を言うなんて！　アービタさんてば恋人さんに愛想つかされちゃいますよ」
「この俺にそんなもんが居るよーに見えるかァ！」
「えええええっ！　居ないんですかっ!?　アービタさんてば面倒見が良さそうだから、付いて来そうな娘が二人や三人……」
「……嬢ちゃん、ちょっとお前の俺に対する認識と言うものに付い

て話そうぜ。　朝までみっちりと」
「私までその毒牙にっ！？」
「今、毒牙って言ったか、あぁん？」

仲の良い兄と妹のじゃれ合いみたいになってきた二人の応酬に、団員達も顔を綻ばせる。　解り過ぎる程はっきりと彼女の力を証明した形がそこに華咲いているが、それで彼女自身が強力な能力をむやみに振り回すだけの人物で無いのは、この旅に関わる全てのメンバーの知る所だ。　……使う方向性は時々的外れなところがあるけれども。

「今から王都の宿屋の裏まで来い！」
「何処の！？　って言うかどうやって！？」

ぎゃいぎゃいと続く喧嘩の様な微笑ましい雰囲気を中断させるのは心苦しいが、副長は心を鬼にして二人の間に割って入る。

「……団長もケーナさんも、その続きは後で朝までじっくりやって貰うとしまして。　とりあえず後始末の指示をお願いします」
「副長さんまで決定事項っ！？」
「あー、わってるよ。　まずは死体の片付けだな、それから国境の向こう側に広場があるから、旦那達はそっちで野営の設営を頼まあ。　二人位はそっちの護衛に付けよ？」
「それなら護衛は……、ヘイゲルとぴーちゃんお願いね？」
「承りまして御座います、殿」
ぴぴぴー

あらかた片付けが終わって、全員が夕食にありつけたのは陽もとっぷりと暮れた時間だった。　あれから周囲を探索した結果、骨までこんがりと焼けた死体を四人分発見した。　元々この国境を守っていた兵士のものだと、何回かここを行き来しているエーリネが確認。　後でヘルシュペルの王都に着いたら通商ギルドに遺品と共に報告するそうだ。

「西を拠点とする盗賊がこっちまで流れてきやがったのか……」
「そのようですね。　こんなものまで所持するとは侮れなさそうです」

雰囲気が暗くなった空気を払拭するかのごとく、やたらと楽しそうな声が響く焚き火の周り。　団員と商人達が今までの体験談を些かオーバーぎみに脚色して、ケーナや子供達の楽しそうな笑い声が響く。

馬車の陰で盗族達の動向について憶測を交わしていたアービタと副長は、昼間倒した盗賊の頭が持っていた杖を慎重に扱っていた。

エーリネは知らなかったが、ケーナはこの杖が何なのか良く知っていた。　【炎撃（ファイヤーボール）】（コマンドワード）を起動呪文だけで誰にでも使用できる汎用のアイテムらしく、２００年前はありふれた品だったそうだ。

『これは……使い捨てだけど、全部で１０回使える奴ですね。　後7発撃てます』
『こんなのがごろごろしてたのかよ、２００年前は……』
『売ったら良い金額になるんじゃないですか？』
『こんな何処の誰に渡るか分からないアイテムは、売るよりアービタ殿に渡した方がマシですよ』
『え”？　俺等が持つのかよ……』
『何でしたら３０回使える奴でも新しく作りましょうか？　便利で

すよ？』

『『絶対に作るんじゃないっ（作らない様にお願いしますっ）！！』』

今そこで普通の女性と同じ様に笑っているが、改めてその規格外さを知る事になったと言うべきか。　それでも変わらない関係に安堵すべきか。

「味方で良かったですね」

「其処に落ち着くのか、お前は……」

13話　国境を越えてみよう（後書き）

指摘されましたので、後書きと前書き的なものは活動報告へ。

１４話　予期せぬ出会いをしよう（前書き）

のんびり回です。

１４話　予期せぬ出会いをしよう

夜が明けてからの行程は慎重に進められた。　何が待ち受けているのか分からないので、ケーナの移動補助魔法も断って。
その代わりに何時襲撃に合ってもいいようにと、ケーナは防御上昇魔法を使い有事に備えた。　皆には体力を心配されたが、日中はクリムゾン・ピグの召喚と魔法だけでＭＰ全体の半分も減らない。
本人にとっては別に心配される事でもない実状であるが、連発して使用して貰う方は気が気で無い。

これも団員達との戦闘連携の会合で発覚した事だが、一般的な魔道士は魔法を使い過ぎると体力切れで倒れるらしい。　ゲーム中とは違いＨＰがＭＰの役目も果たしているのか、ＭＰが体力ゲージとして機能しているのか。　それともゲームに関係した人物だけしかＭＰを持たないのかが不明だ。

（そういえばリットちゃんはどうなるんだろう？　【サーチ】でＭＰがあるって事は冒険者の素質があるって意味だよ……ね？）

心配する一同とは裏腹にそれからは一度も盗賊の襲撃は無く、魔物が襲い掛かる事はあったが、１２日の行程を経てヘルシュペルの王都へと到着した。　クリムゾン・ピグを連れての入国は問題有りそうなので直前に送還した。

この都市はフェルスケイロの王都とは違い、山裾のなだらかな斜面に建築されている。

見た目はスイスの別荘地か、高山都市の様に。　一番ケーナを呆れさせたのは都市を見下ろす位置に建てられた王城だ。　白い城壁は西洋風であるが、その中央に燦然とそびえ立つのはなんと日本の城。　左右の巨大な風車に挟まれたソレを見て、和洋折衷もここまで混濁してるのかと思うと苦笑いしか出てこない。

「ああ、そういえばあの城、フェルスケイロの廃棄区域に建ったのと似てますね。　気付きませんでした」
「あー、あれか……。　あの城も元々この地に建っていた砦だったと言う話だからな」
「砦……。　ってことは紫の国のギルド『暁の鼓動』かな？　たしかあそこは武装や見た目が武士だったなあ」

街門を通ってエーリネの商隊が入り込んだのは都市の中央段。
この段より上側に商家や貴族街が、下側に市場や一般的な住宅街がギリシャの街並みみたいに広がっている。　山裾はさらに下に続いていて、遥か下の方には沢山の湖や幾つにも枝分かれした川が、水気溢れる清楚な風景を造り上げていた。

「そういえばケーナ殿はどなたかに手紙を渡す依頼がありましたね？」
「渡す奴は知っているのか？　嬢ちゃん」

言われて脳内よりマイマイに告げられた名前を思い出す。　……たしか。

『堺屋、ケイリック様です。　ケーナ』

真っ先にキーが答えた。　必要が無ければ一言も発しない為、ケーナ自身も彼の存在を忘れる事も多い。　心の中で礼を述べてその

まま口にする。

「堺屋って所のケイリックって人ですね（堺屋って時代劇みたいだなあ）」

ケーナからその名を聞くと驚いた顔のエーリネと、納得するアービタ。

「もはや驚く気も失せたっつーか、一々驚いていられねえっつーか……」

「交友関係まで規格外なのはケーナ殿の常、と言いましょうか。そこでしたら私共も取引をする所です、一緒に行きませんか？」

「すみません、お願いします」

ケーナが頭を下げ、皆がそれぞれの役目を果たす為動き始めた。ある者は荷物の運搬用の台車を借りに行き、ある者は荷物のチェックを始め、ある者は馬車から馬を外して専用の預かり所へ連れて行く。

アービタは団の半分を馬車の護衛に残して、宿屋を纏めて確保しに。

「じゃあ旦那、いつもの所で入れておくぜ。嬢ちゃんも一人部屋になるようにしておくからよ」

「ありがとうございます、アービタさん」

「礼はいいって、この旅の間は苦楽を共にする仲間だしな」

それでも礼を述べるケーナにアービタは頬を掻いて苦笑する。

商隊より離れ、エーリネの後を付いて街中を歩くケーナはキョロキョロと落ち着きがない。フェルスケイロに着いた時と同じ反応にエーリネは噴き出した。

「あ、すみません。　エーリネさんの護衛なのにキョロキョロしちゃって……」
「街中ではせいぜいスリに気をつけるくらいですか。　本当にケーナ殿は今をよく知らないのですね」
「お恥ずかしいですが、基本田舎者なので」

先ずは通商ギルドに向かいつつ、街並みを見ても理解し難い部分を説明してくれた。
ここから湖へ続くなだらかな坂に設置してある風車と、その間を繋ぐ線についてだ。　線にしか見えないのは【鷹目】を持つケーナでも何かの丸太にしか見えない。

「この王都は別名〝風車都市〟とか〝技術都市〟とか呼ばれます。水源があのように低い位置にあるので、風車を回して水を汲み上げ、丸太をくり貫いた管を通して都市まで上げるのですよ」
「井戸とかは無いんですか？」

ケーナの疑問に一際大きい風車、王城の左右に二基あるそれをエーリネは指差した。

「あれがそうですよ。　但し、とんでもない深さまで掘ったと聞いています」
「……はぁ～」

エーリネの説明に生きる努力って凄い、と感心するケーナ。　それを思えば辺境の村で会った人達の熱意に対して、少し適当過ぎた対応だったかなと反省する。

「次に会ったらキチンと説明してあげよう……」

ケーナの呟きに、お人好し過ぎる気がしないでもないエーリネだ。

二人が訪れた通商ギルドは真っ白な伏せたお椀型、一言で言えば白い大福。　中の受付で用件と共に遺品を受け取った職員は慌てて上司に報告し、奥の部屋に通された二人は幾つかの質問をされた。

日にちと場所と状況を伝えて通商ギルドを後にする。　ギルドはそれを騎士団に伝えて、後日に詳しい説明を聞きに騎士団から人員が赴くと伝えられた。

その次にケーナが連れて来られたのは左右に長い家屋、商家の中でも随分と大きい敷地面積がある所だった。　ここもまた周囲の家屋と一線を越すデザインで、白い壁に覆われているのは他と変わらないが、二等辺三角形を載せた様な斜面の屋根に並んでいるのは、なんと瓦だ。

手前の道にまで張り出しているのは、ジプシーの小さいテントに似た一時的に荷物を置くスペースみたいな物。

「なによこの和洋折衷は……」

「ワヨウセチュー……、妙な響きの言葉ですね？」

つい呆れた彼女の呟きを聞いたエーリネが首を傾げる。　なんと返せばと迷ったケーナは、東方と西洋の混じった文化と説明してみた。　エーリネはそれをゆっくり吟味し、もう一度建物を良く見てから深く頷いた。

「成る程、ワヨーセチューですか。　前々から何となく違和感を感じていたのですがそう言った事だったのですね、合点がいきました」

（あ、あれ？）

あっさり受け入れられて、逆に拍子抜けするケーナ。

竜人族（ドラゴイド）の人足やドワーフと犬人族（コボルト）の下男が荷物を持ってちょろちょろと移動している中を、すいすいと抜けたエーリネは商人らしき人達が引っ切り無しに出入りしている正面入り口に入って行った。

彼の説明によると『堺屋』と言うのはこの国でも国家になくてはならない商家で、大陸でもあちこちに手が伸びていて、通商ギルドにも影響力がある根源的な商人の家系だそうだ。　ここに睨まれたら商人としてやっていけないので、取引には細心の注意を払うとも言っていた為、ケーナは黙って護衛に専念する事にした。

「おや、エーリネ様。　今年はあのような状況でどうやってこの国に？」

「中々侮れない伝手を手にしましてね、持つべきものはやはり友人かと」

軽い挨拶から入って取り引きの話へ繋ぐエーリネと、ここの代表格と言えそうな雰囲気を纏ったエルフの青年（？）。　二人のやり取りを聞きながら、自分だと顔にでるからああいった交渉は無理なのだろうなーと、感嘆するケーナ。　そうこうしているうちに話は進み、最後にはがっちり握手を交わして交渉は終わった。

「本日、大旦那様はいらっしゃいますか？　フェルスケイロの方から手紙を預かって来たのですが」

「手紙ですか、拝見させて貰っても？」

「はい」

交渉のついでにと予めエーリネに渡してあった手紙を受け取る青年。　手紙をひっくり返し、差出人を確認した青年の頬が引きつった。

「ちょっとお待ちを」

返事も聞かずに慌てふためいた様子に、顔を見合わせて疑問符を飛ばしまくる二人。

暫く待って戻ってきた青年に押し込まれる様に奥へ通され、落ち着いた調度品に囲まれた静かな部屋に通された。　意味が分からず首を傾げるケーナとエーリネの前に、先程のエルフ青年を更に貫禄UPさせた美丈夫が現れる。

「これは大旦那様（ケイリック）、ご無沙汰しております」

「久方振りですなエーリネ様、相変わらず見事な手練手管と聞いておりますぞ」

座っていたソファーから立ち上がり深々とお辞儀をするエーリネを片手で制し、楽にするよう進めるとケーナの前に進み出ていきなり深々と腰を折った。

これに心臓が飛び出る程驚いたのはエーリネだ。『堺屋のケイリック』と言えば、百年も前に通商ギルドを立ち上げ、三国に渡って通商路を整備して商人の神とも称される人物だ。　彼が頭を下げる者だなんて王族以外に考えられない。

道すがらそれを聞いていたケーナの脳内には最大級の警鐘が。時既に遅く、次の言葉に思考が吹っ飛んだ。

「お初にお目に掛かります、お婆様。　貴女様の娘マイマイが長子、ケイリック・サカイと申します」

「……え…？」

「母からお婆様の御高名は聞き及んでおりました。　至宝の守護者であらせられる貴女様に出会えて、真に光栄で御座います」

エーリネは目の前で降って沸いた事実に唖然とするが、無言のケーナはその上を行くパニックになっていた。

（マイマイの息子って事はー、つまり孫っ！？　齢17にして孫とかじゃあマイマイが今の旦那以外にも夫を持ったかもしれなくて鼠算式にさらに孫や曾孫がポコポコと出て来る可能性があっていやこのケイリックにももう子供や孫がいたら私が曾祖母とかに……は、ははは）

「お婆様？」
「……ケーナ殿？」

微塵も微動だにしない彼女におかしく思ったエーリネは、失礼して目の前で手を振ってみた。
反応はない。　エーリネに肩を叩かれてハッと我に帰るケーナ。
深呼吸をひとつしてから改めてエルフの青年と向き合う。
さらさらの茶色い髪に濃い碧瞳、顔付きから何となくマイマイに似ているがスカルゴみたいにキリッとはしていない、むしろ柔和な優しい顔付き。

「やはり、道中魔法を使い続けて疲れてるのではないですか？」
「なんと、そんな事が！　さぞお疲れでしょう、粗末な宿屋に泊まるよりは部屋を用意させますので、此方でお休みを」
「あー、大丈夫です。　ちょっとショッキングな事実を突き付けられたと言うか……、マイマイ許すまじと言うか……」

なんとなくケーナから黒い感情が流れ掛けたのを察して視線を逸らすエーリネ。　正面からモロに悪意の欠片を浴びて硬直するケイリック。

「それに粗末な宿屋の方がゆっくりと寛げますから、お構いなく」

彼女の言葉に棘があるのを、身近な付き合いになりつつあるエーリネは感じ取った。

辺境マレールの宿屋やフェルスケイロ王都の宿屋に愛着があるケーナは、違う国の宿屋を結構楽しみにしていた。　素朴だけれど味わい深い料理や市場での買い食いは、半生以上口で物を摂取しなくなっていた彼女の趣味とも言える。

それを「粗末な」と貶されたケーナはすっかり臍（へそ）を曲げてしまう。

大人気ないと言われればそれまでだが、相手は地位も権力もある商人だとしても、孫と言われてピンとこない他人である。

マイマイは息子の存在を秘密にして対面させ、母を驚かそうとした。　しかし、予期せぬ一言で機嫌を損ねたケーナの中で、ケイリックは『気に喰わない』人物と分類とされてしまった。

片やその不機嫌な雰囲気を纏う、祖母たるケーナの自動起動した【威圧】に圧倒されたケイリックは萎縮していた。　相手は母親から寝物語に聞いていた太古の十三守護者の内一人、『機嫌を損ねれば身内であろうとも木っ端微塵』と聞かされた最凶の処刑人（全部マイマイのナマハゲ的たとえ話である）。　何処で対応を間違えたのかと軽いパニックになっていた。

流石にこの両者に挟まれては、如何なエーリネと言えども解決のし様が無い。　不機嫌なケーナを連れて堺屋から早々に退出するのが精一杯であった。

原因が分からなければ宥め様も無く。　ぷりぷり怒ってるケーナを伴って、いつもこの国に来るたびに使う宿屋に足を踏み入れたエーリネ。　旅の疲れを癒すべく、陽の明るいうちに酒宴を始めている炎の槍傭兵団一同が目に入った。　これまたいつもの事なので大して珍しくも無いが、同じ商隊の仲間に話しかけている三人の騎士がエーリネの方へ寄ってきた。

三人の内隊長格はエルフ女性で、何故か気の毒そうな視線がケーナの方を向いていた。

「あなたがこの商隊の責任者ですか？」

「ああ、通商ギルドの言っていた騎士団の方々ですね。　初めましてエーリネと申します」

「ヘルシュペル騎士団所属のケイリナだ。　早速で悪いが東の国境での事に付いて聞かせてもらいたい」

「ええ、なんなりとお答え致しましょう。　まずは……」

ケーナはその脇を抜けて炎の槍一同の方へ向かい、空いてる席にどっかりと腰を落とす。　誰が見ても機嫌が悪いのが丸分かりだ。

「どーしたァ、嬢ちゃん。　人込みで尻でも撫でられたのか？」

「人のお気に入りを貶されたんです。　腹が立つったらもう！」

「まあ、嫌な事は美味いモンでも喰って忘れちまえ。　おーい！　女将。　自慢の食事をコッチの嬢ちゃんに出してやってくれよ」

気心の知れた者達に囲まれたせいで多少は落ち着いたケーナ。　団員の注文ですぐ出てきたシチューを口にしたおかげでみるみるうちに機嫌を戻す。　彼女の纏う雰囲気が元の穏やかなモノに戻ったのをこっそり確認した団員達は、安堵の溜息を付く。

普段が温厚なだけ、先日の魔法の威力を見るに実力は折り紙付き。

怒らせておいたままだと流石に怖いからだ。　特に逆鱗に触れる可能性がある第三者が。

美味い食い物を与えておけば満足するので、すっかり操縦方法を関係者一同に理解されているとは思わないケーナだった。

「う～ん、美味しい！」

「味わってるところ済みませんがケーナ殿、こちらへ来て頂けますか？」

素朴なシチューを堪能し終わったところで、騎士段との話がひと段落付いたエーリネに呼ばれて彼のテーブルに近付くケーナ。　そこにいた三人の騎士のうち、隊長格だったケイリナと名乗ったエルフ女性騎士だけが残っていた。

ヘルシュペルは現在大陸にある三国中最も人間以外の異種族が多く、国を治めている王族がエルフと言う国柄ではないが、重要な役職にエルフ族が多い。　もちろんドワーフや竜人族（ドラゴイド）もいるが。

その騎士はエーリネの隣にケーナが座ると同時に立ち上がり、頭を下げる。　その場に居た者達が面食らう程突拍子も無い仕草だ。

「ちょっ、ちょっといきなり何で頭を下げるってー！？」

「どうも弟のせいで貴女の機嫌を随分損ねてしまった様だ。　あれに代わり私が謝罪する、申し訳ないお婆様」

「え……は、……ええ！？」

本日二度目の『お婆様』と呼称されて面食らったケーナだったが、よくよく観察するとケイリナの面立ちがケイリックによく似てるのに気が付いた。

「貴女、アレの血縁者？」

「そうです。　私はケイリナ・サカイ、ケイリックの双子の姉です。
それにしても『アレ』呼ばわりとは。　お婆様に余程の失礼を働いたようですね、弟は……」

頭を上げてから眉間にシワを寄せて腕を組む女性騎士、あまりの早い対応にエーリネが首を捻る。

「つい先程の事なのによく知っていますね……。　こちらに来る途中で堺屋に寄ったのですか？」
「いや、我々は双子だからな。　顔を合わせなくても会話する能力を持ち合わせているのです」
「ああ、【特殊技能（エクストラスキル）：以心伝心】かあ……」
「流石お婆様。　以前に母からそういった名前の能力だと伺った事が有ります」

いくら【スキルマスター】なケーナにも【特殊技能（エクストラスキル）：スクロール作成】で他人に伝授できない技能（スキル）がある。　そのひとつが【以心伝心】だ。　これはゲーム内で兄弟姉妹親子の関係者と七十五文字制限の電報メールをやり取りする為のお遊び技能だ。　仲のいい友人同士で血縁関係を決めて運営側に連絡、双方の同意をもって仮の血縁関係が交わされた者だけがこのスキルを得る。　端的に言ってしまうと義兄弟の契りやら姉妹制（スール）やら桃園の誓いやらを交わせばいい。
もちろんケーナにもゲーム中に契りを交わした兄弟姉妹はいるが、対象に対しての【以心伝心】は全部音信不通になっている。　何故か交わした覚えの無い息子娘達もこのスキルを持っていて、再会した時は返事が無いと駄々をこねられた。　子供達に対してケーナ側が持っていないのだから、返事のしようもないし、受け取り様も無い。　仕方なく、もっともらしい嘘を並べて誤魔化した。

（結界に遮断されていて忘れてた。　とか、苦しい言い訳をよくも

信じたわねスカルゴ達……）

既に怒る気の無いケーナは、真摯に頭を下げるケイリナが悪い訳ではないのでその謝罪を受け入れた。　それを聞いたケイリナが凄くほっとした顔で安堵していたのが気になって、理由を聞いて見た。

「それは母によく聞いていましたから。　『身内でも容赦なく木っ端微塵』や『怒らせると魔神の如く』とか……」

「しないわよっ！！」

「嬢ちゃん……、流石にソレはひどいと思うぞ」

「ケーナ殿、昔はそんな事を……」

「し、してませんよっ！！　私がそんな無差別殺人鬼に見えるとでも？」

団員達は顔を見合わせると考え込んだ。

「「「氷の華とか？」」」

「なんですか皆してその反応はっ！？」

ケーナの焦った反応が面白いので、アービタ達は宥めたりからかったりしていた。　……が、からかいすぎて臨界点を突破した彼女の怒りに触れ、全員が地獄の釜を開けるのに時間は掛からなかった。

尚、その中にとばっちりでケイリナが巻き込まれたのは余談である。

15話　亀裂を修復してみよう

エーリネ達は交易の為ヘルシュペルに十日程留まる。
その間は炎の槍傭兵団だけの少人数警護くらいで間に合うので、ケーナは自由時間を手に入れた。

『ケーナ殿は観光でも金策でも好きにしてらして結構ですよ？』

エーリネにそうは言われたが、金策は間に合っている。　エーリネの商隊が市場で開いた店で、好事家の間に仏像が売れていると聞かされた。　そのおかげで追加の仏像を四十体ぐらい作らされたが、儲けの四割を貰う約束を交わしたのでお金には困っていない。　ちなみに売値は八銀貨で、元値は薪の二束十六銅貨。　加工代はＭＰを一割も使わないタダ同然、ぼろ儲けにも程がある。

「……と言われても何をすればいいのやら、ねー」

すっかり友人関係を築いた団員の一人にお手製の地図を書いて貰い、ケーナは期日中に出来そうな仕事を探しに冒険者ギルドへ赴こうとしていた。　目的は金策ではなく暇つぶしに。

「しかし、この地図をみると子供のお使い感がひしひしと感じるわぁ」

この世界の識字率がどの辺りまでを高水準と言えるのかが不明な為、説明に困るが。　ケーナの持つ地図には点と線で簡略化した王

都地図がある。　そこまでは良いが、問題は書いてある文字がひらがなオンリーで『ぼうけんしゃぎるど』、『しゅくはくち』『いちば』と記されている所であろう。
　まるでテレビの番組で隠れてカメラを向けられていそうな子供の気分を味わっているかのようだ。

　ここの冒険者ギルドは、上段下段で区切られた大通りに面した住宅地側に建てられていた。　何か決まり事でもあるのかフェルスケイロのギルドと変わらずに三本の塔が纏まった形だ。　中の作りも似たような物で、入り口正面に談話場とその奥に受付、左手側に掲示板。　何処へ行っても変わらないかの如くびっしりと依頼書で埋めつくされている。

　ざっと眺めたところ、依頼人が商人で”西の外殻通商路の盗賊を退治してください”的な依頼が三割を占めている。　商人から連想されるものに、以前エーリネから聞いた話に繋がるものがあったので、その辺でたむろしている同業者に情報収集を試みた。
　灰色の鱗を持つ竜人族（ドラゴイド）、巨大な両手斧を背負い重甲冑に身を包む者と、軽装鎧にサーベルを腰に差す女性が居たので声を掛けて見た。

「あのー、すいません？」
「ん、なんだい嬢ちゃん。　同業者にしては随分ちっこいなあ？」
「アンタからみりゃー誰だってそうだろうよ」

　どうやら二人で組んでる冒険者らしい。　『嬢ちゃん』との呼ばれ方はもう仕方ないと諦めたケーナに、同性の方が話しやすいと見たのか女性の方が対応してくれた。

「アンタこの辺じゃ見ない顔だね、冒険者になったばかりかい？」
「いえ、フェルスケイロから来ました」

「よくもまあこの状況の中ここまで来れたねえ……。　東の外殻通商路を使ったのかい、あっちは確か橋が落ちてたはずだけど？」
「橋が無くても川を渡る手段は有りますよ」
「随分と自信有り気だねえ。　それで私達に声を掛けたのは何の用事だい？」
「こっちの国に湖の中に城が建っている場所があると聞いたんですけれど、どこにあるか知っていますか？」

これに答えたのは竜人族（ドラゴイド）戦士の方だった。　彼は室内右側、ギルドからのお知らせ等を張る掲示板にある地図を指差した。　ヘルシュペルの周辺を簡略化した縦長の地図で、王都の下に湖や川が描かれていて地図全体の下側三割に赤い線が引いてある。

「ああ、三日月の城か。　あれなら盗賊達の勢力圏内にあるんで立ち入り禁止区域の中だ。　あの赤い線より南になるな」
「なんで三日月の城って言うんですか？」
「何だか知らないが三日月の夜になると城全体がキラキラ輝くのさ。古代の宝物庫だって言う噂もあるけれど、古いジジイ共の話だと”守護者の館”とか言って随分恐れているよ」

それはケーナにも確信が持てる情報である。　二百年以上生きたエルフだと守護者の塔を知っている者だって居るはずだ。　逆に聞きに行って『銀環の魔女』だとバレるのも困るので、そちらへの聞き込みは却下するしかない。

教えてくれた女性と竜人族には礼を言ってギルドを後にした。
問題の場所までは馬で片道二日かかるらしいが、騎士団が盗賊にいいようにあしらわれているのには納得がいかない。　昨日会ったケイリナも今までの中ではダントツの強さであるだけに。

ケーナの懸念は盗賊退治をした場合、その後の人々の反応にある。
かつてスキルマスター就任後、ギルド仲間以外に狩り場で意気投合した普通の友人達から提案を持ち掛けられた。『手数料と紹介料を折半するから優遇しないか？』……と。
しかもケーナが押し掛けて来る人達にどう対処したらいいかと、相談をした返答の殆どがコレだっただけにショックは言い表せない。
ギルドの招集以外では辺境に引っ込み、人の多い場所に近付かなくなったのはそんな理由だ。ゲームを辞めたりしなかっただけ、ノイローゼになった仲間よりはマシなのかもしれない。

だからと言ってゲーム中がそうだったから、今の人達も同類と決め付ける理由にはならない。あまり騒がれたくないケーナを理解してくれるエーリネや、強すぎる力をあまり表に出さない様注意してくれるアービタ達と知り合えたのは幸運だし、感謝もしている。

（昨日の今日で会いに行くのも気まずいしー、明日またケイリックを訪ねてみよう。お土産でも持って）

悪い思考にハマらない様に気分を切り替えたケーナは市場へ向かう。お土産をどうするか考える為に。

――同じ頃

フェルスケイロ王都のスカルゴの執務室には部屋の主がどうしたものかと考え込み、真っ白に憔悴したマイマイが虚ろな目でテーブルに突っ伏していた。
原因は昨日夕方にケイリナから【以心伝心】で届いた一文。

内容を簡潔に述べると『ケイリックがお婆様を怒らせた、危うく命の危機だった』である。　後半は悪戯好きの母親を諫める為のものだが、マイマイにしてみれば再び折檻が目前に迫っている絶望感に気が遠くなっていた。

キラーン

「最早自業自得としか言いようがないだろう」

歯を光らせつつ書類を片付けるスカルゴに文句を言う気力もない妹。　【以心伝心】が通じれば詳細を母親に求められるのだが、あちら側がスキルを失っている状態では繋ぎようが無い。

母親がスキルを失った理由は２００年前に相当嫌な思いをしたのだろうと推測できる。

折角引きこもり状態より出て来てくれたのだ。　今度こそは好きな様に生きていて貰いたいと思うスカルゴだった。

「なーにを買ってきたんだよ嬢ちゃんは……？」

市場で大量に物を買い込み、袋を幾つか抱えて宿屋に戻ったケーナに護衛待機をしていたアービタとケニスンは目を丸くして迎えた。

「なんか色々使えそうな材料があったんで。　ちょっと買い過ぎちゃったかも？」

「ええと、どれどれ……。　ルジュの実に卵に羊乳に砂糖？　料理でもする気かよ？」
「なんかの骨ガラとかありますッスけれど、何に使うんスかこれ？」
「パイとかケーキでも作ろうかなあって。　……って二人してなんですかその天変地異でも起きたような顔！？」

目を丸くして無言、あまりの反応にケーナが抗議した。　二人は目線で「だってなあ？」「そうッスね」と会話を交わす。　旅をする間にケーナが料理を担当する場を見た時が無いだけに、料理の方は壊滅的だと思っていた。

「ええい、じゃあちょっと待っててください！　今、度肝を抜いてあげますからっ！」

買って来た材料を纏め、宿泊部屋へ上がって行ったケーナにアービタは首を傾げた。
てっきり宿屋の厨房を借りるのだとばっかり思っていただけに。
かくして十分と経たずに降りてきたケーナの手には、甘い匂いを漂わせるルジュのパイが出来上がっていた。

「って、早っ！？」
「なんスかコレッ！？　ちょっと早過ぎやしませんか！」
「ほーっほっほっほ。　この私の実力を思い知るがいいわ、さあ喰え！」

匂いに誘われてきた宿屋の女将から包丁を借りて切り分ける。
ほかに誰も居ないので、宿屋の主人と女将もご相伴に預かった。
口にした者が目を丸くした後にペロリと平らげる。

「美味い！」

「美味いッスよケーナさん」
「そーでしょう、そーでしょう。　ふふん」
「ちょっ、どーやってこんなモンを！？」
「……むむむ。　しっとりとした甘さにパイ生地は硬すぎずふんわりとルジュの果実が形を崩さずにシャクシャクとした歯ごたえが有り二重のハーモニーが……」

宿屋の主人が絶賛して語り始めるのに時間は掛からず、アービタ達も流石に引く。

リアデイルのゲーム中で【技術技能（クラフトスキル）：料理】で作ったものは、短時間限定で様々な補助効果を及ぼす能力ＵＰアイテムとして扱われる。

流石に味の保障までは出来なかったが、ゲーム中で食べてもパイらしい味としか感じ無かった為、殆どハッタリで押し通したケーナも内心安堵した。　まさかこんな美味い物が出来るとは予想外な方向だっただけに。

パイ系の能力上昇値は魔法威力ＵＰで、ルジュのパイは三％上昇だ。　ケーナが使っても千百ダメージが千百三十三ダメージになるくらいの違いでしかない。

エーリネの話によるとパイは各家庭料理でよく見るものだが、ケーキの類は貴族か王族が専属の料理人に作らせるものらしいので知る者は少ない。　続いて苺、に良く似たリーベリーのケーキを作ってみると、全員に高評価で綺麗さっぱり胃の中へ。

宿屋の主人にレシピを聞かれても、スキルで作る場合は材料でしか公開できるシロモノでは無いので、一子相伝の技と誤魔化す。

実際の所、マイマイ達に言わせるとケーナの【スクロール作成】で作られるモノは『読む物』じゃなくて『理解するモノ』だそうだ。

この二つの違いが実に幅広いらしく、今の時代の人達で理解してもらえるかは望み薄いとの事。

結局皆に乗せられる形で次々とレシピを披露。　団員や商隊の仲間も話を聞きつけて集まってきて、全員が満腹でアザラシの様にゴロゴロ横たわる頃には材料を使い切っていた。

「これは売れますよ、ケーナ殿」

「生ものだからお店には並べられませんよ。　保冷設備があるわけでも無いし……」

口の周りをクリームで真っ白に染めたエーリネに呆れるケーナ。

材料を買い足しに行き、ついでに肉料理や魚料理も出来ないかとひと通り見て回り、宿屋に戻る頃には再び荷物だらけになっていた。

翌日に張り切ってイベントの時だけに作る二段ケーキを作成。

手に持って行くと堺屋の店頭混雑で潰れる可能性もあったので、アイテムボックスに仕舞ってから向かう。　問題はアポ無しで対応してくれるかだけれど、そんな心配は杞憂だった。

先日のエーリネと交渉していた青年。　どうやらケイリックの息子だったらしく、ケーナを見た途端奥へ案内してくれた。

同じ部屋に案内された後に、事の次第を知らぬままケイリックを呼びに行く青年。

「しばしお待ちください、曾お婆様。大急ぎで父を呼んで参ります」

「ああ、……うん（ひ、……曾孫かー）」

この年にもう曾孫の顔を見るという珍事に遭遇するのは、奇跡な

のかアクシデントなのか本気で悩むケーナ。　しかし屋敷の奥からドタドタと走り回る音が聞こえ、この部屋の扉が勢いよく開き、エルフの美丈夫ケイリックが姿を現した。
　肩で息をする程慌てた様子でケーナの姿を見ると目を見開き、いきなり床に平伏した。

「え？　あのー、ケイリック……さん？」
「申し訳有りませんでしたっ！！！」

　口を挟む暇も無く、謝罪を述べたままじっと耐える姿勢で床に頭を擦り付ける。
　先程の一言以外に何も言い訳にしかならないと思わせる態度に、ケーナも大きな溜息を吐く。
　びくっと震えてそろそろと覗き見るように顔を上げた孫に、イイ笑顔を向けたケーナは腰に手を当てる。

「とりあえずその土下座をやめて椅子に座れ！」
「は、ははは、はいっ！！」

　飛び上がったケイリックがテーブルを挟んだ対面に座るのを見て、ケーナも肩の力を抜く。　なにかとんでもない”お仕置き”を覚悟していたケイリックは、溜息を付いて首を振った祖母を伺った。

「……まあ、とりあえず御免なさいね？」
「……え？　ええ？　え、あの『身内でも木っｐ……」
「誰がするかンな事ッ！？　マイマイね、それを教えたのはマイマイね！！」

　素直に謝罪した祖母の態度に疑問を持ったケイリックを逆に叱り飛ばし、「ひっ！？」とか怯えた孫がおずおずと頷いたのを見たケ

ーナの背後に暗黒星雲がゴゴゴゴッと渦を巻く。

「どーしてくれよう、あのバカ娘……。　そだケイリック」

「は、はひっ！」

「【以心伝心】が使えるのよね？　マイマイに伝言を送ってくれるかな？」

「ははは、はいっ！　ぶ、文面は？」

「鉄の処女（アイアンメイデン）とギロチンと風葬と生き埋め（スイカわり）と蓑踊り（ひだるま）、どれがいいか聞いといて」

その時の祖母は眼がマジだった。　後日震えながらケイリックは姉のケイリナにそう語ったと言う。　ちなみに返信は皆無だったそうな。

怯えるケイリックを笑顔となだめすかしで何とか落ち着かせてケーキを渡すケーナ。　甘い匂いのする巨大な物体を目にして、ようやく落ち着いたケイリックは改めて祖母に頭を下げる。　ケーナはソレを受け入れ、何で機嫌を損ねたかを明らかにした。

「皆に商品を届ける元締めとしてのお恥ずかしい発言。　申し訳有りませんお婆様」

「いいよもう、謝らなくて。　大人気なく怒った私も悪いんだから」

紆余曲折の上ようやく普通に会話を交わせるようになってほっと

するケーナ。
　リラックスして含むところの無い祖母の笑顔を目にしたケイリックも、使用人を呼びお茶を持ってこさせる。　ケーキは自分達の分以外は下げさせるが、運ぶのに二人必要だったのに驚いていた。

　自分の作ったケーキを口にしたケーナは「うん、良い出来」と満足そうに。　同じく食べてみたケイリックも目を丸くして、その後がつがつとあっさりと平らげる。

「アービタさんみたい、そんなに珍しいんだね？」
「いえ、パーティで食べた事くらいはありますが、これほどのモノは初めてです。　うーん……」
「『これは売れる』なんてエーリネさんみたいな事言い出さないでよ？　気が向かないと作らないんだから」
「そうですか、残念です」

　後は普通の雑談に。　簡単に引き篭もりから出て来て今までの経緯を説明する。

「お婆様はその経緯で冒険者に？」
「２００年前にもしてたけどね。　まさか七国が跡形も無く消えちゃってるとは思わなくて、どーしようかと迷ってたら今お世話になってる商隊に色々教えて貰ってね。　エーリネさん達には頭が上がらないわ」

　過去の名声はさっぱり捨てて、一介の冒険者として歩むのが面白い。　そういった主義の祖母の姿を受け入れたケイリックは、会った時に考えていた頼み事を諦めた。　かぶりを振って考え直したケイリックは、祖母がニヤけた顔をしてるのを見て挙動不審になる。

「ど、どうしました？　お婆様……」
「私に盗賊退治をやって欲しかった、って顔に見えたけど。　違う？」
「はあ、その通りです。　しかしお婆様はあまり大仕事には乗り気で無いご様子、諦めたほうが良さそうです」
「良い勘してるね。　別に私もやりたくない訳じゃないけど、その後の他人の反応が怖いのよ。　騎士団で苦戦しているのに小娘があっさりやっつけちゃった、ってな噂が広まって御覧なさい。　私はまた引き篭もるわよ。　口封じの為に国ごと消し去ったほうがいいかしら？」
「ご、御冗談ですよね？」

深刻な声で悪戯っぽい顔で呟く祖母にゴクリと喉を鳴らしたケイリック。　剣呑に光る瞳を消し去って真面目な表情で「冗談よ」と告げる祖母に深刻に胸を撫で下ろすケイリック。　言った事が出来る実力があるだけに冗談に聞こえないのがはた迷惑なところだ。

「話は変わるけど、この国に『三日月の城』と言うのがあると冒険者ギルドで聞いたんだけどー？」
「え、ああ。　あれも一応この国の観光資源なんですが、今は野盗達の勢力圏内ですね」

ギルドで見たよりは詳しい地図を取り出したケイリックは説明をする。
王都より南下した位置にある水源、湖沼地帯の脇を通り橋を二つ越えたところが騎士団で境界線を張り、かろうじて北上する奴等の勢力を食い止めてある場所だと。　そこまで馬で二日、更に一日南下した所に問題の城はあった。

「ふーん、問題の砦（れんちゅうのアジト）はそこからまだ南の方なのね。　そこまで勢力

圏内ってことはこの城がなんなのか知っているのかな？」
「あのーお婆様。　その城が何か？」
「どうも”守護者の塔”みたいなんだよねー」
「なんですとぉ！？」

かつては神から賜ったと言う世界を支える十三個の基盤。　至宝のお宝が眠っている選ばれた者しか入れない神秘の塔。
一般的に流布される噂をまくし立てるケイリック。　激しく間違っている情報に引きつるケーナ。　２００年の伝言ゲームの成果恐るべし。

「壊されたりする前に、中の守護者起こして防御を固めて貰わなくちゃ。　明日にでも行って見るかー」
「いえ、ですがお婆様。　手前に騎士団が防壁の陣を構築しているはずですが？」
「大丈夫よ、通り抜ける手段はいくらでもあるもの」
「問題の城の周辺にも野盗が居ると思うんですが……？」
「ああ、それは大変ね。　邪魔だったらどいてもらえばいいのよね。それで野盗達が後退してくれれば、海路でも使って荷は運べるわよね？」

ケーナの言い方にケイリックはハッとなった。　確かに見落としていたがその辺りから野盗が居なくなれば、レッドゾーンに入ってる漁村からフェルスケイロまで舟が出せる。　ケーナは盗賊退治をするつもりは無いが、通商がどうにかなる程度くらいまでは手を貸すと言ってくれているのだ。　そこまで言われればケイリックにも出来ることがある。

「判りました。　たしか姉が任務であちらに行っているはずです。一冒険者の進路を妨げないように取り計らってもらいましょう」

「あら？　天下の堺屋がたかが一冒険者に手を貸すなんてあっていいのかな？」
「問題有りませんよ、その冒険者にはウチから騎士団の防衛陣まで補給物資を運んで貰う、大事な依頼を頼みますから」

「ふっふっふ、堺屋。　そちも悪よのう？」
「いえいえお婆様には適いませんよ」

「ふふふふふふ……」
「ははははははは……」

お茶のお代わりを持ってきた使用人は、扉の向こうから聞こえて来る不気味な含み笑いの二重奏にビックリして逃げ出したそうである。

15話　亀裂を修復してみよう（後書き）

後書きは活動報告に書いてます。

16話　説得で強襲しよう

この国に来て三日目、エーリネ達に二～三日留守にすると言伝してケーナは出かける事にした。

「依頼ですか？」
「うん、騎士団の防衛線まで補給物資を届けるお仕事」
「そうですか。　まあケーナ殿なら心配要らないと思いますが、気を付けてくださいね」
「嬢ちゃんなら滅多な事じゃあどうにもならねえと思うが、気を付ける越した事はねえ」
「はい、エーリネさんもアービタさんもありがとうございます」

皆に快く送り出されたケーナはその足で王都の西門へ向かう。予め荷馬車を早朝から用意しておくとケイリックに言われたからだ。辿り着いた西門の外には門を守る衛士と、ここを行き来する商人達の馬車が幾つか。　南には下れないので、北の外殻通商路を通って小さい村等と交易する個人の馬車だとか。

その中に小型の簡単な幌の掛かったロバが曳く、ちんまりとした荷車と言った感じのモノがあった。　見た目はリヤカー？　傍らに待っていたのは堺屋の若旦那、ケイリックの息子イヅークである。
彼は視線が合うと深々とお辞儀をしてケーナを迎えた。

「申し訳有りません、曾お婆様。　早朝からご足労をお掛け致しまして……」
「早朝って程でも無いでしょう。　陽はある程度登っちゃったし、むしろ遅いとか言われる位かと思ったわよ」

陽の登り具合から時間にしてＡＭ七時といった頃合だろう。　旅の間であれば皆の朝食を済ませて馬車が走り出すくらい、充分遅い。

「いえ、父が無理を言って曾お婆様の手を煩わせるのですから、これくらいは私共が頭を下げます。　今回の依頼、受けて頂いてありがとう御座いました」

「そんなに受ける人居ないんだねー、この仕事……」

「兎に角、途中で何が起きるか分からない状勢ですから。　騎士団と堺屋に関わっているとあれば、尻込みする者が多くて困ってしまいますね」

苦笑する若旦那の苦労が偲ばれる場面に、ケーナはつい彼の頭を撫でた。　ケイリックから彼女に付いての概要だけ聞いていたイヅークは、恐れ多くて縮こまってしまう。

「まあ、部外者の私が言うのもなんだけど、偶には失敗しても当たり前みたいな気概で、リラックスして仕事に当たればいいよ。　ホラまだ貴方の上に責任が取れる人が居るんだしね？」

「あ、はあ……。　それはそれで難しいですね」

門を守る衛士とイヅークに見送られ、ロバの手綱を握ったケーナはそのまま王都から望める坂を下っていく。　よく訓練されているらしいロバは【獣使い】を使わなくても此方の意図を察してくれて、徒歩の速さに合わせてカポカポと着いて来てくれる。

一時間ほど下り湿地帯や湖を避ける様に蛇行した道になった頃、王都を振り返って見ると豆粒とまではいかないが随分小さくなっていた。

（この速度で二日かー。　道を外れるとぬかるみに嵌まるとか言っ

てたわね……。　直線距離ならもっと早いはず）

自身のスキルを幾つか脳内に選択、最善な策で近道するために力を解き放った。

「……お婆様。　たしかにケイリックの奴から、貴女様が此方に補給物資を届けるから自由に動けるようにして欲しいと、今日伺いましたが。　それが早朝あちらを出たはずの貴女様が、何故夕方になる前に此方に着いているのでしょうか？」

簡単なバリケードが左右の斜面まで延びている。　その北側に木を組んだだけのバンガローの簡易版の本部と、宿泊用の大型テントがいくつかあるだけ。　街道のこの辺りは左右に突き出した崖があるせいで防衛線を構築するのに都合がいい。

この騎士団の駐屯地にケーナが辿り着いたのが、出発した日の夕方前三時位と言うべきだろうか。　時間にして二十八時間位の短縮行程である。　予めケイリックより連絡を貰っていたケイリナはともかく、補給物資の到着予定を聞いていた他の騎士達は驚いてケーナを迎えた。

荷は騎士団の者が責任を持って荷降ろしをしてくれて、ロバの世話もここの下働きの人達がキチンとやってくれた。　ケーナが何を

しているのかと言うと、簡易本部へ連れて行かれ簡単な職質をされていた。　ここの中隊長の任に付いているケイリナとその副官の猫人族（ワーキャット）がケーナの前に立っている。

「ううー、補給が待ち望まれているのだと思って急いで来たのに、この仕打ちは酷いわ」

「いえ、ですからお婆様。　別に責めている訳ではないのですが……」

「中隊長、此方の冒険者とお知り合いですか？」

「ああ、実の祖母だ。　だからと言って対応は普通で構わない」

「はあ、……はぁ！？」

あどけなさの残る十代後半のエルフ女性と、キリっとした実直さが前面に出た自分達の指揮官を交互に見る副官。　ケーナは「あー、またかー」と言った感想だが、ケイリナは姉妹の様だと自分で思っていた。　もちろんケイリナが姉側の。　気恥ずかしさにわざとらしい咳をしてその話題を逸らし、腰に手を当ててケーナに理由を詰問する。

「しょーがないなー」と苦笑したケーナは素直にここに至るまでの行程を白状した。

「『浮かして』、『引っ張って来た』ぁ！？」

「簡潔に方法を述べるとまさにその通り」

ケーナのプレイヤーとしてみれば至極何でも無い事だが、一般の常識を覆す工程に副官はすっとんきょうな声を上げた。

ロバと荷車に【浮遊】を掛け、ベラドキャンサー（普通乗用車程度の大きさで足が四対八本、ハサミが二対四本ある紅い蟹）と言う

原生生物を召喚してそれに引っ張らせた。　【浮遊】は一定高度を保つし、蟹は街道だろうが草原だろうが川や沼だろうが構わず走破するので、ほぼ一直線にここまで来れた。

だからと言って騎士に危険人物認定されそうな情報は伏せて、【増強】付きの【飛行】で引っ張ってきたと言い張る。　実際それだけでもとんでもない方法なのだが、難しい顔をした副官の人はケイリナに目配せをされてしぶしぶ納得した。

「だからと言ってケイリックの望む様な自由行動は慎んで頂きたいのです」

「あ、やっぱり？」

模範解答が返ってきて、お役所仕事は何処も変わらないんだとケーナは納得した。　ほぼ予想していた通りの返答に、強制突破を実行する方向で動こうと思ったその時、やおら外が騒がしくなった。

砂利を踏んで走り回り、大声で会話を飛ばすようなざわめきの後、荒々しくドアが開かれ騎士の一人が走りこんできた。　息を付いて胸に片手を添える騎士礼を取り、はっきりと告げる。

「報告します！　襲撃です、数は九機。　敵はロックゴーレムだと思われます！」

「何っ！？　全員に迎撃体制を取らせろ！」

副官の人が青いマントを翻し、早足で外へ出て行く。　その後を報告に来た騎士が続き、ケイリナが部屋を出て行こうとして振り返ってケーナに指を突き付ける。

「お婆様はここで大人しくして頂きましょう。　いいですね？」

「さーてね」

ふてぶてしい笑みで返すと「怪我をしても知りませんよ」とだけ捨て台詞を置いてケイリナが出て行く。

椅子の背もたれに肘を付いたケーナは、ここに到着した時にざっと【サーチ】を掛けて確認した情報を吟味する。　おそらくケーナから見てまともな戦力と言えそうなのはケイリナだけ、副官の人の力量でアービタよりやや弱いくらい。　他の騎士達については論外だ。

この襲撃の隙を突いて防衛線を抜ける手段もあるが、痛手を受けているのであれば恩くらい売っておいて損は無いだろう。　かつての戦争のような雰囲気がひしひしと伝わってくる空気に、懐かしさを感じたケーナは席を立った。

夕暮れに染まる赤い草原を、鈍重な動きで防衛線に向かい歩を進める九つの影があった。　それより随分後方に馬に乗った数機の影。

七つは人と同じ大きさのごつごつした岩で構成されたロックゴーレム、しかし残りの二つは他よりやや大きさが違う。　それを冷静に分析したケイリナは小さく舌打ちをした。

騎士団で支給される長剣では圧倒的に不利な相手だ。　大槌（ハンマー）などの打撃武器でなければ、決定的なダメージを与える事は叶わないであろう。　それでも騎士として国に仕える者として『不利だから退け』などとは言えない。　部下達に痛手を負わせてしまう現状に歯痒い思いをしながらも命令を下す。

「全員抜刀！　これより先には進ませるな！」

多数の鞘鳴りが自軍に響き、副官の号令で雄叫びを上げた騎士達が一斉に岩人形達に突っ込んだ。

最初に戦場に響き渡るのは、金属と金属がむなしく弾け合っただけの甲高い音。　突こうが斬ろうが火花は散るがその身に食い込むのは叶わぬ事である。　鈍重な相手の拳は空を切って双方とも碌なダメージは与えられない。

しかしこの場で不利なのは、一定位置から先に進ませたくない騎士側である。　ダメージは無くとも足を止める事が無い岩人形達は、じりじりと防衛線まで距離を詰めて行く。

焦った一人の騎士が紅く光る目を持つ顔面目掛けて渾身の突きを放った。　一際大きな金属音が響き、空洞の中に光る紅い目を穿った。　……かに見えた。　剣がそこに嵌まっただけで、痛覚を持たない岩人形には痛くも痒くもない。　逆に攻撃が通じた感覚で動きを止めた騎士は、頭上から振り下ろされた強烈な一撃に兜を凹まされ、地面に叩きつけられた。

悲鳴を上げる暇も無く昏倒。　続く大黒柱の如く太い足に蹴り飛ばされて人形の様に宙を舞い、あっけなく十数mも弾かれる。　力無くグッタリと地面に転がったその鎧は、胸の所がべっこりと潰れていた。

同僚が口々に名前を呼ぶがピクリとも動かない。

「クソッ！？」

一人が倒れた事で焦りが生まれ始めた騎士達には、先程のような雄々しい雰囲気は消え去っている。　一際大きな一体を副官と二人掛かりで片足を崩し、移動を困難にさせたケイリナは更に二人の部下が放物線を描いて空に舞うのを目にした。

更に追撃をかけようとその二人に足を向けるもう一体の大きな岩人形。　副官の静止にも構わず進行方向に躍り出たケイリナは、剣に魔力を込めた。　周囲の騎士達から感嘆の声が上がる中、紅い魔力で炎を吹き上げる剣を振りかぶったケイリナはその力を解き放っ

た。

【武器技能（ウエポンスキル）：火の衝撃（ファイヤーブレイド）】

半円状の紅い斬撃が一直線に空を切り裂き、岩人形（大）の胸板へ突き刺さった。　同時に大爆発を起こし、もんどりうったソレは後ろへ引っ繰り返って地響きと土埃を巻き上げる。　騎士達から歓声が巻き起こる中、荒い息と玉の様な汗を浮かべ剣を支えにして膝を付く体を強引に止める。

「中隊長！」

「いや、平気だ。　しかし無理か……」

呟くケイリナと副官の目の前で、倒れたばかりの岩人形（大）がゆっくりと身を起こす。　目を剥いて驚愕の表情を浮かべる部下達を見て、撤退も止む無しかとケイリナが思い始めた時。

「上等上等、独学で其処までやるとは大したモノよねー」

【戦闘技能（ウエポンスキル）：収束雷撃斬（プラズマブレイド）】

すぐ脇を雷光が駆け抜けて行った瞬間、目前の脅威は袈裟懸けに切断されていた。　地響きを立てバラバラに砕かれ地面に残骸が転がるだけになる岩人形（大）の成れの果て。　その先で足元に転がってきた石ころを蹴り飛ばすケーナがいた。

肩に担いだ片刃の身長より長い大剣、刀身は黄色く輝き多少の放電現象を伴っている。　突然の闖入者に騎士達は切り結んでいた岩人形（小）より距離を取って、ケーナへの警戒心を向ける。

「教育が行き届いていて結構な事だね」
【魔法技能（マジックスキル）：砲爆雷撃（ザン・ガ・ボア）：ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ】
ケーナの周囲に人の頭程もある放電する球体が八つ形成される。
黄色い放電から金色の雷撃へ、一回りその姿を大きく膨らませた魔法球はケーナの「行け」との呟きに蛇行しながらくるくると空へ登り、十数ｍの高度から大音響の雷撃を岩人形達に降らせた。上空から落下した斧の様な雷撃にカチ割られ、岩人形達は次々に無機物の石ころへ戻っていく。
至近距離で響いた爆音にしばらく耳を押さえていた騎士達だったが、脅威はあっけなくたった一人の手によって去った事に呆然としていた。ケイリナが声を張り上げる事で動き出し、慌てて同僚の救助に向かう。
「【炎撃（ファイヤーボール）】を剣に纏わせてそのまま撃ったのね。発想はいいけれど、その間何も出来ない上に魔力を使いすぎで後に続かない、って所？」
「お恥ずかしい限りです」
ケイリナの最終奥義を簡潔に述べるケーナを驚愕の眼差しで見る副官。それの二段も三段も上を行く技能を何の負担もなく撃った以上に、高密度の魔法を片手間に使いこなす魔道士なんて聞いた事もないと。
その視線を特に気にもせず大剣をひと振り、刃に残った放電を落とすと腰に添えた手の中へ剣を仕舞い込む。大剣があった事すらも消え去り、唖然としている副官を一瞥したケーナはケイリナへ近付く。
「ここの手柄は貴方達で得た物にするといいよ。それとも小娘一

人に壊滅しかけた騎士団が助けられましたって、報告する？」
「くっ……。　何がお望みです？」
「では当初の予定通り、ここを通らせて貰いますね。　ロバと荷車は帰りに引き取りに来るから、お世話お願いね？」
「……好きにしてください。　でも、部下を助けて頂きましてありがとうございます」
「生憎と孫を助けただけだから、気にしなくていいよ」

そのまま背を向けて南へ歩いて行くケーナ。　声もなく見送ったケイリナは立ち上がると唖然としている副官の肩を叩く。

「あ……、い、今の冒険者は一体なんなんですか？」
「恐らく大陸最強の人物だよ。　此処で見た事は他言無用と他の者にも通達しておけ。　あの方の存在を何処かに漏らすと大変な事になる。　主にヘルシュペルの損失と言う支払いをせねばならないしな」
「いや、そんな馬鹿な……」
「あと伝令を出して人員の補給、防衛線を前進させるぞ。　私の言葉を証明するいい機会だ、よく見ておくといい。　あの人の通った後に何か残っているか確かめられる」

伝説の軍勢が蹂躙するようなケイリナの口調に、しかし命令を実行するために陣地を走り回る副官。　中隊長の言葉を証明は意外に早くやってきた。

陽が落ちてようやく駐屯地がいつものような静けさを取り戻した頃、南の空に光の柱がそびえ立ち、半円ドーム状の赤いグラデーションが宵闇の草原を一瞬昼間のように照らし出した。
騎士達が蜂の巣をつついたようなざわめきで右往左往する中、微細振動が足元を揺るがしてドオオオォォン、と音が響いてくる。

「お婆様め、人目が無いからと手加減抜きでやったな……」

かつて母親に聞いた事がある「貴女のお婆様の一撃は都市を消し飛ばすのよ」と。　いまのはソレに相当する魔法だろう。

「あ、……、あんな現象が人の手で起こせるものなのですか？」

隣に並んだ副官の言葉に詰まった表情に重々しく頷いた。　ザーっと青ざめる彼にあれで全力ではないと思われる、なんて言うのは酷だろうかと考え込むケイリナ。　部下にその場所へ斥候を向かわせるのを忘れずに命じておく。

先程の襲撃の際、後方の騎馬が気になっていたケーナは【召喚魔法：風精】に後を追わせて見た。　なんと騎士団の駐屯地から半日も行かない所で粗末な駐屯地を見つけ、図々しさに呆れた。　一々相手にするのも面倒臭くなった彼女は、広範囲火炎系最上級魔法で焼き払う。　但し付加効果を【気絶（スタン）】に変えて。　たむろっていた盗賊達は目を回してのびている、半日はそのままになるだろう。

ついでに【召喚魔法：竜】でアースドラゴンを三匹喚び出して、進行方向の夜の中へ解き放つ。　光精も喚び出して夜道を照らす。

その後を追う様に歩きながら先程の岩人形（ロックゴーレム）について思いを馳せる。

「うーん、さっきのゴーレムのレベルはおかしい……。　キー？」

『7体ハ43LV、1体ハ86LV、モウ1体ハ129LV、デス』

「とすると【召喚魔法】のレベル制限で一、二、三で計十二。　合ってるね……ってプレイヤーが生き残ってるって事？」

『公式設定ノ通リデアレバ、ドワーフ、エルフ、魔人族、ハイエルフノ辺リデ可能性ガアリマス』

【召喚魔法】には一定のルールが存在する。　同種の種族を呼び出す場合は最大九体までで、召喚対応レベルは合計で十二になるようにしなければならない。　各魔物や動物にも属性が存在し、地系のモンスターを呼び出せば風系のモンスターは呼び出せないし、水系のモノは地系のモノよりレベルダウンして、火系のモノは同レベルに限られる。

図にすると、最初の召喚地系：『火系＝地系≧水系　×風系』と言った具合に。

少なくともそんなものが成立するのはプレイヤーの証拠だ。　すなわち野盗のボスには中堅レベルのプレイヤーが存在している事を意味する。　推定四百三十レベル前後の。

「手強いわけだ、ケイリナはともかくスカルゴ達でも相手にはならないわな」

騎士団が簡単に蹴散らされる理由がコレで判明した。

それ以上に疑問なのは運営が撤退した世界に、どうやってプレイヤーが紛れ込んでいるのかであろうか？　……である。　ケーナのように偶発的な事故がそうそう起こるとは思えない。

「どっちにしろ情報が無いし、本人と出会った場合にでも聞いてみるしかないかー」

砦に引き篭もって自分の王国を築いていそうな為、出会う確率は低そうだと判断する。
夜も更けてきたのでアースドラゴン達を防衛のために呼び戻し、ケーナは野宿をする事にした。ドラゴン達は一番無防備になる就寝時の防衛に待機させておく。

――――しかし、予想は往々にして裏切られるものである。

もしもの時に備え妖精王の羽衣の上にシルバーメイルを、胸や腕を守るパーツ分けになっているものを追加装備して問題の『三日月の城』付近。陽が昇ったあたりで辿り着いた時には、小舟を使って城の建つ小島へ上陸する野盗達。それを湖岸からじっと見つめる、蒼いトゲトゲの装飾の突いた全身鎧に身を包んだ何者かが居た。

【サーチ】を使って四百三十二レベルと確認。背負っている大剣と全身鎧マント付きにヤレヤレと脱力する。

「ネタ装備マニアか～。強敵だなあ……」

特に潜むとか忍び足とか、隠れる的な要素無しで歩み寄ったケーナは簡単に発見された。ボスらしきプレイヤーの周りに突っ立っていた腰巾着に。

「ボス！　敵ですぜ！」
「馬鹿野郎、閣下と呼べって言ってあるだろう！」

もったいぶるように右腕を横に、腕に掛かっていたマントを翻しゆったりと振り向いた。　なんと言うかいちいち芝居が掛かった動作である。　もちろん「普通に振り向けばいいのになあ」とケーナも呆れていた。

　此方を振り向いた兜の中の赤い瞳と目が合う。　翼を開いたブルードラゴンを兜に使っている装備なんて唯ひとつしか無い、攻略が肉弾戦になる方向にケーナはウンザリした。　その兜の横から伸びる黒い角も原因のひとつだ。

「なんだてめー、ココへ来る途中には俺の部下がわんさか居たはずだ」
「ああ、あれ。　焼き払っちゃったよ」
「な、なんだとおっ!?　てめーそれでも血の通った人間かっ！」

（あれ？）

　やたらと矛盾した言動にケーナは首を傾げた。　聞いた話と随分食い違う発言だ、少なくとも同じ盗賊達の命は大切に思っているらしい。　それなのに騎士団とかは蹴散らしても何とも思ってはいないと見える。

「そっちだって騎士団の駐屯地に岩人形（ロックゴーレム）とか差し向けてきたじゃない」
「あ？　ああ、あれはいいんだよ。　手を下すのは俺じゃないからな」
「……え？」

　それは即ち岩人形（ロックゴーレム）が手を下したのであって、あくまで自分は命令しただけだと言いたいのか？　と。　あまりに無責任な発言に、ケーナは耳を疑った。　もしかしてコイツは今になってもここをゲー

ムの中だと思っているのだろうか。

「ここは、リアデイルよ？」

「あったり前じゃんか、ＧＭが居ないからプレイヤーキラーだって好きに出来るだろう？　レベルが上がってウハウハだぜ」

言動に子供っぽさを感じて、ケーナは大体を察した。　見た目は青年だけれども中身は倫理観が乏しい子供だと。　それを言ってしまえばケーナも自分が大人だなんて思ってはいないが、出逢ったら適当に相手して逃げようと思っていた気分は完全に吹き飛んでいた。

「ここは現実よ、子供の我が儘で人の生き死にまで決めて良い世界じゃないのよ」

「何言ってんだよお前。　ここはゲームじゃんか、誰を倒してレベルを上げようが俺の勝手だろう」

アイテムボックスからメインウエポンを選択、先端に金環が付く赤い棍棒を引き抜く。　同時に【能動技能（アクティブスキル）】の戦闘用を全て起動させる。　常人なら近付いただけで無力化できる凶悪な効果を持つもの含め、十二種類の威嚇、威圧、攻撃補助、防御補助、ダメージ付加、被ダメージ減少などが同時起動する。

「その間違った認識を改めて貰うわ。　ここは現実の世界よ」

「アホな事言ってんじゃねーよ、ここはゲームだって言ってんだろ。　そっちこそＯＳ含めてシステムを作り直せよ」

背負った大剣を引き抜く、縦半分に割れた刀身からは牙が生え剣自体が「ゲ、ゲゲゲッ」と叫び声を上げた。　周囲に居た賊達はケーナの異様な雰囲気に当てられて、既にほとんどが泡を吹いて気絶していた。

「プレイヤーに敵うと思うなよ、この身の程知らずが」
「そのままその言葉をそっちに返すわ」
予期せぬ出会いから、主義の違いを通らせる為の戦闘（じゅうりん）が始まろうとしていた。

17話　断罪を押し付けてみよう（前書き）

戦闘シーンに時間が掛かりました。

17話　断罪を押し付けてみよう

開始の合図は甲高い金属音から。
大剣と棍が激しくぶつかり合って火花を散らす。

「チィッ！」

舌打ちして噛み合った場所から急速後退する頭目。
自分の武器とケーナの武器を驚愕して見詰める。

「馬鹿な、餓狼（コイツ）の剣で破壊しねぇだと……」
「お生憎様、餓狼の剣の特殊効果（かみつきちゅうい）は武器破壊、レア品とＥＸ品はその範疇では無いと言う事よ。　勉強不足ね？」
「チィ、てめぇプレイヤーか！」
「察しが悪すぎ、頭使ってる？」

餓狼の剣に魔力を込めた頭目は、青い軌跡を周囲に描きながら剣を振り、回転を始める。　予備動作だけで放つ攻撃が丸分かりなケーナは、同じタイミングを計りながら棍に魔力を流し込んだ。

【戦闘技能（ウエポンスキル）：大剣特化：葬絶の暴風（デストラクトハリケーン）！】

青く光るラインの混じった轟風が頭目を覆い隠し、左右にブレながら横に広がる竜巻を作り上げる。　風は鋭利な刃物と成って空を裂き、大地を削りながらケーナに迫る。

【戦闘技能（ウエポンスキル）：剛腕の撃槌（クラッキングアース）！】

片やケーナはそれを視認すると、黄土色に輝く棍を垂直に地面へ突き込む。

途端に無風状態の中心に居た頭目の足元が陥没し、暴風もろともすり鉢状に裂けた地面の内へ転がり落ちた。

「うわあっ！　たった、とわたっぶっ！？」

「ぷっ」

情けない悲鳴と何かにぶつかった音が聞こえ、ケーナは噴き出した。　直ぐに意識を切り替え、なんとか穴から這い出ようとした頭目目掛けて横殴りに一撃を見舞う。

――――カーン！

音と共に宙を舞う青い首、もとい青い兜。　泥だらけになった青い鎧の首から上には浅黒い肌にコメカミから生えた捻じくれた角、ゲーム内バランスブレイカー種族、魔人族だ。

オールラウンダーなヒューマンを更に強化したステータスを持つ種族で、βテストプレイヤーからは存在に懐疑的だった。　最初は選択する者も多く居たが、余りにも遣い難いのでどんどん数を減らして行き、最終的にはハイエルフに続く不人気キャラに。

長所は能力値。　欠点は黒の国にしか所属できない所と、他の国でＮＰＣの応対の態度が最悪な所。　値段が倍になったり売って貰えなかったり、ノンアクティブモンスターにも絡まれる事も原因だ。

同レベルであればハイエルフのケーナにとっては最悪の相手であ

ったが、四百三十プラス五十レベル（ステータスぶん）上乗せしたとしても格下相手。
しかし、油断は禁物として間合いを空ける。
所属が同じ国だとしても全員を見知っている訳ではないが、あそこまで態度が悪いと噂くらい流れていそうなものだろう。だとすると、桂菜の死後加入したプレイヤーかもしれない。

「クソッ！　そんなスキル聞いた事もないぞ。それにオマエッ！　さっきからステータス隠しやがって不公平にも程があるぞ！」
（うわあ……）

警戒態勢を崩さぬまま呆れるケーナ。逆ギレした頭目、魔人族は剣を地面に叩き付けて怒りを露わにする。

「チュートリアルすっ飛ばした人はみんな同じ事言うね。自分よりレベルが高いとステータス詳細なんか見れやしないわよ」
「なんだと！　てめーみたいな奴が俺よりレベルが高いだなんて事があるもんか！」

文句を言いながら打ち掛かって来た剣を棍で外側へ弾く、同時に片手で保持した雷撃下位魔法を撃ち込んだ。ケーナから放たれた横に進む雷撃は、鎧に当たる直前で不自然に弾けて消え去る。魔人族はそれを見て至極当然と行った表情であざけ笑う。

「ハッ！　覇王の鎧は魔法を無効にするんだよ、思い知ったかこの野郎！」
「そんな事、充分知ってるしっ！　ゲームでは通用しないけど、ここはそうもいかないのよ」

棍の先端を魔人族へ向けて専用特殊武器（エクストラウエポン）の真価を発揮させる。
「伸びよ！」と持ち主（ケーナ）の命令に従い、手元から伸びた棍は突拍子も

無い現象に動きを止めた魔人族の胸に突き刺さり、その体を後ろに大きく撥ね飛ばす。

「な！？　があっ！！？」

「如意金箍棒、一万三千五百斤。　知っているかしら？」

元の長さに戻った如意棒を手元でくるくる回したケーナは、転がって行った魔人族が再び崩落した穴に転落したのを確認。

【魔法技能（マジックスキル）：突穿怒涛（オウタ・ラガ）】

水撃魔法を穴に叩き込んだ。　本来のゲームであれば、術者の頭上に空気中から染み出した水が巨大な球を形成する。　しかし、ここでは水が直ぐ傍に大量にあるので、湖から立ち上がった水柱が放物線を描き、穴に嵌まった魔人族へ降り注いだ。

なにやら溺れかけた悲鳴（がばがば）が聞こえてくるが、おそらくは「魔法は効かないのになんでーっ」とか叫んでいるのだろう。　あちらの都合などお構い無しに、ケーナは矢継ぎ早に魔法を連発する。

【魔法技能（マジックスキル）：招雷激射（ザン・ラガ）】

晴天の空から槍の如く落下した雷が、白い目を剥いて水に沈み掛けていた魔人族を避け水そのものに突き刺さった。　目に痛い黄色い放電現象とともに、バシャバシャと飛沫を上げながら水に浸かったまま激しく痙攣する魔人族。

水蒸気がシューシュー言う音と、こんがりと蒸し焼きにされた魔人族。　彼のＨＰはレッドゾーンに突入していて一撃でも食らえば昇天しそうだ。　念入りに凍結魔法で半身水ごと氷漬けにし、ケーナは額に向かって如意棒を落とした。

「ぐげっ」とカエルの潰れた様な声と共に覚醒すると、自分の状況を確認し目を白黒させる。

「くそっ！　なにしやがる、いてーじゃねえか！」

「痛いでしょ？　それがリアルの痛みだと何故分からないの？」

ゲーム中は痛いと言っても、皮膚の表面をちくちくする程度のフィードバックに抑えられていた。　余程の者でも無い限り、リミッターを外して痛覚全開で痛みを受けようだなんて思わない筈だ。

魔人族のプレイヤーは溺れかけ、感電で全身を引きつらせた覚えと今まさに寒さと凍傷で痛覚が悲鳴を上げる感覚に真っ青になった。

逆光で見えないが無表情で見下ろすケーナに今更ながら震え、怯える。　しどろもどろに言い訳を始めた。

「う、嘘だ。　……こ、こは、ゲームだろう……。　死んだって、リセット、が……出来る、はず、じゃないか……」

「死んだら終わりよ。　コンティニューなんかない、残機ゼロ。リセットボタンも無いわ、ご愁傷様ね」

「そん、な……、た、助けてくれよ！　ボクは、まだこ、子供なんだぞっ！？　子供を殺したらけ、警察にっ……！？」

「警察なんていないわ。　因果応報、自分のした事は自分で責任を取らなくっちゃね？　貴方は賊の頭目としてどれだけの人に迷惑を掛けたのか自覚してる？」

自分でも冷静なほど冷たい声にケーナは空しさを感じる。　魔人族のプレイヤーはボロボロと涙を流し始めた。

「ぐずっ……、うえぇ、た、助けて。　助けてよ、うわぁうう……、うわあああああ！」

「さよなら」と呟いたケーナが如意棒を振り上げる。　次の瞬間【直感】に従いその場から飛び退いた。　ケーナの立っていた場所と魔人族のプレイヤーの間へ矢が飛んできたからだ。

慌てて背後に振り向いたケーナの視界に、数騎の騎馬が駆け寄って来るのが見えた。　時間を掛けすぎて賊側の援軍かとも思ったが、先頭を駆けて来るのがケイリナだと知り警戒をあらわにする。

武器を構えたまま警戒を崩さないケーナに危険と判断したのか、同僚の騎士達をその場に留まらせて馬から降りる。　ケーナの間合いの外側（如意棒に射程は無いが）で膝を付き非礼を詫びた。

「申し訳有りませんお婆様、この者達は私の同僚です。　どうか警戒を解いてくれませんか？」

「騎士団が何の用？　今からコイツに止めを刺すところだったんだけど……」

「生憎とその罪人はヘルシュペルの法で裁かせて貰いたい」

その問いに答えたのはケイリナでは無く、その後ろからやって来た貫禄のある顎鬚も立派なヒューマンの騎士だった。　他の騎士とは鎧に入っている紋章が違うので騎士団長ぐらいかと推測する。しかしその発言にはケーナも呆れた。

「正気!?　貴方達にコイツが抑えられると思っているの？　そこのケイリナだってコイツの足元にも及ばないのよ？」

周りの騎士が驚いたようにケイリナを見る。　騎士団長も彼女に目をやって本当かと視線で問いかけた。

「実際に剣を交えたわけではないので力量の程は分かりませんが…

…、お婆様がそう言うのなら間違いは無いでしょう」

素直に認めるケイリナがどうして中隊長なんかをやっているのか、ケーナは不思議に思うが情けを掛けている時間は無い。　魔人族は【常用技能（パッシブスキル）：常時ＨＰ回復（リジェネーション）】が専用スキルに入っているので、回復して動き始めないうちに裁断を下しておく必要がある。　如意棒を振るおうとしたケーナに向けて、周りの騎士達が一斉に抜剣した。

一触即発の空気の中、泣きじゃくる魔人族の声が響く。　優先順位を考慮したケーナは今はまだ国家に対してどうこうする必然は無いと判断し、如意棒をアイテムボックスの中へ収めた。

これに胸を撫で下ろすのはケイリナである。　ケーナが本気になったならば、精鋭とは言え自分達なんぞ赤子の手を捻るよりも簡単だと知っているからだ。　魔法を使って凍結魔法を溶かし、頭目を穴から引っ張り出す。

ケーナは代わりに取り出した黒いリングを、騎士達の威嚇ももともせず魔人族へ歩み寄り、彼の首にがっちりと嵌めた。　途端に装備解除されてアイテムボックスに戻ったのか、覇王の鎧が消え失せる。

黒いインナー姿になった彼は呆然と自分の体を見下ろし、中空に浮いた自分のステータス画面を確認して顎を落とす。　装備欄の首に『懲罰の首輪』と表示され、その効果により自身のステータスが一割に低下したのを確認したからだ。

「こ、この首輪、持ってるってことは……、お、おまっ。　おマエエェエエッ！？」

「残念、ここで命を落としていた方が幸せだったかも。　レベルの差が理解出来て良かったわね？」

『懲罰の首輪』は違法行為や目に余るプレイヤーに施される警告アイテムである。　これを使えるのはＧＭか超越者クエストを抜けた二十四人の限界突破者だけ。　実はクエストの中に人格診断テストが含まれていて、これをクリアしないと超越者クエストは合格できない。　目的は人数不足のＧＭを補う役目も持っていて、運営側からその意図を伝えられた時は流石に全員呆れたものだ。

『懲罰の首輪』は強制装備品で、外せるのはＧＭか限界突破者のみ。　効果はレベルとステータスを１／１０まで下げる事。　但し二個目を貰った場合は問題行動有りの要注意人物と判断され、アカウントそのものが綺麗さっぱり削除される。

彼は此処に来てケーナが何者かをようやく理解した。　ＧＭはレベルを持たないＮＰＣ的な存在のため、見分けるのが簡単だが限界突破者は違う。　ごくごく普通かどうかは判断しかねるがプレイヤーだ。

「これで貴方達にも扱う事が出来るでしょ。　でも油断していると足元掬われるよ？」

「分かりました、肝に命じておきます。　ありがとうございます、お婆様」

呆然とした表情のまま引っ立てられて行く魔人族、ついでに辺りに倒れていた野盗達も捕縛され檻馬車に詰め込まれて行く。　騎士団長が何かを言い掛けたが、ケイリナが反論して口を閉じさせるとしぶしぶ頷き、馬に跨って去っていった。　おそらく参考人として着いて来いとか言いたかったのだろう、それをケイリナが止めさせたらしい。

「果たして引き渡しちゃって良かったのか悪かったのか……。　それは神のみぞ知る、かなあ？」

自身の行動を省みつつ、溜息を付いて肩を落とす。　そして当初の目的を果たすためにアイテムボックスより守護者の指輪を取り出した。　案の定、それは緑色にキラキラ光っていた。

定番のキーワードを棒読みで投げやりに唱えたケーナ。　しかし指輪は光るだけで沈黙を守っていた。　なんの反応も無いのに首を傾げた途端、足元が欠き消えダストシュートトラップみたいに黒く開いた穴に落下した。

「っ！？　って、なによこれ……」

悲鳴を上げかけたケーナは、何時の間にか硬い地面の感触を感じて大きな溜息を吐き、周囲に目をやって絶句した。

そこに広がっていた光景は廃墟。　一面薄緑色に染まった神殿風で、床の大理石は罅割れ太い花崗岩の柱は折れたり倒れたりしてまともに立っているのなどは数本である。　空には中天に太陽が登っているが、緑色のフィルターが掛けられているせいで色褪せた過去の栄華といった印象を受ける。　降り立った正面には王座があり、頭蓋骨が乗っかっていた。

周囲に散らばる骨を踏まないように近付いたケーナは頭蓋骨に手を当てて【サーチ】。　何の反応も無いのを見てこれが中核かな？と半信半疑でＭＰを微量に譲渡してみる。　反応が無いので王座

を目標に切り替えると、周囲の色に染まっていた王座がビロード色のクッションと金の縁取りの姿へ一瞬で変わる。　それと同時にカタカタと音を立てた頭蓋骨がふわりと浮き、周囲から骨が飛来。王冠を頭頂部に頂いたガイコツとなって直立した。

「あ、こっちが守護者なのか？」

なるほどと頷くケーナの前でどこからともなく扇子を取り出したガイコツ。　パンッと広げると口許を隠して左手は腹に置く。

『よくもこのような辺鄙な場所へいらっしゃいましたわね。　フンっ、仕方が有りませんけれど歓迎いたしますわ。　どうぞ光栄にお思いになって』

「……おい……」

今さっきまでの戦闘の倦怠感を吹っ飛ばす高飛車な言動に、ケーナの眉間にシワが寄る。　こんな守護者を使っている変わり者がいるのかよと表情が物語っていた。

「私はスキルマスターＮＯ．３、ケーナ。　ここは誰の塔？」

『ああ、マスターのご同輩でしたの。　では仕方がありませんが教えて差し上げますわ、この塔の管理者はオペケッテンシュルトハイマー・クロステットボンバー様ですの。　お分かｒ……あ、あら？』

名前を聞いたケーナは脱力して地面に突っ伏していた。　さすがのガイコツもなんと声を掛けていいのか躊躇する。

しばらく地面でうち震えていたケーナは、頭をひとつ振って立ち直る。　しかし表情には諦めにも似た表情が浮かんだままだ。

「オプスか……、はぁ……。　それならこの変なのも頷けるなあ」

『誰が変ですの！　誰がッ！　私ほど高貴なオーラが滲み出るスケルトンなぞ、何処を探してもいませんわよ』

どーやっても骨にしか、それ以外に形容する物には見えない。

オペケッテンシュルトハイマー・クロステットボンバー、略してオプスは数少ない魔人族のプレイヤーでスキルマスターＮＯ．１３だ。　元々は１４だったがＮＯ．１３がノイローゼになってゲームから撤退したため、１３の御鉢が回ってきた。　しかもギルドも同じだしβテスト時代からの古い腐れ縁で、まともに会話するのがケーナだけになっていたと言う。　癖がある過ぎる人物ではある。

一言で言うと馬鹿、二言で言うと変人。　放っておくと延々と喋り続けるか、無駄な雑学知識をひけらかすか、電波を受信し始めるきわめて高度な天才だ。　ただし戦争における戦略知識は右に出る者がいない程の戦略家で、他国の者には『リアデイルの孔明』とまで呼ばれていた。　一度、ケーナを含む千レベル台四人だけでオプスの指示に従った結果、紫と黄の国に勝ってしまった事例がある。

本人達は魔法を限界まで酷使する羽目になってへろへろだったが。

それにケーナにとっては悪友であると同時に師でもある。　自力で本も読めず、ＰＣも使えないケーナが色々な知識を得られたのは彼のお陰だ。　その彼の御喋りがもう聞く事が出来ないと思うと、一抹の寂しさがケーナの胸に飛来した。

『まったく、他人の塔の中でいきなりしょんぼりしないで下さいましっ。　不愉快ですわ！』

黙ったまま意気消沈してしまったケーナに文句を垂れるガイコツ。

語尾には心配するような響きが含まれていた。　同時に一冊の赤

い装丁の本と指輪をケーナへと差し出した。

「……え？」

『私のマスターがきっと貴女が此処へ来るはずだと信じて疑わなかったものですわ。　ホラ、ありがたく受け取りなさいな』

「あ、ありがとう……」

困惑したまま指輪と本を受け取ったケーナは軽い気持ちで本を開いた。

”親愛なる者への永遠の一瞬へのそこはかとない慈しみそれはわかるだがそれは自らの周辺に留まりせいぜい愛すべき無垢なるキミたちとの生活を邪魔しないでくれよくらいのレベルだとしか受け取れないあたかも「戦争」が「不可避な災害」であるかのようにだから視線はリアデイルの外には向かないリアデイルの自己中心的な心性の一般的な姿がそこにあるせいぜいキミのことが心配なレベルなのだ彼らにとっては感傷に浸って「あの頃はよかった世界はこのキミ達のように忠実だったのに」くらいの発想か彼はキミが運営の理不尽さに憤って噛み付くことを想像もしないいや想像もできない精神の貧困がそこにある……”

オプスはやっぱりオプスだったかと言う文章に無表情にページを閉じた。　少なくとも冒頭の一文からは何を言いたいのかさっぱり分からない。　「こりゃ腰を据えて解読する必要があるな」と、ケーナはウンザリした。　なにせ向こうは電波な天才だ、平凡な自分ではどうとって良いのか分からない文章で溢れているだろう、冒頭がこれだと。

『フ、フン。　ようやっとまともな表情になりましたわね。　まったく私の塔を辛気臭い表情でうろつかないで欲しいものですわ。

それとここのアイテムボックスのモノは好きに使えとマスターが仰っていたので、どうぞ御自由に』

言うことは言い終えたのか、優雅な足取りで玉座の横に立ち微動だにしない守護者。　変人だが悪友に似て妙に気を使う守護者に好印象を抱いたケーナはアイテムボックスから毛布を取り出すと、適当なガレキを枕にして横になった。

色々あって疲れたので、この中で一泊してから帰ろうと決めたのだ。　どうせ守護者は嫌味を言っても追い出しはしないだろうと踏んで。　しいて言うならばあの無駄に喋る悪友の夢でも見れれば良いなと思いながら……。

17話　断罪を押し付けてみよう（後書き）

それでは皆様、よいお年を。

18話　利益の精算をしよう（前書き）

明けましておめでとう御座います。

18話　利益の精算をしよう

「あーうー、うー」
「何を陸に上げられたポンスみたいに唸ってやがるんだよ。　嬢ちゃん」

守護者の塔で一泊して更にもう少しＭＰを譲渡し、騎士団の駐屯地でロバと荷馬車を受け取ってヘルシュペルに帰還した。　その足でケイリックを訪ねると既に『野盗の頭目捕縛せり』なる一報が伝わっていたらしく、大仰なお礼として頭を下げられた。
砦の掃討自体はまだされていないので、西側の外殻通商路が通行可能になるには討伐隊が出た後、安全が確認されてからと言う事になる。

そしてまた翌日、アレで良かったのかと未練に頭を悩ますケーナに声を掛けるアービタの一言だ。　ちなみにポンスとはエッジド大河では珍しくも無い鯰みたいな魚で、焼いて良し煮て良しと調理法に事欠かない。　少し考えたケーナだが、アービタであればむやみに口外しないだろうと、昨日の頭目捕縛のいきさつを話した。

「むう、そんな奴だったのか。　しかし言動が随分と子供だな……。
魔人族には会った事はあるが、そこまで酷いのは聞いた事は無いぞ」

流石に見た目が青年でも中身は子供のプレイヤーなんですよ。
などとは口が裂けても言えないので適当にかわす。　現在のリアデイルでは魔人族も他の異種族と変わらない扱いになっているので、あからさまに差別意識を持つものは少ないのだとか。

「まあ、その場に居たわけじゃねえが、嬢ちゃんの判断はソレでいいんじゃねえか？」
「え？　でも生きて渡しちゃったのが少し心配で……」
「まあ待て。　そもそも嬢ちゃんは依頼で補給物資を届けに行ったんだろう？　もしかしたらその中に大旦那の希望も入っていたとしてもだ。　俺達冒険者は依頼を受けて動くから、判断するのは依頼を出した側ってことだよ」
「そう、……なんでしょうか？」
「どちらにしろ被害は国に響いてるんだ、騎士団に引き渡して国に判断を委ねたってのが間違いなんかじゃねえ。　嬢ちゃんが悩むのはお門違いって事だろう。　討伐も依頼されて無いのに手を出しました殺しましたってされたんじゃ国の面目丸潰れだからな」

相談したかったのは国との軋轢が生じるって事ではなかったが、誰かに「それはお前が悪い」とか面と向かって言われなかっただけ、ケーナの内心は落ち着いたモノになった。　ちょっとは迷いが晴れたケーナの表情を見たアービタがニヤリと笑う。

「すみませんアービタさん、ありがとうございます、相談に乗ってくれて」
「おお、先輩冒険者の助言もちったあ役に立つだろう。　御代はケーキでいいぜ」
「実は気に入ったんですね？」

誤魔化す様にワハハッと笑うアービタに苦笑を隠しえないケーナ。
材料が無いので市場に補給へ行こうとしたケーナを外から帰って来た団員が呼びとめた。

「ケーナ、お客さんだぜ」
「え、はい？」

団員が背後に指差す先に騎士甲冑姿のケイリナが立っていた。

「先ずはコレをお納めください」

色々話したい事があると言うので街中をぶらぶらしながら聞く体制になったケーナに、ケイリナは小袋を差し出す。　受け取ったケーナは見た目に関わらずやたらと重い袋を覗き込む、入っていたのは無数の銀貨だ。

「ナニコレ？　ケイリックが昨日言っていた後で届けるとか言う報酬？」

補給物資を届ける、フリをした野盗支配領域の奪還にしてはやたらと数が多い。　金貨2枚分位にはなりそうだ。

「冒険者ギルドにあった依頼の総金額と聞いています。　お婆様の名前は伏せて、善意の第三者的な感じで愚弟が商人達を丸め込んだらしいのですが。　おかげで名も知れぬ冒険者に感謝する商人達が多いみたいですよ」

依頼盤にあった三割の『盗賊をなんとかしてください』を思い出し、ケーナの顔が困惑気味になる。　ちょっと過剰報酬過ぎやしないかと考え込む祖母の姿に、ケイリナも可笑しくなって笑い出す。

「実際それだけの働きをしたんですよお婆様は。　国からも感謝状

を出そうとか話が持ち上がりましたが、なんとか止めてもらいました。　有名になったりするのはお婆様も望まないと思いまして」
「それはありがとうねケイリナ。　ここでイキナリ召喚状なんか渡されたらどうしようかと思った」
「但し、王と宰相、騎士団長にはお婆様の事を知らせて有ります。　権力者が大嫌いで守護者の塔に関係する人物と伝えて有りますので、滅多な事ではお婆様にちょっかいは掛けてこないと思います。　一応気をつけてください」
「ん、わかった」

　守護者の塔について、この国はエルフが多いので昔を覚えている者から逸話が事欠かない。　おかしな話が蔓延しているのだと聞いたケーナは、近辺に居たのがオプスだっただけあってその噂はほぼ真実だと納得した。
　曰く、城が馬車仕立てになって走り回っていただとか。　曰く「取りに行くのは鶏肉」とか叫びながら本物のゴーストが家に乱入して来たのだとか。　曰く、満月の晩にゴーレムとドラゴンが棍棒を持って円筒形の木を叩き続けていただとか。　聞いている方が頭痛を起こす内容ばかりだ。

「ところで捕まえていった魔人族ってどうなった？」
「地下牢の厳重な所に押し込みました。　何か呆然としたまま動かないそうですよ。　そう言えばあの首輪には何の意味があるのですか？　どんなことをしても外れないのですが」
「あれを外せるのは私の他にはもう居ないと思うよ。　外したら城ごと吹っ飛ぶと思いなさいね」
「判りました。　皆にはその様に伝えます」
「注意しておく事が一点。　首輪の効果でアイツの能力は１／１０に落ちてるんだけど、アイテムボックスの中まで干渉は出来ないんだ。　低レベルで使えるアイテムで爆裂系のモノを持っているかも

しれないから、身動き出来ない様に雁字搦めに拘束するのをお薦めするよ」

「あ、はい。　判りました」

ゲーム中に使えるアイテムは武器防具も例外ではないが、使用最低レベルと言うものが設定されている。　覇王の鎧はレベル百五十からでないと装備できない為、前回は『懲罰の首輪』を取り付けた途端に解除され、アイテムボックス内に格納された。　回復系のアイテムなら低レベルから使える物が結構な数がある。　攻撃系や補助系のアイテムはピンからキリまで存在し、レベル四十で使える物も幾つかあった。

ケーナがスカルゴとマイマイを気絶させたスタンボムはレベル三十もあれば誰でも使える。　威力は作る人間に依るが、室内で使えばこの国の平騎士くらいは一網打尽に出来るはずだ。

「そういえば、ケイリナは騎士団でどんな扱いなの？　騎士団長より貴女の力量の方が上でしょう？」

レベルと言う言い方をしないのは、この時代の人間がレベル制を知らないからだ。　だいたい強いか弱いと言う認識しかない。

「今は騎士団で中隊長に組み込まれていますが、本来は騎士団の指南役なのです。　今の騎士団長は私の弟子でして」

「ああ、野盗の被害が馬鹿にならなくなったから急遽騎士団に組みこまれたのね？」

成る程、それなら平騎士の妙に畏まった態度や、騎士団長が素直にケイリナの言う事を聞くのも納得できた。　ケーナの見立てだと”平騎士＜炎の槍傭兵団員＜騎士団長＜アービタ＜＜＜ケイリナ”といった所だろう。　しいて言うのならば実戦経験の不足差が、冒

険者よりも騎士団の弱体を強いているように思えた。

「騎士団が冒険者より弱いのは今も昔も同じなのね～」

「はあ、すみません」

恐縮した様に頭を下げるケイリナ。　誤解が無いように昔事を持ち出しただけだと付け加えておくが、ケイリナは事実なので特に反論もしない。　しばらく雑談に興じていた二人だが、別の騎士がケイリナを呼びに来た事でその場はお開きになった。

「それではお婆様、私はこの辺で。　おそらく先も見えてきた事ですし、そちらの護衛に当たっている商隊も話が纏まる頃でしょうから、今回お会い出来るのはコレが最後かと」

「うーん、それはそれで寂しい気もするなあ。　ま、なにか権力に関わらなくて私に出来る事があったらマイマイ経由で何時でも呼んで？」

「フェルスケイロからヘルシュペルまでですか？　それはそれでわざわざ長旅までしてこちらに来る事も大変でしょう」

「あ、大丈夫。　この王都目掛けて【転移】登録したから、行き来は一瞬だよ」

「はぁ、転移……ゑ！？」

ケーナから何気無く飛び出したトンデモナイ発言に、ケイリナは聞かなきゃ良かったと激しく後悔した。　最高峰の魔道師だとは分かっているが、普通に会話するだけでも常人の斜め上を遥かに飛んで行く単語がポンポン飛び出す。　自身の精神衛生上、早めに話を終わらせたケイリナは、呼びに来た騎士と共にその場を去って行った。

何か慌てている様子のケイリナに宮仕えも大変なんだなーと、感

心するケーナ。

（なんかもうお婆様と呼ばれても気にしなくなってるし。　慣れって怖いなあ）

降って沸いたあぶく銭（と言うには金額が洒落にならないが）でコッチ名産の酒でもお土産にしようと市場に足を向けるケーナ。勿論ケーキの材料も大量に仕入れて宿屋へ戻った。

戻ったらエーリネが帰っていて、野盗の頭目が捕縛された事で商談が予定より早く進み、翌日にでもヘルシュペルを出国するとの事だった。　流石に西の外殻通商路はまだ使えないので、再び東の通商路を経由して帰ることになる。

「って、まーた私任せですか……」

「期待していますよ、名も無き冒険者殿」

ニコニコと喰えない笑顔で眼鏡を押し上げたエーリネの発言に、ケーナは頬を引きつらせた。　もはや隠し事どころではなくすっかりバレている。　続いて商隊のエーリネの部下、家族で乗り込んでいるシュルスがケーナに小袋を渡す。　入っているのはやはり銀貨が大量に。

「とりあえずケーナさんの取り分ですね。　像も結構な数が売れましたから」

「ええと、何個作りましたっけ？　八十個でした？」

「全部で百二十個ですね、売れ残りは有りませんから完売と言う事で。　ひとつが八銀貨、ケーナさんの取り分が四割で銀貨三枚と銅貨十枚です。　全部で……、三百八十四銀貨になりますね」

「とすると、一万九千二百銅貨ぁ？　マレールさん所に四百八十日も泊まれるなあ……」

野盗討伐代も含めると七百三十日に延長する、ちなみに速計算を行ったのはキーだ。　しかし周りで話を聞いていた者達は、換算方法のあまりのしょぼさに脱力してあちこちに突っ伏した。　皆の陸に上がった魚貝類のような様相に首を傾げるケーナ。

「……いや、ちょっと待て……。　大金貰って、換算方法がそれでいいのかよ……、流石、嬢ちゃんは違う……」

「そうっスね……、何かこう、もちょっと実のある使い方、とか……」

「こ、これこそがケーナ殿の真骨頂、……見習うべきか、呆れるべきか……」

好き勝手に言われているとは知らず、市場で買って来た御菓子の詰め合わせを商隊の女性や子供達に配るケーナであった。

帰路は特筆すべき事は何も無く順調に進んで行った。　損失した馬はキチンと補充しているのでケーナが召喚獣を呼び出す事も無い。

再び兵の派遣されていた国境を越えて、エッジド大河に近付いた時にフェルスケイロの騎士や兵士が川岸に集っていた。　そこには大量の材木が山と積まれ、今にも橋を架けようとしている。　その割には人足の姿は欠片も見えず、エーリネは何が起こっているのか見極めようと商隊を止めさせた。

商隊の接近に騎士達も気付いていたようで、責任者らしき代表が此方へ歩み寄る。　闘技場で会った偉そうな騎士を思い出したケー

ナは、素早く馬車に隠れた。　厄介事の様な気がしたからだ。

しかし厄介事と言うものは関わり合いになりたくなくともあちらから歩み寄ってくるものだ。　騎士との話し合いから戻ってきたエーリネが、今から此処に橋を掛ける準備をするらしい、と皆に告げた。

「今からァ？　どうやって？」
「作業する人も居なきゃあ、それ用の道具も見当たらないぜ？」

材料有り、人員無しと聞かされればケーナにはピンと来る心当たりがある。　馬車を降りて見渡せば小舟で川を渡ってくる末の息子の姿を見つけた。

「カータツ！」
「！　お袋か！　なんでこんな所に？」

岸に上がってから駆け寄ってくる見慣れたドワーフの姿に安堵するケーナ。　状況の分からない騎士達からはざわめきが起こる。エーリネやアービタ達は事前に二人の関係を知らされているので、特にコレと言った反応は起こさない。　並んだ二人に凄まじい違和感を感じて頭を抱えるだけだ。　片や十代後半のエルフ美女、片や対象的な厳つい髭だらけのドワーフである。

「事前に聞いてはいたが、何か間違ってねえか？」
「あれで親子……。　大陸の七不思議ぐらいの違和感じゃ有り得ませんね」

カータツは国の専任技師なので護衛も務める騎士達がケーナを警戒する。　誤解の無いように『親子』と言う関係性を話し、騎士を

下がらせたカータツは此処に居る理由をケーナに話す。

「ああ、西の外殻通商路が使えないから、ここにきちんとした橋を架けようって算段なのね？」

「ま、橋が架かる前に野盗のボスは捕縛されちまったようだが。残敵掃討も含めてヘルシュペルと合同でフェルスケイロでも兵を出すらしいぜ。　どちらにしろ俺の仕事は変わらないが」

ついでだから親子共同作業にしようと言う事に成り、地面に橋の概略図を描いて協議する二人。　騎士を纏める中隊長を務める者はアービタ達へ近付いて、彼等に話し掛けた。　アービタの名は冒険者ギルドでも有名で、その昔騎士団に籍を置いていた事もあって騎士から見れば話しやすい。

「アービタ殿、あのエルフ女性がカータツ様の母と言う事は本当なのですか？」

「俺の槍に誓って断言してやる。　マジだ！」

きっぱりと言い切るアービタに幾人かの兵士は目を丸くする。国内でも教会の大司祭スカルゴと王立学院校長マイマイと造船所工房長カータツが兄妹なのは有名な話だ。　すなわちあのエルフ女性はその有名所三人の母だと。

「橋を架けるにしちゃあ人足が一切見当たらない様だが？」

「ええ、カータツ様は本来、人手等無しでモノを建築する”古の技（いにしえ）術”に精通してますからね。　材料さえ揃えれば問題ないのですよ」

「あー、そういや嬢ちゃんもそんな技使ってたな。　親が使えると子供も使えるのか？」

呑気に二人でウムウムと頷き合いながら会話していると、エーリ

ネが横から忠告を挟んだ。

「お二人とも、なにやら雲行きが怪しくなってまいりましたよ？」

「「ああん？」」

不思議そうな顔でエーリネに応えた二人は、仲良く話し合っていたはずの親子が険悪な空気を放っているのにギョッとした。

「だーかーらー、何で川岸スレスレから橋を架けるのよ！？　そこで一段上に坂を作ったら馬車とか上り難くなって、曳く馬が可哀想じゃない！」

「お袋の様に川岸スレスレから水面並行に橋なんぞ架けたら、大水になった時にあっさり流されるだろう！　橋自体は川面から距離とらないとダメだ！」

「大体なんで橋脚にこんなに資材を使うわけ！？　ここを減らせば橋の歩道部分をもっとマシに出来るでしょ！」

「お袋が大河を甘く見ているからだろうが。　足場さえ残っていれば歩道部分はまた架けりゃーいいことだろうがよ！　それだけあれば俺みたいな専門家が居なくても再び橋は繋げられる！」

ふー！　しゃー！　と、ネコの喧嘩じみてきた言い争いに、介入する事も出来ず唖然と見る商隊や傭兵団、騎士兵士。　アービタから目配せを受けたケニスンが、腰を引けつつも仲裁に入った。　勇気ある行動に兵士達から感嘆の声が上がる。

「あのぅ、お二人とも少しは落ち着いて話をしたらどうッスか……？」

「ケニスンさんは黙ってて！」↑【威圧】付き

「関係ねー奴はすっこんでいろ！」↑【眼光】付き

「……はい、失礼したッス」

が、迫力に負けてあっさり後退した。　兵士達からのブーイングに「じゃあお前等が仲裁してみろッス」と牙を剥いて反論する。普通（？）に見えて実際は千百レベルｖｓ三百レベルなので、うかつに間に入れない緊張感がひしひしと周囲に圧力を掛けていた。

「川岸のスロープを降りる前から橋を架けてしまえば、川面からも距離を取れるじゃないの！」

「だーからそれをすると材料が足りねえって言ってるだろーがっ！」

「材料が足りないのを腕でカバーするのが職人って……、あ！」

「は？　どうしたお袋？」

言いかけて何かに気付いたケーナが一旦停止する。　誰かの手も借りずに沈静化した怪獣クラスの喧嘩に、行く末を見守っていた見物人が不思議そうな表情を向ける中、中空からイキナリ出現した樽サイズの鉄球がケーナの周囲に降り注いだ。　その数十二個、一撃で人の命が簡単に奪える凶器攻撃に悲鳴を上げながら慌てて距離を取る関係者。　引きつった顔のカータツへ満面の笑みを向けたケーナが、嬉しそうに解説した。

「コレよコレ、橋脚に鉄心を入れればいいのよ。　材料が足りなきゃ調達すればいいのよね」

第三者的に言えば「何処から調達してきやがった！？」と言いたい所だが、ケーナが微妙に恐ろしく誰も文句を挟めない。　実はこの鉄球はオペケッテンシュルトハイマー・クロテットボンバー、略してオプスの塔のアイテムボックスに格納してあったシロモノで、一部の武器とアイテムを除けば資材ばっかりであった。　本人の許可もあるので、手ごろなモノをちょいちょいと拝借して来た、その際には守護者に『火事場泥棒みたいです事』とか嫌味を言われたが、

右から左へスルー。

再び腰の引けた息子を引っ張り、スキルの構築画面で協議を続ける。　鉄は鉄でもオプスの加工した神鉄なので、【建築：橋】に使用できるのはケーナのみ。　橋脚部分をケーナが担当し、歩道部分をカータツが敷設することで大体纏まった。

波乱万丈で始まった橋建造計画だったが、実行に移した後は早かった。

二人の周囲に風が舞い川が裂け、両岸から空中へ飛び出した材木や鉄球が呆気に取られる皆の視線の中、形を変え外観を整え地面に落下。　みるみるうちに橋が敷設されていく。　わずか一分も掛からない時間で馬車も楽に通れる幅広の橋が完成し、親子二人は満面の笑みを交わしてガッチリと握手する。

一拍遅れて、両岸から拍手が巻き起こった。

その晩は橋を渡った所で一団が野営をしながら大宴会となった。

カータツとケーナは敷設したと言っても大した労力を使ってはいない、むしろ苦労したのは川下から材料を運んできた兵士達であろう。　親子二人はせっかくだからと言われて、離れた所で談笑する場を設けて貰った。

その為、他の人に聞かれずに秘密話に興じる事が出来たので、僥倖と言えよう。

「生き残りだぁ！？」

「わあっ、しーっしーっ！」

「ああ、ゴメンお袋」

必然的に話題はヘルシュペルで猛威を振るっていた野盗の頭目の

話になる。　今更ながらケーナは彼の名前を聞いてなかったのに気が付いた。　実際的に彼のレベルは息子達より上なので、鉢合わせになる前に処断できてよかったと胸を撫で下ろした。

「なんだその世間を舐めた奴、なんで始末しなかったんだよ？」
「しようとしたんだけどね。　国との軋轢を作るわけにも行かないので引き渡した。　そういえば処分どうするんだろう、聞くの忘れた」
「おいおい、投げやりだなあ。　後で姉貴から確認して貰うしかないな」
「ああ、そう言えばマイマイにもお仕置きしなくちゃね」

黒い笑みを浮かべたケーナから流れ出したおどろおどろしい気配に、背筋を凍らせるカータツ。

「いやいや、そんなにショックだったのかよ！？　姉貴もしょーがねーな、少しくらい言っておけば良かったのに」
「まあ、私も大人気なかったけど……。　あやうく決裂冷戦状態になるところだったのよ」
「！？　あっぶねーなそりゃ……。　うん、姉貴強く生きていてくれ」

早々に姉を見捨てて星に祈るカータツ。
それを見て仲が良いなあと苦笑するケーナ。

「二人とも良い子だったし、改めて決裂しなくて良かったと思うわ。色々便宜も図って貰ったし、孫もいいものよねー」
「数日のうちにすっかり孫馬鹿になってやがるし。　なにがあった？」

胸に手を当てて優しい笑みを浮かべる母親に呆れる息子。　そこだけ別世界となった暖かい光景に、チラ見していた者も自然と笑みが浮かぶ。　しかし、空気を読むが約束を果たして貰ってないので、無視したアービタが声を掛けた。

「おーい、嬢ちゃん。　出発する前に言っていたケーキ、今作ってくれ」

「……って、今ですか。　アービタさんもしょーがないなあ。　虫歯になっても知りませんよ」

「けーきぃ？」

「もう面倒臭いから全員分作ろうっと。　カータツ、貴方も食べなさいね？」

「いやー、俺は甘いモノはちょっとー……」

「くすん、息子が母親の料理を拒否するんですよ、……どう思いますエーリネさん？」

「極刑ですね」

やれやれ仕方が無いなあと立ち上がったケーナから声を掛けられたカータツは、エールの入ったジョッキを掲げて軽く回避した。しょんぼりと項垂れて泣き真似をしたケーナがエーリネに同意を求めたところ、彼は至極真面目な表情で言い切った。

それは周囲にも伝染し、騎士や兵士達が「カータツ様、親を泣かすなんて男として最低の行為ですよ」やら「息子として親孝行は大事です」と声を掛けられ投げ遣りに声を張り上げた。

「あー分かったよ！　ケーキだろうが甘いものだろうがドンと来い！　じゃんじゃん作ってくれ、お袋！」

「そう、よかったー。　ここで断られたらスカルゴに泣き付こうかと思った」

【特殊技能（エクストラスキル）：薔薇（オスカル）は美しく散る】全開に長兄が迫る説教を想像したカータツはゲンナリとした顔になる。　それを見て溜飲が下がったケーナは噴き出して笑う。

暗い夜のしじま、一角が明るく染まった野営地に炎の勢いにも負けず劣らずの笑い声が広がった。

19話　姦しくしてみよう（前書き）

サブタイトルェ……。

19話　姦しくしてみよう

「んー、ど・れ・に・し・よ・う・か・な・天の神様の言う・と・お・り……」

フェルスケイロに帰って来たケーナは、冒険者として毎日を送る生活に戻っていた。

選り好みしなくても、受けようと思えば片っ端から何でも依頼を片付ける事が可能だ。　しかしそれをやってしまうと、冒険者を志そうとしてやって来る新米の仕事まで取ってしまうので止めておけ、とアービタに忠告を受けていた。　なので、適度に難しくなく、それでいて何日も拘束されないもの。　と言う基準で選んでいた。

「しっかしまあ、色々困ることがあるものねー？」

毎日少なくとも確実に八～十件は減っているはずなのに、依頼盤には隙間の出来る気配は無い。　フェルスケイロの冒険者ギルドに常駐している者は、約二十名。　全員が何かしら毎日の様に依頼を遂行している訳ではないが、それでも新しい依頼は毎日の様に増えて行く。

「まあ、人が住めば必要な物も増える。　街に無ければ外へ探しに行くしかねえからなあ、悩みは尽きないってもんよ」

暇を持て余してたむろしていた重戦士の様相を持つ大柄な男が、

ケーナの呟きを耳にして答えた。　数人でパーティを組んでいる他のメンバーも似たような考えなのか、同調して笑い出す。

「街中で解決出来ても、荒事は苦手なのは多いからね」

メンバー中、術士っぽい線の細い青年がそう付け加えた。

「ちげえねぇ」と同意した他のメンバーもうんうんと頷く。

「猫を探してくれとか、この街にどれだけ猫がいると思ってるのかって話だよな！」

「ああ、あれは参ったよな。　猫は猫でもゴアタイガーの子供とか、そんなの街中で飼うなって言いたかったぜ」

「依頼人のご婦人は良い人だったじゃないですかー」

再び依頼掲示板に視線を戻したケーナの後ろ姿を見ながら、一団は駆け出しの頃の苦労話に花を咲かす。　こういう体験談も聞いていて心地良いよねー、と思ったケーナは一番最初に目星を付けていた依頼書を手に取った。

――――食材の確保：ホーンベアの肉。　依頼者：黒兎の白尾亭。
報酬：銀貨八枚

カータツから聞いた覚えのある、兄弟で何かあると集まって食事会をすると言う場所だと。

（今までどんな話をしていたのか、とか聞くのも面白そうだよね）

フェルスケイロに帰って来てからカータツにマイマイへ「覚悟しなさいよ」、と伝言を頼み、それから三日間も会っていない。　街中で偶然会ったロプスの話によると、何時訪れるか判らない恐怖に

日々憔悴しているそうなので、そろそろ許してやろうかと考えていた。

（まあ、この仕事終わってからで良いか……）

受付に依頼書を提出すると馴染みの受付嬢、アルマナが応対してくれる。

「ケーナさん、これの配達先はお店へ直接になっていますけれど、場所分かりますか？」

「人に聞けば多分。　分からなくなったらスカルゴでも引っ張って来て聞きますよ」

にぱーと気楽な笑みを浮かべたケーナに、アルマナは世界が傾く音が聞こえた。　あの大司祭を使いパシリ扱い……、知ってはいるが理解し難い発言だ。

ある日血相を変えて下町宿屋に飛び込んで行った大司祭は既に噂になり、冒険者の間ではケーナが有名所三兄妹の母親だと言うのは周知の事実だ。　大半は「そんな莫迦な」と一蹴するか、ただの冗談だと笑い飛ばすに留まった。

しかし冒険者ギルドは正確無比な情報を扱う場でもある。　職員はそれが真実だと知っていたが、それでも目の前で再確認するのも酷な話である。　唯でさえ至宝の存在と母親を同列に扱う発言の多かったスカルゴマザコン疑惑の相手が、こんなうら若い女性だったと知ったファンの心境は計り知れない。　そんな街中の女性から、羨望なのか敵意なのか分からない感情を向けられているとは知らないケーナは、上機嫌でギルドを出ると市場へ向かう。

数日掛かるかも知れないので、保存食などを買い込む為である。

宿屋にも暫く留守にすると言って来なければならないし。　途中で暇そうな少年達を呼び止め、少量の銅貨を握らせる。　彼等にカータツへ暫く仕事でフェルスケイロを離れるとの手紙を届けて貰う。

デン助を下した手前、街の子供達に『恐ろしいねーちゃん』と認識されたケーナからの依頼を断る子供達はおらず、息子達との【以心伝心】が出来ないケーナには丁度いい通達方法になっていた。本来街中の片親や孤児の子供達はこの様な雑事で賃金を稼いでいると、宿屋の女将さんに教わったので有効活用するケーナであった。

カータツが窓口なのは工房が一般人でも利用しやすいからだ。

市場で保存食を買うか、食材を購入して現地で料理するか迷っていたケーナは、幾つか先の大通りを歩く女性の二人組に目を留め、その片方がロンティであると気付いた。　何かの縁かも知れないと大急ぎで買い物を済ますと、後を追いかけて声を掛けた。

ケーナに気付いたロンティは明らかにホッとした表情を浮かべるが、片方の女性は距離を取って腰の物を今にも抜きそうな構えを取った。　状況の分からないケーナは敵意を向けられる意味が無いので疑問顔に。　ロンティは慌てて両者の間に入ると、剣を抜き掛けた女性を宥めた。

そう時間も掛からず女性を落ち着かせると、ロンティはケーナに頭を下げた。

「お久しぶりですケーナさん」

「こんにちはロンティ、元気そうね」

「ここで逢えて良かったです。　街中探し回る事になるかと……」

胸に手を当てて「はーっ」と安堵するロンティに話が見えなくて、同行する女性に目が向かう。　薄桃色の本来は長い髪を編み上げでアップにして後頭部に纏め、ややキツい顔立ちだが強い意志の宿る瞳は茶色。　自分を棚に上げたケーナは充分美人と評価する。　身を包むのは女性用の白い軽装甲。　それもフェルスケイロの騎士団が使う鎧と同じデザインだ。　腰にあるは細身の剣、おそらくはレイピアかフランベルジュ。　キビキビした動きが垣間見える所から剣の腕はあると判断した。　どちらにしろケーナが見ればレベル丸分かりなので、全体の実力はヘルシュペル騎士団の平騎士より下、と確認する。

「こちらは私の学院でのお友達で、ええと……、マイさんです」

警戒を解いた女性は軽い会釈をケーナへ、それに笑顔（にぱー）と返すとマイは面食らった顔で一歩下がった。　初期に会った時のロンティと同じ反応なのでエルフが苦手なのかと思い返すが、当人は慌てて赤い顔をあらぬ方へ向けた。

ケーナは全く意識して無いが、彼女の満面の笑顔には【受動技能（パッシブスキル）：魅了（チャーム）】が付与されている。　初めて会う者が心構え無しでこれに対面すると赤面してしまうのだ。　勿論魅了には強制的に意識ごと操作するほどの効果は含まれて居ない。　せいぜい初対面の心証に微量プラスする程度だ。

その様子を苦笑いで同じ道を通ったなあ、と見ていたロンティはケーナに再び頭を下げた。

「すみませんケーナさん。　御忙しい所手間を取らせてしまうんですが、暫く私達が一緒に行動する事を容認して頂けませんか？」

「……は？」

逆に鳩が豆鉄砲食らったような顔をしたケーナは、ロンティのお願いに一時フリーズした。　直ぐに再起動を果たすと、言われた事を脳内で吟味して少し考え、二人の格好を眺めると予定を切り替えるしかないかと思った。

「うん、まあ、いいけど……」
「本当ですか！　ありがとう御座います！」

手を組んで感極まったロンティは飛び上がって喜び、隣のマイの手を取って頷いた。

「ちょっ、ちょっとロンティ」
「マイさん、ケーナさんが引き受けてくれるそうですよ。　良かったですねー」

妙に喜びすぎているロンティとそれに振り回されるマイを静める様に、手を叩いて一旦沈静化させる。　近くにあった食堂を指差し、二人に入るように促した。　了承はしたが事情を聞く事もしないと訳が分からないからだ。

軽い果実酒が並ぶテーブルでロンティは失態を見せたと縮こまって、それを優しく宥めるマイ。　マイの仕草に気品のようなモノを感じていたケーナは上流階級の友人同士かと当たりをつけた。

「落ち着いたかなロンティ？」
「すみませんケーナさん。　はしたない所をお見せしました……」
「それで私に同行したいと言う理由くらいは教えてくれないかな？」

口を開こうとしたロンティを制してマイがケーナに向きあった。

「御免なさい、私の都合に合わせてくれたんです。　私が外に出るのが初めてなので、ロンティが付いて来てくれて。　外をよく知っている人を護衛につけようと言ってたのですが、私が男性が苦手なので貴女に、と」

「で、護衛の依頼じゃなくて同行なのね？　ってことは二人とも自分の身は自分で守れる？」

こくこくと頷いた二人の服装はともかく所持品を見て思案したケーナは、十数枚の銀貨をテーブルの上に転がした。　何がしたいのか判らないと首を傾げる二人に笑みを向ける。

「今から依頼で王都を出るところだったの。　着いて来るのなら数日間の野宿に耐えられそうな装備を整えていらっしゃい。　お金はサービスだから使ってね？」

「「は、はい！」」

異口同音に返事をした二人はお金を受け取ると、マイがロンティに野宿に必要なモノを聞きながら食堂を出て行った。　精算を済ませたケーナは食堂を出ると、食料を多めに持っていく事に決めて市場へ足を向けた。　二人の位置は王都の構造をバッチリと記憶したキーが請け負ってくれるので、はぐれる事は無い。

当初の予定より大幅に遅れて、昼を越えてからケーナ達は王都を後にした。

「そういえばケーナさんは何の依頼を受けたんですか？」
「ああ、話して無かったわね。　ホーンベア退治だよ～」
「そうですか。　……ってホーンベアですかあっ！？」
「うんそう、お肉が欲しいんだって。　えーと、兎の白尻尾亭から」
「黒兎の白尾亭じゃないでしょうか……？」
「それそれ、そんな名前だった」

気楽に鼻歌を奏でながら東へ街道を歩くケーナはともかく、ロンティはとんでもない依頼内容に青褪めた。　ホーンベアは普段森の奥深い所に生息する雑食系の生物で、腹が空けば人里まで出てきて人も襲う。　仕留めるには森の奥まで入り込み、冒険者でも数人のチームが必要だ。　学院生でも数人束になって勝ちが取れるかどうかの難敵にあたる。
マイも掻い摘んで説明をするロンティから話を聞いて、表情を引き締めた。　ケーナに渡されたお金で揃えた野宿用の道具や毛布代わりにもなるマントや非常食、それらを入れるザックを持つ自分達。
それに比べて装備以外は明らかに軽装なケーナの姿を。

「ロンティ、あの御仁大丈夫なの？」
「まあ、実力に関してはうちのお爺様も太鼓判を押してくれていますし。　スカルゴ大司祭様の実の母親らしいですし、問題ないかと思いますよ」
「あの女性（ひと）が噂の大司祭様の母親！？」
「？　何々、スカルゴがなんかした？　マイちゃんに何か迷惑をかけたの？」

ひそひそと小声で会話をしていてつい大声を上げてしまったマイに、先行していたケーナが近付く。　慌てて口を押さえたマイの様子に訝しげになると、眉を吊り上げた。

「まさかお参りに来た女性に手を出してるとか！？　おのれスカルゴ、女性の敵にまで落ちたのね。　帰ったら折檻だ！」

「ち、ちちち、違います違います！　時々相談に乗って貰ってるだけでしゅっ」

拳を固めて憤慨するケーナを捕まえて必死で弁明するマイ。　ここまで必死なのは見たことなかったのか、ロンティがポカンと呆気に取られた。　語尾を噛み、赤い顔の必死さにピンと来たケーナは黒い笑みを浮かべた。　三日月のような黒い笑みを。

「はっは～ん。　さてはマイちゃんウチの子に気があるのね！」

「ひぅっ……」

「え？　マイさん本気で……？」

蒸気でも噴き出しそうな赤い顔で硬直するマイに、おそるおそる声を掛けるロンティ。

すっかり好奇心旺盛な近所のオバさんになり下がったケーナは腕組みをし、深ーく頷いて「当たりか」と呟いた。

「相談に乗って貰える所から優しく諭され、美貌と相まって心にストンと落ちる奴の甘い言葉。　かーっ青春だねえ～」

更に野暮な伯父さんにクラスチェンジしたケーナの言葉に、益々赤い顔で俯くマイに本気なんだと驚くロンティ。

「でもまあ初恋だから実らなそうだけど……」

「そんな軽い気持ちじゃ有りませんっ！」

イキナリ元に戻って鷹揚な発言をしたケーナに食って掛かるマイ。

しかし、彼女の口許がニヤリと歪むのを見てハッとなった。

「オゥケェ～、認めたね～」

「ち、ちち、ち、違います！　これはそんな意味じゃなくて！　もっとこう親愛の！」

「良いんじゃない？　特に反対もしないし、そういうのは大事だと思うし」

腕をばたばたと振って誤解（？）を解こうとしたが、ケーナの我関せずな態度に面食らって奇妙な表情をとった。

「息子達の恋愛には関与しませんよ私は。　折角の恋心摘み取っちゃ悪いしね。　それにマイマイなんて、息子と娘がヘルシュペルに居るのに夫二人目とかもう自由奔放よ！　『娘の心を射止めたかったらせめてこの私を倒してからにするんだな』とかやりたかったのになー」

後日この発言をロンティから聞いたマイマイは、行き遅れにならなくて良かったと大層安堵したそうな。　母親の手に掛かればどんな猛者であろうともミンチだけじゃ済まない。　ロプスに至っては非戦闘員なので考えるだに恐ろしい。

この場の二人はケーナの実力の程は知らないので、「はあ……」と呆れて頷くだけだ。

日が完全に落ちる前ギリギリに、街道に備えられている簡易宿泊広場に辿り着いた三名は手早く野営の準備を始めた。

森の中なら問題なく【暗視】も使えて木々の声も聞けるケーナが薪を拾いに行き、学院の授業で長距離行軍を行う事のあるマイとロンティが簡易式の呪い(まじな)を広場に敷く。

大量の薪を抱えて戻ってきたケーナも交えて火をおこして水を沸かし、持ってきた干し肉と野草と芋で簡単なスープを作る。

一応万が一も含めて薪を拾いに行った時【召喚魔法：三頭犬(ケルベロス)】を使い、周辺を警戒させた。　相当な実力を持つモンスターでも無い限りこの警備は突破出来ないだろう。

わんこーズの存在を知る者はケーナだけなので、二人は時折森から響く音にビクビクしながら焚き火を囲んでいた。

食事を終えたケーナはアイテムボックスから材料を出し、鼻歌を歌いつつ膝上に材料を並べて確認をする。

「こ、こわくないんですかケーナさん？」

「別にィ、森だしハイエルフ(わたしら)の領域よ。　どこを今更怖がれって？」

事も無げに言い放つ、それだけどっしりと構えているケーナに安心したのか二人の怯えが少し緩和した。

（ありゃま、アービタさんの言った通りだねえ～）

アービタの冒険者講座に入っていた事例で、年長者が何も構わず腰を落ち着けているだけで不安は拭える。　といった内容だ。　それだけにこうも効果覿面すると、頼られてるって感じがして少し嬉

しくなるケーナだった。
それはともかく食後のデザートとして【調理技能（クッキングスキル）：パイ】を起動させる。　両手の間に生まれた巨大な火球に膝上の材料が吸い込まれて行き、ものの数秒でルジュのパイが完成した。

いつも通りのいい匂いによしよしと頷いたケーナは、正面に座っていた二人組が目を点にして顎を落とした状態で硬直してるのに気付き、ポンと手を叩いて納得した。

「そか、これ使うの学院とエーリネさん達以外だと初めてか。　なるほど」

愕然としている二人の肩を叩いてこっちに引き戻すと、皿代わりにその辺の樹から貰ってきた葉に切り分けてそれぞれに手渡す。
ケーナとパイを交互に見ていた二人は、調理人が美味しそうにパイを平らげるのを目にして、おずおずと口をつけた。

「あ、美味しい……」
「本当、甘い……」
「気に入って貰えて何よりだわ。　六等分したからひとり二切れ食べてね」

甘いモノは別腹理論で自分の分をペロリと平らげたケーナは、ルーンブレイドを腰に刺すと立ち上がって広場より坂下にある川へ足を向けた。　「ちょっと準備してくるね」とだけ言葉を残して。

「何を準備する気なんでしょう？」
「私もちょっとケーナさんの思考までは読めませんので……」

二人の疑問は程なくして解消された。

ドッゴッカアアアアァアアンンッッ！！　というもの凄い爆発音と、
ゴドドドグゴゴゴオオオオンンッッ！！　という地響き揺るがす轟音によって。

慌てた二人が恐る恐る坂を下ると、地面から太い筒状に岩が直立しているオブジェを前にやり遂げた顔をしたケーナが居た。

「ケーナさん！」
「何をやっているんですかっ！　これは何ですか、モンスター？」
「ああ、ちょっとお風呂作ろうと思って、地面が加工するのに硬いから吹き飛ばしたのよ。　騒々しくて御免ね」
「は？」
「お、お風呂？」

爆裂魔法で地面に穴を開け、河原の石をレンガ状に加工して敷き詰め。　水を川から引いて【温水】魔法で暖めたのだ。　もうもうたる湯煙が衝立代わりの岩の加工壁の向こうから噴き上がっていた。

もはや二人とも、ケーナのやること成す事の突拍子のなさに唖然とするしかない。
マイは疑問を持つよりは受け入れたほうが良いと考えて、ロンティを引っ張った。

「ま、マイさん？」
「せっかくですから入りましょう、ロンティ」
「え？　え、えええええっ！？」
「じゃあ、私は此処で見張りしているからゆっくり入ってきてね」
「判りました。　お言葉に甘えますね」

壁の向こうに移動した二人を見送ったケーナは、衝立の入り口で壁に背を預けて腕を組んだ。

同時に目の前にＭＡＰモードの画面が開き、キーが周辺の地形を表示する。　幾つかの光点が蠢く中で赤いマークが無いのを確認して溜息を付いた。　ケーナの目前に風が渦を巻き、透き通った姿を持つ小鳥が三羽姿を現した。

昼間ひそかに呼んでおいたＬＶ１の風精である。　ホーンベア探索のために周辺に放っておいたのだ。

「やっぱり森の奥まで踏み込まないとホーンベアは居ないか～」

『目標、辺境ノ村周辺地形ト良ク似タ場所ニ生息ノ可能性アリ。北十七ｋｍニ生息、七十四パーセント』

地図上ではエッジド大河の本流スレスレの地域に当たる。　水辺が近くなるとそれだけ生物も増え危険も多くなる、レベルの低い二人を連れて行って大丈夫なのかと後悔し始めるケーナだった。

翌日、行動を開始したケーナは二人に森の奥へ踏み込む事を伝えた。　基本ゲーム中であれば単独行動を取る事が多かったケーナにとって、この二人ははっきり言うとお荷物だ。　プレイヤーであれば初心者でもある程度の事は心得ているので放っといても平気だと思えるが。　何よりこの世界は死んで戻れる拠点がある訳では無いからだ。

【召喚魔法（サモンマジック）：ｔｒｉｐｌｅ　ｌｏｒｄ：風精（ウィンディ）ＬＶ１】

人の命が掛かっているとなれば、多少の秘匿主義も返上して特殊

技能もバンバン使う。　風精を三体呼び出して進行方向のホーンベアを探索させ、二人の護衛にゼアウルフを二匹呼び出した。　風属性の白狼はいざとなったら風を駆けるので、二人を避難させるのに丁度良い。

身の安全を考えるのであればここで別れるのが常識になるが、二人がどうしてもと言うのでしぶしぶ了承した。　一応防御魔法も二人に施して、保険は何重にも掛ける。

樹達に進む方向を尋ねながら、ケーナ達は森の奥深くを目指して進む事にした。

20話　王都を防衛しよう

「ふ、またつまらぬモノを蹴ってしまったわ」

「……」

「だ、大丈夫ですかマイさん！？　気をしっかり持って！」

手足をあらぬ方向へ投げ出し、地面にめり込んだままピクリとも動かぬホーンベア。

既に事切れたソレを前にして髪をかき上げたケーナは、何処かのサムライの様なセリフを吐いた。

騎士でも二人掛かりでやっとどうにかなるモンスターを、たった数秒で片付けてしまったケーナに愕然とするマイ。　ケーナが水上を歩くのを目撃した前例があるロンティは正気を取り戻すと、マイの意識をこちらに戻すために呼びかけた。

風精にホーンベアを探させ、見つけたらなるべく広い所に誘導。

毛皮を加工品として使いたいが為に、斬り傷や刺し傷を付けたくなかったケーナは何時もの通りに【戦闘技能（ウエポンスキル）：チャージ】で蹴り飛ばした。

今回は前回みたいに樹木へ被害が及ばない様に、吹っ飛んだホーンベアを風精に上空へ巻き上がらせた。　単刀直入に表現すると、蹴殺と墜落死のダブルコンボによって、完膚なきまでに息の根を止めた。

マイが放心した意識を取り戻したのはケーナがホーンベアの解体をその場で行い、周囲にむせ返る血の匂いが撒き散らされてからであった。　一応風精に命じて他のモンスターが集まらない様に風の流れをコントロールさせた為、その場に途轍もない臭気が集中した。

青い顔で口を押さえたマイはロンティに付き添われ、風結界の外側の森へと駆け込むようにその場を離れた。　ゼアウルフ達もキチンと命令を守り二人の後を付いていく。

手早く切り分けたケーナは肉は凍結、毛皮はなめし、骨も加工してさっさとアイテムボックスへ放り込む。　後は自分に浄化をかけ、停滞した空気を吹き散らせば依頼は終了だ。

探すのに大分手間取ったので夕方も近い。　今夜はこの広場で一夜を明かす事に決めた。

ゼアウルフ達に二人を此方へ引っ張ってくるように命令し、風精に礼を言って召喚を解くと【召喚魔法：白竜（ホワイトドラゴン）：Ｌｖ５】を使用、純白の羽毛に覆われた五階建てのマンション大クラスのドラゴンを召喚した。

程なくウルフ達の背に乗って戻ってきた二人は、荘厳な風体を見るなり目を点にして背から落ち、コロンと地面に転がった。

此処に来るまでの行程で出てきたモンスターは、簡易式の呪い（まじな）程度で防げる低位のモンスターと格が違うのが多かった為、安全を考慮しての策である。　羽毛の翼に包まって寝ると、とてももふもふな気分でグッスリ眠れると考えた理由もあった。

なんとか二人を宥めるとホワイトドラゴンの広げる翼の内側に引き込み、その場で野営の準備を始めた。

顔を見合わせて黙ってしまった二人に苦笑するしかないケーナ。

「ドラゴンを見るのは始めてなのかな、二人とも？」

ケーナが作ったパンとチーズと串焼肉をもそもそと喰いながら、頭上の夜を遮り焚き火に赤く照らされるドラゴンの顎をチラチラ見ていた二人は、しばし間を置いて頷いた。　古い記憶を思い出すようにマイが答えた。

「人づてに話を聞いた程度、ですが。　随分前に騎士団長の方がそのような話をしていました」

「それなら私も聞いた事が、古い遺跡にはまだそこを守るためにドラゴンが残っている所があるとか……」

「騎士団長？　二百年前から居る人なのかな？」

「多分そうかと、竜人族（ドラゴイド）の方です」

「ふうん、強い人なのかな？」

「ええ、強いですよ。　岩ぐらい簡単に叩き割る人ですから」

（それってもしかしてプレイヤー？）

疑問もあるが本人を見ないとどうなのかも判らない。　意識を切り替えて学園の事に話題を移すと、二人の緊張がほぐれるまで失敗談や体験談の話に付き合う。　楽しそうに笑う合う二人がホワイトドラゴンの事を気にしなくなるまで。

――――――　フェルスケイロ　ｓｉｄｅ

ケーナ達が森の中でホワイトドラゴンと共に一晩を過ごした翌日。
冒険者ギルドに集っていた者達の中で、ひとりの男がポツリと呟いた。

「そういやあ、あのお嬢ちゃんここ三日くらい姿を見せねえな。また何処かへ護衛で行ったのか？」

ここに入り浸るパーティ”凱旋の鎧”、ケーナが依頼を受けた日に彼女と会話を交わした男達だ。　数日前に受けた依頼で懐の暖かい彼等は特に無駄遣いに費やすこともなく、割のいい依頼目当てで冒険者ギルドにたむろしていた。
男の呟きには、彼等の頭脳労働担当である術士の青年が憶測も交えて答える。

「狩猟系の依頼でも受けたのではないですか？　彼女の事ですからきっと元気でやっていますよ」
「あの嬢ちゃん見てて危なっかしいからなあ、大丈夫なのか？」
「そろそろ何処かのパーティにでも紹介してやったほうがいいんじゃねえ？」

仲間達が口々にケーナの事を思って口を出す中、重甲冑に身を包んだ男だけが首を振った。

「あの嬢ちゃんと対等に肩を並べられる奴でも居ればな……」

重々しく呟いた言葉にパーティ仲間が言葉を途切れさせ、互いに顔を見渡す中、男は苦笑して皆に詫びた。

「ああ、済まん。　なんかそんな感じがしただけなんだ、失言だった。　忘れてくれ」

「おいおい、コーラル。　なんか妙に意味深な呟きじゃねえか、惚れたか？」

「なっ！？　だ、だれがあんなお嬢ちゃんに！」

コーラルは絶句した後に仲間で茶化した男に食って掛かった。

パーティの盾と決定打を叩き出すコーラルの怒りを受けては堪らないと外へ逃げ出す仲間。　追う事を止めたコーラルは初めてケーナを見た異質さに身震いした。

――　かつて、ＶＲＭＭＯＲＰＧリアデイルというネットゲームがあった。

外見二十代の人族として作成され、コーラルと言うキャラクターが生まれた。

顔も名前も何も判らない他人とキャラクター（アバター）を通して知り合い、困難に手を組み、互いに成長した楽しい夢の国は、思いもかけない出来事によって衰退の道へと転がり落ちた。

そしてサービス終了の最後の日、最後まで残っていたコーラルは気が付くと自分のギルドの砦で目が覚めた。

砦は既にその機能を停止していて、メンバーは誰も残っておらず、

マップ機能も使えない有様で、どうにかこうにか人里へ降りてきて見れば。　そこに広がっていたのはかつてのプレイヤーが栄華を誇った時代より更に、二百年近く経過した時代であった。

最初に降りたった村で悩みぬいた挙句、コーラルとして今後を生きて行く事を覚悟した彼。　世話になった村から冒険者志望の者達とフェルスケイロの王都へ出て、そこで冒険者となった。

最初七名居た仲間達も十年も経った今では四人しか居ない。　死んだ者も居れば抜けた者も居た。

あちこちを巡りながら同じ様に世界に残ったプレイヤーを探し続けたが、十年も経ち自身が年を重ねたと自覚する頃。　再び拠点にしたフェルスケイロの王都でケーナと名乗る新米冒険者と出会った。

一般常識も満足に知らないその女性エルフをひと目見たコーラルは愕然とした。

【特殊技能（エクストラスキル）：サーチ】でレベルやステータスを見抜けなかったからだ。　ただ不明と表示されるそれには覚えがある。　自分よりレベルの高い者の数値は見ることが出来ない、ＶＲＭＭＯＲＰＧリアデイル特有のシステムだ。

あの女性が捜し求めていたプレイヤーであった場合、他にも幾人か残っている可能性がある。　彼女にそれとなく確認するためにケーナについて噂をかき集めて見れば、出るわ出るわプレイヤーらしき行動が。

曰く、水の上を歩いていた。　現在の世界では水上歩行の魔法は失われている為、実に確定的な証拠だ。　曰く、フェルスケイロ有名所三兄妹の母親。　当人達を確認しに行ったら、会えたのが港湾区工房長カータツだけだった。　しかし彼のレベルは三百な為、その三人ももしかしたらプレイヤーかもしれない。

悶々とケーナについての考えを巡らせている姿に、仲間達はついにあの堅物にも春が来たかと笑い合っていた。

そこへ意外な者達がギルドの扉をくぐって来た。　白い甲冑に肩のグリフォンの紋章、フェルスケイロの騎士だ。　二人組の片方は普通に見られるような平騎士だったが、もう片方は体躯に匹敵する巨大な大剣を背負った銀色の竜人族（ドラゴイド）だった。　平騎士は中をぐるりと見渡すと、真っ直ぐ受付嬢の所へ近付いて行き、何かを言付けている。

入り口で立ち止まっていた竜人族はコーラル達込みで数人程の冒険者に問い掛けた。

「済まないが人を探している。　薄桃色の髪をした身なりの良い女性を見た事はないか？」

街中で会うと大抵の騎士は横柄な態度を取るため、冒険者には嫌われている。　それだけに先に断りを入れた竜人族の騎士の態度には好感が持てた。　しかし、見た事のある者は居ないらしく、ほぼ全員が首を横に振った。

それとは別にコーラルは違う物を見て目を剥いていた。　【サーチ】で竜人族のレベルが読めないのである。　大剣使いの銀の竜人族、記憶にあるのはかつての自分の所属していたギルドのサブリーダーだった男。　たしか名前を……。

「……シャイニング、セイバー……？」

「ああ、たしかに俺はその通りの名前だが……。　ん？　名前教えたか？」

「”銀月の騎馬”……の？」

「な……に？　お前その名前を知るとはっ！？」

焦った口調の竜人族と視線が絡み合い、睨みつけたその目が驚愕に見開かれる。

「お前、コーラルかっ！？」

「サブリーダー！　アンタかっ！！」

二百年来、と言えば良いのか分からないが、元ギルドのメンバーはガッチリと握手して再会を喜び合った。　コーラルのパーティ達とシャイニングセイバーの部下の騎士は、笑い合う二人をポカンとして見ていた。

ロプス・ハーヴェイは悩んでいた。

片手には桶、中でドドメ色の液体が異様な臭気を放っている。

徹夜の成果と言う名の失敗作だ。　輝きに魅せられて自分の手で作ってみたくなった。　原因は妻の母親が行使した〝古代の御技〟だ。

妻であるマイマイに聞いたところ、物を作製するなら弟のカータツが専門だと言われた。　彼に聞くと〝くらふとすきる〟なるもの

が必要で、それを新たに取得するとなるとケーナが持つ技能しか得られる手段がないそうだ。

『それはケーナ殿に頼めば手に入るのか？』

『……難しいな。　お袋はそう言った技能を管理する立場にある。　俺達は兎も角、欲しいからと言ってくれるとは思えねえ。　後は試練を受けて合格するしか手段はねえな』

試練も千差万別、時間が掛かるモノや殺意高いモノなどあるらしく、それは守護者の塔と言われる場所に行ってみないと判らないとか。　本人に会って確認してみようと思えば、依頼で居なかったり会っても話す時間が取れなかったりと、タイミングが悪い。

仕方なく同じ材料で同じモノが作れないかと色々試してみたが、道は果てしない。　何を作っても納得のいくものが出来ず、廃棄物が山のように増えただけだ。　遠方から取り寄せたものもあっただけに、残念でならない。

失意のどん底で学院の敷地の端にある穴を掘っただけの捨て場に来て、桶の失敗作を注ぎ込んだ。

見れる者が見れば分かるが、其処には踊る矢印と『？？？』と表示されたフキダシがあった。　所詮プレイヤー以外には見えぬ意味の無い物だ、廃棄物の中にオクソレの根とロッガの目玉とヌェイブの舌が混じっていなければ……。

トボトボと穴に背を向けたロプスの背後で光が迸った。　驚いて振り返った彼は眩しさで顔を覆いながらも、幾筋の細い光が穴の場

所から吹き上がるのを見た。

光は校舎より高い空中に線を描く。　ずんぐりむっくりな丸い胴体、ヒレ状の腕に鋭い爪、短い脚はどっしりとした体を支える為の太い爪が。　最後に嘴の長い鳥に似た頭部、口腔には牙がギッシリと。　見たことも聞いたことも無い生物を描き終わると光は消えた。

校舎内から目撃していた生徒も、その足元から見上げていたロプスも光の線で描かれた怪物から目が離せなかった。　そして次の出来事に仰天した。　線の体内に骨が出現したのだ。　骨だけではなく肋骨内に納まる内臓、骨を肉付ける筋肉、皮膚が全身を覆い尽くして羽毛が生えて怪物が完成し、大地に足を下ろした。

容姿を端的に表すならば、脚が鉤爪の生えた爬虫類で胴体がペンギン、退化した翼からは真っ白な爪が二本。　頭に乗っかっているのは牙のギッシリ生えた細長い口を持つイルカだ。　頭頂部までの高さ十mはあろうかと言うそれは、よちよちと一歩を踏み出そうとして学院の壁に勇み足を取られ、転倒して大河へ盛大な水柱を上げて落下した。　周辺を航行していた為にその光景にでくわした者達は突然発生した高波に舵を取られ、転覆したり投げ出されたりと水上は悲鳴や怒号が響き渡った。

――――　シュギイィィィイイィッ！！

中洲と住宅部の中間で起き上がったイルカペンギン凶悪面は、そこで初めて産声を上げて存在をアピール。　恐怖で逃げ惑う人々に構わずに歴史的な二歩目を踏み出そうとして、港湾区の桟橋を踏み抜いてその上に倒れ込んだ。　再び高波を伴う水飛沫と木っ端微塵に吹き飛ぶ桟橋を構成していた木切れ、小舟に生活用品逃げ遅れた

者達。

起き上がる際にも下から桟橋部分を掬い上げる怪物。翼腕部分をバタバタさせ、シュギュシュギュと笑うように鳴くと、遊びの様な仕草で川岸にある桟橋増設部分を削りに掛かった。

この破壊活動は貴族街側からもよく見え、緊急事態と踏んだ王と宰相は騎士団を出陣させた。だが如何な騎士団と言えど怪物と相対する為には大河を越えなければならず、ムチャクチャに大波が起つ中を越えられずに中洲で怪物が上陸するまで指をくわえて見てるしかなかった。

学院も敷地から出現した怪物に戦闘を辞さない考えの生徒も居たが、学院長の一言で生徒全員を貴族街側の岸へ避難させた。教会でも似たように非戦闘員を避難させ、神殿騎士団と回復魔法の使える者達で中洲に打ち上げられた怪我人の手当て奔走していた。

この騒ぎの中カータツと合流したマイマイはロプスから怪物の出現を詳しく聞き、カータツと顔を見合わせてそう言えば、と切り出した。

「確か御母様が中洲にはヤバい場所があるとかないとか、言っていたわね……」

「おいおい、お袋が『ヤバい』っつーならとんでもねーぞ。　何で詳しく聞いておかねーんだよ、姉貴」

「しょーがないじゃない、兄さんの暴走とかケイリックの事とかあって、今の今まで忘れてたわよ！」
「待て待て、姉弟喧嘩している場合か！　アレはどうしたらいいんだよ！」

二人の間に割り込んで、対岸で嬉々として建て増しの桟橋部分を破壊している巨大なペンギンを指差すロプス。（げんきょう）　知らなかったとは言え自分の仕出かした事だ。　何かしら事態の鎮静の手助けをしたいと思っていた。　ロプスに諭された姉弟は怪物を先ずはじっくり凝視し、難しい顔で考え込む。

「不味いな俺達より強いぞアイツ」
「考えるより行動をしろ、よ。　牽制くらいするわよカータツ！」
「少しは先を考えろよ！　コッチに注意を向けて対岸に目標定めたらどーすんだよ！」
「あ……」

弟に言われて初めて気付いたマイマイは両手を合わせ、魔法を撃つ寸前の体制で硬直した。　男達は確信する「こいつ言われなかったらそのままぶっ放してたな」と。

「こりゃさっさと住民街側に移動する必要があるな……」

カータツの呟きと同時に怪物は桟橋部分を粗方削り終え、いよいよ上陸に掛かろうとしていた。

一方、住民街側では探索に駆り出した自分の部下を住民達の避難誘導に充て、先行したシャイニングセイバーとそれに付き合うコーラルが怪物の間合いに接近していた。

「おい！　どーすんだよあれ！」
「決まってる！　ブチ倒すだけだ！」
「ちょっ、おまっ！？　術士の援護もなしで二人だけでどーにかなるわきゃねーだろーがーっ！！」

バキバキと家屋を踏み潰し、破壊だけをまき散らす採取ポイントイベントモンスター。　手前で立ち止まったシャイニングセイバーは、このまま戦う事に否定的なコーラルを見据え、気が付いたように頷いた。

「そうか、そう言えば冒険者だったかお前。　済まん、つい昔の様にギルド単位で考えてたな……」

殊勝に頭を下げるかつてのサブリーダーに嫌な予感が拭えないコーラルは、確認の為に聞いてみた。

「俺が突っ込まなかったら、アンタは特攻を止めるのか？」
「まさか、突っ込むに決まっている。　これでも国を守る騎士を自負しているんでな！」

だからといって突撃思考で行けばいいと言うモノでは無かろう。
呆れかえって背中の大剣を抜くコーラル、つくづく突撃しか出来ない馬鹿の戦闘方法は変わらないと思った。

「コーラル？」
「ただ働きだが付き合うぜ」
「すまん、恩に着る」
「全部終わったら飲み代はお前にツケとくからな」

再び怪物に向かって疾走する二人。　身体能力を一時的に引き上げる【能動技能（アクティブスキル）】を幾つか起動させ、家屋に飛び乗り屋根の上を加速する。

「相手はデカブツだ！　頭をド突いてひっくり返すぞ！」
「わーったよ！」

加速した運動エネルギー諸共、技に上乗せして二人は空を舞った。

【戦闘技能（ウエポンスキル）：衝突撃破（ダブルクラッシュ）】
【戦闘技能（ウエポンスキル）：破斬撃坑（パイクリングアタック）】

ほぼ同時に二条の流星が怪物の顔面に突き刺さって大爆発した。
悲鳴らしき声を上げ、もんどりうってひっくり返る怪物。　スローモーションで倒れる怪物と同様、技の余韻で対空から落下の途にいた二人。　身を捩った怪物の翼が彼らにも迫る。　空中なので回避行動も取れず、ラケットに打たれたテニスボールの如く跳ね飛ばされて、随分離れた民家に突っ込んだ。　再び大河にドドーン！と上がる大水柱と轟音と高波。　住民街でも家屋を倒壊させ立ち昇る土煙。

「あークソッ！　予測出来るかあんなん……」

倒壊した家屋から積もった残骸を押しのけて、シャイニングセイバーは身を起こした。　鎧はあちこちひしゃげヒビが入り、銀鱗の体躯も流血で赤く染まっていた。

「おいコーラル生きてるか？」

呼びかけと同時にガラガラと何かが崩れる音はするが、肝心の本人の反応がない。　焦ったシャイニングセイバーは折れた構造物だったモノを掻き分けて、仲間を掘り起こす。　太い大黒柱を叩き斬ってようやっと身を起こしたコーラルは、竜人より満身創痍な有り様だった。

「流石四百レベルオーバー、ＨＰが二割切った、ぜ」

「キツいんなら寝てろ、後は俺がやる」

全身血まみれて見るに耐えないが、ぼろぼろになりながらもその眼には闘志が宿っていた。　風通しのよくなった大穴が開いた屋根からは王都の空がよく見えた。　空以外には身を起こし、戦う気まんまんの怪物の頭部。　どんどん接近してくる様子が見て取れるその頭部が、突如として爆炎に包まれた。　何が起きたのか理解が追いつかない二人の周囲で白い光が瞬く。　傷ついた鎧はそのままだが、その身に受けた傷はみるみる癒されて痛みが引いて行った。

「まったく……。　幾ら貴方が騎士団の中で群を抜いて強いからと言って、単騎で突っ込んでいくのは感心しませんね」

『光り輝く背景』をバックに、神殿騎士団の蒼い鎧に身を包んだ麗人が『鈴鳴りの音』と共に現れた。　白い光は麗人、大司祭のスカルゴが行使した回復魔法だ。

「スカルゴか、助かったぞ。　礼を言う」
「まだ終わってはいませんよ。　私の妹と魔法師団が中洲側からアレの意識を引いていますから、貴方達にはもう一度突っ込んで貰う必要があります。　回復と防御に関しては此方で引き受けましょう」

話をしている最中にも『キラーン』やら『シャリーン』と光って鳴る変な人物に、コーラルはあんぐりと口を開けた。

「おい、シャイニングセイバー。　なんだこいつは……」
「ん？　知らないのか。　こいつがあの有名なマザコン大司祭スカルゴだ」
「誰がマザコンですか誰が。　私は唯、母上殿に惜しみない愛を差し上げているだけですよ」
「「それをマザコンと言うんだ」」

２０話　王都を防衛しよう（後書き）

変な所で切れました。

21話　秘密の会合をしてみよう

後に王都大攻防戦は緩やかに沈静していった。

中洲側の魔導師団組と住宅街の騎士団長シャイニングセイバー＆協力者コーラル＆補助回復要員大司祭スカルゴ。　二面の波状攻撃によって右へ左へと翻弄されたイベントモンスター。

問題はソレとほぼ同レベルであるシャイニングセイバーから見て、敵のＨＰが微弱程度にしか減って行かない現状に、抗戦側のＭＰがまず切れた。　いくら【ＭＰ回復】のスキルがあると言えど、スカルゴとマイマイの二名だけ。　回復する量より消費する方が圧倒的に多いのであれば考えられる事であった。

これはもう相打ち覚悟で特攻するしかないか？

と皆の思考が行きついた所で、天から周囲に視覚と聴覚を麻痺させるほどの轟雷が降ってきてイベントモンスターの頭部を木っ端微塵に破壊。　続いてその足元から巨躯を丸々飲み込む火柱が噴き上がり、巨大な一本のトーチとなった。

これには状況に関わった大半の者達の顔色が驚愕に染まったが、スカルゴとマイマイだけは安堵した。

こんな物が使える術者は後にも先にも彼等の母しか存在しないからだ。

スカルゴの提案により遠回りで王都を迂回し、息せき切って探しに出かけたカータツは、王都から然程離れていない東の通商路の途中地点で無事にケーナと出会う事が出来た。

ケーナも足手纏いに神経をすり減らすよりは、手早く運んで移動

した方が得策と割り切り。　ゼアウルフ達に人目に付かない様に王都近辺まで運んでしまえ、と命令した。　おかげで最初の二日の行程はなんだったのかと、頭痛を感じるくらいすんなりと帰還の途につく事が出来。　そこで安心していたら切羽詰ったカータツと出会い、報告を聞いてビックリした。

カータツに二人の事を任せ先行して飛んで行き、住宅街手前近辺で波状攻撃に挟撃されているイベントモンスターを見つけたのである。　野盗の時とは違い相手に情けを掛けたり、判断に悩まなくていいと決断したケーナは『銀環』を召喚。　【二重詠唱（ダブルスペル）】に【増幅（ブースト）】まで使い、念のため姿を隠したまま最大威力の雷撃上級魔法と火炎最上級魔法を行使した。

高々四百レベルのシロモノであったイベントモンスターは、最高峰の全力を駆使した超越者（スキルマスター）の前では唯のザコである。　この街を救った超上の奇蹟に、人々は神の下した天罰だと認識して口々に天へと神を称える歓声を上げた。

姿隠しも解除してロンティらの下へ戻ったケーナは、二人の面倒を頼んだカータツにお礼を言い、何食わぬ顔で王都に戻った。　全部何食わぬ顔と言うわけでもなく、原因はポツリと漏らしたカータツの一言にある。

「ところで、なんで姫様と一緒にいるんだ？　お袋……」
「あー？　姫様ぁ？」
「わあぁあっ!?　カータツ様、しーっしーっ！　黙っているって約束だったじゃないですか！」
「黙ってくれと言うのは聞いたがよ、俺は了承した覚えはねえな。それに……」

「そ、それに？」
「黙ってて後でお袋に追求されるのが怖ええっ！」

力説したカータツに心配そうな顔でケーナを見るロンティ。恐怖の対象にされたケーナはあらぬと困り顔だ。そのまま視線をマイに向けてにっこり笑いかけた。

「まあ、あんなせせこましい所にいるよりは外の方がずっといいかもね。お金があれば幾らでも護衛してあげるから何時でもいらっしゃい」
「え？　……ええと、その……。追求、しないんですか？」
「して欲しいのなら追求するけど？　私がそんなの気にしないから最初からロンティが私の所に来たんでしょ？」

騒ぎのお陰で周囲を行き交う人々は数人の話に注意を払う事も無い。
やれやれと頭を傾けたカータツは、普通の者ならなにかしら疑問を持つ事すらあっけなくスルーした母親がいつも通りで安心した。

「まあ、お袋はそうだ。最初から権力者だーって来ない限りは全部懐に入れやがる、姫様も相手がお袋でよかったな」
「ハナッから相手が『貴族です偉いです』とか来たら、呪いを掛けてブタに変えるけどね」

ふふんと何でも無いように鼻歌で流したケーナ。二人はカータツに寄って言葉の真偽を聞いてみた。

「あんなこと言ってますけど？」
「ケーナさんって貴族とか嫌いなんですか？」
「言ったから実行するだろ、お袋の前で権力を振りかざしたら破滅

しかねえな」

ごくごく普通に真面目な顔で返答したカータツに二人の顔から血の気が引いた。

王都を遠目に見ていた二人でさえ怪物が火柱になるのを唖然と見てるしかなかったのだ。　あんなものが個人に向けられたらと思うとぞっとする。　待ってる間カータツに聞いた状況だけで魔法師団＋マイマイ＋本気の騎士団長＋αと言う布陣、それでも倒すに至らなかったのがケーナの魔法二発で終了だ。

力の歴然とした差は明白で、本気の彼女を敵に回したら何も残らないと思える現実に身震いするマイ。　それで彼女を怖いと思えても否定する気になれないのは、三日間行動を共にして実に丁寧に自分達を護衛してくれていたのが判ったから。　夜の怖さを紛らわせ、移動中も声を掛けて注意を促したりしてくれていたからだ。

「ホラ、お迎えみたいだよ？」

前方をケーナが指差した先に四つの人影があった。　ボロボロのシャイニングセイバーと部下の騎士、コーラルと何か丸いモノを抱えたスカルゴが人通りの絶えた一角で、一行を待っていた。

「二晩も姿が見えませんでしたのでお父上が心配なさっていました」

「すみません。　私が軽率でした」

シャイニングセイバーに引き渡したマイとロンティは、幾らかの注意を受けて頭を下げていた。

ソレを横目で見ながらケーナはスカルゴから丸い物を受け取る。
金とは違う輝きを放つソレは見た目に反して随分と軽い、大きさはよく熟れたスイカサイズだ。

「なにこれ、神鉄（オリハルコン）じゃない？　なんで私に渡すのよ」
「さっきの怪物のドロップ品らしいんですよ、母上殿。　お二人は必要ないらしいので貴方に、と」

眉をひそめたケーナはボロボロな二人に目を向けた。　双方とも鎧は傷つきあちこち血だらけだ、コーラルに関しては数日前に見た時に背負っていた剣すらも半分から折れていた。　むしろ必要なのはコッチの二人だろうとケーナは思った。
その視線を受けてコーラルは苦笑して答えた。

「俺達にはソイツの加工技術が無いんでな、倒したのはアンタだろ。だったらアンタが持って行っても良い」
「うーん、じゃあ何か作るよ。　何が良い？」
「作れるのかっ！？」
「うん、私は武器は間に合ってるし。　剣が無い様だから剣にしちゃう？」
「ずいぶんと大盤振る舞いだな。　後で加工代を要求されても払えねえぞ？」

その訝しげな視線に見かねたスカルゴが間に入った。

「コーラルとやら。　母上殿がせっかく好意を申し出てくれているのにその対応は失礼ではないか」
「い、いやー。　疑り深くないと冒険者はやって行けねえからよ。すまねえな嬢ちゃん」

スカルゴの目の中に『ギラギラと睨む狼』を見たコーラルは怯んで、素直にケーナへ頭を下げた。

ポコっとスカルゴを叩いて横にどかしたケーナは自分の仕事に戻るようにスカルゴに示唆する。渋る息子に向けてメッと視線だけで叱って職務に戻るのを納得させた。しぶしぶとその場から名残惜しそうに離れ、萎れたワンコみたいになったスカルゴを見たシャイニングセイバーは爆笑し、マイは忍び笑いを漏らした。

「あとアンタに俺とシャイニングセイバーで話がある。明日にでも時間取らせて貰って良いか？」

「明日ね、別に問題ないよ。あとカータツは私に付き合って、因幡の黒兎ってお店教えてよ」

「なんじゃそりゃ？」

「ケーナさん、黒兎の白尾亭ですよ？」

「あー、そうだった。ついでにマイマイの所にも顔出してこよう」

二人の騎士に両脇を固められたマイは綺麗な姿勢でケーナに頭を下げる。シャイニングセイバーはちょっと驚いてケーナと姫を交互に見詰めた。

ケーナは軽く手を振るとカータツを伴ってその場を離れて移動する。カータツは王族だろうが全く普通に接する母親を見て、相変わらず何でああもさり気無く振る舞えるのか首を捻った。

「にしても貴族街の食堂になんの用だよ？」

「依頼で食材調達を受けたのよ」

「それに何で姫様が同行する羽目になってんだよ……」

「さあ？」

楽しそうに笑みを浮かべてすっとぼけるケーナに、そら恐ろしいモノを感じてカータツは追求するのを止めた。　追求したら最後、姉にプライベートを尋ねた時の様に冷たい目で見られそうな気がしたからだ。

母親にそんなモノでも見る目線に晒されなんてゾッとする予感に打ち振るえるカータツと共に大河を越え、依頼を果たしたケーナは学院に足を運んだ。　カータツとは工房の後片付けがあるというのでそこで別れた。

ちなみに大河の渡しは生きている舟をかき集めて普段通りに営業しており、混乱は残るものの「人の営みって凄いなあ」とケーナが感心するくらい、人々は精力的に動き続けていた。

中洲内の建物は波に建造物が水を被った程度の被害で済んでいたが、外に出ていて件の怪物を目撃した者達は波に攫われて半数が行方不明になっているらしい。　大河に呑まれてしまっていると流石に探せないので、兵士達は住民と協力して港湾区の片付けに奔走していた。

「……なんで隠れてるのよ、マイマイ」

「え、えっと、……そのぅ、なんと申しましょうか……」

学院ではロプスとその背後に隠れている娘に迎えられ、ケーナは

苦笑した。
　無理もない、息子経由で抹殺宣言を受けて以来全く会う事もなかったのだから。　顔合わせた途端にぶっ飛ばされる覚悟もしていただけに、母親が特に何のリアクションもしてこないので逆に困惑していた。

「まー、貴女が私に黙って孫の存在を告げずに手紙を持たせたのは腹立たしいけれども。　あの子達とても良い子達だったから感謝するわ」
「ほっ……」

　安心して胸を撫で下ろすマイマイを見てニヤリと笑ったケーナは「それに」と付け加えた。

「むしろ、貴女よりあの子達と仲良くしたほうが楽しいと思うわ。意地が悪くないし素直だし、色々伝手が効きそうだし」
「御免なさい御免なさい御母様捨てないでっ！！？」

　母親の腰に泣きながら縋り付くマイマイを見たロプスは確信した。妻の意地が悪いのは確実に血筋だと。
　ぐずる娘の頭を撫でながら優しい笑みを浮かべるケーナと目が合ったロプスは、安心するように微笑み掛けられて思わずドキッとした。　まるで全てを許す聖母の様な微笑みに。

「……で、現場は何処なのかな？」
「あ、ああ、こっちだ」

　頭を振って今の出来事を追い出すと、学院の敷地の隅に先に立って案内する。　そこまで広くないので到着は直ぐだが、周囲は掻き回された様に掘り返されていて爆撃の跡地を彷彿とさせる有様だっ

た。

　他の二人には視認出来ないが、ケーナの視覚にはソレがはっきり表示されていた。　形状は黒の国の採取ポイントと同じ『???』と表示が空中に浮き出ている。　確か友人にはここの発動アイテムは液体だったと聞いた覚えがある、そのログ部分はキーも記憶していたので確定済みだ。　ロプスから聞いた話は大量の失敗作を混ぜ合わせた得体の知れない液体だと聞いたので、そのなかにキーアイテムとなる材料が存在していたのだろう。

　キーアイテムの作成は技能の中には無く、専用のＮＰＣに材料と交換で手に入れられる。　この騒ぎの元凶もごくごく奇蹟に近い偶発的な出来事だったのだろう。　少し考えたケーナは採取ポイントに爆裂魔法を叩き込んで地面を抉ってみたが、表示は消えない。

「お、おおお、御母様!?」
「な、なんだっ？　どうしたんだ!?」
「うーん、消えないかぁ。　中洲ごとぶっ飛ばしたら消えるのかなあ?」

　とんでもない爆弾発言に夫婦は戦慄した。　件の怪物を一撃で消滅させたのが、神の采配では無くケーナの所業と知っているからだ。

　指を額に当てながら難しい顔で振り返ったケーナに二人は一歩下がる、勿論恐怖に駆られて。

「マイマイ?」
「は、はいっ？　なんでしょう御母様?」
「この場所、誰も近づけない様に立ち入り禁止にして。　その旨キチンと騎士団とかお偉いさんとかにも伝えてね。　もしまた同じ事が起きた場合には……」
「お、起きた時にはどうするんですか?」
「……中洲諸共消し飛ばして大河に沈めるしかないわね。　悪用さ

れるのを防ぐためには」
「はいっ！　結界張って隔離して近付いた者は片っ端から厳罰にします！！」

ビシッと姿勢を正して母親の要請に応えたマイマイは早速手続きをする為に大急ぎでこの場を離れた。　あまりの迅速さに残されたケーナはプッと吹き出し、憮然とした顔つきで会った時から何かを考えているロプスに向き直った。

「それでそっちは何か聞きたそうにしているけれども？」
「……そうだな。　この騒ぎを仕出かした理由なんだが、ケーナ殿みたいにポーションを作りたかったんだ」
「はい？」

ロプスの唐突な訴えに首を傾げるケーナ。　少しして納得したように頷いた。

「ああ、【ポーション作成？】のスキルが使いたいのね？　私の様に……」
「ああ、カータツ殿からは貴女がその”すきる”とやらを管理していると聞いた。　譲って貰うのはダメだろうか？」
「うーん、本来なら試練を受けて貰うんだけれども。　ま、悪用する人でもなさそうだし、いいか」

羊皮紙とインクを取り出したケーナは光る球体を作り出し、【スクロール作成】を実行する。　程なくしてロプスに古代現地文字で書かれた一枚の賞状の様なモノが渡された。

「但しソレが読み込めれば。　の、話だけれどもね？」

シャイニングセイバーから伝えられた会合の指定場所は闘技場の前広場と。　午後からと言うので昼食を済ませてから出掛けたが、着いた時には既に二人揃っていた。　何故かコーラルだけは酷く疲れた顔でその辺にあった岩に腰掛けて憔悴していた。

「なんでコーラルさんだけくたびれてるの？」

「いや、午前中に功労者って事で城に呼ばれたんだが……。　色々作法とか言われて疲れたぜ。　報奨金で儲かったが」

「お前さんも呼ぼうって話もあったんだがな。　スカルゴの猛反対でお流れになった」

何でも反対した理由が『母上殿はああ見えてもハイエルフです。人族の王に呼ばれて謁見したとあれば、エルフ族と人族の間に軋轢が生じて面倒な事態になるでしょう』とか言ったお陰で、元より神の御技と民には認識されているので居ないものにされたそうだ。

口を開きかけたシャイニングセイバーを一旦止めたケーナは風精と光精を呼び出すと、周囲でコッチを伺っている隠者をここから遠ざける様に頼む。　光精には光の屈折を歪めて広範囲の【姿隠し】をしてくれるように命令した。

「隠者なんか付いているのか、嬢ちゃんは？」
「自称宰相の御爺さんに一言断られてくっ付いているのよね。　こう言う時の会話を聞かれると面倒だし」

「さて、始めるか。　俺はシャイニングセイバー、呼び捨てで構わん。　〝銀月の騎馬〟ギルド所属、レベルは四百二十七だ」
「俺はコーラル、ギルドは右に同じ。　レベルは三百九十二だ」

白い鎧をガシャリと鳴らすシャイニングセイバーと、昨日の事件で金属鎧を駄目にしたのか革鎧姿のコーラル。　聞き覚えのあるギルド名に蒼銀の竜人がヒットするケーナ。

「銀月の騎馬？　京太郎さんと同じ所の？」
「ウチのギルドマスターと知り合いだったのか？」
「まあ、それなりに。　ケーナよ、嬢ちゃんとか好きに呼んで。所属ギルドは〝くりーむちーず〟」
「「ブッ！？」」

ギルド名に男二人が同時に吹き出した。　コーラルがひきつった顔で後退する。
このギルド名を知らない者はモグリと呼ばれるくらい有名で、所属していたケーナですら当然の事実。　ギルド所属人数十八名全員が超越者で、彼等の目の届く範囲で悪さをするともれなく垢バンにされてしまう為、ギルド名自体が恐怖の代名詞みたいなものだ。
これにハッとなったシャイニングセイバーが気付く。

「待て、ウチのギルドマスターを知っていて、ハイエルフでくりーむちーず所属だと？　もしかしてお前『銀環の魔女』か！？」

途端にシャイニングセイバーの頭上にエンジェルが三体現れ、ラッパを高らかに鳴らして白い羽根を振り撒きつつクルクル回った。

「げ、このスキルは……」

「ご名答～！」

何やらいきなり不機嫌になったケーナ。　歪んだ口元に油断ならない気配を漂わせ、笑ってない口調でアイテムボックスより杖を一本引き抜いた。　なんなのか目ざとく気付いたコーラルがうめき声を上げた。

「うげ、至玉（アルカルスタッフ）の杖！？　そんなんどうする気だよっ！」

「その不名誉な名称嫌いなの。　今すぐ忘れてくれれば良し、忘れてくれないのであれば……」

じりっと杖を構えるケーナの目が座っているのに気付いた男達は、首が千切れるくらいに縦に振り回した。　疑り深そうに暫くその仕草を見ていたケーナは、杖を仕舞って息を付く。

「今後、その名称出したら次は警告無しでぶっ放しますからね」

「分かった分かったから、その目をヤメロ！」

「つまりアン……ケーナは千百レベルな訳だな、それもスキルマスターの」

「そうそう、スキルマスターＮＯ．３のケーナよ。　試練さえ受けてくれればスキル譲渡は普通にお渡ししますけどね」

命の危機を脱したコーラルは肩を落として溜息を付く。　あんなものの直撃を受けたら使用者の魔力次第に依るところが大きいアイ

テムなだけに、七百近いレベル差があるコーラルとしては一撃で消し炭になりかねない。　シャイニングセイバーも似た様な者なので戸惑いは隠せず、とりあえずは安堵した。

「あとこれ、コーラルさんに昨日言っていた約束のブツ」
「密輸品みたいな言い方だな、それ……」

ケーナはアイテムボックスから大剣を取り出すと、それをコーラルに差し出した。　受け取った方は剣のステータスを確認して悲鳴を上げた。

「なんじゃこりゃあああっ!?」
「なんだなんだ？　何を貰った？」

横から手を出したシャイニングセイバーも、剣を手にとってステータスをひと目見て息を呑む。

「聖戦士（ヴァルハラ）の魂っ!?　大剣の中でも最高峰の武器じゃねーかっ!!」
「ステータス軒並みＵＰ効果と聖属性武器ですからね、そうそう簡単には壊れませんよ。　金剛石とか鋼玉とか手持ち材料もありましたからいっその事と思ってグレードも上げたので、渾身の作品になりました」

渾身の作品で片付けられるレベルじゃねーだろうよ、と二人の顔は物語っていた。　ケーナは胸を張ってふふんと威張る、ゲーム中でも普通に売り払うならば七千万ほどの高値が付く代物だからだ。
今の世にして金貨七十万枚分に相当する。
暫く武器談義で盛り上がりそうになったが、途中で気を取り直したシャイニングセイバーが話の軌道を強引に戻した。

「ともかく色々と情報交換がしたい。　俺はこの世界に降り立って三年くらいしか経過してないしな……」
「サブリーダーはそんな短いのか。　俺なんか十年も経ってるぜ」
「そんなこと言ったら私なんかまだ二ヶ月くらいだよ。　それより、リアデイルのサービス終了について聞きたいんだけどー？」
　ケーナの疑問に二人は顔を見合わせて、訝しげになった。
「ちょっと待て、ケーナは何か？　リアデイルのサービス終了を知らないのか？」
「うん、私の最後の記憶では五月の終わりくらいだったしね」
「リアデイルが終了したのは大晦日だぜ。　なんで半年前にＩＮしてた奴がここにいるんだ？」
「だって私、ゲーム中に死んじゃったんだもん」
「「ああそうなのか……ってなにぃっ！？！」」
　すわ幽霊かと青い顔になる男二人を諫めたケーナは軽く説明を入れる。　リアルでは事故の後遺症で寝たきりだった事、推測になるが雷で生命維持に支障が生じて精神がゲームに逃げ込んだ事、目が覚めたのが最期のセーブ地である自分の塔のお膝元の辺境の村だとかをざっと掻い摘んで話した。
　それだけ聞くとコーラルが納得顔で頷いた。
「つーことはあれか、一時期噂に出ていたゲーム中に死んだ奴ってのはケーナのことか？」
「げ、なに？　噂が立ってたの？　叔父さんがそういうの外部に漏らすとは思えないけどなあ」
　なんでも『ゲーム中に死んだ奴がいる』という噂が立ってから、

リアデイルを運営している所へ親会社から圧力が掛かり、あれよあれよと言う間にサービス終了が決定してしまい。　プレイヤー達の知る所になった時点にはもうどうにもならなくなっていたらしい。

　最後まで残っていたシャイニングセイバーの話に依ると、適当にパーティー組んで最後まで狩りを楽しんでいてサービス終了時間を越えて気が付いたら、街道にぽつんと立っていたとか。　他のメンバーがコッチに来ていた痕跡は見当たらなかったそうだ。

「んー、細かい事情までは分からずじまいね」
「運営側とか親会社の事情まではどうにもならねえな。　俺達が分かるのはこれくらいだ」
「だったら細かい事情はこれをどうにかするしかないかー」

　ケーナが取り出すのはオプスに託された装丁の本一冊のみだけだ。　クエスチョンマークを浮かべる男二人にかくかくしかじかと説明をする。　シャイニングセイバーは好奇心から手を伸ばし、手に取れないのに気付いて愕然とした。　アイテムの所持制限レベルが千百なのだから当然の結果だ。

「オペケッテンシュルトハイマー？　聞いた事ねーな」
「別名『リアデイルの孔明』とか言うんだけど……」
「うげ、あいつか。　俺、大木が転がってきて避けたらソレに繋がっていたロープに足取られて、山裾まで引きずられた挙句谷底へ大木ごと落とされて死んだ記憶がある……」

　思い出すと情けなくなって落ち込んだコーラルに、同じ記憶でもあるのか肩を叩いて首を振るシャイニングセイバー。　見詰め合った二人はひしぃっと抱き合って涙を流す。　置いてけぼりになったケーナはむさくるしい風景につい本音が漏れた。

「なんだこのコント……」
「「同じ傷を持つ仲間だっ！！」」

22話　日常を謳歌しよう

感傷も終わった所でケーナ達は互いに名簿登録を済ませた。
名前さえ判明していれば何処へ行っても互いに連絡が付く機能で、運営のバックアップの無いこの世界では果たしてどのくらいの距離までカバー出来るのか分からないが、一人ではないと思えるだけマシだと考えた。

「そーいやー気になっていたんだが、ケーナの息子とかってなんだあれ？」
「こっち来て二ヶ月だとか言ってたな。　スカルゴ殿とかカータツ殿とかどうなってんだ？」
「何ってあの子達はアレよ、里子システム。　マイマイに至っては二百年の間に子供作るわ孫は作るわ……。　お陰でこの年でお婆様やら曾お婆様やら呼ばれる始末よ。　もう慣れたけど……」
「あの特殊技能はそれでかよ……」
「うん、スカルゴは何だか知らないけど、【薔薇（オスカル）は美しく散る】を使う事に付いては天性の才能があるわ」
「そんなもん覚えさせるなよ」

肩をすくめてウンザリした表情で説明するケーナに、まじまじと見ていたコーラルがポンっと手を叩く。　シャインニングセイバーも竜人の表情は見分けにくいがタラリと汗を流した。

「俺の里子は人が二人だ。　関係も弟子とか、そんな感じだった」

「……やべえ、俺確か同族で弟とかエルフで親友とか作った覚えがあるぞ」
「シャイニングセイバーはエルフが生き残っていそう。　コーラルの方は探せばコーラル流とか剣術道場でもありそうだね？」
「うわ、超嫌過ぎる流派……」

頭を抱えて唸るコーラル。　他人事ではないシャイニングセイバーも当の本人に会ったらどうしようかと悩み始めた。　ケーナは自分と同じ様に多いに慌てるが良いと、傍観の体勢に入る。　のほほんと見物体勢に入ったケーナにそーっとコーラルが近付く。

「なあ、ケーナ、スキルが欲しいんだが……」
「参考までに聞くんだけど、何の技能？」
「……回復魔法」
「持ってねーのかよっ！？」

真っ先にシャイニングセイバーが「馬鹿だコイツ」と言った感情を持って突っ込んだ。　回復魔法であればオンラインオフラインともごく簡単なイベントで手に入り、時間も一時間とすら掛からない。　持ってないプレイヤーの方が珍しいくらいだ。　図らずとも此処にその珍者が居た事に二人とも呆れ顔になった。

「じゃあ、試練を受けてください。　欲しいからと言う人に、ハイそーですか、なんてあげていたらスキルマスターとしての名折れですから」
「うわ、ケチくせえ。　いーじゃねーか、もうゲームじゃねーんだろここは」
「いいじゃない。　スキルなんか無くても、その辺の冒険者よりは遥かに上なんだし」
「ちっ、プレイヤーの誼（よしみ）でくれよ」

嫌そうな顔で駄々をこねるコーラル。　シャイニングセイバーは少し考え込むとケーナの塔の所在を聞いた。

「んーと、東の外殻通商路の国境よりやや南寄りの森の中、銀色の塔。　マスター仲間からは一番ぬるーい試練ってよく言われたわ」

少なくともオプスの塔の超絶隅から隅まで罠地獄、よりは遙かにマシと言うのは自負できる。　挑戦したプレイヤーから言わせて貰うならば、『百八の死に方を体験出来る所』だ。　あれが十三塔の中で一番タチが悪いと仲間内では悪評であった。　例を挙げると、入り口脇に『ここのダンジョンで死んだ場合の云々の同意書』が置いてあり、近付いて覗き込むと上からギロチンが落ちて来る罠から始まる。　大半のプレイヤーがコレに掛かって最初からリタイアする所から、別名”悪意と殺意の館”と呼ばれていた。

「遠いなあ……」

ボヤくコーラルと迂闊に王都を離れられないシャイニングセイバーに、背後の闘技場を指差す。

「ちなみにコレが京太郎さんが管轄してた塔」
「なにーぃっ!?」
「こ、こんな近くにあったのかーっ！」
「試練の内容は知らないけど、一応起動はするはず。　本人が居ないけど私が担当してるから大丈夫」

ケーナは二人に守護者の塔が現状、起動魔力不足で停止している事。　全部の場所を把握してないので探している事を告げ、心当たりがあったり見付けたりしたら教えて欲しいと頼んだ。

それには何かを企んだ顔でニヤついたコーラルが食い付いた。

「よし、じゃあケーナ、見付けたらスキルと交換してくれ！」
「そう来るかー、んーと……。　そうだねー、まあいいけど」
「ヨッシャー！」
「子供かお前は……」

ガッツポーズのままぴょんぴょん飛び跳ねるコーラルに呆れ顔のシャイニングセイバー。　地図を引っ張り出したコーラルはフェルスケイロとヘルシュペルの国境付近、海岸沿いを指差した。

「ここの海岸線に村が在るんだけどな。　素潜りで漁をしていた村人が、海中に宮殿を見たって言ってたんだ。　コレなら対価として充分だろう！」
「海中って言うとリオテークさんの所かー」

難しい顔で考え込んだケーナは【スクロール作成】で【単体回復魔法：デュール】を作り出し、コーラルへ渡した。　もう少し言い訳をされると思っていた彼は少々拍子抜けだ。　シャイニングセイバーは浮かない顔のケーナにもしやと思って尋ねてみた。

「もしかして泳げないのか？」
「うーん、うん。　実はそう、泳いだ事ってリアルでも無いんだよねー」
「なんだよ、いい年して泳げないのかよー」
「おいコーラル、あんまりプライベートを突っつくな」

コーラルを小突いて黙らせるシャイニングセイバー。　二人が喧嘩になりかけたのを炎獣の弓（ガンファイア）で脅して止める。

「私の事で二人が喧嘩してどうするんですか。　聞き訳が悪いとぶっ放しますよ」
「お、よし。　回復魔法も覚えたんでドンと来いだ！」

何時の間にかスクロールを使用し終え、妙なテンションではしゃいでる感のあるコーラルにケーナは頭を抱えた。　シャイニングセイバーは腕組みして溜息を吐くと、何も知らないコーラルに忠告を入れた。

「お前、あんなモンで撃たれたら怪我で済むか分からんぞ」
「え？　マジかよ」

炎獣の弓（ガンファイア）はケーナの左腕に装備している銀弓の篭手と同じ仕組みの弓で、ＭＰを炎獣に変えて撃ち出す武器だ。　ホーミングの如く空中を駆けて行くので、命中直前に【転移】でもしない限り絶対当たる。　ＥＸ武器だけに威力も半端無いので、パーティ戦時のケーナは主にこれを使っていた。　前衛が強力なのでむしろやる事が少なかった。

「済まん」
「いや、ただの脅しだけだったから、別に謝らなくても……」

むしろケーナの心配事は泳ぐ事よりも塔の守護者にある。　スキルマスターＮＯ．６のリオテークは女性プレイヤーでありながら、可愛い物や綺麗な物とは無縁でもっぱらキモかわいいモノや、グロテスクなモノを集めるのが趣味であった。　召喚魔法で主に使うものはムカデやサソリ等、ドラゴンよりは軟体系や甲殻系を好む性格であっただけに、どれだけ気色悪いモノが待っているのかと今から憂鬱になるケーナだった。

「ああ、じゃあ俺はこれで仕事に戻る。　あまり長い事離れてられなくてな。　用があったら城へ来てくれ」
「んじゃ、俺も仲間のところへ戻るかな。　じゃ、ケーナ。　またギルドでなー」
「いや、城へ来いって……。　行ったら入れてくれるのかなあ？」

太陽が随分と傾き夕暮れが近付く頃になって、空を見上げて大体の時間を確認したシャイニングセイバーは背の剣を鳴らしてケーナにとりあえず解散の意を示した。　それに追従する様にコーラルも其処を離れる。　頷いて二人に小さく手を振ったケーナは、仲良く肩を並べて歩いて行くコーラル達を見て羨ましくなった。

「いいなあ、あれ……」

故に周囲に警戒する注意力が散漫になっていた。　彼女のパートナーの『背後カラ……』と言う脳内に響いた警告音に、ハッとなったケーナは左手に何を持っていたのかも忘れて、勢い良く振り抜いた。

ゴッ！！　という打撃音と「はばぴゅっ！？」と情け無い悲鳴を上げて吹っ飛んだ蒼い何か。

「って、え？　……あ、あれ？」

左手にある炎獣の弓（ガンファイア）は弓というよりは形状はアーチェリーに似た短弓で、持ち手のカバーに獅子の彫り意匠がある。　その獣の眼差

しを轟々と燃え上がらせた瞳が、持ち主の視線と同じく振り向いた先を睥睨した。　ケーナの視線の先には地面にくの字になって横たわり、泡を吹くスカルゴが倒れていた。　彼との身長差からするとドテッ腹に容赦なく突き刺さったと思われる、弓が。

「あっちゃ～。　だ、大丈夫スカルゴ？」

『少シ遅カッタデスネ……』

慌てて回復魔法を施してから軽く揺すってみる。

その途端、コメツキバッタの如く跳ね起きたスカルゴはケーナの肩をがっしりと掴んだ。　意味が分からずに目を白黒させている母親に対して捲くし立て始める、先ずは『嫉妬のオーラ』をたぎらせて。

「御無事ですか！　母上殿っ！？」

「……は？」

「母上殿が男と密会していると見聞きし、このスカルゴ全てを投げ打って救出に来た所存です！」

『どどーんと日本画風の荒波が砕けて、何時の間にか絵に加わっていた帆船が転覆した』背景を背負ったスカルゴは両手を力強く握り締めた。

「いや、ちょっと、す、スカルゴ？」

「一体あの男ドモに何を脅迫されていたのです！？　しかも！　ああ、しかも！　片方が騎士団長だったとはっ！？」

激しい誤解を招いている気がしたケーナは息子を宥めようとした……が、

『暗闇の中で稲光が激しく瞬き、真っ黒な凶鳥が飛び交う中』目

を赤く光らせたスカルゴが雄々しく立ち上がる。　暴走したコレに口で何か言っても無駄だと悟ったケーナは、左手にある弓を握り締めた。

「おのれシャイニングセイバーッ！　女性にはそっけない振りをして我等が母上殿に手を出そうとは！　騎士道精神が聞いて呆れ……ッ……、は、母上殿？」

「……何かしら？」

「そ、その、振り上げた左手の弓は、どうするので……しょうか？」

「上げたら下ろすに決まってるじゃないの」

「落下地点に私が居るような気がするのですが……」

「あら奇遇ね、むしろ静かになって丁度良いんじゃないの？」

「……」

「……」

「申し訳ありませんでした」

「分かればよろしい」

素直に頭を下げたスカルゴになんとなくホッとした気分なケーナは、この掛け合いも何回目かなと思いながらつい頬が緩む。　怒られて笑い掛けられた側は意味が分からず首を傾げた。

「なにか有りましたか、母上殿？」

「ううん、別になんでもない」

法衣の裾を引かれ姿勢を下げたら頭を撫でられて、訳が分からずにクエスチョンマークが浮くスカルゴ。　再会してからここまで機嫌がいい母親は珍しいので、先日みたいにド突かれる心配が無くなって安堵した。

「シャイニングセイバー云々って、何時から見ていたのよ？　まさか話を聞いていたんじゃないでしょうねぇ？」

一変して声に怖いモノが混じり始めたケーナに、首を振って完全否定する。　城から戻る途中で楽しそうな母親を見付けて、様子が珍しかった為、つい後を付けた事を詫びた。

騎士団長と冒険者の二名と談笑する母親が何故か羨ましくなり、焦燥感に駆られて二人が居なくなって声を掛けた。　内心『貴様なんかに母上殿を渡すものかーっ！』と果てしない誤解をしているのに気がつかないまま、心の中のブラックリストにシャイニングセイバーを要注意人物に指定するスカルゴであった。

姿隠しを施していた筈が、最初から強く視認していたスカルゴには殆ど無駄らしかったので、問題点として留意しておく事にした。

精霊に礼を言って召喚を解除する。

「さてと、宿屋帰ってのんびりしようっと……」

うーん、と伸びをしたケーナは、何だか使命感に燃えているスカルゴの様子におかしく思いつつ法衣を引いた。

「は！　どう致しましたか母上殿？」

「私、宿屋に戻るけど、貴方もちゃんと仕事しなさいよ？」

「いえ、神殿の方は怪我人の処置が一段落しましたので、一休みしようと思っていたのです。　良い葉が手に入りましたから、母上殿も御一緒にお茶でもどうですか？」

息子の背後に尻尾を振ったワンコの幻影が見えた気がしたケーナ

だったが、特に急いでする事もないので素直に了承した。　小躍りしそうな程喜ぶ息子の表情に、「マイちゃんも前途多難だなあ」と原因が自分だけに呆れ顔のケーナだった。

「なあに？　まだ難しい顔してるの？」

学院の私室でスクロールを前に考え込んでいたロプスは、ノックもなしで入ってきたマイマイに何百回目か分からない溜息を付いた。どうも親しい繋がりを持つと誰にでも遠慮が無くなる性質（たち）らしい、この妻は。

「『読み込めたら』、ケーナ殿はそう言っていたが如何にも意味が掴めん」

スクロールの文章に書かれている事の解読は簡単で、内容はレシピ材料に付いてである。　試しに材料を揃えてはみたが、それで何が起こる訳でも無し、途方に暮れているのが彼の現状だった。

一方、マイマイには説明しても説明しきれ無い実際の問題点がよく分かっていた。　その問題は母親のケーナや彼女の兄弟達には常識的に意味が通じるが、ロプス等の今の世の者達には理解出来ない所にある。

「えーっとね、先ずはソレを自分の物として認識。　それから使う

事が出来れば簡単なんだけどねえ……」

「前からよく聞くが、その説明はイマイチ意味が通らないぞ。　これはケーナ殿から頂いたから俺の物。　スクロールを使うってのはどういった意味を持つ？」

「あああああ、もうっ！　どーやって説明したらいーのよっ！？」

頭を抱えて叫び七転八倒するマイマイの奇行に、まあいつもの事かと自分の思考に没頭するロプス。　これはこれで吊り合いが取れている夫婦と言えるのだろう。

原因を明確にするならばアイテムボックスの有無にあった。　ケーナ達プレイヤー感覚で言うならば、彼女達が手に入れた物はアイテムボックスの中に有る物として表示される。　そこから『使う』と選択すれば、手に取らなくてもポーションの類が効果を及ぼして用は済む。　それは別アカウントとなっていたマイマイ達にも適用されていた。　しかし、ロプス等のゲームに係わり合いの無い者達にとっては、そのアイテムボックスの概念そのものが理解の外にある為に、スクロールを手に入れて使うという感覚自体が常識の範疇外となっていた。

とどのつまりは使えないのである。　しかもこのスキルマスターの作るスクロールは、イベントで手に入るスキルスクロールと決定的に違うところが存在し、その問題点が今ここに示された。

「あ……」

「な、に……？」

ロプスの手の中で輪郭をぼやけさせたと思ったら、光を放ち忽然と消え失せてしまった。

作成後、二十四時間しか保たないのがこのスクロールの欠点であ

るだけに、ソレを知らないロプスは手の中から消失した成れの果て。
光の粒を呆然と見詰め、「あーあ」と見送ったマイマイは慰めるようにロプスの肩を叩いた。

「時間切れね。　御母様の作るソレは一日しか保たないのよ」
「くっ、折角の英知が……」

がっくりと心底残念そうな顔で肩を落とす夫の姿に、可哀想になるマイマイ。　もう一度手に入れて上げたいがあの母親の事だ、次こそは試練を受けろと言いそうなので断念するしか無い。　仕方なく慰める為にそっとロプスに肩を寄せた。

23話　技術提供をしてみよう　2

ケーナは宿屋を一時的に引き払い、長旅になるか分からないので数日分の食料とポーション等の各種材料。　カータツの工房から問屋経由で安く木材を買い付けたりして、色々な事態に対応できる準備を整えた。

依頼無しでの初めての独り旅に少々寂しく感じていたら、冒険者ギルドでヘルシュペルとの合同掃討隊が二日後に出発すると聞いた。　ならば隊列の端に混ぜて貰おうと考え、ギルドにいたコーラルに海岸沿いの情報を根掘り葉掘り聞き出した。　勿論対価を要求されたので金銭で支払う。

「うーん、先に情報集めとけば良かった～」
「何だよ、なんかあったのか？」
「宿屋引き払って来ちゃったから、二日間どうしようかなあ……」
「準備の仕方に難があったな」

コーラルに苦笑されてふてくされるケーナ。　どうせ泊まるならマレールさんの所……と思い当たった。　前回の帰り道では寄らなかったので、様子見に一度戻ってみることにした。

「どこか行くのか？」
「辺境の村」
「辿り着く頃には討伐隊帰って来るんじゃねえの？」
「ふっふっふー。　コーラル君、私をなんだと思っているのかねー。アッチには私の塔があるし、帰りなんざ【転移】で一瞬さね」

胸を張りながら指をチッチッチと振って、無駄に偉そうな態度を取るケーナ。

「うわ汚ねー、少しは苦労しろよお前！」

「何を今更。　一度行ってしまえばこっちのものよ」

鼻高々なケーナの態度に、つい手を伸ばして頭を小突こうとしたコーラル。　ヒョイと避けたケーナ。　ムキになって追いかけ回すコーラルを悉く避けるケーナ、彼の仲間達が生暖かい目で見守る中、鬼ごっこが始まり。　直ぐ、アルマナに「ギルドで暴れないで下さい！」と怒られて幕を閉じた。

思い立ったが吉日とばかりに、王都の外へ出てから隠者を撒き、守護者の塔へ指輪の効果で飛んだ。

其処で守護者の太陽（ヤンキー）の壁画より大変興味深い情報を入手した。

「訪問者が来たぁ？」

『おオよ、前回ゴシュジンサマァがここに来てカら後だナ。　つい先日ニナるさ。　三人ほドで来たらしくッテよ、下の森で迷っタら逃げチまった。　根性ノねえ腰抜けドもだぜ』

「あれ、じゃあまだプレイヤーの可能性もあるのか？」

少なくとも『恐ろしい古代の魔女が居る』と地元の者に噂されるこの場所で、今更用がある者が居るとは思えない。　ケーナの試練は根気さえあれば低レベルでもクリア出来る筈なので、森の迷路で迷って来なくなるというならば好奇心で来たか、準備に戻ったか。

どれも憶測にしかならず、ケーナは考えるのを止めた。　来た時

に守護者に呼んで貰い、入り込んできた者達を【サーチ】すれば分かることだ。

守護者が確認出来れば済む事なのだが、生憎と守護者は領域の管理者であってインターホンでもドアノッカーでもない。森と塔を含むエリアに入って来た者を認識するくらいしかできない。そもそも壁画がにょろにょろと動いてる状態が想像できない。

ヤンキー守護者に訪問者が来たら連絡だけでも入れるよう言付けると、塔を出て村へと移動した。

村の入り口には前回来た時に増えた工房の脇に幌馬車が二台止まっていて、馬がその辺りの草をはむはむと食べていた。何となく村が活気付いているような感じを受けて、また人が増えたのかなと思いつつ宿屋に向かう。

「あ、おねーちゃん！」
「こんにちは、リットちゃん」

その途中に水桶を抱えたリットと宿屋の前で出会い、ホッと肩の力が抜けた気分になったケーナ。桶を下ろしたリットと頭を下げ合う。

「二泊くらいしたいんだけど、部屋空いてる？」
「うん、お客さんいるけど大丈夫だよ」

桶を持って先導するリットの後に続いて宿屋に入ると、食堂の掃除をしていたマレールが迎え入れてくれた。

「いらっしゃいケーナ、二十日ぶりくらいさね？」

「お久しぶりですマレールさん。　今回は二泊ですけど、お世話になります」
「ケーナだったら何時に来ても歓迎するよ。　遠慮しないで、幾らでも泊まっておいき」

先に二泊分銅貨四十枚を支払ってから、何となく感じているざわついた空気に対して聞いてみる。

「また人が増えたりしたんですか？」
「ああ、幌馬車の事かい？　何でもねケーナの作った浴場があるだろ。　あれを調べにオウタロクエスから学者さん達がやって来たのさ」
「オウタロクエスって……南の国からわざわざ此処まで？　なんでそんな所まで噂が飛んでってるんですか……」

エーリネに聞いた一般教養の地理。　三国の内、南のオウタロクエスは魔法技術が卓越した国らしく、王族は建国同時から変わらないハイエルフの女王が務めていると聞いた。　フェルスケイロの学院はここをモデルに作られているんだとか。　しかし魔法を修めた教師の数が足りないので、魔法一筋の学校という訳にはならないとはマイマイの談であった。

以前にあった赤の国クエステリアは一面砂漠地帯だったにも関わらず、同領地内に含まれた青の国アウルゼリエが密林地帯だった時のように国中が熱帯雨林となっているらしい。　二百年の神秘ここに極まれりである。

マレールからぬるめのお茶を貰い、今昔物語に思いを馳せていると、外から帰ってきた男女二人の猫人族（ワーキャット）と目が合った。　片方は革鎧と腰に剣を携えた剣士風の茶髪と耳の男性。　女性は綺麗な黒髪

と耳を持ち、革鎧に長弓を背負っていた。　女性の方がケーナをまじまじと見つめ、スタスタと近寄ってきた。　それに慌てて追従する男性。

「こんにちは御同輩」
「御同輩？」
「貴女冒険者でしょ、違う？」
「それの意味か、ならこんにちは、かしらね。　何か用なのかな？」

ケーナの疑問に猫人族女性は少し考える。　横に並んだ男性剣士の方も女性の肩を突つき「なにやってんだお前は」と文句を言っていた。

ケーナは二人をちょろりと【サーチ】した結果に少し驚いていた。　女性の方がレベル七十弱、男性の方がレベル八十強、しいていうのならばアービタ並みに高いレベルを保っている事に。　最初はプレイヤーかとも思ったが、プレイヤーであれば表示されるものが表示されていないので現地人と判明した。　ちなみに表示される物は所属国である、ケーナなら最後に所属していた黒の国ライプラスとか。

「私達、学者様の依頼でこんなトコまで来たのだけれど、周囲に何にもなくて退屈してたのよ。　そうしたら近所に英知の塔があるって言うから学者様と行ったのよね」

ケーナはそれで大体を理解した、訪問者はコイツ等かと。　準備が足りなくて学者と行き直すらしいが、ケーナの塔はそんな準備などは要らない。　ただ、時間が掛かるだけなのだし。

やたらと高圧的に喋る猫女性が昔のスキルを強請（ゆす）るプレイヤーと被り、ゲームじゃなくてもこんな人はいるものかと、笑い出したくなるのを無言で耐えていた。

「それで貴女も私達と一緒にいらっしゃいな。　攻略した暁には高名な私達の名の端に加えてあげますわ」
「うん、お断りします」
「……」
　ボロが出ないように、満面の笑みできっぱりと却下した。　断られるのが前提でなかったのか、呆気に取られた猫女性と、その背後ですでに申し訳ない顔の猫男性。
　やがて憎々しげに表情を歪めた猫女性は、更にまくし立ててきた。
「あのねえ、私達はオウタロクエスでも名の知れた冒険者ですのよっ！　私達と行動を共に出来る事を光栄に思いなさい！　これはアナタの名誉にも繋がっ……」
「うん、お断りします」
　一言一句先程と違わずに却下の方向で。　顔を怒りで真っ赤に染めた彼女はケーナに一瞥をくれると、足音も荒々しく宿屋の階段を駆け上がって行った。
「済まん、妹が失礼をした」
　一言謝罪を入れた猫男性がペコリと頭を下げて、後を追う。
「悪い思いをさせて済まないねえ」
「なんでマレールさんが謝るんですか？　冒険者だってピンキリなんですから、偶にはあんなのがいますよ」

コップを返しに行くとマレールに何故か頭を下げられたので、気にしてない旨を伝えておく。　酷いと言ったらスキルマスター就任当時に、実力行使で技能（スキル）を強奪しに来たプレイヤーの方が遥かに酷い。

「そうそう、聞いて下さいよマレールさん。　娘のマイマイったら酷いんですよ～」

「ケーナから娘なんて言葉が出る事自体が、私にとっちゃあとんでもないけどねえ」

「酷っ！？」

「はいはい、悪かったよ。　それで、アンタの娘さんがどうしたって？」

「それがですねー……」

暗くなりがちな空気を払拭するためにヘルシュペルでの出来事を、マイマイから孫がいるのを秘密にされたことや、戻って来てからの女三人でやったホーンベア狩りの事などをマレール達に話して、昼まで過ごした。　昼食に久しぶりのマレールの腕が冴える料理に舌鼓を打ったケーナは、また夕食時に冒険話をするとリットと約束をして、以前絵を描いてギアの仕組みを説明した三人の住む村入り口の工房に足を運んだ。

途中で会う村人と気さくに挨拶を交わしていると、猟の帰りらしい兎を数羽ぶら下げたロットルと出会った。

「よう！　ケーナちゃん来てたのか」

「お久しぶりですロットルさん。　もう猟は終わりですか？」

「まあ、ケーナちゃん程じゃねえけどよ。　そっちはまたなんか依頼か？」

「ただの骨休めですよ。　明後日からまたちょっと遠い所へ行きま

すから」
「なにもこんな田舎村に来てすることじゃないだろうよ……。　そんなに頻繁に来るんだったらいっその事この村に住んじゃったらどうだよ？」

　ちょっとした冗談のつもりだったロットルだったが、返答は沈黙だった。　ケーナを見ると腕組みをして考え込み、真面目に受け取っていた。

「……それもアリかもしれませんね」
「いやいや、ちょっとケーナちゃんや、本気かい？」
「いつかは何処かに本拠地でも作ろうかなと考えてましたから、それも渡りに舟と言うべきなのでしょうね。　後で村長さんに相談してみましょう」

　どう見ても本気らしい、ならば冗談でも話題にした自分が先に話を通しておくべきだろう。　そう考えたロットルはケーナと別れた後、自分の家に帰る前に村長宅へ寄る事にした。

　ロットルの提案は後で村長に話をする時に改めて考えるとして、まずは技術技能（クラフトスキル）で作れるモノは人の手に寄ってどう変わる物なのかの実証である。　ケーナは工房の入り口でしゃがみこんで何かの作業をしていたドワーフに話しかけた。

「こんにちは」
「お、おう……。　この前の嬢ちゃんだな、今日は何か用かい？」
「この前の絵で説明したことについてなのですが、他の方達はいらっしゃいますか？」

内密の話もしたいので中に入れてくれないかと頼んでみる。　ドワーフは二つ返事で了承すると、ケーナを中に通してくれて奥から仲間の女性ともう二人のドワーフも連れてきた。　簡単に自己紹介を済ませる、眼鏡を掛けた目付きが鋭い人族の女性はスーニャ、ドワーフの中で一番ガタイのいい者がラックス、次に背が低い者がラックスの弟子のドダイ、一番小さい（といってもケーナの肩くらいまでの背）の者がラックスの息子のラテム。

なんでもヘルシュペルで商人と契約し、技術工房を営む一家だという。　スーニャとラックスが夫婦と聞かされた時には驚いたケーナだったが、ラテムが異種族婚で生まれたのではなくスーニャが後妻だと聞いて、とりあえず納得した。

「それでケーナさんは何か内密の話とか言ってましたけど、どういった用件ですか？」

代表者であるスーニャが交渉役となって、ケーナとの会話を開始する。　ラックス達はもっぱら作るのが仕事で交渉事はスーニャが一手に引き受けているらしい。

「前回絵で説明しました井戸に使われている機構ですが、代価と引き換えに完成品をそちらに提供出来ます」

「なんですってっ！？」

余程ケーナの言葉が予想外か、想定外だったらしいスーニャの顔が驚愕に染まる。　ラックス達は何を驚いているのか分からないがポカンと大口を開けて硬直していた。　そのまま無言が続く時間にケーナは首を傾げた。

真っ先に再起動したのはラックスの方だった。

「い、いやちょっと待て嬢ちゃん！　俺等はアンタの作った物を研究させて貰うのは有り難いんだけどよ、アンタは自分の作った技術の権利を、丸ごと他人に譲渡して平気なのか？」
「は？　なんですかそれ？」

いきなり”技術の権利”と言われてもケーナには何のことだかさっぱり分からない。　問題の機構自体はオフラインクエストをひと通り通過している者ならば誰にでも作ることが出来、クエスト以外では用が無いものだからだ。　確認してみたがシャイニングセイバーとコーラルも作る事が出来る。　割とゲーム中では他の建設技能を得る為の前提技能ではあるが、砦を建造する時にしか使わないので殆ど無用の長物だ。

ケーナの困惑した様子に何も知らないと理解したスーニャは、今の世の中にとって貴重な技術を代価程度で他人に委ねてしまっても良いのかと再度確認して来た。　逆にケーナはそこまで技術力が低下したのかと呆れ果てたので、技術を渡して研究する事には異を唱えない。

代価は金銭の他に提供者の名前を出さない事と、人を殺すような物には転用して欲しく無い事だ。　無論これには譲渡してしまったらどう転用するかは、あちらの自由なところではある。

「……分かりました。　その条件は二つともケーナさんの意志を汲んで遵守致しましょう。　ただ、代価に当たる金銭の方なのですが、私達にはとても用意出来無い額なのです。　契約相手の商人に確認交渉してまいりますので、暫く待って貰っても良いですか？」
「えーと……、そんなに高い物になるの？　アレが？」

唯単に人力に頼って歯車を回し、クロウラーに付いた枡で水を汲

むだけなシロモノに一体どれだけお金を払う気なのかと。　超絶にでっかいクエスチョンマークを浮かべたケーナであった。

「そうですね、後々の利用価値や普及具合にも依りますが……。金貨十枚くらいはいくのでは無いでしょうか？」

「ぶっ！？」

想像してた金額より二十倍程多い額を提示され、引っくり返りそうになった。　この村で何もしなくても十年くらいは暮していけそうな金額にどう判断したものかと、悩む。　相変わらず換算方法が常人より変な所に本人は気付いていない。

「って言うかそんな金額をポンっと出せる商人なんているの？」

「そのくらいなら私達の契約している商人の方では、大丈夫だと思いますよ」

言われる前に嫌な予感がしたので、というか心当たりが有り過ぎるので推測で先に聞いてみた。

「……堺屋、とか？」

「はいその通りです。　堺屋の大旦那様に贔屓にさせて貰っています」

「ケイリック直属なのねー、ならお金の方は急がなくていいや。私からあの子に請求するから」

「は？　大旦那様のお知り合いなのですか？」

「うん、ま……。　ちょっとした商談相手、かなあ？」

アレが私の孫です、と言ってスーニャ達に頭を下げられても困るから詳しい説明は省く。　ネームバリューの高い人物と血縁関係にある事を知られて、やたらと絶叫されるのも良い気持ちでは無い。

ようやっとその事に気付いたケーナであった。
さすがにスーニャ達も、ケイリックの事を名指しや「あの子」呼ばわりしているケーナにかなり深い関係と理解した。その上で上下関係を特に気にしないケーナに何か事情があるのだろう、と判断してその事は見無い振りをする。

「じゃ、ちゃっちゃと作っちゃうねー」

材料くらいは、と言おうとしたラックスの目の前にひと抱え出来そうな丸太がドカンと数本出現した。何も無い虚空から唐突に現れたとしか思え無いソレは更に、丸太と同サイズな鉄塊が並んだ事により異様さが増した。最後に出てきた一つの鉄塊だけで目の前のエルフ女性の四倍の重量はあるだろう。どんな奇怪な術を使えばこれだけの体積を持つモノが、一人のエルフ身ひとつで用意できるのかと……。

そんな羨望と恐怖の入り混じった視線にはさっぱり気付かないケーナは、加工用の地の魔法と風の魔法を展開し【技術技能（クラフトスキル）：水汲み機】を起動させた。前回は各部バラバラに用意したが、本来の全部を一緒に組み上げる方法で。長方形の板が組み合わさってクロウラーが、その動力輪の一際大きい歯車が二つ、動力を回すためのクランクの付いたギアボックスが接続されて、村の井戸に使われている水汲み機が完成した。時間にして約十数秒、ケーナ以外の面々はその工程から組み上がるまでが空中で行われるのを呆然として、顎を落として見つめていた。はっきり言って今の世の中では理解の追いつかない作り方である。

「む、ちょっと室内ではこんなに長いクロウラー部分は要らなかったですね」

村の井戸で底まで距離を測っていたので、ついそれと同じに作ってしまい山になった駆動部分に後悔するケーナ。　村に設置した物は保存魔法を掛けたが、ラックス達が分解するかもしれないので使用しない。　それをそのままどうぞと差し出す仕草で譲渡する。親子弟子がそれぞれに興味のある所に噛り付く様子に、玩具を与えられた子供みたいだと頬の緩むケーナと、夫達の活き活きとした様子に苦笑するスーニャ。

スーニャが署名だけでもと用意した書類にサインしたケーナは、邪魔しちゃ悪いからと工房を後にした。

「さてー、次は村長さんの所ー……ってぇ」
「おお、ケーナ殿。　此方におられましたか」

呟きと共に訪ねようとしていた相手から赴かれ、キョトンとしたケーナだったが村長の背後にニヤニヤしたロットルの姿を見つけた。

「もう、ロットルさん。　先に話しちゃうなんて酷いじゃないですかー」
「いや、こんな話は早いほうがいいだろ？」

白髪の混じった髭を撫でつけた村長は満面の笑みを浮かべつつ、ケーナの住居を村に作る事に賛成してくれた。

「なんでしたら村中総出でケーナ殿の家を建てますがの？」
「あー、そこまで迷惑を掛けるわけにもいきませんので、場所だけ確保してくれれば自分で家は建てます」

勿論オフラインで自分の家を建てるイベントは有ったものの、それは巨大な砦の事を指す。　尚更自分の住居は自分で建ててみたい気分もあった。　冒険者としてあちこちふらふらするよりは、ひとつ所に腰を落ち着けたいと思っていたから。

スキルを使わない家事については、村の女性から教えて貰う事になるだろう。　リアルの住居がほぼ病院だっただけに、自分の家と言うものに憧れていたケーナだった。

２４話　勧誘を拒否しよう

村長が村の奥の日当たりの良い場所を提示して、集まってきた村人達がそれに頷いた。　昔はこの場所にこの村を開拓した創始者の家があったとかで、今まで誰もここに家を建てようなんて言う者は居なかったらしい。

「え!?　いいんですか、そんな所を私に譲って頂いて?」
「ケーナ殿は何にも関係がないのに、この村に尽くしてくれたじゃろ?　こんな事くらいしないと儂等の気が済まんのじゃ」

村長の言葉に周囲の村人達は一斉に頷いた。
そこまで言ってくれているのを無碍に断るわけにもいかず、有り難く頂戴しておくケーナだった。　ついでに女性の人達から生活に必要な物をひと通り教えて貰う。　全部キーに記憶させて、揃えるのは家を建ててからだ。　その中には一家に一匹必要な山羊とかもあったので、これは何処かで買って来るしかない。　家具の大半は材料さえあれば自作出来るので大丈夫だが、問題はこの村で何かを作って村人達と分け合えるかであった。

流石にコレには浴場があるので気にしなくて良いと村人達は言ってくれた。　それだけに頼るわけにはいかないので、要思案件にしておく。　一番手っ取り早いのがギルドで高額依頼だけを受けて、そのお金を村に入れる事だ。　但しケーナはフェルスケイロで妙に有名になりつつあるので、他の冒険者の反感を買いやすい所がデメリットだ。

「なんか考えよう……」
「じゃあ、とりあえず俺と狩りにでも行こうぜ。　そうすれば珍しい肉も喰えるし、売る物も幅広くなるだろう？」
「そうですねー、しばらくはロットルさんと狩人でもしましょうか……」

肩を叩いて提案してくれたロットルに感謝して、それを受け入れるケーナであった。

「って、やっぱこーなるのかーっ！」

その晩、宿屋の食堂。　夜には酒場に早変わりするその場に於いて『ケーナちゃんを村に歓迎する会』という名目の宴会が開かれた。
勿論そうなった経緯を全く知らないラックス一家や、浴場に使われている魔法の調査に来たオウタロクエス王宮術士二名と、その護衛の冒険者四名も混ぜ込まれて。
村人が食堂の外にまでテーブルや椅子を並べての宴が開かれ、強引に上座に着かされたケーナの元へ酌をしに大人達が詰め寄った。
あちこちで肩を組み、陽気に歌う村人達で熱気がもの凄い。　こりゃもう諦めたほうが早いとケーナは流されるままだ。　しいて言うならばやりたい事があったので、マレールに後で文句を言われるかもしれないが【毒無効】の腕輪を使い、酔っ払う事を防いでいた。
時折、強い敵意を含んだ視線を感じたので元を辿ると、昼間に突っ掛かって来た猫女性が此方を睨みつけていた。　目が合うと眉を

寄せて嫌な顔をして顔を背ける。　一体何がそんなに気に喰わないのか、ケーナは理解しかねていた。

宴も後半。　酔って覚束無い者が増えてきたところでケーナは席を立った。　心尽くしをしてくれた村の人達に対して、ちょっとした余興を披露しようと思ったからだ。　空気を読んでくれたマレールが手を打ち鳴らして皆の注意をこちらに向けさせた。

「ホラホラ、皆。　ケーナが何か言いたいそうだよ！」
「すみませんマレールさん」
「いいってこれくらい。　ホラ、言う事いっちまいな」
「はい。　では皆様～。　本日は私の為に楽しい宴の席を設けて頂き、ありがとうございます」

深々と腰を折って一礼するケーナに、村人達から拍手や口笛が飛んだ。　誰とは言わないが一部の席の人物は「粗野ですわ」とでも言いたげに顔を背ける。

「皆様から受けた恩を少しでも返したく思いまして、少しばかりの余興にお付き合いください」

と、テーブルの上に出すのは小麦粉や果物や卵など、料理となる前の材料の数々。　流石にこの村に住む者ならばいい加減理解する。　ケーナが”材料”から複雑な工程も無しに”完成品”を作り出す手段が有る事を。　知らないのは村に来たばかりで彼女と面式がないオウタロクエスの客人達だ。　テーブルの上に山と積まれた材料を一瞥して、興味がないと仲間との会話に戻る。
そんな彼等も次にケーナの取った行動で顔色を変え、呆然となる。

「貴族様の食しますデザートと言うモノをこの場で作り出して見せ

ましょう」

言うや否や【料理技能（クッキングスキル）：ケーキ】を使用。　胸の前に抱えるような仕草を取った両手の間にオレンジ色の火魔球が形成され、テーブル上の山より幾つかの材料が吸い込まれた後、瞬時にケーナの手の中にケーキが現れた。

ふかふかのスポンジ二層の間には赤みの掛かったベリーの実とクリームが挟み込まれて、上面と縁取りを飾るのは真っ白い綿のようなクリーム。　一般的に言うならばホールケーキと呼ばれる分類であるが、高尚な貴族のお菓子というものを見た事も聞いた事もない者達から見ればこの上ない芸術品の様相を呈していた。　おまけにふわっと漂ってくる果実の匂いに混じる甘い匂いに、引き寄せられる程の魅力を皆は感じていた。

ケーナはテレビから得た知識で、マレールに頼んで包丁を暖めた布で拭き取りながら八等分に切り分けて貰う。　真っ先に食べて貰うのはマレールとリットとガットとルイネ、村長と村長の奥さんとロットルにとりあえず勧めて見た。

素直に何の抵抗もなく真っ先に食べたのはリットで、口に含んだ後目を丸くして硬直してしまった。　心配になったケーナがおそるおそる「口に合わない？」と聞くと、首を振って「ううん、おいしい、すごくおいしいよ！」と笑顔で強調した。　宿屋一家や村長達も初めて食べる甘いクリームやふかふかな舌触りのスポンジに、目を丸くしながら手をつけていく。

全員が異口同音に「美味い！」と言ってくれたので、予め仕入れた材料をフルに使い次々にケーキやパイを作り出していく。　作り出す端からこの場に居る者達によって瞬く間に無くなっていった。

食堂の端に席を取る南国の客達にもソレは行き届き、それぞれが目を剥いたり白黒させたりして食べる様子が見て取れた。　あっち

の政治体系や貴族などの有り方は分からないが、充分驚いてくれただろうと思った。

……そのまま驚いていてくれれば良かったのだが、楽しい宴の空気も読めない人物が立ち上がるまでは。

「私は認めませんわっ！！　……もッ！？」

そのまま次に続く言葉を言い放とうとした彼女は兄によって口を塞がれ、もがもごーっ！？　と暴れ始めた。　最初の一言でその場に居た村人達の「楽しい時間に何言ってんだおめー」と集中した睨みに晒された事が、兄の行動を発起させる原因だ。　哀れにも羽交い絞めにした妹を引きずって、二階へと消えて行く兄妹。

「なんじゃありゃ……」

目を点にして呟いたロットルの言葉がその場に居た村人達の心を代弁した。　やや水の差された宴だったが、その後も村人達は普段食べられない甘いお菓子に舌鼓を打ち、大騒ぎをしていた。

どちらにしろ回避したと思っていた嵐が再び上陸して来たのは、宴も終わり村人達が去った後にマレールらと後片付けをしていた時の事だった。　その場に居たのは眠い目をこすりながら皿を運ぶリットとルイネ、洗い物に回るマレール。　何故か流れでテーブルを

拭いているケーナが居た。

「悪いねえ、ケーナ。　主賓だったのに手伝って貰っちゃって」
「いいんじゃないかな？　これでも一応は村人になったんだし、お互いサマでしょ」

皿運びの世界記録に挑戦しているようなルイネに声を掛けられたケーナは、その膂力（りょりょく）に苦笑しながらも雑巾を濯（すす）ぎつつそれに返答する。　腰元で服の裾を引きつつ自分を主張するリットがいたので、彼女にも笑顔で返した。　途端に笑顔になったリットに幸せを噛みしめるケーナ。　実に安い気がしたが、努めて気にしない方向で。

その幸せも長くは続かない、キーの接近警報に視線を向けた階段から件の猫人族（ワーキャット）の女性が駆け下りてくる。　ケーナの手前まで突進してくると、敵意の篭った視線で穴が開くほど睨んできた。　さっきの続きを言いたかったらしく胸を張って宣言する。

「私は認めませんからっ！！」
「なにこのメンドクサイ女」

ケーナの胸中をルイネが代弁してくれた、猫女性はルイネをキッと睨みつける。　流石に冒険者家業をやっている者に睨まれると一般人のルイネは引く。　視線の間に割り込んだケーナはルイネへ雑巾を手渡すと、戦闘モードの【能動技能（アクティブスキル）】を幾つか起動させ、逆に猫女性を睨み付けた。　結構な付き合いにもなって、友人と呼べる間柄のルイネを怯えさせたのに腹が立ったのもあるが、これ以上自己主張の激しい者をマレール一家に触れさせたくなかったのもあった。

ケーナから逆に威嚇された猫女性は一歩後ずさり、自分の行為に

気付いて愕然とした。　プライドが高すぎて自分が怯える行為が信じられなかったのだろう。　その表情を見て意趣返しが出来たケーナは吹き出した。　視線は益々強くなって返って来たが。

「何故貴女のような下賤の者が、女王と同じ古代の技を使えるのです！？」

「……ああ、なるほど。　里子かなんかなわけね？」

なんとなく思い当たったケーナののんびりした態度に猫女性は逆ギレした。　絶句した後に更に強い敵意を向けてきた。　ぶっちゃけケーナ自身も話し合うのが面倒臭いと思えるほどだ。

「で、認めないからどうするのよ？」

「決闘を申し込みますわ！！」

「……は？」

言われた事にポカンとして情報を吟味する、直ぐに決定的な事実に気付きそのまま返答した。

「ごめんね、私、弱い者イジメの趣味はないんだ」

「誰が弱い者ですかっ！？」

当然として千百レベルと七十弱レベルではアリが核ミサイルに喧嘩を売るようなものである、当然の反応だ。　しかし向こうはそうは思わないようで、即答で弱い者扱いされ更に機嫌が悪くなった。

噛みしめたハンカチを引きちぎるレベルで。　流石のケーナですらも相手の対応に鬱陶しくなってきた。

「貴女をこの私の前に跪かせて見せますわ」

「ああそう、……きっと無理だと思うけどなあ」

自己主張の激しい猫女性の高笑いでもしそうな態度に、ゲンナリした表情で肩を落とすケーナ。　承諾もしてないのに向こうは既にヤる気であるらしい。　とうとうケーナも視界の中に入れるのを諦めた。

上機嫌と言えば良いのか部屋に戻っていく猫女性が姿を消すと、階段の影から猫女性の兄が現れた。　あちらもウンザリした表情を隠そうともせず天井へ目をやり、ケーナの方へ近付くと頭を下げた。

「すまん、妹が無理を言ったようだ」

「あ、……ああ、いや、別にいいけど。　もう承諾したことになってんのね……。　なんなのあれ」

「重ね重ねすまん。　あいつは女王を敬愛していて、アンタの使う技が女王を侮辱していると思ったのだろう。　まあ、遠慮はいらんから叩きのめしてやってくれ」

「お兄さんのセリフじゃないと思うなソレ。　あ、私はケーナ、貴方は？」

「俺はクロフ、あいつはクロフィアだ。　まあ、宜しくしてくれると嬉しい……が」

「うん、あっちの子はちょっと考えてみる」

何故かクロフとケーナの溜息が重なった。　理由は押して知るべしである。

時間をすっ飛ばして翌日、朝から村にほど近い街道で問題の決闘が執り行われた。

見届け人にはクロフと、猟に行く為に偶然此処を通り掛かったロットルが巻き込まれた。

村の中でやらないのはクロフィアの武器が弓で、ケーナの主な攻撃方法が魔法だからだ。あと村人にこんな私闘で迷惑を掛けたくないのもあった。しかも始まる前からクロフィアのテンションがＭＡＸで、ケーナは最下層だった。さもありなん。

無言でクロフィアの速射から始まったが、事前に展開してあったケーナの【遮断結界】により矢は手前で全部地に落ちた。次に魔法が放たれたがそれもケーナの手前で見えない壁に阻まれて霧散した。最後に剣を抜いて斬りかかって来たクロフィアは、やはりケーナの手前で見えない壁にぶつかり、跳ね飛ばされて地面に尻餅を付いた。

分かりきった顔で沈黙したケーナが深ーい溜息を付くのを見て、その表情がみるみると屈辱に歪む。叩きのめせといわれて「はいそうですか」と言えないケーナはとりあえず聞いてみた。

「……で？　まだやるの？」

「くっ……！」

屈辱で歪んだ顔が小刻みに震えながらビクついた表情に変わり、目の端に大粒の涙が浮かんだ。それを腕で強引に拭って立ち上がったクロフィアは、ケーナに背を向け一目散に走り去って行った。

村とは反対方向へ。

「はあー……」

もう一度肩を落とし大きな溜息を吐くケーナ。
その肩をポンと叩き、ロットルが手を振って猟に出かけて行った。
慌てて「付き合わせて御免なさい」と頭を下げる。　その姿が街道の向こうに見えなくなって、面倒臭いイベントも終わったなあと振り向いた所に衝撃的な姿を見つけてしまった。
クロフが偉い人の臣下がするように片膝を付いて跪いていたからだ、ケーナに向かって。

「え、えええええ……」

流石のケーナもこれは引く。　思わず数歩後退り、更にやっかいな面倒事が待っていた事実に愕然とした。

「ど、どどど、どうしたんですか、クロフさん。　地面にしゃがみこんじゃって？」
「は。　話に伺っていた通りのお優しい人柄。　このクロフ感服致しました」
「えええええー。　だ、だってクロフさんが言った通りに叩きのめしたんだよ？　どこが優しいって？」
「それでも最後まで止めを刺そうともせず、妹が逃げ出しても追い込もうともしませんでした」
「どんな鬼畜だよ私っ！？」

つい勢いに任せて突っ込み、途中で今の話の中にあった変な部分に気が付いた。

「え、聞いたぁ？　誰に私の話を？」
「我等が女王サハラシェード様にです。　主からの密命を受け今回は此方の地に参りました」
「ん？　どこかで聞いたような名前？」

そのクロフが告げた南国オウタロクエスを治める女王の名に聞き覚えの有るケーナは首を傾げた。　どこで聞いたのかと思案した脳裏で、キーからそれにまつわる会話ログを提示された。

『お姉様お姉様、私もお姉様に倣(なら)って里子登録しました』
『へー、サハナも？　関係は子供にしたんだ？』
『はい、女の子で同族でサハラシェードって言うんです。　何処かで出会ったら可愛がってくださいね？』
『いや、ＮＰＣをどうやって可愛がれっちゅーんじゃ……』
『エターナルさんには関係ありませんから黙っていてください』
『……はい』

「ああ、そういえばサハナの子がそんな名前で……」

かつてあったハイエルフコミュメンバーで【以心伝心】で妹登録したサハナと言う名の、子リス系かまってプレイヤーの里子がそんな名前だと思い出した。　エターナルはコミュ内で最年長の兄登録していた、おそらくゲーム内唯一の男性ハイエルフプレイヤーだ。
ケーナの最終時の記憶では、当時たったの六人しかいない弱小コミュだったので、メンバーは全員覚えている。

（いやちょっと待てよ。　サハナ＝妹、の娘って事は姪で私は伯母……って事は私王族扱い！？）

どんだけ面倒事が回ってくるのかと更に憂鬱な気分になるケーナ、そこまで考えればこのクロフの取る姿勢にも納得が行く。　それ以前にハイエルフと言う種族自体がエルフの王族と言うカテゴリーだ。
エルフが傅(かしず)くならともかく猫人族(ワーキャット)に臣下の礼を取られるいわれはない。

「み、密命って？」
「は。　詳細を述べさせて頂きますと、少し前に各国に放った隠者からフェルスケイロで冒険者に”ケーナ”と名乗る者が加わったと報告がありました。　女王はその情報を甚く気にされていて、詳しく調べるように我等を派遣されました。　勿論、貴方を監視していた訳ではなく、各地で噂を集めるだけでしたが。　その情報を吟味した結果、女王は貴女を本物のケーナ様と確信し我等が派遣されたのです」
「うわあ……。　大体言いたい事は予想が付くけど、妹さんもその隠者か何か？」
「いえ、あれは違います。　冒険者と術士二名と同じく表向きの理由で同行しただけです」

古代の御技の術式を調べるというのが建前で、実際はケーナを勧誘しに来たらしい。
一国の主導者と言う者はそこまでやるものかと呆れた、むしろそんな面倒事を此方に持って来ないで欲しい。　これから竜宮城探索に家建設と重要なイベントが目白押しなのだ。　そこまで予定を思い出し、この問題は自分が慌てるものではないと思い当たった。

「はあ、じゃあ女王様に伝えておいてよ。　私はオウタロクエスに行くつもりはないって」
「は、……はあ？　いや確かに女王の意志は貴女様を我が国にお迎えする事ですが……」
「私まだ色々やらなきゃならない事がいっぱいあるんだ。　友人の塔を探さなきゃならないし、家も建てなきゃならないし、村人さん達にお世話になったお礼も返してないし、エーリネさんやアービタさんにも返さなきゃいけない恩があるし。　息子や娘もこの国に居るし、孫に会いにいかなきゃいけないし。　冒険者としてオウタロ

クエスに行く事はあっても、女王の関係者としてお城に行くつもりはないから。　そうサハラシェードには言っといて」

　姪として気にしなきゃいけないのは分かるが、今のケーナにそんな余裕はない。　サハナの忘れ形見みたいな者だし一度位は会ってもいいかなと思ったが、優先順位でやる事が多すぎるので、落ち着いたら会いに行こうと考えた。

　きっぱりと断りの返事を受けたクロフは戸惑う。　彼の受けた命令は『ケーナの意志を聞いて来る事』が第一目的なので、とりあえずの任務は果たしたことになる。　しかし、この命令を下した本人の前で落胆した表情を見せると思われる返答を述べるのは勇気が要る事であった。　少しは足掻いて引き止めたいが、ケーナの立ち寄ると思われる各地に派遣された隠者（クロフ）達には最後に付け加えられた指令の中に重要事項があった。

　すなわち、『絶対に対象の機嫌を損ねてはならない事』。　これに疑問を感じた仲間の隠者達からの問いに対して女王の返答は『伯母様が本気になればこんな国など一日で焦土です』と、およそ本人が聞いたら「どんだけ伝言ゲームで拡大化してるんだよ！！」と激昂しそうな会話である。　妹との決闘を見ていてその片鱗は見えたので、続けようとした言葉を飲み込んでクロフは己を自制した。

　贔屓目を差し引いたとしてとしても、クロフィアは冒険者としては上位に位置する。　その妹がひとつの魔法だけでケーナに掠り傷すら負わせられなかったのだ、守りに入っていたから良かったものの、攻撃に転じていたのならぞっとする結果が待っていただろう。

「そろそろ、村に戻りますか。　クロフさんはどうします？」

　クロフが跪いているにも関わらず、態度を変えないで普通に接してくれているケーナには好感が持てた。　立ち上がって服に付いた

土を払うと、「妹を探してから戻ります」と告げた。

「ああ、じゃあ御免ねって伝えておいてくれませんか？」
「モロ馬鹿にしてるようにしか聞こえないのですが……」
「ああ、そっか……。　うーんと、じゃあ。　怒ってる顔しか思いつかないな、友達になれると面白そうなんだけど」
「あれだけ嫌味を言われて、そう来ますか。　奇異な方ですね、ケーナ様」

不思議者扱いされたケーナはその通り不思議そうな顔で首を傾げた。

「まあ、いがみ合うよりはマシでしょ」
「……分かりました。　一応伝えてみますが、返事は期待しないでくださいよ？」

普段から少し微笑んだ表情をしているのでクロフの顔色は読みにくいが、声に楽しそうな雰囲気が混じっていたのでケーナは強く頷いておく。

一度その場で別れたケーナがクロフに連れられたクロフィアに会うのは昼飯時を過ぎた頃になるが、その時交わされた会話は以下の通り。

「これで勝ったと思わないで下さいましねっ！　この売女！」
「なんでっ！？」

25話　潜む影に対抗してみよう　（前編）

翌日の朝にはフェルスケイロの王都へ戻り、討伐隊にくっついて行く算段なので日中に色々済ませる事にした。

先ずはヘルシュペルまで【転移】して堺屋に向かう。　どちらにしろ帰りは一度塔に戻ってから村まで移動しなければならないので、簡易アイテムを宿屋の部屋に残しておく。　自分の家を本拠地と設定すれば、村まで飛ぶのは簡単になる。　その他は、城や目立つ建物の有る都市を目標にしなければ飛べないのが【転移】魔法の不便な所だった。　残りはその昔各地に設置してあったポーターと呼ばれる中継地点だが、今昔の地図を照らし合わせてあった場所に赴いて見ても、跡形も残っていなかったので落胆していた。

「もう自力で目印になるような塔でも建てればいいんじゃないかなー？」

『間違イナク盗賊ヤ山賊ノ溜リ場ニナリソウデスネ』

ＡＩに突っ込まれたので自重する事にした。

「あと魔韻石とかも探すか掘るかしないといけないなー。　珪砂も一緒に掘ってきてもらって家のガラスにしたいしねー」

『材料ダラケデスネ』

ヘルシュペルの街中をキーと会話しながら進む。　傍目に見ると独り言を言いながら歩いてるようにしか見えないが、本人は気付いていなかった。

魔韻石とは魔法を込めておける鉱石で、家作成の際にライトの魔法もろとも天井に埋め込んで電灯のような役割を果たす。　効果は大きさによってまちまちになるが、永続化の呪文を込めずとも数十回分の簡易魔法が行使できるので、色々と役に立つ。　ライトのみならず【凍結】を込めて樽を作れば冷凍庫になったり、【回転】を込めた樽で洗濯機代わりにもなるだろう。

いずれも地中から掘り出すものだが、はっきり言って何処に埋まっているのかが分からない。　方法は二つ、鉱山まで自力で掘りに行くか、【召喚獣】ロックワームに掘り出してきて貰うかのどちらかに頼るだけだ。　後日、掘り出さなくても手に入れる目処が立ち、今の世の中に少し感謝する事になる。

「……それにしても……」

堺屋の前に辿り着くと以前見た光景そのままだった。　つまるところもうここの大通りは堺屋だけの繁盛で切り盛りされてると断言できる人賑わいと、人足達の掛け声と客や小店の従業員が入り混じっての黒山の人だかり。　オマケに平屋の日本家屋瓦付き。　両隣の商家なんぞ閑散としたモノである、まさに金に物言わせて成り上がった時代劇の悪徳商人の印象をまんまだ。

「ケイリックとケイリナってモロ私の名前から取ってるよね。　マイマイも二百年間寂しかったのかな？」

ぼそりと呟いたケーナにキーからの返答は無く、代わりに別の声が彼女を呼び止めた。

「……曾お婆様？」
「ああ、イヅークね。　お久し振り」

使用人を数人引き連れて外へ出てきたエルフの若旦那が、面食らった顔でケーナに気付き声を掛けて来た。　その中に居たコボルトの小間使いに後を頼むとケーナを招いて再び中に戻る。

「お店の利益優先でいいんだけどなー」
「曾お婆様をないがしろにしたら、父上が怖いですから。　丁度伯母上もいらしていることですし」
「ケイリナが？」

案内された部屋では洋間ではあるが、奇怪な植物が生い茂る庭を一望出来る、調度品も落ち着いた雰囲気の広い部屋だった。　以前通された部屋とはまた別で、ノックをして扉を開けたイヅークを何用かと振り返った姉弟は、次に扉を通って現れたのがケーナだと知ると慌てて居住まいを正した。

「それでは曾お婆様、ごゆっくりと。　後でお茶を持ってこさせます」
「おかまいなく。　わざわざありがとうイヅーク」

一礼して退出する息子を見送ったケイリックは、今丁度姉と祖母に関係する話をしていたので挙動不審が目立っていた。　ケイリナの方は騎士団での精神鍛錬によりそんな事はないが、弟の慌てる様によって台無しになるのを眉をひそめ溜息をついた。

「お、お婆様、お久し振りにございます。　今回は何か……？」
「なんか随分と慌てて、隠し事かなにか？」

的確な一言に二人の心音は一拍上擦った。「ここ座るね？」と断ってケイリナの横に腰を下ろしたケーナは、スーニャから預かった書類をケイリックの前に広げる。　お抱えの工房から新技術についての報告書にざっと目を通したケイリックは、技術提供者の書名欄に祖母の名前が記されているのを見て目を丸くした。　もう一度読み直してから、恐る恐る視線を対面のケーナに向ける。

「もしかして、ここに記されている機構とは、”古代の御技”、ですか？」

「そ、あれを今の人達にでも使えれば、色々役に立つでしょ？」

ケーナに作り出せるのはテキスト通りのパターンだけ。　今の人達に改良して貰えれば、何も使用方法が井戸だけには拘らなくて済むものが出来るだろうと、考えての事だ。　ゲーム中には街中やフィールドをプレイヤーが作った色々なモノが闊歩していたので、そんなものを少しでも再現できたら面白いだろうな、と好奇心に依るものが大半を占めていた。

それより今のケーナの好奇心は姉弟が揃っている所にあると【直感】が告げていた。　先程狼狽したケイリックの態度も気に掛かり、ニンマリとした表情を浮かべた。　二人ともその顔を見て危機感を感じたのか一歩後退、ケイリナなどは剣に手を寄せる始末。

「そ・れ・よ・り。　二人で居るなんて何の悪事？」

「あ、ああ、いや、そ、それはですねー。　……は、ははは」

「……ケイリック、この馬鹿……」

いくら話術に通じた商人としても、怒らせると怖いという第一認識があるケーナを前にしては動揺を隠せない。　「なにかあります」と狼狽する対応でもって答えた弟に、ケイリナは額を押さえ嘆息した。

本当は祖母の為に黙っていようと思っていたケイリナは話を持ってきた手前、自分からソレを述べる事にした。

「あの、お婆様に捕まえて頂いた例の頭目なのですが……」

途端に”づど――ん”と沈んだ表情になるケーナに、選択を誤ったかと躊躇したケイリナ。　覆水盆に返らず、口火を切ってしまったので最後まで続ける事にした。

「先日、公開斬首刑になりまして……」

更に”づどど――ん”と落ち込むケーナ。　ソレだけの事をした者なので国の対応としては間違っていないのだが、孫達は残虐非道の悪人にも責任を感じてしまう祖母を優しすぎると心配した。プレイヤーを死なせてしまうきっかけを作ったのは間違いないので、罪悪感に悩むケーナ。　とは言え、当初はその場で殺そうとした本人が言うのもおかしな話だ。　その場はソレしか処断方法が無いと焦っていたと、言ったほうが近いか。　むしろあの場でケイリナが止めてくれた事を密かに感謝していた、大罪を犯したが数少ない同胞（プレイヤー）だからだ。　それはそれとしてこの話にはまだ続きがあった。

「表向きは……」

「は……？」

ケイリナのなんと言ったらいいのかよく分からない困惑した顔に、目が点になるケーナ。　おずおずと彼女の語ったあらましはこうである。　公開斬首刑を開いてギロチンが落ちた、しかし頭目は死んでいなかった。　正に自分でも何を言ってるか分からない以下略、な説明を聞いたケーナすらも困惑した。

脳内でキーと高速会話した結果、死ななかったのはおそらくダメージの及ぼす効果がＨＰ（ヒットポイント）制であった為だろうと結論が出た。　リアデイルでゲーム中の生死判定はＨＰが０点か１点かで決まる。　本来であれば首を切り落とすほどのダメージを受けたとしても、ＨＰが１点でも残っていれば死んでないと判断される。　おそらく各部位に分散したＨＰ設定されてない事が頭目の命を繋ぐ事になったのだろう。　【懲罰の首輪】はステータスとＬＶを１／１０に下げるが、ＨＰとＭＰは本来のままだ。　防御力が劣っていたとしてもありあまるＨＰと【常時ＨＰ回復（リジェネーション）】によって死を免れた。　と言ったところなのだろう。

まあ当然公開処刑場は大パニックになったらしい。　なにせギロチンで首が落ちないのだから。　国は仕方なく処刑を一時中断、後日似たような罪人の首を晒す事で民に王家の威光を示した。　頭目はギロチンで死なないので気味悪がった一部の家臣により、強制炭鉱労働罪（刑期永久）になったとか。

ほっとしたような、気掛かりを残したような気分を経てから何時もの調子を取り戻したケーナは、内部機密であろう情報を聞かせてくれたケイリナの頭を撫でて感謝を示した。

「お、御婆様……。　私はもう子供じゃないんですが……」
「孫娘じゃん。　ほらほらケイリックもこっちおいで、撫でてあげる」

手首を振ってコイコイと招くと首を横に振りながら後退するケイリック。　不満そうなケーナの顔を見るなり、慌てて退出した。

「わ、わわ私は報酬金持って来ますからっ！　しばしお待ち下さい御婆様――っ！」

足音が遠くに消えていく。
ポカンと見送ったケーナに、撫でられたまま頬を染めつつケイリナは、弟は恥ずかしいのだと言っておいた。

「小さい時から教育出来てれば良かったなあ……」
「自分も子供の時にお会いしていれば、もう少し違った今を送れていたでしょうね」

ＩＦの話で気のあった二人はそっと微笑み合った。

報酬を換金して貰い、銀貨千枚で受け取ったケーナはヘルシュペル王都での用は済んだと、フェルスケイロ王都へ【転移】。　また翌日来るものの、色々と購入するものがあるために今日のうちに済ませておこうと考えた。

後は心配性の息子達にも伝えておくためでもある。

先ずは市場でケーキの材料を使い切ったスペースに食材を買い込む。
次にその辺にいた子供達に石を売っていたりする者はいないか聞いてみる。　魔韻石の事をケイリックに聞いたところ、モノは存在するが加工出来る者がいないので、長年なんの利用価値があるのか不思議がられていたそうだ。　これはヘルシュペルでも探し出し買い込んであり、子供達は道端や川沿いで綺麗な石を探し出し、磨いて見栄えが良くなるようにしてから小遣い稼ぎにして売っていた。

その石の中に【鑑定魔法】を掛けたところ魔韻石が幾つか混じっていたので、フェルスケイロでも同じ様な売り物をしている子供を探しに来たのだ。

同じ事をしている子供達はやっぱり居て、かなりの数を購入する事が出来た。　但し、ひとつが大きくても掌に乗るくらい(二センチ)なので、数を集めなければならないだろう。　コレは後でそれなりの大きさに加工して使う為である。　しばらくは子供達の上客になるしかないようだ。

コレについてはケイリックに商品化しての販売権の譲渡を提案された。　「考えておく」と答えておいたが、連絡を綿密にするのに『堺屋・辺境の村支店』を本気で作ろうと画策しているらしい。　ケーナの手の届かないところで、辺境の村強化計画が進んでるような気がしてならなかった。

次に長兄スカルゴが居る教会へ向かったが、城で会議が有るとかで留守。　おそらくは明日から始まる騎士団派遣について、最終調整の為だろう。　こうやって改めて人づてに聞くと、国のために働く姿は真剣なんだと思われる。　ひとたび対面するとそんな労い心もコナゴナに打ち砕かれてしまうが。

仕方なく隣の王立学院へ足を向けて、守衛の人に頭を下げて校門を通り敷地内へ入った。　教師陣には既に話が回っているので、学院長室までは特に呼び止められる事もない。

「お母様っ？」

「やほー、マイマイ」

ノックして入室したケーナを見たマイマイは仕事をしていた手を止め、いきなりやって来た母親を迎えた。　そりゃもう突撃して親

愛の喜びを全身で現してみたり。

「なぜにいきなり抱き締められているのだろーか……」
「だってお母様、ここのところ構ってくれないんですもの」
「子供も居て結婚暦が二度も有るイイ年したエルフ女性の言う事じゃないと思うんだけど」
「あうー、お母様言う事がキツイー」

下から目線で軽く睨まれたマイマイはしぶしぶと胸の中に抱き込んでいたケーナを離す。ケーナにとっては成熟したプロポーションを持つマイマイにはやや嫉妬心が沸くのだ。キャラメイキングの弊害の為、此方には成長の兆しはなさそうなので。

手ずからお茶を入れてくれた娘に礼を言って、本日二杯目の紅茶に口をつける。堺屋で出された紅茶は上品な味だったが、こちらは舌に甘みが残る風味だった。

「それで今日は何かあっていらしたんですか？」
「明日から海岸線沿いに竜宮城探しに行くんで、またこっちを出るからね」
「なんですかその”りゅうぐうじょー”って……？」
「あらら、馴染みがないのかこの呼称。端的に言うと守護者の塔、海中版よ」
「はあ……。『こっちを出る』とか言う前に、お母様もいい加減に何処かに住居を決めたら？　何時までも根無し草じゃなくてさ」

話そうとしていた事を切り出された都合のいいタイミングに、ケーナは満面の笑みでもって頷いた。逆に思いつきにイイ笑顔で返されたマイマイの方が、警戒心を抱いて引く。

「まあ、この塔探しが終わったら辺境の村に腰を落ち着けようと思

ってるけど」
「えええええええええっ！？」
「何を驚いているのよ。　今アナタが言った事よ？」

手に持ったカップを取り落としかけて目を丸くしたマイマイに、淡々とケーナは返答した。　内心マイマイの反応がほぼ予想通りだったので、この分だとスカルゴは教会を建てようと言い出さないか心配になる。

「王都にじゃ、なくて？」
「嫌よ、こんな自然の少なくて国家の面倒事に巻き込まれそうな所。それにスカルゴが毎日押し寄せてきそうで怖いわ」
「は、……はは。　兄さんは容易に実行しそうね、確かに……」

知り合いが国家の関係者に多いのも考え物であった。　大司祭に自称宰相、騎士団長に王女におそらく王子。　人の縁としては恵まれているほうだろう、この地に降り立って三ヶ月ぐらいなのに錚々（そうそう）たる顔ぶれにも程が有る。　これに孫の国家間に影響の有る商家と姪の治める南国がプラスされると、揉め事が有るたびに関係者にされそうで不安になる一方だ。

ほとぼりが冷めるまで引き篭もるかもしれないと伝えておく。マイマイは連絡も付かないような森の奥深くで無いだけ今までよりはマシと思い、スカルゴとカータツへの伝言を心良く引き受けた。
挨拶をしてその場で【転移】して消えたケーナに「慌ただしいなあ」と呟いた。

「それにしてもお母様の行く先々って、騒動ばっかりね……」

北に行けば盗賊を壊滅させるわ、戻ってくれば過去のイベントモ

ンスターが出現するわ。　世界の抑止力になってるような気がしてならない。

「流石に海に行って何か騒動の種を拾う、なんてことは……ない、わよね……？」

なんとなく胸騒ぎを覚える。　ケーナが騒動に巻き込まれるｏｒ起こすイコールその類い稀な力を解放する事に繋がる為、数日中に海岸線の形が変わるかの情報が入ってくるだろう。　その様子が手に取るように分かる光景に頭痛を感じえないマイマイだった。

【転移】の際の目印になる簡易ポイント（使い捨て）を設置していた為、部屋へ直接戻ったケーナ。

出かけたはずなのに上から戻ってきたケーナにビックリするリット。　マレールは客の事情まで突っ込む気は無いので、特に変わりなくケーナを迎えた。　もうすこしで夕方になろうとしている宿屋には昨夜のような喧騒の雰囲気は残ってなく、ありていに言ってしまえば静か過ぎた。

「なんか、随分静かになりましたね？」

「ああ、オウタロクエスからきた学者さん達が帰っちまったからね。なんでも目的は果たしたとかで」

「ほ、ほんとに裏の目的だけで来たんかい……」

「あの猫の兄さんが別れの挨拶をしたくて探してたよ、アンタを」

「ありゃま、それは悪いことをしましたね。　あれ以上こっちを出るのが遅くなると、マレールさんの夕食に間に合わなくなるかも。

……だったしなあ」
「相変わらず嬉しい事言ってくれるじゃないかい。　おだててもメニューは増えないよ」
「あらら、残念ですね」

頭を自分でコツンと叩いて失敗したという顔をするケーナに、マレールは笑いながら厨房の奥へ引っ込んだ。　リットは未だ納得のいかない表情でケーナを見上げた。

「お外へ出て行って、どうして上から帰って来たの？」
「ん？　ああ、あのね、ある程度の大都市なら距離も関係なく一瞬で移動する魔法があるんだよ」
「ほへー、おねーちゃんすごーい……」

特に疑う事もせず、羨望の眼差しでもってケーナを見上げるリットにちょっと怯んだのは悟られないようにする。　一緒に連れて行く事も出来ればいいのだが、パーティに組み込めないようなので無理な話だ。　代わりになにか喜びそうなこと――、と思案してとりあえず聞いてみた。

「じゃあリットちゃん。　今度お空、飛んでみない？」
「へっ！？　……おそら？」
「そうそう、天気のいい日にね。　きっと色々な物が遠くまで見えて綺麗だと思うよ」
「うーんと、でもお母さんがー……」

マレールの許しが出ないと宿屋も離れられないと言うリットに、視線を合わせるようにしゃがみ込んだケーナは頭を撫でた。

「じゃあ私も一緒にマレールさんにお願いして上げるから。　いい

よ、って言ったら行こう？」
「う、うん！」

本当の姉妹みたいに笑い合うケーナとリットを見て、珍しく早めの手伝いにやって来た実の姉ルイネは肩を落とす。

「ううん、リットってば私にはあんまりなついてくれなかったのになあ……」
「子供の扱いに関してはケーナの方が数倍も上だねえ。　ホント不思議な娘だよ」

26話　潜む影に対抗してみよう　（中編）

翌日にマレールの宿屋を出発したケーナは、王都の西門で騎士団が通り過ぎるのを待つことにした。　時間的にはＡＭ八時となったくらいに、騎士団が街の人からの声援を受けつつ王都を出て行く。

先ずはフェルスケイロ騎士団の旗を掲げた兵士。　騎乗した騎士が二十人程に追従して馬車が八台、その周りを囲みながら行進する兵士が八十人程と最後尾に騎馬が十騎。　総勢百十人ちょいといった一団が通り過ぎて行った。　盗賊退治という目的から言えば微妙な数だが、場所が隣国なので余り刺激しない配慮もふくまれている。

西門にいた守衛の話では、その分、人員には精鋭を選んでいるとか。

勿論その中にはシャイニングセイバーも混じっていて、門の所で出待ちしていたケーナに気付いて目を剥いた。　騎士団より少し遅れて乗合馬車やら商団やらの一行が追従する。　騎士団にくっ付いて行き、護衛に掛かる諸経費を少しでも減らそうという魂胆の者達だ。

それに混じるようにしてケーナも移動を開始した。　先頭の騎士団が騎馬移動なので早足に近い速度だが、あまりに遅れるようなら召喚獣でケンタウロスかスレイプニールでも喚べばいいやと、思いながら。

王都から随分と離れた所でケーナに先頭集団から離れた騎馬が近付いた。　並足で横に並び、馬上から話しかけてくるのはシャイニングセイバーだ。

「なにやってんだ、お前は？　俺達に付いて来て不甲斐なかったら

後ろから吹き飛ばすつもりか？」
「どこの暇人よ、それ？　私は竜宮城探しに例の村までは同行しようと思っただけよ」
「ああ、コーラルの言っていたアレか……。　それはともかく徒歩でか？　民に対してのデモンストレーションも済んだ事だし、兵士達も馬車に乗せて少しスピード上げるぞ」
「ああ、それで馬車があれだけいたのねー」

話しているうちにソレは起こっているのか、商団の馬車にすら少しづつ離されているケーナ達。「ふむ」と考えたケーナに剛を煮やしたのか、シャイニングセイバーは手を取って馬上へ引っ張り上げた。　勿論自分の正面に手綱を掴む腕の間にお姫様抱っこで。

「な……っ！？！」
「特別に俺が乗せて行ってやろう。　何、気にするなイベントモンスターの攻防の時の礼だ」

医者と父親以外では、異性に抱き上げられると言う経験が初めてのケーナである。　みるみるうちに顔を赤らめさせて、絶句したまま体を硬直させた。　第三者から見ると竜人族（ドラゴイド）とハイエルフではあるが、中の人がプレイヤーと知っているだけにケーナの受けた衝撃はそれだけに留まらない。
しどろもどろになり、普段の飄々とした雰囲気すら感じさせないケーナに、シャイニングセイバーは流石に様子がおかしいと見た。
顔も赤いし、目を合わせずにあちこちに視線が飛んでいる。

「どうした、疲れているのか？　冒険者と言っても体は資本だぞ」
「う……、わ、分かってる、……わよ。　い、いきなりこんな……。言葉に詰まる、ってーの……」
「それにしては随分顔色がおかしいが……？」

「い、いいい……、いきなりこんなことされりゃーだれだってこうナルワッ！！」

途中で羞恥心のために声が裏返ってしまい、更に恥ずかしさで縮こまるケーナ。　礼のつもりで考え無しに自分の取った行動が、”お姫様抱っこ”という図になった事に今更ながらやっと気付いたシャイニングセイバー。　しかし覆水盆に帰らず、速度を上げた騎馬は既に先頭集団に戻りつつあり、殿（しんがり）を務めていた騎士達や副隊長格の騎士が目を丸くして、戻ってきた騎士団長の奇行を見つめた。

更に好奇心の視線に囲まれ、益々体を縮こまらせるケーナ。　もう羞恥心で即死するかの如く赤面していた。

「ううっ……、シャイニングセイバーのばかァ……」

「いや、済まん。　そんなつもりじゃなかったんだが、とりあえず悪かった」

腕に抱えた美人エルフにペコペコと頭を下げる騎士団長を見て、同僚達の目が生暖かいものに変化するのはそう時間が掛からなかった。　ケーナに謝っていたシャイニングセイバーが気がついた時にはもう遅い。

「団長、彼女いたんですね」

「……は？　何を言ってるんだお前達……」

「まさか遠征に彼女を連れてくるほどラブラブだとは、団長にも男の甲斐性と言うものがあったんですね？」

「よっ！　うらやましいねえ、このこのっ！」

「いやちょっと待て！　これは違う、誤解するなよ」

「団長、人前で否定するなんて彼女さんにも悪いですよ。　ここはひとつ潔く認めては？」

「やー、俺達は祝福するぜ。　なあ皆？」

「「「「「「「「おおおおおお――――っ！！！！！」」」」」」」」

全然関係無いところで騎士達のテンションがＭＡＸになっていた。

馬車に乗っていた兵士達も何事かと顔を覗かせている。　話に置いてけぼりになっているシャイニングセイバーと、その腕の中で真っ赤なまま騎士団公認カップルにされて複雑な気持ちのケーナ。

「重ね重ね済まん」

「スカルゴが文句言ってきたって知らないからね、もう……」

本来であれば二日掛かる行程をまず初日で走破した騎士団は、街道脇の野宿場で野営を行っていた。　そこでようやく誤解を解く機会に恵まれたケーナとシャイニングセイバー。　馬上に乗せるまでの経緯を軽く説明して「紛らわしくて申し訳ない」と騎士団長が頭を下げた。　やっと赤面状態から開放されたケーナも、簡単な自己紹介を述べ頭を下げた。

「初めまして、冒険者のケーナと言います。　先程は失礼を致しました、皆様にはスカルゴの母と言った方が分かりやすいかと」

途端に騎士達から驚愕の悲鳴が大合唱するが、既に恒例な反応なので涼しい顔でスルーした。　しかもなし崩しに野営が騎士団と一緒にされていて、文句を言う暇もなく女性騎士と寝床まで一緒に決

められた後であった。

「なんというか……、シャイニングセイバーにしてこの部下有りって感じなんだけど」

「それは褒められてるのか、馬鹿にされてるのか？」

「……一応、褒め？」

「なんで疑問系なんだよっ！？」

種族や年齢などもさておいて、役職すらも関係なく軽口で会話する二人を見た部下達は「脈アリじゃね？」「お似合いだよな」などと囁き合っていた。　しっかり聞こえていたりするが、反論すると照れ隠しだと思われそうなので聞かなかった事にする。　但し、シャイニングセイバーが「お前等なーっ！」と部下を追い回したので、ケーナの思惑は微妙に功を奏していなかった。

行程としては次の日の半日程度同行した後は別れるので、シャイニングセイバーの騎馬には同乗せず【召喚魔法】でケンタウロスを喚び出した。　これはスカルゴの母なら何か突拍子も無いことをしてくれるに違いない、とか言う騎士達の期待に応えての事だ。　侍気質な上に他の者にも礼儀正しいケンタウロスは、騎士達にも概ね好意的に受け入れられた。

「なんでまたあんな性格してんだ？」

「喚んだら既にあんなんだった。　リアル召喚恐るべしよね」

順調な旅路も騎士団と別れて途中の小道に入るまでだった。　海

の見える平野からやや下った所に件の漁村はあるらしいが、騎士団と別れた事で周囲の喧騒が途絶え、異常が露わになる。　ケンタウロスの足音と微かに聞こえる細波の音以外が全く聞こえないのだ。

ついでに何かを彷彿とさせる生ぬるい空気も漂っていた。

「殿(との)！　不穏な気配が致しますぞ」

「鳥の声すらしないってのもオカシいわよね……」

ゲーム中でも海辺に近付けば海鳥の鳴き声がデフォルトで聞こえてくるし、村から人のざわめきなどが届くだけに、この静寂は不自然過ぎた。　強い潮の匂いにケーナの眉がひそめられる。　ゲームでは食べ物の匂い以外はかなり曖昧な為、ケーナが潮の匂いを感じるのはこれが初めてだ。

緩やかな下り坂が続く岩肌が覗いた大地は砂に塗れ、所々低木や雑草に覆われた中を馬車がなんとか通れるくらいの小路は、途中からぷっつりと途絶えて濃いクリーム色の停滞した霧の中へ。　あの辺が村だと思われる場所は、小高い坂道の上から眺めれば分かるくらい低気圧の塊に似た霧にすっぽりと包まれていた。　ケーナの髪がそよぐ程の海風が吹いているというのに吹き散らされる様子もなく、ゆったりと渦巻いている。

「うわぁ、何あれ……」

「なんと言いますか、危険地帯だとしか思えない有り様ですな」

胴体横にマウントしてあった槍で風を斬るケンタウロスが、厳つい顔を更に険しくして臨戦態勢を取る。　霧イコール水系の敵かと予測したケーナはアイテムボックスから火蜥蜴(エターナルフレイム)の剣を取り出して抜き身で持ち、自分達に物理&魔法の防壁を施した。

近付けば近付く程、異様な状態を保つドーム状に渦を巻く霧は何

処かの野球場（ドーム）のようで、壁となって侵入者達を阻むが如く。　中まではさっぱり見通せず、【探査魔法】でもケーナ身辺に何かが近付くまでは全く分からない始末。　本来であれば視界の端に表示される円十字型レーダーの形状を取って数時間持つこの魔法である。常に中央が自分の位置、味方は緑点で敵は赤点と表示され、半径数百ｍをカバーするプレイヤーの標準装備だ。　単独行動を取る事の多いケーナ達、はぐれ者には必須技能だ。　しかし、現状直径五ｍと言った範囲でしか表示されていない。

「この霧、阻害効果持ちね……。　何か似たようなクエストを何処かで見た気がする？」

「殿、討ち入りのご命令を」

「赤穂浪士じゃないんだから止めなさいって。　外から纏めて吹き飛ばすって手もあるけど、村人は無事でした。　とかだったら厄介だしなあ……、慎重に進むわよ？」

「ハッ、仰せのままに」

何も言わなくても先頭を切って進むケンタウロスに、少し遅れて霧ドームに侵入したケーナは肌がチリチリする感覚に足を止めた。

油断なく構えたまま同じ感覚を味わうケンタウロスも入った所でケーナの先に佇み、周囲を慎重に警戒する。

内部は外から見たよりは薄くなっているが、見通し四～五ｍ前後くらいしかなかった。　天井からは微かな光が射し込むくらいで、全体的に薄暗い。

何気なく自身のステータスを確認したケーナは、そのままケンタウロスのステータスに目をやってギョッとなる。　現在値／ＭＡＸ――　となっているＨＰの現在値が見ている中、ゆっくりと減っているからであった。

「ちょッ！？　この霧ダメージ付加もっ！？」

素っ頓狂な声を上げたケーナが慌ててケンタウロスに【回復魔法】を掛けようとするのと、霧の中から人間大の影が飛び出してくるのがほぼ同時だった。　それも背後から。

「殿っ！」

視界の隅に表示されたレーダーに気付くよりも早く、間に割り込んだケンタウロスが主人の代わりに一撃を受け、吹き飛んだ。　その隙に間合いを取ったケーナの前にふらふらと立ち竦むのは、典型的なゾンビだ。　土気色の肌、濁ってあらぬ方向を向いた瞳、切れたり破れたりで泥だらけの辛うじて体に纏わりつく衣服だったもの。

肉の腐った臭気が辺りに立ち込め、ケーナの表情がしかめられた。

ゲーム中のＣＧとはまた違うリアルそのままの醜さを現すそれは、ポピュラーな雑魚キャラとも言える。　しかし、他のゲームではどんな扱いにしろ、リアデイルの地では存在するのは弱レベルだけには留まらない。　時折、中には見た目で油断させておいて強レベルのモノも出現する。　それは呼気とも声ともつかない「ォオゥオゥオォォ……」と音を発して、生者を威嚇する。　「ご、御武運を……」との言葉を残し、輪郭を滲ませ消えてしまったケンタウロス。

彼のレベルは二百五十はあった筈だが、それをいとも簡単に吹き飛ばすなど、このゾンビ少なく見積もっても三百レベルはあるだろう。

今のリアデイルでこのレベルのゾンビを作れるのはプレイヤー以外に無いと判断したケーナは、待機状態にあった【魔法技能（マジックスキル）：単体回復：デュールＬＶ９】を目の前のゾンビに向けて解き放った。

死者が回復魔法を受ける事は、対抗効果として最大の威力を発揮する。　白い光に全身を染め上げられたゾンビは体の端から擦れる

ように消えて行き、あっという間に白色に塗り潰されて跡形も無く消え去った。　四百レベル程度のプレイヤーであれば瀕死からＨＰを満タンにまで回復させる効果を持つ魔法に掛かれば、この程度の敵は造作も無い事だ。

「って言うかどっから出てきたのよ！　今のっ！？」

　このドーム内に入ってきたばかりのケーナにとって、背後には”外”があったはずだ。　それとも迷いの森のように足を踏み入れたその瞬間から、ドーム内の何処かに飛ばされる仕掛けでもあったと言うのか。　フェルスケイロで買っておいた普通の短剣に聖光（シャインライト）を掛けて周囲を照らして見る。　ほんの周囲三ｍ程度だが、白色に輝く光はクリーム色の霧を焼き照らす。　光の効果が続く限り浄化領域を作り出す聖魔法だ。　この霧は何かの術式で毒霧のような効果を及ぼしていたらしい。　チクチク感がなくなった事で一息ついたケーナは、とりあえず霧の向こうに微かに見える大きい影に向けて歩を進めた。

　真っ先に足を向けた先にあったのは民家だった。
　辺境の村と同型の使い古されてはいるが、まだまだ人が住んでも問題ない。　潮の香りもするが同時に先程のゾンビと似たような臭気も漂う中、ケーナは立ち止まった。

「さて、どうしよう？」

そもそも竜宮城を探しに来てこんな珍事に遭遇するのは予定外だ。
ドーム内に居るのは全てゾンビと見なし、最大火力で村とドームごと焼き払うか。　それともこのアクシデントの原因を突き止めて、可能ならば早めに排除すべきか。　民家の壁に背を預けて考え込んでいるとレーダーの端に赤い点が出現、揺らめく影と不気味な唸り声からゾンビと決めつけ火蜥蜴（エターナルフレイム）の剣をそっちに向かって投げた。

炎を放出する剣は空中で複雑な変形を行って四本足で着地。　大きさこそ人の膝位までしか無い程の犬サイズだが、所持用の四百レベル分の実力は備えている火炎金属トカゲだ。　たちまち霧の向こうから「オボゥァー」「キシャー」などと怪獣決戦じみた音声が聞こえてきた。　暫くすると霧の向こうの喧騒は止み、悠々とした足取りで火蜥蜴が戻って来た。　ソレはケーナの目前で跳ねると空中で元の剣形に変わり、彼女の手に収まった。　剣に欠けた様子も無いのを確認したケーナは敵地の中で考え事に適した場所、民家の屋根に飛び上がる。

火蜥蜴（エターナルフレイム）の剣を鞘に収めたケーナは、足音を忍ばせながら屋根を移動する。　ある程度は密集して建てられているのが幸いして、隣家に飛び移るのにいちいち地面に降りる必要もなくて済んでいる。
移動しながら眼下に蠢く影を見つけて幾つか実験をしてみた。
先ずは風の魔法で背後に声を飛ばしてみる。　【魔法技能（マジックスキル）：伝達】を起動させるとノロノロとケーナがいる方向を向いた後、背後から掛けられた「わっ！！」との声に機敏に反応して振り返り、霧の奥深い方へ進んで行ってしまった。

「普通のゾンビみたいに生命感知で向かって来るわけじゃないみたいね。　魔法と音にも反応してるし……」

何気なく呟いたものの、キーからの返答はなし。　こんな時は何か自分の言ったことに対して検索している事が多いので特に気にしない。

持っているのも疲れたので、屋根に置こうとした短剣を背後に振り返って突き立てた。　ガチンと金属と金属が噛み合う音が小さく響き、ケーナの短剣を手甲で防ぐ軽装甲に身を包んだ女性が居た。

レーダーに白点で表示されるのは他プレイヤーを表す為、死角から近寄って来た者を敵と見なし攻撃したのである。

しかし、された方は目を白黒させて焦った表情でケーナの攻撃を防ぎつつ、ジリジリと押されている攻防に驚愕していた。　同レベルであれば人族の方が筋力は上になるが、【サーチ】で見るに相手のレベル四百三十はケーナの半分程だ。　この状態であればまだ此方の方がパワーでは勝る。　ケーナの片手が腰の剣に伸びたのを目ざとく気付いた相手は、慌てて声を掛けてきた。

「ま、待った待った！　敵じゃない、俺は敵じゃないから！」

「この状況で死角側から忍び寄ってきたくせに、それを信じろと？　騙すのならもっとましな嘘を付きなさいよっ！」

「本当に違うんだって。　俺達も霧に閉じ込められてどうしたらいいか困惑してんだよ。　頼むよ、信じてくれよ……」

泣きそうな懇願に、虚偽する様子もないと感じたケーナは油断なく短剣を引いた。　一応長剣（エターナルフレイム）には手を添えたままのケーナ。　安堵の溜め息をついた女性は家屋周りの影を探りながら、ケーナに手招きをして付いて来るように指示した。

しばらく屋根伝いに移動すると、おそらく村の端と思われる小さな倉庫へ辿り着き、中へ誘導した。　中は投網やら竿やらが雑多に積み重ねられている四畳くらいの小部屋で、女性は真ん中の床板を

跳ね上げ、現れた階段に顎をしゃくってケーナに進むよう示した。
階段は十数段下ったのち扉に行き着き、女性がケーナの脇から手を伸ばして扉を三・四・二と叩く。暫く待つと中から低い声で「いいぞ」と声がして、扉を開けて入室するように勧めた。

レーダー上、中には少なくとも他プレイヤー二人の存在があると仮定し、ケーナは警戒しながら中へ足を踏み入れた。此方は上の部屋より倍近い広さで貯蔵庫だったのだろう、魚臭さが鼻につく。
壁には網やら魚籠やら鍬やらがぶら下がっている。他には口の開いた樽が二つ置いてあり、中は空と干物が少しだけ入っていた。

窮屈そうに身を丸めた灰色の竜人族（ドラゴイド）と隅に毛布を被った小柄な人、子供か何か。床にはぼんやりと光る石が置いてあり、各人をうっすらと照らしていた。

「エクシズ、やっぱり人が入って来てた……わ。お……私より強そうだしプレイヤーかもしんな、……しれないわ」

しかしエクシズと呼ばれた竜人族は反応せず、口をカパッと開けてケーナを凝視していた。訝しげに思った女性が顔面を叩くと我に返り、ケーナに掴み掛かった。瞬間、貞操の危機を感じたケーナは長剣を引き抜き、炎に包まれた刀身を竜人の喉元へ……、

「……いや、確認がしたかっただけ、なんだが」
「異種族を襲うなんて、ずいぶんと飢えたトカゲだこと」

部屋の真ん中で両者は停止していた。　リーチの差は明確なので、ケーナから距離を詰めたのだ。　竜人はケーナの肩を掴み、ケーナの剣は竜人の喉元の鱗を切り裂く寸前で止まっていた。

「やっぱりお前ケーナだな！　こんな剣デフォルトで持ってる奴なんかお前しかいねーし」

「生憎とアナタのように愉快な名前の知りあいは居ないハズよ」

竜人のステータスをチラリと確認したケーナは呟く。　竜人の名前の欄には『Ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ』などと適当すぎるアルファベットが並べて有るだけだ。　ゲーム中にもＡだとか一文字を並べただけの名前は良く見たが、実際に遭遇すると何と呼べばイイのか分からない。　だから『エクシズ』と呼ばれているのだろう。

「この状態じゃ分からんだろうが、こっちは別アカウントキャラだ。メインはタルタロスだ」

「……たる、たろす……、タルタ……。　ああ、タルタルソース！」

「やっぱてめーはそー呼ぶと思ったよっ！　うん、間違いなくケーナだな、良く生きてたなテメェ！」

タルタロスとは同ギルドメンバーでの数少ないエルフ種族マジックメインで、大火力よりは搦め手側で勝負するテクニック系プレイヤーだった。　竜人なんかで肉体労働をやっているのはその反動らしい。　レベルは六百三十と今まで会って来たプレイヤーの中ではダントツの高レベルだ。　それはそれとして、灰色の竜人と軽装甲にサーベル持ちの女性の二人組に見覚えがあった。

「なんかよく見たらヘルシュペルで道を訪ねた二人組だった件について……」

「ああ、そう言われるとギルドで盗賊について聞いてきた……ね」

あの時は姉御肌な女性と思ったのだが、ケーナと相対した時からやたらと男性的な言動が目立っている。

「言動に気をつけろって言っただろーが。　こいつ中も同性だから疑問に思われてるぞ」

「しょーがないじゃないかい、殺されると思ったんだから。　地も出るってーの」

「そりゃ当たり前だ、ケーナは限界突破のスキルマスターだぞ」

「うぞっ！？」

それだけの会話でケーナにはピンときた。　以前にオプスにこういったプレイヤーについて聞いた事が有る。　ステータスにヒューマン：♀：名前クオルケ、と記されてるのを確認して確信を突いてみた。

「そっちのクオルケさんはもしかしてネカマってやつ？」

「うぐっ……」

図星を指されたクオルケは胸を押さえて視線を逸らした。　視覚効果で現すならば、頭頂部から下までザクッと矢印が突き刺さったと言うべきか。

27話　潜む影に対抗してみよう　（後編）

とりあえずプレイヤー事情はさて置いて、此処にいる訳と現状報告を交互に説明し合った。

「俺達はフェルスケイロの通商ギルドからの依頼でな。　海からの魚が入って来ないってんで、最初は徒歩で一日掛かる村まで行った。　そしたらそこは争った跡も無く誰もいなくなっていてな」

「ムチャクチャ大事じゃないのよ……」

「で、他の漁村はどうなってるんだって事で北上してきた、のよ。　二日前はまだ平穏無事だったんだが……だけど、夕方ぐらいに村人が『船がどうとか』と騒ぎ出したらあっと言う間に霧に覆われて。　村人はバタバタと倒れた端からゾンビになるわ、散発的に襲って来るわ、時折強いスケルトンは混じってるわ、外には出られないわで途方に暮れてここに避難したらこの子と出会ったと言う訳さ」

「もう無理して女性的な言葉使いをしなくてもいいんじゃないかな？　破綻して余計に変ですよ」

「ううっ……」

ケーナの突っ込みに項垂れるクオルケ。

ポツンと一人でいた少女はルカと言い、この村唯一の生き残りだそうだ。　無論名前を聞き出すのにケーナが親身に話し掛け続けたのもあるが。　この小屋は遊び場で、簡易まじないが掛かっていた事もあり、被害を免れていたらしい。

寧ろ此処から出る為には霧を通らないといけない訳で、子供がアレに触れたら一瞬でゾンビ化だ。　かと言って残して原因解明に出掛けてかつての村人からの襲撃に遭わせる訳にもいかず。　クオルケが時々外に出て、ちまちまとゾンビを倒していたとか。

「ケーナが居れば色々戦法が取れるな。　この子をお前に任せた方が安全だし、その間俺達が原因を潰して来る」
「小屋ごと遮断結界で覆っちゃえば誰にも手が出せないと思うけど？」

入院していた中で子供相手に辛抱強く待って話す事が多かった為、ルカはケーナの服を掴みすっかり懐いた様子だ。　年はまだ十歳になったばかりらしいが、子供の少なかった村ではかなり物静かに育ったとか。　そんな子を寂しいまま放置はさせられないと、エクシズとクオルケは片っ端から叩き潰す方法を推奨した。
逆にケーナは後衛役もいたほうが良いと提案した。　エクシズのプレイヤーにしてみれば、かつてのメインがソレだった為に、戦闘補助がいるといないでは戦術に幅が増えるのは承知している。

「流石『気遣いの』タルタルソース。　自分達の行動が阻害されても子供優先ですか」
「ソース言うな。　こんな所にひとり残して行くなんて可哀想だろうが」
「誰も独りきりにするなんて言ってないけどね……」

アイテムボックスから青と赤のハンドベルを取り出したケーナは、両方を見詰めて思案した。　クオルケは見慣れないアイテムなので効果の程を知らないが、エクシズ（タルタロス）はかつてゲーム中にオプスと二人でそれを使用したケーナ達の騒動に巻き込まれた過去があるので、あからさまに嫌な顔になった。

「って言うか何で二個も持ってんだよ……」
「そりゃーそれだけ遊んでいたからねー」
「この廃人めが」
「褒め言葉ですよーだ」

「ゴメン、二人の会話がさっぱり分からない」

ゲームを始めてから然程経っていないクオルケには、超絶ギルドメンバー同士の会話にはついていけない。　蚊帳の外だったクオルケに詫びたケーナは、取り出したハンドベルについての解説を入れる。

「これはゲームで経過一万時間遊んでれば貰えるの」
「二個も持ってりゃ廃人認定だよな」
「さすがくりーむちーずメンバー……、予想の斜め上を行く廃人っぷり」
「効果は執事かメイドを呼び出して、千ギルで十日間ハンドベルで呼び出した人に仕えてくれるのよ。　レベルは呼んだ人の半分」
「なるほど、そいつを俺達に同行させようってつもりか？」
「ブブー、違いますぅ。　同行は私がするわ、この子の守りは任せるけど。　でもシィかロクスかどっちを呼ぼうかなー？」
「出来ればメイドじゃ無い方で頼む、あんなもんがリアルで出てきたらと思うと墳死する」

なにがあったのかとても拒否したい口調だ。　出来ればその問題なメイドがどういったものが好奇心が疼くクオルケだったが、状況にそんな暇は無いと自重する事に。

「でもお金取るんだ、千ギルってそこそこに微妙だな」
「うん、今のリアデイルで言い直すと銀貨千枚、すなわち金貨十枚だけどー」
「「高っっ！？」」

異口同音に揃って驚愕にひっくり返る二人。　逆に疑問顔になったケーナは聞き返した。

「あれ？　二人ともゲーム中のお金持って無いの？　一ギルが銀貨一枚なんだけど……」

ケーナが軽く説明すると息が合うのか揃って呆ける二人。　エクシズは拳を握り締め、牙を剥き出し歯軋りして唸る。　クオルケは頭を抱えて部屋の隅で小さくなってしまった。　二人の奇行に不安になったルカがケーナの背中にしがみつく。

「大丈夫よルカちゃん、二人は自業自得だから」

「……ん……」

「おのれええ、それさえ知っていればあの時にどうにかなったモノを……」

「……恥を忍んで酒場でウエイトレスしてた俺って……」

「本気で今まで何やってたのよ、貴方達……」

お金でよっぽどの損失でもあったのかと仮想敵に唸る竜人と、苦労してバイトしてたと言う事を伺わせるクオリケの反応に心底呆れるケーナ。　気にしなくて大丈夫かと気分を一心させ、青い方のハンドベルを軽く振った。

――――――　チリリ――ン……

余韻が倉庫内の空気に溶けていき、ケーナの立っていた場所の正面の空間が左右に開いた。　倉庫の壁に掛けられていた物品もろともＣＧ空間の平面図に縦線が走り両開きの扉がゆっくりと開くように、ギイイィと音が響きつつ白い空間が開いた扉の向こうに出現した。　軽いカツーンカツーンという足音が聞こえたと思ったら、白い空間から滲み出た人物がケーナ達の前に姿を現した。

黒い瞳に黒い髪に黒い猫耳、さっぱりとしたセミフォーマルスタイルの執事服をビシッと着こなした少年バトラーがそこに居た。背後に開いていた扉は何時の間にか跡形もなくなっている。　ケーナよりやや背の低い少年は数歩進み出て、彼女の前で恭しく頭を下げた。

「お久し振りにございます、御主人様。　御呼びによりロクシリウス参りました。　どうぞこの私めを存分に御使いください」

ケーナは背中でしがみついたまま目の前で起こった摩訶不思議な出来事を、硬直して見ていたルカに微笑み掛ける。　落ち着かせるように「大丈夫よ、この人はとても優しいから」と話しかけて緊張を解くと、手を取って猫耳執事に紹介した。

「ちょっと手が離せない用事があるから、この子、ルカの事をお願いできる？」
「畏まりましてございます」

ロクシリウスはルカの前に膝を突いて視線を合わせると、深々と頭を下げた。

「お初にお目にかかります、ルカ様。　ロクシリウスと申します、どうぞ宜しく御願い致します」

少女はケーナとロクシリウスを交互に見詰めて戸惑っていた。ケーナが背中をポンポンと落ち着かせるように軽くたたくと、ロクシリウスが差し出した白い手袋越しの手に自分の手をおずおずと重ねた。

「信用して頂き光栄です。　ルカ様」

にっこりと彼に微笑まれて頬を染めると、ぺこりと頭を下げた。
ルカは背後から頭を撫でられると不思議そうにケーナを見上げ、堪らなくなったケーナにギューッと抱き締められてじたばたと慌てている。

「じゃ、ロクス。　外が有害の霧だから遮断結界張っておくけど、済み次第解除するからそれまで宜しくお願い」
「はい、承りました。　このロクシリウス、命に代えましてもルカ様を御守り致します」
「ルカちゃん、ちょっとここでロクスとお留守番しててね？　なるべくすぐ終わらせるから」

ロクシリウスの腰部にしがみついたルカはケーナの言葉に悲しそうな顔をしながらも小さく頷いた。　気を取り直したケーナはルカに笑顔を見せると、神妙な顔で一連の事態を見物していたエクシズらを振り返った。

「んじゃまー、お掃除しましょうか！」
「なんと言うか……。　保母さんかお前は？」
「スッゴい手慣れてる感じだけど？」
「リアルの私は寝たきりで、相手にしてたのが老人や子供ばっかりだったからねー」
「そ、そうか……」

素直に自分の境遇、それも随分と悲観的なものをあっけらかんと語るケーナに気後れするものの納得するエクシズ。　ＩＮすれば常にゲーム内に居たので実際は引き篭もりニートとしか思ってなかったのだ。　認識的に間違ってはないが……。

地上に戻り、視界もロクに利かない霧の中で小屋自体にケーナが【遮断結界】を施していると、早速ゾンビ達がよたよたと迫って来た。　エクシズとクオルケによって危なげなく退けられ、ケーナが手を出す必要も無く。　物理防御は二人任せて申し分無いと考えたケーナはコマンド画面を展開し、最適魔法の選択に専念した。

エクシズの使う武器は大柄な竜人族の身長より更に長いハルバード。　斧と槍の複合した武器で若干斧部が大きめの、遠心力で叩き割る手合いのモノだ。　六百レベル竜人族のパワーから生み出された威力は【戦闘技能（ウェポンスキル）】に頼らずとも、振り回した衝撃だけで固まっていたゾンビ達を纏めて寸断した。

両手で武器を使い分けるタイプのクオルケは、中近距離の間合いを切り替えながら闘うテクニカルファイターだ。　左手のサーベルで接近戦をこなし、主に敵の攻撃を捌きつつ誘導しながら場所をエクシズに譲って、トドメは彼に任せる。　右手に持つチェーンウィップは【戦闘技能（ウェポンスキル）：旋輪斬（スライサー）】（中空から鞭の高速回転による風のリングを作り、射出して対象を切断する技）で霧の中を蠢く影をいち早く迎撃する。　ケーナが手を貸す間もなくあっさり駆逐され、動きを止めた端から塵に還るゾンビ達。

「連携プレーだねー」

「二人で組んで一年以上経つからな……ね」

最初に会った時はそれなりに様になっていた喋り方だったが、ケーナと相対した事によりペースを乱され、地が出た影響により言葉使いがぐだぐだになってしまったクオルケ。　エクシズは苦笑うしかない。

「それよりこの霧イベント、該当物件あったわ。　【能動技能（アクティブスキル）：増強】取得クエストよ。　ボス敵は幽霊船と海賊船長（テラースケルトン）」
「よく覚えて、るわね……」
「あははははー、それはまあ、無駄にやりこんでますから……」
「スキルマスターだしなー」

無論、無駄に蓄積データの多いキーからの情報なので、笑って誤魔化す。

油断無く周囲を伺う役はクオルケに任せ、エクシズは対処法をケーナと交わすべく振り返ってビキリと硬直した。　ケーナが全力戦を想定した装備に変えていたからであるが、彼女にとっては至って普通な装備であると思い直した。

「……おいおい、普段は温厚なお前がそこまでするってーのは珍しいな？」
「こっちは召喚獣が一人やられちゃってるのよ、鬱憤だって晴らしたくなるわ」
「納得した。　召喚獣さえも大事に使うお前だしな、そりゃ怒るわな。　ちなみに何をやられた？」
「……ケンタウロス、二百五十レベル」
「再召喚まで十日か」
「そうね」

召喚獣の撃墜は喪失にはならないが、再召喚までレベル×1時間経たないと再使用は出来ない。　高レベルになればなるほど使用制限が掛かる良い例だ。

それはともかくクオルケから見れば警戒中に後ろで呑気に会話をされてはかなわない。　対処を何とかしてほしいと振り返り、トラウマ的な光景にギクリと身を強張らせた。

「なっ……！　……き…ぎ……『銀環の魔女』おぉっ！？」
「あ、いけね」
「？」

ケーナ専用特殊兵装とも言うべき銀環を腰回りに浮遊させた姿、即ち彼女と相対した者は一部の例外を除いてこの姿にトラウマを持っていると言っても過言ではない。　びっくり仰天しているクオルケの内情が分からないケーナに、エクシズが補足説明をした。

「こいつ大惨事遭遇イベントに居合わせたらしいぜ」
「大惨事言うな」

それだけで当事者のケーナは納得した。　内心納得したくない事だがせざるを得ない。

ケーナの二つ名が広まった事件は三つ。　スキルマスター就任直後の三国間月例会戦と青国首都モンスター襲撃の突発イベントと茶国首都モンスター襲撃の突発イベントだ。　特に茶国のイベント直前にバージョンアップが有り、『範囲攻撃における建物へのダメージの適応』と言う試験的なモノが実施されてしまった事が主な原因だ。

イベント開始から僅か十数分で、茶国の首都は大空襲もかくやといった瓦礫の広がる焼け野原と化した。　ＮＰＣには適応されなかったものの、ＭＭＯリアデイル始まってゲーム史上における大惨事と言われ、語り継がれる事件である。　敵モンスターの被害もさることながら、直接的な原因は広範囲隕石爆撃による所が大きく、居合わせた参加プレイヤー達は街が天上から降り注ぐ岩塊によって瓦礫と化す様を戦慄を持って見届けた。

それから暫くはネット内に惨劇の画像が飛び交い、運営側は試験的なバージョンアップを見直して茶国首都を元に修復した。　しか

し、茶国首都は通称廃都と呼ばれる事が多くなったり、冒険者人口が激減したりした。　無論ケーナの二つ名『銀環の魔女』は悪名として轟き、彼女がそれから公式戦には全く顔を出さなくなったのは言うまでもない。

そう言った経緯を持つ装備なので、この場すら壊滅させるのではないかと疑心暗鬼になろうというものだ。　彼女にはそんな気はなく、聖属性魔法を範囲に拡大して霧を晴らそうとするだけの考えであった。

「眩しいのが来るぞ、目を瞑れ」
「ええっ！？」
【魔法技能（マジックスキル）：極大聖光滅（シャイン・テラ・バル）】

エクシズからクオルケへの忠告に間髪入れずケーナの聖属性高位魔法が炸裂した。　銀環によって【増幅】と【拡大化】の付加された浄化光が瞬く間に霧を退け、不浄（ゾンビ）な者を飲み込んだ端から消滅させた。

霧の結界を越えて溢れ出した光は、波打ち際に密かに停泊していた発生源である幽霊船をも飲み込み。　海賊頭の高位テラースケルトンから船員の雑魚スケルトンまでをあっさりと浄化消滅させ、おどろおどろしい幽霊船すらも聖光で焼き尽くし塵に変え消し飛ばした。

対象は不浄なモノにしか作用しない魔法の為、村自体の家屋は無事である。　唐突に光が治まった後には人の気配を失い寂しそうな佇まいを見せる村。　あちこちに樽や桶が転がり腐食しかけてボロボロになった網がただ風に吹かれ、つい最近まで人が住んでいたと言う形跡を残すのみであった。

念の為周辺を警戒し、風精霊と光精霊を二体づつ喚び出して付近

の探索をしてもらう。　西の空が赤くなってきていたのでエクシズと相談し、この場で野宿する事に。　もしもの事を考えて、その辺の家に遮断結界を張って寝泊まりする予定だ。

「あとはルカちゃんどうしようか？」
「本人の意志次第では此処に残るかもな……」
「子供一人だけで危なくね……ない？」

ケーナの呟きにエクシズは達観したように、クオルケは心配そうに心証を口にする。　ケーナが小屋に掛かっていた【遮断結界】を解除すると直ぐに扉が開き、そこにはルカを連れたロクシリウスが立っていた。　「お疲れ様です」と礼をする猫耳執事と繋いでいた手を振り払った少女は人気（ひとけ）の無くなった村を見回すと、涙目で一軒の家に走って行った。

「っ……お、かあさんっ……！」

微かに聞こえた必死な声にエクシズ等は悲痛な視線で見送る。
ロクシリウスの視線に首を振って返したケーナは、ルカの後を追ってその家に歩み寄った。
ケーナより離れたロクシリウスは近場の家から薪を失敬すると、炊事場を借りて夕食の準備に取り掛かった。

28話　関係を強化しよう

薄ぼんやりした視界。
焦げた鉄サビの匂いに混じって肉や髪、何かが焼ける臭気。
霞のような雲が広がる青空。

身動きの出来ない体に覆い被さるついさっきまで両親であったモノ。
声が枯れるまで、脱水症状を起こして気が遠くなるまで泣きながら両親の名を呼び続け……。

気がついたら病院だった。
自分の顔を覗き込んでいたのは、涙目の従姉妹で。

「おとうさんっ……、お母、さんっ！」

家の中から聞こえて来るのは、扉という扉を開けたり閉めたりする騒々しい音と。
あの時の自分と重なる必死な呼びかけ。

唐突に音が止み、すすり泣く声が聞こえてきたのを見計らい家の中へ足を踏み入れた。

家族三人で毎日の語らいの場となっていたであろう食卓。その椅子のひとつに縋り付いた少女は体を震わせながら大粒の涙をこぼしていた。ケーナの足音に気付いてはっと顔を上げるものの、求めている人物と違う事に気付き再び悲しみを吐き出す。

このままではかつての自分と同じになる事は目に見えていた。傍でずっと励ましていてくれた存在の心にも気付かず、固く心を閉ざしてた数年前の自分に。全てを失ったと思っているしかなかった弱い自分に。だから、この子にも教えてあげようと思った。

”私”が傍に居てあげると。

押し付けようとは思わない、強引に振り向かせようなんて事はしない。ただ誰かが傍に居てくれるという事がどんなに得がたい時間だったか。過去の従姉妹に感謝し、その恩を今度はこの子に返すのだ。

ケーナはルカの傍にしゃがみ、ゆっくりと軽く触れるくらいで彼女の背を撫でる。

落ち着くまでずっと、少女が安心出来るようになるまで。

「この子は私が引き受けるわ」

「そうか……」

泣き疲れて眠ってしまったルカを抱いて、野営場所にケーナが戻ってきた時にはエクシズとクオルケは既に食事を終えた後だった。
残り物をロクシリウスに再度温めてもらい、膝の上に毛布をかけたルカを寝かしたまま静かに食事を取るケーナ。
夕食のメニューは野菜と肉を煮込んだスープとやや固い保存食用のパン、材料は前もってケーナからロクシリウスに渡してあった物を使用した。　各家の貯蔵庫に使えそうな物はあったが、衛生やら安全を考えて使わなかった。

村の広場らしき所に円陣を組んで座り、中央には焚き火が赤々と燃えている。
ケーナは影を作るようにしてルカに光が当たらないようにしていた。　ロクシリウスはケーナの背後に立ったまま控えている。

何度か座るように言ったのだが、聞き入れてくれないので諦めた。

調べた所、村を囲むように張られている魔物避けのまじないは効果を消滅させており、万が一大型の魔物が現れた場合を想定したエクシズが外での野営を提案した。　まだこの世界での野営経験が浅いケーナは素直にそれに従った、と言う訳だ。

ケーナが食事を終えてからは、多少抑えた音量で改めて現状報告を話し合った。
まずはケーナの事情。　病院から今に至るまでをざっと話すと、二人とも他にプレイヤーが現存している事に驚いていた。　コーラルはフェルスケイロからオウタロクエスまでが活動範囲であった為、ヘルシュペルを中心に活動していた二人とは会う確率が低いだろう。
シャイニングセイバーは騎士団に入っているので論外だ。

二人がこの世界に居た経緯というのはほぼコーラル達と同じであ

った。　最終日に時間いっぱいまで遊び倒していて、切断されたと思われる真っ暗な空間を経由したらこの世界の何処かに立っていた、と。　シャイニングセイバー達のように同じギルドだったと言う事もないが、丁度その最後の時にパーティを組んでいたという共通点だったという理由らしい。

「その割には六人じゃなくて二人なのね？」

「法則性なんて知るか……知らないよ」

　クオルケにとっては正体はバレているが、今後付き合っていくのはケーナだけでは無いので、言葉使いを戻すのに余念が無い。　笑ってしまうと失礼になるので、ケーナは彼女の矛盾に突っ込むのは止めた。

「さて、じゃあ報酬の話でもしようか？」

　改めて話の方向を変えたケーナに、エクシズとクオルケは重大な問題に気付いた。　結果的にこの件を解決したのはケーナになるからだ。　被害は甚大であるが。　しかし、顔色を変えた二人にケーナは苦笑してパタパタと手を振った。

「あ、そっちの依頼を横取りするつもりは無いよ？　私の目的は竜宮城に行く事だし。　私が言いたいのは二人ともイベントクリアした事になるから、【能動技能（アクティブスキル）：増強】をスキルマスターとして発行するけど。　要る？　要らない？」

「その【増強】の効果は？」

「能力値のひとつを二割から三割程度アップするの、使い方に慣れてくるとふたつみっつ同時に行使出来るけど、効果が切れた後少々ダルくなるね」

ゲーム中は疲労感なんて数値が無かったので、実際に使ってみたケーナは効果の切れた後、倦怠感に包まれた。　体感したのは例の頭目退治の時、長期戦に使用すれば不利になると悟る事が出来ただけ、使った甲斐があったと言うべきだろう。

メリットデメリットを考慮して思案するクオルケ。　エクシズは少し考えてから別の物に変えられないか？　と提案した。

「うん、エクシズは持ってるのね。　別に大丈夫よ、どうぞ好きな物を頼んで。　但し前提条件を満たして無いと貰っても覚えられない物があるよ？」

「それは判っている。　俺が欲しいのは【ＭＰ転換】だ、あるか？」

「スキルマスターに愚問よそれは。　しっかし、また随分とマニアックなスキルを所望するね……」

「魔法よりは殴ったほうが早いからな」

【特殊技能（エクストラスキル）：ＭＰ転換】は戦士系を選択したプレイヤーが良く消費するスキルだ。　効果は一回の使用に対しＭＰ五点を能力値一点分に転換する、すなわちレベルアップ以外で能力値を上昇させる唯一のスキルである。　種族ごとに最大値の決まっている能力値をブレイクするにはこういったスキルで上昇を図るしかない。　竜人族（ドラゴイド）はリアデイルと言うゲーム内で一番ＭＰ所有量が低い種族だが、それでもゼロと言う訳ではなかった。　そもそも知力（ＩＮＴ）が低いので自分に掛ける補助魔法以外であれば、敵に作用する攻撃魔法を使うよりはぶん殴った方が遥かに高いダメージを期待できる。

このスキルだけは何回も習得可能なので、クエスト限界に掛かる制限は無い。　手早く【スクロール作成】で作り出した巻物をケーナから受け取ったエクシズは、ＭＰ五点を筋力（ＳＴＲ）に変換した。

「クオルケさんは決まりました？」

「うーん、別なものにしろと言われても、スキルを全部把握してる訳じゃないから……ね。　何があるのかさっぱり分からない」
「クオルケさんの攻撃パターンだったら攻撃速度が上がる【戦闘加速】か、当たり難くする為の【幻像（ミラージュ）】と言ったところでしょうか？　後者は別パターンで動かす分身を二つ作って相手を撹乱するんですけど……」
「じゃあ、【戦闘加速】で貰っとく……貰っておくわ。　魔法だよね、これ？」
「とりあえず単体補助ですね。　【戦闘加速？】がパーティに掛けるものですけど、これはまた別に試練を受けてください」

　ケーナの作り出したスクロールを受け取るクオルケ、試練の言葉にエクシズがウンザリした感じで肩を落とす。

「お前の塔か、他よりはまだマシなんだろうけど……。　今は何処だ？」
「フェルスケイロの北東だけど、今は他の塔も私が管理してるからフェルスケイロの闘技場かヘルシュペルの三日月の城でもいいよ。　あ、でも三日月の城はオプスのだからオススメしない」
「うげ、あれはオプスのだったのか……。　しかしお前が管理している？」

　かくかくしかじかとケーナはスキルマスター管理十三塔の現状を語って聞かせた。　勿論、発見した情報だけでもスキル交換に応じることも含めてだ。　この内容をクオルケは興味深そうに聞いていた。　なんでも周囲にゲーム仲間が居ない環境で、もっぱらゲーム情報はＩＮした後に出会うプレイヤーしか頼れなかったそうだ。
　この二年間はもっぱらエクシズが基本的な事項を教えていたらしいが、生憎と自分達が生き抜くことが最優先事項でゲームのコアな部分までは手が回らなかった、と。

「ご主人様、これを」

身振り手振りで説明していると、背後に控えていたロクシリウスが毛布を差し出した。　そこに至ってからつい声が普段の音量に戻っていた事に気付く。　視線を自分の腰の当たりに向けると、とろんとした瞳のルカと目が合った。

「……ん、ぅ……？」

「あっちゃー……。　起こしちゃったか」

額に手を当てて失敗したと嘆くケーナ。　次第に焦点の合ってきた目を見開くとガバッと体を起こすが、ふらふらと危なっかしく再びケーナにもたれ掛かる。　毛布を掛けてから優しくルカを抱き起こしたケーナは自分の腿の上に座らせ、「大丈夫？」とだけ聞いた。

「……ん……」

視線を下げるだけの返事をした少女は、焚き火と向かい合って座るエクシズとクオルケに気だるげな視線を向けた。　どうやって接したらいいのか分からないクオルケは、申し訳なさそうな表情を向けようとしてパカンとエクシズにはたかれる。

「馬鹿かお前は、子供に沈んだ顔を見せるな」

「いってえなっ！　いきなり叩くこたーねーだろーがっ！」

「クオルケさん、言葉遣い言葉遣い……」

「っとと……、い、いきなりはたくなんて、ひ……酷いですわよ？」

「「ぷっ」」

「……おい……」

ロクシリウスは【保温】の掛かっていた小さめの薬缶から、温いミルクを木のコップに注いでルカに渡した。
ルカのぼんやりとした視線が、焚き火に照らされた静かな村を見渡す。　現状を再認識した瞳が濁るのを見ていたケーナは、いたたまれなくなって少女を抱きしめた。
エクシズが立ち上がり、ケーナの腕の中で戸惑っているルカに近付いた。

「ルカ」
「……ぅ」

視線を合わせた灰色竜人に頷くように、尻すぼみな返事を返す。

「ケーナがお前を引き取ってくれるそうだが、お前はどうしたい？　独りで村に残るか？」

少しの間を置いた少女はゆっくりと首を横に振った。　もうこれくらいの年にもなれば、親の居ない子供は自力で生き抜くか野垂れ死ぬしか道はないと自然に理解していた。
ここが大都市の街中であれば泥水を啜っても生き抜く道はあったのかもしれないが、一歩外へ出れば魔物に襲われても文句は言えない無法地帯だ。　しかもこの村には最早、魔物の進入を拒む壁も無い。
背後のケーナにもぞもぞと振り返ったルカは、宜しくお願いしますとでも言うようにペコリと頭を下げた。

「よしよし、今すぐにとは言わないけど家族になろうね、ルカちゃん。　フェルスケイロに帰ったら息子二人と娘が居るし、ヘルシュペルにも孫が二人居るんだよ～。　機会があったら紹介して上げるね」

「……ん」

無表情でコクンと頷くルカはともかくとして、焚き火の対面に戻ったエクシズはだらだらと脂汗を流して硬直していた。クオルケが無言になった相方を見て不思議そうな顔をする。

「どうしたのさ？　エクシズ、顔色が悪いよ？」

「こ、子供が三人に孫が二人だとっ！！　お前何時からそんなふしだらな女になりやがったっ！？」

【封印（シールディング・コフィン）：凍結】

今までの報告を全然聞いていなかった発言で、とんでもない事を口走ったエクシズは胡坐を掻いたままの姿勢から、ケーナの【圧縮（ショート）呪文（カットキー）】により一瞬で氷漬けになった。口は災いの元を実現したような相棒の末路に、クオルケもそれ以上の発言を口元を引くつかせて控える。

ルカはロクシリウスがそんな光景を見せないように影になり、残っていたスープをパンに浸してもそもそと食べていた。

――――翌朝

朝になってようやく封印を解除して貰ったエクシズは、体中の骨

を鳴らしながら溜息をついた。

「くそうケーナの奴め……」

「た、大変だったね、エクシズ……。　そ、そのおかしいところは無い？」

「ああ、平気だ。　まったくケーナの奴は照れ隠しに直ぐ人に向けて魔法をぶっ放しやがる……。　前職なら幾らか耐えられたが、こっちのアバターだと魔法には弱いな」

「げ、ゲーム中も日常茶飯時だったんだ……。　す、すごいギルドだね」

ちなみに夜番は不眠不休で動く事が前提のロクシリウスと、ケーナの召喚した”夜の狩人（ナイトストリクス）”（全高二ｍの真っ黒い梟、三百レベル）が担当した。　魔法効果のため気絶状態になったエクシズ以外は爆睡だ。

朝食が済んだら早速潜ると言うケーナに、エクシズは残ってルカの護衛を買って出た。

……が、ただの調査依頼が、漁村が二つも滅ぶと言う最悪の結末になった事件を、早めにそれなりの所へ報告すべきだ。　と主張するクオルケとで意見が分かれた。

二人で言い争いになりかけた所へケーナが割って入り、「こっちが終わり次第、魔法で王都まで送る」と言う事で話がついた。

改めて懐に入れた雛鳥の過保護っぷりに呆れるばかりである。

「たしかにお前の魔法か召喚獣ならば硬い早い強いと多目的だが。……なんでそれなんだ？」

波打ち際をほぼ占領し、長くて蒼くてでっかい生物が横たわって

いた。　ロクシリウスの背後に身を寄せたルカも初めて見るその巨大な威厳ある姿に、目を見開いてビックリしている。
　まだリアデイルゲームシステム若葉マークなクオルケもパカッと口を開けて呆けたままだし。　動じてないのはエクシズとロクシリウスだけだ。
　ケーナの背後に控えるは全長四十ｍはある蒼い竜。　つい先程【召喚魔法：竜】最大レベルで呼び出した兵（つわもの）である。　リアデイルの蒼竜は長い太めの流線型で翼を持たない水陸両用型だ。　代わりに頭頂部から尻尾の先まで生えたカジキマグロのようなドデカい背ビレが、ソレの特性を示していた。　鼻筋から瞼の上に抜ける角は短く、四肢はがっしりとして指の間に水掻きの膜を持つ。

「ぶっちゃけ泳げないからね私は。　つまり水中で動けないから、代用して泳いでいくものに捕まって行こうかと思って」

　胸を張るケーナのコバンザメ泳法に、頭を抱えるクオルケと彼女の肩を無言でポンと叩くエクシズ。　気にしたら負けだと言う笑顔で首を横に振った。　くりーむちーずではタルタロスは比較的常識人だった為、他のメンバーの無茶振りに良くつき合わされて処世術を学んだ。　即ち、いい笑顔でスルーすればいいと。

　ルカの頭を撫でてから蒼竜の角に掴まったケーナが水中へ没するのを見届けたエクシズは、クオルケへ声を掛けた。

「なあ、あの幽霊船ってどっから現れたんだと思う？」
「……？　スキル取得イベントからじゃないの？」

　至極当たり前な答えが返って来た。　それがＭＭＯのゲーム中の

話であればだ。

「そのスキル取得イベントを起こす為のＮＰＣすらいない状態でか？　ゲーム中のイベントでは村を二つも滅ぼす、だなんて話ではなかったと思う。　それならあいつは何処から沸いてきた？　交易航路に海賊が沸くと言うレアイベントならあったが、幽霊船イベントはクエストにしか存在しなかったはずだ」

「そう言われるとこの世界の人達って押し並べてレベル低いな……よね？　フィールドに存在するモンスターの数がゲームより遥かに少ない、し。　エリアの一角だけでも見渡せば何かしら動き回っていたはずだけど、ここはそんなことない、な」

ゲーム人口のプレイヤーレベル平均を見た場合、大体が四百～六百程度であった。　九百レベルを越える者ならプレイヤー全体の五パーセントにも満たない。　すなわち大抵のエリアを行き来するだけであれば、最大六百レベルもあれば事足りる。　やり込みを求めるのなら熟練エリアと呼称される天界魔界マップへ赴き、限界まで上げるのが通例で。　もうそこまで行くとすれば廃人決定だ。

過酷な部分は過酷を増すゲームであったリアデイルだが、仲間とわいわい楽しんで騒げる要素も盛り沢山であった。　それはクエストイベントにも反映されていて、今回のように村が二つも滅ぼされる後味の悪いイベントなど、タルタロスをレベル上げしていた時ですら稀だ。　本来の幽霊船イベントですら四百レベルが二人も居れば事足りるはずだったらしい、ケーナの言葉によると。

「これは報告に混ぜるべきか？」

「二百年前の人の言葉を信じてくれるならば、になるねぇ？」

クオルケが【種族：人】なだけに説得力が無い話ではある。　どうやって二百年生き延びたのか？　とか聞かれたら答える術が無い。

【水中呼吸】と【水中行動】の魔法で身体強化をしたケーナは蒼竜の角に掴まったまま、水中を深く深く潜っていた。　ゲームの場合であれば【水中呼吸】が無ければ徐々にＨＰが減っていくペナルティが付くが、これが現実なケーナには無ければ即死に繋がる。

【水中行動】は水中でも陸上と同じ様に動ける補助魔法で、コレが無いとステータスは軒並み半分に落ち、戦闘行動のダメージは普段の十分の一以下になってしまう。

ケーナの装備はいつものままだが服が肌に張り付いて些か動きづらい。　イベントで配られた水着とかあった記憶もあるけれど、彼女にとって水中は未知の領域だ。　装備は充実してた方がいい。

同時に興味を引くエリアでもある。　さっきから視界の端を地球産の魚とは言い難いモノが横切ったりするが、蒼竜の威圧感によって殆どの魚が近寄って来ない。　ケーナ自身も流石にキョロキョロしている暇が無かった。

村で竜宮城の位置情報が得られなかった事もあり、【暗視】と【鷹目】も併用して守護者の指輪を使っての位置探しに集中していた。

時折蒼竜に止まって貰い、指輪をあちこちに向けてぼんやりとピンク色に染まる方向を特定する。

数回に亘る原始的な探索の末、反応があったのは水深百mにもなった頃だった。　周囲の光源が濃い緑色っぽくなったサンゴ礁に囲まれた平地に、その竜宮城はででーんと陣取っていた。　外観的には何処かの観光地に建っていそうな目を引く建築物で、大きさだけで言うのならばフェルスケイロの王城にも匹敵する。

周囲に生えたサンゴ礁に砂などを撒き上げながら着地した蒼竜。　傷すら付かないところを見るとコレも竜宮城施設の一部なのだろう。　蒼竜に暫くここで待つように命令すると、ピンク光を放つ守護者の指輪を掲げたケーナは、例の合い言葉を高らかに言い放った。

【乱世を守護する者よ、堕落した世界を混沌より救済せしめ給え！】

ぐにゃりと歪んだ視界が水の渦を通過、程なくして広々とした空間に投げ出されたケーナは着地した場所の不安定さに、たたらを踏んだ。　赤い中華風の室内には水が張られ、要するに池状態であった。　そこにはびっしりと人が乗れる丸い蓮の葉が無数に浮かんでいた。　彼女が着地したのはその中の一枚である。

見渡すと中央に人の頭ほどもある蕾が突き出ていて、おそらくソレがこの塔の核だろうと当たりをつけたケーナはＭＰを半分ほど注ぎ込んでみた。　しばらく待っていると花弁がゆるゆると開き、薄いピンクの大輪の蓮の華が咲く。

「はー、これでやっと三つ目か……。　先は遠いなあ」

こんなことになるのだったら、過去にスキルマスター全員の塔場所を聞いておけば良かったと後悔するケーナ。　流石に今になっては後の祭りだ。　少なくとも空にひとつ、未踏破地帯にひとつ存在するくらいしか知らないのは問題がありまくりである。

そんなことを考えていたら背後で水音がして、鈴を転がすような

可愛らしい声を掛けられた。

「あのぅ、お客様ですかぁ～？」

「ああ、ここの守護……しゃっ！？」

ついうっかりルカの事もあって、ここのスキルマスターの趣味を忘れて振り返ったケーナは、背後に鎮座している者の容姿に呑まれかけた。

突き出された口、光沢から言ってぬるぬるしているだろう。たぶん。

口より後方に左右に離れた瞳。黒と金が混じり合い此方をキヌロと凝視している。

すらりとしているよりはデップリとしたボディ。ぬめっている。

顎の下に揃えられた前足。そこより左右に広がる折り畳まれた後ろ足。

目と目の間にちょこんと乗った王冠、おもちゃのようだ。

全体色は原色ピンク、とても目に痛い。むしろ容姿が直視ししたくない。

悲鳴を上げかけた意識諸共ゴクリと飲み込んだケーナは、内心自分に言い聞かせた。「これは敵じゃない、むしろ味方」と。はっきり言って予備知識が無ければ、初見で大火力魔法を使って吹き飛ばしていただろう。守護者がソレで吹き飛ぶ事は無い、と言う確信もあるけれど……。

ここの守護者は目線がケーナと同じ高さのどピンクのアマガエルであった。直視しないように視線を逸らしたケーナは、震える声でいつものように対応した。

「あ、アナタがここの守護者？」
「あ、はいぃ～。　スキルマスタァＮＯ．６の守護者ですぅ～」
「そ、そう……。　私はスキルマスターＮＯ．３、ケーナよ。　余計なお世話かもしれないけど、塔を起動させるために来たわ。　アナタの本来のマスターじゃなくて悪いけど、我慢して頂戴？」
「いいえ～、ウチのマスタァはぁ、もう来る事が無いとぉ～、思っていましたからぁ～。　これからは、アナタがぁ私のマスタァでよろしいでしょうかぁ～」

この反応を見るにリオテークもこの守護者に、二度と訪れる事は無い。　と、告げていたとみえる。　話がややこしくなる前にあちらから此方の真意を読み取ってくれたのは、手間が省けていい感じだ。　少々喋るのがおっそい所が良く分からないが、リオテークも似たような喋り方をしていたので、趣味なのだろうかと一人ごちる。

何も言わずに口をあんぐりと開けて、――人が一人すっぽりと呑み込めそうだ――　にゅろんと伸ばした舌の先に守護者の指輪があった。　流石にぐぬんぐぬんのぬめぬめに一歩後退するケーナだったが、意を決して拾い上げる。　見た目に反してベタベタしていることも無くホッと安堵した。

「ありがとう、ありがたく受け取るわ。　詳しい事は塔の交感機能でウチの壁画に聞いて頂戴」
「わかりましたぁ～」

その後はポーションで回復させたＭＰを限界まで核に注ぎ込んでから、塔を後にした。
尚、外に出して貰った先が水上だった為、蒼竜が此方の位置を特定して上がってくるまで、波間にぷかぷかとただクラゲのように浮いていたのは秘密である。

幕間2　国家の対応

用を終えて陸地に戻ったケーナに泣きそうな顔をしたルカが真っ先に飛びつこうとした。

一時的にその突進を止めたロクシリウスに視線だけで礼を述べたケーナは、自分に【乾燥】と【清浄】の魔法を掛ける。ルカまで濡れる事のないようにと、衣服を乾かすためだ。そうしてから改めてルカを抱きしめる。

後は忘れる前に蒼竜の召喚解除もしておく。ひと声グオゥと吠えた蒼竜は、ニヤリと笑うとその姿を水と化して崩れ去った。

「ただいま、ルカ。ロクスもありがとう」
「いえ、自分の務めですから」
「……おか、えり」

それだけで一家族の光景に見える三人の様相に、エクシズとクオルケは苦笑いをしながら近付いた。

「心配するこたぁなかったようだな。竜宮城はどうだった、鯛やヒラメが舞踊っていたか？」
「……原色ピンクのカエルでよければ……」
「なにそれ……？」

やや表情を青褪めながらぼそっと呟くケーナに、クオルケは不思議そうな顔をした。

「に、してもそんな魔法もあったんだねえ。　そっちにしておけば色々と便利そうだったかな」

「その反応を見る限り、オフラインクエストはやって無いんですね？」

簡単にオフラインで得られるスキルを説明すると、クオルケは明後日の方向に目を向けて乾いた笑いを上げた。　どうやら、オフラインの存在に気が付いていなかったらしい。　同ギルド員は初心者に何を説明していたのかと、ケーナは呆れた。

両方とも砦を作るまでに得られるスキルは、生活に根付いたものが多いからだ。　実ゲーム中だと何の役にも立たないが。

「なんにしても二人ともありがとう」

「いや、特にはコレと言って何にもなかったからな。　お嬢ちゃんも大人しかったし」

待っている間、ロクシリウスに手伝って貰って身の回りの物を簡単に纏めていた。　着替えが数える程と両親の形見。　母親の使っていたエプロンと、父親が身につけていた腕輪くらいなものしかないが。

後、クオルケがどうしてもと主張するので、墓とも言えばいいのだろうか？　村のはずれ、小屋がある辺りに石を積み上げて集団墓標が出来ていた。

ソレに黙祷を捧げお参りを済ませたケーナは、エクシズらと相互名簿登録をしてその場は別れる事にした。

「んじゃ、送るよー」
「お前等はどーすんだ？」
「適当に行くよ。　ルカがいるから【転移】は使えないけど、どーせ三日程度の道程だし」
「もしかしたらお前の名前も説明時に出すかもしれないぞ、いいな？」
「構わないけど、フェルスケイロで私の名前使う時はちょっと注意してね」
「は？」

使用するのは【転移】の他人のみに効果のある【転送】だ。　当人の意思を無視して他人を別の場所に吹っ飛ばせる魔法なので、狩り場を独占したい者が入ってきた邪魔者を排除するために使う。但し、当人の意思を無視する場合は、行使する者が行使される者よりレベルが上の場合に限る。　それ以外は行使される者の同意が必要なため、暴挙に出る者は少ない。

二人の足元から闇色のカーテンが噴き上がり、二人の姿を覆い尽くす。　ルカに軽く手を振ったクオルケ共々、エクシズの姿はその場から忽然と消え去った。　多少残念な顔をしたルカの頭を撫でたケーナ。　しゃがんで視線を合わせると、元気付けるようににっこりと微笑んで見せた。

「よし、じゃあルカも私と行こう。　生きていればまたエクシズ達と会えるからね？」

頬を染めたルカはコクンと小さく頷いて、自分からおずおずとケーナの手を取った。　微笑ましい光景にロクシリウスの口元も自然と緩む。　そうして歩き出した二人の後を一歩空けて追従していく。

街道の途中でルカを気遣ったケーナが召喚獣で八脚馬（スレイプニール）を喚び出し、フェルスケイロに到着するのは翌日になった。　そこで先に送った二人と会ってしまうのはご愛嬌と言えよう。

――――――――

オウタロクエス

かつては国の半分が砂漠地帯だった、とは思えないほど国中が密林に覆われている国である。

王城はかつてこの地で栄華を誇ったギルドが造り上げた城。　基部は森に埋没していて、表面は緑に覆われている。　巨木に埋没しているとも、共生しているとも取れる外観を持つ。　城内にも蔦や枝葉が侵入しているが、そこに住む者達は不便を感じていない。この自然が国独自の魔法技術と融合した結果、植物が危険を排除する兵士になっているからだ。

城下町と言えるモノは全て樹上に広がり、釣り橋で縦横無尽に繋がっていた。　民は木の幹や枝に住居を構え、地上に住むのはドワーフの職人を除けばホンの一部である。　樹上生活者だけがエルフで占められている訳では無く、人族もいれば風変わりなドワーフ族も居る、猫人族（ワーキャット）も竜人族（ドラゴイド）も他の街と変わり無く存在していた。

その王城の玉座の間。
オウタロクエスを二百年に渡り維持し続けてきた女王サハラシェードを筆頭に、政治に関わる者がその場に勢ぞろいして居た。　隠者の持ち帰った情報を吟味するためと、この国が大陸で請け負った役目を果たすために。

拝謁しているのはケーナと連絡を取る為に二国へ放たれていた隠者、クロフを含む三名。　それぞれフェルスケイロ王都とヘルシュペル王都と辺境の村へ向かい、何処かで出会った者が彼女と交渉を行う役目に当たっていた。
クロフが持ち帰った彼女の返答は「否」。　この一言に尽きる。

腰まである黒髪に前髪の一部だけ青い部分を弄りつつ、サハラシェードは「そっかー……」とクロフの報告に気の抜けた返事を返した。　ケーナと違い、大人の女性の魅力に溢れる女王の仕草には万人が惹かれるものがあった。

女王は兎も角、臣下の者達はケーナを名前だけで判断するのは性急だと考えている者が多い。　但し短命種に限る。
騎士団長を務めるのは三百歳を越える魔人族の若者。　彼は二百年前に超越者と呼ばれる身内が、たった一人で成し遂げた偉業を目にした事がある。　前衛戦士であったその人物は、敵対砦を剣技の一撃で両断したのだ。　それと同等の術者であれば女王の言った事柄も頷ける。
宰相を務める老齢のドワーフも長い生の中で、たった二人の超越者が平原いっぱいに広がる魔物の群れを、一瞬で駆逐した光景を見た記憶があるだけに、反論はしない。

「女王の身内びいきだけで、得体の知れ無い冒険者ふぜいを王宮に招くとは感心しませんな。　そういった相談事は、事前に我々を通して頂きませんと」

「そうですな、実力の伴わない者を国に召し上げても利益になると考えられませんからな」

文官長の中でも公爵や伯爵家出身の者達が、口さがない言葉を吐く。　女王は完全に相手にしない方向でスルー、騎士団長は小馬鹿にした目で彼等を見ていたクロフに、目線だけで頷いた。

「心配せずとも、実力は測らせて貰いました。　私の妹が手も足も出ない無敵っぷり、感服致しました」

部屋の警備に当たっている騎士や兵士から「お～」や「馬鹿な……」等の感嘆の声が上がった。　多少高飛車で毒舌なクロフィアだが、騎士団の中でもその実力は評価されている。　クロフィアぐらい将来有望株な人物さえ手も足も出ないとは、どれだけ規格外な者なのか？　と、戦いに身を置く者達からは興味深々な視線が飛ぶ。

逆に国内でも強者にカテゴライズされているクロフの自信満々反面、自分でも決して手が出せないとも取れる発言に、嫌味を口にした文官達は口ごもって身を縮めた。

臣下のやり取りをひと通り眺めていた女王は、だらけきった姿勢のまま足を組み変える。　とても王族が臣下の前でするような態度では無いが、独裁者だった場合であれば問題はなさそうだ。　それでも宰相や騎士団長は特にたしなめる事もせず、表情を引き締めた。

「まあ、予想通りな結果が得られて嬉しいわ。　ご苦労様」

「ハ、ありがとうございます。　それでは御前失礼致します」

自分達の役目は済んだと一礼をし、クロフ達は退出して行った。
行き違いに入室して来たのは、赤銅色のローブを着込んだ一団だった。　先頭のエルフはこの国の魔法師団長を務める者で、後ろに人族の部下を二人連れていた。
三人は玉座の遥か手前で膝を突き、女王に頭を下げる。　サハラシェードが大仰に頷くと師団長だけが立ち上がり、携えていた巻物を広げた。

「例の観測結果、出揃いまして御座います」
「申せ」

何故かこの一瞬にだけ玉座の間は静まり返った。　ひそひそと会話をしていた文官達も、この報告は聞き漏らすまいと傾聴する。

「結論から申しますと、前回の計測に比べてだいぶ綻びて来ていると予想されます」
「……そう、」

感情の削げ落ちた表情で女王はそれだけを搾り出した。　両脇に控える宰相と騎士団長も血の気が引いた顔で、ゴクリと唾を呑み込む。

かつて茶の国ヘジンギウムと呼ばれる国土があった。
二百年前にそこは今の世の者達には預かり知らぬ事情で廃都、と呼ばれるようになり。　二百年前の三国成立の時分には神の手によって、今後の世界の在り方に不必要な有害となるモノが押し込まれた。　神はその廃都を中心に周囲を堅固な結界で覆った。　……と、伝承は伝えられている。　実際、サハラシェードもその場に立ち合っていた筈だったが、その時の記憶は失われている。　当時、ヘル

シュペルとフェルスケイロの初代国王にも確認してみたが、彼等も同様にだ。

覆ってはくれたのだが、二百年もの歳月が流れて問題が生じた。

オウタロクエスはその廃都と呼ばれる地域の監視を役目としていたが、ここ数年の観測で結界に綻びが生じている事が判明したのだ。

神の御力が二百年しか保たない事に疑問を投げ掛けるべきか、それとも中に封じられた存在の強大さに戦慄を覚えるべきか……。

「どちらにしろ他国にも協力を呼びかけるべきよね……」

「仕方ありませんな。中に封じられたモノは、見た目矮小でも恐るべき実力を持っていますからな」

宰相のドワーフが力強く頷く。不甲斐ないと笑われようとも、中から漏れ出した魔物に騎士団が壊滅状態寸前まで追い込まれるという前例があった。付近を通り掛かって助太刀してくれた冒険者がいなければ、死人が出ていただろう。その相手がたった六匹のゴブリンだったとしてもだ。

フェルスケイロにしても問題の廃都とは隣接しているので、他人事にはならないだろう。問題は直接の関係が無いヘルシュペルだ。

建国当時と違い、王家に比べ商人連合の発言力が強いとされている為、協力を取り付けるのは容易ではない。

宰相と女王が各国に回す書類の文面であーでもないこーでもないと相談しているのを後に回させると、騎士団長は魔法師団長に別の懸念事項にあったものを尋ねた。

「例の……、海側から流失したという魔物の船はその後？」

「ああ、例の奴か。此方の隠者で追跡をかけていたのだが、フェルスケイロの領地にある漁村を二つ壊滅させた後、その場で冒険者によって討伐されたらしい。その中には女王の伯母上殿も混じっていたそうだ」

「まあ、ケーナ伯母上の手を煩わせてしまうなんて……。　先にフェルスケイロにも警告の文面を出していた筈よね？」

　対応出来る余地はあったはずだと女王達は予測していた。　折りしも同タイミングで、フェルスケイロとヘルシュペルの騎士団は共同で盗賊団の討伐に当たっていた。　文書が届けられたのが騎士団が城を出た後だったので、国としても身動きが取れなかった、というのがオウタロクエスの見解ではある。

「あとその場の隠者からの情報で、女王の伯母上殿は『守護者の塔』と言うものを目覚めさせる使命があるらしい。　そちらの点から協力を呼びかけてみれば、今回の廃都についても見返りが獲られるのではないでしょうか？」

「そう言えばケーナ伯母上は守護者（スキルマスター）でしたね。　過去は十三人居たそうですが、今の世では他の方々は何処に行ってしまったのやら……」

　その隠者はロクシリウスは勿論の事、ケーナの放った精霊にまでその存在を確認されていた。　ケーナ自身にもアガイドの隠者がついているので、害意を加える者では無いと精霊は判断した。　しかし、ロクシリウスはそうは考えなかったようで、野営中にソレを穏便な態度で追い払っている。　ケーナには「何もありませんでしたよ」としか報告して無いが。

　会議はその後、細かい連絡事項などを報告し合い終了した。　官僚が玉座の間を退出するのを見届けたサハラシェードは、騎士達も部屋から出させ、玉座からズルズルと床に敷かれた絨毯へ座りこむ。

　気疲れの溜息を吐くと残っていた騎士団長や宰相、魔法師団長に苦笑された。

「陛下、お気持ちは分かりますが、だらしないですぞ？」
「懸案事項ばっかり増えていって嫌になるわ……。　伯母上とか手伝ってくれないかなあ……」
「話だけ聞くなら苛烈な方のようですが、クロフの報告を聞く限りでは随分とのんびりした方のようですね」
「伯母上は自分がハイエルフ族だっていう自覚が無いもの。　市井の者とは直ぐ仲良くなっちゃうし、威厳なんか何処かに置き忘れてったって感じよね」

心配するよりは母親が子供を叱る気持ちにも近い。　どちらが年上か分からない発言に宰相達は吹き出した。　が、直ぐに真面目な表情で互いに頷き合う。　魔法師団長は引き続き廃都の監視に、騎士団長は軍備の強化に、宰相は女王と各国との連絡を密にする為にそれぞれ動き出す。

「陛下。　休憩は終わりにして、儂とお手紙でも書きましょうぞ」
「格好良い人が一緒だといいんだけどなあ……」
「では騎士団から見目麗しい者でも向かわせましょうか？」
「……もう冗談だから。　騎士団長は自分の仕事に集中して！」

――――――　フェルスケイロ

王城のかなり高いところのテラスにて。
国王と宰相のアガイドと大司祭のスカルゴ。　王女であるマイことマイリーネ・ルスケイロがテーブルを囲んでいた。
高所といっても風は気にならない。　かつてはこの城も何処かのギルドの所有物にあった。　そこのギルド員は余分な課金ポイントを消費し、城の外観を保つことに趣味にしていた。　その影響で城に掛けられた結界は今現在も機能しているのである。

「通商ギルドからの報告が来た時には何かとは思ったが……」
「直前に届いたオウタロクエスからの文書の裏づけが取れる報告ですな」

王がテーブルの上に広げられた二枚の書面に対して渋面を作る。
アガイドは報告書の片方に、国としてもやや扱いに困る者の名前が含まれている事に眉をひそめた。
国として対する対応には慎重になりたい相手なだけだが。　その関係者であるスカルゴはいつもの奇行も潜め、オウタロクエスからの文書に思案顔で居た。　ついマイリーネが心配して声を掛けてしまうくらいに。

「あ、あのスカルゴ様、どうかなされたのですか？」
「ああ、いえ。　王よ、廃都についてオウタロクエスから援護要請等は来ていないのですか？」
「いや、今回の通達は海側からの脅威に対する勧告のみだな。　廃都に関して我等よりはあちらの国が詳しいだろう。　大司祭殿は廃都について何か知っているのか？」

基本的に廃都と呼ばれる場所について、一般人が知っている事は御伽噺で神が悪意を封じた場所である事。　ソレくらいであった。
これが国の上層部になると廃都の実在と位置、フェルスケイロの

南西、オウタロクエスの西端にあると知っている。　だけれども中には悪意が封じてある、としか伝えられていない。　この一連の事情をプレイヤーが知った時はまた違う判断を下すだろう。

　スカルゴは確かに”プレイヤー”であるケーナに連なる者だが、国に属する者でもある為に三国の機密情報を安易に流しても良い訳でも無い。　知恵を借りるには一番の適任者なのだろう、だからといって本人が国家に関係したくないと大っぴらに公言しているので、事情を説明して知恵者になって貰う事も出来ない。　残った適任者はと言うと……。

「……騎士団長が戻ったら、聞いてみた方が良いでしょう」
「あやつにか？　あんまり頭脳労働担当に適任とも思えぬが？」

　ここに居ないからと言えばそうだが、アガイドの酷い発言に王とスカルゴは苦笑した。　スカルゴは以前見聞きした情報だけで判断し、本人には後で謝ればいいと考えて爆弾発言を投下した。

「シャイニングセイバー殿は、母上と同じく二百年前の人物ですよ」
「……なんじゃと！」
「っ……、ええ。　以前に聞いてしまったのです、母上と大戦中に同士だったと言う話を」

　想定していたより随分と驚愕したアガイド宰相のリアクションに、失言だったかと焦る。　それは表面には出さず『きらーん』と歯を光らせ、憂い顔でいけしゃあしゃあと告げた。
　プレイヤー同士なのは合っているが実際の所、所属国的には敵同士だったと言ったほうが正しい。　それはスカルゴも知らない情報ではある。　むしろ散々魔法で吹っ飛ばされたと言う、一方的な敵（かたき）同士だ。

「父上、だからと言ってシャイニングセイバー殿一人を詰問すれば良いという訳でもありません。　建国以前の事象についての情報は国に混乱を及ぼすものです。　ケーナ殿と行動を共にして分かりましたが、あの人の使う技術は今の世に不釣合いなものだと考えます」
「いや王女……、母上の存在は密輸品ですか……」
「どちらかというとタチの悪い蔓延する可愛い捨て犬のような……」

王と宰相で騎士団長に問う事を詰める中、スカルゴはマイリーネの言葉に正論だとつい頷いてしまった。　自分達もそうだが、懐に入られると誰も彼もケーナに甘くなってしまうところとか。

――――――――　ヘルシュペル

「その後、どうですか？　彼の様子は？」
「は、これはケイリナ様」

罪人を強制労働に従事させる鉱山にやって来たケイリナは、看守を受け持つ数人のドワーフに例の人物の動向を訪ねた。　言わずも

がな祖母の捕えた魔人族の頭目の件である。
報告によると、あれ以降苛烈さは成りを潜め、至極真面目にツルハシを振るっているらしい。　夜には時折うなされたり、泣いていたりする時もあるとか。　あれだけの凶行に走っていた人物とは思えない。

野盗の砦を攻略し、生き残った盗賊達を尋問なり砦を捜索なりして得られた情報としては酷い物だった。　少なくとも二百人近い旅人、商人、冒険者が頭目の餌食になっている事が判明した。
フェルスケイロ騎士団長の銀竜人（シャイニングセイバー）には頭目を捕えたくだりを簡潔に説明した。　驚いた事に彼は祖母を知っていたようで、経緯には特に疑問を挟まなかった。　しかし、頭目の目的が『れべるあっぷ』の為の『ぷれいやーきらー』と聞くと随分動揺していた。

ケイリナが収監されている頭目の動向や素行をわざわざ確認しに来た理由は、先日の祖母がいきなり訪ねて来た時の話し合いに遡る。
とっさに頭目の処分について暴露してしまったが、ケイリックと論議していた議題は全く別のモノだった。
ケイリックの創設した通商ギルドには表側の役割。　――――各国の流通網の把握やら価格調整、流通路の構築――――、の裏側で王家に出入りする商人（てのもの）が国家間の機密情報を入手してケイリックが取り纏め、然るべき所へ売り払っていた。

当然の事ながらオウタロクエスで発生した廃都絡みの騒動も把握している。　国家の対応についての情報はまだ得ていないが、下手をすると三国の戦力を結集する必要があると読んでいた。

あちらで発生した騒動については以下の通りだ。
廃都から結界を抜け、ゴブリン六匹のチームが商隊を襲撃。　数人が命からがら逃げ出して騎士団の知るところとなった。　問題の

脅威はこの先で、討伐に向かった騎士団百人余りが、たった六匹のゴブリンに壊滅寸前まで追い込まれたと言うのだ。　運良くその場に数人の冒険者が割って入り、騎士団の窮地を助けたと。　おそらくはその冒険者達は、祖母と似たような境遇の者だろうと予測している。

廃都の問題を解決する為に戦力が必要になると判断したケイリックは、頭目を適当な恩赦か何かで釈放し、ヘルシュペルに組み込めないかと画策していた。　あっさり負けたとはいえ、あのケーナと打ち合った実力を評価しているからだ。

問題は頭目の人格的な所にある。　本人が泣き崩れる程自身の行いを悔いている、と言う報告には疑問の声が上がっていた。　要するに自白に良く判らない単語が並んでいた為に、取り調べに関わった者達からは狂人扱いをされているのである。

『ぷれいやーきらー』『れべるあっぷ』『ろぐあうと』など、何の暗号なのかさっぱり不明だ。　幸いにして当人は此方の意向に従順なので、罪の償いとでも伝えておけば従ってくれるだろう。

※人物紹介（随時更新）

人物が増えてきたので整理の意味も含め羅列します。

☆ケーナ（各務桂菜）　享年１７歳
ＬＶ１１００プレイヤーで廃人。　ハイエルフ族。　三児の子持ち。さらに孫が居る事が判明、頭が痛い。
事故で半身不随に陥ったため病院のベットから起き上がれなくなった経緯から、リアデイルＶＲＭＭＯＲＰＧにのめり込んだ。
ゲーム内では『暴虐の火力』や『銀環の魔女』の二つ名を持つ。
彼女の辞書に手加減という文字は、あんまりない。　やさしくて親切、友人思い。　怒らせても静かに怒る人。

☆キー：世界内では聖霊と呼称される。
動けなくなった桂菜のサポートＡＩ、彼女の叔父の渾身の作。
ゲーム内にトリップしても彼女のサポートを務め、ゲーム経歴ログを全て記憶している。　感情は無し。

☆銀の塔の守護者
スキルマスターＮＯ．３であるケーナ担当の太陽の壁画。　ヤンキー。
他の塔との交信がだんだん途絶えてきたため、最近寂しさを感じている。

★ヘイゲル（召喚獣）
人馬族（ケンタウロス）の勇者。　昔ケーナに倒されたモンスター、ＬＶ２５０。
機動力に優れ、進言する知能も持ち合わせている。　なぜか武者

気質でケーナの事を「殿（との）」と呼ぶ。

★ピーちゃん（召喚獣）
　クリムゾン・ピグの子供、全高３ｍ弱全長５ｍのウリ坊。母子ともにその昔ケーナと戦った、　ケーナの所持する獣系モンスターの中では最上級クラス。　ＬＶ５００。　子供と言えどその突進力は街壁をも貫通する。　勿論成体の方も呼び出す事が可能。

★わんこーズ（召喚獣）
　魔獣ケルベロス、ＬＶ４８０。　馬サイズの三頭犬で、やや毛深いドーベルマンに似た体躯。　但し毛皮は固く、ごわごわである。
　もふもふは期待できません。　睨む、吠える、火を吐く、噛み砕く、と搦め手からの攻撃手段は多彩で、実に役立つ人材（？）である。

★ロクシリウス（召喚執事）
　リアデイルＩＮ一万時間に達すると譲渡される青いハンドベルで喚び出す事が出来るサポートキャラクター。　ＬＶは召喚したプレイヤーの半分。　ゲーム中は戦闘補助用のみだったが、リアル状態では生活補助まで痒い所に手が届く万能キャラに。　一度の召喚で十日間存在し、千ギルの料金を必要とする。　通称ロクス。
　猫人族で前衛型魔法戦士、得物は槍、ＬＶ５５０。

★ロクシーヌ（召喚メイド）
　赤いハンドベルから喚び出されるサポートキャラクター。　猫人族の女性万能メイドで後衛型魔法盗賊、得物は鞭と毒有りの小剣、ＬＶ５５０。　通称シィ。　設定した当初は『きゃぴる～んｖ』な痛いキャラだったが、書いているうちに作者の心にダメージが蓄積しまくったので、２９話のような毒舌キャラになってしまった。
相棒であるロクスとの相性は最悪である。

★サイレン（召喚メイド）
　オプスの所有する召喚メイド。　エルフ女性の前衛近接型でＬＶ５５０。　涼しい顔で何でも煙に巻き、その優しげな笑顔で油断させてばっさり斬る人。　このくらい達観した性格ではないと問題児の相手は務まらないという。　ロクシ，Ｓ達の頭の上がらない相手で、ケーナ家のメイド長に納まった。

――フェルスケイロ――

★スカルゴ
　フェルスケイロ公国の教会の大司祭。　国で三番目に偉い人。イケメンで婦女子に大人気。　ケーナの子で長男、エルフ。　ケーナには常に尊敬の念を持って接する。　いちいち仕草がキザっぽい。
【特殊技能（エクストラスキル）：薔薇（オスカル）は美しく散る】を天性の才能で使いこなす。
　ケーナの印象はお馬鹿息子扱い。

★マイマイ・ハーヴェイ（男爵夫人）
　フェルスケイロ公国の王立学院の校長。　国の魔術師の頂点に立つ人、過去宮廷魔術師もやっていた。　ケーナの二番目の子で長女。　エルフ女性。　実は既婚者で、二番目の夫はロプスは学院錬金科の教師。
　母親大好き好きの人。　悪戯好きが高じてケーナに怒られる事もしばしば。
　双子のケイリナ♀＆ケイリック♂は前のエルフ夫との子。

★カータツ

国認定の一級建築師の資格を持っている。　でかい工房の主でいかついドワーフ。　ケーナの養子で次男。　沢山の弟子が居る。
ケーナをお袋と呼ぶ。　実はカータツもマイマイも例のエクストラスキル持ち。

★アガイド
くたびれた元騎士、５０代、実はフェルスケイロの宰相、肉体派。

★ロンティ
アガイドの孫娘、ケーナに一目惚れ？　魔道士、冒険者歴１年。学院生、実践魔道科。

★デン助（王子）名称未定
城をよく抜け出す王子。　ロンティが「でん……坊ちゃま」と誤魔化した為、ケーナにデン助と呼ばれる羽目になった。　ケーナに疑いの視線を向けていて何かと目の敵にしている。

★マイ（マイリーネ・ルスケイロ）
ロンティの学友で王位継承１位の王女様。軽戦士型。優しいが実直で責任感が強い。
外へ出た事が無いためにロンティと城を脱走した。　スカルゴに仄かな恋心を抱いている。

――辺境の村――

★マレール
辺境の村の宿屋の女将さん。　喧嘩をするとお盆が飛んでくる。
リットやルイネの母。

ケーナが肝っ玉母さんと認識していて、逆らえない人。

★ガット
マレールの旦那。　宿屋の主人、兼、料理長。

★リット
宿屋の娘、８歳で家の水汲みは彼女の仕事。　ケーナに懐いている。

★ルイネ
宿屋の娘で既婚者、リットの姉。　夕方になると酒場を手伝いに来る。

★ロットル
村の猟師、マタギ。　まだお兄さん、おじさんではない。　マレールによくお盆をぶつけられる。

★ルカ
幽霊船に襲われて壊滅した漁村の生き残り、ケーナが引き取る。
１０歳

★ラックス工務店（堺屋・出張支店）
ケイリック御用達の技術屋だったが、祖母の持つ技術の利益目当てて堺屋の支店扱いに。
ラックス：工務店の主でドワーフ。　実はカータツの弟子。
スーニャ：工務店の会計を切り盛りする人族。　眼鏡の似合う長身の女性で、ラックスの妻（後妻）である。
ドダイ：ドワーフ族、ラックスの弟子で義弟。　ラックスの前妻は彼の姉であった。
ラテム：ラックスと前妻の息子。　少年ながらもいっぱしの技術

屋で、スーニャとの仲は良好。

★エーリネ
　移動商団の長、結構やり手。　眼鏡を掛けた犬人間（コボルト）。　主人公については打算込みで面倒を見ていた。　商隊の一員としてケーナを勧誘するのを諦めてはいない。

★アービタ
　傭兵団”炎の槍”の団長。　槍の使い手、だいたい８８ＬＶくらい。　人情派、面倒見がいい。
　主人公の事は世間知らずな妹みたいに思っている。　傭兵団へ熱烈勧誘中である。　過去フェルスケイロで騎士団長を務めていた。

★ケニスン
　傭兵団”炎の槍”の団員。　瀕死の所をケーナの治癒呪文によって命を救われた。「～ッス」と喋る。

――ヘルシュペル――

★ケイリック・サカイ
　マイマイの息子でエルフ族、大陸商人の発端。　腹黒過ぎない程度の商人魂、祖母（主人公）の機嫌を損ねるのを恐れている。　通商ギルドの創設者。

★ケイリナ・サカイ
　マイマイの娘、ケイリックの双子の姉。　ヘルシュペル騎士団所属、実力的にはＬＶ１４０、たぶん国内最強（プレイヤー除く）。

真面目で実直な人、ケーナは祖母だが姉みたいだと思っている。
実際には騎士団の指南役。

★イヅーク
ケイリックの息子でエルフ族。　堺屋の若旦那として表側を取り仕切る。　時折無理難題を持ち込む父親と伯母に翻弄されている。
……祖母は優しくていいですよね……

――オウタロクエス――

★サハラシェード
ハイエルフ族、オウタロクエスを建国以来治め続けた賢王。（レベル未設定）
ケーナの所属していたハイエルフコミュでの妹分、サハナの里子なので姪と言う親族になっている。

★クロフ
オウタロクエスの親衛騎士団所属の隠者。　ＬＶ８０の猫人族（ワーキャット）
表向きは冒険者となっていて、王室の仕事を中心に請け負う。
国内の武人には知られた実力者。

★クロフィア
クロフの双子の妹で此方は完全な冒険者オンリー。　弓と魔法とのコラボ攻撃を得意とする、ＬＶ７０。
兄の仕事の事は知らない。　クロネコの外見がコンプレックスで態度は誰にでも高圧的。

――スキルマスターズ――

☆九条

人族のプレイヤーでスキルマスターＮＯ．２。　アバターは少年型で戦闘よりも作成メイン。

守護者の塔は山の様に巨大な亀の上に神殿（テレビ局）が建っている移動型。

守護者はヴィシュヌっぽい道化。　試練は一万問もあろうかという問題からランダムで百個、８０％正解でクリア。　別名「ア○リカ横断ＵＴクイズ」とか言われていた。

☆リオテーク

人族のプレイヤー。　スキルマスターＮＯ．６。　竜宮城の主で塔は海中。

女性ながらゲテモノ好きで、召喚魔法の僕はエグいのばっかり。

守護者はドピンクな大カエル。

試練は海中モンスター大量生息地の中、塔まで辿り着ければオッケー。

☆京太郎

竜人族のプレイヤー、ＮＯ．９のスキルマスターで限界突破者。

血気盛んなパワーファイター。　守護者は煙。　塔はフェルスケイロの裏手に建つ、神世の建造物と謳われる闘技場。　試練は挑戦者のコピーを二人倒す事。　銀月の騎馬ギルドマスター。　ギルド名に反して本人は牛柄な竜人族である。

☆隠れ鬼

ドワーフのプレイヤー、スキルマスターＮＯ．１２。　見た目も言動も爺さんで中の人も老人。　守護者の塔は空中庭園で日本家屋の古き良き時代調。　試練はスキルマスターが満足するまで彼と将棋を打つ事。　嘘と真実を入り混ぜて人に語り、からかうのが好き

と言うハタ迷惑な御仁である。　被害の何割かは全てケーナに行っている。

☆オペケッテンシュルトハイマー・クロステットボンバー（通称：オプス）

　能天気な魔人族、突き抜けた馬鹿。　実は策士、でも表面の言動は馬鹿。

　ＮＯ．１３のスキルマスター、守護者は高ビースケルトン。　試練は罠満載ダンジョン。　別名、悪意と殺意の館。

　ケーナとはβテスト時代からの友人で、同じ「くりーむちーずギルド」メンバー。　その言動は敵味方を混乱に落としいれる。「リアデイルの孔明」と言う二つ名をちょうだいしている（主に罵倒の意味で）。　ＶＲＭＭＯリアデイルの企画原案作成者。

――プレイヤー達――

☆コーラル

　人族のプレイヤー。　終焉後、現在より１０年前に落下、重戦士系。　１９話でケーナに話をしたオッサン。　普通の冒険者ＰＴと共に過ごしている。ＬＶ３９２。

☆シャイニングセイバー

　白銀の竜人族。　魔法戦士系のプレイヤー。　大剣使い。　名前は当時のアニメから、ＬＶ４２７。　フェルスケイロ騎士団長、現在より2年前に落下。　ゲーム中は同ギルド内に「～セイバー」が多く所属していた為、銀月戦隊騎馬レンジャーとか呼ばれていた（内輪で）。

☆Ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ　（エクシズ）
　灰色竜人族、ＬＶ６３０。　くりーむちーず所属、ケーナのギルド仲間タルタロスの別垢。　ギルド内の常識を逸脱したメンバーに疲れを感じ、こっちの垢を終盤は使用していた。

☆クオルケ
　人族、♀、ＬＶ４３０。　中の人は男性、いわゆるネカマプレイヤーと言う奴である。　テクニカルファイター。　リアデイルについて碌な知識無しでいきなり始めた為、ゲームの常識について疎い。

☆コイローグ
　魔人族のプレイヤー、空気を読まない餓鬼、ＬＶ４３２。　ヘルシュペルに落下後、盗賊団を暴力で纏め暴虐の限りを搾り尽くした。　ケーナに倒されて騎士団に捕獲され、その後斬首刑になるも死にきれず、鉱山労働に回され、紆余曲折を経て騎士団に勧誘された。
　一番激動の人生を送っている人かもしれない。

29話　家族を増やしましょう

まずは宿屋を決めてタライと湯を借り、ルカを綺麗にして身なりを整える。　ロクシリウスと一緒に戸惑うルカを洗って髪を梳き、【服作成】で服を作った。　町娘達が着るような素朴な服、飾りの殆ど無いエプロンドレスっぽいものを着せただけで見違えるようだ。

ルカがロクシリウスに着せ替えられている中、ケーナは沈黙していたキーを起こす。

「キー、ちょっと幾つか技能をピックアップしてちょうだい」
『アイ、サー』
「得ただけで殆ど使わなかった造形物作成技能と道具作成。　あと長期保存に耐えられそうな食べ物か飲み物のヤツ」
『生活費ヲ補填出来ソウナ売買ニ使ウノデスネ？　了解致シマシタ』

自分の姿を鏡で確認した着せ替えられた当人は、見た目だけなら良家の子女の容姿にポカンと口を開けた。

「良くお似合いですよ、ルカお嬢様」
「……お、じょうさま？　わたし、ちがう……」
「いいえ、御主人様の子女となったのです。　お嬢様で合っていますよ」
「まずはスカルゴ達に紹介しておかないとね？　疲れてるかもしれないけど。　ルカ、少し付き合ってね」

義娘の手を引いて人通りの多いメインストリートに足を運んだケ

ーナは、ルカと視線を合わせて呟いた。　ロクシリウスは連れて歩くと誤解されるおそれがあるので、宿屋で留守番をさせている。ルカはこれだけ大量種族の行き交いが珍しいのか、さっきから首をひっきりなしに左右へ振って目線が通らない端から端まで見渡していた。

ケーナはルカを連れて教会へ向かう。
丁度会議から戻って来たスカルゴは、子連れのケーナを見るなり全て悟った顔で頷いた。

「何よいきなり人の顔を見て？」
「いえ、流石は我等の母上殿。　その娘子が新たなる義妹（かぞく）、と言う事で宜しいのですね？」

元々通商ギルドから回っていたエクシズらの報告により、生き残り一人とは伝えられてはいた。　それが子供であることも、その場にケーナが居たことも把握済みであった為に予測出来る出会いであった。
『煌めき』を纏ったスカルゴは『星が飛ぶ』ウインクをルカに向け大仰に手を広げ、博愛のポーズを取った。　スポットライト下のように光が一点化して照らされる大司祭。

「改めて歓迎しよう！　我等の家族へようこそお嬢さん！」

ふふんと勝ち誇る彼の視線の先、最上級に会心だという大司祭の歓待を受けたルカは、心底怯えて半泣きでケーナの背後に隠れていた。

「ス　カ　ル　ゴ　？」

ゴゴゴゴと擬音を背負い、射抜くかの如く殺気立ったケーナの鋭い瞳に射竦められたスカルゴは、真っ青になってエフェクトを収めて慌てて土下座した。　やれやれと嘆息して威圧を解いたケーナはルカを宥め、改めて息子を紹介する。

「じゃ、ルカ。　コレが私の息子でスカルゴって言うのよ。　偉い地位にいるのにエフェクトを多用化する事でしか印象が残らない可哀想な変態、と思えばいいわ」
「は、……はーはーうえぇぇ～」

ルカに最悪な印象を植え付けたという現状から、毒舌でのみの紹介に滂沱の涙を流して崩れ落ちるスカルゴ。　泣き顔を拭われ、撫でられて落ち着いたルカはおずおずとケーナの背後からペコリと頭を下げる。　母親の威圧下から開放されたスカルゴはしゃがんで目を合わせると、にっこり笑って「よろしく」と挨拶を交わした。

「最初からそれだけ言えばいいのよ」
「しかし母上殿、これこそが私であるという証なのですよ」
「捨ててしまえ、そんなアイデンティティ」

「それはそれとして報告は聞きましたよ。　通商ギルドからの報告に間違いは？」
「エクシズ達がどういった報告したんだか知らないけど、そんな感じよ」

ルカが居るので村の話は出さず、それだけ告げておく。

ルカは部屋のソファに座らずにケーナの服を掴み、落ち着きのない様子だ。　政治に関わる話をしてもケーナの利益にはならないので、顔合わせも済んだから次の用事に移る。

「じゃスカルゴ。　私は辺境の村に住むから、何かあったらそっちに連絡を頂戴」

「マイマイから聞いていましたが本当ですか……。　なんでしたら私が分神殿をそちらに設立しましょう！」

「来なくていーから」

嬉々とした提案をバッサリと一刀両断され、意気消沈するスカルゴ。

肩を叩いて「またね」と告げたケーナは教会を後にした。

その足でカータツの工房へ向かい、予め注文してあった材木を受け取る。　その場に山と積まれた大量の加工前木材が、一瞬にして跡形も無く消える現象に、工房の従業員達は顎を落としていた。

「よしよし、これだけあれば家の一軒や二軒、申し分ないね。　ありがとう、カータツ」

「いや、いいけどよ。　その娘っ子か、俺達の妹かってえのは？」

「また随分耳が早い……、あー【以心伝心】か」

しゃがみ込んで目を合わせ、片手を上げ「よろしくな」と簡単な挨拶を交わすカータツに、エクシズに会った時以来の笑顔を浮かべて頭を下げるルカ。

「うんうん、流石はカータツ。スカルゴと違って人当たりは良好よね。　年の功ってやつかな？　ルカ、これが私の末の息子でカータツっていうのよ。　貴女のお兄さんね」

「お袋の方がずっと年上じゃねぇか……。　姉貴には紹介しねーのかよ？」
「マイマイの所は唯でさえ人が多いからね、この前伝える事は伝えたし良いかなって」
腕組みして思案したカータツは不意に苦笑いを零して「姉貴泣いてるが？」と告げた。【以心伝心】で即交信したらしい。
「仕事サボって来ないように言っときなさいよ」
「姉貴も災難だなあ」
カータツに別れを告げたケーナは、疲れて舟を漕ぎ始めたルカを宿屋で待機していたロクシリウスに預け、馬車を扱っている商店に向かった。　村までの移動用に使う為である。
ついでに物資を運び込んで、金銭面での補填に当てられないか色々と試してみようと考えていた。　候補に上がっていて有力な技能は、ＮＰＣ用に作るレベルを持たない者でも装備できる装飾品。ウィスキー&ビール作成技能くらいだろう。　後は既に実績がある仏像作成。
『以上デス』
「ご苦労様。　麦を大量購入してみる必要があるわね、あとは宝石細工やらかなあ？」
本来の製造方法では麦を発芽、その麦芽に含まれる酵素を利用し

てデンプンを糖化させ、これを濾過して麦汁を得たものを酵母によって発酵させる、となっているが。　技能（スキル）に掛かればややこしい工程など存在しない。　材料は水と麦があればどちらも大量生産が可能だ。　そうと決めたケーナは市場に向かい、大量の麦を買い込んで市場関係者の度肝を抜いていた。

宝石の方は購入する方法はせずに、地中から採掘してくる方向で考えていた。　【召喚獣】の中にジュエルワームと言う全長六十メートルの巨躯を持つ甲殻ミミズがいて、地中の宝石を含んだ鉱物を巣に溜める習性を持っている。　その辺の山脈にでも放てば、適当に掘り出してくれるだろう。

その辺はおいおい考えるとして、根本的な問題は『家に住む』上で必要不可欠な家事に問題があった。

これは桂菜だった頃に全く接点の無い事柄で、恩恵を受けてはいても実行に移した事の無い未知の領域である。　根本的にノウハウすら無いのでマレールに教えを請おうとしても、基本的な知識も持たないので、文字通り一から教わる羽目になるだろう。

桂菜は元々病弱だった。　幼少時から小学校に至るまで母親と一緒に台所に立つ、という良くある光景も経験する事はなかった。中学に上がる前には事故に遭い、病院のベットから動けぬ様に成り果てた。　テレビで見た事はあっても実際に行動に移すというのは、未経験のほぼ素人である。　もしかしたらルカの方が詳しいのかもしれない。

これについて悩みに悩んだ末、ハウスキーパーの専門家に相談し

てみた。
主から難しい顔で家事に付いて相談を受けたロクシリウスは、絨毯の敷かれた馬車の荷台でとんでもない事を提案した。

すべての諸準備を終え、辺境の村まで出発した初日の事である。
【魔法：付加ゴーレム】で御者台に木彫りの馬首が生えた八人くらいはゆったりと乗れる馬車は、馬に曳かれずに幌車だけで自走していた。すれ違う旅の者や、冒険者達が目を丸くして見送る。
魔韻石を埋め込み、術者が近くにいる事で半永久的な自律人形（ゴーレム）となるこの魔法。ゲーム時代には車輪や足の生えた家や彫刻、酷いモノになると城や砦がフィールドを闊歩していた。当時を思い起こせば、幌車が自律走行しているなど些細な事だと言うのがケーナの持論だ。後日フェルスケイロで噂になってしまうなど知る由も無いが。

それは兎も角、ロクシリウスは世界の根幹に関わる（かもしれない）事情をケーナに吐露した。

「それでしたら自分がケーナ様の家の一切を取り仕切りましょうか？」
「はぁぁあぁ？」

胡坐を組んでルカに膝枕をしていたケーナは静かに、それでいて寝耳に水な発言にすっとんきょうな声をあげた。正確に言えばロクシリウスのお勤め期間が直ぐそこに迫っているからだ。給金を渡して引っ込んだ彼を呼び出すには、再びハンドベルを鳴らさなければならない。少なくとも当初はルカの為に連続召喚も考えていた。
しかし、ゲーム中のお金はなるべくとっておいて、この世界で自給自足すると決めていた彼女には取る予定の無い手段であった。

その為に村に居ながら、時々やってくるエーリネ商隊と取引の出来る金策を考えていたからで。

「いえ、それに付いては推測でしか無いのですが。　帰還出来るかどうかは、自分も定かではありませんから」

「はぁ？　ナニソレ……？」

「実のところ、この場に来る前の記憶があやふやなのです。　前回、御主人様にお会いした時より後日、自分が待機していた場所には何もなくなってしまっているので。　キチンと戻れるかは確証が持てません」

「……ああ、なるほど。　運営が機能しなくなっちゃったから、管理下にあったシステムもうやむやになっていると思っていいのかな？　もしかして幽霊船もクエストイベントの内だから、条件関係無しで出現してきたのかなあ？」

それだとクエストイベントモンスターが全部、その辺に沸いて出ても可笑しくは無い。　そこに思い至ったので、ケーナは頭を振ってその考えを追いやった。　とりあえずロクシリウスの問題は帰還時期に例の館が出現するか否かだ。　そこまで待ってみてから結論を出してもいい。

「あとついでで宜しいのですが……」

「ついでに、なに？」

「ロクシーヌも呼んで頂ければ、と。　ルカ御嬢様には女性の付き添いが居たほうが宜しいでしょう。　まあ、甚だ不本意ではありますが……」

「シィもかー。　それはそれで随分とにぎやかになりそうだねぇ」

ゲーム中の機能ＮＰＣ状態だった時の、オプスと起こした騒動を思い出して苦笑した。　むしろ賑やかと言うか騒々しい日々になり

そうだと、予感がする。　あの時もプレイヤーを大多数巻き込んでの大騒動に発展したからだ。　賑やかで済めばいいのだが……。

　そんなこんなで滞在限界の日数を過ぎても帰還用の館が出現しなかったので、当然の如くロクシリウスの希望の通りになった。　その結果を受けて、もう一人の召喚メイドもこの場に喚ぶ事になる。
　日中の街道に一時馬車を停め、周辺に人の通りがないのを確認した後にケーナが赤いハンドベルを振った。

『チリーン』と静かに澄んだ音が辺りに響き、ケーナ達の眼前に光が瞬いて白い巨大な魔法陣が開く。　白い燐光がとめどなく溢れ、魔法陣の内側から建造物が浮上した。　赤い屋根に白い壁、黄色や白、青などの花畑のこじんまりとした庭付き一戸建て。

　まさかそんなものが下からせり上がってくるとは思わなかったルカは、唖然として赤い屋根のお家を凝視していた。　内側から溢れる光に押し退けられ、扉がひとりでに開く。　中からは茶色い猫耳に、オレンジチェックのメイド服を着用した十代後半の女性が姿を現した。　ロクシリウスと同じく猫人族（ワーキャット）のその者は、ミニスカートを摘んで恭しくケーナに頭（こうべ）を垂れた。

「お久し振りに御座います、ケーナ様。　ロクシーヌ、御前に参上致しました」
「久し振り、シィ。　何かおかしなところとかは無い？」
「はい？　すこぶる健康で御座いますが。　ロクスが居るのに自分

を呼んだと言うことは、このボケナスが何か破廉恥（エロティック）な事を致しましたか？」

後ろで静かに控えていたロクシリウスのこめかみに、ビシリと怒りのマークが浮かぶ。　しかし何かを言い返すことはせず、無言を貫くだけだ。　一番最初に召喚した時と同じ様な展開に、ケーナの口元は引きつった。

きょとんと会話を聞いていた義娘を紹介し、ルカの世話を重点的に頼む。

「分かりました。　不肖ロクシーヌ、ルカ様を何処に出しても恥ずかしく無いような淑女に育て上げて見せましょう」

「いや別に淑女とかはいいから。　この子がこの子のままでいてくれればそれで」

腕まくりをして宣言するロクシーヌに、ケーナは首を振って自重を促した。　両親を失った直後なので、しばらくはしたいようにさせるのがいいと考えていた。　閉じ篭らせたくはないので、その辺のフォローをロクシーヌに任せる気で。

「全くだ。　ロクシーヌも少しは自重しろ。　自分達はケーナ様の小間使いなのだから」

「ロクスには聞いて無いわ。　貴方（ボケ）を教育（みほん）係にしたんじゃ御嬢様がどんな奔放（アバズレ）に育つか判らないものね」

ビシビシィッ！　と、再びロクシリウスのこめかみに怒りマークが複数浮かぶ。　同族嫌悪と言うべきか、同時に呼ぶと仲違いが激しいのだ、この二人は。　嫌々ながら喚ぶ事を提案した彼も、予想内だったのか耐えてはいた。　ニヤリと哂って続けようとしたロクシーヌに、ケーナは待ったを掛ける。

「はい、そこまでー。　二人ともこれから家族になるんだから、喧嘩はご法度だよ？　街路樹を切り倒したり、家を倒壊させたり、人を投げたらダメだからね。　ルカの教育に悪そうな行為は慎んでね」
「はぁい。　分かりましたわ、ケーナ様」
「……了解いたしました、主」

しぶしぶ了解する二人にケーナは苦笑した。　ゲーム中はとてもＮＰＣに思えない言動が多かったので、今後の行動が読めないからだ。　なにせロクシーヌがロクシリウスだけでなく、ＰＣの男性全般を罵倒する。　ロクシリウスは口で返すのではなく、遠回りに嫌がらせを敢行する、但しケーナが言ったように実力行使で。　二人を街中で使うことは周囲に多大な被害を及ぼすので、最初に一度同時に呼び出して以来懲りたケーナの経験談である。

一応強めに釘を刺しておく。

「これから住む村は私にとって大恩ある所なので、村の人や共有財産に手を出したら怒るから！」
「「は、はいっ！？」」

瞳に剣呑な光を持ってして力説したケーナに二人は震え上がった。物騒なオーラを見て取れないルカは、ケーナの凛々しい姿にパチパチと拍手を飛ばす。　義娘の賛辞にふふんと胸を張った母親はふんぞり返る。

全員乗った荷台からの騒がしい声を受けた幌車ゴーレムは、自分の存在意義を果たす為、村へ向けて再び走り出した。

30話　移住してみました

「なによこれ……？」

辺境の村に着き、遥か昔に馬車溜まりだった場所に建っているラックス工務店。

その隣にまだ広々と広がる空き地に幌車ゴーレムを停めたケーナ。

彼女がラックス工務店の店先に掛かっている立て看板に首を捻った。　そこにはデカデカと流麗な文字で『堺屋・出張支店』と、書かれていたからだ。

「って言うかケイリック……。　マジでここに分店舗出したのね……。　ラックスとスーニャも押し切られたんだろうなー」

ケイリックが無理難題を押し付けたんじゃなかろうかと、心配になるケーナだった。

前にケイリックに会ってから十日位しか経ってないと言うのに、素早い対応と有言実行に呆れるべきか。　とりあえずは落ち着いてから詳細を聞いてみようと考えた。

先ずは家屋の建築からである。　村に着いたのが昼前なので、建ててしまえばそのまま使えるだろうと踏んでいた。　優秀なホームキーパーが二人も居る事だし。

目ざとい村人によってケーナの到着が伝えられたらしく、村長のコウケが数人引き連れて迎えに来ていた。

「おはようございますですな、ケーナ殿」
「ええ、おはようございます。　今日からお世話になります」

ケーナのお辞儀に合わせ、左右に控えていたメイドと執事も深々と頭を下げた。　ついでにロクシリウスとロクシーヌ、ルカの紹介もしておく。　マレールと共にこの場に後からやって来たリットは、自分以外の同年代の少女に興味津々な視線を向けていた。

「しかしまあ子連れで来るとはねぇ。　他にも綺麗ドコロも二人に増えて……。　ケーナも良く分からない伝手があるんだねぇ」
「まあ私が家事が壊滅的に駄目ですから、ロクスとシィにその辺りは任せます」

マレールの感心した言い方に、母親としてそれはどうなのかと、揶揄された気がしたケーナは肩を落とす。　執事とメイドはそんな主に頭を垂れた。

「家の事は我等にお任せを」
「ケーナ様はどうぞ独裁者（ていしゅかんぱく）のようにふんぞり返っていて下さいまし」
「どこの有閑マダムよそれ……？」

ケーナ宅建設予定地で技能（スキル）と照らし合わせ、大体のスペースを確保出来ている事を確認する。　村長によると見える範囲内であれば、

最大まで使っても構わないそうだ。　敷地面積だけで言えば、フェルスケイロで連日賑わう城が楽に建てられるだけのスペースはあった。

今回ケーナ宅として建てるのは【建築：家屋】として数種類登録されている中でもLサイズのモノ。　八人程が住める、一スペースを二階部分か地下室かに設定出来るタイプだ。　面積としては庭を造っても余りあるが、村道を塞いでも困るので、ややスペース端ぎりぎりまで寄せる。　大き目の平屋として作るので、一部分は地下へ回す。

使用するだけの大木輪切り丸太をドカドカドカンと周囲に出現させたケーナは、地精霊と風精霊を召喚し、早速取り掛かった。

地下室を先に埋め込んでから、平屋部分が完成するまで僅か数分。一般常識で言う非常識な光景を、既に見慣れた様子の村人達は拍手で迎えた。　その後、村の女性達が白い花弁の花を、玄関や窓口に飾って行く。　なんかのまじないかと疑問顔で見守るケーナに、コウケ村長は説明する。

「あれは新しく建てられた家を大地に馴染ませる為、我等に伝わる風習でしてな」

「はぁ、そんな事があるんですかー」

「特に邪魔でも無いと思いますが、枯れて無くなるまで放置しておいて下さいな」

「了解致しましたわ」

既に家事担当の振り分けが済んでいたロクシーヌがそれに頷いた。内回りを彼女が、外回りをロクシリウスが担当するらしい。　一々言動にトゲがある彼女を、外に出しっぱなしなのも村人との軋轢になりそうで心配だったケーナは、この配置に胸をなで下ろした。

集まっていた村人一人一人に挨拶を済ませたケーナは、村人としての第一歩が無事に済んで安堵する。　家に入って各所をチェックし、ロクシーヌに乞われるまま家具を作り出す。　ベッドやタンス、テーブルや椅子などを纏めて作り、ロクシリウスが各部屋へ配置していった。

間取りは材料の関係上ガラス窓を大きく取った食堂兼居間が南側の中央に。　そこの西側に水回りの台所や風呂場がある。　基本的に風呂は村の共営浴場を使うつもりだ。　居間の東側に二部屋あって、家屋中央東西に伸びる廊下を挟んだ北側に、残りの六部屋と厠（トイレ）となっていた。　一部屋のスペースは大体四畳半程で、各部屋ごとにベッドとタンスを備えている。　ロクシーヌは小さなテーブルと椅子をケーナに頼み、自分の部屋に置いていた。

南側の二部屋をケーナとルカで使い、台所の反対側にロクシリウスが。　ルカの対面をロクシーヌが選んだ。　使わない部屋は今のところ物置にする予定だ。

ロクシリウスの部屋の真下辺りに地下室はあり、出入り口は廊下にある。　ケーナは複数の棚を地下室に設置してから魔韻石で小さな照明を埋め込む。　倉庫から引き抜いてきた、魔水晶と言う精霊等を半永久的に宿しておけるアイテムを奥に置き、氷精霊を召喚してソレに住まわせた。　ひんやりした空気が漂ってきたのを見計らい、アイテムボックスから野菜や果物をごっそり出して、ロクシリウスと棚にならべていく。

一通りの準備を終えて上に戻ると、早速湯を沸かしたロクシーヌがお茶を淹れていた。　ルカの部屋をさっさと片付けて、壁紙をどうするかとかを聞いていたらしい。　もっぱら喋っていたのはロクシーヌだけだが。

「ルカ」

「……は、い」
「一人で部屋に居たくなかったら、私の部屋でもシィの所でも遠慮なく来てもいいからね？」

カップを持ったまま外を、窓そのものをぼんやり見ていたルカは、ケーナを見上げてゆっくりと頷いた。　ルカの頭をひと撫でしたケーナはお茶を飲み干すと立ち上がる。

「ちょっと色々回って来るわ。　こっちは宜しく、喧嘩はしたら駄目だからね？」
「お任せ下さいまし」
「では自分は薪を探して参ります」

先に外へ出たロクシリウスが扉を開けたまま待ち、ケーナが外へ出てから礼をして見送った。　扉を閉めようとしてから一旦止め、慌ててケーナの後を追って来たルカが戸口を抜けてから閉める。再び二人に頭を下げてから、村で林業を生業にしている者の所へと、木を伐採している場所を聞きに行く。

家から飛び出して腰にしがみついたルカを撫でて落ち着かせたケーナは、義娘の手を繋いで宿屋に向かう。　この様子だと暫くは一人で行動するのが難しそうだが、リットが友人になってくれる事で心が少しでも癒せればと、思ったからだ。
家を建てた後で室内を整えた事で時間を食ってしまい、昼を越えたと感じたケーナは、ルカを連れてマレールに挨拶をし、軽い食事を頼んだ。　水を持ってきたリットに改めてルカを紹介する。

「リットちゃん、今度私の義娘（かぞく）になったルカよ。　ルカ、こちらはここの宿屋の娘さんのリットちゃん。　仲良くしてあげてね？」
「ええと、リットです。　ルカちゃん、こんどいっしょにあそぼう」

ケーナの服を掴んで隣に密着して座っていたルカは、満面の笑みを浮かべたリットを見、ニコニコしていたケーナを見上げ、椅子からゆっくり降りてリットと向き合うとペコリと頭を下げた。

「……ルカ……です。　よろし、く……」

背丈は似たようなものなので同年代に見えるが、ルカの方が二歳年上の筈だ。　家業のお陰がマレールの方針か、余程しっかり者に見えるリットの方が姉っぽい。　遊びに誘おうとするリットに、首を振ってケーナの傍を離れようとしないルカ。

「誘ってくれてありがとうね、リットちゃん。　ルカはもうちょっと落ち着くまで待ってね？」

「うん、わかった」

素直に頷いたリットに代わって、マレールがスープとパンを持って来る。　ちまちまと食事をするルカを微笑ましく見ていたマレールは、ケーナに身を寄せて小声で聞く。

「随分大人しい子だね？」

「ちょっと惨事がありまして、唯一の生き残りなんですよ」

「そりゃなんとも世知辛い話だねえ……」

顔をしかめるマレールは少し間をおくと、ケーナとの間に流れる暗い雰囲気を払拭するように、ワザと大きな声でケーナに言った。

「アンタ達の歓迎会をしようってことになったからね！　ちゃんと今夜、ウチに来るんだよ！」

「……って、またですか！？　私がこの村に来る度に宴会してませ

ん？」
「いいんだよ。　どうせみんな何かと理由をつけて騒ぎたいだけなんだからさ。　大人しく宴会の出汁になるといいさね！」
「何ですか、その無茶苦茶な理由……」
苦笑したケーナは咄嗟に思い出した事があったので、調理場に戻ろうとしたマレールを捕まえた。
「あー！　待って待ってマレールさん。　ちょっと味見してもらいたいモノがあるんですがー？」
「なんだい味見って？」
「お酒を作って売ろうと思うんですが、私だとお酒の味が良く分からないんですよ」
「それなら構わないけど。　つまりはケーナの奢りってことだね？」
「ええまあ。　一樽あれば……足りますよね？」
前回の宴会で食堂いっぱいに座っていた村人達を思い出して思案するケーナ。　その背をポンポンと叩き、安心させるマレール。
「問題ないと思うがね。　足りなかったらウチの酒もあるさ」
胸を叩いてその辺は気にすることじゃないとマレールが言ってくれたので、一樽だけで良いかとケーナは納得した。
食事を終え、ルカと一旦家に戻り二人の家人に声を掛けた。
「……だそうなので、夕飯の準備は必要ないからね」

「はあ。　自分達二人分の賄いだけで済むと言う訳ですね？」
「……」

うんうんと頷くロクシーヌをロクシリウスは欺瞞の目で見つめる。

「何を疑心暗鬼してんのよ？　心配しなくてもアナタの分もきちんと作るわよ。　残飯（ねこまんま）で良いわよね？」
「ほー、気を使わなくて良いぞ。　お前の飯に手を付けるくらいなら川魚で事足りる」

ギシリと二人の間の空気に緊張感が漂う。　ケーナの後ろでローブの端を握っていたルカは、頭を抱えた義母を見上げた後、両手をパタパタと振りながら両者の間に割って入った。　不意な闖入者に疑問顔になる二人。

「「御嬢様？」」
「ケンカ……、したら、ダメ……」

普段俯きがちな少女から、強い意志の垣間見える目線を食らった執事＆メイド（トムとジェリー）は、ばつの悪い表情で間合いを外す。　再戦の危機が去ったのを確認したルカは、感極まったケーナの抱擁を受けて、薄い胸に捕らえられた。

「えぅ？」
「感動した！　ルカってばなんて頼もしいの。　今からアナタを調停大臣に任命するわ！」
「……ちょうて、い？」
「二人が喧嘩を始めたら止めて頂戴。　ルカには適任、ぴったりのお仕事ね！」

既に親馬鹿の様相を呈している主人に冷や汗を垂らすロクシーヌとロクシリウス。　そんな二人にケーナから突き刺さる鋭い視線。
背筋を伸ばして命令に身構えるロク＇Ｓ。

「二人も宴会には行くんだからね？」
「は？　いえ、自分達は召使いでして、ケーナ様の歓待に混ざる訳には……」

『二人も行くんだからね？』

「「はいっ！」」

首を横に振ったら最後、その場で人生が終わりそうな声色（きょうふ）に、ロクシーヌとロクシリウスは強張った顔で即答した。　「よろしい」と納得したケーナがルカの手を引いて、再び村回りに出る後ろ姿を見送った二人は、嘆息してよろよろと座り込んだ。

「「はあぁぁぁぁ～……」」
「こ、怖かった……」
「あの親にしてと言うべきか……。　将来が末恐ろしい御嬢様だな」
「だいたい、ロクスがねぇ」
「先に妙なことを口にしたのはシィだろう……」

再び顔を突き合わせようとした二人は、ぴったり閉まっている玄関口から二対の視線が覗いている気がして、同時に体を強張らせた。

「……ねぇロクス」
「……なんだ？　シィ」
「自分達、今まで仲がとても悪かった気がするの。　今この場から態度を少し改めようと思うわ。　実に不本意だけど」

「奇遇だな、自分も同意見だ。　とてつもなく不本意だが」

「……」

「……」

真剣な表情で頷いた二人は、何も無かったようにそれぞれの仕事に戻る。　その際、絶対に玄関口に目を向けようとはしなかった事をここに記しておく。

揺れる麦穂を見ながら畑仕事をしている村人に挨拶をし、ロットルと出会って猟について話をした。　そんなに広くもないが、村人達が暖かい声を掛けてくれるので、ゆっくり回りきる頃には夕方となっていた。

ルカはと言うと多少の警戒心もほぐれたらしく、ケーナに寄り添うくらいに引っ付いていたのが、手を繋げるくらいまでになった。

ケーナの頬も緩みっ放しである。

最後に彼女らが足を運んだのは、『堺屋・出張支店』と看板が掲げられているラックス工務店だ。　ここの主人であるラックスと弟子のドダイは納品の為出掛けていて、妻のスーニャと息子のラテムが残っていた。

「こんにちはケーナさん。　これからは隣人同士よろしくお願いしますね。　お嬢さんも」

「こちらこそ宜しく御願いしますねスーニャさん、ラテム君も。ほら、ルカもご挨拶は？」

ケーナに促されたルカはおずおずと前に出ると、なんとか分かる程度に頭を下げた。　ケーナは失礼かなとも思ったが、二人は微笑んで返してくれた。

「あと、すみません。　ケイリックが何か無茶を言ったみたいで」
「ああいえ、特に私達に不満が有るわけではないので。　むしろ、『堺屋』の看板を預かっている所が畏れ多いと言いますか……」

ケーナが居るのが丁度良かったらしく、ケイリックの主旨を説明された。　流通に回せそうなモノが有れば、材料の調達を請け負うので遠慮なくどっさり作ってくれて構わないだとか。

「どっさりって……。　何を作らせるつもりなんだろう、ケイリックってば」
「それにしても、ケーナさんがまさか大旦那様の祖母だったなんて……、びっくりしましたわ」
「ああ、偉いのはケイリックなんで、私は今までの接し方で構わないですよ」

苦笑して手を振るケーナ。　スーニャもケイリックに接し方については「多分気にしないから」と言われていた。　その通りの反応なケーナに好感を得て、今後も友人として付き合っていけると思った。

「あー、じゃあちょっとサンプル品だけ出すんで、あっちで売れるかどうかだけ聞いて貰えます？」

ぶっちゃけケーナが【転移】で飛んで行けばソレで済むが、ルカの事もあって早々村から離れられないので、商品登用は堺屋に丸投

げにした。　麻袋に詰められた一袋四十キログラムはある麦を四袋出して、【技術技能（クラフトスキル）：ウイスキー作成】と【ビール作成】を実行する。

　袋諸共火炎水に消えた麦は、九十リットル入りの洋樽となって即完成した。　それぞれ一つずつ並ぶウイスキー樽とビール樽を見たケーナは、頭を抱えた。

「中身は兎も角として。　樽はどこから出てたのよっ！？」

『麻袋ト籾殻（もみがら）カラナノデハ？』

「リアルで目の前にすると実に納得いかない気がするなぁ……」

　ぶつぶつと謎の会話をするケーナに気を使っていたスーニャは、「とりあえずこっち」と差し出されたウイスキー樽から少量をコップに移し、味見をする。　ビール樽はこのまま宴会へ持っていくつもりなので、そちらで御披露目をするつもりだ。

　大人達が会話している中、ルカはラテムから木切れと木の実で作られたヤジロベーを貰っていた。　ケーナから距離を取らない位置で、あちこちに乗せては喜んでいる。　それに気を良くしたラテムも今まで作った造形物、木彫りの動物や転がして遊べる馬車などを引っ張り出し、解説を交えながらルカに見せていた。

　お酒の方はと言うと、スーニャの感想は「なめらかで味わった事のない」と好評だった。

（確かウィスキーって水か氷入れるものだったような？）

　……と、その昔父親が飲んでいたのを、かすかに思い出したケーナだが。　相手は酒豪で知られるドワーフの嫁である。　特に割るものも必要なく平然としていた。

31話　翼を解き放とう

宴会でビールはかなりの好印象で飲み干された。
あまりの好評さに、参加した村人の男衆はぐでんぐでんになるまで酔っ払った。　ひと樽が空になったのに、マレールが随分と呆れていた。　これにより、マレールがケーナに材料と少量の手間賃を払い、食堂でビールが供給される事となった。

二日程してラックスが戻ったが、ウィスキーの試供品を持ってヘルシュペルのケイリックの元へ再び向かった。
採用されれば、大量の麦がケーナの元に運ばれる手はずとなっている。　そうなったらケーナの村での仕事は決まったようなものだ。
それはそれでケーナとしては物足りない気もしていたが。

更に村に移住して五日ほど経った頃。
ルカは相変わらずカルガモの雛のように、ケーナの後ろをちょこちょことついて行くのが定番の光景となっていった。　姿が見えなくなると途端に情緒不安定になるし、夜にはケーナのベッドで一緒に寝るのが当たり前に。　それでも視界の片隅にケーナがいれば問題ないらしく、宿屋の手伝いの合間にリットやラテムと一緒に遊ぶことが出来るまでになっていた。

ラテムはルカよりは更に年上の十三歳で、店主のラックスが居なければ工務店の仕事に参加させられない。　という事で、子供三人

のまとめ役な感じに据えられた。　ケーナが子供の頃に覚えた遊びをやってみたり、ラテムから簡単な木彫りを教えて貰っていたり、時にはケーナも交えて畑仕事を手伝ったり、リットと花冠を編んだりして遊んでいた。

　どちらにしろ、近くには常にケーナが居ることになるので、むしろそっちが監督役になっている。

「よし！　これでいいんだな。　つぎに……あ、あれ？　繋がらない？」

「どれー？　ラテムくん、この前からもう違うよ～」

「こう、……ここを、くっつける。　さきに、ほどいてから……」

　畑の端に群生している雑草花で花冠を作っている子供三人。　柵に寄りかかったケーナは、手元の本に目をやりながら、子供達の会話に自然と笑みがこぼれていた（多少耳を塞ぎたくなる植物の声を完全スルーして）。　珍しく外に出ていたロクシーヌは、おやつを入れたバスケットを持ってその傍に控えている。

　子供達が揃って遊べる時間は、午前中は昼少し前と午後は昼食後から夕方になる前までだ。　基本的に、家業の手伝いに主な時間を取られるリットに合わせたサイクルになっている。

　ラックスが戻って来ればラテムも家業を手伝う為、三人で遊ぶ事も減るだろう。　午前中は少しずつ文字を教えていたケーナだったが、ルカが二人の前で自分の名前を披露したところ、生徒が二人増えた。　お陰でその後日からは三人の子供達と、時折手が空いたからと言って顔を出す村人達に青空教室で先生をやる羽目になっていた。

ここまで王都と離れている村だと、識字率はほぼ無いに等しい。
生まれてから死ぬまで、文字などとは無縁の生活を送る者が殆どであった。　かろうじて村長が平仮名が読める程度、マレールとガットが三桁の足し算引き算が出来る程度だった。

「まさかこんな所に来て先生役をやる事になるなんて、ねぇ？」

呟きが笑い話みたいな感想をもって口に出るくらい予想外と言うか、人間何が誰かの役に立つか分からないものである。　聞いていたロクシーヌは当然とばかりに頷いていた。

「学のあるケーナ様にとって、村人達（しもじも）に手を差し伸べるは至上の慈悲でございましょう」

相変わらず掴めない思考形態のメイドが特に、頭の痛い問題である。

「オプスってばどういう作り方をしたんだかなぁ……」

ハンドベルから喚び出される者については、例の如く膨大なキャラクター設定から作る必要がある。　ロクシリウスの方はケーナの趣味で少年猫執事になっているが、ロクシーヌの方は悩んでいるところにやって来たオプスが、ちょいちょいと作ってしまった。『〇〇で〇〇』という性格設定もあって、ロクシリウスが『誠実で献身的』とした。　ロクシーヌの方に至ってはオプスに聞くしかない。
推定『自由で奔放』かそんな感じだろう。　オプスの持っていたメイドが黒髪エルフの『お淑やかで優しい』っぽかったので、その逆になっている可能性が高い。

「もう、シィ？　私達と村人達に貴賤の差なんてないんだから！

村の人にはそう言う事は言ったら駄目だからね」
「……申し訳ありません、差し出口を致しました」

ケーナに叱られて頭を下げるロクシーヌ。　特に反省しようとする姿勢も感じられないので、「だめだこりゃ……」とケーナは呆れていた。　もしかしたら『至上主義』とかに設定されているのかもしれない。　そのあたりはスカルゴ達より余程頑なである。

「クロステットボンバー様の書かれたその本、長いですね？」
「ん？　ああ、まあ、オプスらしいとゆーか。　言いたい事がさっぱり分からないわ」

ケーナの手元にあるオプスの守護者から託された、しっかりとした装丁の本をチラリと見るロクシーヌ。　『千百レベルの者しか持てない』、『読まないとページが捲れない』と制約が有るために中々読み進んでいなかった。　あちこち移動していた時より格段に時間がとれる今になって、初めてゆっくり読むことが出来ている。

リアデイルの世界で、このような小物はプレイヤーの手で幾らでも作成できるようになっていた。　作る基礎アイテムの分を課金を消費して買う必要があるが、手に入れた時点で外見や制約を加工して手元に置いたり、ギルドの調度品として置いたりしていた。　レベル概念をもたないペットとして加工したり、ギミックの付いた馬車になっていたりとプレイヤーの数だけ種類が豊富だった。　くりーむちーずのギルドの正規の入り口になっていたギミック扉は、オプスの手によって作られた逸品だ。　見た目悪趣味な顔の銅像の目を押して、舌を引き抜く必要があったけれど。

本の内容に関してはウンザリする程多岐にわたっていた。冒頭のように意図の掴めない文章があり、生活の知恵的な雑学（ここでは役に立たないモノ多し）があり、過去オプスと交わした会話ログがあったり、口にするのも憚(はばか)られるえろえろな事が書いてあったり、如何に効率良く罠の連鎖に他人(プレイヤー)を貶めるか、やら等と。彼ならば書いても可笑しくはないな、と思われる事が端から端まで記してあった。

「はー。これ読むだけで精神がごっそり削られていくような気がするなー」

『バックアップヲトリマスカ？』

「とらなくていいよっ！」

「ケーナ様も少しはゆっくりされては如何です？何も考えないで一日中寝ているというのも、いい気分転換になるとおもいますよ？」

太陽の高さから頃合いだと判断したロクシーヌは、保温してあったおしぼりを取り出して、子供達へ声を掛ける。おしぼりを配り、ケーナにも渡した所で気遣いらしい言葉を口にした。

「家と御嬢様でしたら、自分とあの駄犬(ノラ)にお任せ下さいまし」

「……仲直りしたんじゃなかったの？」

「いえ、折り合いをつけはしましたが、和解などとてもとても。自分達は不倶戴天の敵同士ですよ」

きっぱり言い切るロクシーヌに、一体何が原因でここまで仲が悪いのかと、ただ首を捻るばかりだ。

「それにしても、これ以上のんびりしろって？」

青空を見上げながら呟く。

まあ、花冠になる植物達の声が聞こえるだけでも精神衛生上非常に心苦しい。

空と言えば約束事が有ったのを思い出した。　ルカからの花冠を苦笑して受け取りつつ、以前にリットと交わした話を実行させようと思案し始める。　前はリットだけだったので単純に【飛行】を使って連れて行けばいいか、と考えていた。　それが三人に増えた為に色々と安全策を取り混ぜて考え直す。

子供達はロクシーヌの作ったクッキーを頬張りながら、本を開いたままブツブツと呟くケーナを怪訝そうに見ていた。

「なんか、おねーちゃん嬉しそうに見えないね？」

「うん……。　なんか、かなし、そう？」

「そう言えば親父に聞いた事があんだけど。　ハイエルフ族って植物の声が聞こえるとかなんとか」

「「え！？」」

リットとルカはびっくりして、今まで自分達が居た場所を振り返

った。　白や紫が斑に咲き誇る名も無き草花。　散々自分達がむしった為に、一部が葉だけになった無惨な光景が広がっている。　申し訳なさそうに俯く二人へ、お茶を淹れて給仕をしていたロクシーヌが安心させるように声を掛けた。

「ケーナ様はその程度でお二人を責めるような心根の狭い方ではありませんわ。　なんでしたら、ケーナ様の見てない所で作ればよろしいのです」

「おねーちゃんの」

「見て、……ない」

「所なんか他にあったか？」

むむむと額を突き合わせ相談し始める子供達。　微笑ましい姿に主との現状を見合わせて、ロクシーヌは小さく噴き出した。

翌日、マレールとスーニャに計画実行を打ち明けて、もしかしたら子供達を危ない目に晒すかも知れない可能性を伝えた。　しかし二人共、アービタをも唸らせる冒険者であるケーナが同行する、との理由だけであっさり子供達を預けてくれた。

午前中は何時も通り読み書きの勉強に費やしたケーナは、午後に広場へ子供達を集めて告げた。

「さて、本日は空を飛びましょう」

言われた意味が理解しきれずに首を傾げる三人。　苦笑したケーナはその場で久し振りの魔法を行使した。

【召喚技能（サモニングスキル）：ｌｏａｄ：鷲獅子（グリフォン）】

翠色に輝くラインが数メートル上空に魔法陣を描き上げる。　二重円に六亡星、不可思議な文字を記し完成した陣から濃密な翠光が下に向かって降り注ぎ、その光の回廊をゆったりと滑り落ちるように前半分が純白の鷲、後ろ半分が雄々しい獅子の体躯を持った幻獣が顕現した。

キュロロロゥロゥ～！！

鋭く甲高い鳴き声を村に響かせたグリフォンは、魔法陣が消失してその巨大な体躯を見物していた村人達の前に姿を現す。　アフリカゾウなどより一回り大きな姿にどよめきが広がった。

【召喚技能（サモニングスキル）：ｌｏａｄ：グリーンドラゴン：ＬＶ５】

続いてグリフォンの隣に降り立ったのは、翠鱗を陽光に煌めかせる同サイズのドラゴンである。　他のドラゴンに比べて飛ぶことに特化した羽根は二対四枚あり、ひとつひとつが体躯を覆うくらいデカい。　羽根の異常さが際立つ特徴として、その体はグリフォンよりスリムになっていた。

御伽噺や伝説、吟遊詩人の詩などでしか語られない本物を見た村人達の殆どは、あんぐりと口を開けて呆然としていた。　降り立った二体は差し伸べられたケーナの手や体に羽毛や鱗をこすりつけて、唸りながら甘えていた。　第三者から見れば猛獣使いの遥か斜め上

をいく所業に、軒並み自信を喪失しそうな光景だ。

本来の目的で使用される”召喚獣”と言うものは所詮戦闘目的だ。その時点で彼等は、視認するだけでも周囲に威圧や恐慌状態を与えるスキルが常時発動状態にある。……のはゲーム上の設定であった。

幾度か召喚獣を喚んだ結果、使役（どうぐ）じゃなく召喚獣（ゆうじん）と認識しつつあるケーナに応える様に、彼等はその自身に備わっているスキルを制御してくれるようになっていた。ケーナが大切な隣人と思う村人達に配慮して、その苛烈な気とも言うべきスキルを押さえ目にしてその場に降り立った。

ケーナにくっ付いていた為、グリフォンの首筋の柔らかい羽毛にモフられる羽目になるルカ。頭上を大人すらも引き裂けそうな鋭い嘴を備えた頭部に丸い金の瞳が通過する。ひしっと硬直したルカに気付いたケーナは、抱え込むように持ち上げて二体に紹介した。

「はいはい二人共、今度私の娘になったルカよ。何かあったら依（え）怙贔屓（こひいき）して守ってね？」

巨大な二体に顔を寄せられ小さい悲鳴を上げかけたルカに、二体はペコリと頭を下げた。目を丸くしてコミカルな行動に毒気を抜かれた少女はおそるおそる手を伸ばし、ドラゴンのすべすべした鱗に触れた。気持ち良さそうに目を細めるグリーンドラゴンに破顔するルカ。

ケーナの親バカ満載な発言に、コートやマント等の防寒具を持ち出してきたロクシリウスが同意するように頷いていた。唖然としているリットとラテムの背を軽く叩いて正気に戻らせると、コートを渡す。

「空の上は寒いですから、これをしっかり着て行ってください」
「さてさてリットちゃんとラテム君。　どっちに乗りたい？」

言われた事を飲み込んで暫くしてから二人して「えええええっ！？」と驚愕の声を上げる二人。　そうしてドラゴンを見る。　背中に乗ったとしても、どこにも掴まれるところなどなさそうだ。　グリフォンはその点モッフモフな羽毛を備えている為、掴まるところには困らないだろう。　顔を見合わせて頷いたリットとラテムはおそるおそるグリフォンを指差した。

「そう。　じゃあルカは私と一緒にミドリちゃんの方ね？」
「……ん」

気配りが細やかなロクシリウスと相談して、飛ぶにあたり色々と保護処置を取ってある。

ケーナと一緒ならまだしもグリフォン側は子供だけなので、翼を阻害しないようにロープを結び、即席の手綱とした。　子供達にはもしもの落下に備え、ケーナに【引き寄せ】られる効果を持つ腕輪を装備させておく。　腹這いにしゃがんでも子供の背では届かないので、ロクシリウスが二人をグリフォンに乗せる。　彼の背丈もケーナと大して変わらない為に、人間離れした跳躍力でひょいひょい運ぶ。

コートを着込んだ二人がしっかりとロープに掴まったのをロクシリウスが確認し、合図を受けたケーナが先に飛び立つようにグリフ

ォンへ指示を出す。　ひと声鳴いたグリフォンはゆっくりと翼を羽ばたかせて垂直上昇。　村にある一番高い木を越えた所で横移動に切り替え、村の上空を大きく旋回するコースを取った。　おっかなびっくりの悲鳴も直ぐに歓声へと変わり、楽しそうな声が聞こえてくる。

　それを確認してからケーナも自分達の乗るグリーンドラゴン（ミドリちゃん）へ離陸命令を出した。　こちらはグリフォンとは違い羽ばたく事をせず、翠の魔力光を躯に纏ってふわりと浮き上がった。　ゲームだった頃には召喚のみの存在ながら、延々と高々度を飛行していると言う設定だった為に、離陸時には【浮遊】と【飛行】を併用しなければ飛び立てないからだ。　上空を回っていたグリフォンと並ぶと、リットとラテムの様子を伺うが特に怖がったりしている様子もないので胸を撫でおろす。　ルカはマントにくるまってコアラの子供みたいにケーナにしがみつき、時折周囲の風景を見渡していた。

「二人共怖くなーいー？」
「だーいじょーぶー！」
「すっげー！」

　風切り音に混じって元気な声が聞こえてきたので問題ないと判断したケーナは、予定通り東側の山脈へ向かうコースを二体に示唆した。　守護の塔を回りヘルシュペルの国境を掠めて村に戻る予定だ。

　巨大な皮膜を備えた羽根を広げたグリーンドラゴンが上昇気流を捕まえて一気に高度を上げた。　バッサバッサと空を駆け上がりながらグリフォンがそれに追従する。
　村人達は「行ってらっしゃーい」や「気をつけてなー！」などの声を上げたり、手を振ったりしてケーナ達を送り出した。

32話　子守は思ったより大変

飛ぶまでが大変だと思っていたケーナは、飛んでからも大変だと思い知った。
まずグリフォン側の子供達のはしゃぎっぷりが半端じゃない。
風切り音が轟々と騒々しい中、「きゃー」「うおー！」だのの歓声がけっこう聞こえてくる。

「ジェットコースターに乗った子供ってこんな感じなのかなぁ」
「……？　じと？」
「あぁあ～何でもないナンデモナイ。　ルカは気にしなくてもいいわ」
「うん」

グリフォンにはドラゴンの影に入る位置で飛ぶように指示を出し、ケーナは子供達の様子を確認しながら、もしもの時にはフォローが出来るように準備していた。　心配する側の心労もなんのその、リットとラテムは下を指差して何事か相談している。　その際に身を乗り出すのは勘弁して欲しいとケーナは思う。

グリフォン側だけに注意を払う訳にもいかない。　グリーンドラゴンに乗る際にも手綱をくくりつけたが、掴まっているのはケーナだけである。　ルカは胸元にしがみついている為、周囲を警戒するときに体を捻ることが出来ない。　ルカは周囲を見渡してはビクッとしてしがみつき、見渡してはびっくりし、を繰り返していた。
それをやられている方はこそばゆいのである。　安心させるように言葉を掛けて頭を撫でたり背を軽く叩いたりして構っていた。

更に問題があった。

ケーナは忘れていたが、空にも普通に凶暴な猛禽類的のモンスターがいる。　流石に見掛け倒しだけでなく威圧感も兼ね備えたグリフォンやドラゴンに近寄って来ようとはしないようだ。　しかし相手が空腹感に耐えかねて子供達に襲いかかったらと思うと気が気でならない。

羽を伸ばしに来たはずが、積み重なる不安感にどんどんストレスを溜め込む羽目になるケーナだった。

村から離れて少し行けば地面を進むより早くケーナの守護塔に着く。　陽光を乱反射してキラキラ輝く塔を大きく二周して北の国境側へ向かう。　ケーナの守護塔は頂上を頂点としたドーム状の魔法無効化結界兼障壁に覆われている為、空から近付くことが出来なくなっている。　子供達は初めて見る高層建築物（？）に興味津々だ。

高さだけならヘルシュペルやフェルスケイロの城を越えるので、ラテムも驚いていた。

この後は山影から入って河の上を通るコースになる。　一応ヘルシュペル国境警備からは見えない高度で移動するつもりだが、見つかってしまった場合は孫のコネに頼る予定だ。

高速を維持したままで輝く水面スレスレを飛ばすと、それだけでグリフォン側は大喜びだ。　ドラゴンはケーナからの魔力供給で【

飛行】魔法を継続させ、その後ろに続く。　低空飛行を持続させるのに不向きな体の構造なので苦肉の策であった。

その途中経路で、母と息子の共同作業である橋をヒョイと飛び越えた。

「あれ……？」

飛び越えたはいいが、何か妙なモノまで同時に見た気がしたケーナは首を捻った。　子供達の安全面だけに気を配っていた為に、橋上にわだかまっていた風景の一部がキチンとした形で認識出来なかったのだ。

先行するグリフォンの上ではこちらを振り向いたリットとラテムが、身振り手振りで「橋がー！」とか「橋でー！」と大騒ぎをしている。　仕方なく第三の目に質問してみた。

「キー。　今、橋になんかいた？」

『モンスターニ襲ワレテイル馬車ガイタクライデショウカ』

「って、えええええっ！？　え？　ちょっ！？　み、ミドリちゃんバックバック！　転進てんしーん！」

慌ててドラゴンに命令を出すがグリーンドラゴンは高々度を悠々と舞うのに向いているため、緊急機動には不向きだ。　健気にも召喚主の命を受け、一度高度を取って旋回しようとするグリーンドラゴン。　しかし、乗っている子供達の事もあり、ケーナの思考は袋小路に陥った。

「やれやれ、進退窮まりましたかね？」

橋のど真ん中でどうにもならなくなっている現状を確認したエーリネは、腹を括るべきかと目を細めた。

前門のオーガに後門のゴブリン、幾ら武で知られたアービタ率いる『炎の槍傭兵団』と言えど、団長不在で半数以下の状態では三台の馬車を守りきるなどとは難しいだろう。

「運が向いてきたと思ったんですがねぇ……」

荷台に積まれているけして大きくはない木箱数個をチラ見した彼は、表情に諦めすら浮かべずに呟いた。堺屋のケイリックから直々に輸送を頼まれた品物は、辺境の村へ住む事になったらしいケーナ宛だ。これ数個だけで、別の馬車に丸々詰まっている荷物分の輸送料に匹敵する。おそらくはそれだけの儲けが見込めるモノなのだ。

ついさっきまで隣にいた付き合いの長いアービタと、「嬢ちゃん様々だなあ」とか気楽に笑い合っていたのが嘘のような切羽詰った危機感に、つくづく世の中の不運と幸運バランスに舌打ちをせざるを得ない。

最初の襲撃はヘルシュペル国境を越えてしばらく進んだ辺りだった。

オーガ一体とゴブリン三体に後ろから襲撃されて、アービタが仲間の半数を連れて対処に向かった。　商隊は少し離れて待つ予定であったが、ある程度離れた所で更にゴブリン五体がアービタ達と分断するように現れたのだ。　副団長の判断で、馬車のスピードには付いて来られないとして商隊を早足で進ませた。　しつこいゴブリンを撒くくらいには橋まで来ることになり、渡り掛けた所で対岸側からオーガが三体現れ、残った団員でなんとか防いでいる所へゴブリンに追いつかれたのだ。

多分、何時まで経っても戻らないアービタの方にも増援があって足止めをされているのだと思われる。

とても少し知恵が働く、と言われるオーガ達が取る戦法ではない。

背後に何者かの思惑が見え隠れする組織立った行動に戦慄すら覚えるエーリネだった。　つい今し方頭上を通過して行った巨大生物の存在もあり、何かとんでもない出来事が裏で進行しているのではないか。　……というのは考え過ぎなのか、胸騒ぎがしてならない。

今はまだ幅の限られた橋の構造上凌げているが、こちらにも増援があった場合にはどう見ても防ぎきれなくなる。

【魔法技能（マジックスキル）：ｌｏａｄ：雷光（ライトニング）よ薙払え！】

救援の手が差し伸べられたのはその時である。

川下側から空気を灼きつつ伸びてきた数条の雷蛇が、橋や馬車を無視して副団長達と攻防を繰り広げていたオーガ三体に突き刺さった。　その想像を超えた破壊力は一瞬で、肩口に食らったオーガは腰から上を炭化させ、腹に当たったオーガは膝下と頭を残して胴体を丸ごと炭化。　数条いっぺんに食らったオーガは只の消し炭と成り果てた。

副団長やエーリネを含む視線が魔法の飛んできた方向を振り向けば、さほど離れていない空中に子供を抱いたままでフワフワ浮くケーナがいた。

「「ケーナ殿！？」」

驚くのも束の間、今度は商隊の後列に頭上から大質量が橋脇へ落下。　最前列の馬車までびしょ濡れになろうかという程の水柱が吹き上がった。　勿論見越していたケーナによって商隊には【障壁】が張られ、影響を受けたのは最後列でちくちくと嫌がらせをしていたゴブリンのみである。　五体とも水圧によって吹き飛ばされ、もがきながら河を流されていった。　どちらにせよ橋に残っていたとしても、落下したグリーンドラゴンと相対せねばならなかったので奴等にとっては幸運な事だろう。

「ケーナ殿！　お願いがあります！」

消し炭になったオーガ達も払拭された橋に降り立ち、再会の挨拶

を交わそうとしたケーナを制して副団長が声を荒げた。
「は、はい？　どうしたんですか？」
「暫くの間、商隊の護衛をお願いできないでしょうか？」
「はあ、いいですけど？」
訳が分からないままケーナが頷くと、エーリネに一声掛けた副団長は残った団員を引き連れて元来た道を駆けて行った。「団長ご無事でええええっ！！」と、鼻息荒く。
唖然と見送ったケーナに、エーリネは頭を下げた。
「ありがとうございます、ケーナ殿。　お陰で人も荷も無事で済みました」
「え？　ああ。　偶然通り掛かって良かったですよ」
キュ～ロ～
そこへ鳴きながら飛来したグリフォンがグリーンドラゴンの横にゆっくり着水した。　グオゥ　キュオロ～と双方で挨拶らしきものを交わし、大人しくケーナの命令を待つ。　一度、村までリット達を下ろしに戻ったので、その背には誰も乗っていなかった。　ルカだけはケーナと離れるのを嫌がったので仕方なくそのままである。
一旦橋を渡った場所で事のあらましを聞き、ルカを紹介した。
「ほお、ケーナ殿の娘さんですか？」
「……ルカ、です」
ぼそぼそっと呟いてケーナの腰にしがみついたままペコリと頭を

下げる。

「エーリネと申します。　どうぞよろしく、ルカ嬢」

珍しく促されるより前に自分から挨拶をしたので、嬉しそうなケーナ。　それだけで何となく母親っぷりが分かってしまったエーリネは苦笑した。

「にしても、オーガがこんなことするのは珍しいんですか？」

「まあ、ここまでの戦法をとるのはまずない筈ですよ。　その話はアービタ殿が戻って、落ち着いてからにしましょうか」

ゲーム中ではクエストによって蛮族が組織立った行動を取るのが普通だった為、いまいちピンと来ない。

グオゥロゥ～

考え込んだ主人の代わりに歩哨を務めていたグリフォンとグリーンドラゴンは、橋をがやがやと騒々しい一団が渡って来るのを見付け、威嚇の声を上げた。　先頭を歩いていたアービタは、ドラゴンを見るとおっかなびっくり近付いて来る。　厳つい男達にビビりまくったルカはケーナの後ろに隠れてしまう。

「お疲れ様ですアービタさん」

「よ、よお、嬢ちゃん」

「済みませんケーナ殿、ありがとうございます」

副団長は礼を言って団員達を配置に付かせ、商隊を進ませる準備に入る。

「怪我人とかは？」
「ああ、平気ッスよ。　これぐらいなら怪我したうちに入らないッス」

一番重傷者に見えた左腕に包帯を巻いたケニスンが、軽口を叩くのを見て頷いた。　もう大丈夫かと判断したケーナは二体を労ってからグリーンドラゴンだけを送喚した。

「じゃあ、村でお待ちしてますので話はそこでしましょう」

ルカを抱いてグリフォンの上にひらりと跨ると、エーリネに一声掛けた。　主人の命令を受けたグリフォンは砂塵を巻き上げて上昇し、村へ向かって飛翔して行った。
見送ったアービタの顔にはありありと不満そうな表情が見て取れる。

「なんだなんだ、嬢ちゃんにしちゃあ随分薄情じゃねえか……」
「優先順位から見て、娘さんに負けましたね」

ぷっ、と噴き出したエーリネは彼女の親馬鹿っぷりからして当然だと頷き、アービタを困惑させていた。

33話　親馬鹿もココに極まれり（増量版）

結局商隊が村に辿り着く頃には日もとっぷり暮れてしまっていた。
エーリネがラックス工務店宛の荷物を渡しに行って看板に噴き出したり、傭兵団員の一部がロクシーヌに色めき立って声を掛け呆気なく撃沈したり、ビールを飲んだ団長以下全員が杯を重ねへべれけになったりもしたが、特に問題もなく夜が明けた。

「ではコレがケーナ殿宛の荷物ですよ」

玄関先に積み上げられたみかん箱サイズの木箱が五つ。釘抜きを持ち出して来ようとしたロクシリウスを制したケーナはアイテムボックスから引き抜いたルーンブレードを横に一閃、箱の蓋の部分を寸断した。頭を抱えるエーリネに不思議そうな顔をしながら内容物を確認すると、鈍色（にびいろ）の細かい鉱石がギッシリ詰まっていた。

「石？」

「へ～、特徴だけしか言ってないのにこんなに集めたんだ。こりゃまたケイリックの手腕も凄いわね」

五箱みっちり詰まった魔韻石を見たケーナは感心していた。エーリネの鑑定眼から見てもその辺の道端に落ちている石と変わりないモノに見える。判別するには【魔法技能：鑑定】が必要なので、たかが数日でこれだけの数を集めた孫の手回しの良さに、評価を上方修正した。

一掴みの石をその場で合成して不純物を取り除き、くすんだ銀色

で直径五センチ程の丸い玉に変える。

【技術技能（クラフトスキル）：封入（インストール）：火炎】

ケーナの掌上で瞬く間に赤く変色した玉に、様子を窺っていたエーリネやロットルも疑問符を浮かべた。彼女はそのままポトリと玉を地面に落とし、隣のエーリネに声を掛けた。

「エーリネさん、ちょっと命令して貰えます？　その際に覗き込まないで下さいね」

「はぁ、ええと何と言えば？」

「『神よ、我等に火を授けたまえ』と」

半信半疑で玉に向かいケーナに言われた通りの言葉を口にした彼の目の前で、高さ三メートルに達しようかという火柱が玉から噴き上がった。一工程で属性とキーワードを設定し、一定量注がれたＭＰによって起働する簡易版魔法陣だ。ダンジョンを造るときには集中して配置する事により、灼熱地帯や冷凍地帯を表現したりするのに使われる。守護塔に使われているのも、これの大掛かりなバージョンだ。ケーナ家に埋め込まれた照明もスナップ一つで点灯消灯するように作られていた。

エーリネや箱を運んできた商隊の人足、ロットルと見物していた村人達がびっくりして逃げ出し、物影に隠れて距離をとりつつ様子を窺う。大してＭＰを入れてなかったので火柱はあっさり消失したが、悪いことをしたと気付いたケーナは「びっくりさせてごめんなさい」と謝った。一度ケイリックの元へ何に使用するのか聞きに行った方がいいだろうと考えて、ロクシリウスに使ってない部屋に運び込ませておく。

「なる程、昔はこのようなものが流通していた訳ですね？」
「剣に入れたりして装備にも使っていましたね。　大抵は……ダンジョン用？」

聞いた単語に変な顔で固まる商隊長。　そこへててっとリットとラテムがやって来た。　ルカをいつものように誘いに来たのだろう。　戸口から半身を覗かせていた少女に駆け寄ると三人で挨拶を交わし、手を引いて村の中央にある井戸の方へ向かう。　ケーナの視界外だったが、子供達だけで秘密の話でもするのかもしれない。
まあ、自身から離れて遊べる事に喜ぶべきか、寂しく思うべきか。

これを容認したのを後で激しく後悔する羽目に。

受領書にサインしてエーリネに渡す。　その後に最近の流通事情や、もしかしたら堺屋へ酒樽を運搬してもらうかもしれないと話をしていると、副団長に引き連れられたアービタがやって来た。

「やっと来ましたか」
「おはようございます、アービタさん」
「済みません、団長連れてきました」
「あー、頭いてぇ……。　よお、嬢ちゃん」

昨日出来なかったオーガ対策の為に、村長まで呼んで今後を話し合う事になった。　商隊が二度も襲われた上に組織立った行動をと

るのが確認されたからである。　炎の槍傭兵団とケーナと合同で討伐に出る予定だ。

「村にも警戒の為、ウチから多少残して行きますよ」
「ロクスとシィが居るから大丈夫じゃないかな？」
「猫の嬢ちゃんと少年だけじゃ数が攻めてきた時は捌ききれんだろ。問題は奴等がどの程度残っているかだが」
「昨日はケーナ殿の倒したオーガ三匹とゴブリン五匹だけですね。団長の方は怪我を負ったら逃げたらしいですから」

何故か家の前で立ったまま会議が始まってしまい、ロクシリウスが持ち出した小さな台にロクシーヌがお茶を並べていた。　討伐に向かう人選と村を守る人選を終えた後、残った問題として肝心な事柄が分かっていなかった。　オーガ達の本拠地である。

「昨日飛び回った時にはそんなものにまで気を回している余裕はなかったなあ」
「ロットルは何か心当たりはないかの？」
「さすがに俺もそこまで森に踏み込んだことはねぇなあ」

村長に問われたロットルはせいぜい森の入り口程度までしか行かないので、心当たりは無いと返答する。　地図を持ち出したエーリネにアービタ達が推測を加えていく。　水の確保が容易で人目に点きにくく山に近い場所として、悪い魔女の住む塔（ケーナ涙目）より向こう側。　川岸の山裾と言う結論を出した。　念の為にケーナも自分の技能を使って確認してみる。

【特殊技能（エクストラスキル）：託宣】

（運営のない世界で果たして使えるのかな、これ？）

人の頭位の水晶玉をでん！　と取り出したケーナに不思議そうな顔を向ける面々。　かつてのゲーム中で【薔薇（オスカル）は美しく散る】とは逆方向にオカシイと言われていた技能のひとつだ。　効果はプレイヤーの疑問に五つまで答えてくれる。　その返答方法は質問に対し……。

「半径六十キロメートル圏内にオーガの巣はあるか？」
ぴんぽーん！

頭上から突然響いた脳天気な電子音に、その場に居た者は例外なく狼狽えた。
そりゃあ青い空の広がる頭上から、普段聞き慣れない音がすれば面食らうのも当たり前だ。

「それは南にある？」
ぶぶー！

「それは北東にある？」
ぴんぽーん！

「そこは洞窟か？」
ぴんぽーん！

「何時も思うんだけどこの技能、水晶玉必要ないよね？」
Ｂｏｏｏ

結果アービタの推測の裏付けが取れただけだった。　ツボに入ったのか、一人肩を震わせて笑うロクシーヌがいたけれど。　半径六十キロメートルと問い掛けたが実際はそんなに離れてはいない。　アービタの見立てでは、ケーナの手助け次第で昼までに辿り着けるらしい。

「アービタさんもとうとう人を便利屋扱いに……」

「いやいや、使える手段は全て使う。　冒険者として当然だろう？」

「ええ、最初っから色々使うつもりでしたからいいですけどねー」

風精霊を召喚して斥候にした彼女は、続いて麒麟を喚び出した。

某ビールのラベルについているアレそのままの姿だ。

馬よりも小さいロバくらいの大きさで、地に足は着いてなく微妙に浮いている。　勿論アービタ達も見たことがなく、外見からして荘厳な雰囲気を纏っているので遠巻きに見ていた。

「ケーナさん、なんスかそれ？」

仲間に脇腹を突つかれたケニスンが代表で尋ねる。　撫でながら「お願いね」と頼んだケーナは皆の警戒っぷりに首を傾げた。

「麒麟って言いますケド、知りません？」

団員達は一斉に首を横に振った。

ゲーム中でレアモンスターのカテゴリーとしてあまり知られていない麒麟は、レベルを持たない非戦闘キャラ（NPC）扱いになっている。

しかし、プレイヤーにも取得出来ない特殊技能を色々持っていて、時と場合を選べばかなりの便利屋になる。　単独で探索クエストを多くこなしていたケーナはかなり重宝していた。

出発する前の装備点検と傭兵団を半分に分ける打ち合わせをするアービタ達と一旦離れ、ロクシーヌを連れてルカを探す。　公衆浴場の裏手でなにやら相談している子供達を見付けて近付いた。

「ルカ？」
「……！？」
「うわわっ！？」
「わきゃっ！？」

声を掛けただけでびっくりして飛び上がり尻餅を突く子供達に苦笑して「ごめんね」と謝っておく。　少女と視線を合わせてしゃがみ込むと頭をなでる。

「少し留守にするから、ごめんなさいね。　何かあったらシィに頼って、ね？」
「主よりは頼りないとは思いますが、どうぞ何でも仰ってくださいまし。　御嬢様」

申し訳なさそうにゆっくり言うと、背後に控えるロクシーヌとの間でルカの視線が揺れ動いた。

「だ、大丈夫だよおねーちゃん！」
「そ、そうそう！　俺達が一緒に居てやるからさあ」

慌てた様子のリットとラテムがルカの両手を取って何度も頷く。
ケーナは娘を一度抱き締めて背を軽くぽんぽんと叩き、二人に宜しく頼むとその場を後にした。

なにやら揃って深ーい溜め息をついたリットとラテムは、居たま

まのロクシーヌから冷ややかーな視線が飛んでくるのに気付くと「ナンデモナイ」と連呼しながらルカを連れて家屋の陰に。　基本的に主とルカ以外はどーでもいいロクシーヌは、家の中の仕事を片付ける為に戻った。

「じゃ、ロクス。　村の守り宜しくお願い」
「はい、御嬢様もお任せ下さい」

村の出入り口で出発する団体を見送るのはロクシリウスと村長とマレール、数人の残る団員くらいだ。　アービタ達はいつもの完全装備で盾役にはフルプレートアーマーを着ている者もいる。　ケーナは普段と変わりない妖精王のローブその他に、最初から腰にマウントした如意棒と、その身の周りには七色の水晶玉が浮いていた。
ひとつからだけでも膨大な魔力を感じ取れる為、アービタは決戦装備なのかと恐れおののいている。

『大体ソチラガワデスネ』
「んじゃ麒麟、あっちへ真っ直ぐね」

以前にキーと作成した周辺地図と照らし合わせ、進む方角を指し示した。　ケーナに頷いた麒麟は街道を無視して森林目掛けて歩き出す。　この後は斥候に出した風精霊との情報と合わせて進路修正していく予定だ。

「お、おい嬢ちゃん、森を突っ切る気か！？　時間が掛かるぞ」
「まあ見てれば判りますから、間を開けずにしっかり付いて来てくださいね」

半信半疑で後を付いて行ったアービタ達は、一歩踏み込んだ麒麟を避けて森が割れたのを見て目を丸くした。　そのまま進んで行く自分達の背後で森は閉じていく。　巨木も茨も下生えの雑草すらも自分達に道を空けていく様に、その麒麟と呼ばれる獣より使役する側の女性が神使（エンゼ）であるかのような錯覚を受けていた。

「麒麟、【行軍】もお願い」

ケーナの命に頷いた麒麟から緑色の風が吹き上がり皆を包んでいく。　以前彼女が使った魔法より高度なモノが展開されたらしく、風景の流れるスピードが明らかに早くなった。　包まれた風に隊列ごと運ばれて行くような感覚に捕らわれ、抜け出せなくなるような気分に寒気がした。

「はあ？　見つかったァ！？」

そんな気分をぶち壊したのは、状況を作り出した本人の素っ頓狂な悲鳴だ。

話は時間を戻して討伐隊が出発する前の村内。
押し掛けてルカを拉致したリット達は公衆浴場の影まで連れて行った。

「見つけたぜ、昨日。　村からそんなに離れていなかった」
「ぱぱっと行って帰ってこれるね！」
「？」

意気込み高らかな二人に、まったく置いてけぼりのルカは意味が分からずリットの服を引いた。　元々会話の少ないルカだったが、ここ数日の付き合いでなんとなく彼女の人となりが分かってきた二人は、安心させるように肩を叩く。

「ほら前にさ、ケーナさんの見てない所で花冠作ればって言われたじゃんか」
「きのーとんだときに見つけたんだ、花畑」
「ケーナさんが居ないうちに行って綺麗な花冠作って来ようぜ！」
「……でも、外……あぶない」

俯いて呟いたルカの前にドワーフの少年は青い涙滴型の宝石を見せた。　リットも見たことがないので不思議そうな顔をする。

「ヘッヘーン。　ちょっと母ちゃんから無断で借りてきた、まじないに使う一個だぜ」

本来ならば起点の五亡星を描く数個と、周囲を囲む無数の点によって形成されるのが各所で使われるまじないだ。　それ一つでも魔物を退ける力を持っているが、微々たるモノでしかない。　端的に言えば、直接魔物という脅威を肌で感じたことのない二人は楽観視していた。　絶対強者（ケーナ）と言う守りの要になりえる者が村に居着いた

為に、村民に『魔物なんてなんてことない』と言う安心感が生まれていた。　勿論そういった空気を良しとしない村長や、村外の危険を肌で感じられるロットル等狩人によって大人は諌められていたが、子供にとってはそれもない。

数ある偶然の不幸が降り掛かり、村を滅ぼされた境遇のルカはその恐怖を心に刻み込まれている。　だから、二人のその『ケーナに見つからない花畑で冠を作る』と言う矛盾に気付いていた。　「ケーナが村に居ない今に花冠を作ればいいのに、この二人は何を言っているんだろう？」　と感じた表情で盛り上がる二人を眺めていた。

結局、ラテムに押し切られる形で「大人には内緒だからな！」と言われたのでロクシーヌに話すことも出来ず、リットに背中を押されてコソコソと村を出る羽目になった。　「何かあったら助けを求めてね？」と渡されたペンダントを握り締めて、友人達もケーナが守ってくれるよう願った。

いつものように村を回って細々とした仕事を終えたロクシリウスは、自宅の玄関前に機嫌悪そうなロクシーヌが立っているのに気付き、眉をひそめた。　イラついた顔で腕を組んで仁王立ちの彼女は意味も無く周囲に鋭い視線を振り撒いている。

「どうかしたのか？」

「お嬢様と料理を作る約束をしたのだけれど、見当たらなくて。アナタいつもの日課で村を回って来たのよね？　その腑抜けた眼で見掛けなかった？」

例によって当てにしているのか馬鹿にしているのか判断しにくいが、彼女はこれがデフォルトだから突っ込んだら負けだ。　ロクシリウスは午前中の自分の辿って来た道すがらを思い出す。　公共浴場を掃除して一軒の屋根を修理。　村の外周を見回りも兼ねて一周してきたが、何時もはそこかしこで遊んでいる子供達の声も姿も見掛けなかった。

「そう言えば姿が見えないな」

「ご主人様が出掛けたばっかりなのに、なんと言う失態。　早急に見付けて保護しなければいけないわ。　折檻を受けるのはロクスだけだとして」

村内に居ないとなると外に出た可能性がある。　幾ら周辺に危険が少ないといっても魔物がいない訳でもない。　急ぎ行動を起こそうと移動し、ラックス工務店前で何やら話合っていたマレールとスーニャに呼び止められた。

「アンタ達、随分と急いでるようだけど、どうしたんだい？」

「重大かつ火急の事件が発生したのです。　お嬢様を見掛けませんでしたか？」

途端に苦い顔になる主婦二人。　それだけでロクシリウス達には確証が得られた。

「もう直ぐ昼なのにリットが見当たらなくてねぇ」

「済みません。　ウチのラテムが石を持ち出したようなので、おそらくはそれをアテにしたのでしょう……」

まじない用の結界石は一つだけでは何の気休めにもならないと語

るスーニャ。『村人の助けになるように』と、予めケーナに命を受けている二人はマレール達に子供達を探し出すのを請け負うと、頭を下げてから村を飛び出した。

炎の槍傭兵団員の居残り組は出入り口と、二人組で外周を警戒している。ラックス工務店の裏手から茂みを抜けて街道まで出た子供達には誰も気付くことは無かった。

そのまま街道を横切り反対側の森に入り、おっかなびっくりと進む。上空から見た感じと実際に足を踏み入れるのとでは全然違う。子供の足もあって目的の花畑に着く頃には太陽は中天まで移動していた。ラテムが花畑内に危険な生物がいないのを確かめて、中央部に移動。輪になって花冠をつくり始める。村内には無い彩りや大輪な花に惹かれ、気が付けば周囲を警戒しなければならないラテムも熱心に作業に掛かっていた。

背筋に寒気が忍び寄った予感に気付いた時には遅く、花畑の周囲を獣の群れに囲まれていた。獲物を追い込む為に唸りを上げつつ木陰から姿を現したのは、茶褐色のウロコを持ったガウルリザードと呼ばれる魔物だった。それが八匹。ワイバーンから角を取って首を短くし大きさが犬くらいといった姿で、群れで狩りをする。皮膜はあってもムササビのように滑空する程度。主に弱いモノを狙うので村などのコロニーには近付かず。しかし離れず、そこからはぐれたりする人や獣がよく被害に遭う。

相手が八匹では子供三人には逃げる事も出来ない、逃げてもガウルリザードの素早さがその上を行くからだ。　進退極まったラテムは気丈にもナイフを構えるがその身は大きく震えている。　リットは村から殆ど出たことが無く、話はロットルやケーナに聞いているものの実際に魔物を目にするのは初めてだ。　その恐ろしさを肌で感じ、真っ青になって硬直している。

ルカも二人と同じく真っ青になって震えていた。　自然と首から下げたペンダントを握りしめる。　ここに来てからケーナに貰った物で、ロクシリウス達からも『可愛いらしいですよ』と誉められたお気に入りだ。　ケーナからは『何かあったらそれに助けを求めるんだよ？　私の最大の守護を込めておいたから』と言われている。

目の前に迫り来る具現化した恐怖に、藁にすがる思いで力の限りペンダントを握り締めた。　そして願う、助けてと。　「助けて、ケーナ、……お母さん」と小さく呟いた。

――了解した

その場に居た三人の脳裏にいきなり力強い声が響き渡ったのはその瞬間だった。

それと同じくしてルカの手から迸った白色光が辺りを真っ白に染め上げる。　それは目を焼く光というよりは子供達を包みこむ暖かい光と化し、餌に対して食欲の本能を向けていたガウルリザードにとっては終わりの宣告を告げる予兆だった。

光が収まった後、子供達は何か大きなモノの影にいた。　恐る恐る見上げてみると、巨大な真っ白い竜の体躯が子供達を守る形でそびえ立っていた。　頭部は前後に長く伸びて家一軒を押し潰せそうな程はある。　表面を覆うのは鱗ではなく白く輝く羽毛だ。　背面に二対四枚の翼を広げ、尾の先まで含めると城程もありそうな巨竜

は、細い眼窩にある優しい瞳を子供達に合わせると「任せろ」とでも言うようにニヤリと口を吊り上げた。

呆気に取られる子供達とは逆に、最大の警鐘を本能から理解したガウルリザード達は群れごとUターンして脱兎の如く逃げ出した。

しかし『ルカの安全を脅かすモノの排除』を命じられている魔導具（アクセサリー）封印型召喚式のホワイトドラゴンＬｖ９９０（親馬鹿仕様）が優先するのは排除である。その身に装備された今の世には凶悪な攻撃方法を迷わず選択した。呼吸と共に周囲の光までもが歪み、彼の口腔に収束して行く。薄く開いた顎、鋭い牙の隙間から虹色の光が見え隠れし始めた瞬間、大きく開かれた口から直線状に爆裂虹光弾（プリズムバスター）が射出された。

大地に着弾した直径十メートルはありそうな虹光弾は地面と樹木を飲み込みながら直進する。その軌跡は木々より高く白光がそびえて森を半分に割っていく有様で。必死に逃げるガウルリザードの群れは瞬く間に光弾に追い着かれ骨も残さずに蒸発した。目標が消えても構わずに直径を小さくしながら直進した光弾は、数キロメートルに渡り森を割ってやっとその威力を消失させた。ルカ達のいる所から見るとたった数秒で森に谷が出来たようだ。

「……す、すげー……」

「……ウ、うん……」

「……」

至上類を見ない程に凶悪な威力を目にした子供達は絶句していた。

その頭上でゆっくりと周囲に目を走らせたホワイトドラゴンは、徐々にその輪郭から燐光を滲ませつつうっすらと消えて行く。ルカの手の中にあったペンダントに亀裂が入ると同時に、その身を構成していた全てを蛍状の小さな光に変えて霧散した。

それと前後して花畑にロクシーヌとロクシリウスが飛び込んで来た。　ホワイトドラゴンのような巨体が出現すれば否が応でもその場に彼等の探し人がいると分かる。　巨体過ぎて村の方からでも見えた為に大騒ぎになっていた。

一方、進行中の討伐隊の方は……。

「おい、嬢ちゃんなんかあったのか？　いきなり妙な悲鳴上げて」

頭上では指を突き合わせて申し訳なさそうな顔で卵くらいの大きさの少女、透き通った緑色の風精霊が浮いている。　やれやれと頭を振って呆れ顔のケーナは頭を下げて説明した。

「偵察に出していた精霊が相手に見つかってしまったようです。相手に術者がいるみたいですね、強襲はむりかなーと」

「オーガの術士か！？」

団員の一人が上げた単語に全員の身に緊張が走る。　ごくごく稀に生まれてくる術士は、本能で動く他のオーガと違い知恵が回るか

らだ。

「そっちの方は嬢ちゃんに任せていいか？」
「任されました」
（どうやらオーガよりはもっと上質の術者っぽいですしね）

目的地も近付いて来た所で付加魔法全般を解除してもらい、麒麟も送還する。　ケーナの頬をペロリと舐めて消えていった荘厳な獣を名残惜しそうに見つめるアービタがいた。

「今の奴は手伝ってくれねーのか？」
「ああ、麒麟はそこが欠点でして。　喚んでいる間、私は攻撃的行動の全てを封じられてしまうんですよ」

まさに探索、高速移動位にしか使えない召喚獣である。　その目的だけであれば多大な恩恵を受けられるが、それ以外の行動では只の足枷でしかない。　ケーナの解説に渋面で腕を組んだアービタは「召喚っつーのも面倒なモンだなぁ」と呟いた。

気付かれているのなら逆に不意打ちを喰らう前に突っ込んだ方がいいと言うアービタ。　教えに従い先に数拡大で防御上昇と耐魔上昇を全員に掛けたケーナ。　一応罠の可能性も考えて、隊列の先頭から洞窟のある場所目掛けて水流系直線魔法を叩き込んだ。　その際途中生えている樹木の抗議には目を瞑る。

【魔法技能（マジックスキル）：激流裂波（クア・ドローガ）：ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ】

空中から出現した大量の水がケーナの周囲を包むようにゴゥゴウと唸りを上げて柱の形に直立していく。　水で出来た巨木のようになった先端部には顎を備えた獣の顔が形成された。　水木内のケーナが手を前方に突き出した瞬間、獲物に向かう蛇の如く巨大な水流

が術者の命に従い突撃をかけた。
木をなぎ倒し大地を抉り、地面と平行に何十トンと言う激流が荒れ狂い有るもの全てを打ち砕きながら直進していった。
その威力に団員達が唖然とするも「ま、まあ、ケーナちゃんだからな……」と納得し各員に号令を掛けて走り出そうとした時、耳を塞いでしゃがみ込んでいるケーナがいた。勿論森からの ―ヒドイ― だの、―キチク― だの ―オニー、アクマー― などの抗議が一点集中してるからである。

「ど、どした嬢ちゃん？」
「いや、分かってはいたんですよ、はい。気にしないで下さい、こっちの都合です」

ハイエルフの特性を理解していないアービタ達は周りの樹木に頭を下げるケーナを変な顔で見るも、今の勢いを崩してはならないと団員達に発破を掛けて洞窟前に乗り込んだ。

丘になっている岩山があり、ぽっかりと人が何とか通れるくらいの出入り口が空いていたと思われる。どうやら先程のケーナの魔法によって入り口を支えていた岩塊が砕け、洞窟が埋められてしまったようだ。手前には数人で乱戦の出来そうな小さい雑草に覆われた広場があり、そこに粗末な革鎧で武装したオーガが五匹いた。
飛び出して行ったアービタ達を見るや否や、互いに顔を見合わせて慌てて武器の棍棒や小剣を構える。妙に動揺している姿にチラリと周囲を確認すると、団員達とオーガ達を挟んだ中央に激流で抉られた地面、そこに腕や足だけになった不揃いなパーツが転がっていた。どうやら前衛として待機していたゴブリン達を、魔法が纏めて料理してしまったらしい。

「一匹は俺が、残りは何時もの通りにな！」

「分かってまさぁ、団長」

アービタを除く八人がそれを合図に一斉に頷いた。　１ｖｓ２で確実に油断なく仕留める彼等のスタンスである。　後衛のケーナが森の中から出て来ないのが不安だが、任せた手前信じるしかない。

とりあえず目前の脅威を片付けるべく、部下達と一緒にオーガに向かって斬り込むアービタだった。

ケーナは樹木に対して頭を下げている最中に森からの警告を受け、足元から石を拾って背後に思い切り投げつけた。

息を呑む気配と同時に何も無い風景に当たって跳ね返った石。そこから滲むように人影が姿を現した。　しっかりとした作りの革鎧にマントを羽織り、ナックルガードがついた弓に似た杖を構える薄黒い肌のエルフが憎々しくしげに此方を睨み付けていた。

「チッ、どうやら感づかれたよ……」

「なんだ黒フか」

言いかけた言葉を遮ってケーナから紡がれた〝つまんねぇ〟とでも感じられる言葉に、相手の黒エルフは怒りの形相を浮かべた。アービタがこの場に居れば最大限の警戒を取ったであろう。　この地で闇に魂を売ったとされる黒い肌を持つ生物は、禁忌として忌み嫌われる（魔人族は夢の神の従者扱いなのでその範疇外である）。

ところがリアデイルと言うゲームでは、キャラクター作成に肌の配色を変えてしまえば黒エルフどころか黒ドワーフも黒猫人族も当たり前に作れるからだ。　それにこの世界の常識に疎いケーナがそ

んなことを知っている筈もなかった。

ケーナ側にしてみれば最初は地元民と思っていたが、対面してサーチしたところで相手の名前に『シナウェヴの轟き』と表示されたことが疑念を呼び起こす。　瞬時にキーが検索してくれて、過去ゲーム中にクリアしたイベントボスと判明した。

（この前の幽霊船もそうだけど、なんで運営無しＮＰＣ無しクエスト無しでイベントボスが起動してんの？）

『誰カガ進行途中デゲーム終焉、ソノママ残ッタノダトカ。　デショウカ？』

杖弓に雷撃魔法をつがえた黒エルフの動作に、森の中をジグザグに縫うように距離を取る。　構わずに射出された雷矢は幾つかの木を削り威力を弱め此方に迫り、ケーナの耐魔防御を越えられずに手前で消失した。

「硬い奴めっ！」

木々の向こうから悪態を吐く声と、更に続けて幾本かの雷矢が飛んでくる。　ここで周囲に滞空していた水晶玉のうち、黄色玉が有り得ない高速軌道を描き飛来した雷矢と接触。　雷矢は小さな放電現象を残して消え失せた。

「なっ！？」

「あー、そこの黒フさーん！　大人しく武器を捨てて投降しなさーい！」

「アンタ、エルフの癖に人間に混じることを良しとするのかいっ！　この裏切り者めが！」

穏便に交渉から繋げるつもりだったが、返答してきた言葉には主題が足りてなかった。

「えーと、何を主張してんのか意味分からないわね？」

『オソラクハイベント上ノ設定ノママ行動シテイルノデハ？』

「ああ、成る程。　しかしイベントじゃこんな饒舌なＮＰＣいないよね？」

『状況証拠ガ不足シテイマス。　断言ハ出来ナイカト』

「何を独りでゴチャゴチャ言ってんだいっ！」

業を煮やしたのか魔道具に頼らず黒エルフは魔法をぶっ放す。

両手の間で収束した雷が上下に引き伸ばされ、黒エルフが頭上で構えを取った直後に射出。　樹木をへし折りながら雷撃槍が突撃して来た。　同じく自動で防御体制を取った属性玉と接触し、矢も消失したが玉の方も砕け散った。

「げっ！　耐久上限越えた！？」

本来であれば中級魔法数発分の耐久性をもつ属性自動防御玉だ。

過去、ゲームでの戦争中に受けた攻撃分を回復しない状態でアイテムボックスに仕舞っておいたので、今ここで限界がきたらしい。

ケーナの焦りようを見た黒エルフは、愉快そうに笑い声を上げて杖弓から長剣に持ち替えて近接戦闘の間合いに入る。

「ハッハハハ、頼みの綱も無くなったようじゃないか！」

腰に差していた棍を自分の身長まで伸ばしたケーナに対し、直線的に突っ込んできた黒エルフが手前で軌道変更。　左にステップを踏んでタイミングを外し、首に向かっての刺突を手元で回転させた

棍で弾く。

「危なっ！」

「甘いねぇ！」

体ごと右にずらして突進を避けるが、黒エルフは弾かれた剣ごと体を独楽のように回転させ、ケーナを右側頭部から斬りつけた。

いや、斬りつけようとしたその腕は回転を持続していた棍に打ち据えられて、剣を取り落としてしまう。　ニヤリとした黒い笑みを浮かべるケーナを見た黒エルフは慌てて距離を取ろうと足を動かすが、何か予期せぬモノ踏みつけ転倒して尻餅をつく。

すぐさま上半身を起こして枯れ葉敷き詰められた大地へ視線を向けると、黒い球体が鎮座していた。　ケーナの周囲を回っていた球体のひとつだ。　その向こう側には左手の棍をクルクル回しつつ、底意地の悪い笑顔で見下ろす魔女が居た。

「はいはーい、投降しますかー？」

「術士のクセに中々素早いじゃないのさ！　だけどマグレは二度もないよ！」

飛び起きて剣を拾い斬りつける。　一連の動作を油断している眼前の敵に叩き付けようとした黒エルフは、敵からの濃密な魔力放射を感じてその場に釘付けになった。　先程自分の全力をもって放った雷撃槍より遥かに上、丸ごと開放してしまえば辺り一面更地になりそうな風翠色（グリーン）の輝きがゆったりと構えた右手に収束されていく。

【魔法技能（マジックスキル）：弐式・嵐激巧裂（ダン・ラ・ギガ）：ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ】

「ぶっ飛ばせ！」

バスケットボール大にまで圧縮された空圧弾がその手から発射さ

れた。　横に縞の入ったメロンのような球に見えるそれは超小型に圧縮された台風（ハリケーン）であり、人の営みに無慈悲な被害を与える自然災害とほぼ同等のエネルギーを秘めている。　ゆるやかなスピードで黒エルフに迫った緑色回転弾（イレイザー）は黒エルフと接触。　瞬間ノックバックの効果を発揮して対象を大きく跳ね飛ばす。　その場から掻き消えるように勢いの付いた黒エルフの肉体は、背後にあった樹木を幾つかへし折りながら飛んで行った。　ビル解体用の鉄球にも似た勢いで。　肉体にとって致命的なまでに嫌な音を響かせて大木に激突した黒エルフ。　その身は荒いノイズに包まれてその存在を消失した。

ケーナの表情はそれを見てかすかに揺らぐ、それはゲームだった頃の敵キャラを倒した時に良く見る光景だった。

「……あーもう！　まったくさー、良く分からんわぁ」

「お？　嬢ちゃん無事か！」

多少の傷は負っているようだが全員無事なアービタ達が一仕事やり終えた表情で戻って来る。

「よう、こっちは終わったぜ。　嬢ちゃんのほうは……」

焼け焦げた樹木、あちこちが抉れている地面、なにやら一直線に硬いものが通過した形で折れた木が続く空間。　森の一角にぽっかりと空いた空白地帯にアービタ達は絶句する。　後をついて来なかったので別働隊と鉢合わせしたのかと気掛かりだったが、ケーナの方は平然と彼等を迎えた。

「とりあえず率いていた首謀者は倒しました」

「こっちには残っていたオーガは五匹だけだったぜ。　念の為洞窟に油と火種をぶっ込んどいたけどな」

「全くなんだってまたこんな所にあんなものが……」

ぶちぶち愚痴りだしたケーナにそんなに手間の掛かる相手だったのかと怪訝な顔になるアービタ。　彼等の視線に気付いたケーナは手をパタパタと振って「気にしないで下さい」とアピールする。
一応周辺を探索して、生き残りの痕跡がないか確認しようとした時。
遠くで山鳴りのような鳴動と、やや遅れて足下から感じる地震にも似た微かな揺れが。

「……お？」
「なんだ？」

団員達が首を巡らせて聞こえて来た方角を探り、音源は北にあると確定した。　どう考えても音が鳴り響く原因に至るような発端は村だとしか思い当たらない。　アービタは探索を中断させ、急ぎ仲間に村に戻る指示を出した。

「嬢ちゃんは先に行け！　何かあったら頼んだ！」
「あ、はい！　済みません」

駆け出しながら【飛行】を発動させて、勢いをつけ空に飛び上がった。　高度を上げれば辺り一面に広がる森林の中、ぽっかりと空いた村が見える。　しかし、街道を挟んだ西側に昨日は無かった断裂痕を見付けたケーナは首を捻った。
森の木々を縦長数キロメートル伐採したような痕に、先程の音と振動はこれかと思う。　ロクシリウスかロクシーヌであれば作れるだろうが、基本村の防衛と娘の守護になっている筈だ。　わざわざ村の外まで足を運ぶ理由がない。　嫌な予感を覚えたケーナは【加速】も【飛行】に注ぎ込んで村へと向かった。

村に降り立ったケーナの前では大人達が総出でリットとラテムを叱っている最中であった。

「全く外敵に対して村中ピリピリしている中、外に出るなんて何を考えているんだい！」

「ぐすっ、ひっく……。　ご、ごめんなさぁい」

「まあまあ、母さん。　リットもこんなにしおれて反省しているようだし、そろそろ許してあげても……？」

「アンタは黙ってな！　無償で村を守ってくれてたケーナんトコの嬢ちゃんや、アービタの旦那に顔向けが出来ないだろう！」

「いいですかラテムくん？　余所様のお嬢さん達をそそのかして外へ連れ出すなんて、あの人が聞いたらなんて思うのかしら？」

「え、えーと、か、母ちゃん？」

「言い訳ですか？　なんて男らしくないんでしょう。　貴方はそれでもラックスの血を引く誇り高きドワーフですか、みっともない！」

「は、ハイ、モウシワケゴザイマセン……」

「だいたい貴方は普段から……くどくどくどくどくどくど……」

顔を真っ赤にして村中に響き渡る声で怒鳴るマレール。　夫やルイネの仲裁を歯牙にも掛けず、鬼のような形相にリットは半泣きだ。

スーニャは息子に正座をさせてニコニコと諭している。　ラテムが片言になるくらいの震え上がりっぷりで、よく見ると目は笑ってなく据わっている。　そのまま今回の事だけには留まらず、過去の悪戯まで蒸し返して延々と説教が続く。

「ぐす、ふぇぇ……」

「お嬢様、安心して下さい。　ケーナ様はこの程度で怒ったりは致しませんよ」
「壊れたペンダントもケーナ様の手に掛かれば何の問題もありません。　元通りになりますから」

ボロボロと涙を零すルカには、言い聞かせるようにロクシリウスとロクシーヌが声を掛けて宥めていた。

「はぁ～～～」

最悪なものを思い浮かべていただけに、問題はあるものの危惧していた光景ではなかった。　肩を落として脱力し、長い安堵の溜め息を吐いたケーナに気付いたルカはびっくりして硬直する。　俯いたままゆらゆらと迫るケーナに説教をしていたマレール達も注目する中、地面に座り込んで引き寄せたルカをしっかり抱き締めたケーナに、いきなり怒鳴りつけるんじゃないかとハラハラしながら見ていた村人達も安心する。

……が、次にそこから聞こえてきた泣き声がケーナのものだと言う事に気付き、目を丸くした。

「ぇうぅ、るかが無事でよかったよぉぉ……、ぅわぁぁ～ん」
「ぇぐっ？」
「は？　ええと……ケーナ様？」

ルカを抱き締めたまま号泣する自分の主に呆気にとられるロクシーヌ達。　村人達もわんわんとマジ泣きのケーナを見るや否や慌てて宥めに掛かる。

「ほらっ、ケーナ！　アンタんトコの娘は無事だったんだから、そんな子供みたいに泣くんじゃないよ！」

「そうですわケーナさん、悪いのは全てウチのラテムなのですから、貴女が泣く程の負い目を感じなくてもいいんですよ！」
「ご、ゴメン！　ルカを強引に連れ出した俺が全部悪いんだ」
「ケーナおねーちゃんごめんなさい」
「け、ケーナ様?！　お、お気を確かに！」

一番困惑しているのは抱き付かれているルカで、怒られるかと思えば優しく抱き締められて安心感に包まれた。――ああ、まだこの優しい人達と居られるんだ――と思った瞬間、保護者が号泣。
力はケーナの方が遥かに強いので抱擁からの脱出は困難、周りの大人達はケーナを宥めるばかりで此方には困った顔を向けるばかり。
更には左右から抱き付いて来たリットとラテムもケーナと一緒に泣き始め、すっかり自分が涙するタイミングを外されてしまった。
オマケに服はもうびしょ濡れである。　困惑以外に何をどうすれば?
この騒ぎはアービタ達が戻って来るまで続き、ようやっと泣き止んだケーナにルカが解放される頃には陽がとっぷりと暮れていた。

更にこの出来事は後を引き、数日間は鴨雛のようにルカの後ろを憑いて歩くケーナが度々村人達に目撃されるようになった。

例えば、朝。

「ん、ルカどこ行くの?　私も付いて行ってあげようか」
「……トイレ、だから。　いい」

例えば、午前中。　勉強の時間。

「大丈夫かな、ルカ。　どこか解らないところある?」

「……平気。　それよりもあっち……」
「ケーナのねーちゃん、これわかんねー！」
「ロクス、あっちのラテム君お願いね」
「はあ、分かりました」
にこにこ（↑ルカの前で満面の笑み、離れようとしない）
「……」（↑ケーナの行動におっきな汗をタラリ）

例えば、夜。

「よし、ルカ。　今日こそは私と寝ようね！」
「……ケーナ、お母さん……は、ひとりでも寝られる、ハズ」
「ん～～～！　シィ！　シィ！　ルカが『お母さん』だって！　聞いた聞いた？」
「ケーナ様、今朝からそれは十二回目です」

ルカはこんな状態のケーナに数日構われ（？）て、二度と彼女を心配させまいと固く誓ったと言う。

３４話　その子供、暴走す

ケーナの娘へ過剰な程の過保護っぷりが「ケーナ、お母さん……鬱陶しい」との言葉で、漸く一段落をした。　告げられた本人は自室で一日石化していたらしいので、その心に刺さった矢のダメージは筆舌に尽くし難い。

まあ、それも一晩経てば回復し。　翌日には落ち込みぶりが残るものの元気な姿を村人に見せていた。

「あーあ、なんか随分横道に逸れてた気がするけど、とりあえずケイリックの所へ行ってみますかー」

「殆どはケーナ様の御嬢様への構い方が粘着だったのが原因では？」

「……」

背骨をボキボキ鳴らしつつ柔軟体操をするケーナの独り言へ、主を主とも思わぬロクシーヌの毒舌が突き刺さった。　伸びをした姿勢で固まり、ギギギギとブリキ玩具のように首を向けるケーナにロクシーヌは一礼した。

「申し訳ありません。　口が滑りました」

冗談で済むうちに謝っておく。　これが冗談で済むうちならまだいいが、マジ切れした主が敵に回ったらロクシーヌ達に勝機は無い。

ジト目のケーナは「まあいいけどね」と溜め息。　ロクシリウスを伴って外へ出てきたルカの頭を撫でた。

少女はこれから友人達と一緒に公共浴場を掃除しに行く予定だ。

前回の無茶を踏まえ、実行犯のラテムとリットには村長から罰が言い渡された。　それが公共浴場の掃除である、今のところほぼ無

期限で。　二人共ルカが居なければ確実に命を落としていたという実感もあり、反省も兼ねてしっかりと仕事をしている。　流石に子供二人だけではどうにもならない所と、監督も兼ねてロクシリウスも協力している。　ルカは自分が止めもしなかったという自責の念もあり、自主的にそれを手伝っていた。

　ルカの首にはケーナによってきちんと修理されたペンダントが下がっている。　【召喚Ｌｖ９】のホワイトドラゴンでは存在を短時間に留めるのが精一杯だった事もあって、改良が施された。　今は【召喚Ｌｖ６】にダウンサイズされたブラウンドラゴンになっている。　それでも出現するのはＬｖ６６０の化け物クラスだが。

　回復や結界と言った方向の能力を持つホワイトドラゴンは、竜族の中で戦闘能力は最低ラインでしかない。　角の生えた茶色い鎧竜（アンキロサウルス）と言った外見のブラウンドラゴンも、攻撃力は低いが守護に関しては竜族の中では一級品である。　考え無しに最大レベルで召喚した為に村からもその巨体はハッキリ視認出来ていた。　大騒ぎになってしまったのを反省し踏まえて、今回喚び出されるのはせいぜい雑居ビル程度の大きさだ。

「んじゃーちょっとヘルシュペルまで行って来るけど……」
「うん、平気。　ケーナ、お母さんに……心配は、掛けない。　……から」
「今回は私共もキッチリ目を光らせますので、ご安心くださいませ」

　ぶんぶんと頷くルカと恭しく礼をするロクシリウス。　娘の「お母さん」発言に感極まったケーナに抱きしめられて、いい加減慣れたルカは苦笑してその場を乗り切った。　困難は子供を成長させる、自分で自分の首を絞めている気がするルカは内心大きな溜め息をついた。

足元に広がった紫色の魔法陣から立ち昇る光に包まれてケーナがその場から姿を消す。「ほっ」と息を吐いたルカにロクシリウスのみならず、玄関口で見送っていたロクシーヌも噴き出した。

「ご苦労様です、御嬢様」

「ケーナ、お母さん……。信用して、ほしい……」

「仕方ありません。まだあれからそう経っていませんから。むしろ御嬢様に認められて貰えたのが嬉しいのですよ。主は家族というものに対し執着を持っていますから」

「……そう、なんだ」

久し振りに人通りの多い都市に出てきたせいでテンションアップしたケーナは、堺屋に向かう前に市場に足を運んだ。ロクシーヌに頼まれていた事もあって食材を買い込み、珍しい物が無いかひと通り見て回る。うちひとつの店舗で随分といびつな仏像らしきものが売られていたのは全力でスルーした。

相変わらず人足と客がごったがえす堺屋前の通りで、串焼きを頬張りながらやってきたケーナは久し振りに見る顔を見つけて声を掛けた。

「コーラルじゃん」

「あ？　ケーナか、こんなトコで会うなんて奇遇だな」

以前にあげた大剣を背負ったコーラルとその仲間達四人は、途方に暮れていた表情を安堵に変えてケーナと挨拶を交わす。

「つーか堺屋に用事かなんか？」

「ああ、ちょっとな。　ギルドに護衛の依頼が出てたんで俺等で請け負った、んだが……。　コレだけ人がいるとなると誰に話しかけたら責任者に会えるんだか、さっぱり分からねえ」

「ほー、護衛かー」

ケーナは人込みをくるりと見渡し、算盤を弾いてる猫人族（ワーキャット）に「すいませーん」と近付いた。

「ああ、はい、なんでしょう？」

「イヅークいますか？　ケーナが来たって伝えて貰えません？」

「若旦那ですか……。　少々お待ちください」

首を傾げながら店の中に引っ込む猫人族。　コーラル達が待っている通りの反対側に戻ったケーナは「とりあえず若旦那を呼んで貰ったから」と伝えた。　とたんに戸惑いからヘンテコな表情に変わるコーラルの仲間一同。　一介の冒険者が大陸の各地に根を伸ばす堺屋の若旦那を名指しで呼び出せる所に一同は困惑した。　その程度は特に気にしない冒険者（ケーナ）と仲間（コーラル）の一人は呑気に話を続けている。

「良く来るのかよ、ここ？」

「まあ、それなりにね。　コネがあるっていいよね」

「ええいこの運ブルジョワめ！」

「持つべきものは孫よね～」

「意味がわかんねーし……。　つーか、最近は全然フェルスケイロ

でも姿見せなかったじゃねーか。　なにやってたんだよ？」
「ここらでひとつ酒屋でも営もうかと思ってねー。　ウィスキーとビールだけど」
「ほほう、ウィスキーとな。　ぜひ飲ませろ」
「命令形かいっ！？　飲みたかったら自分で作ればいーじゃないのよ」
「あ？　作れるわきゃねーだろ。　アレには大掛りな蒸留器とかを所有する工場がないとダメじゃん」
「成る程、貴方が技術技能（クラフトスキル）という可能性をことごとく捨ててきたのは分かりました」
「なにぃ、そんなスキルがあったのかっ！　ぜひ伝授してくれ」
「ヤダ」
「一刀両断！？」

和気藹々とした会話がウィスキーの美味しい飲み方に発展し、『～年物』が如何に美味しいかと語り出すコーラルに、ふんふんと真面目に聞きつつ重要な事はキーに記憶させるケーナ。　そうこうしていると、若輩ながらもそれなりに貫禄のあるエルフの男性が通りを挟んだケーナ達の所に歩み寄って来て一礼する。

「お待たせして申し訳ありません、曾御婆様。　この度はどのような御用でしょう？」
「お久し振り、イヅーク。　わざわざごめんね、ケイリックは居る？」
「あ、はい。　父上ならばいつも通りに奥にいますが……？」
「イヅークに用事があるのはこっちの冒険者五人ね。　なんかギルドの依頼を請け負ったんだって」
「あ、……ああ、はい。　それはわざわざ足を運んで頂いて申し訳ありません」

拍子抜けしたという表情を一瞬だけ通り越して、真面目な商売人の顔になったイヅークは、ヘンテコな顔をしているコーラル達のPTに礼儀正しく頭を下げた。　ケーナはなんか期待されていたのが分かって苦笑する。　依頼する側がやたらと腰が低いのも笑える話だが。

イヅークはコボルトの小間使いを呼ぶとケーナの案内を任せ、コーラル達を連れて依頼の話をする為に中へ引っ込んだ。　ケーナが案内された先はいつものゆったりとしたケイリックの自室。　孫は驚きの表情で祖母を迎え入れた。

「これはこれは御婆様。　この度はどの様な御用で？」

「石と小麦の荷物は受け取ったわ。　商品の認可としては随分と早かったけど、ウィスキーとビールの方はそのまま作り初めてしまっても構わないかしら？」

「ええ、あれはとても上質なお酒でした。　友人の幾人かときき酒をしましたが評判が良く、少々味が濃いのですね」

「あー、ありゃさっき聞いたんだけど、どうも水か氷で割るものらしいのよねー。　あとウィスキーの方は年月を置くと味に深みが増してくるものらしいわ。　一年五年十年とか？」

「成る程、そういった分類の飲み物だったわけですか。　そちらの知識は御婆様はご存じなかったようですが？」

「ああ、今、イヅークの所に依頼で来ている冒険者友人のコーラルから聞いたから、詳しくはそっちに聞いてね」

成る程成る程と呟きながら、手元の紙に幾つかの走り書きをするケイリック。

ヘルシュペルヘ二樽の商品を送り届け、村に戻ったラックス達から大量の大麦を渡されたケーナ。　流石に置いて置ける場所が無いので、追加で倉庫を建てる羽目になった。　ついでにその倉庫には地階を作りそこにウィスキー樽を保存して置くつもりだ。　ビール

は材料さえあればその場で幾らでも作成が可能なので、注文を受けてからにしようと思っている。
　問題なのは石のほうだ。　簡易術式を込めておけば、魔力を補給するだけで一般人にも容易に扱える凶器が出来る。　関所に襲撃をかけた術士が所持していた炎撃術杖（ファイヤーボールスタッフ）のように。　その辺りを相談に来たのが今日の訪問のメインだ。　一応試験的に実例を作ってきたので、テーブルの上に三センチ玉を転がす。

「……これは？」
「貴方が送ってきた石を加工、作成したものよ。　こういう風に使うわ」

　簡潔な説明と共に指をパチンと鳴らす。　玉から迸った光が、天井を投光機に照らされたように真っ白に染めるのをケイリックは絶句して見つめた。　方向を定めた【付加白色光ＬＶ５：ライト】を込めてある。　筒などに入れてしまえばマグライト並みの働きが出来る魔導具だ。　潤沢にＭＰが込めてあるので、この状態のままでも数日くらいは持続できる。

「私としてはこういったものを天井に埋め込んで、室内を照らす用途に使って欲しいんだけど……。　貴方にはそれ以外の使用方法があるのかしら？」
「い、いやいやいや御婆様、私を死の商人かなんかとお間違えでは!?　私は只、光だけでもあればそれでいいのですよっ！」

　憤懣やるかたないといった祖母の様子に震え上がったケイリックは、身振り手振りも併用して誤解を解きに掛かった。　勿論、そういった攻撃系魔導具の可能性も考慮に入れなかった訳でもないが。
　彼には光源としての使用方法で商売の算段を考えていただけに、ここで祖母を怒らすような扱いは避けたい。　ケーナも一応確認の

為に脅してみせたが、ケイリックの慌てようにその可能性は無いと分かると「冗談よ」と義憤の態度を引っ込めた。

「おおおお、驚かさないでください。　……ふぅ」

「あはは、御免ね。　んじゃあ光源物として、あるもの全部をコレと同じように加工するね。　出来上がったらココに届ければいい？」

「んー、そうですね。　出来れば商隊か何かにでも運送をお願い出来ませんか？　御婆様の術に依る瞬時の横行には大変興味がある所ですが、出来れば通商路活性化のためにそういった者に仕事を振り分けてください」

「ほー、そーかそーか。　確かに私の持つ技能（スキル）には人何十人分の仕事を一瞬で終わらせちゃうようなのがあるけれど、逆に考えるとそれだけの人の仕事が無くなっちゃうって事なんだねー。　でも私がやったほうがその分費用も浮くけど……」

「生憎とこの堺屋、そのような瑣末な費用で傾くほど落ちぶれてはいません。　見くびらないで頂きたい」

「あー、はいはい。　餅は餅屋ってね、うん。　そういうことなら了解しておくわ」

　その流れで運送費用に対してケイリックと交渉を続ける。　顔馴染みな所からエーリネ商隊に託せば、着払いにして堺屋の方で運賃を払ってくれる事などを話し合う。　それに含んで最近の状勢なども。

「へー、東の関所を駐留地に改良するんだー」

「一度西から流れて来た盗賊に潰されていますからね。　直ぐ近くには御婆様の居住する村もあることですし。　勿論御婆様の存在は国の上層部の知るところですが、公（おおやけ）に出来ない以上備えは必要です。

　資材の発送を請け負った堺（ウチ）屋からの代表と国の重鎮、フェルスケイロからの使者を交えて関所で会合をするそうですよ」

「ああ、それでコーラル達か。　護衛まるっと国の重鎮にくっついてきた騎士に任せるとかしないの？」
「御婆様、先ほども言いましたがお金は流れるものですよ」
「左様で……。　徹底してるんなら運送できるものを作るしかないなあ」

当たり障りが無いものを連想していたケーナは、庭を見てから陽の光にオレンジ色が混じり始めたのに気付いた。　ヘルシュペルに飛んできたのが昼前、市場を回って屋台で昼食を済ませてからココへ来たのだ。　陽のあるうちに戻るとは言って無いが、ルカが心配になってきたケーナはこの辺りで話を切り上げて帰る事にした。心配と言うよりは恋しい事に気付き、自分の娘馬鹿っぷりに苦笑する。

「この辺で失礼するわ、突然来たのに丁寧な応対をありがとう、ケイリック」
「そういえば女の子を引き取ったんでしたね。　さぞ心配なされている頃でしょう、早く帰ってあげてください。　今後とも私共に出来る事があれば遠慮なく仰ってください」
「あ、ハハハ……」

この場合どっちが心配しているか、なんてのはケイリックの考えとは逆だろう。　引きつった笑顔でその場を離れようとしたケーナは、家を作る時に考えていた事を思い出した。

「そだ、ケイリック」
「なんでしょう、御婆様？」
「こっちへ商隊を出す時には、山羊と鶏を送ってくれない？」
「ああ、はい、わかりました。　御代は着払いでお願いしておきますよ」

「うん、ごめんねー。　それじゃあまたね」

生物（いきもの）はアイテムボックスに入らない他、ＰＴ登録も出来ないので【転移】で一緒に持っていけないからだ。　そのままそこから庭側に出たケーナはバイバイと孫に手を振り、紫の光を伴って姿を消した。　釣られて手を振り返したケイリックは祖母が消えた場所を眺めて見る。　紫の光で薄く表示されていた魔法陣は、光の粉末となって消えてしまい痕跡は無い。

「相変わらず消えたり現れたりと忙しい方だ。　さてと、先ずは美味しいお酒の飲み方からか？　明りに関しては先ずは貴族に勧めて見るとして、御婆様は『ガイトウ』がどーとか言っておられたな」

息子から冒険者の情報を聞いて、祖母から聞いた件に対しての質問を詳しく聞く。　それから商隊の手配をして家畜を購入。　家族ひとつ分となるとどのくらい必要なのか？　などと考えながら堺屋を立ち上げたばかりの頃を思い出していた。　今は店を息子が切盛りしている為、商売の見直し程度くらいしかやる事が無いが。　祖母からの依頼は昔を思い出させてくれる楽しさがある。　先を考えて逸る心を押さえながらケイリックは息子の部屋を訪ねた。

一瞬で目の前に居た孫から見慣れた自宅へと風景が切り替わる。
半分くらいが橙色に変わってきている空を見上げていたケーナは、気がついたロクシーヌに迎えられた。　買って来た食材を渡し、家の中を伺うとルカは居ない様だ。

「御嬢様でしたら宿屋の方へ。　あの間抜けも付いているので問題はありません」
「宿屋？」
「はい、何かフェルスケイロから要人が来たとかなんとか」
「要人？　それがなんでルカに関係……が……」

ついさっき似たような話を孫から聞いた事を思い出した。　関所を駐留地にする為に隣国との取り決めでフェルスケイロから使者が出ると言う。　使者に出せそうなのでルカに会う事を望みそうなのは、まだ会っていないマイマイが有力だ。

宿屋まで足を運んで見ると、立派な装飾の箱馬車と以前遠征の時に見た騎馬が六頭、宿屋脇に停めてあった。　しかし、ここから関所までは一日掛かるとしても、ヘルシュペルから関所までは九日ばかり掛かる筈だ。　八日も間を空けるなんて使者業も暇なんだなー、とケーナは呆れた。

……が、次の瞬間宿屋から出て来た人物に、彼女の表情は引きつった。
左右に突き出た耳を持つエルフの男性。　高位の神官職を示す蒼い法衣に、主神光の神の印が金糸で刺繍されている。　きめ細やかな手入れがされていると思われる長い金の髪。　甘いマスクでどんな女性も虜にする美丈夫、主にその悩殺な笑みは身内にしか向けら

れていない。　ケーナの中でも上位の問題児になっている長男スカルゴその人であった。

　ルカとロクシリウスを伴って宿屋から出て来たスカルゴはケーナを視界に入れた途端『輝いた』。『点描バック』に涙を『爆涙』させながらスターン！　スターン！　と怪しい歩法で接近し、正座の形でズザザザー！　とケーナの足元へ滑り込んだ。

「母上殿ォ～！　お会いしとうございましたァ～！」

　両手を広げて陶酔しながら嬉しさをアピール。　ついでにどばっと周囲に『青い薔薇が咲き誇り』その背景には『花言葉は永遠の愛』と（激しく間違っている）テロップがエンドレスで流れまくる。

ケーナの左手を取って手の甲にむっちゅう～と口付けた。

　ケーナはというと息子に接近された辺りから真っ白になっていたが、ここにきて再起動を果たす。　唖然として見ていたルカと表情の変わらないロクシリウスにはどこからともなく『ぷっちーん』という音が聞こえてきた。

「お、おかえりなさ……い。　ケーナ、お、お母さん……」

「うん、ただいまルカ」

何故かおどおどしているルカをしっかりと抱き締めたケーナは安

堵した。　ポケットから取り出した物を娘の手のひらに乗せる。
赤、青、緑の小さな色水晶の欠片を見たルカの表情は嬉しさで輝く。

「三つあるからリットちゃんとラテムくんと分けなさいね」
「……うん。　ありがとう、ケーナ……お母さん」

夕暮れの中、手を繋いで家路を辿る微笑ましい家族の姿があった。

そこへ「あ、あの～？」と空気を読まない無粋な第三者の言葉が掛けられようとした時、素早く間に割り込んだロクシリウスが牽制した。　ビシッと執事服を着こなした猫耳少年から強烈な威圧感を感じ、口を半開きにしたスカルゴ護衛の騎士達は「うっ」と凍り付いた。

「主は多忙です。　御用がおありでしたら私がお聞き致しましょう」

ひとりが近衛騎士団の誇りを振り絞り問い掛けた。

「だ、大司祭様はどうしたらいいのでしょうか？」

その場にいた全員の視線が横へ移動。　感涙にむせび泣いているように見えなくもない、猪八戒で止まる。

「放置しておけば宜しいかと」

肩を竦めたロクシリウスは宜も無く言い放つと、踵を返して主の後を追う。　残された騎士六人は途方に暮れて顔を見合わせるしかなかった。

35話　都会見物にアクシデントはつきものです？

一日経って醜悪な容姿から元のイケメンに戻ったスカルゴは、ケーナ宅にて食事を取るようになった。　勿論招待したのは我等が母ケーナが強引にである。　ルカはまだ面と向かって話す事も出来ないが、徐々に「お兄、ちゃん」と口にするようになっている。　イイ気になったスカルゴはついついクセで【薔薇（オスカル）は美しく散る】を発動させかけて、ケーナの睨みに屈して乾いた笑いを浮かべていた。

なにせケーナの【呪装】術である。　ここにいる間だけにでもキーワード（キーワード）を聞き出さないと、歓談中に何かの拍子で猪八戒（ブタ）に変わったら目も当てられない。　使者の仕事どころか大司祭としての顔すらも丸潰れである。

「母上殿～。　お願いします～」

「さあ？」

朝の拝み倒しから始まるスカルゴ。　パンを千切りながらのケーナは食欲を優先させた。　食卓にはとてもファンタジーの中とは思えないブレックファーストが並んでいた。　技能（スキル）には貴重品の砂糖も胡椒もバターでさえも、この世界でありふれた材料から簡単に作れてしまうので、マレールの宿屋で出されたような硬いパンはロクシーヌは作らない。

逆に塩と山羊乳から山程のバターを作り、各家庭へ配った。　その上でロクシーヌさんの美味しいパン教室が開かれ、もうこの村には硬いパンは存在しないと言えるだろう。　いきなり食生活から産

業革命である。　パン焼き用専門の釜まで作ったのだから。

「スカルゴ様のそれは自信過剰からの慢心と言えます。　頼りきった結果、それ以外での自分の表現を忘れ去った為でしょう。　つまりは只の見得、哀れですね」

「ごふっ！！」

この辺りで野生に生える果物、アケビに似た果実を搾ったジュースを口にしたスカルゴにタイミング良くロクシーヌが突っ込んだ。

食卓に巻き散らされそうになった瞬間、ロクシリウスがお盆で壁を作る。

「……きた、ない」

「す、すまないっ」

ジト目のルカに見咎められ、ロクシーヌが差し出したタオルで口を拭いつつ頭を下げる。　それを見ていたケーナが「ぷっ」と噴き出す。

「大丈夫よスカルゴ。　あれ一回きりだから、キーワードも設定してないよ。　安心して行っておいで」

「おや、ケーナ様にしてはお珍しい？」

「そこまで息子に苦行を施すって、どんな鬼母に認定されてるのよ、私……」

「ふぉ～～～～～」

表情の変わらないロクシーヌのビックリした声に苦い顔で返す。

それだけ聞くとスカルゴは内臓が裏返りそうな溜め息を長～く吐いて、椅子にへにゃへにゃと座りこんだ。

「ここで陛下から任された仕事を失敗するかと思いました……」
「だったら徹頭徹尾真面目にやんなさいよね。　城を出てから帰るまで、途中の私でわき見するからよ」
「以後留意いたします……」

楽しそうな顔の母親にたしなめられて、しょんぼりと肩を落としたスカルゴ。　椅子に乗ってケーナの肩越しに手を伸ばしたルカに頭を撫でられ、苦笑する。

「ありがとうございます、ルカ」
「……うん」
「あと、ごちそうさまでした」
「はい、お粗末様です」

ロクシーヌに礼を言って席を立ったスカルゴは、部屋を退出しようとして思い出したように振り返る。　明日の早朝にでも村を発つそうなので、今夜からは打ち合せも兼ねて宿屋で食事をするそうだ。

「そう言えば、マイマイがルカに会いたがってましたよ。　陛下から直接指名が無ければ、アレが率先して来ていたでしょうな」
「あー、そっか。　伝言ありがと、スカルゴ」
「いいえ、それでは母上殿。　また機会がありましたら。　ルカも健常でな」

ひらひらと背中越しに手を振って去る。　優しい目で見送ったケーナは背が見えなくなると、腕組みして考え込んだ。

「ちょっと仲間外れっぽかったか？」

学院に常時居なければならない仕事である限り、村に引き篭もっ

たルカとマイマイが会う機会など早々無いだろう。　あちらが動けないのであれば、此方から動くしかない。　「よしっ」と気合を入れて席を立つと、ロクシリウスに旅の準備を頼んでルカと一緒に家を出た。　目指すは今さっきスカルゴが向かった場所、マレールの宿屋である。　丁度、いつもの農作業前に飯を喰いに来ていた村人達とすれ違い、挨拶を交わして店に入る。

「おはようございます、マレールさん、リットちゃん」
「おや、ケーナじゃないかい。　おはようさん」
「おはようございます、ルカちゃん。　ケーナおねーちゃん」
「……おは、よう。　リット」

親子親子と挨拶を交わし、カウンターまで近寄ったケーナは「少々相談が」とマレールの手を止めさせた。　訝しげに首を捻る彼女に娘さんを貸して欲しいと頼み込む。

「リットをかい？　お酒を作る手伝いでもさせるつもりかい？」
「いいえ。　ルカを連れて上の娘に会いに行くつもりなのですが、リットちゃんもどうかな？　って。　ほらリットちゃんもこんな機会でもなければ王都に行く事なんて出来ないでしょう。　ここはひとつ社会勉強のつもりで、彼女を預けて貰えませんか？」
「ん～～。　そうだねえ……」
「お店の手伝いならウチのシィを出しましょうか？　それとも無料ビール一樽がいいですか？」

引き合いに出されたリット自身は「え？」と疑問顔で硬直している。　マレールはチラチラと娘とケーナに視線を動かし、真摯な視線に根負けして「はー」と溜め息をついた。

「商売上手だねえ、ケーナはさ。　分かった、その条件でウチの娘

を預けるよ」
「じゃ、後でロクスに一樽持って行かせますね。　それじゃあリットちゃん、お出かけの準備しようね？」
「え？　え？　えええええええっ！？」
「一緒に、行こう。　……王都、楽しい、よ？」
「もう出るのかい、せっかちだねえ……」
「馬車を使いますからねえ。　同行者が居ると術でひとっ飛び、って訳にも行きませんし」

ルカがリットの手を引いて奥に引っ込むのを見たマレールはケーナに頭を下げた。

「済まないね、ケーナ。　あの子の事をよろしく頼むよ」
「なーに言ってるんですか、マレールさん。　私だってあの子にはお世話になりましたし、お友達ですし。　出来るのはコレくらいですよ」
「ケーナが来てから、この村も昔に戻ったみたいだよ……」
「随分引っ掻き回してますしねー、村長さんが倒れない程度には」

肩をすくめるケーナにマレールが笑い出した。　何事かと奥から顔を出したガットも理由を聞いて噴き出す。　なけなしの着替えを小さなリュックに詰めて戻ってきたリットとルカは、爆笑する大人達を見て首を傾げた。

出発は午後からになった。　一応ラテムも誘ったのだけれど、未だに前回の件でラックスがお怒りモードだった為、許可が下りなかった。　本人的に言うと生まれはヘルシュペルなので大都市は見慣れているとの事だ。　同行者はロクシリウスで残るのはロクシーヌ

である。　たまにはロクシーヌを連れ出したいケーナだったが、本人から「誰彼構わず喧嘩を売りますが宜しいか？」と宣言されたので諦めた。

「あとお願いね、シィ。　たぶん戻る前に……」

「分かっております。　ヘルシュペルからの荷物の受け取りと、酒類と魔道具の引き渡しですね。　承りましたので、御安心下さい」

「ん、宜しく」

移動は自動走行馬車（ゴーレム）をほぼノンストップ（食事時以外）で走らせれば、片道十日の所を四～五日で済む予定だ。　馬車内は広いので四人が雑魚寝をしてもお釣りが来る。　途中から面倒になったケーナが【行軍】まで使ったので、実質四日で到着した。

問題が持ち上がったのは王都に入る前からだ。　何故か王都に出入りする人達からの注目度が半端ない。　流石のケーナでも、前回村に向かう途中にすれ違った旅人達がゴーレム馬車を見て、都市伝説並みの噂話が広まったなど知るよしもない。　エーリネ商隊経由で顔見知りになった馬車預かり所に行って初めて、そこのオヤジさんから聞く事になった。

「な、なるほど……」

「いやー、一時はエラい騒ぎになったっぺよ。　貴族の遣いとかがひっきりなしにオラ達ントコ来てな、あの馬車の持ち主教えろってっちゃあ、もうえらい剣幕でよ」

「それはご迷惑をお掛けして済みません」

深々と頭を下げるケーナに対し、オヤジさんは赤黒く日焼けした顔を破顔させた。

「んで、コレさ尋ねられったら答えちゃっていいぺさ？」
「はい、お仕事のご迷惑になるのでしたら私の名前をどんどん出しちゃっていいですよ」
「お貴族様ァ、しつこいってよぉ。　ケーナちゃんも気ィ付けた方がよかんべ」
「はい、お気遣いありがとうございます」

そこから宿屋に移動する間に三人の執事に遭遇し、金貨単位での売却を求められた。　学院長並みの術者でないと動かせないと説明してお帰り頂いた。　しつこい者にはロクシリウスから【威圧】や【眼光】が飛ぶ。

「ヤレヤレ、あんなのがひっきりなしに来るんじゃ、ゆっくり休憩もできないねー」
「潰しますか？」
「なにを！？」

事態を重く見ている大人とは対象的に子供達は椅子を窓際まで持って行き、宿屋前のごった返す人混みを面白そうに眺めていた。
どうやらカラフルな竜人族（ドラゴイド）が珍しいようだ。

「困った時のコネ頼み！　ロクスちょっとアレ捕まえて来て」
「アレですね、判りました」

主の意味の通じない発案に即答すると、スタスタと部屋を出て行

くロクシリウス。　何を話しているのかさっぱり分からない、ルカとリットは不思議そうな顔をする。　二人の様子に苦笑したケーナは、「どこに行きたいか相談しなさい」と促した。　観光客用に配られる簡略化した王都地図をベッドに広げ、楽しそうに歓談する子供達。

　暫くすると空気荷物を背負ったロクシリウスが戻り、見えない何かを床にドサリと落とした。　その際にケーナとアイコンタクトをして、子供達に声を掛ける。

「では、御嬢様方。　市場にでも出掛けましょうか？」
「……ケーナ、お母さんは？」
「私はまだ馬車の事を聞きに来る人がいるかもしれないから、今日はここに残るわ。　ロクスの言う事を良く聞いて、はぐれないようにね？」
「……ん」
「はい」

　部屋を出た子供達の声が遠ざかると、ケーナは部屋の扉に【鍵掛(ロック)け(クア)】を施してから、ロクシリウスが見えない荷物を置いた所に【解呪(ディスペル)】を唱えた。　現れたのは後ろ手に縛られロープでぐるぐる巻きにされた挙げ句、猿轡をされた若い男だった。　どう見てもその辺にいる普通の町民にしか見えないが、ケーナの【サーチ】にはその男性がレベルを持つ者として認識されている。

「ぶはっ！　おいおい嬢ちゃん、俺みたいなもんを誘拐しても金はせびれねぇぜ」

「アガイドさんが隠者にお金出すかは疑問ですねぇ」

縛っていたロープを解いたケーナの顔が笑っているが目は笑っていない表情。　それを見た男は自身が経験した中で最大級の警鐘が脳内に響き渡り、観念して床に腰を下ろした。

「はいはい、降参。　要件は何だ？」

「貴族さん達を追い払うのにアガイドさんから貰った紋章出して平気かなーって？」

「あー成る程。　嬢ちゃんが心配してんのは侯爵閣下の立場か？」

一介の冒険者と癒着しているとかでアガイドの立場が悪くならないか、と心配するケーナ。　しかし、男からすればしつこい貴族に付きまとわれ、ぷっつんしてとんでもない魔法をぶっ放さないかが心配されていた。　すでにこれについては宰相から国王に報告されて、国から貴族達に早まらないように釘を刺されている。　何を早まらないかが理解されてないが、相手が大司祭の母親だと分かった者達は早々に手を引いた。　危険なのは相手をたかが冒険者だとしか考えていない連中だ。　どちらが危険なのは自明の理で。

その辺りの事情を聞かされた彼女の反応は「ふぅん」だ。

呆れ顔の隠者にニタアと黒い笑顔を返したケーナは、愉快そうに告げた。

「つまりそいつらは遠慮無くぶっぱしていいと。　報復はドラゴンかクリムゾン・ピグか【隕石落下（ギガ・ストライク）】か、どれがいいかなぁ～」

「あんまり王都を壊してくれるなよ……」

苦い顔で言う隠者だが最初の二つは兎も角、最後の単語は何の事か分かっていない。　城なんぞ一撃で粉砕する最悪の攻撃魔法だな

んて知る由もないからだ。　今の世の術者が扱おうと思ったらＭＰ不足でＨＰまで消費して命を喰われるであろう。
　彼女が何なのかを知る騎士団長のシャイニングセイバーと、その息子スカルゴの見解から言わせてもらえば敵対しない限り無害である。　放置しておくのが一番と国は考えていた。

「つか俺、どうやって捕まったんだろう？」
「まあ、ロクスだったからねえ。　これがシィだったら生爪剥がされてた可能性が……あるわな」
「アンタん所の使用人はどーいった職人なんだよっ！？」

　何故かぼとぼちと話していたら長年の友人みたいな雰囲気になった。　彼はこの後ココでの会話を宰相に報告に行くらしい。　なんでもケーナの監視は様子見程度くらいには緩くなったと聞かせてくれた。　隠者は窓から気配を消して出て行ったので、鍵を開ける。
　入れ替わりにロクシリウスに引率されたルカとリットが戻って来た。　楽しそうに会話する子供達とは対照的に疲れた感じのロクシリウス。

「二人共何か面白い物はあった？」
「全部！」
「う、ん……」
「よかったね～、何か買って来なかったの？」
「……どれ、選べばいい、か。　分からな、かった……から」
「ロクスさんがあめ玉買ってくれたの」

　難しい顔のルカと、ポケットから小さい紙包みを取り出してケーナに見せるリット。　中にはベッコウ飴に似た、丸い琥珀色の飴が並んでいた。

「ロクスは疲れた顔してっけど、どうしたの？」
「貴族の遣いと誤解を受けまして、市場の者から敵視されました。あとスリが多いですね」
「ああー、服装がまずかったかぁ。　次は冒険者風とかどう？」
「次は是非ともケーナ様もご同行下さい」

ちゃかす感じの会話に、聞いていたルカとリットも服裾を引いて、一緒に行こうとアピールする。「明日は朝からみんなで出掛けよう」と約束して二人を撫でる。　夕食前だから飴はひとつだけと言われたリットとルカは、紙包みを開いて中身を半分こしてから好きな大きさの飴を思い思いに口に含んでいた。　それをにこやかに見ていたケーナとロクシリウスは子供達に聞こえない小声で短い会話をする。

『なにやら此方を伺う視線が有りましたね。　数は一かニ』
『暴挙にでる貴族（ヤツ）は居るらしいから、先ずはその手下から殲滅かなあ』
『了解致しました』

「その飴が終わったら下降りてご飯にするわよ」
「はーい」
「……うん」

その晩、日付が変わろうとしている時刻。　元廃屋界隈、今は一晩で廃屋が城に化けてしまい昼間は市場に次いで二番目に人が多い場所だ。　夜は少しの篝火と兵隊の詰め所ぐらいしか人気（ひとけ）がない。

そこと住宅地の中間地点はまだボロいながらも人が住んでたり住んでなかったりする、いわゆるスラムっぽくなっていた。

かつては大商人が建てたと言われ、栄華を誇っていた時には三階層の御殿だった家。　今や半分は倒壊し見る影もない。　その地下室で獣油のちっぽけな灯火の光源の中、数人の男達がかくかくしかじかと悪巧みをしていた。

「それてその冒険者の娘を攫って脅迫するハズだったんだが……。肝心の人質はどうした？」

訂正、既に暗礁に乗り上げていた。

「そ、それが横合いからかっさらうつもりだったんですが、全員失敗しやした」

「何やってんだテメェら！　依頼はもう受けちまってんだぞ！　期日は明日だってんだろうが！！」

顔の半分に深い傷痕を残す強面の男、フェルスケイロにおけるアンダーグラウンドの一角を担う『渇きの蠍』のお頭は不甲斐ない部下を一喝した。　……が、少ない光源の中、そこに集まる面々を見渡して苦い顔になる。　明らかに招集した人数より足りない。

「他の奴等はどうした？」

「そ、それが……」

下っ端を纏める隊長の位置にいる男は強張った顔で昼間の信じられない出来事を語った。

手始めに肩がぶつかったフリから脅迫に繋げる古典的な手口を使った三人は、見習い執事のような猫少年に全身の関節を外されて地面に這いつくばるだけの蛸人間と化した。二段階作戦でスキを見て子供を攫う係りが二名控えていたが、雲一つない空から降り注いだ落雷によって別室で唸るだけの重傷患者に。詐欺の手口は界隈一だという優男は、顎の骨を砕かれて歯も全部折られた醜い容姿に。スリ職人で仲間一のベテランは両腕の骨を砕かれ、その場の稼ぎを全て暴露されて衛兵にしょっぴかれてしまった。その他にもお頭の逆鱗に触れるのが怖くて果敢にアタックした者は全員が手足か顎や鼻を折られるなど、体の何処かをことごとくブチ壊され再起不能になっている。聞かされたお頭と幹部二名の顔はどんどん青くなっていく。

「おいなんだその執事は……。悪魔か？」

「大の大人が揃っていて小僧一人に手も足も出ないのかッ！」

出るわけが無い。今現在で言うならばこの王都で二番目にレベルの高い人物である。レベル一桁程度のチンピラなど箸にも棒にも掛からない、只の雑魚以下だ。

『ク、カカカカッ、小僧共ガ馬鹿ナ所業ヲシタノウ』

いきなり誰の物でも無い第三者の声が暗闇に響き渡った。嗄（しわが）れた老人のモノだ、同時に足を地面に縫い止められたように体が芯から凍ったようになる。そこに居た四人の荒くれ者は氷原に取り残された遭難者みたいにガチガチと震え出した。覚えの無い体感に、

声だけで本能がこの世の恐怖を警告する。

なんとか動く眼球だけで声の聞こえてきた方を見ると、ソコには地下室の暗闇より尚、昏(くら)い闇がそこにあった。　闇は人の形をしていて、首の無い人の体を形作っていた。　暗闇と昏闇の違いがソレを一際浮き彫りにさせている、肌は人のモノではなくそれ自体が樹皮で、樹が人なのか人が樹なのか。　右胸に当たる部分に虚(うろ)が有り、魄磁器(はくじき)の頭蓋骨が鎮座していた。　双眸には白い瞳の黒い眼球が嵌まっている。　何時出現したのか、何時から居るのか、それは自然に男達の直ぐ脇に居た。

「……」

何かを言おうとした男達は口を開こうとしたが全て言葉にならなかった。　只、顎が震えてガチガチと言う四重奏を奏でるだけでしかない。　コレはなんなのか？　何をもたらすのか？　自分達はどうなるのか？　何ひとつ話す事も動く事も敵わない。

『オ主達ノ放ツ臭イ強欲ノセイヨ、ソレニ釣ラレ出テ来タダケジャ。ナニ心配スル事モナイ、命マデハ奪ウナト盟主(アルジ)ヨリ言ワテオル。ン？　儂ガ何者ナノカ気ニナルノカ？』

聞きたい事を勝手に答えてくれる。　脳味噌を人では無い手で撫でられた様におぞましさは残っていた。　しかし、化け物の名を聞けばこの先は破滅しか残らないのではないだろうか。　疑問は尽き無いが自分自身の自由も無く。　そして最期の希望は潰(つい)える。

『儂ハ五大公ガヒトリ【イグズデュキズ】ヨ。　最近ノ若イ者ハ知ラヌ者ガ多イ故(ユエ)、聞キ流セバ好(ヨ)イゾ』

……聞き逃せなかった。　御伽噺の闇の使徒。　物心付く頃

に母親に聞かされる、暗い昏い夜を支配する悪魔。　誰もが恐れ震え絶望する逃れえぬ闇の代名詞。　最期に男達が見たものは、全てを覆う絶望の暗黒だった。

36話　暗躍する授業参観の日

その報告がなされたのは陽も登らぬ早朝。　見つけたのは見せ物城の詰め所から帰ろうとした交代要員の衛兵だった。　部下を連れ、城付きのヤンマ便ですっ飛んで来たシャイニングセイバー騎士団長は、報告して来た衛兵が「何かの見知らぬ施設のような」と言っていたのを、現物を見る事で理解した。

「そりゃここの人間には馴染み無いわな、コレ」

「団長？」

昨晩までボロボロの廃屋だった屋敷は見る影もなくなって整備されていた。　正面入り口の高い壁は綺麗に復旧されて、原色ペイントで地球では馴染み深い動物達、キリンやライオンやゾウやカバなどがコミカルに描かれていた。　傾いだ門戸は取っ払われ新しいアーチがやってきた者を迎える。　そこには『おいでませ　渇きの蠍人物園へ』と書かれていた。

「冗談キツいぜ……」

中は更に地球の動物園に似た柵付きの囲いで幾つかに区切られている。　だが、そこに居るのは入園口の微笑ましさとは逆に、醜悪で奇怪なモノばかりだ。　全身金色の人型ゴーレムと化した昨晩までお頭だった者は、金貨の涙をチャリンチャリンと流し「助けてくれ助けてくれえ」と訴えている。　下半身が数十本の人の腕となった男は汗と涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔を歪め頭を抱え慟哭している。　直径二メートルの晶貨と化して中央に顔だけとなった者。　顔は人のままで首から下は馬になった者。　樹木に取り込まれて半身同化した者は、これまた二メートルはある紫色の芋虫に樹

皮からバリバリと喰われていた。　勿論、その芋虫には人の顔が付いている。

その場に駆けつけた騎士や兵士達は誰もが嫌悪感丸出しだった。シャイニングセイバーの指示により現場周辺は人が遠ざけられ、しばらくは見せ物の城も立ち入り禁止にさせる。　騎士達も冷や汗を拭いながら「人の所業じゃねぇぞ」とか「悪魔か……」と呟いていた。　簡易詰め所としてテントが張られ、シャイニングセイバー騎士団長と小隊長達は錯乱していた男達からなんとかこんな施しをした者の名を聞き出した。

「イグズデュキズ……だそうです」

副団長が周囲を伺いながら恐る恐る告げた名前に、その場にいた者達に戦慄が走った。

「おお、神よ」
「なんてことだ……」
「日の神よ、我等を御守り下さい」
「なんでそんな大物がこんな所に」

天を仰いで神に祈る者がいる中、腕組みをして沈黙をした騎士団長に皆の視線が集まる。　なんて心強い人だ、と羨望されているなどと思わない当人は部下を見渡して口を開いた。

「なあ……」
「なんですか、団長？」
「イグズなんとかって……何？」

その場に居た全員がつんのめった。

「し、知らないんですか？」
「いや全く、有名なのかそいつは？」

部下達が信じられねーという顔をするのに少々肩身が狭くなるシャイニングセイバー。　副団長が簡単なところを掻い摘んで説明してくれる。

曰わく、世界を二分する日の神（光神）と夢の神（夜神）があり、夢の神に従属する小神に当たる事。　御伽噺でも人をあの手この手で堕落させたりする者や欲につけ込んで破滅させたりする者、その上位五神を五大公という事。

「そりゃ神じゃなくて悪魔っつーんじゃないのか？」
「それで分けられるんであれば話は簡単なんですがねぇ。　詳しい話は神殿にでも行って聞いて下さい」

宗教的な話というのはやたらと面倒くさいと相場が決まっている。気持ち悪さもあるが、何時までもこの辺り一帯を封鎖出来る訳もなく、輸送用の檻に詰め込んで街壁の外にある兵員用の倉庫に移動する方針で話は決まった。

「そもそもこいつらがその悪魔に目を付けられた理由があるはずだろう。　他には話を聞けてないのか？」
「はあ、有るにはあるんですが。　実に不可解でして……」

手元の調書をペラペラ捲り、

「どうも冒険者の子を攫おうとしていたらしいんですが……」
「冒険者ぁ？　貴族じゃなくてか？」
「相手が団長の恋人候補のケーナ殿なんですよ」

「だから恋人じゃねーっつーの！　って、なんでアイツの子なんか狙うんだ？」
「そこまでは知らないみたいでしたが」
「狙われてたって事は、王都に居るのか。　本人に聞いてみるしかねーな」
「はいはい、先ずはこっちを終わらせましょうね団長」

さり気なく歩き出そうとしたシャイニングセイバーの襟首を掴み、副団長は現場に引き戻した。

一方、ケーナ一家の方は朝食を終わらせた後、学院より先に向かったのは住宅街の端。　騎士団が今まさに撤収し終わろうとしていた付近に近い場所だった。　街の喧騒の中でもなんとか聞き取れるわいわいと騒ぐ子供の声を頼りに、彼等の溜まり場へ。　路地奥には十数人の子供達と、混ざってはいるが一人だけ生まれ持った資質から混ざりきれてない少年がいた。

「あ、デン助だ」
「げっ！」

ケーナ達の現れた路地に背を向けていた為に気付くのが遅れた少年は脱兎の如く走り出そうとした瞬間、宙吊りにされた。　ケーナはルカ&リット両名と手を繋いでいたので、捕獲したのは勿論ロクシリウスだ。

「潰しますか？」
「二度ネタはいいよっ！」
「つか俺どーやって捕まったんだ!？　はーなーせーっ！」

ロクシリウスに後頭部をアイアンクローでガッチリ固定されているデン助はじたばたと暴れる。　ケーナからのアイコンタクトであっさり解放されてボテッと落とされた。　ぶちぶちと悪態をつくデン助を無視して、以前に石を買った子供を集団の中から見つけたケーナは、「石ある～？」と聞いてみた。

うん、と頷いた子供は古ぼけた木箱を引っ張り出して来ると、ケーナの前に差し出した。　以前と同じく【鑑定魔法】を掛けて石を選別する。　視覚的に光って見えているのはケーナだけなので、様子を伺っている子供達は何が違うのか不思議そうにして見ていた。

「今度からひとつ銅貨五枚で引き取ろうか？」
「えええええっ！」

普段なら綺麗な石に手を入れてペンダントなどに加工する職人が買うくらいで、ひとつが銅貨一～二枚程度で売れる。　全部で三十弱あったので銀貨三枚を渡すケーナ。　普段の数倍の売り上げに、子供達は目を白黒させて驚いていた。

「おい」

子供達との取り引き中、リットとルカは馴染めそうにないのか、ひたすらロクシリウスの後ろに引っ込んでいた。　二人の手を取って「次はお姉ちゃんに会いに行こうね～」と促した所へ、デン助から声を掛けて来た。

「あら珍しい。　私は君に嫌われてると思ってたんだけど？」

「今日は俺を捕まえないのかよ？」
「あれはまあ、アガイドさんから暇だったらって言われてるし。今日は丁度ヒマじゃないんだ」
「そうかよ。　こいつらのこと……礼は言っておく」
「何のことやら、ただの売り物を買っただけでしょ？」

あっけらかんとあったことを答えると、デン助は「チッ……、よそモンはこんな所来るんじゃねえ」とケーナを路地から追い出した。
眉を吊り上げるロクシリウスをいいからと押さえてケーナはその場を離れる。

そこを離れてエッジド大河の渡しへ向かう。　岸辺の半分以上はモンスターに破壊されたままではあるが、あちこちから桟橋を以前のように伸ばし始めていた。　ルカは一度見ている上に育ちが海沿いなので特に驚きはしない。　リットだけが目を輝かせて河の流れを見ていた。　この辺りは上流地域の村北部と比較しても川幅が段違いに広いからだ。

「これ、川？」
「ああ、リットちゃんは村の北を流れているのしか見たことなかったっけ。　この辺だとこんな感じだよ」

リットに「そうなの？」と問われたルカは少し考え、ケーナを見上げてからまたリットに視線を戻し、コクリと頷いた。　海の広さと比べていて反応が遅れたらしい。
ゆらゆらと不安定な二双式の船に子供達はロクシリウスの手助けで乗り込む。　緩やかな流れで濃い緑紺の水面を二人で楽しそうに見ていた。　ケーナの方は同乗した人達にロクシリウスを夫と勘違

いされたり、子供がいるのを驚かれたり、幾ら払えば水面を歩けるのか交渉されたりしていた。　中洲に着く頃にはぐったり疲れているケーナ。

「ケーナ、お母さん……、いっぱい、聞かれて、た」
「以前にここで何をやったんですか、ケーナ様？」
「おねーちゃん人気者なんだねー」

それぞれの反応に自身の行いを悔やむも、やっちゃったものは訂正できないので引きつった笑みでとりあえず誤魔化しておく。

学院では丁度グラウンドにて魔法実習が行われていた。　万が一の事もあるので【魔法防御】を子供達に掛けてから、授業の邪魔をしないように外周にそって移動する。　薄緑のローブを着ている生徒とは別に、紺や赤茶色のローブを着ているのは教師のようで遠くからでもよく目立つ。　その中の一人がケーナ達に気付くと慌てて移動して来た。　ケーナには直ぐ自分の娘だと判明する。

「お母様！」
「おはようマイマイ」

飛ぶようにすっ飛んで来たマイマイは生徒の手前もあっていきなり母親に抱きつくような事はせず、急停止してから挨拶を交わす。　首を傾げてルカとリットを見ているので、苦笑したケーナはルカの肩を持って前に出した。

「こっちが今度貴女の妹になったルカよ。　ルカ、これが私の娘で貴女のお姉さんのマイマイ。　こっちの子は村でのお友達のリット。　こっちの猫人族（ワーキャト）が……」
「ケーナ様にお仕えしております、ロクシリウスと申します。　以

後よしなに、お嬢様」

きっちりとした姿勢で頭を下げるロクシリウスにやや引きつり、ルカの手を取ってから額にキスをする。

「よろしくルカ。　マイマイというのよ、気軽にお姉ちゃんと呼んで頂戴」

「……よろ、しく、……します？」

お願いの部分がぼそぼそっとしたので聞き取り難かったが、概ね友好的に受け入れてくれたらしい。　これが事件直後だったらこうはいかないだろう。

「マイマイ、授業中でしょう？」

「あー、あははは、じっとしてるのが退屈になって抜け出しちゃったんで……」

「こら」

纏まって歩きながら生徒の固まっている所に近付いて行く。　マイマイは生徒達と教員にケーナ達を見学者だと説明する。　一見するだけなら四人家族にしか見えないので、ルカやリットに微笑ましい視線が飛んできた。　幾人かはマイマイとケーナの関係を知っているので、そこから話が広がり驚愕している者もいた。　水面歩きの人として一方的に知っている者達や、冒険者として知っている者は遠巻きに。　同宿での知り合いや、お世話した者はわざわざ近寄って挨拶を交わしていた。

「ちーす、ケーナさん」

「先日はどうも、また酒盛りしましょうぜ」

「あははは、飲み比べは勘弁ね」

「こんにちは、ケーナさん」
「いつぞやはお世話になりました」
「こんにちは、ロンティにマイちゃん」

侯爵令嬢と王女殿下に家族を紹介する。　地位も一緒に説明してしまったのでルカとリットが萎縮してしまったが、当人から『構わない許可』を頂いて周りで見ていた生徒がびっくりしていた。
授業の方はグラウンドの端に並んだ案山子に魔法を飛ばしたり、手元に光を灯したりしている。　初期クエストで得た技能（スキル）を街中で試したりしている初心者の集団に見えて、ケーナは感慨深い表情でその光景を眺めていた。

「お母様、妹達を校内見学に連れて行ってもいいかしら？」
「分かった、ルカに良いとこみせたいのね」
「はうっ！」

自慢気なマイマイの様子を察し、致命的な所を突かれて肩を落とす様を見てからロクシリウスに視線を向ける。　彼は自分の役割は承知していると頷いた。

「じゃ頼むわロクシリウス。　マイマイは二人を泣かしたら折檻ね」
「お母様過保護過ぎ……、偶には私も愛が欲しいです」

ぶちぶちと文句を垂れるマイマイを先頭に四人を笑顔で送り出したケーナ。　一緒にくっ付いて行かなかったのは敵視する視線を感じていたからだ。
学院長が校舎内に引っ込んだのを見越してケーナに接近する者がいた。　二人の取り巻きを引き連れた身なりのいい青年がふんぞり返ってケーナの前に進み出る。　同時に周りの生徒達から舌打ちやひそひそ声が大きくなった。　青年が近付いてくると、ケーナの背

後に回っていたロンティから青年が王女の母方の従兄弟だという説明をされる。　マイが困った顔で何も言って来ないのはソレが理由だからだろう。

「やあ、無名の冒険者女史。　学院長の母親だそうだが、キミ自身が別段爵位持ちと言う訳でもないのだろう？　平民であるのならばもう少し慎ましく生きるべきだね」

「……」

何が言いたいのかさっぱり分からないので無言を貫く。　その背後では宿での知り合い等が色々なジェスチャーを送っていた。　嫌味ったらしいから注意しろと言いたいらしい、要約すると。　相手の意図も直ぐ判明する。

「さて提案だが、君が例の馬車を持っているという冒険者だね？　冒険者なら冒険者らしく金で問題を片付けられるだろう。　キミ達平民の見たことが無い金額を積んであげるから、あの馬車を譲ると頷きたまえ。　コレが最期通告になるよ」

（……これは喧嘩を売られているんだろーか）

『黒幕ト言ウヤツデハナイデショウカ？』

周囲はシーンと静まり返り、生徒も教師も身じろぎせず事の推移を見守っていた。　学院長の母親と言う冒険者が相手にしているのは現王妃を輩出した侯爵家の嫡男である。　ロンティのアガレスト侯爵家とフェルスケイロを二分するトップからの交渉に、誰もが彼女は首を縦に振るものだと思っていた。　王女と侯爵令嬢を除いて。

「あのねえ、寝言は寝てから言いなさいな」

「……なん、だって？」

ふふんと自信満々だった青年の笑みははっきりとしたケーナの拒絶に豹変した。　冒険者風情を侮蔑する憎々しげな顔で横柄な態度へ切り替わった青年。　彼は腰に下げていた杖を手に取ると、それを構えるようにケーナへと突き出した。

「いいだろう、折角交渉の場を設けてやったというのに断るとは。ならば力づくで貴様からもぎ取ってやる。　覚悟するがいい！」

「……力づくって……おいおい」

生徒達から悲鳴が上がる中、【魔法行使：岩人形形成（マジックユーザー　クリエイト・ロックゴーレム）】の魔法が行使される。　背後から「マジかよ」とか「ヤベェって、あれ」などの声が飛ぶ所を見ると、それなりの実力者らしい。　大地から隆起した巨岩がゴリゴキと耳障りな騒音をたてながら形を変えていき、高さ二メートル程のゴツゴツした容姿のロックゴーレムが出現した。

実力の差を知るロンティとマイにとっては、あの日に見たホワイトドラゴンに比べれば児戯のようなものである。　ましてやアレを操る人物がそれ以上の実力を持つものだと理解している。

「どーしろってのこれ？」と難しい顔をしているケーナに対して、マイことマイリーネ・ルスケイロは慈愛の笑みを浮かべゆっくり頷いた。　つまりはやっちゃっていいとの許可を出され、ソレだけで呆れた表情になるケーナ。　クロフィアと相対した時よりも酷い弱い者苛めにＯＫサインを出され、自分に向かってノッシノッシと歩む岩人形を見る。　自分の百分の一以下のレベルしか持たない無機物に対し周囲の悲鳴もなんのその、腕を振り上げて此方に殴りかかろうとしたソレのドテッ腹に軽くキックを叩きこむ。　勿論、一撃でＨＰをマイナスにされて木っ端微塵、岩人形は哀れにも小石の山と成り果てた。

痛いほどの沈黙が満ちた。　魔導士としては学院で上位を誇る生徒の作ったゴーレムが、蹴りひとつで粉砕されたからだ。　術者の青年は顔を青くして自分の僕（しもべ）だった小石の山を見つめ、平然と立つ冒険者に視線を移す。　この場で優位に立って居ると言うのに何故か戸惑っていた女性は深々と溜息を吐いた。

「ねえ貴方、走るのは得意？」

「は？　な、何を言っている？」

「死にはしないと思うけど、逃げるといいよ。　【召喚魔法（サモンマジック）：ｌｏａｄ：雷精Ｌｖ３】」

空中から染み出した放電現象が結集し、ワイヤーフレームで形成された大柄な煌く獅子が出現した。　貴族の坊ちゃん青年の目の前で地に足をつけると、周囲に震動を振り撒いて吠え、稲妻が走って地を穿つ。　ズザザザ――ッと様子を伺っていた生徒達が獅子の放つ威圧感に恐れをなし、貴族の坊ちゃん青年の周囲から居なくなった。　顔面蒼白でペタンと尻餅を付いた目標に威風堂々と歩み寄った雷獅子は、いただきまーすとでもいうような感じで頭に噛り付いた。

バリバリバリッ！！　と目に痛い輝きと雷撃音アンド、「ぎぃゃあああああああっ！？！」という悲鳴が二度三度と響き渡る。

遠巻きに見ていた生徒達と教員は隣人同士で抱き合い、真っ青になってぶるぶる震えつつ、恐怖の時間が通り過ぎるのを待つしかなかった。　こんなことになるんじゃないかと達観して見ていた王女殿下と侯爵令嬢を除いて。　マイマイ一行が戻る頃には雷精を送還し終え、黒焦げたボロボロの衣服を申し訳程度に纏った人物が倒れているだけになっていた。　生徒や教員は場所を移動し、校庭の反対側で授業を続けている。

「なにをやったんです、お母様？」
「喧嘩を売ってきたから買っただけ」

事も無げに言い放ち、ルカとリットを抱きしめる母親の真偽を傍に居たマイやロンティに問う。「概ねその表現で間違いありません」と返って来たので、だらだらと汗を流すマイマイ。慌てて治癒魔法をかけて教員を呼び、治療室に連れて行った。取り残されたケーナは「顔合わせも済んだからもうちょっと観光しようか？」と聞く。二人が大きく頷いたのでマイとロンティに挨拶をしてこの場を離れようとした時だった。学院正門から三人組の騎士が入って来るのにロンティが気付く。

「マイさん、騎士団が……」
「ええ、何かあったのかしら？」
「……騎士？」

立ち上がって振り向いたケーナの前に巨躯の竜人騎士が近付いて来た。マイを見つけると胸に手を当てて簡易礼をする。

「これは姫様、授業中に失礼致します」
「騎士団長、また何事かあったのですか？」
「いえ、本日はそうではなく……」

体ごとケーナに向き直り、頭痛を押さえたポーズで告げた。

「ケーナ、お前に色々と聞きたい事がある」
「へっ！？　私に？」

「千客万来ね～」
「何の事だ？」
「こっちのこと、こっちのこと」

学院長の母親というだけでも注目があるのに、騎士団長と気負いもせず会話しているケーナにその場の視線は釘付けだ。ゲームシステムに関しての話、と言うのでグラウンドの端まで移動する。お供の騎士二人にも同席を遠慮してもらっている。

「……で？」
「あ、ああ。んー、なんと言ったらいいか……。悪魔を召喚するスキルってあるか？」
「あるよ」
「あるのかっ！？」
「私には使えないけど」
「……は？　いやちょっと待てお前……、スキルマスターだろう？」
「スキルが全部あるからって何でもかんでも使える訳じゃないよ。性別で使えないのとか、種族で使えないのとか、幾つかあるもん。悪魔召喚が使えるのは人族か魔人族だけ」

例えばドワーフしか使えない技能に【常用技能（パッシブスキル）：掘削（あなほり）】がある。他の種族は【ダンジョン作成】に専用の鉱夫を雇わねばならないが、これがあるドワーフは単独で坑道が掘れる。ケーナは一応持っているが、無用の技能の内の一つだ。
腕組みして考えていたシャイニングセイバーを見たケーナは、何かがあったんじゃないかと心配になってくる。

「ケーナの知る中で使える奴は？」
「スキルマスターで魔界に行った事のあるのだと……、三人くらい

しか知らないなあ。　ウチのギルドは確実に魔界は行ってるけど、誰がどこまでスキル習得してるのまで把握はしてないから、分からない」

魔界天界エリアは七百レベル帯から上位の者が行く、難易度の高いレベル上げ専用エリアだ。　ここを単独で切り抜けられるようになればカンストまで育てる事が出来る。

なんとなく尋問じみてきたのに気付いたケーナはシャイニングセイバーを睨む。　部外秘な事件ではあるが、狙われていたのはケーナの身内なのでシャイニングセイバーは地下組織壊滅の概要を伝えた。

「ロクスが伺う視線を感じたとか言ってたけど、その人達だったのかも」

「街中に流れている情報だけで判断するなら、お前に手を出す奴なんかいねーよ」

実際には手を出されているがその事実はロクシリウスの所で完全に止まっている。　ケーナの所には『伺う視線があった』としか聞かされてないので、構成員の大半を執事が無力化したなど知る由もなかった。

「最後にひとつ、ケーナの知る中で【悪魔召喚】を使いそうなのはいるか？」

「んん～？　うーん……。　オプスくらいだと思うよ。　アイツの館、悪魔だらけだもん」

「分かった。　ありがとう、邪魔したな」

片手を挙げて礼を言うとシャイニングセイバーはお供の騎士と合流し何事かを話し合うと、王女に頭を下げて学院を出て行った。

狐につままれたような顔をしたケーナにルカとリットが近付いてその手を取る。

「どうかなさいましたか？　ケーナ様」

「ううーん、悪魔が召喚されて地下組織が一個壊滅したんだって。それがなんかオプスと関係があるんだそうよ」

「オペケッテンシュルトハイマー様がですか？　確かに彼の方であれば片手間にそんな事もしそうですね」

決してその片棒を自分が担いでるとは言わないロクシリウスだった。

37話　漁夫の利を釣ってみよう

二日目の午後は教会に寄って煌びやかなステンドグラスを眺めた後、カータツの工房へ向かった。

「お袋！」
「や、カータツ」

従業員が床や材木の影などで休憩している所へケーナ達がやって来ると、奥からカータツが飛び出して来た。

「この前は材木ありがとうね、お陰様で良い家が建てられたわ」
「そりゃお袋の腕に依るものであって俺のお陰じゃねぇだろうよ。よお、ルカ、元気か？」
「……はい。　こんにちは、カータツ、……お兄さん」
「こんにちは初めまして、リットです」

カータツの傍まで近寄ったルカが俯く程度で言葉を繋ぎ、その後でリットがペコリと頭を下げた。　ロクシリウスはケーナの背後に控えたままで一礼する。

「ああ、そっちは宿屋の嬢ちゃんだっていう娘っ子か。　俺はお袋の三番目の息子のカータツだ。　見ての通りここの工房で船を作ったりしてる、宜しくたのまぁ」

腕組みをして髭を撫でつけながら簡素な自己紹介をするカータツ。
ルカはリットと手を繋ぎ「見ても、まわって……いい？」と上目使いにおずおずと尋ねた。

「おお、構わんが……。　あちこち危ない物が転がったりしとるからなあ。　材木の山には近付くなよ？」
「……うん」「はい！」
「でしたらお二方の引率は私が引き受けましょう」

すうっといつの間にか傍に立ったロクシリウスが申し出ると、カータツは弟子達から案内人を選んで好きに見学させるように告げた。

「悪いわね、ルカが無理言っちゃって」
「なぁに、あの程度なら問題ねぇさ。　あっちのニイサンはかなりの遣い手っぽいし、材木崩れくらいなら平気だろ？」

人族の弟子にあれは何、これは何？　とリットが質問（ルカはリットにぼそぼそと囁いてたり）し、ロクシリウスはその背後で油断無く目を光らせる。　休憩している他の従業員達は、頬を緩ませてそれを眺めていた。

「村に建てた家なんだけど、部屋数多目に作ったから何時でも泊まりにいらっしゃい。　村に浴場も作ったしね」
「へえ、そりゃ楽しみだ」
「それとこれも、ね！」

アイテムボックスから取り出した樽が、ドスンと音を立ててケーナの前に現れた。　ぷんと微かに漂う香ばしい匂いに破顔したカータツが「酒か！」と飛び付く。

「村では酒屋を営む事にしたから、材木のお礼も兼ねて一樽あげるわ。　独り占めするも良し、皆に振る舞うも良し、好きに飲みなさい」

「材木のお礼って、料金は貰った筈だぜ。　これだと俺が貰い過ぎにならねえか？」
「いちいち律儀ねぇアナタは……。　素直に『儲けた』ぐらいで受け取りなさいよ」
「お、おう。　有り難く貰っとくぜ」
「堺屋経由で販売するから、もっと飲みたければ次はそっちに注文してね」
「分かった、すまねぇなお袋」

満更でもないのかホクホク顔で樽をヒョイと持ち上げ、奥へしまい込むカータツ。　ついでに従業員達へ「お前等！　お袋から上等の酒を貰ったから今晩は飲むぞっ！」と声を掛ける。　他の者達からは歓声が上がり工房を震わせた。

「こういうの、宵越しの酒は持たないって言うのかしら？」
「……おさけ？」

一通り見て回ったらしいルカ達が戻って来て、ケーナの呟きに不思議そうな顔をする。

「お酒は飲める時に飲み尽くせ、って意味よ」
「ふーん、べろべろに酔っ払った大人は情けないよね……」
「リットちゃんは正直ねー」

姉のルイネみたいに率直な意見をリットが口にすると、ケーナは苦笑する。　周りで聞いていた従業員達が胸を押さえて視線を逸らしていた。

その日は再開した造船作業の様子を子供達が眺めると言うので、夕暮れまで工房で過ごしていた。　ロクシリウスが子供達の面倒を見ると言うので、手持ち無沙汰になったケーナは中洲の端で釣りを

始める。

釣りもスキルのひとつで、ケーナの場合は食材用に使う程度でしか扱わなかった。プレイヤーの中にはレア魚を求めたり全種類の魚を釣ったりと、極めるのに全力をかける者も多い。スキルマスター仲間の九条に頼まれて、特定の魚釣りに延々とつき合わされた記憶もあり、ついその時の事を思い出して噴き出しながら準備をする。

釣り用の餌もスキルで作り出し、九条のお節介で釣具も一通り揃っている。市場でも見掛ける魚は種類も豊富なので、何を釣ってもここの生活が長い息子が食べられる魚を選別してくれるだろう。

一投目からエッジド大河名物のナマズを釣り上げ、入れ物も必要かと思うケーナだった。

時間が経つにつれ、工房に務める者達の注目はケーナに集まっていた。

なにせ投げ込めば必ず何かしら釣り上げるのである。カータツが気を利かせて持ってきたタライ桶が、もう二つもいっぱいになってしまい、両方とも中身は餌に群がる鯉の如くみっしりと詰まっている。ケーナは小さいのは釣り過ぎかと判断して、大物を釣るための仕掛けに切り替えた。久しぶりに始めたら意外に楽しくなってしまい、「家族分を釣ればいいや」から「みんなの分を釣ろう」になり、今はもう「糸が切れるまで釣るのを止めない」状態になっている。

いつの間にか造船見学もそこそこにルカやリットはタライを覗き込み、ロクシリウスや手を休めた従業員に魚の名前を聞いたりしていた。

カータツも今日は作業を諦めて、弟子達と一緒に魚を調理する方向で準備をしていた。　仕事柄器用な者も多く、腹を割ってワタを抜き、串を刺して塩（ロクシリウス作成）焼きにする者。　活け作りにしてしまう者、綺麗に捌いて揚げ始める者までいて、辺りには美味そうな匂いが漂う。　オマケに付近を流していた漁師までもが匂いに釣られ、釣果を持ち寄って集まってくる始末。　たちまち工房の川岸は人が集まり、篝火が焚かれて即席の宴会場と化した。

「ケーナ……お母さん、はい……」

「あら、ありがとうルカ」

仕掛けを切り替えた途端に潰れたピラルク型の三メートル魚を釣り上げると、集まっていた者達から歓声が上がった。　中々釣れにくい魚で美味らしく、市場でも銀貨二枚以上する高級魚だとか。皆は釣った者の意向次第と言っていたので、特に関心の無いケーナは「食べちゃえ」と告げた。　穴を掘って香草蒸しにされた魚肉の最初の一切れを持って来たルカが「あ～ん」と開けたケーナの口に放り込む。

「あつっ、はふ、あふぁ。　あ、これ美味しい」

香草で臭みを消され塩を振っただけの身は柔らかく、鯛に似た味がしていた。　持っていた皿からケーナの分が無くなると後から別にリットが持って来た身を二人で分け、美味しさにビックリする。

その後ろからカータツがやって来て、持っていたコップを母親に差し出した。　先程のビール樽を開けて振る舞い酒にしているよう

だ。

「ほら、お袋の分だ。　もうこんだけ釣りゃあ充分だろうよ、いい加減釣るの止めて宴会に加わったらどうだ？」

「うーん、なんか楽しくなって来ちゃってね。　もうちょっと釣っておくわ」

「ケーナ、お母さん、まだ、……食べる？」

「そうだねえ。　じゃあ普通に塩焼き持ってきてくれる？」

「……うん」

ちなみにロクシリウスは何をやっているのかと言うと、スキルで塩を作り出したりしながら調理技能（クッキングスキル）で押し寿司やにぎり寿司を作っていた。　もの珍しい料理なので、作った端からパクパク喰われ無くなっている。

竿を片手にルカの持ってきた塩焼きをパクついているケーナ。リットは身に染み着いた習慣故か完全に給仕となっていて、料理を運んだり酒を注いだりしていた。　歌を歌い出す者や笛を吹き出す者も出てきて、何故か流しの吟遊詩人まで混じり、ドンチャン騒ぎが激化していた。

「こういう事って良くあるの？」

「まずねぇな。　お袋が来るとなんつーか……、騒動事が多いよな」

「悪かったわねっ」

「うん、……たのしい」

ケーナの立つ川岸まで移動して来たカータツはそこで飲み食いをしている。　ルカはその辺にあった大きめの岩に腰掛けて、総勢八十人以上にまで膨れ上がった宴会を眺めていた。　給仕疲れでヘロ

ヘロになったリットを連れてロクシリウスが戻ってくる。

「リットちゃんご苦労様」

「ううー、気が付いたらなぜか給仕していました～」

「そりゃあもう職業病ってやつだろう、嬢ちゃん」

「すみませんケーナ様。　此方の方まで手が回らず、申し訳ありません」

「必要になったら呼ぶから、好きにしててていーのに」

どうやら戻った時にチクチクとロクシーヌに突つかれたくないらしい。　傍を離れた事をしきりに謝るロクシリウスをルカが頭を撫でて慰めていた。

「ケーナおねーさんまだ釣るのー？」

「うーん、あと一匹釣ったら宿帰ろうかな……、っと？」

言いかけたところで竿がぐおんとしなる。　海で大型魚を釣る特殊仕掛けに何か掛かったようだ、篝火の届かない水面を糸が右に左に斬って行く。

両手で竿を掴んだケーナに「光！」と命令されたロクシリウスは【付加白色光ＬＶ２：ライト】を竿の先端に掛け、水面を照らす為に光精霊を二体喚びだした。　直後、ゆらりと巨大な影が水面を占めて、目撃したケーナ家一同が目を見張る。

「うわ、なにあれ？」

「でけえな、釣り上げるとしてここの広さで足りるか？」

ケーナ近辺の川岸にさっと目をやったカータツは、そこら辺にいる者達を下がらせた。

「いや、まだ釣れるかどーか分からないから！」
「お袋なら絶対釣ると信じてるぜ！」
「過度な期待ってヤダなあ……」

息子だけでなく宴会していた者達まで騒ぎを聞きつけて、川岸にいたケーナに注目が集まる。　左右に振られる竿をしっかり掴んだケーナは、引き上げるよりも引っ張り出そうという方法を取って、竿を上げたままじりじりと下がり始めた。

やがて観念したのか、はたまた自棄になったのか、釣り相手がぐわしぐわしと浜に上陸して来た。　光精霊に照らされた姿形を見た者は、悲鳴を上げて川岸から我先にと逃げ出した。　ロクシリウスもルカとリットを両脇に抱えて、その場から遠ざかる。　残ったのはビール片手のカータツと竿を持ったままのケーナだけだ。

「なんじゃこりゃ？」
「モンスターだねぇ」

全長六メートルはあろうかという濃い緑色のゴツゴツした皮膚を持つ四脚歩行のそれは、鮫の頭に鰐の顎と胴体、背中には横に広がるエイに似たヒレと縦型に薄く長い尾を生やしたモンスターだった。　陸地に上がって来たそれは、顎をがっちんがっちん鳴らしながら開閉して親子を威嚇する。

「あー、そう言やあ、川っぷち一帯に注意報が出てたような気がするなぁ」

ビールをぐびりと飲みながら今思い出した、という気安さのカータツに背後の弟子達から「親方が聞いてきたんじゃないっすか！」と、非難の声が飛ぶ。　母親の手前、自分の間抜けさに背後へ怒鳴

り返す訳にもいかず、額に青筋を浮かべるだけに留めるカータツ。
苦笑して「まあまあ」と息子を宥めるケーナ。

その瞬間、ガアァア！　と吠えたモンスターが視線を逸らしたケーナに襲いかかった。　背後の見物人が息を飲み、「危ねえっ！」と叫び、目を瞑って惨劇を直視するのを避ける者が続出。　悲鳴が響く夜闇の中、襲われた当人（ケーナ）は慌てず騒がず、地を蹴って巨体を宙に踊らせ、自分達へ襲い掛かろうとしたモンスター目掛けて蹴りを放った。

【戦闘技能（ウエポンスキル）：震脚爆破（グェンヴァンティ）】

首から下、胸の大部分を背中側に爆散させる形で消失、一瞬で絶命したモンスターはそのままドーンと砂地に落下して動かなくなる。

シーンと痛いくらいの沈黙が辺りに蔓延し、恐る恐る様子を伺っていた見物人達は動かなくなったモンスターを凝視する。　やがてざわめいていた群集から小さな拍手が響き、すぐに大喝采となって大歓声が夜のフェルスケイロに轟いた。

とりあえずそこで宴会はお開きになり、飲み食いしていた者達と工房の従業員で片付けが始まる。　その最中に何故か宴会に混じっていた王都巡回中の衛兵によって、モンスターの検分が行われた。
なんでもココ暫くの間、小舟や水辺に近付いた人を襲うモンスターが出るとかで衛兵が警戒していたらしい。
脅威は去ったと言う事で衛兵に感謝され、一応冒険者ギルドの方にも懸賞金の掛けられた依頼が出ていると言う。　話は通しておくので明日にでも受け取りに行ってくれと言われた。

「うーん、流石大河、何が住んでいるか分からない」

「問題……、違うと、思う」

但し、翌日になって宿屋のほうに感謝の印と称した漁師達からの貢物、大量の魚が届けられ冒険者ギルドに向かうのは夕暮れになったと言う。　ちなみに懸賞金は銀貨八枚だった。

38話　ランダム遭遇表

フェルスケイロ滞在四日目。

元々の目的は娘達を会わせる事とリットの社会見学だったので、目的はほぼ果たしたと言っても良いだろう。　臨時収入もあったので持ち帰る食材を多目に購入して、午後には村へ帰ろうかと予定を立てる。　ルカやリットにもそれを伝えると、お土産を買いたいと言い出したのでロクシリウスに付いて行って貰う。　一応マイマイとカータツの所には足を運び、村に帰る旨を伝えておく。　ついでに部屋は余ってるから、遊びに来るなり王都を引き払って住み込みに来るなり自由にしろと言っておいた。

これにはマイマイが面白いくらいに悩んでいた、……夫はいいのか。　昨日、大量に届けられた魚は全部技能（スキル）で燻製に変えて密封し、馬車へしまい込んだ。　街の食堂で昼食を食べてから出発となった。

帰り道は急（せ）く事はせず、【行軍】は使ってもゆっくり行こうと娘達が提案してきた。　ケーナも反対する理由もなく。　フェルスケイロを起って一日目の野営をしようとした時に、進行方向から四騎の騎馬に守られた豪華な馬車が近付いて来るのにロクシリウスが気が付いて、主に報告した。　野営地に横付けされて直ぐに中から『虹の後光』を背負ったスカルゴが飛び出して来る。　苦笑して迎えるケーナ。

「ああ母上殿、このような場所でお会い出来るとは……。　このスカルゴ、神に感謝致します」

護衛の騎士達は一人で悶えるスカルゴをスルーして野営の準備にかかる。　息子の頭に拳骨を落としたケーナは「騎士ばかりに任せず、アナタも手伝いなさい」と指差した。　母親の笑顔にうすら寒いモノを感じたスカルゴは飛び上がって反転、騎士達の準備を手伝いに行く。　額に手を当てて「ハァ～」と溜め息を零したケーナはルカとリットを呼ぶ。

「……呼ん、だ？」
「なぁに？　ケーナおねーちゃん」
「あっちの騎士さん達に夕食をご一緒しませんか？　って、聞いてきて貰えるかな」
「はい、頑張、る」
「うん！　まかせて」

二人が手を繋いで仲良く歩いて行く様を見送っていると、傍で焚き火を作っていたロクシリウスが噴き出した。

「どうかした？　ロクス」
「スカルゴ様にはお伝えしないのですね？」
「働かざる者喰うべからず、よ」
「それはまた、手厳しい」
「いまいちあの子との距離を計りかねているんだけどねー、これでも」

「そうは見えませんが」と言いながらお茶を人数分淹れたロクシリウスは、ケーナや戻ってきた子供達にコップを渡す。　自分達でどうにかしようと思っていた騎士達は子供の縋るような眼差しに断りきれず、了承の旨を返した。　ついでにむせび泣きながら「なんで私には言ってくれないんですか！？」と苦情を言いに来たスカルゴに対し、ルカが「お兄、ちゃん。　サボ、ったから、ダメ」とジ

ト目で述べて、石化していたのは割愛する。

ケーナが料理技能を使い作った、ルッジド大河から採れる大ぶりな貝と野菜、コルトバードの肉でピリリと辛いスープは鍋いっぱいに作ったにもかかわらず、騎士達によって殆ど空になった。「母上殿の料理だから遠慮して喰べるとかどうなんです」などとブツブツ呟いていた愚息は威圧で黙らせて、ロクシリウスが茶を配る。街道沿いの沢まで降りて食器を洗い、親子とリットが戻るとささやかな団欒の時間だ。先にケーナがスカルゴに言い聞かせたので、地位など関係なしの無礼講になっている。騎士達を率いる小隊長も話の分かる人だったようだ。

なにせ冒頭から「スカルゴ様、出来れば馬車の中からすれ違う民達に対して星や虹を飛ばすのを止めて貰えませんかね？　我々が恥ずかしいです」とか、苦情が飛び出す始末である。

「ああ、愚息が馬鹿でごめんなさいね。　なんだったらフェルスケイロに戻るまで、ロープで簀巻きにして行ってもいいわ。　この私が許す」

「は～は～う～え～」

「何を泣いているのよ、スカルゴ。　わりと本気よ」

「否定無しですかっ！？」

ドッと沸く皆。　爆涙しながらへなへなと倒れるスカルゴがいた。

騎士達からは他にもフェルスケイロまで行った目的を聞かれたが、隠すような事もないので、娘に会いに行くついでに子供達の社会見学だと答える。　暫くはたわいもない話題で歓談が続いていたが、酒も入って饒舌になった騎士の一人がつい漏らした一言によって、静まり返った。

「いや～、スカルゴ様の父上とかどんな人だったんですかねぇ？」

本来ならばどこかで話の種に出てもおかしくない質問だったが、全く想定してなかったケーナは絶句してしまう。　同時に普段は黙っていてもエフェクトで周囲を明るくするスカルゴでさえも、悲痛な顔で俯いてしまった為に沈黙が降りた。　流石に口を滑らせたと気付いた騎士が我に返り、小隊長に小突かれて「すんません」と頭を下げた。　そこで話が終わればたわいのない話題で済んでいた。

しかし微妙な空気が漂う中、俯き加減でいたスカルゴが頭を上げ、ケーナを見つめた。

「母上殿。　父上殿については我等兄弟、曖昧な所でしか話を聞いてないのですが、どんな方だったのですか？」

「ぶっ！」

一難去ってまた一難、何とかうやむやになろうとしていた話題に安堵したケーナは、ド直球で聞き返してきた息子に心の中で最大火炎魔法を叩き込んだ。

厳密に言ってしまえば、スカルゴ達の父親は【ＶＲＭＭＯリアデイル】のゲームシステムそのものである。　言った所で理解はされないだろうが……。　内心パニックになったケーナは最も良く知る男性像（オブス）を参考にして後先考えずに説明を始めてしまった。　曰わく、自分より強かっただの、人をおちょくる事に関しては悪知恵が働いただのを。　喋っているうちに自己嫌悪でドンドン暗くなっていったので、何故母親より強いのに今居ないのか？　という疑問には触れられなかったのがケーナにとって最大の救いだろう。

すっかり落ち込んでしまったケーナの様子にその場はお開きにな

った。　会話の取っ掛かりを作った騎士はしきりに頭を下げていたが、悪いのは自業自得なので気にしないように告げる。　野営中の警備にケルベロスと雷精を呼び出しておき、スカルゴの方も任せる。
　元気の無い召喚主に、体を擦り付けたりして甘えてみるケルベロスだったが、如何せん彼の毛皮はごわごわだった為、癒すまでには至らなかったと言う。

　更にそこから二日経過した道程の野営地にて、今度はコーラルを含むＰＴ五人組と出会う。

「よお、ケーナ」
「あれっ、護衛の仕事じゃなかったの？」

　堺屋からの使者を国境へ護衛する依頼を受けていた筈、なのに終えるには早過ぎる。　心配して聞いてみるが、理由は簡単だった。

「ああ、片道だけの契約だったからな。　帰りは国境に暫く留まるっつーから。　俺らもフェルスケイロに帰るついでだしな」
「そうなんだ。　じゃあ、夕食でも一緒どう？」

　コーラルはケーナの肩越しに、此方をじーっと見ている子供達に気が付く。　その視線を辿って背後を振り返ったケーナは苦笑した。

「邪魔にならねえか？」
「他の人との交流を楽しみにしているみたいなのよ。　ルカが社交的になってくれて何よりだわ」

今度はコーラルが自分の仲間を振り返って「だ、そうだが？」と、尋ねる。　特に異論の無い仲間達は二つ返事で了承した。

再び調理技能で今度はパエリアに似た物を作り出すケーナ。　コーラルは兎も角その仲間達は初めて見る『古代の御技』に目を白黒させてびっくりしていた。　実のところ、ルカとリットが野営の時にコーラル達をじーっと見ていたのは、調理技能で作られた料理が食べられるんじゃないかという期待が最大の理由である。　スカルゴ一行と別れた後、昨夜の野営の時にはロクシリウスが調理した保存食の干し肉と野菜を煮込んだスープだったので、誰かが混じると『お客持て成し用料理』が食べられる認識が植え付けられたようだ。　もっともそれを知るのは、『どうしたらお母さんの調理技能が食べられる？』と聞かれたロクシリウスだけであった。

夜も更けてコーラルの仲間が自分達の体験を子供達に面白おかしく披露している時、コーラルとケーナは焚き火を囲んだそれぞれの仲間に一言断って、馬車を隔てた暗い闇の広がる森を見渡せる場所に二人だけで居た。　ケーナが内密の話があると誘ったのにコーラルが了承したからである。

「なんだよ、内密の話って？」
「コーラルってこっちに落ちてきてから十年も経っているのよね？　その経験を見込んでちょっと聞きたいんだけど……」
「なんだ、改まって？　とはいっても実力を隠して初心者みたいな状態を装い、身を小さくして生きてきたってぇだけだぜ。　ゲームのプロに答えられるほどの知識量は持っちゃいねえ」
「真面目な話なんだけど……、はい」
「おー、悪いな」

予め作り出しておいたビールの入ったコップを渡すケーナ。　この技能の欠点はいちいち作るたびに樽の大容量でしか作成出来ない所にある。　前回のスカルゴとの遭遇時に作ったのが沢山余っていたので、ここでコーラル達に会えたのは丁度良かったと言える。

「コーラルは、自分の力量でしか相対出来ない敵と出会った事はある？　この前のイベントモンスターを除いて」

「うん？　えーっとなあ……。　記憶している限りではそんなのないな。　ケーナはあるのか？」

聞き返されたケーナは嘆息して今迄出会った高レベルモンスターを説明する。　新しいモノでは先日釣ったばかりの鮫鰐モンスターと、オーガを率いていたダークエルフに、ルカを引き取る原因になった幽霊船などだ。　どれもそこにケーナが居合わせて丁度良かったというタイミングで倒されている。

「居合わせたうんぬんは自意識過剰なんじゃねえ？」

「まあ、そんな感じもするけどさ。　問題は鮫鰐を抜かせばイベントモンスターって点なんだよね。　ＮＰＣとの対話から発生する一連の事件の中にイベントモンスターの出現が組み込まれているのに、どうしてＮＰＣも事件も起きていない状況でイベントモンスターが稼動しているのかが解らない」

ケーナは果実酒の入ったコップを見下ろして淡々と述べた。　その様子だけで延々と溜め込んでいた愚痴にも聞こえ、コーラルは頷いた。　話を聞いた限りではケーナの普段の生活上、コーラル達のような同郷プレイヤーの仲間に会うことは難しい。　ただでさえ全員が全員、冒険者を生業としているのだ。　本拠地としている都市に行きました、で会えるとは限らない。　使用人に話すのは筋違い

だし、実際のところ愚痴相手が欲しかったのだろうと憶測をする。
それでも何かの糸口になればと、コーラルは十年の間に培った経験と知識等から彼女が望むものを拾い集めた。

「うーん、廃都って知ってるか？」
「ぐさっ……。　嫌味か嫌味ね嫌味なんでしょう」
「ああ！　茶国を廃墟にしたのお前だっけ、忘れてた」

天気予報と言われる製作者側の呟きに従い、茶国首都に出現したモンスターの大群討伐。　それを駆逐する為に魔法攻撃特化のスペシャリスト、ハイエルフ種最大レベル保持者、兼スキルマスター特権装備使用により、直前に攻撃に対する建造物の破壊バージョンアップが終っていたのが要因だ。　広範囲魔法【隕石落下（ギガ・ストライク）】が数百発降り注いだ結果、茶国首都は瓦礫の山になっていた。　以降茶国首都は通称『廃都』と呼ばれるようになったのはゲーム内での常識であり、ケーナの不名誉なあだ名『銀環の魔女』が広まった原因でもある。

「まあ、元が茶国の場所だけどな。　旅の途中で聞いたんだけどよ、『廃都』って言うのはフェルスケイロとオウタロクエスの間の西側にあって、存在自体が三国間の協定によって隠されているらしいぜ」
「はあ？　国同士が協力して隠さなきゃいけない危ない場所なの？　それとも国の利益になるための場所？」
「それは知らねえけどさ。　なんか公然の秘密みたいなもので、廃都の存在も信じてる奴と御伽噺だと思っている奴とで半々だっていう事だ」
「事情は分かったけど、それと私の話とどーいった関係があるの？」

もったいぶったコーラルはビールを一息に飲み干すと、空になった杯をケーナへ突き出し「わかってんだろ？」というようにニカッ

と笑い掛けた。「はいはい」と頷いたケーナは一旦そこを離れて馬車を回り、焚き火の方へ近づく。それだけで事情を察した気配りの達人ロクシリウスに、なみなみとビールの注がれたコップを二つ渡された。

「ありがと」

「いいえ、お気になさらずに」

そしてまた元の場所に戻り、コーラルにコップを二つとも渡す。一杯を一気に飲んだ彼は口の滑りが良くなったようで、脇腹を突いて続きを促すケーナに先程の続きを語る。

「俺も御伽噺としてしか知らんが、『廃都』ってのは二百年くらい前、大陸に三国が建国された時、神が残った災いを封印した地なんだそうだ」

「……災い？」

「俺も災いと言われてピンと来なかったんだが、それがケーナが言うところのイベントモンスターなんじゃないか？」

「……おお！　なるほど！！」

「なー、符号としては一致するだろう？」

「確かに……」

だいたいの確信が持てて納得しかけたケーナは、コーラルやシャイニングセイバー、エクシズやクオルケがここに居る理由に思い当たって動きを止めた。

「ん、どうかしたか？」

「コーラルはさ、サービス終了の日って何してたの？」

「あー、確か普通にその辺の奴とパーティ組んでザコ敵倒してたなあ」

「……って事はだ。　二百年前のサービス終了の日にはクエスト起動させて、イベントモンスターが出現する条件を揃えていた奴が沢山居て、それが全部『廃都』に封じられていたら……？　そもそもなんで外に出ているの？」

ケーナの言わんとするところが分かったコーラルも冷や汗をたらりと垂らした。

『ＶＲＭＭＯリアデイル』は七国がサーバとして別れていた。サーバーひとつの最大容量は各国ばらばらだが、戦争開催時には平均で一国千人強の統計が取られていた記録がある。　サービス終了の日には、一週間前から専用のバージョンアップであちこち飾り付けられて都市や村には花火も上がっていた。　お祭り騒ぎが好きなプレイヤーであれば、というかお祭り騒ぎが好きそうなプレイヤーばかりだった気もする。　引退した者も久しぶりに参加していたとの声も聞くので、下手をするとリアデイルというゲーム稼働中で最大人数がアクセスしていた可能性もあった。

そんなお祭り騒ぎの中、ゲーム終了まで普段と変わらないレベル上げに勤しむ者はコーラル以外にも沢山居た筈だ。　その中の一握りが通常の狩りではなく、最後だからと今までやったことのないクエストを起動していたら？　もしかしたら最終ボスとの戦闘中に全サーバーがシャットダウンを食らい、そのまま倒されず世界にイベントモンスターが残る事になっていたとしたら？　ゲームとこの世界がどれだけ忠実に密接に繋がっているのか不明だが、ケーナの遭遇率と御伽噺と三国の取り決めを鑑みるにそれが一番確実な推測だと二人は思った。

「シャイニングセイバーなら国の上層部としてこの情報とか知ってるんじゃない？」

「ケーナの息子とかはどうなんだ？」

「流石のあの子でもプライベートと仕事は分けると思うなー。　でないと国のＮｏ．３とか言えないでしょう」

態度はちゃらんぽらんだが人格も変なスカルゴ、と認識しているケーナ。　スカルゴ自体が母親を国自体に係わらせない処置を取っているので、自分から国の重要機密をバラしたりはしないだろうとケーナは思う。　だからと言ってオウタロクエスまで足を運び、女王サハラシェードに聞くわけにもいかない。　この辺りの情報を確認するのならば国に一番近い位置に立つケイリックが妥当だろう。

商人であれば情報も商品として扱っていないか聞いてみようと考えた。　後はエクシズ達にも意見を聞いてみる必要があると心内（キー）メモ帳に記憶させ、次に会った時に情報交換をしようと約束してその夜はお開きとなった。

コーラル達と別れて更に二日後、やっと辺境の村に帰って来る事が出来た。

村の入り口のラックス工務店は、工務店兼雑貨屋として店舗を開店していた。　早速ラテムにお土産を渡しに行ったルカとリットのついでにスーニャと挨拶を交わしたケーナは、国境に建設する砦の補給所として一般品を扱うのだと聞かされた。　当然村の人も利用可能である。

マレールはリットが無事に帰ってきて喜んでいたし、娘からお土産を貰って更に喜んでいた。　ケーナが「長い間すみません」と謝ると、抱きしめられて背中をばしばし叩かれた。　「別にケーナの気にすることじゃないよ」と言いたかったらしい。

自宅に戻ると玄関先で待っていたロクシーヌが深々とお辞儀をした。

「おかえりなさいませ、ケーナ様、ルカお嬢様。　途中役立たずになっていないでしょうね、ロクシリウス？　アンタが無様だと私まで同等に見られるから気をつけてよね」

「誰が率先してそんなことをしなきゃならないんだ……」

「旅の間ロクスは凄く有能だったよ。　シィが心配することなんか何一つもなかったし」

「そうですか。　それを聞いてやっと安心いたしました。　ロクス、お茶の用意が出来ている。　お嬢様をつれて先に行って」

「……わかった」

ルカを促して先に家に入るロクシリウスとルカ。　ちらちらとこちらを見てくるルカにロクシーヌは「ケーナ様に報告があるだけです。　すぐに参りますから」と優しく告げて、ケーナを家の隣に建つ倉庫まで案内する。　その倉庫の脇にくっつくようにして小さな小屋が建っていた。　中を覗き込むと白い山羊が「メェ～」と鳴いてケーナを迎える。

「こちらの小屋は村の人達が共同で建ててくれました。　後は鶏も十羽来たので、村で放し飼いになっている群れの中に加えてあります。　それとこちらがビールとウイスキーの受取証です」

Ａ５サイズの小さな紙には、ビール十樽とウイスキー五樽確かに受け取りました、と書いてあった。　ロクシーヌも山羊一頭と鶏十羽の受け取り証を持ってきた商隊（砦まで商談に行った堺屋の使者）に渡したとか。　その際の輸送料と値段で銀貨三枚だったそうな。

「ビールは一樽四銀貨、ウイスキーは一樽十二銀貨ですね。　合計百銀貨です」
「高っ！？　なんだそれ、元が取れるのかな？」
「さあ？　その辺りはケイリック様の腕次第ではないでしょうか？」

倉庫の地階に貯めてあった樽がなくなっているのを見、倉庫内に残る麦袋を見たケーナにロクシーヌが補足する。

「麦に関してはラックス様に頼む方法と、自分で買いに行く方法のどちらでもいいそうですよ」
「それでラックスさん所へ手数料が入る寸法かな？　次はいつ取りに来るとか言ってた？」
「三十日後だそうです。　一応売れ行き次第では頼む数が前後すると言っていました。　それもラックス様が伝えてくれるそうです」
「成程、ラックスさんの所には堺屋と直通通信を繋げられるアイテムがあると」

ケーナの言葉に頷いて次に言葉を繋げようとしたロクシーヌは、自分のメイド服を引っ張られ背後を振り返った。　寂しそうな顔をしたルカが小さな紙袋を持って、ロクシーヌの服の裾を摘んでいたからだ。

「……シィ、おねーちゃん。　一緒に、お茶、……しよ？」
「ルカお嬢様……」
「じゃ、シィ。　報告はまた明日でも良いや。　ごめんなさいねルカ、待たせて？」
「……ううん」

年の差姉妹みたいに仲良く手を繋いで歩いて行く二人。　その後ろを着いて行きながら、のんびり過ごせると思っていた日々が急展

開を見せる事態にケーナは溜息を付いた。

39話　王都襲撃事件（前編）

村に戻った二日後、地図片手に森の中を進むケーナがいた。

どうやら皆が留守中に暇を持て余していたロクシーヌは、精力的に村の外を歩き回って食材に使えそうな木の実や葉等を調べ上げていたようだ。　台所を完全に自分の領地としたロクシーヌに頼まれて、早朝に村外に出て来たケーナ。　メイドに渡された直筆の食材調達地図を見て苦笑する。

羊皮紙には村と書かれた家マークを中心に、キノコの群生地や何色のどんな木の実が生る木や、何の食べ物に合うとか書かれたどんな葉形のハーブがある場所とかが細かく明記されていた。　その内の一つ、ブルーベリーに似た木の実を手に提げた籠半分に取って来て欲しいと頼まれ、つい今し方採取して来た所だ。　ロクシーヌはそれをそのまま食卓に並べたり、潰してジャムや飲み物にしたりと多彩に加工する。　どれも技能を使う品ではないので、素の料理からっきしダメなケーナから見れば羨ましい事この上ない。　教えて貰いたくても「ケーナ様は私の仕事を奪うおつもりですか！？」と、ハンカチを噛み千切りそうな泣き顔を向けられれば誰だって反論できない。　それでいてルカと仲良く台所に立つのは問題ないらしい。

後ろ姿を見るたびに悔しい思いが募るので、なるべく準備中の台所を覗かないようにしている。

「何にせよ、ルカが料理上手になって頂戴な？」

呟くのではなく、対話相手が居るように問い掛ける。　ケーナの左隣には肩くらいの高さに直径三十センチメートル位の巨大な目玉

が浮いていた。　マジックアイテム『対の瞳』。　元々はゲーム中、初心者にクエストの経過を実地で説明する為の道具で、ルカの所にもこの瞳の対がある。　一応双方向通信の携帯みたいな物で、目玉の向こうからは微かに頷く気配がした。

昨日一度自分の塔に戻り、倉庫とアイテムボックスの整理をして、自宅で新しく使えそうなアイテムを生成していた所へ、居合わせたルカが使ってみたいと言ったので今回の使用になった。　まあ、朝から村を出る時に出会ったロットルには引かれてしまったので、使用する場所を選ぶ必要はありそうだが。

直ぐに街道が見えてきたので通信機能を切ってアイテムボックスに仕舞う。　わざわざ街道側に回らずとも畑が広がる柵側から入ればいいのだが、今や村の六方向に守護者（ガード）を配置してしまったので止めた。　守護者とはギルド所有の砦やダンジョンの外側で、番犬のような役割を果たすゴーレムである。　侵入しようとする者や外敵に対し容赦のない攻撃を加えるので、村の者達には村長を通して通達はした。　基本的に村外へ出る村人は限られるので、安全策の面で概ね好意的に受け入れられたと思われる。　設置したのは狼型アイアンゴーレムが四体と麻痺魔法を射出する砲台型が二機だ。　念の為、村の外周に『危険！　此処から入るべからず！』的なニュアンスを書いた看板が立ててある。

朝食を終えた後は、陽が頂点まで昇りきる前に農作業に従事する村人以外で、手の空いた者が集まって青空教室を行うのがケーナの日課だ。　先生役にケーナとロクシリウス。　時折、暇だったらスーニャも混じる。

教える事柄は人によってバラバラで、大抵は字を覚えたい者か計算をしたい者くらいだ。　時々魔法を習いたい者がいるのが困りも

ので、その人にはマイマイへ紹介状を書く道しか提示できない。教えてくれと言いに来た村人は、村を出る事には難色を示すので結局有耶無耶になっている。

平仮名片仮名をマスターした子供達は算数をやりながら、他の人達に文字を教えたりしていた。それ以上の勉学をやりたければ、学院を紹介するしかないか？　等とケーナは思っている。教えられそうなものはせいぜい読み書き算数くらいで、流石に大陸の歴史を教えてくれとか言われると難色を示すしかないからだ。そっちはもうスーニャに丸投げである。

昼食後は子供達とロクシリウスで共同浴場の掃除。それが終わればリットとラテムはそれぞれの家の仕事に戻る為、ルカが手持ち無沙汰になる。ケーナはその間、いつもの例の本読解に掛かり切りになる。

……が、その日は少々毛色が違っていた。リットとラテムと別れたルカの前には、いつもなら自室か村の何処かの涼しい日陰で本を読んでいる筈のケーナが待っていた。

「……ケーナ、お母さん？」

「うんうん、浴場のお掃除終わったのね。それなら今度は私に付き合ってね？」

「……うん、何処かへ、行くの？」

ポンッと優しく頭に乗せられた手に撫でられ、いつものようにほんわかした気持ちになったルカ。ケーナは微笑みながら足元の草地から卵を拾い上げて「村中に産み落とされた、卵拾いかな？」と答える。ケイリックに送ってもらった鶏を含めると、村内に放し飼いにされている鶏は全部で三十羽を超える。殆どが雌鳥でどこ

かの牧場よろしく、村中であちこちに卵を産み落とす。　決まりでは食べる分だけ自分で拾う、となっているが、あまりに放置が過ぎると賞味期限を過ぎたりしてしまうので、定期的に村中を隅から隅まで見て回り、拾い集めてから古いのを選別して捨てる役割が回ってくる。　今回はその役目がケーナ家に回って来たと言うだけだ。

鶏が入り込みそうな茂みや、隙間などを見回りながら卵をかき集めて行くルカとケーナ。　途中、チラチラと何か気にしたそうなルカの見上げてくる視線にクエスチョンマークを浮かべたケーナ。視線が合うと逸らされる為、大体の予想をしつつ聞いてみる。

「ん？　どうかしたのルカ？」
「……本、は？」
「うん」
「今日は、……本、読まないの？」

普段なら読んでいる本を読んでない光景に戸惑っているのだろう。なにせ書かれた内容によっては、一日数ページしか進まない時もあった。　何が言いたいのか分からない雑学から愚痴まで多種多様な内容に困惑しながら読み進めた結果、ついさっきやっと読み終えてしまった。

「あれはもう読み終わったから、ルカが何か心配するような事はないのよ」

読み終わったまでは良いのだ、読み終わるまでは。　問題は最終ページに書かれていた一文である。　あれが本を残していた目的だったとすれば、今まで読んできた部分は何だったのか。　あの性格に恥じぬ、ここに居ない癖に目の前で「やーい、引っ掛かったー！」等と罵倒されている気分になり、そっと涙するケーナだった。

翌日からはまた村を離れてヘルシュペルへ。

「なんだかなあ～、自宅を作ったら更に忙しくなったような気がする……」

「でしたら何もお気になさらず、家でのんびり過ごせば宜しいのでは？」

ケーナのぼやきに見送りに出て来たロクシリウスが答える。「それが出来る無神経さがあればね」と遠い目をする主にロクシリウスは「ご苦労様です」と頭を下げ、背後の気配に道を譲った。走って来たルカは手に持っていたバスケットをケーナに差し出した。

「ケーナ、……お母さん、お弁、当！」

「ルカが作ってくれたの？　ありがとうね」

受け取って視線を合わせて礼を言うと、小さく頷くルカを感極まって抱きしめるケーナ。逆に抱きしめられたルカは眉をひそめ「失敗したー」と困り顔になる。小さな子供扱いからいつか脱却したいと誓うルカだった。

「そういえば、先程のお話なのですが……」

ケーナが紫色の光に消えた後、ロクシーヌが空を見上げていたル

カに問い掛ける。　お弁当を作る際に台所へ立った二人は、未だたどたどしいルカと旅行中の事を良く喋っている。

「……う？」

「カータツ様が『お兄さん』で、スカルゴ様が『お兄ちゃん』なのはどうしてですか？」

「あ、うー、……えっと、ね」

ロクシリウスは言われてみれば確かに、と頷く。　ルカは暫く思案していたが、手をポンと打ってからゆっくりと言葉にする。

「……カータツ、お兄さん、……お爺さん、みたい」

「「ぶっ！」」

ルカが同時に噴き出した二人に訝しげな視線を向けると、手を振って何でもないとアピールする。　話の続きをロクシーヌが促す。

「スカルゴ、お兄ちゃん。　……でっかい、おとうと？」

この発言に使用人のプロ根性より感情が決壊した。　二人共ルカにくるりと背を向け、肩を震わせて無言で笑う。　ロクシーヌに至っては壁をばしばし叩きながら笑いが漏れていた。

ヘルシュペルヘ【転移】したケーナが真っ先に向かったのは冒険者ギルド。　エクシズとクオルケを探しに行ってみたが、受付嬢の話によると二十日くらい前に商隊の護衛仕事を受けて以来戻ってないらしい。

「伝言も受け付けられますが、どうしますか？」
「うーん……。　緊急って訳でもないから止めておきます」
「分かりました。　ではケーナさんが探していたと、お伝えしておきますね」
「すみません、お手数ですがお願い致します」

次に堺屋を訪ね、麦の買い付けと輸送をイヅークに頼んでからケイリックに会う。　ケーナの用件を言い出す前にケイリックから伝えられたのは魔道具（マジックアイテム）の生産についてであった。　注文はあるが発動キー（ワード）が各所バラバラな上、貴族をあまり長く待たせる訳にはいかないので、村ではなく堺屋まで出て来て作って貰えないか？　という要請である。　ケーナには特に断る理由もないので了承した。　賃金についてもその都度相談すると契約を交わす。　やっと自分の用件を切り出そうとした時、キーによって待ったがかかる。

（何？）
『フレンド登録者、シャイニングセイバー様から伝言（メッセージ）です』

本来のゲーム中であればチャット感覚で会話が可能であったが、現状ではそうもいかない。　メッセージ画面を開くと『用件：要請』がヘルプコール用の赤文字になっていたので慌てて全文表示させる。

「『王都襲撃の予兆有り、支援求む』？　なんだそれっ！？　随分大事に……」

「お婆様？」
「ごめんなさいケイリック。　フェルスケイロで何かあったみたいだから、この続きはまた今度ね！」
「は、はあ。　お、お気をつけ下さい」
「うん、ごめんね」

その場で紫色の光芒に包まれて瞬時に姿を消すケーナ。　唖然と見送ったケイリックだったが、フェルスケイロと聞いて母親に確認すれば判るのでは、と思い出して【以心伝心】を起動させた。

始まりはケーナ達が村に帰還した頃であった。　積み荷に被害が出るのも構わず、商人の馬車が息も絶え絶えにフェルスケイロ住民街側の西門にたどり着き、衛兵詰め所に駆け込んだ事からになる。

「た、たたた、たい、たい……」
「おいおいどうしたんだ？　まだ門が閉まるような時間帯じゃないぞ」
「まあ、落ち着け。　ほら、水だ」

中でカードをしていた衛兵に水を貰った商人だが、それでもつっかえつっかえしながらの報告に衛兵達は仰天した。　獣や魔物が列を成して国境沿いの森の中を行進するのを見た、と言うのだ。　流石に嘘や冗談だと捉えるにはその商人の必死さが矛盾している。

とりあえず、術士の使い魔を偵察に出して貰う頃には、同じような報告が別の旅人によって確認された。

そこから騎士団に連絡が飛び、王都全域に警戒態勢が敷かれる。冒険者ギルドにも招集が掛けられて丁度暇を持て余していた数パーティ、計二十人程が参加し、街壁の守りに配置された。学院からも自己責任で回復魔法の遣い手や調合士が参加し、本部詰めに回される。学院長（マイマイ）は前歴があるために強制参加で騎士団（スカルゴ）と行動を共にする、大司祭も同様に。

夕方頃には術士の使い魔によって魔物の大体の規模が判明した。国境近辺の魔物をかき集めたような混成らしく、中にホーンベアのような捕食獣と兎などの被捕食獣が確認された。この事実によって魔物達の本能的な行動ではなく、人為的な何らかの術によっての行為ではないか？　と判断されて王都全域に戒厳令が出された。

王都の防御策が整うのに一日掛かり、翌日に王都よりやや離れた所に柵が張り巡らされて簡易な前線が構築された。此方には騎士団の半分が配置され、冒険者や傭兵の希望者も混ざる。指揮系統が混乱するのを防ぐ為に騎士団の指揮下に入って貰うのが条件である。更に王都から半日かかる距離に最前線を形成し、騎士団第三隊を含む傭兵や冒険者の混合部隊百人程が駐留。先ずは魔物の群れに一撃を加える事になった。

夜が明けると、街壁の外側の本陣にはあちこちからの情報がひっきりなしに入ってくる。緊急以外の報告は副団長によって整理されて、団長のシャイニングセイバーに届けられる。相談役として

呼ばれたスカルゴとマイマイとで会議が行われていた。　基本、怪我人の移送や魔術士の投入についてである。

「やれやれ、俺の任期中にはこういう総力戦みたいなのは、起こって欲しくなかったんだがなあ……」

「あらら、武勇に優れるシャイニングセイバー殿らしくない言い回しね？」

「主に〝武勇だけ〟だがなー。　ここ数年で部隊運用なんかは慣れてきたが、戦争じみた事なんか想定するかよ。　まだ前に出て魔物殴った方がはええよ」

「確かに、我等三人で事に当たれば魔物の群れ程度ならどうにかなるでしょう。　しかし、それで済んだ場合には騎士団の存在意義を見失うと思いますよ」

修道士や修道女を各隊へ振り分けたスカルゴの真面目な意見に本部が静まり返る。　主に「え？　コレ誰？」な方向で。

「何ですか！　二人揃ってその反応！？」

「……え？　だってなあ？」

「ええ、ちょっと私も実の兄なのか自信がないわ」

背後に出現した暗黒の渦巻きに後退していくスカルゴを引き止め、「冗談だから」「スマン」と謝る二人。　むくれて拗ねる大司祭スカルゴ、ファンが見たならば小躍りして喜びそうなレア場面である。

緊迫した本部に一時漂う緩い空気がシャイニングセイバーの一言で、途端に凍りついた。

「しかし、返信が来ねえなあ。　ケーナの所に届いてないのか……？」

「は？」

「え？」

呆然とした表情の二人に、伝言を飛ばしてケーナに手伝ってもらえないかを打診したと告げるシャイニングセイバーと、愕然とするスカルゴとマイマイ。

「お、お母様に援軍要請を出したですってっ！」

「なんという事を……。　母上殿の平穏な生活に横槍入れる気ですか、アナタは」

「いや、アイツだって冒険者なんだから要請出したって問題ないだろう？」

不思議がるシャイニングセイバーを、射殺すように睨み付けるマザコン兄妹。　そこへ近付いて来た副団長は場に漂う剣呑な空気に首を傾げるが、特に気にせず団長へ報告をする。

「そろそろ前線部隊が魔物の群れと接敵します。　それと南側の街壁より報告なのですが、何者かが戦闘をしているのを視認したそうです」

「は？　いやちょっと待て、それはどうして戦闘してるって分かったんだ？」

街壁の南側には貧民街の他、彼等の食い扶持である畑が広がっており、その南は森だ。　いくら街壁から見渡せると言っても、森林内で戦闘をしていると判別するのは難しい。

「いえ、何でも森の中から吠え声が聞こえて、不自然な落雷が数発落ちたそうです」

報告を聞くや否や三人は眉をひそめて顔を見合わせた。

「お母様、ね？」
「うむ、母上殿だな」
「なんでこっちに顔を出さないで勝手に戦闘してんだ、アイツ……」

額に手を当てて頭痛を起こしたシャイニングセイバーは兎も角、ケーナを良く知るマイマイとスカルゴは巻き添えを防ぐ為に南側へ近付かない通達を出しておく。　曲がりなりにもケーナの最大威力攻撃は何処まで被害を及ぼすか解らない魔法であるからだ。

ケーナが【転移】で降り立った場所はフェルスケイロ東門の外側だ。　当然戒厳令下にあるため門は堅く閉ざされ、中に入りそびれた旅人や馬車等が立ち往生していた。　その人達に聞いても何があったかは把握していないので、【姿隠し】と【飛行】を併用して街中に入り込み、冒険者ギルドへ向かった。　ギルドで王都に迫る脅威について説明されたケーナはシャイニングセイバーと合流するために西門側へ移動していた。　戒厳令下の王都は人通りもなく静まり返っていて、大通りを一人てくてく歩くケーナは目立っていた。

結果、街中にも配置、警戒していた兵に見つかった。　年若い層で三人一組の衛兵達は見た目十六歳以下なケーナを冒険者と信じず、好奇心で外に抜け出して来た子供と決め付け、早く家に戻るようにと諭した。　仕方なく素直に引き下がる風を装ったケーナは再び【

姿隠し】から【飛行】で王都の南側へ、街壁から遠く離れた森の中へ移動した。　随分な遠回りをして騎士団と合流しようとした所、同じく遠回りの迂回路で東門に向けて森林内を移動していた別働隊と鉢合わせた。　運が悪いか良いかは別としても、フェルスケイロにとっては朗報と言えよう。

「厄日か……」

　戦闘態勢を整えて【能動技能（アクティブスキル）】を多重起動、前方を隙無く見詰めながらアイテムボックスからルーンブレイドと如意棒を引き抜く。
　目前に広がる光景は、やたらと豪華に装飾されたローブを着込み、捻じくれた杖を持ったゴブリン、闇夜の魔術師（ナイトマスターロード）四百レベル、に率いられた大型種で構成された二十匹の群れ。　内訳は二本角の生えた四脚恐竜種ＴＴ（トリケラトプス）の三百レベルが四匹。　その背後にギザギザ牙の生えた顎を開けて威嚇する二脚恐竜種ＴＳ（ティラノサウルス）の三百八十レベルが四匹。
　脇を固めるのは岩で作られたゴーレムのような容姿を持つ岩ゴリラ（ロックハイド）、此方は六匹が二百五十レベル。　最後尾に控えるのはサソリを土台にして上からネズミの皮を被ったような疫蠍（ウィルスコーピオ）が二百レベルにして六匹だ。　はっきり言ってこの戦力だけで、大陸上の国を全部滅ぼしてお釣りが出る程である。

　ケーナの置かれた状況は小山のような肉食獣の群れの前に放置された哀れな仔羊である、……何も知らない第三者から見れば。　勿論、この群れを率いているゴブリンの魔術師もその第三者に入っていた。　気味の悪い笑みを浮かべ、体を揺らしながら愉快そうに嫌らしい者でも見る眼付きでエルフの小娘を見下す。

「ひょっひょっひょっ、運がないのう、この局面で出会うとはのう。
　違う所で出会えておればもう少し趣向の凝った催しに加えて悦ばしてやったものを」

「いやー、それは遠慮したいなー。　寧ろここで私に会ったのが運の尽きと言うべきか」

　これだけの戦力に囲まれても飄々とした小娘の様子に眉をひそめるゴブリン魔術師。　見せ付けるかのように腕を伸ばしパチンと指を鳴らすケーナ。　ゴブリン魔術師が「それは何の意味か？」等と問い掛けるより早く、天から二条の轟雷が群れの左右に控えていた岩ゴリラ四匹を木っ端微塵に撃ち砕いた。

「な！？　なんじゃとっ！」
「短縮呪文（ショートカットキー）なんて見たことなかったかな？　二百年前には日常茶飯事なはずだよ」
「くそっ、貴様まさか……。　ええい！　あの小娘を殺し尽くせっ！！」

　ゴブリン魔術師の命令に一斉に襲い掛かる大型モンスター種。
左手に如意棒、右手にＭＰを充填して光り輝くまでの刀身になったルーンブレイドを装備し、準備運動するように腕をぐるぐる回したケーナ。　真っ先に突撃してきたＴＴ二匹を【戦闘技能（ウェポンスキル）：跳ね上げる兎（ラビッドストリーム）】で寸断し、そこに続こうとしてたたらを踏んだＴＳ二匹の頭を伸ばした如意棒で爆砕（フルスイング）。　一旦後ろに飛んで間合いを開ける。
【威圧】【魔眼】に晒されて停止する群れ。　憎々しげなゴブリン魔術師は杖を振り上げ魔法の準備に入る。

「貴様、女神の言っていた守護者（カーディアン）かっ！」
「知らないしー。　さっさと片付けてお昼にしたいんだ、私は」

　瞬時に小さくなった如意棒を握り締めたケーナの左腕に白い光が集まる。　対するゴブリン魔術師の杖にはどす黒い闇が生まれ始めていた。

４０話　王都襲撃事件（中編）

今回のフェルスケイロ王都襲撃は『廃都』から流出したイベントモンスターによるものだ。　本来ならばオウタロクエス国のほうで結界の監視をしているため、なにか異常状態が起きた時には周辺にそれとなく配慮が行われる。　例えば騎士団が出て一時的に街道を封鎖したり、国境を閉じたりして対処する筈だった。

しかし前回漏れ出した、たった六匹のゴブリンのせいで騎士団の半分が行動不能になり、再編成をしている最中だったのと。　今現在、オウタロクエス王都の方も人手不足がたたって、それどころではない状態にあった。

原因は今、目に見える脅威が刻一刻と王都に接近していた。　大きさが東京ドーム程もある甲羅を背負った巨大な亀である。　腹ばいでノタノタ歩く奴ではなくガラパゴスゾウガメみたいにきちんと胴体を浮かせ四脚歩行する形で、見上げたとしても全貌が捉えられない。　広大なオウタロクエス領土の国境の縁を二百日ぐらいかけてゆっくり一周する、誰もその存在理由を知らない生物であった。

それがどうにも年々軌道がズレてきているようで、今回に関しては王都直撃コースを取っていたようなのだ。　もちろん国も色々対策を試していたのではあるが、なんにしろ相手は”山”である。　ちっぽけな人の手でどうしろというのだ。　ついでに廃都の結界にも軽く触れてしまったようで、その歪みから出たモンスターが今フェルスケイロにも影響を及ぼしていた。

落とし穴も対象をどうにかするほどの大きさが確保できなくて失敗。　バリケードなどは問題外、魔法も車に対してハムスターが米粒をぶつける様な物である。　物理的な対策を立てている部署とは

別に、解析や書物を調べている所からとんでもない報告があった。
どうやら甲羅の上に建物が建っているようなのである。なのでそちらから住んでいる者に対して停めてくれるように頼めば、この危機を回避できるのではないか？　という藁をも掴む結論に至り、騎士団や冒険者から希望者を集めて山の様な亀に挑む事となった。
そしてその十数人の無謀に挑む者の中に、エクシズとクオルケの姿があった。

「なあ、もしかしてこれって、ケーナの探していた守護者の塔なんじゃねーの？」
「ああ、そうかもと思ってさっき伝言飛ばしてみたんだがねぇ、『取り込み中』って返って来たさね」
「限界突破が取り込み中かよっ！？　いったいどんな厄介事に巻き込まれているんだかなあ……」

王都より随分と離れた森の中。挑む者達は各自思い思いの方法で亀に進入する、第一の難関はどうやって登るかである。前方からはゆったりと迫って来る巨亀。

どずうぅぅん！

と聞こえてくる一歩が約八十メートル、しばし間を空けて足元から微細振動が伝わってくる。エクシズ達はこの亀を見るのは初めてではない。過去に噂を聞いて見に来たことがあった、まさかそれによじ登る羽目になろうなんてその時は思いもしなかったが。

「行かんのか？」

更に予想外が一人。決死の特攻隊メンバーの中に混じっていたドワーフが、何故だかエクシズらと行動を共にしていた。なんで

も「おぬしらと一緒のほうが面白そうじゃ」と言う事らしい。　言葉巧みに言い負かされて一緒にここまで来てしまったのだ。「名前は少々難しいのでな、気軽にジジイとでも呼べばいいぞ」と言われた。　ドワーフにも色々人の想像できない事情があるのかもしれないと二人は納得する。

「俺達は俺達なりに登る方法があるが、爺さんは大丈夫か？」
「見くびるでない。　年寄りの蓄えた知識と技を良く見るがいい」
「大丈夫そうさね。　んじゃさっさと行くよ」

三人は森の梢の遥か上に甲羅の見える目標に向かって走り出した。

――――――――　フェルスケイロ　ｓｉｄｅ

ゴブリン魔術師（ナイトマスターロード）の杖から無数の黒い弾丸がケーナ目掛けて発射された。　闇系統の範囲魔法で術者から扇状に拡散する為、対象を横に逃がさないようにするつもりだろう。　ケーナは特に驚いた表情もせず、突き出した左腕はそのままに右手に持ったルーンブレイドを下から上に振り上げた。

【魔法技能（マジックスキル）：黒衝弾（ハザードブラスト）】

【飛斬】

ルーンブレイド特有の特殊効果、蓄えた魔力を半月型の衝撃波に変えて目標を切り刻む攻撃である。　ケーナに当たる軌道だった黒い魔力弾だけを弾いていくが、一直線にしか飛ばないのでゴブリン魔術師は慌てて避けた。　その代わりに後ろで命令を待っていたＴ（ティラノ）Ｓ（サウルス）一匹を真っ二つにしても威力が衰えず、更に疫蠍（ウィルスコーピオ）を一匹斬って森の奥深くに消えて行った。　後ろで地響きを立てて倒れた配下の虎の子の惨状に冷や汗を垂らしたゴブリン魔術師は、今相手にしている存在がどれだけ規格外なのかを思い知っていた。

振り向くと、ケーナは突き出している左腕から白い魔法陣を展開。何を飛ばしてくるのかと身構えたゴブリン魔術師の予想外の言葉を呟いた。

【召喚魔法（サモニングマジック）：ｌｏａｄ：クリムゾン・ピグ（小）】

「クハハハ！　何かと思えば召喚魔法かっ！」

「生憎と相手はアンタじゃないんだよ」

「何じゃと！？」

やや安堵した感のあるゴブリン魔術師の相手はケーナ自身がするつもりである。　召喚した者は何をするのかと言うと……。

「あっちはお願いね、ぴーちゃん」

ぴ――――っ！！

魔方陣からポーンと飛び出した全長五メートル全高三メートルのウリ坊（五百レベル）は、ケーナの言葉に「まかせろ！」とでも言うようにかわいい雄たけびを上げ、短い足を高速で動かして土煙を

吹き上げ急発進。【戦闘技能（ウエポンスキル）：突撃（チャージ）】でもって、まごまごしていたＴＴ（トリケラトプス）を一匹跳ね飛ばし、岩ゴリラ（ロックハイド）一匹と疫蠍一匹を轢殺。　さっきの飛斬と同じく森の中を西に向かって全力疾走していった。　違うのは木々をバキバキとへし折って行っているところだろう。　樹の悲鳴は聞こえてくるが、ケーナは今現在それに耳を傾ける気はない。

戦闘を始めて二十一倍の数戦力差だった筈が、ほんの少しで配下が半分になってしまった現状を引きつった表情で見つめたゴブリン魔術師。　気持ちは解らないでもないが、相手をこの世で最悪の相手だと理解していなかったのだから、自業自得とも言えよう。

「伸びろ！」
「ッ！？」

そのゴブリン魔術師の横をひゅんと音を立てて赤い棒が通過、最後のＴＴを頭から串刺しにした。　想定外の光景を見せ付けられた指揮官はジリジリと後退さる。　その本能しか持たない率いる部下も、ケーナから放出される濃密な魔力に押されたのか、腰が引けている状態だ。　そんな彼らの状態を好機と見たケーナは、如意棒を引っ込め右手のルーンブレイドを腰に収めて腕を高く掲げる。

【魔法技能（マジックスキル）：炎系自己付加：増幅（ブースト）：ｓｔａｒｔ】

幻想的な赤い火の粉がケーナの輪郭を赤く染める。　獣達の目には明らかな怯えの色が混じり、ゴブリンの中でも最高峰な筈の闇夜（ナイト）の魔術師（マスターロード）に至っては背を向けて逃亡しようとしていた。

【魔法技能（マジックスキル）：炎嵐舞溶（イア・バーストストリーム）：ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ】

自分の配下を掻き分けて逃亡しようとしていた指揮官も含む群れを囲んで、赤い蛍が舞う。　粒は寄り集まって線となり火弾となって回りを籐籠の模様のようにくるくると取り囲む。　じりっと後退した疫蠍がその赤いラインに触れ、瞬時に触れた所が炭化してボロッと崩れる。　ギョゥアー！　と悲鳴を上げた疫蠍をギョッとして見詰めた獣達。　彼等は赤い竜巻の本来とは逆、底が太いタジン鍋の蓋のような形の天辺に下から終わりなく吹き上がる炎が固まっているのを見付け硬直した。　その球体はどんどんと大きさを増していく。　五メートル、十メートル、二十メートル、二十メートルを超えた所で親指を立てた握り拳を突き出したケーナ。　すいっと親指を下に向けた瞬間、巨大炎球が落下。　そこに身を寄せ合っていたモンスター達を呑み込んだ。　緋色に包まれたモンスター達を瞬時に焦がして燃や尽くして炭化。　残った炭も溶かした炎球は大爆発、元からあった籐籠模様に沿って上空に炎を吹き上げた。　その噴火のような炎嵐はフェルスケイロの街中からも良く見えたという。

武器を収めたケーナは周囲の木々に謝罪の言葉を述べながら、ウリ坊の後を追って西へ向かう。

『先程、フレンド登録者クオルケ様より伝言（メッセージ）が届きましたが』
「うん、なんだって？」
『”守護者の塔で亀って知っているか？”だそうです。　戦闘中だったので留守電返答『取り込み中』として勝手に返信してしまいましたが宜しいですか？』
「亀ぇ？　って九条のじゃなかったかあ？　返信は一応入れておこう。　えーっと……」

――――――　オウタロクエス　ｓｉｄｅ

エクシズは【能動技能（アクティブスキル）：地走り】を駆使して、巨亀の足から甲羅まで一気に駆け上がった。　このスキルは効果時間内であれば、壁だろうが天井だろうが足の着く場所を走破できる。　ギリギリ時間内であった為、かなり冷や汗モノだった。　クオルケは鞭をあちこちの突起に絡みつかせながら上がって来た。　【浮遊】も併用していたので、特に危険もなかったようだ。　自分ももしもの為に掛けてもらえば良かったと、落ち込むエクシズ。

「では行こう、エクシズ？」
「あ、ああ。　っと爺さんは？」
「何を言っているんさね。　エクシズの後ろに居るじゃないかい」
「は！？」

驚いて振り向いたエクシズの背後には、柄の長い大型の斧を肩に担いだドワーフの姿があった。　一体何時どうやって上がって来たのかと首を捻るエクシズに対し、ドワーフの爺さんは柄の先で彼の腰を突き、早く動けと急かして来る。　歩き出したエクシズに並んだクオルケは小声で会話をする。

「今さっきケーナから返信が来たんだがねえ」
「なんだって？」
「『クイズ頑張って』だとさ。　意味わかるかい？」
「クイズと亀に何の関係が……ってなんだこりゃあ？」

甲羅の縁から坂を登り天辺に見えてきた建築物は四角い箱型だった。　ついでにその脇には赤い電波塔が立っていた。　建物の入り口側の上の壁には立体の文字が貼り付けてあり、そこには九条テレビ局と文字がある。　洒落なのかマジなのか判別がつかないエクシズとクオルケ。

彼らの背後が不意に騒がしくなる。　振り返ったクオルケの視界にはロープを肩に掛けてこちらに歩み寄ってくる騎士が数人、どうにかしてロープを甲羅か何かに掛けて登ってきたのだろう。　騎士甲冑を着込んでいるのにもかかわらず、その使命に対する執念に感嘆する。　先頭にいた中年の騎士は立ち止まっているエクシズ達を睨み付ける。

「国家の一大事だぞ、ぼんやりしている暇はない。　お前達冒険者にも早く解決することで報酬の金額が決まると伝えてあるはずだ」

返事は聞かずに一緒に登ってきた部下三人を纏めると、建物の中に入ってしまう。　騎士四人が入り込むと今迄開けっ放しだった扉が音を立てて閉じ、中で施錠する音がガチャンと響いた。

「え？　あれ！？」

「慌てるでない。　一度に入れる人数は決まっているのじゃろう。少し待て」

「お爺さん、よく知っているのね。　来た事があるの？」

「……幾度となくな」

アゴに手を当て感慨にふけるドワーフに、何か難しい事情があるのだろうと思ったクオルケはそれ以上の追求を諦めた。　待つこと十分程度経った頃だろうか。　ばい～ん！　とかいう愉快な音と共に天井から四人の騎士が射出された。　放物線を描いた彼等は「ぎ

ゃああっ!?」とか「うわあああっ!?」とかドップラー効果を伴って、声と共に眼下の森へ消えていく。　脂汗を垂らしながら見送った二人は「死んだんじゃねえか?」と思った。

「死ぬことは無いじゃろう。　そういう風に作られている」

確信を持って言い放つドワーフの爺さんに目をやるも、この人も過去に同じ目にあったんだろうなーと遠い目をするクオルケだった。

同時に扉が再び自動で開く。　先に入ろうとした爺さんを制したエクシズは「若い者の後について来いよ」と言って先に中へ入る。

その後にクオルケが続き、何やらうれしそうに鼻を鳴らしたドワーフを最後に扉は閉まった。

「なんじゃこら……」

「……」

室内に入ったエクシズとクオルケはそのあまりの懐かしい、どこかで見たことのある光景にアゴを落とした。　内部はまるでバラエティ番組を撮影する番組のセットそのものだったからだ。　床の中央に大きく書かれた丸とバツ、ゲストたちが居並ぶ個別の小さい席、壁一面に大きく描かれた何処かの国の象徴たる女神像、手前に置いてあるカメラ機材、司会者が解説なりをする大きな席。　そしてその手前にこの場にそぐわない物体が浮いていた。　蓮の花を模した台座に結跏趺坐(けっかふざ)をした半裸の神仏像、全身金箔貼りがいた。

そしてセットの中央にまで恐る恐るエクシズ達が歩み寄ると、しっかりとつぶっていた目を薄く開けて金箔神仏像が闖入者達を睨み

つけた。　剣を抜くなりしてそれぞれに警戒態勢をとる二人。　ドワーフのお爺さんだけは特に何もせずに。

「ようこそ、挑戦者の方々。　Ｍｅはこの守護者の塔の管理者でありますえ。　数々の思考の御技と英知を求めていらっしゃったのですね？」

「は？」

「……え？」

浮いていた神仏像から流暢な挨拶をされて戸惑う二人。　斧を担ぎながら「ふんっ」と小馬鹿にしたような息を吐くドワーフ。　ちろりと薄く開いた瞳にドワーフを映した神仏像は「Ｏｈ」と感嘆する。

「またいらっしゃったのですね、お爺様？　今度は三人で挑戦と……、成程それなら正解率も上がるでしょう。　はっきり言って先程の方々のような無知は本当に面白くありませんでしたえ」

このドワーフのお爺さんは挑戦者としては常連のようだ。　いささか呆れた様子のある神仏像は三人をスタジオ中央のマルバツまで誘う。　途端に三人の頭上へ『００／００』のカウントが出現した。

左側の数字が青色、右側の数字が赤色で、クオルケとエクシズが疑問を挟むよりも早く神仏像が解説を入れる。

「出題は百問、八十問正解でクリア。　二十問間違えたらそこでリタイア、遠慮なく資格なしと判断して外へ放り出させて頂きます。

準備はよろしいですね？　それではスキルマスターＮＯ．２、九条様管理下、守護者の塔試練開始致します」

一番最初はマルバツクイズからだった。　中性的な雰囲気の神仏像とは別の、物静かさを感じられる女性の声で問題が読み上げられていく。　一問ごとに制限時間は五秒、まごまごしている暇はない。

『それでは一問目。　スキルマスターは全部で十四人である。　マルかバツか？』

特にそれに疑問を挟まずクオルケとエクシズはバツの方へ移動した。　そしてドワーフの爺さんがマルの方へ立ったままなのにギョッとする。　慌ててこちらへ呼び込もうと思ったがすでに遅く、ドワーフの爺さんの頭上には黄色いベルのグラフィックが現れて「チリーン♪」と音色を響かせて表示が『０１／００』に変わり、同時にエクシズとクオルケの頭上にはでっかく赤バツ印が現れ「ブブーッ！」と音が鳴り、二人のカウンターが『００／０１』と変わった。

「え？　あれ？　何で！？」

「クソッ、爺さん以前この問題に直面したんだろう。　教えてくれよっ！」

悔し紛れに悪態をつく二人に、ドワーフの爺さんは涼しい顔だ。

「スキルマスターは当初十四人おった。　これは本当のことじゃ」

「……って、それ知っているって事は爺さんプレイヤーかっ！？」

何気ない言葉から重要な事に気づき、慌てて【サーチ】でドワーフの爺さんを眺めてみる。　エクシズと似たようなレベルだったので表層情報だけは見ることが出来た。

「赤の国所属の……、『隠れ鬼』ってちゃんと名前があるじゃねー

か爺さん。　ってスキルマスターなんばあじゅうにぃっ！？」
「ぬ、しまった。　ヌシら御同輩か……。　まあいい、細かいことは後で話す。　とりあえずはこの試練を抜けてからじゃ」
「ちょっとお待ちよ、スキルマスターならここの守護の塔の操作も何とかなるんじゃないのかい？」
「何とかするための試練じゃろうが、まずは終わらせてからじゃ」

エクシズに詰め寄られて渋い表情になる爺さん、もとい隠れ鬼。
クオルケも手早く終わらせておきたいのでエクシズの後押しをしてみるが、言うことは変わらない。　どうやら塔には塔それぞれのルールがあるようだ。　だったら試練を終わらせた方が話が早いと悟ったエクシズとクオルケは、隠れ鬼（じいさん）に習って守護者に向き合った。
どうやら話が終わるまで待ってもらったようで、クスリと笑みを浮かべた守護者はあらぬ方向に視線を向け、頷いた。
室内に流れる音声が『二問目……』と言い始めたので一語一句聞き逃さないように口を閉じる三人。

……数分後。

「うー……、あー……」
「なんかもういっぱいいっぱいじゃのう。　大丈夫か？」
「連続で間違えたからな。　だから俺について来いって言っただろーが」

マルバツ形式を終えた後の成績はドワーフ爺さんが『１９／０１』、エクシズが『１７／０３』、クオルケが『０７／１３』となっていた。　この後はスイッチのついた回答者席に移動して、三人で残りの八十問を消化していけばいいだけである。　その間に七問間違

えるとクオルケが脱落するだけだ。　目先の絶望的な壁を想像したクオルケは、あらぬ方向に視線を向けてひとり黄昏ていた。

「ううぅ、ものの見事にゲームの問題ばっかり……」
「すこしはリアルな物も混じっていたはずなのだがのう？」
「どんだけの割合で混じってるんだよこれ。　ケーナが言ってたのはこの事か……」
「ケーナ嬢もこっちに来ておるのか！？」

　ボソッと呟いたエクシズの言葉に真っ先に反応して詰め寄る隠れ鬼。　その剣幕に目を丸くしたエクシズは「あ、ああ」と返し、クオルケはこくこくと頷いた。　それを受けて難しい顔をして黙り込んだ隠れ鬼だったが、真摯な瞳を二人に向ける。

「すまんが、ケーナ嬢にはワシとここで会った事は黙ってて貰えぬか？」
「え？　でもさ、アンタ達数少ないスキルマスター仲間なんだろう？　少しでも会って安心させてやったらいいんじゃないかい？」
「生憎と「スキルマスター」などと言う称号はこの世界ではただの紙切れのような物じゃよ」

　寂しそうな感情を含んだ、どこか他人事な物言いにクオルケは沈黙し、エクシズはため息をついて頷いた。

「『探さないで下さい』ってヤツだな、了解したぜ」
「えっ！　で、でもさエクシズ？」
「でも爺さんと会ったことはケーナには言っとくけどな、理由さえ聞かせてくれりゃあ『探さないで下さい』って方向で説得しておくぜ」
「ぬ、……スマンな」

「ケーナのお節介には歯止めを効かすのが大変だがな。　これでも同じギルドで修羅場をくぐって来た仲間なんでね。　とりあえずはこの試練を抜けて、亀を止めてからだな」

納得がいかないという顔をしたクオルケは「話は後でつけてもらうからな」と呟き、エクシズを睨んでから先行して回答者席に移動していった。　肩をすくめたエクシズと隠れ鬼はそれに続く。　三人の会話を見守っていた神仏像は、天井に向けて問題を続けるように促した。

神仏像は身構えるように天井を睨む人族、竜人族（ドラゴイド）、ドワーフを見てニヤリと不敵な笑みを浮かべる

「さてさて、予測（ｐｒｅｄｉｃｔｉｏｎ）とは全く別の獲物がかかったようですよ、Ｍａｓｔｅｒ？」

41話　王都襲撃事件（後編）

フェルスケイロの西、騎士団プラス冒険者ｖｓ魔物の群れは戦端が開かれるも、早々に混戦となっていた。　初期の目論見にあったひと当てする、などとは程遠い状況に指揮も何もなく。　魔物の群れとぶち当たった騎士や冒険者達には、相手側が只単に”突き進む”と言う意思しか持たないと、感じられたからである。　この状況でひと当てして怯ませてから、全体の進軍速度を緩めるという目的は既に瓦解していた。

この防衛隊の中には丁度フェルスケイロに滞在していた『炎の槍傭兵団』も混じっていて、名の知られたアービタが冒険者側を纏めていた。　流石に百戦錬磨のアービタ率いる傭兵団としても、相手がここまで多種類に混ざると対処に苦労する。　群れの主力となるのは毒々しい紫色の体躯を持つ死蟷螂（デスマンティス）が三匹。　大きさは小さな民家一軒分で、これ一匹に騎士が五～六人で対応しなければならない。

続いてはホーンベア、これも騎士が二～三人程必要となり、八匹もいる現状ではこの二種だけで騎士団の半分以上が掛かりきりだ。

他にも頭頂部や背中が鎧状の鱗に覆われたゴアタイガーや、ガウルリザードが混じっただけでいっぱいいっぱいだ。　それに加えて普通の熊や狼の対応や、足元から突進してくる兎と猿などにまで構っていられない。　騎士団と冒険者からなる防衛隊は、じりじりと魔物の群れに飲み込まれていた。　騎士団は主力となるマンティスやホーンベアと拮抗していても、群れ自体は軍隊アリのように移動している。　戦っていない魔物達はそれを避けて進軍して来る為、後衛を務める冒険者達は倒した魔物をバリケード代わりに防いでいた。　既にその限界は見るからに目前だ。

「ったくよぉ、だから最初に小細工をこさえておけっつったんだ！」

「どうします団長？　ほっとくと前衛が飲み込まれますよ」

しかし多勢に無勢、破られるのは時間の問題であった。　騎士団側の指揮官とは意見の相違からまともな連携が最初から取れず、援護に回っていたがそれが裏目に出た。　基本王都の防衛に引っ込んでいる騎士団は、常に実戦を繰り返す冒険者達よりは経験が浅い。　不慮の事態、つまりは魔物の後先省みない行動に直面してあっさり総崩れになった。

アービタが見捨てるか助けるかの二択を選択しようとした時、事態に変化が起きた。　主に最悪な方向に。

ボフンという軽薄な音と共に、魔物諸共騎士団を含むエリアにピンク色の煙が出現した。　後衛にいた冒険者達のグループにまではその被害は及ばなかったが、何が起きたのかと眉をひそませる彼らの目の前で即その効果は表れた。　戦闘をしていた者全てが行動を停止したのである。　もちろんその範疇に居た騎士団の人員も含まれる。　後衛の冒険者達が嫌な予感を感じてそれぞれが構えを取る中、騎士団と魔物に薄ぼんやりとした白い光が纏わりついた。　そして一斉に冒険者達の方向へ向く。

「おいおい、何があった？」

「気を付けろ！　普通じゃないぞコイツ等」

焦点の合わない虚ろな瞳で棒立ちになった騎士団の面々が、うっすらと笑みを浮かべた表情で剣を持ったままこちらに歩み始めた。　〝ドドドッ〟それを見て、冒険者達に動揺が走る。　先程のピンクの煙と言い、不自然な白い光と言い、何かの魔法だと悟ったアービタは撤退命令を副長や他の冒険者に出した。　〝ドドドドッ〟騎士団が敵に回ってしまったので、これ以上の判断はアービタには出しにくい。　〝ズドドドドッ〟防衛線を少しずつ下げて魔物との距

離を取る最中に、耳にしながら無視していた何かが迫り来る轟音の主に注意を向けた。

「さっきから何だ、この音は！」

「団長！　アレです！」

副長が示唆した方向を見た団長や団員、他の冒険者が街道北側の森林から木々をへし折って弾丸のように飛び出したナニカに仰天した。　魔物の群れの横っ腹に突撃をカマした茶色い砲弾は、魔物達を蹂躙しながら反対側へ突き抜けて南側の森林へ姿を消した。　超重量の突撃を受けた魔物は、跳ね飛ばされて華麗に高々と錐揉み回転して宙を舞い、次々に落下して絶命する。　大半は突撃の時点で既に死んでいたが。

「……今度は何のバケモンだ、ありゃあ？」

「どっかで見たような気もしますね」

誰もが何事かと動きを止める中、南側の森から襲撃の主がひょこりと姿を現した。

ぴ――っ！！

「「あ」」

「……団長、あれってケーナさんのっスよね？」

雄雄しく（？）雄叫びを上げて胸を張る（ような真似）以前見た、ある冒険者の召喚獣。　アービタと副長が揃って唖然とし、ケニスンがずんぐりむっくりなクリムゾン・ピグのぴーちゃんを指差した。

炎槍傭兵団の団員は見慣れた召喚獣だから「なんだ、焦って損した、助かった」とか言う心境だが、他の冒険者達は不意の仲間割れ

をチャンスと思い、速やかな撤退を提案した。

「おい、アービタさんよ！　さっさと下がらねぇと、仲間割れの巻き添えを食うぜ」

「いや、ここで撤退はしない。　丁度いいところに援軍が来たからな」

「待て待て、あんな化け物同士の戦いに巻き込まれたらただじゃ済まないだろう！」

その化け物呼ばわりされているぴーちゃんは、群がる魔物達を鼻先で引っ掛けては投げ、飛び上がっては踏み潰しと愛嬌のある体型からは及びもつかない八面六臂の活躍を見せていた。　ただしその攻撃がじわじわと騎士団に迫っているので、手遅れにならないうちにどうにかする必要があるとアービタは判断する。　騎士団はアービタの古巣なので、このまま見殺しと言うのは流石に目覚めが悪い。

「なんとかして騎士達を魔物から引き剥がすぞ。　アイツが居ると言う事は彼女も近くにいるだろう！」

アービタの号令で団員達がそれなりの準備を始める。　ある者は捕縛用のロープを用意し、ある者は穏便（？）に気絶させようと棍棒を装備し、術が使える者は麻痺効果や眠らせる魔法を準備する。

初めは呆れていた冒険者達だったが、アービタや団員が魔物に取り込まれた騎士を本気で救い出そうとしているのに気付く。　馬鹿げた考えに一笑にするも、面白そうな博打ととって次々と彼らに賛同し、肩を並べた。

「アービタさんよ、面白そうじゃねえか。　俺達も混ぜてもらうぜ！」

「あの高慢ちきな騎士に恩が売れるなんて他にねえからな、俺も加

勢させて貰うぜ」
「気絶させて群れから引き抜くんだろ？　こんな時でもなきゃ騎士を殴れる機会なんかねえからな、思いっきりやらせてもらう」
「……いや、殺すなよ。　頼むから」

念のため手加減を確認するアービタは、魔物の群れの向こう側で大暴れをしているちびピグにも声をかける。

「おい！　ピー助！」
ぴぴ――――っ？

鋭い鎌を突き立てようとするデスマンティスを、モノともせずにどーん！　と弾き飛ばしたちびピグはアービタの声を聞くと、そちらに向けて体ごと向き直った。　ついでに何か期待するようなキラキラする瞳を向けてくる。　アービタと副長はその純粋っぽい視線に「うっ！？」とたじろぐが、頭を振って気持ちを切り替えた。

「お前のご主人様はどうしたーっ？」
ぴっ！　ぴぴ――――っ！

「……団長、根本的に質問があります？」
「なんだ？」
「会話が可能ですか？」
「……ああ、声掛けてから気がついた。　さっぱり解らん」

背後で様子を伺っていた団員以下、冒険者達が揃ってコケた。
ちびピグは魔物を千切っては投げつつ盛んにぴーぴー鳴いている、どうやら会話をしているらしい。　受け取る側に猪語の心得がある者が居ないので、まったく意味が不明である。
指揮官の苦労とは別に、冒険者側の前衛は主力の瓦解した魔物達

と戦闘状態に入った。　主に相対するのは騎士達で、魔物の方は炎の槍所属の傭兵員達が牽制を引き受ける。　元々騎士団込みで百人居たところに、メインの騎士団が抜けてしまったので魔物の群れに対処するのは半分程度だ。　それでも集団戦に慣れた傭兵団員は魔物をいなして行く。　側面からちびピグの攻撃があってこそであるが、別に倒す事に拘らなくてもいいのだ。　人間側の目的は騎士を魔物から引き剥がすことなので、四肢を傷付けその行動力を奪えばゴアタイガーやガウルリザードの鋭い牙もその威力を発揮しない。

　団員達はそれぞれが盾になりつつ攻撃を防ぎ、横合いから一撃を加えて息の合ったチームプレイで魔物達を動けなくしていく。　それと同時進行で冒険者達が騎士を無力化して、後方へと遠ざけて行った。

「はっはっは、公然と騎士をぶん殴れる日が来るなんてなあ！」
「街中だと威張り散らしてるからな、アイツラ。　溜飲が下がるってもんよ」
「いや、だからって鉄棍を股間にっつーのはマズかねぇか？」

　兜をヘコませる勢いで殴る者、麻痺効果のある魔法で落とす者、雷撃魔法を撃ち込む者、容赦なく急所を殴打する者。　日頃の恨みとばかりに遠慮のかけらも無いが、そこは熟練の冒険者、殺さないように細心の手加減が入っている。　反面、ここまでされなければならない騎士の普段の行いからの自業自得と言えよう。

　先程のピンクの煙は【魅了】の効果を持つ魔法だったが、永続的な効果を持つわけではないので殴られた騎士は目覚めると正気に戻っていた。　しかし、縄で縛られて猿轡までされていたので当然暴れる。　冒険者側はまだ影響が残っていると思っていたから、そのままで放置。　よって騎士達は理不尽な扱いに冒険者達への反発を募らせていく。　堂々巡りの悪循環が生まれているのに誰も気づいていない。

「つか、騎士を何とかしても魔物が減らねえ……」
「一体何処からこんなに沸いてくるんだ。　キリが無いぞ！」

冒険者達が無力化して、ちびピグが片っ端から粉砕していても街道の向こうから押し寄せる魔物は中々途切れない。　これではアービタ達冒険者側がスタミナ切れで先に参ってしまう。　さっさと彼女がどうにかしてくれると思っていたアービタは、業を煮やして大声を張り上げた。

「おい！　嬢ちゃん！　近くにいるんならさっさと何とかしてくれっ！！」
「はいはい」

【魔法技能（マジックスキル）：押し寄せる羊（スリーピング・シープ）】

その声が聞こえた途端、魔物の群れが横合いから突如として出現した羊の大群に覆われた。　半透明の羊達はただ単に右から左へと魔物の群れを横切っただけで、その姿はあっという間に掻き消えた。
残ったのは地面に横たわり、イビキをかく魔物魔物魔物魔物……。
勿論無力化して回収予定だった騎士も例外なく爆睡していた。
意外に近い所から返事があったのに気付いたアービタが振り返ると、すぐ脇の森の中よりケーナがひょっこり姿を現した。

「すみません、別働隊を相手していたので遅れました」
「やけにいいタイミングだな。　出番を待っていたとかじゃないよな？」
「あはは……。　いえ、なんか男同士のチームワークが眩しくて、何時手を出したものかな～と」

正直に返して来るとは思わなかったので、やや呆れた顔になるアービタ。「ごめんなさい」と素直にケーナが頭を下げたので、頭をボリボリと掻きつつ「まあ、死人も出なかったからいいけどな」とだけで収めておく。この辺のやり取りの間に騎士の回収はほぼ終了していた。残るは大量の熟睡中の魔物の始末ではあるが、後々掃除が大変なので陣地を後退させて見守ることになった。その間に副長から事此処に至った経緯を説明されるケーナ。

「ふむふむ、それはたぶん……、【魅了】して【誘導】で操っているんですね」

「【魅了】ってあの大量の魔物をか？　そんな魔法があるなんて聞いたことがないぞ」

「二百年前には使い手がごろごろ居ましたよ。【誘導】って言うのは全体を目標に向かって行動させることです」

「じゃあ、あの群れの始まりを探せば大元の原因がいるって事か？」

「ええまあ……、ここまでの大軍を操るとなるとかなりの大物がいるでしょう」

ぴぴ――っ！　ぴぴ――っ！

それまで魔物が寝こけている山の脇をうろうろしていたちびピグがかん高いいななき（？）を上げ始めた。それを聞いたケーナは眉をしかめ、腰に差してあったルーンブレイドを引き抜き魔力を込める。短剣状態だったルーンブレイドに蒼い刃が形成された。いきなり臨戦態勢になり、とととっと駆け戻ってきたぴーちゃんを脇に控えさせたケーナの様子に、アービタは慌てて部下諸共冒険者達を下がらせた。そして横に並ぶようにして話しかける。

「操ってる奴か？」

「ぴーちゃんが警戒するってんだからそこそこ強いと思います。

ぴーちゃんは私の後ろに被害が行かないように中衛ね？」

ぴぴぴ――――っ！

ケーナのお願いにトコトコ後ろのほうに下がり、鼻を上げてふんぞり返る。　その様子を苦笑して見たアービタはケーナの横に留まったままだ。　敵の全貌を見ないままで下がるのは主義に反するとかで。

「変なのが来ても知りませんよ？」

「まあ、嬢ちゃんの邪魔をする気はないな。　俺も一応武人なのでな」

槍と剣持って武装した男女が、ぐごーぐごーとイビキかきまくりの街道沿いの魔物川の傍で待つこととしばし。　ザカザカと肩を怒らせて問題のモンスターが姿を現した。　見覚えのある姿にケーナが身構え、アービタが見た事の無い容姿に目を丸くする。

「……なんだありゃあ？　人獣（ライカンスロープ）にしては見た事の無い奴だな」

「やっぱりレオヘッド……。　魔物寝かしておいてよかったぁ～」

安堵するケーナに不思議そうな視線を送るアービタ。　ちなみに人獣（ライカンスロープ）と言うのは頭が獣の姿の者全般を指す。　犬頭のコボルトもこれに当たるが、基本人獣種は独自のコロニーを形成して人里を避ける。　大半は好戦的な者が多い為、人に仇為す者（モンスター）モノとして扱われる事が多い。

やって来たのはごてごてと革鎧の上に鋲打ちの金属板を貼り付け、ぴしりぴしりと長い金属で編んだ鞭を地面に打ちつける獅子頭の人獣（ライカンスロープビーストマスター）で獣使いの個体名レオヘッドだった。　レベルは四百三十で、四

百レベルの制限解除クエストに配置されているモンスターだ。　ゲーム中は鞭の一振りであちこちから魔物が集まるため、十八人ＰＴで当たったとしても本命を倒すまでにはやたらと時間がかかるクエストである。

　唸りつつ睨むようにケーナ達と距離を置いたレオヘッドは、ゴアアッと威嚇に吠えて手に持った鞭を大きく振り上げた。　アービタが反応するよりも早く彼の首を刈り取ろうと飛来した鞭は、直前にケーナが振るったルーンブレイドに先端を寸断されてあらぬ方向に飛んでいった。　此処までのやり取りだけで自分の手に負えないと判断したアービタは、油断無く構えたままじりじりと下がる。　弱い物から狙う主義なのか、再びアービタ目掛けて鞭を振り上げたレオヘッドはケーナから撃ち込まれた【炎裂弾（イア・ボム）】の直撃を受け、ドドーンと爆発に吹っ飛ばされた。　放物線を描いて魔物の寝こけている中に落下し、その衝撃で周囲の魔物が目覚める。　ケーナの使った【押し寄せる羊（スリーピング・シープ）】の魔法は何もしなければ一日寝ているが、攻撃や強い衝撃（魔法の範囲内とか）を受けると効果が切れる。　口元にニンマリとした笑みを浮かべたレオヘッドは、鞭を振るって魔物を起こしケーナに向けてけしかけようとしてその身を強張らせた。
　事前準備に時間のあったケーナは【魔法技能（マジックスキル）・重王圧壊（ギガ・グラビオール）】を使用。　頭上に掲げた手には直径四十メートルにはなろうかという、表面を透明な膜で覆われた闇の塊が浮かんでいた。　内部は中央に向かうほど渦を巻き、更に昏（くら）い。

「おいおい嬢ちゃん、なんだその魔法……」
「重力魔法です、ちょーっと範囲が広いので気をつけてくださいね」

　あんぐりと口を開け一歩二歩と下がるレオヘッド目掛けて、振りかぶったケーナはそれを投擲した。　ゴム鞠のようにぽーんと空を飛んだ【重王圧壊（ギガ・グラビオール）】は、べちょっと、泥団子が地面に落ちて半円状

になったような形に変化した。　落下地点に居たレオヘッドや魔物を飲み込んで。　その直後、爆発的に膨らみ、その効果範囲を直径百メートルはあろうかという巨大な暗黒ドームに拡大させた。　範囲はケーナ達の鼻先にまで拡がり、眠っている魔物達の尽くをその内部に納めていた。　光さえも届かぬ超重力の奈落の中は、外からは全く見通すことが出来ない。　中でどういった惨劇が行われているのかさっぱり解らなかった。　まあ、中で何でもかんでも圧殺するのではある。　しかし、ドーム自体が『ゴガガガン！』とか『ゴリゴキゴゴッ！』とかいった音を立てて地面にめり込んで行くので、誰もが恐れ慄いていた。　改めてケーナの非常識さを肌で感じるフェルスケイロを中心に活動する冒険者達と、あまりのデタラメさに瞠目する今回の件でフェルスケイロに居合わせていた冒険者達。

「おいおいおいおいっ、なんなんだあの娘っ子はっ！？」
「なんつー魔法を使いやがる……」
「ああ、お前らが知らないのも無理は無いな」
「あの娘っ子がフェルスケイロの大司祭殿の母親だ」
「「……」」

　揃って一角だけが沈黙に包まれる。　ケーナの事を知らない者達はあんぐりと口を開けて驚愕をあらわにしていた。　教えた方もうんうんと頷いて過去に自分達も通った道と同意する。　ある日下町の宿屋に飛び込んできた大司祭の醜態を知らぬ物はいないからだ。
　普通ならそれでも幻滅されそうなモノだが、当人が普段からマザコン的発言が多いのが幸いして地位転落という方向にはならなかった。　寧ろ親しみが持てたと言う感想が多かったのは、ご愛嬌である。

後方の雑談はさておいて、別の意味で危機に直面しているのはケーナ側である。

「あっちゃ～……」

「おい、嬢ちゃん、これはちぃーっとばかし問題になるんじゃねえか？」

「……やっぱりゲーム中とは色々と違うんだなあ……」

アービタとケーナの前に拓けている、元街道だった所が問題になっていた。　ゲーム中はドーム状に囲った中の敵を圧壊して消すだけの魔法だった【重王圧壊】ではあったが、まさか現実（リアル）で使うと効果範囲の地面ごと粉砕するような魔法になると思わなかったからである。

（広範囲魔法は対地の事も考えて自重するべきかもしれないね……）

『戦場ノ選択ヲ間違エタヨウデスネ。　後日、範囲魔法ニツイテハ実地デ確認シテミタ方ガ良イカト提案致シマス』

（あちこち穴だらけになるんだろうねえ……。　範囲魔法だけでいくつあったっけ？）

そんな考えは只の逃避であると思いながら目の前の惨状を見る。

暗黒ドームが発生した所を基点として街道に大きなすり鉢状の窪みが出来ていた。　徒歩の旅行者ならともかく、馬車での行き来は完全に無理なのは誰の目にも明らかだ。　色々と反省しているらしくしょんぼりと落ち込むケーナに、声を掛けたり肩を叩いたりして慰める冒険者達。

「ま、嬢ちゃんあんまり落ち込むなって」

「後々想定された被害からすりゃあ、こんなの微々たるモンだって」
「むしろあそこで殲滅してくれなかったら俺らがやばかった……。感謝するぜ」
「そーそー、騎士には意趣返し出来たし、俺らも死人は出てねえしで結果良しってな」
「……はあ」

残っていた魔物は、操っていたレオヘッドが居なくなったことで逃げ出してしまったらしく見渡しても気配が無い。

それでも警戒心を緩めずにいたアービタは、何人かの部下と冒険者を選んで周囲の探索に出させた。　ケーナは頭の中でキーと相談し、地面を戻す技能（スキル）を検索していた。　傍目から見るとぶつぶつ独り言を言う危ない人であるが。　ぴーちゃんはもう警戒することもないと知ってケーナの傍でまったりモードだ。　その巨体があると言うだけで、他の人は近寄りがたい。

そこへ今度は遥か後方で待機していた筈の騎士団の本隊が、シャイニングセイバーやスカルゴ、マイマイを先頭に馬で駆けて来た。　娘息子は母親が居ることに驚き、騎士団長は何故か捕縛されている騎士達に驚いていた。　一部の騎士の不満が爆発する前にアービタが間に入り、かくかくしかじかとこうなった経緯を説明する。

「そういやー、魅了の効果ってどうなってんだ？」
「強いショックを与えれば解除されるよ」
「……それを早く言ってくれっ！」

疑問を口にした冒険者にあっさりと返答するケーナ。　それを聞いてから慌てて騎士達の拘束を解きにかかる。　案の定ぷりぷりと

怒ってはいたが、操られて襲い掛かろうとしたのは事実なので助けてくれたアービタ達に文句は言えない、悪態を吐く程度だ。　冒険者側もそれは分かっているのかニヤニヤとするくらいで、露骨に言い返すものは居ない。　諦めてわしわしとぴーちゃんを撫でていたケーナは心配そうに駆け寄る子供達を見て笑顔を浮かべた。

「母上殿！」「お母様！？」

「あらあら二人とも、そんなに慌ててどうしたの？」

「どうしたもこうしたも、シャイニングセイバー殿の要請に応えて何も母上殿が出張らなくとも……」

「私達だってフェルスケイロの防衛くらいできますのに」

「でももう来ちゃったし、終わっちゃったし、ちょっと街道に壊滅的なダメージを与えちゃったけどね……」

子供達が出張った所でレオヘッドの相手は辛かっただろう、呼ばれてよかったと安堵するケーナだった。　それよりも当面は街道の後始末をどうしようかと途方に暮れる。　選ぶ方法は大体同じ方向しか思いつかない。

「石をゴーレムで運搬してからコンクリ漬けにするしかなさそうだね」

『石山探シカラデスネ』

「いや、要請を出したのは俺だからな。　上には俺から伝えておいて、ここの責任は俺が持とう」

「ありゃ？　いいの、シャイニングセイバー？」

「水際防御を被害無しで治められたのはケーナのお陰だ。　そろそろこの辺で借りを返さないと負債が怖そうでなー」

「借金取立人扱いかい……。　じゃあ、後は任せるけど？」

「おう、無理言ってスマンな」

ポンポンと肩を叩くシャイニングセイバーに申し訳程度に頭を下げ、その場を離れてアービタのほうへ移動する。　アービタ達は警戒や探索の仕事を騎士に引き継ぎ、フェルスケイロに戻る事になったのでそれに混ざる。　マイマイやスカルゴも残るらしいので「頑張って」と声を掛けてその場を離れようとしたケーナは、思い出した事があって振り向いた。

「スカルゴ！」
「は？　なんでしょう母上殿？」
「ちょっと聞きたいことがあるから、明日にでも教会行くね」
「明日……、まあ、多分問題ないと思います」
「んじゃ、よろしく」

ひらひらと手を振ってアービタ達冒険者の後を追う。　珍しい母親の頼みごとに首を捻るスカルゴに「よかったじゃん」と茶化す妹。　その場を離れながらケーナはエクシズ達の方はどうにかなったのかな？　と思い出した。

――――　オウタロクエス　Ｓｉｄｅ

人々の重苦しい注目を一点に集めて王都に侵攻（？）していた巨亀は、城の裏手、境界線ギリッギリで停止していた。　後一歩踏み込めば都市部どころか、城に重大な損害を与えていた所である。

避難勧告が出ていたにもかかわらず、残っていた住民や大臣、騎士や冒険者と一緒に先頭に立っていた女王サハラシェードが深い溜息を付く。　覚悟を決めたところでいきなりの停止に、歓声よりも先に全員の安堵の溜息に迎えられた形になる巨亀。　決して歓待を受けるいわれは無いものではあるが、滅亡の危機は回避されたと言うことだろう。　巨亀の停止が確認されてからやや間をおいて、残っていた者達が歓声を上げる。　都市全体に広がった喜びの声を聞いた女王は、その時点になってようやっと肩の力を抜いた。

「やれやれ、一時はどうなることかと思ったわ。　停めてくれた者には報酬弾まないといけませんね」

「ふう、肝が冷えましたぞ……」

宰相と頷き合う女王の会話を拾った騎士団長は、すぐさま部下を功労者確保に向かわせる。　巨亀の周囲で目を光らせておかないとカタリを装う者が出かねないからだ。

場所は変わって巨亀神殿（テレビ局）内部では……。

ぐったりして床に突っ伏した隠れ鬼とエクシズの姿があった。

ちなみにクオルケは早々に二十問を間違えて外に排出された。　今はクエストクリアとみなされたので建物の扉は開放され、再び登ってきたクオルケは二人と合流している。　隠れ鬼の頭上のカウンターは『３９／１８』、エクシズの頭上は『４１／１９』となっていた。　まさに崖っぷち状態である。　体力的には問題ないのだが、精神を緊張感でゴリゴリ削られていったので双方とも疲労困憊だ。

あろうことかこの守護者、途中から外の景色を壁に表示させたのだ。　刻一刻と近づいてくるオウタロクエス王都、微妙なチョイスの問題と時間制限に焦りが募られて冷静になるまでに随分と間違え

てしまった。

『お疲れ様でした。　二割間違える前に計八十問正解されているのでクエストクリアになります。　ｙｏｕ達の願い通りに守護塔の歩みを止めました。　これで宜しいでしょうか？』

蓮の台座に座ったままふよふよ浮いている金箔神仏像が、三人を見下ろしながらそう声を掛けてくる。

「あ、……あぶねえ……。　あそこで正解しなかったらヤバかったかもしれん」

「まったくよ。　残り二問、一人で何とかせねばならんかと思ったぞい……」

忘れ掛けていた事まで搾り出すように脳をフル回転させたので、二人とも心は鰹節のように細切れであった。　それでも共に戦い抜いたという達成感で、どちらかとも無く笑みがこぼれる。　クオルケの羨望（混ざれなくて残念）な眼差しを受けながら、肩を組んで「「ワハハハハハハッ！」」と笑いあう。　それで何か気が済んだのか、晴々とした表情の隠れ鬼は神殿から出るとエクシズ等と距離を置いて向かい合った。

「何やら待ち構えている輩もおるし、ワシはここで失礼させてもらうぞい」

「いや、ちょっとその前にケーナと会わないとか言っている理由を置いていってもらえないか？」

「ぬ、そうだったな。　……どう話した物かのう……」

顎鬚をいじりながら「むむむ……」と呟き考え込む隠れ鬼に対して、そんなに難しい理由があるのか？　と困惑する二人。

「簡潔に言うと所帯を持ってのう」

あっさり風味な返答につんのめった、危うく甲羅上から転げ落ちるところだった。

「そんな理由で昔の仲間に会わないとか薄情過ぎだろうっ！？」
「少しは会わないとか言われた方の気持ちも考えてあげなよっ！」
「まあ、待て。　お主等の言い分ももっともなんじゃが、ワシはこのゲーム隠居した後に始めてのう……」

勢いで突っ込んだ二人を押さえるような仕草で隠れ鬼は訳を話し始めた。『理由があれば』と言った手前もあって、聞くだけ聞くことにしたエクシズは納得しきってないクオルケを抑える。

「当時はまだ連れ合いもおったんじゃが、童心に帰ったみたいについぞネットにのめり込んでしまってな。　連れ合いも文句ひとつ言わずに付き合ってくれたんじゃ。　それが先に立たれるとのう、もっと一緒にいて一緒に隣を歩いてやればよかったと後悔したんじゃよ。　そんな訳で悪いんじゃがケーナ嬢には第二の人生を楽しみたいと伝えておいてくれんか？」
「……」
「……、分かったよ。　ケーナにはそう伝えておくわね」

重苦しい空気漂う中、黙るエクシズに代わりクオルケが頷く。
隠れ鬼は申し訳なさそうな顔で頷くと【転移】を使い、その場から消え去った。

「……はあぁ、人の過去なんか聞くもんじゃないな」
「同感さね。　さて、何時までもこんなところに用は無いし、さっ

さと降りて報酬でも貰いに行こう？」
「ああ、そうだな。　その後でケーナと会って伝えてやらないとな」

巨亀は甲羅上から人が居なくなると、その場から方向転換をして本来の軌道へ戻るために動き出した。　人気の無くなった神殿内部では、金箔神仏像がどこぞからの通信を受けていた。

『……当初の予定とはえらいズレましたが、プレイヤーを三名確認致しました。　姫様に会えなかったのは残念ですが。　……はい、はい、では以降はそのように……。　Ｍｅは暫くお役御免ということでしょうね、ええ、はい』

通信の切れた神殿には静けさが戻る。　歩行する振動音すら聞こえない静寂の中、金箔神仏像は薄く開いていた瞳を閉じ、蓮台座の上で結跏趺坐をするだけの守護者として口を閉じた。

――後日、フェルスケイロでケーナと合流したエクシズとクオ

ルケは……

「え？　お爺ちゃんがそんなことを？　へえ……」
「あの人マジで中の人、隠居爺だったのか？」
「うん、でもおかしいなあ。　生涯独身とかふんぞり返っていた覚えがあるけど、脳内彼女とか言ってたしー」
「「は？」」

「隠れ鬼」
おそらく最年長プレイヤーで、嘘か真か判断つかないことを真摯に語って相手をからかうことが趣味な爺さんである。　中にはそのまま訂正不可能なほどに信じてしまったケーナのような事例も存在する。

42話　天の営み人の営み

いちいち村に戻って一泊したケーナは、翌日にはとんぼ返りでフェルスケイロに戻ってきていた。　そういえばケイリックと交渉途中だったと思い出すものの、専門家がそこに居るのだから無駄足を踏んだときの保険と考える。　ケーナが息子のスカルゴに聞きたいのは、この世界の創世二神の片割れ『夢の神』についてだ。　別に世界の成り立ちを最初から説明して貰いたい訳でも、夢の神（夜神）について語って貰いたい訳でもない。　例のオプスの置き土産本。

あれの最後のページに書いてあった一文のせいである。

そこにはただ――『夜神神殿』――、とだけ書き残されていた。

「よ、……よるかみ？　意味が分からないなあ、これ。　そこで待っているのか、そこまでたどり着くクエストなのかがさっぱりね」

念の為、ロクシリウスやロクシーヌにも聞いてみたが、二人とも揃って首を振った。　村の人間は簡略化した創世神話（おとぎばなし）を知っている程度で、博識なスーニャも「それは神殿の人に聞くべきでしょう」と返してくれた。

フェルスケイロに戻ると先ず最初にアービタ達の泊まる宿屋に顔

を出した。　王都防衛で駆り出された時の報酬を貰うためである。
なんだか分からないが、炎の槍傭兵団と一緒としてギルドの方で一纏めにされているらしい。　別働隊もたいらげたのでケーナの貰う報酬はやや多めだ。　お金はあるに越したことはないが、ありすぎても困るので、よくよく考えた末……。

「じゃあ、ここの飲み代、私が出しますよ」

王都防衛の報酬でパーっとやろう、とか言う名目で飲んでいたアービタ達に切り出した。　全員がギョっとした表情でケーナを注視する中、アービタと便乗して飲んでいたエーリネも驚いていた。

「いいんですか、ケーナ殿。　荒くれ男達の飲み代って結構掛かりますよ？」
「金貨一枚くらいにはなりますか？」
「いやいや、そんだけ飲むにはちーっとばかし人数が足りないな。だいたい幾ら貰ったんだよ、嬢ちゃん？」
「金貨三枚ですねー」

「おおーっ！」とか団員から感嘆の声が上がる。　これは別働隊の構成を聞いたシャイニングセイバーの口利きも過分に入っていて、あの場所にケーナが向かっていなかったらどうなっていたか？　と言う憶測から王都の被害を想定した結果だ。　あの群れが丸ごと王都に侵入していれば、最悪フェルスケイロが地図上から消えていたかもしれないので、王や王女からの褒美の意味も含まれている。
ついでに別働隊の脅威を市民に隠しておきたいが為の口止めの意味もある。　ケーナの分と渡された袋の中に、報酬と今回のことに対してのアガイド宰相からの注釈が書き留められた手紙も入っていたからだ。　ちなみにアービタ達の報酬は一人当たり銀貨三十枚ほどだ。　差があるにも程がある。

ケーナが指で弾いた金貨を受け取ったアービタは、手の中のモノを見つめ満足そうに頷いた。

「よおし、お前等！　今日は嬢ちゃんの奢りだそうだ、浴びる程に飲むぜえええぇっ！！」

『おおおおおおっ！！』と宿屋を揺るがすほどの大歓声が轟き、外に居た人々が何事かと酒場内を覗き込んでくる。　ケーナは度数の低い果実酒を傾けながらエーリネとの商売の話を再開する。

「ふむ、定期的に麦の購入ですか？」

「加工品は堺屋に回すとしても、原材料は別に一店にばっかり頼らなくても良い訳だし。　外殻通商路を回るエーリネさんの商隊であれば村には時々寄れますでしょう？」

「まあ、村に立ち寄る前に仕入れておけば買い取りは確実なわけですね。　いいでしょう、その提案お引き受けしましょう。　……しかし、初めて会った頃のケーナ殿を知っている身としては、今の状況は面白いですねえ」

「うっ……。　そ、そうですよねー。　現在の私があるのもエーリネさんやアービタさんに会えたからこそ、ですから。　最初の時の授業料を返す時期なんでしょうねー」

「持ちつ持たれつですねえ」

顔を見合わせて笑いあう。

堺屋から麦の直接購入も出来る訳ではあるのだが、以前ケイリック自身が言った「この程度で堺屋は傾きませんよ」の発言もあったので、色々借りのあるエーリネに恩を返す意味で提案してみたのだ。

定期的に、と言う範囲からは外れるが、堺屋に収める期日に間に

合わない場合、ちょっと【転移】して購入すれば良いだけの話だ。
造るのにも日数の掛かる物ではないので、麦だけはエーリネ商隊に任せることにした。後でケイリックの方にもその旨を伝えてこなければならないだろう。

ケーナが朝からアービタの所に身を寄せているのは理由があった。
本当は早朝から教会に行ってスカルゴと会うはずであったが、教会の神官長に「都合がついたら此方から使いを出します」と、言われたからだ。あんなのでも国のトップスリーとしての仕事や重責もあるんだろうと、こうして迎えを待っている次第である。

酔っ払いに絡まれて安酒を無理やり押し付けられたり、エーリネ商隊の面々と最近の商売の様子などを話していると、貸しきり状態な酒場兼宿屋に二人組みの女性がやってきた。呼ばれた気がしたケーナが首をめぐらせると、女性二人が小走りに近寄ってくる。

「こんにちは、ケーナさん。お久しぶりです」
「ん？　言う程お久しぶりってモンでもないんじゃない？」
「いいんですよー、只でさえめったに合えないんですから」
「そうなんだ。じゃ、ご無沙汰ね、ロンティ、マイちゃん」

ブ――――――ッ！！？

片割れのマイの顔を見たアービタが部下に向って勢い良く酒を噴いた。それはそうだろう、誰がこんな下町酒場に王女がノコノコと護衛も着けずにやって来ると思うものか。「わあっ！？　キタ

ねえっ！」「団長が酒噴いた！？」「どどどどどーしたんですか、いきなりぃ？」　その周囲では軽い騒動が持ち上がっているので、流石にケーナ目当てで一直線に突撃して来たマイも気付く。

「あ、アービタさん。　ご無沙汰しています」
「ひ、ひひひひ、ひめ……って……。　なんだってこんな所に護衛も付けず？」

姫様と言い掛けた途中で声を小さくして聞き返す、それにニッコリと笑ったマイは酒場の戸口を振り返った。

「護衛なら居ますけど、騎士団長直々に」
「……どうも……」

白鎧に帯剣した白銀竜人の巨体がのそりと入ってくる。　その姿勢はケーナがシャイニングセイバーと出会った中で、一番謙虚でおとなしめだ。　一瞬ケーナが『誰、これ？』とか思ってしまうほどに。　その軽く頭を下げたシャイニングセイバーに団員達が組み付いた。　日焼けしたぶっとい腕を首に回し、他の者より頭一つ高い竜人を無理やり屈ませる。

「ちょっ……！？」
「よお、元気かぁ大将？」
「最近は調子に乗っているそうじゃねえか、若造？」
「お前騎士団長ならもうちょっと部下の教育に礼儀ってモンを教えさせたらどうだぁ？　冒険者と見れば目の色変えて突っかかってきやがってよお、さかりのついた雌犬じゃねえんだぞ」
「いや、それは、まあ……、スミマセン」

絡み酒なのか素なのか、ガスガス突かれながら文句を言われまく

るシャイニングセイバーがいた。　随分と親しそうと言うか、やたらと下っ端扱いされている。　目の前に居たロンティとマイも目を丸くしてその珍しい光景を眺めていた。　当然ケーナもだが。　苦笑していた副団長が小声で解説を入れてくれる。

「実は我々の半数は元々騎士団にいたのですが、団長が抜ける時に一緒に着いて来た者達の集まりなのです。　シャイニングセイバー殿はアービタ団長の後継者でしたので、当時を知っている者は後輩として可愛がっていたのです」

「へー、……って、後継者？　アービタさんって元騎士団長！？」

「ええ、先代の騎士団長でしたよ」

こくーりと頷いたのは横でニコニコしながら聞いていたマイだ。

ロンティは当時騎士団にまで関われる状態だった訳ではなかったようで、ケーナと一緒に「えええっ！？」と驚いていた。　その噂の当人は何時の間にかシャイニングセイバーを小突く側に回っている。

どう口を挟んだものかと思案するケーナの両腕を、ロンティとマイががっちりと捕獲した。　クエスチョンマークを飛ばすケーナに二人揃っていい笑顔で微笑み、「さあさあ行きましょう。　大司祭がお待ちですよ」とずるずる引きずっていく。

「え？　って、もしかして使いって二人の事っ！？　なんで神殿の使いで二人が？」

「丁度運よく手が空いていたのです。　そんな事はともかく、さあ！」

「はいはい、行くから引っ張らないで。　じゃあ、エーリネさんアービタさん、お邪魔しました～」

「ええ、また後日。　お気をつけてケーナ殿」

「おお、嬢ちゃん、またな～」

ケーナに手を振る傭兵団員一同と商隊の面々。　捕まったままのシャイニングセイバーをそのままに、三人は酒場を後にした。

「って置いていくなっ！」

「ああん？　おい若造。　お前、嬢ちゃんに不埒なことをするんじゃねえぞ？」

「団長のお気に入りなんだからなぁ？　後で裏通りに呼び出されたくはねえだろう、んん？」

「分かりました、分かりましたから離してくださいよっ！」

というやり取りが延々と続き、シャイニングセイバーがケーナたちに追いつくのは随分と後になる。

ロンティとマイの先導に着いて行ったケーナは、川岸で待っていた貴族専用と言う渡河船――白亜のクルーザーのような――に乗せられ、中州を経由せずに対岸の貴族街に降り立った。　その時点で脳内に嫌な予感ＭＡＸ警報が鳴り響いていた、別にキーが鳴らしている訳ではない勘的なもので。

「ねえ、なんかものすっごい嫌な目的地が幻視出来るんだけど……？」

貴族街のメインストリートとも言うべき綺麗に石畳で舗装された道を真っ直ぐ進んでいる。　終点の真正面にででーんと存在している建物は、知る人ぞ知るこの王都のシンボルタワー、王城だ。　白い外観に青い尖塔を幾つか持つここの王城は、かつて何処かのギルドが建てた姿そのままに言い様もない威圧感でもって道行く人々を見下ろしている。　ゲンナリした表情で後ろを振り返ったケーナを、逃がさないように睨むやっと追いついて来たシャイニングセイバー。

「ねえ？」

「公式じゃない、私的なものだ。　大司祭殿も同席しているので安心するといい。　……凄い文句言ってたけどな」

「まあ、あの子の性格じゃあねー」

「逃げるなよ？」と付け加えられたことで大きな溜息を吐いたケーナ。　がっくりと肩を落とし、楽しそうに微笑むマイに腕を取られて王城の門をくぐる。　似たような光景が続く廊下を行ったり来たり、階段を幾つか上がってこぢんまりとした扉の前に連れて来られる。　城などと言うものは散々ゲーム中にクエストを受ける場だったり、数あるギルドが自分の本拠地として良く建築していた。　いまさらな場所だという感想しか持たないケーナの態度に、連れてきた方――ロンティとマイ――はちょっとがっかりしていた。

「ケーナさんってお城に興味ないんですかー？」

「え？　ああ、昔は城なんてもうあちこちに建ってたからねー、特に興味はないかな」

「あうううう……。　もう色々と説明したかったのにぃ」

「あはは、ごめんね」

はふぅ、と溜息を吐いて肩を落としたマイに苦笑して謝るケーナ。

ロンティは扉をノックして顔を出した侍女に「案内して来ました」と伝える。　侍女が引っ込んでしばしの間が流れ、内側から扉が大きく開け放たれた。

そこは大きく窓を取って外からの光を取り入れられる部屋で、内装は特に目立つような物はない。　それでいて白い清潔感のある部屋で、中央に大きな丸テーブルが備え付けられていた。　そこには先に三人の人物が待っていて、ケーナを立ち上がって出迎える。

一人は腕を組んで仏頂面をしたスカルゴで、ケーナを見るとほっとした表情を浮かべた。　一人は法衣に似た大きめのローブを纏った壮年の厳しめな目付きの男性。　最後の一人は柔らかな笑みを浮かべ、薄緑色のドレスを着たややふくよかな女性だった。

場所が場所だけにスカルゴと同席する人物なんて決まりきっている。　内心溜息を吐きたい気持ちを表に出さず、姿勢を正したケーナは一歩引き、芝居がかった仕草で小さく屈む程度に会釈した。

大仰にやらないのは、スカルゴの主張するケーナ自身がハイエルフ種族な為だ。　ここで頭を下げたら『エルフの王族が人族の王族に頭を下げる物ではありません！』とか息子が激昂しそうだったから。

「お初お目にかかります。　いつも愚息がご迷惑をお掛けして申し訳ありません。　ケーナと申します、以後よしなに」

しばしの間が空く。　何故かあっけにとられていたような二人、王と王妃はケーナとの視線を交わすと慌てて右腕を胸に当て会釈を返す。　スカルゴは頭痛を押さえるようにして自分の席で脱力していた。　なんかマズい事をやったのかと自分の行いを振り返ってみるケーナだったが、「普通に挨拶をしただけだし、問題ないよね」と流した。　実際の所、招いた側が先に礼をする暗黙の了解がある場で、ケーナの行動は王達にかなりの動揺を与えていた。

マイとロンティはこの場に同席する予定でないらしく、「ごゆっくり～」と言う言葉と残念そうな表情で部屋を後にした。　シャイニングセイバーは部屋の警備を部下に任せ、自分の仕事に戻るそうだ。　「帰りは送るからな」と呟き去って行った。

王と王妃にどもられながら椅子を勧められ「失礼します」とテーブルの一角に座る。　右隣にはスカルゴで左隣には王妃が、真正面と相対するのは王だ。　なんとなく病院で医者に苦言を言われているような既視感（デジャビュ）を感じたケーナは、何でこんな場になったのかと訴える視線をスカルゴに飛ばした。　いきなり鋭い視線に晒された息子は、ビシィと姿勢を伸ばす。

「……え、ええと、母上殿？」

「すみませんケーナ殿、我々が無理を言って同席させて貰っているのです。　大司祭殿を責めないで下さい」

間を取り持ったのは王妃である。　その柔和な笑みに一瞬実の母親の影が過（よ）ぎって、ケーナは息を呑んだ。　直ぐに気を取り成して小さく深呼吸し、自分を落ち着ける。

「私はスカルゴに少し聞きたい事があっただけなんですけど」

「それは大司祭殿から聞き及んでいる。　私達としては二度も王都を救ってくれた貴女に会いたかっただけなのでな、そちらの話が済んだのであれば此方の雑談にも少し付き合って頂きたい」

上に立つ者として厳かな声を聞き、ケーナは叔父を思い出す。家を飛び出した桂菜の父親が分家の各務母と籍入れをしたお陰で一族を追い出され、代わりに本家の”鏡”を継ぐ事になった叔父（父の兄）が、良く「仕事場は舞台だ」とか息抜き代わりにお見舞いに来てくれてたのを思い起こす。　その都度、口から飛び出すのは愚痴ばっかりだった。　動けない此方は甘んじて聞くしかなく、遅れてやって来た秘書の従姉妹（むすめ）に叔父が連行されるのは何時もの事だった。

「普通に会話しません？　その喋り方疲れるでしょう？」
「お、おお。　ケーナ殿は話の分かる方のようだな。　儂はトライストと言う、こっちは妻のアルナシィだ」
「ちょっ、母上殿っ！？　いきなり砕けないで下さい、ハイエルフ族として矜持くらいは持ってください！」
「別にいいんじゃない？　ここはハイエルフの集落でもないんだから」

あっけらかんと素で返す母親に、頭を抱えてしまうスカルゴ。多少なりとも今後交渉の場でケーナを有利に立たせるための思惑がガラガラと音を立てて崩れていく。　ケーナはシャイニングセイバーに「私的なもので」と伝えられた事もあり、友達（マイ）の親に会う程度の拘りしか持っていなかった。　正に子の心、親知らずである。

逆にトライスト達は、事前にスカルゴやアガイドから聞いていたケーナの人物像に戦々恐々と言った思いを抱いていた。　王都に出現した巨大魔物に騎士団や魔法師団が苦戦する中、たった二発の魔法で沈める威力。　娘や息子から聞き及んだ、強大な召喚獣を意の

ままに操る手段。　スカルゴがしぶしぶと語った過去の超越者（スキルマスター）としての役目などからである。　そんな思いは直に会ったケーナの飄々とした素を見て杞憂だったと判明する。

　部屋内で静かに命を待っていた侍女が各自にお茶を淹れる。　彼女は配り終えると、一礼して部屋を出て行った。　改めて四人だけになった所でトライストが深々と頭を下げた。

「先ずは以前の巨大魔物の件と今回の事、改めて礼をしよう。　真に有難く思う。　あとは娘と息子が色々と迷惑をかけた。　申し訳ない」

「んん～、頭を下げられる覚えもありませんが？　デカペンギンは息子達に害をなそうとしたからぶっ飛ばしましたし、魔物の侵攻だって友人のシャイニングセイバーに要請を受けたからですよ。　それについては危険手当込みの報酬も貰っていますしね。　とても一国の主が冒険者程度に頭を下げるような事態とは思えないですね。　マイちゃんは友人だし、デン助はアガイドさんから頼まれてますし」

　拍子抜けした意外な表情をして顔を上げたトライストと視線を交わし、ニヤリと笑みを浮かべるケーナ。　国自体に借りも貸しもない立場のままでいたいと遠回しに主張してみた。　トライストはしっかり意図を受け取ってくれたようで、頭を上げると満足げな笑みを浮かべて頷く。

「そうか、ならば我々は立場が同じ友人と言う意味に取っていいのだな？」

「出来れば王族とか身分のある人とかには関わり合いになりたくなかったんですけどねー……。　スカルゴがトップスリーだとそれも難しいか」
「って母上殿！？　さも私の責任だとか風に言うのはやめて下さい！」
「実際の所良く知らないんですが、この子役に立っています？」
「ちょっ……！？」
「ええ、国内外の神職を良く纏めてくれているわ。　演説の時などにも輝いたり花が舞ったりするのも国民に人気なのよ」

ケーナのド直球な質問に苦笑したトライスト。　彼の代わりにアルナシィが返答する。　ごくごく普通にまともな回答が得られ、「へー」と意外そうな顔でケーナは息子を見た。

「な、何ですか母上殿……、その疑り深い目は？」
「いや、なんでもないわよ。　国のトップがそこまで言うんだから事実と受け止めておくわ」
「……母上殿が自分をどう思っているのか、詳しく聞きたいことではありますが……」
「普段の行いから改めるのをお勧めするよ？」

泣きながら遠くに行きそうな息子を襟首掴んで止めるケーナ。斜め上を行く親子の会話に王と王妃は目を丸くしていた。

「待て待て、スカルゴに聞きたい事があるから私がここまで来たんでしょーに」
「ハァ……、自分に母上殿の納得できる答えが出せるか分かりませんが、聞きましょう」
「夢の神とかについて聞きたいんだけど？」

目が点になるスカルゴ、青天の霹靂以上に予想外の問いかけに思考が止まる。

「どういった風の吹き回しですか？　母上殿が神について興味を持つなどと……」

「ん、夢の神神殿って言うのはあるのかなあ？　と」

「夢の神を崇め、た……。　いや、もしかして母上殿が知りたいのは夢の神を祭る神殿、じゃなくて夢の神がおわす神殿って意味で？」

「うん、そう。　知ってる？」

「ど、どどど、何処の世界に神に直接お目通りを願う者が居ると言うんですかっ！？」

興奮して唾を飛ばしながら立ち上がる息子を見て、首を捻ったケーナは足りない言葉に気付く。

「スカルゴ……、私は神様に用があるんじゃなくて、神殿に用があるの。　そこの所間違えないでね？　できれば夜神（よるかみ）神殿って所に」

「夢の神ではなくて対の方ですかっ！？」

「「ッ！？」」

これには静かに二人の会話を聞いていた王と王妃も驚く。　夢の神は陽の神の片割れで夜を守護する女性神である。　それと対になっているのが、苛烈な側面を持っている夜神としての顔だ。　魔を纏める神として人心に恐怖を振りまく悪鬼羅刹のようなモノである。

それについて知りたいとなれば、悪魔崇拝者のレッテルを貼られても仕方のないことであろう。　この場にいる三人にはその認識はないが。

「夢の神でしたら、夢の中に居を構えるという説があるのですが……。　夜神（やしん）となりますとー」

無言で直上を指差すスカルゴ。　それの意味するところが月だと言うのを察したケーナは脱力する。　どうやっても月に到達できるスキルなど無いからだ。　ゲーム中と同じく、この世界にも月は存在する。　二つあったり紫だったり超巨大だったりはしない、地球と同じように満ち欠けする白い月が夜天を彩る。　それはそれとして息子の言葉に引っかかりを覚えたケーナは聞き返した。

「夜神（やしん）……？　夜神（よるかみ）って言うんじゃないんだ？」

「この際読み方などはどちらでもかまいませんが、一般的には前者ですね。　そうホイホイと口に出されても異端審問が待っていますので、気をつけてくださいよ、母上殿？」

「うーん、まあ、善処するよ。　ヤシン、やしん、やしん神殿？……なんか聞き覚えがあるなあ、なんだっけ？」

――も……　し　わ　……かけ――

――それ　ま　、……ひど　……　だ――

「キー！！」

『ナンデショウ？』

深く深く考え込む姿勢に入ったケーナに配慮して静まり返る部屋。　脳裏に閃いた、過去に聞き覚えのあると思われる断片的な会話が思い出せず、外部記憶（キー）を呼ぶ。　呼び出すも何も常に傍に控えているというか、一心同体なのだからそこの所は横に置いておいて。　勿論、キーの発言はケーナ以外には聞こえないので、突然何者かを

大声で呼んだケーナに王と王妃は困惑顔だ。

「ログ検索して！　”やしんしんでん”でお願い」

『了解シマシタ。　シバシオ待チヲ』

「あのー、ケーナ殿は何を？」

「母上殿は聖霊を従えていますので、それに頼み事をしてるのです。何を頼んでいるのかは見当もつきませんが」

「……聖霊？　良く神の使徒として物語に出てくるあの聖霊か？」

「自分も見たことはありませんがね」

大司祭と王と王妃がボソボソと会話する中、視線を独り占めにしているケーナにはキーからのログが提示されていた。　音声無しの会話ログが目の前の空間に羅列される。　見えているのがケーナだけなので、第三者からは何も無い空間を睨んでどんどん険しい顔になっていく彼女が確認されるだけだ。　流石のスカルゴでも、理不尽な怒りの矛先が来るのではないかと、嫌な予感に身を震わせていた。

――その文章は以下の通り

『うむ、ようやく完成したぞ。　この一ヶ月長かったのう』

『あのね……、固定されてたのは私だけなんだけど。　ほぼベッドから動けない入院患者をゲーム内でも拘束するってどーゆー嫌がらせよっ！』

『まあ、些細な言い分は横に置いて早速式典を執り行おうぞ。

『乾杯』』

ちん

『ゲームの飲み物ってなんとなくな味しかしないからなあ。　この辺改善してほしい』
『フィードバックを全開にすれば万事解決であろう』
『んなクソヤバい事ができるかあああああっ！！』
何かの吠え声と打撃音爆発音がしばし羅列
『……にしても随分と悪趣味なダンジョンになったわね～、全面金色とか』
『限界突破＆スキルマスター二名の労力が集大成されただけではないか。　きっとGホイホイのように若い欲にまみれたプレイヤーが引っ掛かるであろうて』
『表現が生々しい、減点いち。　しょーもない罠もどっさり仕掛けちゃってもお……』
『きっと一儲けしようとしたマヌケがバタバタ倒れていくぞ。自分の野心に溺れるがいい。　は！　よし、このダンジョンを”野心ダンジョン”と名付けてやろう！』
『すっげー語呂が悪い』
『ならば”野心神殿”とかで』
『まあ、最下層に訳の分からん神像（フィギュア）設置しちゃったからそんなもんでしょ』
『まずは噂から流すとしようぞ。　どいつが最初に地獄を見るか楽しみだ』
『噂くらいならうちのコミュが妥当でしょ、数も少ないし』
『よし、それでは戻るぞケーナ』
『ギルマスにも拘束解禁とか言っておいてよね、オプス』

「……ってえっ、夜神神殿じゃなくて野心神殿のことかあああああっ！！？　紛らわしいわクソオプスっ！！」

怒りの叫びに連動した幾つかの【能動技能（アクティブスキル）】が起動し、周囲にドカンと濃密な気配がばら撒かれた。　のほほんとたわいない雑談をしていた三人は、突然のケーナの激昂に飛び上がって驚く。　それでも突然な母親の奇行に比較的慣れていたスカルゴが、なんとか宥めすかせてその場は落ち着いた。

「失礼、取り乱しました。　驚かせて申し訳ありません」

年上には素直に謝罪するケーナ。　向こうはこちらを長命種の大御所と思っているので、その辺りの事情がひじょーにややこしい所ではある。

確認したいところも何故か自己完結し――スカルゴが爆涙していたが――そのまま王族との雑談に一日を費やすこととなった。　娘の育て方についてアルナシィに相談したケーナは彼女と意気投合し、マイリーネのお古のドレスを譲ってもらうのを条件に、時々お茶会に顔を出す事となった。　まあ、後で自分の発言を撤回させられたのに気付き、後悔する事になったのだが。　とぼっちりは帰って来たケーナから大量のドレスを差し出されたルカにも向かう。

43話　時の流れとは残酷なもの

夕方になって王城を後にしたケーナは、そのまま自宅まで【転移】して帰った。　いつものように一日に何があったかをつっかえつっかえで話すルカを可愛がり、ロクスとシィも交えて一家団欒に心の洗濯を済ます。

一夜明けて再びヘルシュペルまで【転移】してケイリックと会う。

こちらは麦の輸送をエーリネ商隊に頼んだ為、堺屋からの買い付けを一時的にストップさせる相談にだ。　しかし孫とはいえ、相手は百戦錬磨の商人である。　話をしているうちにあれよあれよと言う間に言質を取られ、麦の輸送についてはケイリックとエーリネでよ～く協議してから、と言う結果になってしまった。

「むう、抜け目ないなあ……」

「御婆様、商人と言うのは抜け目を探し出して利益を得る者ですよ」

「前にこれくらいじゃ堺屋の看板は傾かない、とか言ってなかったっけ？」

「それはそれ、これはこれです。　それに御婆様とは何かしらの繋がりを持っていた方が良いと、長年の勘も告げているので」

「酒だけには留まらないんだ……」

当然のことのように胸を張るケイリックにケーナは苦笑するばかりである。　ケーナの用事はそれで終わりなので、ケイリックからは魔韻石の加工を頼まれた。　ちなみに材料は新たにケイリックが用意した石で、以前に村まで送られた分に関してはケーナに譲渡される形になっている。　一部は外灯に姿を変え、村の通りを夜も照らしていた。　それでもまだ大量に余っているので、何か他の使い

道を思いつくまで保管してある。

堺屋との用事が終われば、ロクシーヌから頼まれた日用品や食料などを買ってまた村に戻る。　そして保管庫にうず高く積まれていた麦を粗方酒樽に加工し、その日を終えた。

「うーん……」

翌日、午前中のリビングでテーブルの上に広げた地図と、キーが脳内提示――ケーナにしか見えない――するゲーム中の地図を見比べて唸るケーナが居た。　陽当たりのいい窓際ではロクシーヌが針仕事をちくちくとこなしている。　手に持つのは先日にケーナが貰ってきたドレスの一着である。　流石に王族が着ていただけあって生地もいい仕立てもいいと良い事ずくめだが、いかんせん村娘が着るには不向きである。　裾が長いわ、乱暴に扱えば直ぐ破れるわで実用に耐えない。　とりあえずロクシーヌが二着程をよそ行き外出用に仕立て直しているところだ。

ケーナの方は”野心神殿”の現在地の特定である。　当時はほぼ、初心者プレイヤーおちょくり用といっていいオプスが個人で楽しむ仕様だったので、作った後は彼に丸投げであった。　はっきり言って何処に作ったか場所を覚えていないのである。

その為に前回引っ張り出したログから前を全部チェックし、場所の分かるような単語を全部洗い出した。　判明したのは『赤の国』と『中継ポイントの傍』、というくらいだった。　ゲーム中の赤の

国中継ポイントは、砂漠の中にポツンとある六角東屋に固定された巨大水晶であった。　そこから少々南下した、未踏区域とのギリギリラインの山肌にそのダンジョンを造ったとおぼろげな記憶にはある。　それを以前にエーリネから買ったオウタロクエス方面の地図と比べてみたところ、その地点に重なるように小さな町が存在するらしい。　外殻通商路最南端と呼ぶべきか。

「んー？　二百年も経ったらもう探索しつくされちゃってるのかなあ？」

　そう思う部分もないところではあるが、設計はあの陰湿で狡猾な罠作成士の手による物。　とても二桁レベル位しか持たない現在の冒険者諸氏には難しい場所だろう。　落とし穴や鉄球振り子ならともかく、中には『招かれる板（まものがボン）』等も設置してあるのだから。　『招かれる板』と言うのは無人のダンジョン内で定期的に魔物を生み出す仕掛けである。　畳一畳分くらいの大理石板に、喚び出す魔物が掘り込んである形状をしている。　特殊なアイテム『染み出す魔韻石』を使っている為、微量の魔力を毎日少しずつ溜めて一定量に達した時、自動で魔物が召喚される仕組みになっている。　通常の召喚獣と違い、喚び出された魔物は滅ぼさない限り存在し続ける。　しかし、階によって存在できる魔物数は上限が決められているので、決して飽和状態にはならない。　そんなものが各階に仕掛けられているのだ、百レベル前後のプレイヤーならＰＴを組んで突入したとしても最下層にたどり着けるのかが甚だ微妙なところである。　罠に掛からなければと言う前提付きで。　当時の本人談では半分以上が悪戯程度と言っていたが、どこまで信じていいものやらだ。

　しかも残された言葉を確認するのであれば、ケーナ自身が乗り込まねばならないだろう。　一回回って戻ってきたという自業自得感がしないでもないが。　最初は全力を駆使した最大破壊魔法で、ダ

ンジョン部分を根こそぎ消滅させようと考えたのだが、周辺に町があるのならば地道に潜るしかなさそうである。

「メンドクサイな、もう……」

そこへ共同風呂掃除を終えたルカがロクシリウスを伴い、パタパタと帰ってくる。　ロクシーヌと鋭い視線飛ばし合戦をしたロクシリウスは、ルカが室内に入るのを見届けるとケーナに一礼をして踵を返した。　日課の村巡回に戻ったのだろう。

「ただ、いま……」
「おかえり、ルカ」
「お帰りなさいませ、ルカ様」

立ち上がってルカに一礼するロクシーヌ。　手元の作業をさっさと片付けると、「昼食の準備を致します」とキッチンへと移動して行った。　部屋の隅に常備してある水樽から、コップに水を汲んだルカはそのまま自分の席にちょこんと座る。　コップの水を半分ほど飲むと、ケーナの手元を覗き込んだ。

「地図……。　どこ、の？」
「南の国、オウタロクエスよ。　行ってみる？」

伏せていた体を起こしたケーナが聞くと、ルカはふるふると首を横に振った。

「ううん、お留守、ばんしてる。　……ケーナ、お母さんは、行くの？」
「まあ、確認も含めて行かなきゃならないでしょうねえ。　空振りになる可能性もあることだし……。　ただしちょっと長く家を空け

なきゃいけなそうなのよねー」

うんざりした様子で肩をすくめたケーナは、優しい表情で義娘を撫でる。ちょっとくすぐったそうに首を竦めたルカは、少し間を置いてから頭に乗せられた母親の腕を掴んだ。

「だい、じょうぶ。……わたし、がお留守番、するから。ケーナ、お母さんは……、安心し、て行って来て……」

「あら～、大きく出たわねえ」

引き取った当初とは段違いの強い意志を込めた瞳を向けてくるルカに、破顔したケーナはガバッと抱きついた。腕の中のルカはと言うと、「ちょっと失敗した」と言いたそうな苦い顔で、もう過度過ぎるケーナの抱擁癖に小さく溜息を吐いた。助けてとその背後で戸口から顔をのぞかせたロクシーヌに視線で救援を送ってみるが、楽しそうな笑みを残してまた扉の向こうに引っ込んでしまった。それからしばらくは抱擁されたまま可愛がられ、解放されたのは昼食になってからだったという。

一応「ダンジョンに潜るから数日掛かる可能性もある」とは伝えておき、夜のうちにロクシーヌとロクシリウスにルカの事を頼んだケーナは翌朝、日も昇らぬうちにフェルスケイロに跳んだ。そこからオウタロクエスの王都を目指す予定である。距離で見ればそのまま外殻通商路を村から南下する方が近いが、【転移】の目標設定に値しない場合は長引いた時の行き来が大変になる。先にオウタロクエスを設定しておけば、そちらに跳んでから移動すれば済む

話だ。

フェルスケイロの冒険者ギルドに久しぶりに顔を出し、依頼をざっと眺める。　受付嬢のアルマナの話によると、フェルスケイロとオウタロクエスを繋ぐ西側の外殻通商路が今は使えなくて、大陸中央を横断する都市部直通路が開放されているそうだ。　都市部直通路は本来、王都同士を最短距離で結ぶ通路なので、有事の際以外は緊急の伝令か王族や騎士団くらいしか使えないのだそうな。　現在の外殻通商路は、フェルスケイロの西でケーナが大穴を空けたのが原因のひとつになっているが、主だった理由は魔物を警戒してのことだ。

上層部である国の頂点に立つ王族や宰相などは【廃都】に関する情勢をどう判断していいか分からない為、『安全が確認されるまでは通行停止』との通達を出してある。　騎士団や冒険者で西側の防衛線に参加した者達は、ケーナの呆れる程の戦闘力の他に、相手モンスターの強大さも垣間見た。　集団戦に武を発揮する騎士団でも流石にあんなモノは想定外だ。　現に遠方からの【魅了魔法】でいいように扱われる寸前だったのだから。　なので現在は前の人員――アービタ率いる炎の槍傭兵団――まで招き入れて、再編成と言う名を借りた豪快なシゴキの真っ最中だ。　勿論これにはケーナにも打診される予定だったが、アービタとシャイニングセイバー曰く「文字通り撫で斬りにされそうだ」の一言で却下された。

ケーナはどうせオウタロクエスに行くのだから、なんか護衛の仕事でもないかと掲示板に張られた無数の依頼書を端から眺めていた。　冒険者ギルドの中に居た同業者から時々畏怖や羨望と言った視線が飛んでいくが、鈍いケーナはまったく気付かない。　顔見知りが親切にも忠告をくれたので、後ろを振り向いてようやく（負の感情を含んだ）ソレに気付けたくらいである。　噂の実力者と不意に視

線が合った者達は、緊張感にゴクリと喉を鳴らす。

「あ、スミマセン。　依頼書見え難いですかー？」

しかし笑顔で腰の低いケーナの謝罪にどがしゃーん！　と脱力して突っ伏した。

「あ、いいもんみっけ」

適当な依頼を見つけ、アルマナの所へ持っていく。　受付に居た職員達は、奥のスペースでテーブルや椅子を片付けている冒険者達とケーナを見比べながら苦笑していた。

ケーナの受けた依頼は、吟遊詩人をやっている夫婦のオウタロクエスまでの護衛だ。　基本個人の旅人は徒歩しかないので十日程は掛かったが、ケーナにとっては中々有意義な日程だった。　酒場や街中で歌う曲の他に神話の物語を綴った詩（うた）まで教えて貰い、ケーナからは入院していた時に好きだったアイドルの歌などを逆に教えあったりした。　中には丸ごとキーに取り込んでおき、ゲーム中のＢＧＭにしていたものもあったので、その場で再生し披露する。　二人は大層驚いていたが、見知らぬ異国音に感動していた。　【技能（スキル）】の中には【呪歌】という攻撃補助手段もあるけれど、こちらの世界に来てからは初めてそんな物は抜きで歌に触れた充実した日々が過ごせて、ケーナは満足した。

オウタロクエスに行く道のりは端的に言えば下り坂だ。　ゆるや

かに標高の下がっていく道を行けば、先に見えるは深い緑の広大な森林だ。　標高の高いところにあるヘルシュペルの周辺に広がる爽やかな緑などとは随分違う密林という類のモノで、徐々にべた付く湿度を含んだ空気。　街道は王都に近付いた辺りから樹上に上る吊り橋に取って代わり、木々の中を縫うように架けられた木橋となって広がっていく。　テレビで見た事のある、アスレチック場に似た印象を受けたケーナはドデカイ樹と同化した王城を見つける。　王都の入り口にもなっている衛兵の詰め所を通れば、ソコはもうオウタロクエスの王都だ。　そこでケーナは依頼者から報酬を受け取り、またどこかで会った時は歌を教え合う約束をして別れる。

「さあて、まずはギルド行って問題の町の情報収集かな？」

その前に【魔法技能（マジックスキル）】のコマンド画面を呼び出して【転移】先にオウタロクエスが登録されているのを確認する。　それから周囲を見渡し、樹に同化するかツリーハウスになっている住居の町並みがどれも同じように見え、目的の建物がどれなのか分からず途方にくれた。

「何処に行けばギルドとか宿屋とかあるんだろう？」

とりあえずその辺の人にでも聞いてみようかと、一歩踏み出した所で背後から大声の強襲を受けた。

「ああ――――――っ！！？」

「……ケーナ様？」

振り返ったケーナが見た者は、少し前に村で会った猫人族（ワーキャット）の兄妹だった。　街門をケーナに続く形でくぐって来たらしく、妹のクロフィアは嫌悪感あらわに此方を指差し、兄のクロフは怪訝な表情で彼女を見ていた。

「えーと、クロフさんと名前読んだら逆切れしそうな妹ちゃん」
「アナタなんかに名前で呼ばれたくはありませんわっ！！」
「呼ばなくても逆切れするのか……」

病院にもなんでも当り散らす子供が居たのでこの手合いの扱いには慣れている。　しんぼう強く付き合っていれば垣根を取っ払われるのだ。　……が、後にようやく心を開いたその子は桂菜を重度のストーカーと勘違いし、恐怖から配下へ従ったと吐露されてショックを受けたのは彼女の黒歴史である。　ちょっとヘコみそうな過去を思い出して、気力が萎えたケーナに「こんな空気の所に居たくありませんわ！」と捨て台詞を吐いたクロフィアは、兄を残してスタスタ早足で去って行った。

「すみません、ケーナ様。　妹が無礼を……」
「……いや、それは兎も角として……。　なんか人の注目度が凄いんだけど、なんで？」

ちょっと離れた衛兵から、その辺を歩いていた民衆にガン見されたケーナは身震いした。　ケーナは知らない事だが、クロフ兄妹はこの国でもトップに位置する冒険者なので、妹の気性を差し引いても民衆には英雄（ヒーロー）扱いなのだ。　その片割れから一方的に嫌われたケーナに、非難の視線が集中するのは当然のことと言えるだろう。
同情の視線も少しは混じっているが。

「ケーナ様、失礼致します」
「え？　あ、ちょっと？」

そこに思い当たったクロフは、慌ててケーナの手を引いてその場を離脱した。　人払いがお手軽な冒険者ギルドの奥の部屋を顔パスで借りて、ケーナ諸共安堵の溜息を吐く。　ちなみにガン見された理由は此処に至るまでに小声で説明してある。

「なるほどー、こりゃ今日の宿は胡散臭い目で見られそうだ」
「なんでしたら城に部屋を用意させますが？」
「それこそ不審者が何で城に？　って民衆が訝しがるでしょーに。サハラシェードに会いに来た訳じゃないしねー」

「それもそうですね」と頷いたクロフは、彼女が頑なに女王との面会を拒むくせにこの国に居る理由に興味を引かれた。　どうせならその理由を聞き出し、可能ならば同行し、彼女の行動を見聞して女王に報告するのが隠者の役割だと瞬時に判断した。

「それでしたら、少々手狭ですが私共の家に来ませんか？　部屋はありますのでいくらでも泊まっていって下さい、妹が迷惑をかけたお詫びに」
「むむ、それは魅力的な提案なんだけど、妹ちゃん怒らない？」
「元よりクロフィアの責任ですからね、言い聞かせましょう」
「そこまで言うならそのご好意に甘えさせてもらおうかな～。　……で、本音は？」
「……お見通しですか。　出来るのであればケーナ様の旅に同行させて頂ければ、と」

その提案にはちょっと戸惑うケーナ。　なにしろ相手は罠には定

評がある『悪意と殺意の館』の主（ヌシ）が設計した恐怖のダンジョンである。　ヘタを打てばダンジョンに蔓延るモンスターに、七十から八十レベルの者程度だとぷちっと潰される可能性が高い。　まあ潰された場合には、スカルゴから使用禁止と釘を刺された【蘇生魔法】の出番だろう。　ちなみになんで禁止されるのかと言うと、現リアデイルで【蘇生魔法】と言うものは遺失魔法にカテゴライズされているからだ。　同行を許可したら死んでしまいました、なんて言うとクロフィアにも迷惑が掛かりそうなので、もしもの時は息子の忠告を無視して使うつもりである。　ついでにこの国の冒険者であれば件（くだん）のダンジョンの事も知っていそうなので、交換条件に同行を了承した。　ガサゴソと取り出した地図の一角を指差して聞いてみる。

「ああ、このダンジョンですか。　知っています、説明が必要ですか？」

「今何処まで攻略が進んでいるのかなあ、って思って」

「その口ぶりだと昔からあったんですか、これ？　ええと、確か発見されたのは百年ほど前なのですが、壁面が金だったので皆が色めき立ちましてね。　初期の頃は一階から三階でかなりの死傷者が出たと聞いています」

「三階まででソレか……」

「それに見合うだけの宝は幾つか発見できていたようなのですが、仲間を亡くした冒険者が洞窟の傍で宿屋を営み始め、いつの間にかそこを中心に冒険者相手の店が集まって街が作られています。　少し規模の大きい村くらいですが」

　そんな宝なんか入れたっけ？　とケーナは考え込む。　オプスがあちこちに配置した小箱には、二人掛かりで作った小物程度のアイテムしか入れてなかった筈だ。　筋力＋１の腕輪だとか、防御ＵＰの小盾等の些細なプラス効果が付加された初心者レベルの武器防具ばかりである。　逆に現在はその手の製法が失われ、名工と呼ばれ

る一部の職人がなんとかその辺りまでの効果を生み出すことに成功している程度だと言うのをケーナは知らない。

「冒険者ギルドも町にありまして、一定技量以下の者を中に入れないようにしていたハズです。　先日に聞いた話では今まで到達した最下層は……、確か十三階だとか」

がったーん！

聞き漏らすまいと身を乗り出したケーナがひっくり返った。　無論あまりにも予想外な結果にである。

「百年もかかって半分も到達してないのっ！？」

「はんぶん？　ってことはこのダンジョンは……？」

「ああ、うん。　昔に友人と私で作ったものよ。　どうも友人が最下層に引き篭もっちゃっている可能性があってね。　それで今どうなっているのかなあ、と」

「はあ……、成程。　女王の血縁が作られるとこのようなダンジョンに……」

「いや、設計したの友人だから。　確か最下層は三十階だったと思うけど」

基本的にゲームのフィールドに置かれる中継ポイントの周囲は、最低レベルモンスターが配置されるため初心者用の狩場になっていた。　その初心者を対象にするおちょくりダンジョンを造る、とオプスから聞いた時はなんつー暇人かと当時は思ったものだ。　結局悪乗りに付き合ってしまい、調子に乗ったオプス共々通路を金にコーティングしたりと楽しんで造ってしまったのは確かだ。　そんな高レベルのプレイヤー相手に造った訳ではないので、初心者の殻を卒業すればクリアするのは簡単である。　流石に今の世になって全

体的にレベルが低下するのは想定してなかった。

「やれやれ、残り十七階は自分で踏破するしかないのかぁ」

「微力ながら、我等でよろしければ力を貸しましょう」

多少は楽ができると思っていたケーナの思惑は外れてしまい、面倒臭そうに肩を落とす。　クロフから見ればソコまで手間暇をかけて迎えに行く友人という者に興味を引かれる。　これは何があっても同行しなければと、仕事より私情が優先される形で協力を申し出た。　そのダンジョンの本性も知らずに。

４４話　ダンジョンは続くよどこまでも

ケーナはクロフ邸に二泊する事となった。
これは彼等が長期の依頼を片付けていたために、休息と準備に当てる日数である。　勿論、ケーナを連れ帰った兄は妹に物凄い剣幕で非難された。　それを眼光と一喝でぴしゃりと切って、クロフィアのせいでオウタロクエスに居辛くなったケーナの現状を説明した。
脅迫込みで妹を強引に頷くように仕向けたクロフに、ケーナは申し訳ないばかりである。

王都の一角に居を構える彼等の自宅はツリーハウスで一般人の住居と比べてやや大きく、クロフ達はここを下宿屋として他人に貸しているらしい。　その四畳半程度の一室を借りたケーナは簡易拠点アイテムを置くと、夜のうちに一度村まで戻った。　主人の気配に気付いて起きて来たロクシリウス達に過程を話すと、守護者の塔から自宅まで移した荷物で手持ちのアイテムをダンジョン用に整理する。　静かに眠るルカの寝顔を十分に堪能してからまたオウタロクエスへ跳ぶ。　その時にケーナに嫌がらせをしようと侵入して来たクロフィアを押し潰し、意識しないで報復をしてしまったという些細な出来事があった。　そのせいで二晩目も更にその報復に訪れたクロフィアは、今度は自動迎撃（ちかんたいさく）システムの雷獣によって自宅から追い出されるという羽目に陥るが、きっと瑣末事だと思うので割愛する。

オウタロクエスの王都からダンジョン村まで五日程の距離だった。
正式名称はレクテイ村と言うらしいが、どうせ行くのは一度きり

だろうと思ったケーナは名前を覚えるのをやめた。　途中でゴアウルフの群れに襲われたが、ケーナの【気圧】で一目散に逃げ出した。

　旅の間、ケーナはクロフから特に役に立たないオウタロクエス豆知識のようなものを聞いていた。　オウタロクエスの国内で、王都以外は樹上生活をしている訳ではないらしい。　むしろ樹上生活に拘った者達が集ったのが王都だという。　他にも女王は意外に話の分かる御仁で、時折城下町を視察と言う名の息抜きに放浪しているのだとか。　ついクロフィアが「そんな国の重要機密を他人にベラベラ喋るものではありませんわ！」と、激昂したり。　その反応を見る限り、ケーナが女王の身内だと言うのはクロフィアはまだ知らされていないと判明した。

「なんでそこまで猿になりたいのか。　甚だ疑問だなあ」
「樹上生活をしているだけで猿と呼称される言われはありませんわ！　地面にへばりついている者もソレ相応の呼び方をされたいんですの！　蟹とか」
「じゃあ、あとで妹ちゃんとは柿の投げ合いをするしかないようね？」
「どういう解釈ですのっ！？」

　のんびりとしたケーナの物言いになんでも噛み付くクロフィア。
　二人の後ろから楽しそうな笑みを浮かべたクロフは、後に続く形でダンジョン村の入り口をくぐった。　この村は過去の白の国辺境村のように建物の多くを宿屋で占めている。　残りは冒険者に必須の道具屋か武器屋、酒場とおまけのように花街。　それは別として門をくぐった途端に、その辺りに居た冒険者の視線が三人に向いた。
　正確に言うならばクロフ兄妹に目を付けて唖然としたという方が正しい。

「お、おい、……あの二人……」
「ああ。　クロフとクロフィアの兄妹だな……」
「なんだってアイツ等がここに？」
「冒険者ギルドがここの攻略に業を煮やしたってんじゃねえだろうな？」
「おいおい、そんな事されちゃあ俺達が小銭稼ぐどころじゃねえぞ……」

そこかしこから小声で嫌味と取れなくもない会話を囁く声が聞こえてくる。　あからさまにその冒険者連中をチラリと見て、小馬鹿にするように鼻で笑うクロフィア。　クロフは妹を諫めもせずにケーナに「こっちですよ」と声を掛け、造りの良い宿屋へと案内する。
ゆったりとくつろげそうな大部屋を借り、クロフィアは荷物を置くとつまらなそうな表情で窓際の壁に寄り掛かる。　部屋の中には鍵付きの小箱が備え付けられているだけで他にはベッドも椅子もない。　クロフが言うには大勢で雑魚寝する部屋だそうだ。

「へー」
「なんでしたらケーナ様だけでも個室を借りてきましょうか？」
「え、なんで？　修学旅行みたいに雑魚寝するんだよね。　結束が固まりそうでいいんじゃない」
「……し、シュ、ガクリョコー？」

ケーナ自身は修学旅行の経験はないが、小説やドラマで見たシチュエーションに少し楽しみにしていた。　人数が三人と少ないことや、引き合いに出した単語を不思議がるクロフには意味深にクスリと笑う。　アイテムボックスから小物の材料を数種引き出し、床に並べてから【技術技能（クラフトスキル）】を使用する。　これは着いて来たクロフ達の生存率を上げるものだ。　流石に自業自得からのミスで死亡など

という結果には介入しようとは思わないが、コチラの言い分を聞いてくれて素直に忠告を聞いてくれる分には役立つアイテムを渡す予定である。　クロフィアが先走って、無残な姿を晒す予感をひしひしと感じているが……。

　流石に懲りたのか同室で寝ていてもクロフィアがケーナの眠りを妨げるイベントも無く、問題なく夜が明けた。　宿屋を引き払い、ダンジョン前で装備や持ち物を点検する三人に、この地で小銭稼ぎをする冒険者の嫌悪やら厄介者に向ける視線などが集中していた。
　ダンジョンはもうここで朝日に照らされて見える所から金箔成金通路である。　ちなみに金箔化している通路は三階までしかない。
　これは当時の作成中に七国中で買い占め過ぎてしまい、競売での金の値段が高騰したせいである。　如何なスキルマスターと言えど、持ち得る技能と商売の素質は比例しなかったと言う事だ。

「はいこれ、髪飾りになっているから着けてね」
「髪飾りと言うには、やや無骨ですね」

　ケーナはクロフとクロフィアに昨日作ったアイテムを渡した。
髪にバレッタのように取り付ける髪飾りになっているが、本体はそこに付随している万年筆型の部分である。　実はこれ魔韻石を埋め込んで投光機のような役目を果たす装備アイテムである。　起動キーワードは『神よ、我等の前を照らしたまえ』で、なにかと仰々しい理由は普段の会話や指を鳴らす動作で消えないようにする配慮だ。
　それと幾つか作ったポーションも二人に押し付ける。　事前に命の危険性があるのをクロフに伝え、クロフィアにキチンと兄が言い聞かせたので、彼女はあっさりとポーションを受け取った。

一階から十三階までは特に何もなく進む。　通路は横に三人が並べるほど広いが、探索に慣れていると言い張ったクロフィアを先頭に、クロフが続きケーナは最後尾だ。　ここに来るまでに各階に設置してあった『招かれる板（まものがポン）』は全て叩き割られていた。　中には壁材を剥がそうとした痕跡が残る所もあり、ケーナは作成に手を貸した者として溜息を吐きっぱなしだ。　剥がして持って行ったとしても現在の技術では加工することも出来ない、せいぜいそのまま金色の石材置物になるかどうかだろう。

十四階に降り立った所で、何かを見つけたクロフィアが通路の奥深くに向けて矢を放った。　硬い物に弾かれる音がして微かに火花が散る。　光に照らされた通路にノタノタと進み出てきたのは、銀色の甲虫であった。　大きさは一メートル程もあり、三匹が固まって進んでくる。　続けざまに放ったクロフィアの矢は全て外骨格に弾かれた。　そこで初めて銀色甲虫（ブリッツビートル）は侵入者を敵と認識したのか、速度を上げて三人へ殺到する。　クロフィアと前衛を代わったクロフが先頭の虫に剣を振り下ろすが、カン高い音を立てて外骨格に止められた。

銀色甲虫（ブリッツビートル）は四十レベル程しかないものの、硬さだけなら八十レベルモンスターを凌駕し、その上経験値は少ない（マズ）という初心者には厄介な敵である。　ゲームでのプレイヤーには麻痺玉などのアイテムで動きを止めて袋叩きにしたり、一旦距離をとってアクティブエリアから退避した後に背後から強襲する等の手間を取れば倒す手段ならあるだろう。　ケーナはてっきりそういった手段を取るのだろう

と思って眺めていたが、真っ向勝負で苦戦しているのを見て溜息を吐いた。　モンスターが真っ先にケーナを狙わないのはレベルの膨大な差があるからだ。　つまりは率先してクロフ達を襲う。

魔法抵抗の低い昆虫系モンスターには闇系魔法が有効なので、ケーナは【魔法技能（マジックスキル）：影手針射（ブラインドショット）】を選択、数百発の影針が三匹の銀色甲虫（ビートル）を通過、対象の魂をズタズタに引き裂いて死滅させる。　後に残るのは外傷の無い骸のみ、それすらも少しの間を置いてノイズとなって消えて行った。

少しつまらなそうな顔をしたケーナは、呆然とモンスターが消えた辺りを眺めている二人の横を通って先に進む事にした。　二人が驚いているのは、普通のモンスターならあのような消え方をしないからだ。　やや離れた所で二人分の足音が追いついてくる。　片方は文句を垂れ流しながら。　いや、喧嘩を売っているようにも見えなくもない。

「ちょっと！　なんでアナタが先頭を行くんですの！？」

「……なんでって、そりゃあ妹ちゃんがあの程度の相手にかすり傷ひとつ与えられなかったからだよ。　大挙して押し寄せてきたら、どうやって凌ぐつもり？」

「ッ！　い、今のは様子見だったのですわ！　次はアナタの手を煩わせる前に私が魔法で殲滅してみせますわ！」

激昂しかけて何とか自分で自制するクロフィアの真っ赤に染まりかけた表情に、目を細めたケーナは「へえ？」と呟いて彼女に道を譲った。　何故か鼻息荒く満足げに頷いたクロフィアは、今度は慎重にゆっくりと進み始める。　クロフはケーナの横を通り過ぎる時にすまなさそうな顔で小さく頭を下げて、妹を補助する為に肩を並べた。

『頼リナイ同行者デスネ』
（正直に言いなさいよ）
『足手マトイデスネ』

歯に絹を着せないキーの率直な意見に苦笑したケーナは、肩をすくめて二人の背を追った。　尚、入る前に取り決めてある事に、他の冒険者から恨みを買わないように宝箱や小部屋を無視する、と言う条件があり、これも二人がケーナに着いて来る必須条件となっていた。　なので、扉は無視して通路だけをずんずん進む。　時折クロフィアは扉や小部屋を見ては溜息を零していたりする。　ちなみにこの条件だけは地上に居た冒険者の態度を見たケーナが後付したもので、途中で『面倒になった』場合、撤回するかもしれない。
とは伝えてある。　クロフィアは呆れていたが、オプス達ケーナを知る者ならば『まあ、ケーナだしなあ……』と納得したかもしれない。

――――――

十五階。

ここに至るまでにケーナには失念している事があった。　リアデイルでのゲームシステムで作られた罠は、基本的に数百円程度の課金で購入する”仕組み（ギミック）”である。　その稼動は罠で例えるなら、『そのエリアに踏み込んだ者に対して〇〇と言う仕組み（ギミック）が作動する』、と言ったものだ。　これを回避するにはオフラインモードで手に入る【常用技能（パッシブスキル）・直感】か【危険感知】で罠自体を避けるか、態と作動させてその脅威自体を避けるかである。　端的に言ってしまうと、作動させる為にいちいち隠しスイッチを押したり踏んだりする必要

が無いのだ。　……なのでこの場で一番罠発見&解除等の盗賊技能に秀でてる（と自分では思っているらしい）クロフィアが先頭に立っているのは、ただの自殺行為であったりする。

　それは投光機に照らされるやたらと真っ直ぐな迷路に、T字路が現れた時であった。　左右に分かれる道は兎も角、目の前の壁に不自然なスイッチが張り付いていた。　形状はパソコンのオンオフスイッチみたいなモノである。　最後尾のケーナにはその場所に近付くにつれ、脳内で【危険感知】による派手なベルが鳴り響いていた。

　失態だったのは、同じような危機感を前方の二人も感じているだろうと思っていた所である。　勿論そんな技能（スキル）を持たない二人はそのまま進み、何の前兆も無く天井から外れて落下した石材（三十センチ四方、厚さ二センチ）に不意打ちを喰らった、……先頭のクロフィアが。　ゴヅンッ！　と頭頂部へ良い音を立てた石材は彼女の体から滑り落ち、床へ落下してゴガラァンとダンジョンの奥までエコーが響く。　頭を覆うフルヘルメットすら着けていないクロフィアであるが、なんとか意識を保っていた。　筆舌に尽くしがたいダメージに床に突っ伏して頭を抱え、声にならない悲鳴を押し殺してプルプル震えている。　常人であるならば脳天をカチ割られていてもおかしくない。　慌ててクロフが駆け寄り介抱をする中、石材を拾ったケーナは天井を見上げる。　そこには何処から石材が外れたのか解らぬぴったりとした面を持つ天井があった。

「なるほど、このままここに居ると第二弾が襲ってきそうだね。　クロフさん、治療するならもう少し先に行ってください。　もたもたしていると次が来ますよ」

「そ、そうですか……」

　妹をお姫様抱っこで抱え上げ、左の通路へ移動するクロフ。　ちなみにスイッチは只の浮き彫りで、石材が落下したのはスイッチ二

歩手前と言う所だ。　まずは危険が無いか観察してみる、という間合いにぴったりな位置にオプスの意地の悪さが伺える。

――――――　十六階。

　この階では落とし穴にクロフとクロフィアが落っこちた。　階段を下りた場所に十メートル四方の部屋があり、その先に一本道が続いている。　部屋の半分を通過した二人の足元が突然消失、しかも下方に向けて開く扉型の落とし穴でなく、左右に開く自動ドア式の落とし穴である。　あまりの開口の早さに飛び退く暇も無く、二人共一瞬の内にケーナの視界より消えた。　中からは何かやたらと乾燥した物をパキパキーッ！　と壊したか粉砕したかのような細かい音とケーナの腰辺りまで立ち上る粉塵。　これにはケーナも、階段を下りていた頃から鳴り響く脳内危険信号に気付かない二人をオカシイなと思い始めていた。　てっきり防ぐ手立てがあるから、虎穴に突っ込んで行くのかと思っていたのである。　それはそれとして中からは盛大に咳き込む男女の苦しそうな息遣いに、ケーナは【換気魔法】を駆使して粉塵を部屋の隅へ追いやる。　もうもうと巻き起こっていた煙を払ったケーナは、二人を助けるために光源となる【付加白色光ＬＶ１：ライト】を天井へ放った。　これが粉塵の原因を浮き彫りにする。

「い、いやあああああああっ！！？」
「……うおっ！？」
「……うっわあー」

穴の中に落ちた二人が足蹴にしていたモノは、白く変色してパサパサに乾いた巨大な環形動物であった。　平たく言ってしまえばミミズである。　元々は一匹が大人二人分はありそうな長さで、ヌルヌルが待ち受けていたのだろう。　二百年も経ったソレは、最早カサカサに乾いてちょっとの衝撃で風化する構造物と化していた。
落下して踏み抜いたとは言え、未だその多くは原型を保っている。
冒険者といえども生理的嫌悪感のあるモノの粉塵を吸った事実から、甲高い悲鳴を上げたクロフィアはあっさり卒倒した。　ケーナはちょっと気色悪いと思う程度で、二人に【引き寄せ】を掛けて引っ張り上げる。　落とし穴の蓋部分は二人を引き上げると同時に瞬時に口を閉じた。　そうなるともうただの石畳の床が広がるばかりで、何処に落とし穴があったのか繋ぎ目も見つからない。　その日は部屋半分に【障壁】を張り、そろそろ夕方くらいだとキーが言うのでその場で一泊した。

――――――　十九階。

十七階は特に罠に掛かる事態にならず、普通に通過。　出たのはモンスターくらいで、クロフ達でも十分対処が可能な敵だった。
おそらく罠が仕掛けてあったのは小部屋の中だろうと、ケーナは推測した。　十八階は結構な数の小鬼型モンスターとエンカウントするも、ケーナがそのほとんどをあっさりと斬り捨てた。　この階にも天井落下の罠があり、引っかかったのはまたもやクロフィアである。　折角引っ込んだコブの上に更なるコブを作り、涙目になった彼女から強引にクロフは先頭を歩く役目を奪った。　それはそれとして、問題は階段を降りた先に広がる十九階の風景である。

べひうううううううううううううううううう～～

横殴りの強い風が吹きすさぶ目の前のソレに、クロフとクロフィア両名は目を点、口をおがーんと開けて呆然としていた。　ケーナの感想は「ここでこれかぁ」である。　一般常識の違い過ぎる差が現れる対照的な様子であった。

三人の目の前に広がる風景は、なだらかな丘陵一面に広がる真っ白い雪原と、横殴りの吹雪である。　空は薄暗く、天井らしい天井は影も形も無い。　ケーナの常識ではごくごく当たり前の光景で、ダンジョン内に外のようなフィールドがあることは特に珍しくも無い。　空や奥の方に見える森などは壁に映し出された３ＤＣＧのようなもので、広さ自体は上階と大して変わりない構造だ。　丘陵になっている様子から多少天井が高い程度だろう。　多少は肌寒いものの凍傷等を受けるくらいの氷結地獄的なフィールドに比べれば遥かにマシな方だ。

「あああああの、けけけケーナ様、こ、これは？」
「ん。　ごくごく普通の一般的なダンジョン風景、特に珍しくも無いでしょ？」

あっけらかんと何でも無いケーナの表情に「とても珍しいです」、とは言い返せずクロフは押し黙る。　二百年前はこんな風景が一般常識であるダンジョンが蔓延っていたのかと思うと、認識を改めざるを得ない。　極稀にその時代の地下建造物等が見つかることがあっても、これと同様の風景が広がっていました。　とか言う報告は聞いたことがないからである。　実際は深く潜れば同様のダンジョンなど幾らでもあるのだが、この時代の冒険者にはレベルが違い過ぎて先へ進めないのが現状であったりする。

当の経験者はもっきゅもっきゅと雪を踏み固めつつ前進して、周囲をぐるりと見渡す。　薄暗くて視界は悪く、丘陵といっても辛うじて暗い空をバックに白いでこぼこの輪郭を捉えられるくらいだ。

こういったダンジョンの場合、一番面倒なのは下に下りる階段が何処かに埋まっているところだ。

「掘り出すのかあ……。　スコップもないからなあ、魔法？」

『探スノニ専門ノ獣ガイルデショウ』

「麒麟引っ張り出すならアクティブモンスターを殲滅してからだねー。　でないと死人が出そうだし」

ぶつぶつと呟きながら雪原を進み始めるケーナ。　かろうじてクロフ達から離れ過ぎない位置で雪を掘ったり、如意棒を雪にドスドスと突き刺したりしている。　何がしたいのか良く分からない顔でクロフがソレを眺めていると、クロフィアが兄の服をちょいちょいと引く。

「なんだ？」

「お兄様はあの女とどういう関係なのです？　『様』をつけるなんて……、何かありますの？」

「ああ、そうか……。　そうだな一応は伝えておいた方が良いか、お前が取り返しのつかない無礼をする前に」

ケーナと妹の敬愛する女王の関係を暴露しようとした時、彼等の背後でドスっと妙な音がした。　最大の警戒をしながら二人が振り向くと、ソコには二人を見つめる三対の黒い眼が。　慌てて後ろに跳び、間合いを取った二人は見つめたモノの正体を見て肩を落とした。　縦に並んだ丸い胴体に桶帽子を被り、木の枝の腕にグローブが垂れ下がる手、炭をはめ込んだ丸い目と力強い眉毛に人参の鼻、誰が見てもまごうことなき雪達磨だったからだ。　それが三体もソ

コに鎮座していたことに気付いたクロフは、再び武器を構えた。
チラリと周囲に目をやるとその三体だけではなく、吹雪の向こう側にも似たような影が数体見えている。　いつの間にか直ぐ近くまで接近されているのに愕然とするが、敵と判断して排除行動に移る。
　ところが剣を振るってさっくり表面を斬っても怯んだ様子も無く、ドスドスと雪上を跳ねながら体当たりを敢行してくる雪達磨。　クロフィアからの援護射撃もサクサク刺さるだけで、これといって怯む様子も見受けられない。　切り込みを入れても横殴りで降り注ぐ雪によって、あっと言う間に再生していってしまう。　それが五体になり七体になり、十体を超えた頃になって慣れない雪上に足を滑らせたクロフは、体当たりをモロに喰らってゴロゴロ転がった。
すかさず馬乗りになった雪達磨達は、じゃれつく犬のようにクロフの上でぽよんぽよん跳ねて彼を雪に埋めていく。　クロフィアも似たように雪達磨に圧し掛かられ雪原に埋められているのを隙間から見たクロフだったが、体を起こしたくても身動きひとつ取れず無抵抗のまま雪原埋葬の目になるかと思われた直後。

【魔法技能（マジックスキル）：炎舞扇射（イア・フレア・ショット）】

　赤い射線が何条をも吹雪の中を走り、雪達磨を撃ち抜き、溶かし尽くし、薙ぎ払った。　クロフが体を起こしクロフィアの無事を確認する為に駆け寄ると、妹もなんとか雪だらけになりながら穴の中から身を起こしていた。　ケーナは扇状に撃ち込んだ射線から漏れた雪達磨達が、ぴょこぴょこ跳ねながら必死に逃げ出そうとしているのを見る。

【召喚魔法（サモンマジック）：炎精：Ｌｖ７】

「だんだん正攻法で進むのが面倒になってきたから全部溶かせばいいよね、うん」

ケーナの前面に展開された朱色の魔方陣より、炎の奔流が迸る。
飛び散った炎塊は煮えたぎったマグマのようで、雪原に落下した途端、物凄い水蒸気を上げて穴を穿つ。　続いて魔方陣から飛び出したのは、肩を怒らせ真っ赤に燃えた巨大なゴリラだ。　マグマで形成された炎神ゴリラ（プロミネンス）は体のそこかしこから炎を吹き上げている容姿を持ち。　出現した瞬間から辺りの気温は上昇、着地した場は水蒸気諸共水分が蒸発し、床の石材も融解しかけて高温の熱波を発生させる。

ゴオオルウウウウアアアアアァァ！！！

胸をドコドコ叩きながら咆哮すると、周囲に数メートル間隔で囲むように火炎リングが広がった。　モロ範囲内に居たクロフとクロフィアは巻き込まれる前にケーナが障壁で保護している。　雪達磨は既に跡形も無く、雪原は既にこの時点で只の石畳の空間となっていた。
炎神ゴリラの腕の動きと同調したリングは、腕を大きく振り上げ咆哮した波動を受け取って赤を通り越して青白いぶっといリングに変化。　思いっきり振り下ろされた両腕と同じく石畳にめり込み、融解させて構造ごとブチ抜き、あちこちに入った亀裂から床が崩壊した。　床の残骸は青白いリングに触れた所から蒸発して消えていく。　障壁はケーナが【浮遊】を掛けたので炎の残滓が今も空間内に定着する中、ゆっくり降下していく。　炎神ゴリラは『床ごとぶち抜く』役目を果たしたので、落ちていく最中に存在を薄れさせてバラバラの残滓となり消えて行った。　結果的に一撃は二階層を尽く消滅させ、三人は二十一階の通路へ降り立った。

「あらららー、ちと威力が強すぎたか」
「「……」」

召喚精霊のあまりのレベルの高さと、その一撃がもたらした結果に猫人族（ワーキャット）の二人は真っ青な表情で声も出ない。　喚び出された炎精『炎神ゴリラ（プロミネンス）』は召喚レベル七、つまり実レベルは七百七十である。

本来は雪原を溶かすために喚んだが、どうやら久しぶりに喚び出されたことに歓喜した炎精が力を込めすぎたらしい。　ケーナが『女王の叔母』だと知っているクロフが真っ先に立ち直り、妹に手を貸す。

「ホラ、掴まれ」

「え、……ええ、ありがとうお兄様……」

「んじゃ、どんどこ先に進みますかねー」

余波でダンジョン内の空気がまだ暑い所をテクテクと進み始めるケーナ。　のろのろと妹の手を引きその後に続くクロフ達。　そういえば先程の会話が途中でぶつ切りになっていたのを思い出したクロフィアは、兄に続きを促した。　返って来た話はクロフィアの世界観を足元から崩すのに充分な衝撃であった。

「……え？」

「サハラシェード女王の伯母上だよ。　ケーナ様はな」

「……え？」

クロフィアは兄に手を引かれながら今までの自分の所業を思い出し、真っ白になった。

45話　引き篭もる者に物申す

――――――　二十二階。

無言で俯くクロフィアの手を引っ張りながらクロフは進む。　目の前には先導するケーナがいた。　二十一階は時折注意を飛ばすケーナの忠告に従い、壁際を歩いたり、なんでもない道を飛び越えたりして誰も罠に掛からないで済んだ。　先頭を歩いてるケーナは後ろからの強気な発言が途絶えたことに眉をひそめていたが、クロフからサハラシェードとの関係をバラしたと聞いて納得した。

まあ、その件は後でどうにかするとして、問題はこの階である。

階段を下りた三人の前に広がるのは真っ暗な空間と、ず――――っと先の方にぼんやりと光るこの階の終点。　ためしに【ライト】の魔法を放ってみたのだが、ケーナの手を離れた瞬間に光球は消えてしまった。

「魔法無効化領域（アンチマジックエリア）か！？」

何故か投光機のマジックアイテムもこの階に降りた直後から光量が激減している。　そこから思い当たった現象の心当たりにケーナはやや焦った心境になる。　後ろ二人のサポートに取れる手段が激減するからだ。

「どうせオプスの事だし、真っ暗な空間で一本道を走破しろってんだろーけど」

如意棒をにょっきり伸ばして暗闇の中の床部分をカコカコ突いてみる。　思った通り真っ直ぐに伸びる一本道らしき部分以外は空洞になっていた。　後ろにいる二人にそこらへんを忠告し、とっとと

進んでしまおうとケーナは一歩を踏み出した。　と同時に【直感】で感じた危機感に頭を下げる。　間髪入れずに右側の暗闇から微かな射出音、ケーナの頭があった場所を銀光が通り過ぎ、左側の暗闇に消えて行った。

「って殺す気っ……」

ドッカアアアアアアンン！！！！

飛んできた銀光、――後ろから見ていたクロフ達にはやたらとぶっとい矢に見えた――　ソレが消えて行った左側の暗闇を煌々と照らす大爆発、飛来した熱波と衝撃波が三人を襲う。　いくらか削られた壁の石材の破片なんかも飛んで来た。　流石のケーナも唖然としてこの爆発を見つめ、クロフとクロフィアの顔もあまりの殺傷力に引きつった。

「ちょっ……」

「な、なんですか、これ……」

「あああああんのぉぉぉぉ、クソオプスゥゥゥ、爆裂弾（ミサイル）なんか仕込んじゃって何してんのっ！」

その名の通り爆裂弾（ミサイル）。　円筒形の矢状態を爆裂弾（ミサイル）、丸型の投擲して扱う物を爆裂玉（パイナップル）と呼称する。　技能（スキル）自体は中堅レベルくらいでないと手に入れられないクエストだが、威力が作成者のレベル十分の一ダメージな所が脅威だ。　利点は使用制限レベルが低いことで、初心者でも安易に敵を倒せるアイテムのひとつである事。　勿論、限界突破者が作る爆裂玉（パイナップル）は高額で取引されていた。

ソレが横から飛んできたのである。　作成者がアレなので、一撃でクロフ達が重症患者になりそうな威力なのは間違いない。　くるりと兄妹に振り返ったケーナは視線にビクつく妹を軽くスルー、ニッコリとイイ笑顔を浮かべてこの場の最善策を提示した。

「死ぬ気で走れっ！！」

「「は、はいいぃっ！」」

――――――　二十三階。

どっかんどっかんと爆発が追いかけてくる致死エリアを無事に潜り抜けた三人。　走る端から射出される爆裂弾（ミサイル）を、真っ暗闇の中頭を下げつつ全速力で対岸の出口に辿り着いた。　そこから下った二十三階は魔法無効化領域（アンチマジックエリア）では無かったので、階段の下の通路の一角にケーナが【障壁】を張り、一時的に休息所を作ったのである。　当人は先行偵察で進んでしまい、ここに居るのはクロフ兄妹しかいない。　二人とも壁に背を預け、完全装備の全力疾走をしたおかげで辛くなった呼吸を整えている最中である。　いい加減落ち着いてきたところで、沈んだままのクロフィアが口を開いた。

「……ど、どうしたら、良いと思いますか、お兄様……」

「ケーナ様の事か？」

「……はい」

誰が見ても萎れているクロフィアである。　真実を語ってしまっ

たのはクロフだが、実際の所ソレほど気に病む必要も無いのではないかと思っている。　クロフがケーナに持っている印象は、権力には係わりたくない所とやたらと気さくな所と強者な所だ。　普通、「他国の隠者です」なんて告白を聞いてしまえば、警戒するか遠ざけるかはするものである。　それを真っ向から嫌味しか言っていない妹も含めて「友達になれないかなあ？」とか言う変わっている人物に、クロフも未だに戸惑っている。

今なら女王が言っていた『機嫌を損ねるな』等の言い分も理解できる。　何の代償も無くあれ程の召喚獣を喚び出し、使役する事などクロフの知る限り誰も出来ないからだ。　それでも「ちょっとやりすぎた」発言から察するに、あの二階層を蒸発させたのが全力で無いと見た。　しかも召喚Ｌｖ７、即ち未だ上があると思われる。

そんな強者が明らかにケーナより劣るクロフ達の同行を許可して、しかも現状を見る限り守って貰っている。　任務とは言えあの時「付いて行きたい」と言った自分をぶん殴ってやりたい後悔でいっぱいなクロフがいた。

「二人揃って頭を下げる以外、選択肢は無いだろう」

「ど、どうしてお兄様まで頭を下げる必要があるのです？　悪いのは私だけではありませんか！」

「俺が未熟なせいでケーナ様に多大な迷惑を掛けている。　理由はそれだけだ」

「あのー？」

「お兄様がそんな未熟だなんて事がある訳が無いではありませんか！」

「ええと？」

「ならお前はケーナ様の力量と我等の力を比較してどう思う？　足手纏いだとは思わないか」

「ええ、まあ、それは……」

「ちょっとよろしいですかあっ！！」

「「なんなんだ（ですか）さっきかｒ……！？」」

背後から掛けられた涼やかな、それでいてはっきりとした声に二人は振り向いて絶句した。

「道の真ん中を塞がれると通れないんですよ」

「おいたしたら駄目ですよ？」と悪戯っぽく微笑んだエルフ族の美女が居た。　美しい透き通るような黒髪に藍い瞳、同姓から見て嫉妬してしまうほど細くグラマラスなプロポーションが、メイド服を纏ってダンジョンの真ん中に存在していた。　正直に言ってボタンを掛け間違えるくらいに違和感ありまくりな光景である。　それがケーナが張った、悪意ある物は通さない【障壁】内部に居るのだ。

彼女がクロフ達を害する存在でない事は確かで、居る事が証拠である。　なにやら紙袋を手に持ったそのエルフメイドは呆然としている二人に一礼して、「主が待っていますので」とダンジョンの奥深くへ消えて行った。　硬直したまま見送った二人は、メイドが消えた道とは違う道から戻ってきたケーナを見るなり脱力して突っ伏した。

「ちょっ、何その反応！　傷付くなあ……」

「……いえ、今ちょっとなにやら幻覚を見たような……」

「お兄様、二人揃って同じ物を見たのですよ。　……これは白昼夢ですわ！」

「そうかもしれないな！」

「……わけわからん」

ケーナは二人揃って錯乱しているのだと理解した。

――――――　二十四階。

「黒髪エルフメイド？」
「……はあ、そうですね」

テクテクと三人が固まって話しながら歩く。　ケーナの隣にクロフ、その後ろにクロフィアが続いている。　内容は先程二人が遭遇したという不審人物についてである。　しかしクロフィアだけは一切口を挟まない、おどおどと小動物のように後を着いて来るだけだ。
ケーナから見ればコッチの方が不審人物である。　それはそれとしてこの場所で黒髪エルフメイド等と聞けば、ケーナには当て嵌まる該当者が一人いた。

「サイレンだなぁ、それはやっぱり……」
「お知り合いで？」
「あ、うん。　ここに閉じ篭っていると言った友人専属のメイドだよ。　サイレンがいるって事はやっぱり奥底にいるんだなあオプス」

どうやら定期的に外へ買い物をしに出ているらしい。　メイドに三十階を往復させるくらいなら自分が動けと文句をつけたいが、その当人はそれなりに他人をうまく使いたがる人物であるから、言っ

ても無駄かとその場で諦めた。　サイレンはケーナと同じ時間並にプレイしているオプスが、ひとつしか稼動させていない召喚メイドである。「世の男性共が幻想を描いている彼女に相応しいであろう？」とキャラ設計をしただけに、その容姿はギルドの男性陣に好評であった。　コッチの世界ではどれだけ人格破綻しているのか、ちょっと考えたくない所だが。

「ところで、サイレンはまあどうでもいいんだけど」
「どうでもいいんですか。　明らかに普通じゃありませんでしたが」
「あんなんでも召喚メイドだしねー、前衛職だから私とガチンコ勝負できる猛者だよ」
「……分かりました。　どうでもいいです」

五百五十レベルとは言え前衛職なので、後衛職特化のケーナとしては接近戦に持ち込まれるといい勝負になってしまう。　そうとは知らないクロフは、ケーナ並みに実力のある人物として係わらないことにした。
足を止めたケーナはくるりと振り返ってクロフィアを睨み付けた。ビクリと身じろぎしたクロフィアは、まるで死刑を宣告されてからそれを当然のように受け入れる死刑囚みたいに観念しているようにも見えた。

「あー、ところで妹ちゃんも何か言ってよ。　キミなら普段『何だってそんな物騒な知り合いを野放しにしておくんですの！？』とか噛み付いてくるでしょう？」
「いえ、……ええと……」
「申し訳ありませんケーナ様！　これは全て自分の不心得の致すところであります！」
「なんで横からクロフさんが謝るの？　つか賄賂を受け取った政治家の秘書かっ！？」

「いいえ、お兄様は決して悪くなどありませんわ！　ケーナ様！　私の命で済むのなら喜んで差し出しますから、お兄様だけはお助けください！！」

「だから話が見えないと言うより私は生贄を弄ぶ悪の大魔王かいっ!?　っていきなり敬語!?」

「いえ、妹だけはどうか！　今生残りの命をケーナ様の為に使う所存であります！」

「今度は奴隷宣言ってどんだけ鬼畜扱いされてんのよ私!?」

「それでしたら私が売り飛ばされてもかまいませんからっ！」

「クロフィアは口を挟むな！　これは自分の問題だ」

「お兄様こそ、私の罪を被らないでくれますか！」

ぎゃいぎゃいとケーナを置いてけぼりにして口喧嘩、主に責任の擦り付け合いをする二人を見て溜息を吐く。　両手を拳に変えて、二人の頭へ振り下ろした。　クロフはいいとしてもクロフィアにとってはこのダンジョンで三回目の衝撃である。　瞳に涙を浮かべ、しゃがみ込んだまま悶絶していた。

「け、……ケーナ様……」

「誰が生贄要求して頭からバリバリ齧る人喰いドラゴンだって?」

明らかに憤慨しているケーナは腕を組んで、痛みに耐えている二人を睨みつける。　ビビッて身を竦ませるクロフともう半泣きに近いクロフィア。　どうしたものかと苦い顔で溜息しか出ないケーナ。

「まあ、確かにサハラシェードは妹（分）の娘だから私の姪っ子に当たりますが、だからと言って私に逆らう＝女王に刃向かう、とはぜんぜん違うから。　私はただの冒険者（だと思う）で国を治めている地位ある立場とはまた別物なのです。　とどのつまりは今までのように憎まれ口を叩いていても全く問題ないんだよ。　だいたい

私が姪っ子の権力を笠に着て私利私欲を通す愚かな人物に見えましたか、貴方達は？　何か欲しい物があればちゃんと自分で稼いだお金を使いますし、ウチの家族に手を出す者がいれば、追い詰めて拘束してそんな考えに至ったことを後悔するまでイジメてやります。
　妹ちゃんの発言に気に入らないトコロがあったならその場で報復をしていますよ、具体的にはカエルに変えたりゴキブリに変えたりしてね。　結構妹ちゃんの態度は気に入ってたりするんだけど、今のところ私にそんなずけずけモノを言う人はほとんど居ないし。まあ、そんなんでも怒る時は怒るけどね、殴ったり治したり吹っ飛ばしたり治したりする可能性もあるけれど。　何が言いたいかと言うと、妹ちゃんは今までと同じように私に批判的な態度を取っても、不敬罪で首をすっ飛ばしたりしないよ、ってことだね。　それはサハラシェードも承知しているだろうと思うし、私もさせないから安心するといいよ。　解ったぁ？」

　ケーナにしてみればなるべく害する事も無いと言いたかったのだが、二人とも聞いているうちに顔色が白から土気色に変わっていた。
　本人は平穏な言葉を選んだつもりが、半分は脅迫である。　更に説得に半日費やす羽目になり、ケーナは再び精神的に以前の黒歴史と匹敵する誤解を味わうことになったので以下は割愛する。

――――――　二十五階。

　更に（誤解を解くのに時間が掛かり）ダンジョン内で一泊する、これで内部に滞在するのは四日目だ。

「もういい加減床ぶち抜くかなあ？」

ケーナが調理技能で作り出した朝食の果物のパイにかぶりついていたクロフ達は、ボソッと呟いたケーナにギョッとする。　床をぶち抜くイコール、あの炎の巨獣が再びダンジョンを蹂躙するのかと思ったからだ。

「あ、あのう、け、ケーナ……様？　またあのアレを？」

「……直ってない、直ってないよ、妹ちゃん」

おずおずと切り出したクロフィアの態度にげんなりする。　散々以前の態度のままで良いと言ったのだが、一度此方の立場を明確にしてしまった為にクロフィアは改める気はないらしい。　「女王を敬愛する態度はもはや崇拝の域ですから」とは兄の談である。　逆にバラしたクロフを張っ倒そうかと思ったくらいだ。　他にも頭の痛い事に直面している最中だ。　背後に続く通路の途中に床から看板が生えていて、そこには『二十八階直通通路』と書いてあったからだ。　近付くと脳内に警報が響いているので、通路そのものが罠なのか、看板に触れたりするのがスイッチなのか判別がつかない。

辿り着く先に待っている危険性を考えるに、ケーナが先行したほうが確実なのであろう。　……が、この階に二人残していくとモンスターにおいしく食べられてしまう未来が垣間見える。

この場合最適なのは召喚獣を喚び出して罠に掛かって貰う方が効率的かという結論を出す。　しかし、喚び出す者によってはある程度召喚主から離れると制御を失って野生に戻ったりするので、選出には注意が必要だ。　高レベルモンスターが突発的中ボスになるのは願い下げである。

【召喚魔法（サモンマジック）：水精：Ｌｖ４】

床に展開した碧い魔方陣からずむーっとせり上がるのは、十本足で体をしっかり支えた直立する烏賊（スキッド）。　大きさは天井ギリギリの高さ三メートル、体躯は青水晶のように透き通ってキラキラ輝いている。　生きているモノでなければ、精巧な芸術品のようだ。　色々と特殊能力を所持している特殊戦専用召喚獣で、その行動範囲は水中だけとは限らない。　感嘆して目を奪われている同行者二人を尻目に、烏賊（スキッド）へ指示を飛ばす。

「そこの罠に突っ込んで下層に下りなさい、下りた先で待機して敵対する物がいたら排除で……」

「それでしたら今までの無礼のお詫びで私が参りますわっ！」

「「……え？」」

ケーナの指示を断ち切るかのように、いきなり立候補したクロフィアがその看板がある通路に飛び込んだ。　唐突過ぎてクロフは兎も角、召喚獣に目を向けていたのでケーナすらも反応できない。　クロフィアの手が看板に軽く触れる、「カチッ」と音がして看板の生えた通路が輪切りにされた。　まるで切られたバームクーヘンの真ん中あたりのように通路そのものが横にスライドし、新しい看板無しの通路がソコに嵌る。　リボルバーの弾装が回って新たな弾が装填されるようなものだと思えば良い。

通路ごと横にスライドされクロフィアは壁を隔てた隣の通路を見て仰天した。　背後には先の見えない下り坂、そして正面には、投光機に照らされたそれは自身の三倍は在ろうかと言う直径を持つ鋼の玉。　横にスライドされた通路自体はその場で解体されて壁に埋め込まれる。　残った看板は辛うじて転がり落ちる寸前の鋼の玉を支えている。　この先に待つ自身に訪れる解りきった未来にドッと冷や汗が出る。　一歩、二歩と後退するクロフィアの目前で、最後

の砦になっていた看板がパタリと倒れた。　重力に従い、見た目からも伺える超重量の轢殺死体製造機が「ゴロ……ゴロ……」と回転を始めたのを見たクロフィアが取る手は一つだった。　プライドも何もかもかなぐり捨てて生存本能を優先させる、これに尽きる。

「いいいぃいぃやあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！？！！」

急な下り坂を爆走していく。　自分から望んだので自業自得である。

壁の向こう側にいた二人には、左斜め下へ向ってドップラー効果で小さく消えていくクロフィアの悲痛な悲鳴と、その後を追うように何か巨大な物が転がっていく音が。　これも悲鳴を追いかけるように小さくなっていった。

「……そこまで思いつめるほどの事ぉ？」

「そんな冷静に分析している場合ではありませんケーナ様！　クロフィアが妹がっ！？」

半狂乱になって手持ちの剣を壁に打ち付けるクロフ。　流石に見捨てるのはケーナの主義に反するので、待機状態のまま傍に控えていた烏賊（スキッド）に命令を下す。

「直下掘りよ、遠慮無しで溶かし尽くしなさい！」

――――　シュルルルゥゥ

息吹ににも似た返答の鳴き声と共に十本の足が器用にとぐろを巻き、広げて組み直す。　足の碧い輝きが色はそのままに性質が変化した。　途端、烏賊（スキッド）が接地している部分から物凄い煙と、目の痛くなるような刺激臭が立ち昇る。　同時に召喚獣が徐々にその場に埋

没していく。　自身を濃硫酸溶液に変え、床を溶かして行っているのだ。　みるみるうちに直径二メートルくらいの穴が開き、その底からは更に下の二十六階の床を溶かしに掛かっている烏賊（スキッド）が見える。
　ケーナは慌てて飛び込もうとしたクロフの襟首を掴んで止めた。
「ちょっと貫通するまで待ちなさいって、あの子に触れたらクロフさんまで溶かされますよ？」
「えっ！？」

――――――　二十八階。

　クロフィアの駆け下りる坂は途中からプールにあるようなウォータースライダーのような形に変化し、直下型螺旋の管状の中を転がり落ちて行った。　鋼の玉はと言うと、通路が管状になった所で停止し、元来た道を上って行った。転がっていったクロフィアはポイッと二十八階のだだっ広い空中に放り出され、数メートル落下して水の中へ。　但し、深さが十数センチも無い浅い所だったので、しこたま体を打ちつけた。　痛みに耐えて体を起こしたクロフィアが周囲を見渡す。　無機質な作られたダンジョンとは違う、天然の鍾乳洞がそこに広がっていた。　天井は今までの三倍以上、沢山の鍾乳石がツララのように下がり、周囲の光を乱反射して第三の光源を作り出している。　ここの光源は仄かに光る水面と、空中に瞬く燐光。　実のところこのエリアも人工に作られたものだが、二百年の

間に侵食されてきていた。

光景に溜息を吐いたクロフィアの周囲の水面が、唐突にざわめく。
前触れも何もなしに十数センチの深さしかない遠浅の湖底から、がっしりとした体躯を持つ異形が幾つも起き上がった。

「……え？」

苔むした岩のような表皮を持つ、身長二メートル程の二足歩行トカゲ、俗に言うリザードマンである。　つたない槍や錆びた片手剣などを手に持った者達が、ギョロリとした瞳をクロフィアに向けた。
一難去ってまた一難、赤く長い舌をチロチロ出しながらザバザバと水を掻き分けて巣に紛れ込んだ哀れな猫人族（エモノ）に迫る。　慌てて逃走しようとするも既に周囲を十重二十重に囲まれていて、地の利は向こうにある。　数歩も動かぬうちにあっさり捕らえられてしまい、片腕を掴まれてぶら下げられた。

シャー
シェシェシェッ

獲物についての相談が交わされ、数匹の凶刃がクロフィアに迫った時。

天井をぶち抜いた碧い輝石がクロフィアを捕まえていたリザードマンの直ぐ脇に着水した。　言わずと知れた烏賊（スキッド）である。　圧し掛かられたリザードマン等は当然の事ながら、唸りを上げて四方に伸びた触腕が固まっていたリザードマン達に巻きつく。　首や腕に巻きついた触腕は異臭を上げながら表皮のみならず肉まで焼く。　奇襲に慌てたリザードマン達は、敵わない相手と見て悲鳴を上げながら逃げ惑う。　その頭上から今度は人をも呑み込む直径の火炎球が

幾つも降り注いだ。　逃げるリザードマン達の鼻先に飛来した火炎球は、進路を絶ち退路を断ち、一塊になって戸惑うモンスターを纏めて焼き払う。　浮遊の魔法で烏賊（スキッド）が開けた穴から降り立ったクロフは、へたりこんでいた妹を助け起こす。　彼女の腕を掴んでいたリザードマンは、召喚獣の濃硫酸触腕によって四肢をバラバラにされていた。　ケーナは仲間に当たらないように八方へ光系攻撃魔法や炎系攻撃魔法を放ち、集まっていたモンスターを駆逐していく。

　場所が場所だけに盛大な水柱を吹き上げながらだったので、粗方片付け終わる頃には全員が水を被ってびしょ濡れである。

　召喚獣を還した後に二十九階への階段を見つけ、やっと水より離れた所で全員に乾燥魔法を掛けて乾かす。　この魔法は『干物で有名な漁村が長雨に見舞われて干物が作れない』と言う依頼を受け『魔法を探してから干物を乾燥させる』と言う珍妙なクエストから得て、その後使う機会もなかった。　クエストに使った後はゲーム上用無しになる無用（いみなし）魔法のひとつである。　コッチの世界になってからおそらくは一番使っている魔法だろう。　今みたいに濡れた服を着たまま乾かしたり、洗濯物を雨の中室内で乾かしたり、ドライフルーツを作ったり。

「何が役に立つか人生ホント分からないよね～」

『ソウデスネ』

　苦笑して呟く。　クロフィアはクロフに引っ叩かれた後、正座させられてお説教中だ。

――――― 二十九階。

ちょっとだけ休憩を取るケーナと、延々とクロフィアを叱るクロフ。　先が気になったケーナは二人を置いて先行する。　二十八階は当分モンスターが湧く事も無いので安全だ。

やたらと長い下り階段が続き、辿り着いた所には両開きの扉があり、その脇に一人のエルフメイドが静かに立っていた。　ケーナと視線を合わせると、下腹部の前に手を添え恭しく一礼する。

「お久しぶりでございます、ケーナ様」

「やっぱりサイレンね。　元気そうじゃない」

お決まりの挨拶を交わし、とりあず一番尋ねたい要件を口にする。

「貴女の主はこの先？」

「はい、いらっしゃいます。　その前にひとつ、イベントを受けて頂ければ、と」

「ボスに会うには中ボス戦を経過しろって？　オプスが立てたんだから厄介な企画なんでしょーね……」

「はい、申し訳ありませんが、お願い致します」

困った表情を浮かべて再び一礼するサイレン。　それと同時に彼女の背後にあった両開きの扉が音も立てずにスーッと開く。　中は屋内競技場という位の広さを持つ、楕円形の闘技場になっていた。

拳大の光があちこちに浮遊して足元に何重にも分かれる影を作り出す光源を作り出している。　最初に作った時にはこの中央に女神像のような物が鎮座してあった筈だが、それは影も形も無く、入り口から見える対面上の端に黒い人影が佇んでいた。

「連れの二人は……」
「はい、此方で事情を話し、お引止め致します。　ご安心下さい」
「そう？　じゃあ、よろしく～」

後ろ手にひらひらと手を振って、扉の内側に足を踏み入れる。
背後で音も立てずに扉が閉まったが、それはもうケーナの知ったことではない。　人影が見えた時から【サーチ】で確認したところ、相手が八百レベル強の前衛職だと判明しているからだ。　三百レベル差があるといっても極後衛専門職のケーナにとって、前衛職はかなり脅威になる。　遠距離から魔法で何とかしてしまえば済む話ではなく、これはオプスがチョイスした相手なので苦戦するのは目論見の内だろう。

各種戦闘用の戦闘パック（アクティブスキル）？を起動させ、ルーンブレイドを二本抜く。　ゆっくりと間合いを測るように近付くと相手の姿形が視認できた。　事前に【鷹目】は切ってある、戦闘中にこれを発動させていると遠近距離感がおかしくなるからだ。

「ガハハハハ、ヌシが俺様の相手か？　我が名はドレクドゥヴァイ、オヌシに怨みは無いが我が主の命令は絶対。　悪いが倒させてもらう」
「……悪魔か」

相手は黒い竜人族だった。　只の竜人族でない証拠に腕は四本有り、背中からは赤い突起が無数に生えていた。　上腕二本の腕にハルバードを持ち、下腕左右に一本ずつ片刃の曲刀（シミター）を構えている。

相手が悪魔なので通常の竜人族よりは耐久力（VIT）や筋力（STR）が遥かに高い、パワーと打たれ強さはケーナの対極に位置するだろう。

「タチ悪いったらないわー」

「魔法使いといえど容赦はせぬぞ」

ニヤリと赤い牙をチラつかせて嗤ったドレクドゥヴァイは間髪入れず突っ込んできた。　大上段から叩き付けられたハルバードをギリギリでかわし、同時に突き出された左の曲刀をルーンブレイドで受け流す。　右の曲刀だけは膂力に負けて受け流すまでにはいかず、左肩を浅く掠めていった。

「いきなりかぁ」

「フフン」

痛みに眉をひそめるケーナはバックステップして距離を取る。ゆっくりと振り返ったドレクドゥヴァイはケーナの肩口の傷に満足して頷くも、怪我が白光に包まれ完治するのを見ると怪訝な表情になる。

「【常時回復（リジェード）】か。　ならばそれ以上の斬撃で倒れるが良い」

「出来れば遠慮したいな」

再び真っ向から突っ込んでくる敵に回避しようとしたケーナは、下腕左右の曲刀が外側を大きく迂回、抱擁のような軌跡を描いて迫るのを見て、回避から防御に切り替えた。　結果、重戦車の直撃を受けた軽車両のように大きく跳ね飛ばされてしまう。　対して突っ込んだ重戦車（ドレクドゥヴァイ）は胸の内側に生まれた爆発により、直線の進行から左に弾かれた。　ケーナはハルバードと左曲刀に対して受け流しを行い、右曲刀には【爆炎弾（イア・ボム）】で応対したからである。　数メートル地

面と平行に吹っ飛んだケーナは、体を器用に回転させてルーンブレイドを床に差して急制動、軽やかに着地した。　相手の方は爆発に対し少々たたらを踏んだくらいだ。　敵を見据えたケーナは続けざまに魔法行使。

【魔法技能（マジックスキル）：ｌｏａｄ：雷光よ薙ぎ払え（ライトニング）】

「ヌオオオッ！？」

ケーナから迸った数条の雷光は四方八方からドレクドゥヴァイに迫るも、半数は持っていた武器に払われて影響を及ぼしたのは二条くらいだった。　それですら大したダメージには見えない。　やれやれと溜息を付いたケーナはルーンブレイドを一本仕舞い、如意棒に切り替えると突撃準備をしていたドレクドゥヴァイに向って肉薄した。

まさか魔法使い側から突っ込んで来るとは予想してなかったドレクドゥヴァイは目を剥く。　交差して突き出された曲刀は「伸びろ」と呟かれた如意棒と火花を散らせ止められる、伸びた先端はドレクドゥヴァイの顔面を強打してその身体をよろめかせる。　その無防備になった腹部に【魔法技能（マジックスキル）：ｌｏａｄ：招雷激射（ザン・ラガ）】を叩き込んだ。

ケーナの周囲に集まった雷光が槍となって射出、無数の突撃を受けたようになったドレクドゥヴァイは後ろに滑るように離されていく。

「ゴオオオオオオオオッ！」

が、途中で石畳に根でも張ったように動かなくなり、咆哮と共に背中と瞳と口から赤い光が噴射された。　突き刺さっていた雷光槍がかき消され、理性を失った赤い眼光がケーナを睨みつける。

「うえっ【狂人化（バーサーク）】か。　やたらと不味い事に……」

肉体特化の権化、前衛悪魔が使うと洒落にならない技能【狂人化（バーサーク）】。　筋力と耐久力が倍以上まで上がり精神や敏捷度が弱体化する、肉体的ガチンコ勝負を必須とするプレイヤーの最終手段だ。　魔法には極端には弱くなり、効果が切れるまで戦闘状態が解除できないデメリットがあるものの、物理的ダメージが倍以上にまで跳ね上がるので最終ボス戦のもうちょっとで倒せる、とかいう場面には有効である。

唸りどころか音速を突破したんじゃないかという風切り音を立てたハルバードをスレスレで回避して【短縮キー（ショートカット）】に登録してある魔法を開放、【爆炎弾（イア・ボム）】をいっぺんに数十発放ったような爆発で敵諸共自身をふっ飛ばし、距離を取る。　……筈だった、その爆発さえ物ともしない狂竜人が爆炎の中から姿を現し、ハルバードと曲刀を同時に薙ぎ払う。

「ゴオオアアアアッ！！」
「ぐっ、あっ！？」

爆風と共に後ろに飛びのく用意をしていたので致命傷になる傷は避けられたが、それでも莫大な膂力で薙ぎ払われたケーナは胸の部分と腹から足にかけての斬撃で宙を舞った。　壊れた人形のように吹き飛び、赤い血飛沫が転がった軌跡を示すように床を染める。
傷付いた敵の姿に目を細めると、ドレクドヴァイはグツグツと重い声で嗤う。

「痛イダロウ、苦シイダロウ、生ヲ諦メレバ楽ニナルゾ」

「……痛い？　苦しい？　この程度で？」

ほんのりと白い光に包まれていたケーナの様子が一変したのはそこからだった。　痛みなど我関せずと言った顔でゆらりと立ち上がる。　その顔からは表情は消え、瞳には冷徹を超え冷酷とも言うべき冷たい光が宿っていた。　彼女の脳裏に一瞬浮かび上がるのは、あの飛行機事故が起きた直後の惨劇の一幕。

「本当にオプスは人を怒らせるのがうまいと言うか……」

【能動技能（アクティブスキル）：全ステータス上昇（フルブースト）】

「ヌ？」

血をポタポタ垂らしながら立つケーナを蒼い燐光が包む。　ある一定時間全能力値を倍にするが、時間切れになると一日は能力値が半分以下になる最終決戦用技能（おくのて）である。　何か悪寒を感じたのかハルバードを振りかざして大上段に突撃してくるドレクドゥヴァイを一瞥、ルーンブレイドを後ろに投げ捨てて如意棒を頭上で回転させ、待ちハメに掛かる。

【戦闘技能（ウエポンスキル）：超回転衝撃（フルスイング）】

カッキ――ン！！

「ハベッ！？」

間合いに入る一歩手前で伸びた如意棒に超高速の打撃を食らったドレクドゥヴァイは、甲高い音を立てて逆方向に打ち上げられた。
錐揉みをしながら闘技場の壁に叩き付けられ、床にボテッと落ちる。　致命傷にも届かないダメージなので薄く嗤って立ち上がる。
しかし、相手は新たな魔法を行使して纏う。

【特殊技能（エクストラスキル）：ｌｏａｄ：三重詠唱（トリプルスペル）：ｃｏｕｎｔ　ｓｔａｒｔ】

ワイヤーフレームの球体に包まれたケーナの左右にそれぞれ『３０』の文字が表示され、徐々に減っていく。　動こうとしたドレクドゥヴァイは身体が引っ張られる感覚に目を見張った。　手を伸ばしたケーナは矢継ぎ早に【魔法技能（マジックスキル）：引き寄せ】を実行。　自らの意に反して地面と平行に高速でカッ飛んだドレクドゥヴァイは【戦闘技能（エポンスキル）：超回転衝撃（フルスイング）】によって、二度目の空中へ旅立った。

放物線を描いて飛んだ弾は障害物にぶつかる寸前に別ベクトル（ひきよせ）によって強引に軌道を変えられ、ケーナの元へ。　そして三度目の【超回転衝撃（フルスイング）】によって打ち上げられ、天井へと轟音を立てて突き刺さった。

「グガ……」

後は落下する途中で【引き寄せ】られて【超回転衝撃（フルスイング）】で天井に激突、の繰り返しである。　時々高位の火炎魔法や雷撃魔法まで飛んできて、【三重詠唱（トリプルスペル）】の効果時間が過ぎる頃にはボロ雑巾のような有様に。　それでもまだ【狂人化（バーサーク）】は解けていても命に支障は無い。　ハルバードや曲刀は散々の打撃の末に折れたりして無くなってはいるが、素手でも小娘一人なら何とかなるだろうと踏んでいた。
その慢心も離れた所に悠然と立っていたケーナが次に行使した技

能に脆くも崩れ去った。

【特殊技能（エクストラスキル）：星の導き？】

【三重詠唱（トリプルスペル）】のような一日一回しか使えない限定技を再度使用可能にする技能（スキル）だ。　無論？があるので？も存在する。　愕然としたドレクドゥヴァイとは逆に、悪魔でさえも薄ら寒くなるような笑みを浮かべたケーナはワイヤーフレームの球体を再び纏うと、彼に向って腕を伸ばした。　再開される打撃の惨劇、それが彼の最後の記憶となった。

「お疲れ様でしたケーナ様、お怪我の方は大丈夫ですか？」

ふしゅるーふしゅるー、と興奮して息も荒いケーナへこともなげに声を掛けるのは、歩み寄ってきたサイレン。　その後ろにはクロフとクロフィアが居た。　しかも途中から戦闘を見ていたのでケーナに対する緊張感が半端無い。　【常時回復（リジェード）】のおかげで戦闘中には傷も塞がったが、装備しているローブや銀（スキン）の鎧にはベットリと血が付いている。

深呼吸して息を整えて、オプスへの怒りを抑えきれないままコワイ笑顔で振り返る。　サイレンの背後の二人が「ヒイッ！？」と悲鳴を上げて硬直するが、目もくれずにエルフメイドへアイコンタクト。　その凶眼に彩られた瞳は『さっさとオプスに会わせないとコロス』と物語っていた。　流石のサイレンも一歩下がって冷や汗を垂らす。　闘技場の対面に開かれた扉を指し、「あちらへお進み下

さい」と一礼した。

憤慨したままのケーナは大股でそっちへ進み、ゆるくカーブする階段を下って闘技場の真下に位置すると思われる部屋へ到達した。

ダンジョンに潜る前は久しぶりの再会の挨拶をどうしようかと考えていたが、アレだけ激怒した後だとどんな理由もすっ飛ばして、一発殴らないと気が済まない。鼻息荒く扉を蹴り開けた。【全ステータス上昇（フルブースト）】効果が未だに継続しているので、ドッバアアアアン！　とか凄い音を立てて壊し開けた。

「……んお？」

そこにいた。懐かしい容姿の魔人族が。

相変わらず黒系の装備を好んで着ているらしく、頭から足まで真っ黒だ。

「ん？　……おお、ケーナではないか。久しぶりじゃのう、息災であったか？」

「……お、……プ、……スゥゥゥ」

彼の現在の姿勢がケーナと言う起爆剤に更なる火種を突っ込んだ。

地獄の底から響くような恨みの募った声色で、歯をギリッと噛み締めたケーナ。再会の感動で言葉も出ないと勘違いしたオプスは首を傾げる。

「良く見たらお主、ボロボロではないか？　何かあったのか？」

なにやら平たい菓子を口に咥え、喰いカスを零しながらその部屋にあったベッドに寝っ転がったままのオプスを見て、ケーナは堪忍

袋の緒が切れた。

「ぬっ殺す！」

「ゑ？」

【魔法技能（マジックスキル）：ｌｏａｄ：古代神の遺産（エンシェントブレード）】

ケーナの眼前に光の棒が顕現する。　それを両手で握り締めた途端、刃に相当する部分が柄から離れた位置に形成される。　白く輝くその刃の部分は直刀の根元部分しか見えなくて、その先は壁にめり込んでいた。　そこの部分だけで幅三メートルもある。　全長だけで言うのならばこの十倍はなければおかしいであろう。　その刃をゆっくりと振りかぶる悪鬼羅刹と化したケーナ。　斬撃対象となったオプスは顔を引きつらせてベッドの上から転げ落ちた。　見えない部分の刃は壁を、豆腐に刺し込んだナイフのように易々と斬り裂いていた。　この時点で上の闘技場に待機していたサイレンとクロフ兄妹は、床を切り裂いて姿を現した光の化け物剣の先端部を見て、一層顔色が悪くなった。　サイレンが二人の手を取り「危険です！　逃げて！」と連れ出してくれなかったら、バラバラに切り裂かれていただろう。

「ちょっ、おまっ、何考えてっ！？」

「やかましいっ！　人が苦労して苦労して苦労して苦労して苦労して苦労して苦労して、コ　コ　ま　で　来　た　の　に　ィ　ア　ン　タ　と　き　た　ら　ぁ……」

問答無用とばかりに、情け容赦なく、一片の慈悲も交えず、力任せに振り下ろした。　壁と天井を斬り裂いて部屋諸共ベッドを真っ二つにし、上階の闘技場も寸断する。

必死で逃げ惑うオプスを追って、三十メートル級の剣をめちゃくちゃに振り回すケーナ（バーサーカー）。　一分と経たず二十九階と三十階は瓦礫の山と化した。

その日ダンジョン村に住む人々は、滅多に遭うことの無い地震を感じたという。

46話　日常に戻る時間と償う者

パタパタ。

「あ”～～～、いやされるわ～～」

ケーナは緩みきったポヘ顔でテーブルに突っ伏していた。
後顧の憂い無く、心配事のひとつが無事に片付いたせいもある。
【全ステータス上昇（フルブースト）】のデメリット、効果が切れた後は一日能力値半減のおかげで、テーブルの上でオプスの専属メイド『サイレン』に団扇で扇がれながら、その見た目は只のたれケーナに。

何故か魔法における最大威力を叩き出す近接攻撃で追い掛け回された探し人のオプスは、至って健康そのものである。　三十階と二十九階をガレキに変えてから直ぐ【全ステータス上昇（フルブースト）】の効果が切れた上に、常時莫大な魔力を消費する【古代神の遺産（エンシェントブレード）】のお陰でMPが空になったケーナが使い物にならなくなった。　予め二十八階に設置してあった”地上までの直通通路”を使い、クロフとクロフィア同伴でダンジョン村まで帰還した。　地上に居た初日にクロフ達を見送った冒険者達は手ぶらながら、人数が二人も増えたPT（パーティ）に随分ヘンテコリンな視線を向けていたものだ。　一人は場違いに美しいメイド、一人は近寄りたくない雰囲気を宿した（周囲威嚇）魔人族だったのだから。

今は全員宿屋に引っ込んでケーナを休ませ、クロフ達からオプスが事の経緯を聞いている所だ。　ゲーム中は魔法の威力が下がる、物理攻撃防御面が低下、などの弱体化を我慢すればよかった程度で済んでいたこの能力値半減。　しかし、ケーナが現状で体験しているのは全身弛緩に思考能力低下、つまり、だるいわ眠いわ動けない

わで色々投げ槍になっている。

「そうか、それはケーナに無理をさせたようじゃな。　ヌシ達も危険に巻き込んだようでスマンかった」

むしろお前の罠で危険がいっぱいだったとケーナは言いたい。しかし、めんどくさいので寝た。　もふ～、と突っ伏したまま眠るケーナにサイレンはそっと毛布を掛ける。　それをチラリと見て口元を緩ませるオプス。　それからクロフの後ろで申し訳なさそうな顔をしているクロフィアを見る。

「そう恐縮するな。　我はアレの友人と言うだけでオウタロクエス王家には何のかかわりもない。　話を聞く限りではお主の行動は只の自殺行為であっただけじゃ。　ケーナが居なければ今頃はリザードマン共の腹に収まっていただろう。　もう少し周りの状況を考えて行動すると良いじゃろう？　ま、我は特に責める気はないがの」

「すすす、す、すみませんっ！」

クロフィアは緊張ガチガチになって頭を下げる。　クロフも似たような状態なので妹の緊張感も良く分かっていた。　何故かこのオプスと名乗った魔人族は、周囲を威圧するような覇気を常時放っているからだ。

気配に敏感な種族である猫人族（ワーキャット）の二人は気を抜くと倒れそうになるので、さっきから体が強張りっぱなしだ。　それなのに平然としているメイドとその覇気の中寝入ったケーナ。　実の所、内心では「余計なオマケが着いて来おって……」と憤慨しているのがその覇

気（【威圧】）の正体であったりする。　クロフ達は、『実はケーナ様も常時この覇気を纏っていたが、自分達の為に抑えていてくれた』とか斜め上の勘違いをしていた。

その日はその村で一泊し、翌日には元の状態に戻ったケーナ。
三人はこのまま外殻通商路を通って北上し、辺境の村へ戻る予定でいる。　クロフ達とはココで別れる事となった。

「そういえば……、二人は私にくっ付いて来ただけで、骨折り損なんだよね？」
「まあ、違うとは言い切れませんが、無理を言ったのは此方ですし」

その会話を聞いていたオプスはフムと頷き、アイテムボックスから袋を取り出しクロフへ差し出した。

「はい？」
「色々迷惑をかけたからのう、とりあえずこれでも受け取るがよい」
「はあ、それはどうもありがとうございます……？」

狐につままれたような表情でずっしりと重い袋を受け取るクロフ。
別れてから袋の中を確認してみた所、銀貨が二万枚入っていて二人は気が遠くなったと言う。

オプスとケーナが並んで歩き、後ろにサイレンが着いて行く。
特に声が掛からなければ何も発言しないし、何か行動を起こそうともしない。　ケーナ配下の二人と比べても随分と静か過ぎるので、時々後ろにちゃんと居るのか不安になる。　それで時々振り返っていたら、「どうぞお気になさらず」とでも言うように微笑まれてしまった。

「とりあえず、ちょっと離れたらグリーンドラゴン（ミドリちゃん）でも喚んで、飛んでいくね」
「つか村にか？　そりゃあパニックになるであろう。　少しは常識を考えたらどうじゃ？」
「アンタが常識を説くな。　一回現地で喚んだ事もあるし」
「それはまた、豪気な者共だのう……」

懐に手を入れたオプスはスクロールを取り出してケーナに渡す。

「ナニコレ？」
「最後のアップデートじゃな。　変更点は耐性がパーセンテージから無効にまた変更になったのと、技能（スキル）の種族制限が解除になったのと、召喚魔法の時間制限がなくなったのと、あとは……」

受け取ったケーナは耳を傾けながらその場で使用。　スクロールは消えるものの、スカイグリーンのノイズがケーナの足元に発生し、魔法陣を形成して下から上に移動、彼女の身体を通り抜けた。　オプスが言い終わるよりも早く、トランペットに白い翼の生えたディフォルメキャラがケーナの頭上にポポンと出現。

ぱーぱぱらぱーぱぱーぱらぱらぱらぱーぱらぱー♪

ファンファーレを奏でながらケーナの頭上をきっちり九回転、出現した時と同じように煙に紛れて姿を消した。　呆気にとられるケーナとしたり顔で頷くオプス。　ついでにステータス画面を呼び出して自身を確認したケーナは、眉をひそめてオプスに聞き返した。

「……あと、レベル上限の解除（フリー）？」

「うむ、未使用経験点がかなり残っておったろう？」

「たしか十四桁か十五桁くらいあったような……」

ケーナのステータス画面にはレベル上昇により『Ｌｖ１１０９』と変化していた。　一応隣のオプスを【サーチ】してみるが、そちらは『Ｌｖ１１０３』でしかない。　ケーナよりオプスの方が半年ばっかりゲーム内に残っていた時間は多いはずだ。　ケーナが此方で目覚めてから得た経験値はほんの微々たる物でしかないので、オプスよりレベルが高いのはおかしいと思った。　その視線だけで何が言いたいか理解したオプスは肩をすくめる仕草だけで返し、召喚魔法を起動させる。

「うぬう。　召喚魔法の時間制限が無いって事は出しっぱなしで現界？　魔力消費どうなってんのよ……。　あと、魔族喚び出し可能になったんか。　しかし思いっきり煙に巻かれた気がするなあ」

「ケーナ様、主にも色々あったのですよ。　ココは後でゆっくり事情をお聞きください、ケーナ様の質問でしたら包み隠さず教えて頂けるかと」

笑顔でまあまあと宥めるサイレンに免じて、追求は村に帰って一息ついてからと、妥協したケーナだった。　オプスが喚び出したグリーンドラゴンはレベル七百七十、以前ケーナが喚び出した個体より一回り大きい。　ケーナ単独であれば【転移】して帰れるのだが、辺境の村に一度も訪れたことの無いオプスは残されてしまうので、

空から帰ることになった。　ちなみに徒歩だけならば村まで最低でも十五日程掛かる。

「それとケーナ様。　ロクシリウスとロクシーヌも一緒にお住みになっているとか。　二人ともどのような感じですか？」

「ああ、ロクスとシィ？　なんか馬が合わないから喧嘩ばっかりで、ルカが時々調停してくれなきゃ村が滅びそうな決戦でも始まりそうよ。　いてくれるお陰で私もこうして出歩けるんだけど」

「そうですか、分かりました。　利点は兎も角、仲が悪いのはさぞお困りでしょう」

苦笑するケーナの答えに少し考え込んだサイレンは、剣呑な光を帯びた瞳を空に向けて薄く嗤った。　その笑みが少しだけ怖いと思ったのはケーナだけの秘密である。　空の旅にしてほんの一日、天の半分が赤くなる時間帯にグリーンドラゴンは村へ辿り着いた。

道中村での生活ルールを二人に説明しておく。　オプスにだけは「村の人達に迷惑をかけるな」と、念の入った厳命をしておくのを忘れずに。

ドラゴンの図体が流石にちょっと大き過ぎたので、主に皮翼が。

着陸は村の外へ。　上空を横切ったモノがモノだけに、村に入った所でメイドと執事に付き添われたルカが出迎える。　その後ろにも村人が幾人か、マレールやリットやラテムの姿もある。

「ケーナ、お母さん、おかえりなさ、……い？」

「ん～、ただいまルカ。　寂しくなかった？」

初めて見るのかもしれない魔人族の姿にちょっと怯えるルカを、安心させる意味も込めて、ひしぃっ！　と抱きしめるケーナの姿に何故か笑いを堪えるオプス。　背後に控えていたサイレンが「失礼ですよ」と小さく呟いて、脇腹をギリギリと抓った。　くぐもった悲鳴を押し殺すオプスはまだいいとして、サイレンの姿を視界に入れたロクシーヌとロクシリウスの表情が驚愕で固まる。　いや、どちらかと言うと苦手な人物に予想もしない所で会い、恐怖で引きつったと言った方が正しいか。

ケーナの博愛固めを上目遣いの懇願で何とか抜け出したルカは、オプスとサイレンを不思議そうに見つめた。　事前に人を探しにいくことは聞いていたが、恐そうな容姿の魔人族と、静かで優しそうなエルフ族のペアに戸惑う。　サイレンが真っ先に腰を下ろして視線を合わせ、自己紹介をする。

「初めましてルカ様、サイレンと申します。　此方の魔人族の方が私の主、オペケッテンシュルトハイマー・クロステットボンバー様。　自分の自己紹介もひとりで出来ないようなモノグサな方ですけれど、親しみと哀れみを込めてオプス様とお呼び下さい。　ああ、ルカ様は呼び捨てで「オプス」で宜しいかと。　もしよければ語尾に「オジサン」や頭に「クズ」を付けて呼んで頂いた方がもっと哀れになると存じます」

聞いていたケーナも眉をひそませる、言葉使いは丁寧ではあるもののロクシーヌ並に性質が悪い。　なんで召喚メイドは皆オカシイのだろうかと、何処かの誰かを問い詰めたい思いに駆られる。　直接的に貶されたオプス本人は特に思うところは無いのか、飄々とした態度を崩してはいない。　首を傾げて言われた意味の半分も理解していないルカはケーナを見上げた。

「ルカは普通にオプスって呼べば良いよ、私の古い友人なんだ。二人とも今日からここに住むからね」
「うん。　……よろしく、お願い、します？」
「ああ、宜しく頼むぞ」
「宜しくお願い致します、ルカ様」

身内で紹介が済むと、今迄遠巻きに遠慮していた村人達が寄ってくる。　今の会話はキチンと聞いていたようで、特に人種差別する者は居ない。

「おかえり、ケーナ。　長い留守だったじゃないか、リット達が随分と心配してたんだよ」
「おかーさん！」
「ああ、ゴメンねリットちゃん、ラテム君も。　ちょっと人を探しに出掛けて、ちゃんと見付けたんだけど、お土産とか探してきた方がよかったのかな？」
「ううん、お話が聞ければそれでいいの。　おかえり、ケーナお姉ちゃん」

「へー、兄ちゃん魔人族かー。　俺はラテム、ドワーフ族だ！」
「うむ、威勢の良い坊主じゃのう。　我はオペケッテンシュルトハイマー・クロステットボンバーじゃ」
「お、……おぺけて？」
「ククク、長いのでオプスと呼べばよい。　よろしく頼むぞ」
「だったら先に略称を言ってくれよ……。　よろしくな、オプス兄ちゃん！」

オプスも分け隔てなく挨拶（多少は偉そうだが）を交わしていた。村長宅まで移住の挨拶をしにオプスを連れて行く。　ルカも自分

からケーナと嬉しそうに手を繋ぎ、一緒に着いて行く。　それを見てちょっと村を空け過ぎたかと反省するケーナ。　それに続こうとしたロクシリウスだったが、鋭い眼光で睨むサイレンに歩みを止められた。　家に戻ろうとしたロクシーヌの頭を引っつかみ、自分の前に二人を並べる。

「二人は此方に、先ずは私に申し開きをすることがあるでしょう、それからケーナ様の邸宅に案内なさい」

「は？　ええと、私にはルカ様の護衛と言う役目があるのですが……」

「ロクシリウス、貴方は馬鹿ですか？　ケーナ様と我が主が揃っていてルカお嬢様に何の危険があるというのです？　あの方々が一緒に居るということは即ち、世界の危機も裸足で逃げ出すのですよ。　むしろお二方が揃うと世界征服も実現可能だと言うのに」

ロクシーヌからロクシリウスへ「余計な事を言うな阿呆」とアイコンタクトが飛ぶ。　しかしもう遅い。

「道中二人の事を聞きました。　なんと嘆かわしいことか。　二人とも主を持つ者としてまるでなっていないそうですね？」

「いえ、特には……」

「ケーナ様やルカ様には何時も感謝の言葉を頂いており……」

否定する二人、くわっと【威圧】を振りまいて黙らせるサイレン。

「問題はそちらではありません。　主の前だというのに自分を律することもせず、醜い喧嘩を繰り広げていると言うではありませんか？　しかもその仲裁をルカお嬢様にさせていると聞き及びました。　仕える者として恥ずかしい醜態です、性根を鍛え直してやる必要がありますね」

ドロドロと不気味な雰囲気をかもし出しているサイレン。　恐怖に引きつり腰の引ける二人。　『夜の墓地』をバックに三角吊り上げの『光る瞳』に『耳まで裂けた』赤い半円状の口をした『鬼婆』が二人の顔面をがっしと掴み、有無を言わさずずるずると引きずって行った。　集まっていた村人はエフェクト効果に全員ドン引きである。

村長に村に住む旨を報告して快く歓迎され、途中マレールに宴会に誘われて、一度自宅に戻ったケーナとオプスとルカが見たものは、氷の座布団の上に正座させられたロクシーヌとロクシリウスだ。その胸に氷の彫像を抱き、サイレンに続いて『主に仕える為の必須十五カ条』を延々と復唱させられている異様な光景であった。　オプスは慣れた様子でスルー、ケーナは頭を抱え、ルカはしばし呆然としていたが慌てて制裁を止めに入る。　教育と言う名の愛の鞭学習が終了したのは夜もとっぷりと暮れ、マレールが中々やって来ないケーナ一家を迎えに来た頃であった。

「新しくやってきた人がケーナちゃんのいい人だというのに乾杯！」
『かんぱ～い！！』
「ってちょっとまってえええええっ！？」
「うむ、乾杯」
「オプスものほほーんと同意してるんじゃないっ！！」
「宴会でカリカリしていても致し方なかろう、少し落ち着くがよい」

「だ・れ・の・せいよっ！？」

バンバンとテーブルを叩いて抗議したケーナだったが、周囲に居た村人のびっくりした顔に気恥ずかしくなり、オプスの向かい側にすとんと腰を下ろす。　そこへ酒や料理を運んできたマレールがやって来て、テーブルの上に酒やサラダや卵料理などを並べ、ケーナの背中を笑いながらポンと叩いた。

「いつもすましてるからケーナが叫ぶことなんて無いと思っていたけど、ニイさんが居ると随分と表情が出るじゃないか。　こりゃ、イイ人は確定なのかい？」

「腐れ縁の古い友人ってだけですよ。　そんな関係になるなんてあんまり想像できません」

「ま、腐れ縁も続くとアタシとダンナのように自然と一緒になるもんさ。　ケーナも気負いしないでいるといいさ」

「マレールさあああん……」

「アッハッハ、ニイさんも歓迎だのなんだと気にしないでのんびりやっとくれ」

「うむ、気遣い感謝する、マレール殿」

「殿なんて柄じゃないよ」とオプスに告げると厨房まで戻っていく。　サイレンが何故かメイド長に納まったケーナ家お世話隊は、リットやルイネの代わりに酒場のお手伝いを申し出た。　本当は全部引き受けるつもりで交渉したのだが、厨房は外部の者立ち入り禁止と主張するガットと、「酒場にオカミさんが居なくちゃ本末転倒だろう」と主張するマレールによってウェイトレス以外の手伝いを断られた。　そのお陰でルイネは旦那さんとサシで飲んでるし、リットは子供達だけで固まってわいわいとやっている。

「まったくもう、昔っから私とオプスが揃っていると皆ニヤニヤ顔

で寄って来てからかう事ばっかり。　アンタも否定くらいはしなさいよね！」
「別にアイツ等にも悪気はなかったろうに」
「ウルサイ」
「やれやれ、堅苦しいのは抜けたようじゃな」
「アンタと話してると大体こんな調子でしょーに」

料理を摘んで口に放り込み、マレールの持ってきた果実酒で喉を潤す。　同じように杯を傾けたオプスはその味が酷くなじんだ物に気付き、目を丸くしてコップを覗き込んだ。　気にはしなかったが漂ってくるのは香ばしい麦の匂い。　ケーナの作ったビールである。

「何をびっくりしてんの。　アナタも技能（スキル）で持ってるでしょ【酒作成】、ビールとウィスキー。　今は主にこの村で酒作ってるわよ、時々冒険者もやるけど」
「オフラインクエストみたいにこの村を要塞化するつもりかの？」
「守護像は置いたけど、今の所はそれくらいね。　村の人もそれ以上は望まないみたいだし。　ああ、あと浴場も作ったわよ」
「充分好き勝手やっとるではないか……」
「引き篭もりに言われたかぁないわ。　ある程度馴染むまでは色々苦労したんだからね、最初は他にプレイヤーも見当たらなかったし、二百年も経ってるし、未だに【銀環の魔女】とか残ってるし、守護者の塔を見つけたと思ったらどっかの誰かさんは本だけ残して姿も見えないし、イベントモンスターは徘徊してるし、タルタロスはいるわお爺ちゃんは居たけど姿隠すわ、やたら権力者に縁があるわ、挙句の果てにダンジョン潜ったら馬鹿があられもない格好で出迎えるわ、ナメてんのアンタ！」
「待てケーナ、殺気がだだ漏れになっておるぞ」

ガッターン、と椅子を蹴倒して立ち上がって早口で不満を述べる

ケーナ。　ケーナ周囲に感情の暴走から自動起動した【能動技能（アクティブスキル）：死神の衣】（近接専用：施行者の周囲に即死効果五十％の煙）が見た目からも体に悪そうな黒煙に包まれる。　それを見たオプスが慌てて【特殊技能（エクストラスキル）：聖蓮の息吹】（対象の【能動技能（アクティブスキル）】を解除する）を発動させ、碧く輝く風がケーナの周囲を一蹴して黒煙を浄化した。

宴会を楽しんでいた村人達はケーナのただならぬ剣幕に一瞬動きを止めたが、碧く輝く風巻きの中から変わった様子の無い彼女が姿を見せると拍手喝采をして喜んだ。　どうやら大道芸のようなものだと勘違いされたらしい。　つい愚痴から頭に血が上ってカッとなり、本気の抗議にまで発展したケーナは拍手を聞いて正気に戻る。

隣のテーブルからルカが心配そうな視線を向けてくるのに気付いて、さらに頭を冷やす。　八つ当たりしたい訳じゃないのにと、自分で自分の頭を小突いた。

「……すまん」

「え？　……オプス？」

対面のオプスに目を向けると、彼はテーブルに額を擦り付けるくらいまで頭を下げていた。　戸惑うケーナと、一言の謝罪以外は無言で頭を下げたままのオプス。　しばし、その一角だけ静かに沈黙の時間が流れる。　少し酒場の天井に目をやって考えるケーナ。サイレンが村に戻る前に言っていたことを思い出す。

オプスもオプスなりに色々とやらなければいけない事情があったのかもしれない。　だったら事情を聞いてから怒るか怒らないか決めればいいかと、結論を出す。　そしてオプスの此方に向きっぱなしになっている角を掴み、ちょいと上に引いてから短い勢いでテーブルに叩き付けた。　ゴヅッ！　って音と「ぶっ！」と言う呻き声が同時に響き、オプスが眉をひそめて頭を上げた。　褐色のせいで目立たないが、赤くなった（ていると思われる）額を押さえ、その

目はひじょーに釣り上がっている。

「ひ、人が折角誠意を込めて謝ってやったというのに、この仕打ちはなんじゃ？」

「誠意？　人を二重三重と罠にハメて薄ら笑いを浮かべる奴が”誠意”？」

ハッ　と鼻で笑ったケーナにオプスの周囲の空間がギシリと鳴った。　呆れた表情のルカは友人二人の手を取り、カウンターの方まで移動した。　さっきまでの思いつめた顔を一転させた義母は実に生き生きとした表情で友人との言葉の応酬をしている。

「御止め致しましょうか？」

いつの間にか隣にサイレンが佇んでいたので、子供達は飛び上がって驚いた。　主と同じく悪戯が成功したような笑みを浮かべたメイド長は静かにルカの命令を待っている。　その向こうでは舌戦が加速していた。

「そっちこそ、毎回毎回力技で吹っ飛ばすことしか出来ぬ癖に、少しは頭脳戦とかやったらどうじゃ？」

「アンタみたいに長く生きてませんですよーだ。　経験が浅くて悪かったですねー、おっさんめ」

「誰が年寄りじゃと、この小娘め！」

「いまどきの小娘は小娘なりにしぶとく太く生きてますよー。　モグラになっていたロートルは引っ込んでいなさい」

「横に広がってると申したか、ハッハッハ」

「ちょっ、何処を見て横に体積が増えたと思うのよっ！　これでもシャイニングセイバーには軽すぎるって言われたんだからー！」

「くっ、もう他に男を作ったのか！？　この尻軽め！」

「男イコール恋人と結びつけるのがおかしい、アンタは私の親か！　これだから古代生まれは……」
「艶羽根を失った老カラスじゃと！？」
「誰もそんな単語を出してないわよっ！」

もはや只の子供の口喧嘩である。　結局ルカからのお願いでサイレンが出動する前にマレールのお盆が飛んだ。　二人の実態（レベル）を知っているロクシーヌとロクシリウスだけが沈静化するまで心臓バクバクの状態だったと言っておこう。

――――ヘルシュペル。

護衛の騎士を六人引き連れたケイリナは鉱山前で足を止めた。
ヘルシュペル国でも奥地にある山脈地帯は良質の鉱物が産出される地域ではあるが、幾つかの鉱山は犯罪者の奉仕地区となっている。
彼女が部下を連れて足を運んだのは、その中でも奥地に位置する重犯罪者の拘留されている鉱山だ。　入り口に辿り着く前から堅固な牢屋のような鉄格子に囲まれたそこは、何者も寄せ付けぬ冷たい拒否感に包まれていた。
先触れによって通達が来ていたので、内側から門番兼鉱夫兼その他色々な役目を持つドワーフ族の騎士が鍵を開け、ケイリナ一行を招き入れる。　辺りを見渡したケイリナは目当ての人物が居ないのを見て、脇に控えるドワーフの騎士へと問い掛けた。

「通達は来ている筈だが？」
「……それが、伝えはしたのですが、当人は今も鉱山の中です」

なにやら一心不乱にツルハシを振るっているらしい、随分前に来たときと全く変わっていない。　一度掘っている現場を見たが、心ここにあらずといった感じで逃げ道を探すため、と言うような感じを受けた。　鉱山内に詰めている別のドワーフの案内で中に入る。

幾つも枝分かれした坑道を抜け、梯子を下ると以前に奴が掘っていた部分の更に先から音と声が聞こえてきた。　手前には監視役のドワーフが眉をひそめて坑道の奥を凝視していたが、ケイリナの姿を見ると胸に手を当てて騎士礼を取った。

ガチンガチンガチン！「ええいもうレベル足んなくてこのスキル使えねえっ！」ガチンガチンガチン「いや待てよ、この魔法ならどうだろう？」キュルキュルキュル「だーっ！遅っ！？」ガチンガチン「クソッこの首輪のせいで大規模魔法使えねえ！」ゴガラララッ「うわ崩れたナニコレマジモロ過ぎるだろ」ガチンガチンガチン「ええいまたやり直しじゃねえかっ！誰のせいかっつーと俺だ！」ガチインガッチン「自分で自分に突っ込むとかハハッハ……」ガキィン「……クソッ何やってんだよ俺……」……「うわあああああああっ！！」ガギンガギンガギンガギンガギン……。

なんと言えばいいのか、悲痛な叫びの後はもうメチャクチャにツルハシを打ち付ける音だけが鳴り響く。　遠い目をして暗闇を見るドワーフ騎士は、憐憫を込めた視線をケイリナに向けた。

「連れて行きますか？」
「ああ、……連れて行く」

監視をしていた同僚と肩を並べて暗闇に踏み込むドワーフ騎士達を見ながら、ケイリナは呟いた。

「それも全てはヘルシュペルの為だ」

４７話　繋ぐ者と転換者（前書き）

※超展開です。注意！！

47話　繋ぐ者と転換者

オプスの歓迎会から一夜明けて。　歓迎会にはサイレンも含まれていた筈が、本人は「自分は主の付属品（オプション）ですから」と言い張って遠慮していた。　彼女に対しては村の若い衆が内密で祝っていたという噂もある。

朝食が終わった後ですぐ、ケーナの部屋に二人で閉じ篭る。　内密の話なのでルカも部屋には立ち入り禁止だ。　取次ぎはサイレンのみにして、オプスと一対一で向き合うケーナ。　さし当たっては何処から話してもらうかである。

「そもそも何だってダンジョンに閉じ篭っていたのよ？」
「色々と訳有りでな。　裏から世界を弄るのに我が表立って動くわけにも行かず、部下に任せておったのよ」
「部下ぁ？」

オプスの部下ってサイレン以外にいたのかなと、胡乱な表情で聞き返すケーナ。　オプスはしばし顎に手を当てて考えてから「最初から話すか」と結論付けた。

「先ずは前提条件の一つとして……。　お主は【称号者】と言うのを知っとるか？」
「【称号者】って【聖女】とか【占術師】とか【魔王】とか？」
「世界級しか出てこんのか……」

【称号】と言うのは地球側の世界に組み込まれたシステムで、それまでの人のあり方を丸ごと変えてしまった異能力だ。　【科学者】が既存の研究員や教授などとは段階の違う発明品を世に発表し、技

術史の経緯ごと歴史を塗り替えた。　例えば、ある者はたったひとりで産業革命を起こしてしまった。　【魔術師】を名乗る者が架空の世界や物語の中でしか起こり得ない超常現象を引き起こし、物理学を信奉する者達の常識を根底からひっくり返した。　【騎士】や【剣士】に武器を持たせれば歩兵が戦車のような働きをする。　【錬金術師】の手により何の変哲も無いクズ鉄の塊が、見た事も聞いた事も無い金属へ姿を変えた。　クラスによって『人外級』『国級』『世界級』と分けられ、人外級は数が多くて世界級は公式には三人しか存在しない。

　入院当時に聞いた、誰でも知っている世界級称号者三巨頭を述べたケーナに呆れるオプス。　無理も無い、【称号者】の呼称は社会に蔓延しているが、【称号者】自体は社会に出てこないからだ。

　社会に対して混乱を引き起こした者達は、自分達の在り方を危険と考えて独自のコミュニティを形成して数箇所に引き篭もった。　日本であればその保護区、秋津宮（あきつのみや）か出雲、海外であればＷＤＡ浮上島（ワールド・デグリュー・エージェンシー）に固まっている。　日本に居るのは【魔王】のみで残りの二人は海外だ。　時折こっそりと【聖女】が日本を訪れて【魔王】が苦労するのはこの場ではどうでもいいことである。

「あ、でも隣の癌病棟に【名医】がいるって看護婦さんに聞いた事があるよ。　……あと、叔父さんがリアデイルの説明時に連れて来た秘書の人もそうだったような……？」
「ほう？　その者は自分で【称号者】だと名乗ったのか？」
「え？　ちょっと待ってね。　……あれ？　聞いた覚えが無いなー。　あれ、記憶違い？」

　腕を組んで当時の事を脳内からひねり出すケーナ。　当時桂菜は名乗られた覚えも無いのにその人を【称号者】だと特定していた。

なんでそういった結論を出したのか、今にして思えば自分の思い込みが腑に落ちない。　うーうー、唸るケーナを見て吹き出したオプスは話を続ける。

「【称号者】の特殊能力にな、視界に入った【称号者】を特定すると言うものがある。　その者がどういった呼称を持つのかと言うのはまだ別じゃが」

「ああ、それで【称号者】、を……見分け……る……？」

オプスはニヤニヤ顔で言葉を途切れさせたケーナを見守る。

「ってかまさか私【称号者】っ！？」

「そうじゃ、お主は【転換者】。　存在自体は公表されておらず、【聖女】達の胸の内に秘められておったがの。　ちなみに我も同様じゃって、呼称は【繋ぐ者】と言う」

「えええええーって……あれ？　でも今は見ても分からないよね？」

「この世界では【称号】がその者の存在に重要、といった所ではないからの」

「へー」と軽く頷いたケーナ。

本当に理解しているのか不安になるオプス。

「んでオプスが篭っていた話にこの称号って関係あるの？」

「だから前提条件の一つだと言ったじゃろうが」

ここでタイミングよく扉をノックする音が聞こえた。　顔を見合わせた二人だが、ケーナが「いいよ」と呼びかけると扉が開き、サイレンが入室した。　二人の視線が集中するが何も言わずに一礼すると、持って来た物をテーブルの上に並べていく。　質素な木のコ

ップが二つ、大き目のポットから果実酒を注ぎ、手元で魔法生成した氷を投入。　そして再び一礼して部屋を出て行く。　大き目のポットはまだ中身が残っているのでそのまま置き去りになっている。
　始終無言なメイドエルフが消えた扉を見ていたケーナはオプスに目をやり、額に手を当てた。

「どういう意味じゃ？」
「メイドが有能だなあって、会話の最中喉を潤せって持ってきたんでしょー」
「お主にも二人おるじゃろう」
「空気読まない所で乱入して来そうで、怖いわ」
「……そうか」

　折角の差し入れなのでちびちびと飲みながら話合う二人、話すのはおもにオプスだけど。

「まあ、根本的にぶっちゃけて言ってしまおう。　兎に角端的な真実を」

　言い方に嫌な気配を感じて訝しげな表情に変わるケーナに、タイミングを計るオプス。

「元々ＶＲＭＭＯリアデイルとは、各務桂菜の為だけに作り出された物ぞ」

ぶ――――っ！

　丁度コップを傾けた所だったので、ぶっちゃけた発言にケーナか

らオレンジ色の霧が噴き出された。
悪戯が成功してうむうむと頷いたオプスの喉へひやりとした冷たい物が当たる。目の前には据わっている目のケーナ、その手にあるルーンブレイドの切っ先は彼の喉元へ。慌てず騒がずニッコリとサムズアップをするオプス。ケーナの額に怒りのマークが浮かび上がった。

――――同時刻、ロクシリウスと共に共同風呂の掃除に行こうとした子供達は、ケーナ宅から何か物凄い音が轟いてびっくりした、と証言した。

「さて話を続けるかの」
「次やったら両断するからね」

何事も無かったかのように話を続けるオプス。部屋の中は一騒動あったと思えないほど綺麗に片付いていた。些細な違いといえば、小さな木の丸いテーブルが金属製の物に変わっているくらいだろうか。一旦爆発しかけたケーナは深呼吸して、自分を落ち着かせる。この感情の波の幅が大きくなったのは、オプスがいる安心感から自分を出せているのだと気付いていた。何故か彼と一緒にいると自然体でいられるからだ。

「つか素性バレてたのね」
「特定したときにはもう、お主は入院しとったがの。そもそも【転換者】と言う称号はあの世界での便宜上な呼称でしかない。そ

れ自体はお主の魂レベルで定着している重要オプションのような物での、実態は死ぬと世界を越えて転生するというモノよ。　人間の短い生に固定しておくのもどうかと思ったので、ここいらでそろそろ自覚してもらう意味も込めて、此方の世界に誘導した。　……と言うのが本音じゃ。　お主の余命も少なかったんで、色々骨が折れたわ」

「ちょい待ち。　って事は何か、オプスはもしかして『私』とは長い付き合いな訳？」

「我の【繋ぐ者】は【繋がれる者】でもある。　お主の運命共同体みたいなもんじゃ。　お主が世界を超えて転生すればそれに追従するように我も後を追う、とな。　ああ、そんなしょぼくれた顔をするな。　コレ自体は我もキチンと納得しているし、後悔もない。只、ここ何周期かは短い生であちこち飛び回る事が続いたのでな、我がその世界で目覚めた時にはお主はもう鬼籍に入っていたのが多くての。　それもあって偶には二人揃って同じ世界でのんびりしようと思って、今回の企画（たくらみ）に踏み入ったわけじゃ」

言い切ったところで杯を傾けるオプス。　ケーナは自分のせいでオプスがーとか、考えた所で対面から伸びた手によって渾身のデコピンを喰らい、椅子ごと後ろにひっくり返った。　考え事を一気に吹き飛ばされ、額を押さえて起き上がったケーナは、またもやニヤニヤしているオプスを見てむくれる。

「ええい、ちょっとアンタにも迷惑かけたと思って人がしおらしくしていれば、なによ、この仕打ちは！」

「だから申し訳なく思うなと、言っておろうが」

「労わりの心を持っていちゃいけないってゆーの？」

「その配慮ごといらん。　お主はどっしりとあるがままに構えていれば良い」

「ぶーぶー」

口を尖らせて抗議を訴えるケーナに苦笑する。　蓋を開けてみれば理由は簡単だ、オプスはケーナにより良い生を過ごして貰えればいいのだから。　それは自分に与えられた義務でもないし、強迫観念でもない。
そこには自分の意思で彼女の幸せを願う、只それだけだ。

しかし、ややこしい事情が絡むのはこの先である。

初期には自律行動不能となったケーナの為に仮想空間（リアデイル）での自由を体験させるだけの仕様であったこのゲーム。　その企画書兼仕様書を持って桂菜の叔父である鏡優次（かがみゆうじ）氏にコンタクトを取った所、一時保留との答えを貰った。　期間を置いて呼び出されたオプスが目にしたものは、鏡財閥を母体とした子会社による『ＶＲＭＭＯＲＰＧリアデイル』の企画書であった。　あろう事か鏡氏は姪にコレを使用させる条件として、全国展開を念頭に置いたオンラインゲーム企画会社を発足させる事を強要してきたのである。

「って叔父さあああああああ～ん」
「最初は相当恨んだがな、後になって企画書を見た鏡氏の部下が手を回したことが判明しての。　もうその時にはβ版から正式稼動に漕ぎつけていた頃だったんで、ブレーキも利かんわ」
「人の病室来て愚痴ってないで部下の管理ぐらいしてよー……」

頭を抱えてさめざめと涙を流すケーナは面白いのでそのままにしておく。

結局企画と原案を担う人材としてその子会社に組み込まれ、働く事になる。　あちらもオプスを利用する気だったので、此方も潤沢な資金源として機能の拡大に利用させて貰っていたと言う訳だ。初期の時点で大体の構想は終わっていたので、正式稼動後のシステムやバージョンアップは殆どオプスの手を離れていた。

「もしかしてβ版の時と正式稼動の時も出現地点が一緒になったのって……、仕組んだ？」

「誰がそんないちいちめんどくさいことをするかっ！　たまたま偶然……、と言うか、称号に引っ張られた気もしないでもないのう。

今にして思えば」

「仮想空間にも影響するんだ、その称号……」

顎に手を当てて考え込むケーナは、自身の「叔父さん」発言で思い出した事があった。　コーラル達が噂で聞いたという『ゲーム中に死人が出た』の件である。　本家直系の子女が財閥子会社のゲームで死亡した、なんて事実が出回れば、色々と痛くない腹を探られる原因になりかねない。　死因の真相は総裁の鏡優次が全力で隠そうとするはずだ。　それで出回る噂とは何なのか？　そっくりそのまま言葉に代えてオプスに問う。

「それの噂は桂菜の死ではないのう。　お主の死後、少し間をおいてゲーム中に昏睡状態となり目覚めなくなった者が出たのじゃよ。

間接的に言えばお主の死が原因でもあるのじゃが」

「はあ？　噂の真相は昏睡した人で、その原因は私？　……さっぱり分からん」

桂菜の死後、その魂を【転換】させる為もあって、ＶＲＭＭＯリアデイルの基礎舞台は境界線にあった。　地球側の仮想世界と此方

側の夢想世界と言った中間地点に。　円を触れたギリギリで重ね合わせるように描いて出来る薄いレンズ状の断面図といった部分がそうだ。　元々この世界は幾多の転生中に目をつけていたオプスが候補地としていた世界で、【繋ぐ者】の能力で繋ぎ合わせていた。　プレイヤーとしてしょっちゅう中に居たのも綻びを直す目的があったからだ。

その最中にメイン目的である桂菜の【転換】が終了し、地球側のリアデイルと此方側の境界線を切り離そうとした矢先の事故である。　生憎と調査をするまでも無く原因が特定された。　余りにも強力すぎる桂菜の【転換】能力が、リアデイルの根幹プログラムに焼き付いていたからだ。　これにより、放って置くと第二第三の事故が多発すると判明したので、ゲームサービスが終了されることになる。　最初の頃はゲーム内部から昏睡者の”繋がり”を無理やり切り離していたが、目覚めた者が記憶混乱を訴えた為、現実（リアル）側の意識とプレイヤーとしての非現実を求める無意識をコピーして、此方側へ切り離す方向で混乱は収まった。　本人の死後、半年も経てば【転換】の力がだいぶ弱まった事もあって、終了間際まで遊んでいた者達の大半が半身（アバター）も残さず綺麗に切り離せた。　それでも根強く残ってしまったのが現在、此方側に存在しているプレイヤーであった者達だ。　その際に二百年も経ってやっと動き出しているのは、心と体のズレを埋めるのにそれだけの時間が掛かったと言う事だ。

プレイヤーにとって夢と現（うつつ）の境界線が曖昧になった原因には、此方側に設置した夢想世界にある。　最初この地は、何者も住んでいない未開の地であった。　夢想世界はこの地にリアデイルを夢として映し出す、ホログラムのような場（フィールド）である。　それを鋭敏なアンテナで感じ取った此方側の住民が少数、夢に釣られてここに住み着いた。　そのせいもあって夢の現実の境界線があやふやになり、仮想世界が【繋ぐ者】と【転換】の能力で此方側に定着し始めた。　最

も顕著な形で現れたのは能力を持つ二人に縁が深い、守護者の塔やギルド所有の建造物、里子システムなどである。　実は里子システムを発案したのはオプスだったりする。　その影響で先に世界を越え降り立ったＮＰＣ達（低レベルとは言え）、此方側よりオーバースペックな連中が今の世界の基礎を作ったと言っても過言ではない。

「うーん……、大体の事情は分かったような分からないような……」
「これ以上噛み砕くともっと複雑になるが、それでよいなら」
「いやいいっ！　遠慮します！」

胸の前で腕をクロスさせてバツを作るケーナ。
プッと吹き出したオプスは腕を組み、感慨深そうに昔の桂菜と今のケーナを記憶の中で見比べた。

「うっ……、なんか悪巧みをしたそうな顔してる」
「なに、最初に会った時の無気力全開なお主と今のお主を比べておっただけじゃ。　他意は無い」
「……は？　え？　私ってば現実（リアル）でオプスに会った事あったっけ？」
「一度だけな、リアデイルの説明をしてやっただろう」

「ああ、あの時、叔父さんが連れて来たスーツ着た……秘書みたい、……な、ひと……。　え？　ちょっと待って、叔父さんの秘書は亜子姉さんだからあの時一緒にいた人は違ってて【称号者】だと判ったからオプスは【繋ぐ者】だから該当する筈でリアデイルの説明してくれて時々オプスみたいな言葉遣いが混じったからちょっと引っ掛かってててぇ……。　あ、だから何か親近感が湧いたのかあの……

女の、ひと？」
「くっくっくっく、やっと気付いたか」

「ってええええええええええええええええええええええええええっ！
！！！？！」

48話　蛇と烏

「あーうー……」
「ケーナ様？」

なんかもうグッタリし過ぎていると言った方が当て嵌まるケーナが、居間のテーブルに突っ伏した。　驚き過ぎて疲れ果てたのと、唐突な話をいっぺんに聞かされて知恵熱でも出しそうな感じである。
台所から顔を出したロクシーヌが慌てて駆け寄った。　その際には傍で腕組みをして平然と突っ立っているオプスを睨みつけて。

「はいはい、ロクシーヌ。　ココの台所は貴女が先達だから手早くお昼の準備を済ませなさい。　ケーナ様のお世話は私が致します」

続いて顔を覗かせたサイレンが水の入ったコップをお盆に載せて出てくる。　少し動揺した様子のロクシーヌはサイレンに深々と頭を下げ、台所に引っ込む。　熱は無いか、気分が悪くないか等を聞きつつ、甲斐甲斐しくケーナの世話をするサイレン。　タイミングが良いのか悪いのか、ロクシリウスを伴ったルカが帰宅して、ケーナの姿を見るなり息を呑んで顔を青ざめさせた。

「ケーナ様！？」
「っ、お母さん！」

ケーナの世話をロクシリウスに譲り、サイレンが一歩離れる。
隣の椅子によじ登ったルカが義母の顔を覗きこんだ。　突っ伏したままの状態でコップを傾けて水を飲んでいたケーナの目がルカを捉える。　ややボーっとしていた瞳が不意に焦点を結び、いきなり跳ね起きるケーナ。

「る、ルカ？」
「ケーナ、お母さん、だいじょう、ぶ？」
「え、ええ……」

少々気怠さの残る頭を強引に切り替えて、ルカへ笑顔を向けるケーナ。　その笑顔から少しのぎこちなさを感じたルカは、ケーナの胸元へ抱きついた。　一番最初に会った時のようにルカの心細さを感じたケーナは包み込むようにして彼女を抱きしめた。　その様子を見て胸を撫で下ろしたロクシリウスは、親子の邪魔をしないように静かに離れる。

「大丈夫よルカ、私はどこが悪いって訳じゃ無いから。　心配かけてごめんね」
「……うん」

ケーナを掴むルカの手が少し震えているのを感じて頭を撫でる。
親子のスキンシップはロクシーヌが昼食を作り終わるまで続いた。

サイレンは一度自分の主を廊下に引っ張り出して尋ねる。

「一体ケーナ様に何を話したんですか？」
「まあ、少しは詰め込みすぎたかと思った所じゃ。　義娘の前だとあ奴も元気にならざるを得ぬようじゃのう」
「ロクシーヌ達に恨まれるのは私なんですから、少しは考えてくださいまし」
「気には留めておくことにしようぞ」

少しも悪びれた様子の無い表情の主に、眉間にシワを寄せたサイレンはそっと溜息を付いた。

昼食後、使用人達によって外へ追い出されたケーナとオプス。

「いい天気なのですから、気分転換に外でも散歩してきたらいかがです？」

……と、ロクシーヌがいい笑顔で三人を玄関の外へ押し出し、扉をバタンと閉めて内側でがしょんと鍵を掛けた。　その背後でサイレンが涼しい顔で頭を下げていたのが納得いかないところだ。　主が主なら従者も従者である、ケーナの言えた事ではないが。　ケーナのローブの端を掴んだままだったので一緒に外へ出されたルカも、普段はケーナに対して控えめなロクシーヌの態度に戸惑いを隠せない。

「シィ、……閉め、ちゃった」

「従者は主に似る、ウムウム」

「シィ設定したのオプスだったと思うんだけどー、したり顔で頷くなアンタは」

「ごふっ」

オプスの腹に肘を打ち込んだケーナ。　大げさに痛がるフリをするオプスを視界の外に追いやって、服の端を掴んでいたルカの手を取った。　ついでにしゃがんで目線を合わせる。

「ルカはどうするの？　今日は一緒にいる？」
「うん。　……今日は、リットちゃん、遊べない。　ラテムくんも……」

少し見かけた程度ではあるが、今日は幾人かの客が宿屋には泊まっているようだ。　マレールから聞いたところによると、エリーネ商隊から話を聞いてわざわざ共同浴場に入りに来る客が増えているらしい。　半分の理由はヘルシュペルに行くついでに遠回りしてみた、とか。　他にも手動井戸汲み機を見物に来る物好きもいるらしい。　そんな訳もあって、リットは宿屋の手伝いに駆り出され、ラテムは堺屋支店の小商店の店番を手伝っている。　必然的に雑用の全てをメイドと執事が取り仕切るケーナ宅では、ルカは手持ち無沙汰になってしまうのである。

どちらにしろフェルスケイロの西側外殻通商路はまだ通行止めなので、ヘルシュペルを目指す旅人や商隊は両国の王都を繋ぐ内側通商路か、辺境の村を経由する東側の外殻通商路を使うしかない。　何もない道をひたすら進むよりは補給も出来て、話題の風呂もある此方側を通る方が得策だと考える者もいるのだろう。

スルーされたので痛がるフリを止めたオプスは、ケーナに「ごめんね」と謝られた。　この場合の謝罪は殴った事に対してではないはずなので、意味が分からずに技能（スキル）で頭上にクエスチョンマークを浮かべてみる。

「どうせならオプスの冒険者登録とかも済ませておきたかったんだけど。　私もお母さんを頑張らないといけないしね」
「ルカがいても不都合は無いであろう？」
「ＰＴ組めないから、一瞬で行き来するって事も出来ないじゃん。　召喚獣で飛ぶにしろ人目もあるし……」

「そうか、ＮＰＣに対して強引にＰＴ組めるスキルも入れるべきであったな。　許せケーナ」
「いや、入れる入れないじゃなくて本人の承諾も必要でしょう。あれ？　ちょっと待って。　もしかしてこの前貰ったバージョンアップって……？」
「うむ、気付いたか。　対応しているのはお主と我だけじゃ」

がくーっと肩を落とすケーナ。　しかし娘の前なのを思い出し、慌てて背筋を伸ばす。　幸か不幸か本人は、話の内容にはついていけてなかった。　ケーナ自身も子供の頃から病弱だったので、読書か室内で遊べる電源必要のゲームくらいしか遊び方を知らない。辺りをぐるりと見渡し、青空を見て自分の塔に思い当たり、気付いた。　アイテムボックスから所有している中のひとつ、守護者の指輪を取り出してオプスに差し出す。

「うん？　なんじゃこれは？」
「オプスの塔の指輪よ。　本人がいるんだから私が持っていてもしょうがないでしょ」
「おお、そうか。　そう言えばそうだったの、預かってくれて感謝する。　お礼といっては何じゃがコレをやろう」

ケーナの手から指輪を受け取ったオプスは、ついでとばかりに違う色で同型の指輪を彼女の手に落とす。　嫌な予感に眉間にしわを寄せたケーナは、しぶしぶ聞き返してみる。

「……ちなみに聞くけど何処の指輪よ？」
「九条の亀大陸じゃ」
「ああ、くじょーの……ってえっ！　もしかしなくても亀騒動はあんたのせいかっ！？」
「うむ、少々確認したいことがあっての。　まあ、まかり間違って

も人々に害は無い策だから安心せい」
「そのセリフ何回目？　むしろとっても不安！　ココの人たちを危険に晒さないって断言できる？　むしろ断言した方が不安かもっ！？」
「時々思うんじゃが、そのいちいち反語にするのはお主なりの冗談なのか？」
「ア・ン・タが！　そう言って毎回毎回毎回惨劇を引き起こすからでしょーがっ！　国同士の戦闘中にイベントモンスターアイテム起動させたのは何処の誰よ！　国同士の戦闘どころじゃなくなって、後で紫国だけじゃなくて青国と白国も含めたプレイヤーからの苦情で公式掲示板がパンクしたでしょー！！　あの後、ウチのギルドの肩身の狭さといったら無いわよっ！！」
「まあ、落ち着け（お主も加わっていただろーに）。　ルカがびっくりしておるぞ」
「……あ」

どーどーとなだめるオプスの発言で我に返ったケーナが手を繋いでるルカを見ると、ポカンと口を開け目を丸くして見上げている顔があった。　普段ケーナ家で口やかましくモノを言うのは喧嘩中のロクシーヌ達くらいであるから、ケーナがここまでアグレッシブな言葉を発するのはルカにとっても初めてのことである。

「あ、ああの、ご、ごめんねルカ……。　びっくりした？　ルカを怒ってる訳じゃないからね？」
「う、……うん」

真っ赤になってうろたえながら言い訳をするケーナに頷いて、ギュッと腰に抱きつくルカ。　特に怖がられている様子もなさそうで安堵したケーナは、そっとルカの頭を撫でた。　ついでに記憶にあるゲームだった頃と変わりの無いやり取りに「はー」と溜息を吐く。

勿論、チェシャ猫のようなニヤニヤ笑いを貼り付けたオプスを睨みつけながらだ。

「随分と猫を被っておったようじゃな」

「お陰様で。　やっと以前の調子に戻れそうよ、まったくもう……」

以前のような状態がいいのか悪いのか判断しきれず困った顔で笑うケーナ。　その笑顔から再び会った直後の時みたいな硬さが消えてるのを認めたオプスは、ケーナの腰にしがみついていたルカの頭を撫でる。　何故撫でられたのか分からず、不思議そうな表情を向けるルカ。

「ルカはケーナが好きか？」

「うん。　ケーナ、お母さん、……だから」

「そうかそうか」と頷いたオプスは返却された指輪を指にはめた。感極まってケーナに博愛固めを受けているルカを、その抱擁からするりと引っこ抜いてやる。　「親子のスキンシップを邪魔スンナ」と呟くケーナがオプスからルカを奪い取る。　二人一緒に胸の内に抱え込むと、免疫の無いケーナが簡単に真っ赤になる。

「な、ななな、ちちちょっと、なにする……」

「じっとしているがいい【乱世を守護する者よ、堕落した世界を混沌より救済せしめ給え】」

「おぷすううぅ！？」

「？」

ゴンゴンと地中から突き出るイオニア式の柱がぐるりと周囲を取り囲み、現在見えている空が一面の星空に変わった途端、足元が消失。　三人が纏まったまま、ワイヤーの切れたエレベーターの

ようにその場から急落下。　丁度通りかかった村人には三人が靄に包まれて消失したように見えた。　ケーナが不意に姿を消すのが当たり前の光景になっている彼等からしてみれば、「ケーナちゃんもまた何処か行ったんだべなあ」という感想だけでその場を離れる。

一方、悪意と殺意の館へ強制召喚された二人。　「げ」と顔色を変えたケーナがルカを抱え【浮遊】を掛けた瞬間、周囲が村内とは全く違う光景と化した。　神殿残骸跡地に薄緑色のフィルターの掛かった光景に切り替わり、ふわりと着地した三者。　「あれ？」と首を傾げるケーナと、周囲が一変したことに目を見張るルカ。　平然としているオプスも含めた三人に、横合いからつまらなそうな声が投げかけられた。

『これはこれはマスターではありませんか。　この塔を破棄したくせにどの面下げて戻って来られましたの？　それに……、何時ぞやのしょんぼりハイエルフと人族の小娘まで何の用ですの？』

「ひっ！？」

扇子で口元を隠しながら空洞な眼窩の横顔をチラつかせる骸骨を見たルカは、小さな悲鳴を上げてケーナにしがみついた。　ケーナ自身はこの守護者を骨格標本くらいにしか思っていなかったので、ルカの一般人としての反応に優しく抱きしめ、頭を撫でながら声を掛けて落ち着かせる。

「大丈夫、大丈夫よルカ。　コレは貴女に危害を加えるものじゃな

いから、大丈夫よ。　落ち着いて、ね？」
「……ぅ」
『コレとは失礼ですわね……。　まあいいでしょう』

憮然としたように肩をすくめると元居た場所、玉座の隣まで移動してケーナと距離を取る骸骨。　元々の原因はオプスなのでジト目を向けるが、本人は意に介さず守護者の方へ近付いた。　玉座を調べて残りの魔力を確かめると、手持ちのＭＰを限界まで注ぎ込む。

「何か異常はあったか？」
『些細な出来事でしたら。　そこのしょんぼりハイエルフに魔力補給して頂きましたので、館の入り口を開放致しましたの。　粗野な連中が十人程不法侵入致しまして、入り口で全滅致しましたわ。二桁レベルにも行かない腕前でこの館を攻略できるとでも思ったのでしょうか、お馬鹿さんですわね。　オーッホッホッホッホッ！』
「今の世は全体的に昔（ゲーム）より実力が低下しておるようだからの。　三桁レベルの者が来訪するまで館の入り口は閉じておけ、放って置くと掃除役の魔族共も仕事が多すぎて、てんてこまいになるであろう」

扇子で口元を隠しながら高笑いを上げる守護者。　来訪したのが冒険者なのか盗掘目的の者だったのか今となっては分からない。
それでも主の命令に『仕方ありませんわねぇ』と従う骸骨守護者。
まあ、それはそれとして、密着したらルカごと跳べてしまった事に呆れ返るケーナ。　守護者の指輪はそれを所持する特定のプレイヤーを、キーワードで指定された座標にどんな遠くからでも【転移】させるアイテムである。　これで出来るのなら通常の【転移】も同様の様な事が出来てしまうと言う証明に他ならない。　懸案事項の一つがあっさり確認されてしまい、それが止める暇も無いオプスの行動によるものだったのがケーナを呆れさせている原因である。

「外でも散歩してきたらって、外は外でも村の外じゃないのよ……」
「あっさりと戻れる事が判明したであろう。　そう急くでない」

転移事故でも起こったらどうする気だったのか、確信犯にも程がある言い草にもう文句を言う気が無いケーナ。　普通に突っ込むだけでもルカをびっくりさせてしまうので、とりあえず自制する。
実際の所、ゲーム中の転移事故は、リアデイル世界側からの干渉に歪みが生じていたのが原因であったので、こちらに来ている現状では起こる事もないと二人が気づくのはずっと後のことであった。
何はともあれスケルトン、ゾンビといったアンデットはルカのトラウマの元である。　硬直してしがみつくルカの事も考え、「外へ……」と言い掛けたケーナの視界が瞬時に切り替わった。

出現した場所は湖の小島にある守護者の塔、その光景が良く分かる外周の水辺である。　やや間を置いてケーナの脇にオプスが空間からにじむ様に姿を現した。　辺りは緑生い茂り、水分を含んだ空気がベタつく湿地帯。　西の空を見上げれば青の端に赤みが掛かっているのが分かる。　【鷹目】も使用すれば、遠くに何とか見えるヘルシュペルの尖塔と巨大な風車。

「ほら、ルカ。　もう大丈夫よ、怖いのは居ないから」
「……ここ、どこ？」
「ヘルシュペルの近くね。　村のずっと北西の方よ」

ポンポンと軽く背を叩き、周囲を見るように促す。　硬く閉じていた目を開いた少女は光景の変わりように目を丸くし、キョロキョロとあちこちを見渡していた。　【転移】で飛んでしまえば宿の確保も楽なのだが、それだとオプスを置いていく事になってしまう。
正直に言ってしまえば先行してもいいと思う反面、目を離すと何をしでかすか分からないので、目の届く範囲に置いておきたい。

なので今日はココで野宿確定だ。

「……にしても、湿地帯じゃ野宿し辛いから少し動くしかないわ」
「先に行っても良いんじゃぞ？　遠慮なく置いていくがいい」
「却下。　オプスを放置するとこの国に悪い気がするから」
「……なにやら遠回しに悪口を言われたような気がするのう」

召喚魔法で【炎精霊：Ｌｖ１】と【雷精霊：Ｌｖ１】を喚ぶ。
出現したのは二匹とも大きさは子犬程度、炎の猿と雷の子獅子だ。
ちょろちょろと召喚主であるケーナの足元に付いて回り、そのデフォルメされたような可愛さにルカも顔をほころばせる。　マスコット的な癒しを持つ容姿ではあるが、その辺の冒険者を遥かに上回る百十レベルの精霊獣だ。　ルカを怖がらせない為にと喚び出したものの、周囲を明るく照らす炎の揺らぎと雷の閃光は一般人には手を出しにくい。　それでも警戒心は薄れたようで、移動している最中、ルカの視線は二匹に釘付けであった。

木々が乱立する林の開けた所に移動し、野営地とする。　途中、いきなり姿を消したオプスは薪になる枯れ木を持って戻ってきた。
それに炎猿がちょんと突いただけで火が付き、焚き火となる。
呪い（まじな）結界はケーナ達には使えないので、『自分達を害する物を排除』という設定の【障壁】を巨大なドーム状に展開した。　アイテムボックスから食事の材料を取り出したケーナは調理をオプスに任せ、ついでに引っ張り出した毛布をルカと自分に掛け、オプスにも渡す。

「アイテムボックスん中、野営に使える道具とか入れといてよかった。　怪我の功名って言うか殆どオプスのせいだけど！」
「なんかやたらと怒りっぽくなっておるの」
「ルカまで巻き込むからでしょう。　……ったくもう！」

オプスがその辺の木から即席加工した桶に【潤う水（オウタ・レスト）】――――容器を満タンにさせる湧き水の魔法、主にダンジョン内の湖や城の池等を作るのに用いられる――――、で水を満たした。　コップで水を汲んでも減らない桶を覗き込んだルカは、真上から覗き込んだり、ちょっと零してみたりして興味津々だ。　その足元では炎猿と雷子獅子が取っ組み合いをしてじゃれている。　ぶちぶちと文句を零しながらも楽しそうなケーナと、それを聞き流しながら余裕の表情で料理を作り上げていくオプス。　二人の仲が良いのか悪いのか、首を傾げるルカと共に夜は更けていった。

――――その夜のこと。

丸く青白い月が夜天を象徴するように、幻想的な光を大地へ降り注ぐ。　全てを照らすとは言いがたいが、ケーナ達が野営地に選んだここには枝葉にさえぎられて優しい光もほんの微かに。　普通の旅人であればここまで無防備な野営はどうかと思い、頭を抱えて理解不能と言いそうなこの状況で。　義理の親子は仲良く毛布に包まって、静かな寝息を立てていた。

燃える物が無くなった焚き火は既に炭だけと成り果てたが、中央には勢いよく炎を立ち上らせる炎猿精霊獣がキッとした瞳で周囲を睨みつけていた。　まあ、見事にその容姿が幼いせいで威嚇も威厳もなくなっているという。　ついでに雷精霊子獅子もピンと伸ばした尻尾を立てて、炎猿を中心としたケーナとオプスの周囲をゆっくり見回っている。　きちんとその身から発するスパークが彼女等の

眠りを妨げないように距離を置いて。　しかしこちらもその幼い容姿のせいで黄色いぬいぐるみのようにしか見えない。　こんなのでもクロフィアクラスの冒険者を一蹴出来る強者である、一応念の為。

　穏やかに警戒心も無く眠るケーナとルカ。　焚き火代わりの炎猿を挟んだ反対側、片膝を付いた姿勢のオプスがいた。　こちらは先程の食事時とは違い、やたらと真面目な表情で毛布に包まる二人を見ていた。　その瞳に浮かぶ感情は、保護者が子供を見守るソレに近い。

「やれやれ、ずいぶんと文句を言われてしまったの。　呆れられていないとよいのだが……。　どう思うかの、ヌシは？」

　誰かに語りかける言葉ではあるものの、オプスの前にいるのは寝入ったケーナとルカ、それと炎猿くらいなものだ。　それでもオプスが無言で見つめる先の、毛布に包まるケーナよりやや上の空間がぐにゃりと歪んだ。　空間からにじむように、産み落とされるように零れ出したものは燐光。　その場で重力に従わず停滞し、凝り固まっておぼろげな光が形を成す。　先端に膨らみのある太い紐、分かりやすく言えば蛇である。　長さ半分辺りでその身を捻らせとぐろを巻き、ちろりと舌を出す。

『主ニ対シテ些カ慣レ合イガ過ギヤシナイカ、烏（カラス）ヨ』

　声は声にあらず、ソレは頭の中に響くように。

『マア、此度ノ主ハ従者ニ敬ワレルナド望ンデナイデアロウナ。無論、ぺっとニモ』

「自分をペットと卑下するオヌシの態度こそ望んでなかろうに……。なあ蛇よ」

蛇と呼ばれた燐光の固まりは鎌首をもたげ、チロチロ出し入れしていた舌を止める。

『此度ニ会ウノハ初メテニナルカ、……確カ今ハ”オプス”デアッタナ、烏ヨ』

「ああ、蛇よ。　そちらは”キー”であったか？　病室で一度邂逅したと思ったが、部外者が居たせいで会話までには至らなかったのう」

『気ニスルマデモナイ。　コウヤッテ言葉ヲ交ワスコトスラ、マレデアルカラナ』

燐光の蛇、”キー”の視線はその真下へ、ケーナへ向けられる。

その感情は慈しみ、同様の視線はオプスからも注がれるが、敵意のある視線ではないので彼女の警戒用常用技能（パッシブスキル）には引っかからない。

『ケーナ様ニハ、我ノコトナド気ニナサラズニ過ゴシテ貰イタイモノヨ』

「アフターケアを我一人に押し付ける気か……」

『ソレヲ望ンダノハオヌ……、オプスデアロウ。　タマニハ苦労ヲ味ワウガイイ』

「世界は厳しいものよ、誰かに優しい言葉一つでも掛けて貰いたいものだ」

『ケーナ様ニオ願イシテミレバドウダ？』

「……魔法が飛んできそうだな」

道端に落ちていたお菓子を食べたナニカを見るような目付きで、「しょうがないなあ」と呟きつつ高位雷撃魔法を準備するケーナの姿が思い浮かび、ぶるりと身震いするオプス。　クックック、と含み笑いを零すキー。　ちなみに出現している蛇（キー）に精霊獣たちが敵意

を向けることは無い。　燐光の蛇の姿はここに在ってここに無い、彼を視認出来るのはオプスとケーナの二人だけだからだ。　ぶっちゃけここに第三者が居た場合、中空に向けて和気藹々と話しかけているオプスが可哀相な人扱いされるだけだ。

彼等の会談はそれからまもなくして終わりを告げた。　単にオプスが眠くなっただけである。

『デハナ、オプス』

「ああ、いつかまた」

残滓すら残さずにその場から掻き消える燐光。　完全に何も見えなくなったのを確認した後、懐からずるりと人間大で幅広の大剣を引き抜き、地面に深く斜めにぶっ刺した。　それを背もたれにして毛布を掛け、寝る態勢に入る。　営業疲れで車内で寝るサラリーマンのおっさんのように。

49話　北の国での再会

「隠すとためにならんぞ！」
「隠してはおりません。　不在ですと申し上げただけです」

フェルスケイロ辺境の村、ケーナ家の門前では声を荒げ押し通ろうとする騎士と、やんわりと断るメイドとの押し問答によって、トゲトゲしい雰囲気を放っていた、主に騎士が。

早朝いきなり村に荒々しく騎馬で乗り付けたヘルシュペル所属の騎士三名が、「ケーナとか言う冒険者はどこだあっ！」とか怒声を上げ、対応に出た留守を預かるロクシーヌへ詰め寄ったのである。
相手の高圧的な態度にカチンと来たロクシーヌとロクシリウスが爆発するより早くサイレンが割って入り、先程のような問答が繰り返されることとなった。

正直、似たようなことしか言わない騎士達の発言と、権力を前面に押し出して無理矢理な態度に温厚なサイレンも腹の中に黒いモノが溜まっていた。　逆に最初こそ爆発しかけたロクシーヌとロクシリウスではあったが、今はサイレンがブチ切れそうな雰囲気を纏っているのに戦々恐々としている。　そもそも、相手が高圧的で礼儀を知らない態度であっても、ここは彼女達の敬愛する主の居城である。　ちっぽけな家だとかは関係ない。　留守を預かる身としては例え相手がどんな人物であろうとも、自分達の対応をひとつ間違えただけで、「メイドの主人は大したことは無い」とか思われるのは避けたいところだ。

悶々と鬱屈した心を封印し、涼しい顔で馬鹿騎士三名の相手をしていたサイレンに朗報が舞い込んだ。　主であるオペケッテンシュ

ルトハイマー・クロステットボンバーがらのフレンド通信である。
そこには短く『守護者の塔まで移動、ルカとケーナも同行、ヘルシュペルに寄ってから戻る』と記されていた。出来ればそういった連絡は村を離れた直後に貰いたいところではある。不満を言うのは当人が戻った後に幾らでも文句をぶつける事にして、現在の状況を簡潔に伝えた。直ぐに『ケーナには伝言した、そちらの対処は任せる』と返って来る。ようやく眼前の敵を排除できる喜びに打ち震えたサイレンは、そんな心を鉄壁の表情で隠し、最後通告をウザ騎士三名に突きつけた。

「今、我々の主から連絡がありました。ケーナ様はヘルシュペルに居るそうですので、騎士団には直接向うそうです」
「嘘も大概にして貰おう。我々と相対しているキミがどうやって連絡を取ったというのだね？　猿芝居もいい加減にしたまえ！」

今ここにケーナとオプスのメイドをよく知るものが居たならば、胸の前で十字くらいは切ったかもしれない。プログラムという枷を外されたメイド二名と執事一名は、自由意志（フリーダム）な思考を得て、主の命令を都合の良い様に書き換えることが出来る。オプスの伝えた『～そちらは任せる』は三人（特にサイレン）にとって、『ケーナ様を呼び出す目的は済んだのだから使者は不要』という意味に変換された。相手が国に仕える騎士だからとか、権力持ちだとかは紙切れ同然の無意味。空気の読めない騎士達は目の前の格下だと思っていたメイド&執事から、怒涛のように向けられた威圧感に硬直した。サイレン達召喚メイドは召喚者の持つ技能（スキル）数から、十分の一を使用することが出来る。大半を日常生活で使える技能で埋めているものの、戦闘に使える技能も少なくは無い。四百もあればなおさらだ。

「とりあえず殺さないように。人死にはややこしい事になりかね

ませんからね」
「分かっております」
「生かさず殺さずですネ。　承知しております」

三人足してもメイド一人のレベルに到底届かない。　数秒も経たず、騎士達の哀れな悲鳴が三重奏で村に響き渡った。

――――　ヘルシュペル。

野営で一夜を明かしたケーナ達は【飛行】を使い、ヘルシュペルに辿り着いた。　陽の昇る前から動き出し、炎と雷の精霊獣を送還。
途中、速度と高度に目を回したルカの為に休憩を取り、オプスがサイレンに連絡を取ったところ、『ヘルシュペルの騎士団からケーナに召喚状が出ている』との通達を受けた。　勿論、その通達を届けに来た騎士達が辿った末路などを知る由もない。　長引きそうだと思ったので、もしもの為に宿屋を取ろうと以前エーリネ商隊と泊まった店に赴いた所、知人と鉢合わせになった。

「よお、嬢ちゃん。　こんな所で会うなんて奇遇だな」
「これはこれはケーナ殿ではありませんか。　ルカ嬢も一緒ですか」
「アービタさん、エーリネさん、ご無沙汰しています」

ケーナと手を繋いだままペコリと頭を下げるルカに、エーリネ達もにっこり微笑む。　アービタの訝しげな目はケーナの後ろに居たオプスへ向けられた。　只者じゃない長身の魔人族に、警戒レベルを最大に上げる”炎の槍傭兵団団長”。　両者の中央に火花が散った。　オプスはケーナからこの世界での交流を一通り聞いていたので、敵愾心を向けた訳ではない。　睨まれたから睨み返しただけだ。

ついでに幾つかの【能動技能（アクティブスキル）】まで立ち上げて、挨拶代わりに強烈なプレッシャーをピンポイントに相手へ叩きつけて返す。　オプスにとっては悪ふざけの程度だが、逆に尋常じゃない悪寒の固まりを食らったアービタは、だらだらと滝のような冷や汗を流して硬直してしまった。　事態に気づいたケーナが割って入り、悪戯を止めさせた時にはげっそりと憔悴したアービタが出来上がっていた。

「もうオプス。　アービタさんとエーリネさんは私の恩人なんだからね。　失礼なことしないでよ！　あ、こっちはオプス、私の古い腐れ縁の友人です。　ちょっと変人ですけど、悪い人じゃないので宜しくしてあげてください」

「あ、ああ……。　いや、俺もぶしつけだった、……すまん」

「え、ええ……。　エーリネと申します、……何か入用でしたら何時でも。　……あのぅ、大丈夫ですか？」

「……オプス、おにーちゃん、平気？」

「……っ！　……っ！？」

【ＳＴＲ強化】スキルに【威力増強】魔法を使用した肘打ちを無防備な鳩尾に食らったオプスは、床に転がって悶絶していた。　団員や商隊の皆が思わず優しく心配してしまう惨劇であった。

「うー、げほっ。　苦しかったぞ……」

「受諾してしかるべき天罰よね」

突っ込み自体がハイレベルな攻撃に、それに耐えうる強靭な肉体、それらを披露した二人に戦慄を覚える団員達。　エーリネ商隊はそろそろ商談を終えて旅立とうとしているとのことで、時間が合えば一緒に村まで行動を共にさせてもらう約束を取り付けた。　騎士団に呼ばれていることをエーリネに話し、ルカをオプスや商隊の者に頼むと、溜め息を付きながら出かけていった。

「なんで意気消沈しながら出掛けていったんだ、嬢ちゃんは？」
「まあ、以前は権力系の依頼にしかめっ面しながら受けていたからのう」

首を捻るアービタの疑問に答えたのは、長く行動を共にしていたオプスであった。　ゲーム中のリアデイルで王や貴族のＮＰＣから受けるクエストと言うものは、後味が悪いシナリオが多い為である。　奴隷にまで落とされた人達の内情を知ったり、権力者に逆らった人々の末路を貴族側の視点で見たりとプレイヤーの心にしこりが残るものばかりだ。　なんでそんなものがクエストになっているかというと、スキルマスター数の増加を減らすためでもある。　クエストが四千を超えているため、中にはゲームと言う遊びの中で現実に帰らざるを得ないような内容のものまであった。　オプスもクエストの幾つかは関わっているが全部ではない。　配信停止に至るまでにはクエスト数は四千二百に膨れ上がっていた。

ケーナを見送ったオプスも行動を起こす。　ギルドへ赴きギルドカードを発行してもらう為に。　身分証明にもなるが、あんまりギルドを利用するつもりの無いオプスにとっては学生証みたいな認識である。　自分がここに居て、知人がそれを分かっていてくれるだけで充分だ。　まあ、何が起こるか判らないので保険みたいなもの

である、理由の半分は取って来ないとケーナに怒られるからであるが……。

兎も角、宿屋を出ようとしたオプスは服の端を引っ張られ、たたらを踏んだ。振り返ると捨てられた子犬のような瞳でルカがオプスを見上げていた。

「どこか……、いっちゃう、の？」

「冒険者ギルドへ行って来るだけであるが、直ぐ戻って来る予定ぞ？」

「いっしょ、に行く……」

ケーナから預かった手前無碍にする訳にもいかないが、頼られたエーリネにも悪い気がするオプス。しかし、エーリネやアービタ達はニッコリ笑って送り出してくれた。

「慣れ親しんだ奴が一緒の方が、お嬢ちゃんも安心だろ？」

「確かにケーナ殿に頼まれましたが、この程度で気を悪くするほど心が狭くはありませんよ」

「うむ、気を使わせて済まんの」

オプスを知っている者が居ればひっくり返って驚くくらいの素直さでもってエーリネ達に一礼する。そしてルカをひょいと肩に乗せ、宿を出た。目指すは白い塔が三本固まる冒険者ギルド。アービタの話によれば宿屋を出てから大通りに移動し、西に進めば判ると言う。それはその通り簡単に見つかった。人混みをすいすい抜けてギルドに入ると、そこには誰も居ないガラーンとした空間が広がっていた。カウンターの向こうに居る受付事務員はまだしも、冒険者なんぞ影も形も見当たらない。居ようが居まいが関係ないか、とひとりごちたオプスはルカを肩から下ろし、カウンターへ足を向けた。

「ようこそ、ヘルシュペル冒険者ギルドへ。　本日は何の御用でしょうか？」
「冒険者登録がしたいのだが、心得やその辺りなどは炎の槍傭兵団より伺っている」
「あら、アービタさんの紹介なんですね。　ではコチラの用紙に必要事項をお書きください」

と、紙と鉛筆を渡された。　炎の槍傭兵団の名前を出したのは、そのほうが話が早いとアービタから許可を貰ったからだ。「信用するのが早すぎる」とは突き返したものの、「嬢ちゃんの知り合いに間違いはねぇだろ」と笑顔で返されてしまった。　その通りに余計な説明無しで話が早く済むのは喜ばしい事ではある。　その場で名前（長い本名）と種族、職種は無難に戦士にしておいて受付に渡す。　受付嬢は一通り確認した後に番号札をオプスに渡して「また明日、本証を受け取りに来てくださいね」と事務的な笑顔で話を終わりにした。

ちなみにルカはオプスが受付へ向ってから、壁に貼り付けてある依頼書をぽやんと眺めていた。　時折首を傾げて読めない文字をすっ飛ばしながら、意味を持たない文章を目で追っていると頭にポンと手が置かれた。　少女の背後から近付いたオプスは軽々と持ち上げたルカを肩へ座らせ、依頼書が無数に張ってある壁と目線を合わせるようにしてやる。

「何か面白そうなモノがあったかのう？」
「……あれ、読めない、字……」

オプスの質問とは全く違う答えに怒るでもなく「勉強熱心だの」と呟いて、ルカが読めない字の質問をするたびに答えてやる。　閑古鳥が鳴くギルド内には、しばらく二人のQ&A会話だけが響いて

いたが、唐突に開いた入り口扉の音に中断された。
「ああ、もう、えらい目にあったわ……。　ん……？」
「……あ」

疲れきった表情で扉を開いたのは革鎧を装備した活発な印象を受ける女性だった。　軽装鎧に腰にはサーベルと鞭、そしてなによりルカの知っている人物だ。　同時にギルド内でポツンといるオプス達が目立たない訳が無い。　ちょっと驚いた顔の女性、クオルケは嬉しそうな顔で片手を上げ、ルカへ挨拶をした。

「ルカじゃないかい、久しぶりだねえ。　元気していたかい？」
「……う、ん」
「今日はケーナと一緒じゃないんだねぇ？　そっちの魔人族の兄サンは、ルカの何だい？」
「……オプス、お兄さん。　ケーナ、お母さん、の、……お友だち」

たどたどしいルカの発言に、一瞬目つきを細めたクオルケの態度が柔らかなものになる。　オプスの方はケーナからコチラの世界で出会ったプレイヤーについて、一通りは聞いていたので彼女の対応に非難を浴びせるつもりは無い。　怪しい者扱いをされる可能性くらいは念頭に置いていたくらいだ。　遠回りな説明をしなくて済んだのはルカのお陰だろう。　その辺りはまだいいとして、問題は入って来たばかりの冒険者ギルドから、クオルケが外へ呼びかけたもう一人の存在だった。

「ちょっとエクシズ、何もたもたしているのさ！　ルカに会えるよ」
「お前が先にずんずん行ったんだろう。　身体的不条理を棚に上げやがって！」

後から姿を見せた灰色の竜人族（ドラゴイド）は不満を相棒に叩きつけ、久しぶりに会う小さな友人に挨拶をしようとして、一緒に居たオプスを視認してしまった。　ソレを視界に捉えた瞬間、ずるがしゃっっ！！

……と床に這いつくばった。　”ずる”が両足を滑らせて、”がしゃっ”が重甲鎧が床に叩き付けられた音である。　まるで今まで生きていた人が突然、糸の切れた操り人形でした。　と、言われても不思議じゃないくらいに自然な動きだったので、クオルケとルカは仰天した。　その場にしゃがんで息の有無を確認するクオルケと、オプスの側頭部の角へしがみつき、あまりに急な出来事に硬直するルカ。　余裕を持った歩みでエクシズへ近付き、頭を見下ろす位置から声を掛けるオプス。

「生きておるかの、樽々（タルタル）ス？」

「……、て、テメェ、お、おぷす……。　なんで居るんだ、よ？」

「おヌシらと事情は変わらないと思うがの？　可能性くらいは頭に入れておくべきであったの、樽々（タルタル）ス」

「……だからタルタルスじゃなくてタルタロスだと何時も言ってんだろうがよ！　つか、今はそっちでもねえっ！？」

床に弛緩状態で倒れていたエクシズは、後半の発言で俊敏に起き上がりオプスに噛み付こうとした。　当然、先に読んでいたオプスは、エクシズが起き上がった時にはもう間合いの外だ。　それに一緒に居るルカを危険に晒すような事はあってはならない。　間違いなく激昂したケーナになぶられるからだ、……エクシズが。

「そうか、エクシズか。　ならそれでよかろう。　ところで、いつまでこちらに敵意を向けておるつもりじゃ？　あまりルカに心配を掛けさせるのは関心せんのう」

腕を組み肩をすくめたオプスは、ガルルルと威嚇するエクシズの反応をどう捉えていいか分からず、オプスの肩で硬直するルカを見て、ジロリとエクシズを睨み付けた。　なんとなく余裕綽々な態度にそら恐ろしいものを感じ、別の警戒態勢を取ったエクシズ。　二人の関係が朧気ながら判明したクオルケは相棒（エクシズ）の肩を叩いた。

「落ち着きなよエクシズ。　こっちの兄サンは同類なんだろ？　だったらいがみ合うことなんざ無意味ってもんさね」
「成る程、そちらの御仁は話が分かるお人だのう」
「ああ、何かあったら宜しく頼むよ、クオルケさ」

差し出された手をとってがっちりと握手を交わすオプス。　意地悪くニヤリと笑い自己紹介をする。

「我はオペケッテンシュルトハイマー・クロステットボンバー。略してオプスで良い。　スキルマスターＮＯ．１３でもある、ケーナの同類よ」
「気をつけろ、そいつはケーナ同様悪名高い『リアデイルの孔明』だからな」
「うわわわわっ！？」

エクシズに付け足された悪意ある称号に、びっくりしたクオルケは握手した手を振り払い、慌ててオプスより距離を取った。

「ククククッ、嫌われたモノじゃのう」
「ケンカ、しないで……」

オプスのコート襟を引っ張って仲裁大臣の貫禄を見せるルカ。
そのオドオドした様子にフッと笑い、肩の上の少女を優しく撫でる。

「共通の友人がこう言ってるんじゃ、子供の前で見苦しい真似はせんほうが良いじゃろう？　ここはゲームの世界とは違うんでの、我も好き勝手する気は無い」

対するエクシズは、「はあ？　好き勝手の固まりが何言ってんの？」と唖然。　クオルケも話に聞いていた悪名高いゲーム時代要注意人物の反応に、首を捻った。　二人の疑問は意に介さず、ギルドの閑散とした待合所に目を向け、何かを知っていそうな二人に質問を投げ掛けた。

「ここのギルドはいつもこんなにガランとしておるのか？」

「あ？　ああ、そのことか……」

「話は簡単さ、三十日後くらいにフェルスケイロで闘技祭があるからね。　腕に覚えのある冒険者は皆そっちに向って移動しているのさ。　残っているのは街中での依頼をのみを受け付ける者ばっかりさね」

「闘技祭……、成程。　だが、お主等は行かんのか？」

「おいおいマジで言ってんのかよ？　俺等は今の冒険者に比べるとレベル遥かに上だぜ、弱い者虐めはゴメンこうむる。　お前も出ようなんて思うな、ケーナにも同じこと言っておけよ。　千百レベルなんて只の八百長試合にしかならねえからな」

「そうか、情報感謝する。　機会があればまた会おう」

聞くことだけ聞ければそれでよしとばかりに踵を返し、軽い挨拶のみでギルドを出て行こうとするオプス。　肩の上から振り返ったルカは二人にバイバイと手を振った。　クオルケはにこやかに手を振り返したが、ふと気付いたエクシズは数歩オプスを追い、その背中に声を掛けた。

「おい、ケーナはどうした？」

「一緒に来ているが、今は野暮用で席を外している。　あ奴も目を離した隙に色々と騒動に巻き込まれる性質らしいの」
「ひ孫までいりゃあ、そうだろうな……。　手が必要なら何時でも呼んでくれ、同じギルド時代の借りがまだ有効だぞ、一回位はな」
「なら、近々手を貸してもらおうか。　覚悟しておくが良い」

軽口を叩いて別れたものの、後になってちょっと後悔するエクシズ。

「やべえ、なんかアイツの企みとか超恐怖……」
「安請け合いするからだろう」

50話　解放に至る意識

一方、城に呼ばれたケーナはと言うと。

「申し訳ありません御婆様。　私の都合でわざわざお呼びだてしてしまい……」

城門前で門番をしている騎士達が見ている所で、ケイリナに頭を下げられていた。　あちこちから飛んでくる「アイツ何モンだ？」とか言う視線。　只でさえケイリナの地位は騎士団指南役とかいって、ここに務める者ならば知らない者はいない高い立場である。そんな彼女がペコペコと頭を下げる人物、回りから疑問の目を向けられても仕方ない。　むしろ、この場に居るのがいたたまれない。　それすらもケイリナの計略なんじゃないか？　とか勘繰ってしまうケーナだった。

「謝るのが用事なら帰るけど？」

「あああ、す、すみません。　少しお頼みしたいことがありまして、こちらへ来て頂けますか？」

ケイリナに先導される形で城門の中へ。　一旦城には入るものの、中を突っ切って裏側に抜ける。

「こっちは？」

「ああ、はい。　練兵場がありまして、御婆様には少々頼み辛いのですが……」

「説得力がないなあ。　強引にでも通す気でしょ、ここまで入れちゃうってのは」

「そんな、……御婆様に謀（はかりごと）を仕掛けたい訳ではありません」

なにやら祖母の機嫌を損ねたような感情を受け、弁解に必死なケイリナ。　ケーナがなんでこんなにやさぐれているかと言うと、過去に一通り受けた王等や貴族、上層部関連のクエストのせいでもある。　他にもオプスが目を離した隙に何かをしでかさないかと心配になり、早く戻りたい気持ちの方が大半を占めている。　全くもって信用がないのはオプスの専売特許だが。

練兵場と説明された先からなにやら騒がしい声が聞こえて来た。
近付くにつれ、聞き取れるのは罵声のようなものと、少なめの声援である。　全体が見渡せる所まで辿り着いてみれば、模擬戦を行っている者が二人。　それを輪になった騎士達が囲み、「やれー！」だの「負けろー！」だのとはやし立てている光景だった。　片方は以前、ケーナが盗賊（ブレイヤー）の頭を討伐する寸前に割り込んだ、髭面の壮年の男性騎士。　片方は、模擬刀で斬り伏せられ、傷だらけの泥だらけになって倒れている、いつぞやの魔人族。　ケーナがここへ呼ばれた理由を把握出来ず、ケイリナに視線だけで説明を要求する。

「彼を騎士団に勧誘致しました」
「また暴走するかもしれないじゃない？」
「最近、在野のモンスターに手練れのモノが現れるようになっています、ご存知でしょうか？」

心当たりがありすぎるケーナにとってはご存知しまくりだ。　内心ぎくりとするが表情には出さない。　原因は十中八九、廃都から漏れ出しているモンスターだろう。　ケイリナが勝てないと明言していないので、ヘルシュペル側に出ているのは彼女の手に負えるモノばかりで済んでいるらしい。

（そういえば廃都についてオプスに聞くの忘れてた……）

大陸を脅かす大元の事情について追求を忘れていた為、はっきりと何が悪いと言えないケーナ。　難しい表情で押し黙る祖母に、何かしら納得したのか話を続けるケイリナ。

「こちらの勧誘に返事一つで了承を貰いまして、今はああやって性根を叩き直している最中です。　最初の頃は皆の反感を買っていましたが、何度やられても挫けずに向かって来るので、今はあのように認める者も出て来ています」

「……『懲罰の首輪』を外して欲しい、と？」

「御婆様が辺境の村に住み、そこの住民を大切に思うように、私もこの国を守りたいのです。　彼の手が借りられるのであれば、手強いモンスターに対抗出来る手段となります」

「元々アレの身柄はそっちに渡したし、好きにすれば？」

投げやりに告げるだけで孫と一緒に一団へ向けて歩を進める。　目ざとい騎士が彼女達に気付き、あっと言う間に全員が直立不動の姿勢をとる。　ケイリナが皆へ「楽にしてて良い」と声を掛ける中、ケーナは地に伏してフルフル震えていた魔人族へ歩み寄った。

顔を上げた魔人族のプレイヤーはケーナを見るなり怯えて後退さる。　自分を完膚なきまでに敗北させ、心まで折った張本人なので当然の反応だろう。　スタスタ近付いていったケーナが手をかざし、ソレが青く光るのを見た騎士達に動揺が走る。　「殺す気か！？」と飛び出そうとしたのは騎士の勘違いで、そんな事をするはずがないと信じていたケイリナが部下を抑えた。　【清浄】の魔法で汚れ等を吹き飛ばし、回復魔法を施された魔人族のプレイヤーは、ケーナが手をかざした時から頭を庇って震えていた。

「起きなさい」

「……え……？」

頭を抱えてうずくまっていた魔人族のプレイヤーは、頭上からケーナが掛けた声に恐る恐る顔を上げる。

「……トドメを、入れるんじゃ……？」

「あのねぇ、国から騎士に勧誘されたアナタを私の勝手な理由で手に掛けたらこっちが悪者扱いじゃない。　ほら、さっさと立つ！」

呆然とした顔の彼はケーナの声に従い、のろのろと立ち上がる。立たせた彼をじろじろ見ながら一周し、「もう怪我はないね」と満足げに頷くと、彼の首に巻かれた黒い首輪に手を伸ばした。　ギョッとして一歩下がる彼。

「い、いいのかよ、これを外したら、ま、また人を殺すかもしれないんだぜ……」

おどおどと震える声で、引きつった表情をしてそう告げる彼にケーナは肩をすくめる。

「なんだったら今すぐここで消し炭に変えてもいいんだけど……」

「それは止めて頂けると有り難いのですが、御婆様」

ケイリナが二人を仲裁するような位置に立って困った顔をする。

「そこの孫がアナタを買っているから私の都合で処分する訳にもいかないのよ。　覚えておきなさい、私はケイリナがアナタを信じるって言うから解放するんだからね。　もし次に同じ様な事を仕出かしたら、私ともう一人でアナタをこの世から抹消するから！」

「あ、うん、わ、分かった……」

素直に頷いた彼の首輪に触れて「ＮＯ．３スキルマスターが認める、解除」と呟く。　瞬時に消える首輪。　自分の首を触って確認する彼は、ようやく束縛から解放されたのを実感して、へなへなとその場にへたり込んだ。

「ありがとうございます、御婆様」

「なんか問題起こしたら私に言いなさいよ。　私とオプスとで塵も残さず消滅させるから」

ケイリナは知り得ないが、国も残らないような酷い戦力である事は間違いない。　知らないと言うのは時として幸せなことである。

「そう言えばアナタの名前を聞く機会はなかったね。　私はケーナ、アナタは？」

「あ、ええと、こ、コイローグ……」

先程までの憎々しさなど欠片もない笑みを向けられた魔人族の彼、コイローグはしどろもどろに名乗った。

「こい、ろーぐ？　恋の悪党（ローグ）？　随分乙女チックなお名前ねー」

「ち、ちち、違う！　意味なんかねーよ！　普通に音だけで決めたんだよっ！」

むふふと含み笑いでもって見上げるケーナに、コイローグは真っ赤になって手を振り、否定した。　つい今し方まで険悪な雰囲気だった二人がケーナのからかいによって一変し、のんべんだらりとした空気に変わった。　その有り様を端で見ていたケイリナと騎士達は呆気にとられていた。

「んじゃ私は帰るから、その子よろしく」
「はい、お疲れ様でした」
「それと恋の悪党（ローグ）ちゃん」
「コイローグだ！」
「次はないからね。　私、『銀環の魔女』のケーナと、『リアデイルの孔明』たるオプスが君を滅ぼしに来るから、心しておいてね」
「ぎぃっ！！？」

用事は済んだとばかりに練兵場を後にするケーナは途中で立ち止まり、コイローグへ普段は忌避するゲーム内での悪名を使って釘を刺す。　効果は抜群で、絶句したコイローグは青い顔で脂汗を垂らして震え始めた。　見送りに行こうとしたケイリナを騎士団長が制し、自分が行くと告げてケーナの後を追う。　手持ち無沙汰になったケイリナはコイローグへ疑問に思ったことを聞いてみた。

「御婆様は昔、有名人だったのか？」
「ゆ、有名人なんてもんじゃないぜ。　『銀環の魔女』って言えば『黒の国で率先（ぼうそう）する切り札』とか噂される、茶国壊滅事件の主犯じゃねぇか……」

「そうか」と呟いたケイリナはコイローグの耳を摘まんで引っ張った。

「あだだだだっ！　な、なにすんだよっ！」
「騎士になろうとする者がそのような粗野では話にならん。　まずは礼儀作法からの勉強といこうか」

ケイリナに睨み付けられ、ぶるりと震えたコイローグはレベル差うんぬんを口にする暇も無く、騎士団指南役に引きずられていった。
のこされた騎士達は指南役の厳しさを知っているため、同情の眼

差しで彼を見送った。

「城門までていいわよ」
「そうですか」

うんざりした顔のケーナは、くっついてきた騎士団長をあしらった。

「少々お聞きしたい事がありまして、よろしいか？」
「まあ、私で分かるモンならいいけど」

神妙な顔で聞いてくる騎士団長に頷くケーナ。　少し戸惑いも含まれている。

「彼の者が使う剣なのですが、二百年前は剣を教える者はいなかったのですかな？」
「……は？」

言われた事がよく判らずに首を傾げるケーナ。　騎士団長は熱の入った口調で拳を握る。

「彼の者の動きはちぐはぐなのです。　動きだけなら魔狼にも匹敵するが、剣に関しては初歩の初歩、最低限の基礎しか修めておらん！　あの様な腕でこの二百年間をどうやって生き延びてきたのか甚だ疑問だ！」

城門の門番が目を丸くして自分達を指揮する総責任者の熱弁を聞く。　ケーナに至っては最初は唖然としていたが、そこまで熱意を入れる程に接してくれる人がいるらしいところに安心する。　ここの騎士団であれば恋ローグを任せてもより良い方向に矯正してくれるだろう、と。

まあ求められている質問の返答には詰まる。　どう答えたら納得してくれるのか見当もつかないからだ。　質問そのものの答えは簡単である、それはコイローグが基礎モーションしか持っていないからだろう。

ＶＲＭＭＯリアデイルのプレイヤーキャラクターには種族ごとに攻撃用の基礎モーションが設定されている。　竜人族ならば力強く大雑把に、猫人族なら小回りを以って俊敏に、エルフ族であれば素早く的確に、人族と魔人族であれば手際よく確実に、ハイエルフ族であれば武器に振り回され情けなく。　コレがハイエルフ族のプレイヤーが少ない理由のひとつではある。　初期にはそのままの形で続行という仕様だった。　しかし、そのうちにプレイヤーからの「なんとかしてくれ」と要望が増え、モーションにまで改造を加えることが可能になった。

この直後には「リアデイル総合リンクまとめ」で各種モーションデータが溢れていたのをケーナは覚えている。　遊び心満載のものから悪乗りに行き過ぎたものまで、大量のデータがあちこちに流れていった。　中には史実から掘り起こされたものや実在の剣術をデータに起こしたのはまだマシな分類として。　小説や漫画、アニメや時代劇、酷いモノになると特撮ヒーローの使う動きからオタクが創作した厨二病な名前の架空戦闘術までがわらわらと出回った。　勿論ケーナのアバターにもこういったモーションがインストールされている。　キチンと選んだ比較的真面目な物と、遊び半分が半々

でだが。
　コイローグのアバターにはこの手のモーションデータを使ってないようなので、ちぐはぐな動きになるのだろうと推察できる。　勿論モーションに頼らずに自分の好きなように武器を振り回すことも可能だが、リアルに剣術などを修めたプレイヤーなど全プレイヤーの一％もいないだろう。　コレが実戦だと判明しているコイローグの振るう剣線はへっぴり腰のシロウト剣術になるか、モーション頼りの初歩の初歩剣術になるかの二択しかない。　だからと言ってケーナの技術が実戦でそこまで通用するかと聞かれても、ソレはデータ的なものであるだけだ。　中身まで伴わないものを振り回す、としか言えないのがケーナ自身の現状である。　極端な例を挙げるのならば、魔法で吹っ飛ばすのが早い。

　結局、「そんなものは貴方達のやり方で矯正すればいいでしょう」とだけ言って城を後にした。　これといってよさそうな言い訳が見つからないのが理由だったり。　この先はコイローグが決めることなのだから、口を挟まない方を選択したのだ。　悪く言えば丸投げである。

　オプスが心配で真っ直ぐ帰るつもりが、ついケイリックの所に顔を出して魔韻石を加工したり、市場を見回ったりしているうちに夕方近くなり、慌てて宿屋に戻る。　一階の酒場ではルカが幾人かの商隊メンバーと一緒に、デザートを味わってるところだった。　作成者はオプスである。

「ケーナ、お母さん、おかえり……なさい」
「おう、遅かったのう。　何か無理難題でも押し付けられたのかの？」

オプスを筆頭に、商隊や傭兵団の馴染みが声を掛けて来るのを律義に返答しつつ、ルカの横に座る。　義娘がこぼさないようにとスプーンに乗せて差し出したケーキ、フルーツと生クリームを少し貰って笑いかける。

「ん、おいし。　ありがとうね、ルカ」
「う、うん、作ったの、オプス、お兄さん……」
「ご　め　ん　ね　オプス、任せっきり　で　！」
「声が怖いぞケーナ。　何故睨む!?」

『そりゃ子供にあまり甘いものを喰わせるなって意味だよ歯磨きが塩と堅めブラシな世界で虫歯防ぐのは難しいだろうに！』とか言いたいが、ルカが嬉しそうにケーキを食べているところで声を大にする訳にもいかず、心の叫びを内側に押し殺し、元凶を威圧する程度に留める。　それから交互に本日の意見交換を済ます。

「ふむ、そのようなプレイヤーがいたのか。　だったら今からでも更生に向かっても良いかも知れぬな？」
「何張り切って立ち上がってんのよ！　アンタの場合は更生と書いて『存在抹消』ってルビをふりそうで怖いから！　本人も折角心を入れ替える気になってんだから止めてあげなさいよ」
「ケーナがそこまで言うなら経過を見るがの」
「そいでそっちはエクシズ達に会った、と……」
「嬉しさのあまり卒倒しとったがな」
「……エクシズ、強く生きてね」

彼の不憫さを労るケーナ。　しかし、エクシズから見ればケーナもオプスも同意語（ずっうのたね）であるのを本人は知らない。

「にしてはプレイヤー自体随分少ないのう。　ケーナが会った数だけでは我の記憶している人数とは合わん」
「隠れているか、この地を離れたか……、人族や猫人族とかで二百年前に漂着してた場合、寿命で死んじゃったかよね」

　プレイヤーは人族が圧倒的に多かったが、ハイエルフ族のケーナからすればどの種族も多いとしか言えない。　オプスの話ではコピーして切り離した人数は数えられない程いたらしい。　最大プレイ人数が万を超えていればそうなるだろう。

「オプスはプレイヤーを気にしてるみたいだけど、なんで？」
「もしかしたら必要なのかもしれないと言うだけじゃな。　確認せねばならん事もあるしの……」

　それは廃都に関係するモノなのだなと、なんとなく確信しているケーナ。　今のオプスであれば隠している事柄は別にして、ケーナの懇願を断る事はなさそうだ。　しんみりした空気を感じ取ったのか、ケーキを食べ終わり、水を飲んでいたルカが席を離れる。　コップをカウンターに返してケーナ達の席には戻らずに商隊の人達の所へと移動する。

「お？　どうしたお嬢ちゃん、お母さんにいじめられたのか？」
「ケーナさんがそんなことする訳ないじゃないっスか。　あんまり変な噂を立てると火傷するっスよ」
「ケーナの嬢ちゃんだからなぁ、火傷で済むのか？」
「爆発かもしれないな」

　本人を目の前にして好き勝手な発言をする傭兵達。　冗談半分なのが分かっているので苦笑で流すケーナ。　これが自分だったら何か飛んでくるんだろうなと悟ったオプスは内心涙した。

「ねえ、オプス、ちょっと聞いておきたいんだけど……」
「うん？　なんじゃ？」

テーブルの上に乗り出すようにして声を潜めるケーナに習い、オプスも声の音量を落とす。

「私が死んだ後、亜子姉さんや叔父さんどうしてた？」
「うーむ、あ奴等のことか……」

少し考え込むオプスの様子にケーナの表情が曇る。

「お主の葬式の後はしばらく沈んでいたが、此方で手を回して説明はしておいたのでな。　ショックは軽減されたようだぞ」
「……は？　手を回した？」
「うむ、【聖女】に事情を説明しに行かせた」
「はあああああああああああっ！？」

ひそひそ話をしていたと思ったら素っ頓狂な悲鳴を上げたケーナに、酒場に居た者達の視線が集中する。　自分で自分の口を塞ぎ、恥ずかしさで身を縮めるケーナ。　対面のオプスが噴き出すのを真っ赤な顔で睨み付けた。

【聖女】と言うのは、ケーナが桂菜として生きていた世界における法王よりも数段上の、善の代表格で世界級称号筆頭だ。　対照的な存在に【魔王】がいて【聖女】と善悪の覇権を争っていると噂されるが、間違っても一般人の家庭へ弔問に訪れるような人物ではない。　それを「行かせた」などと聞けば叫びたくもなると言うもの

だ。

「まあ、正確なところ、【世界】が悲しむ声を聞いて親族に諸々を説明しに行った。　というところであろうな」

「それって【聖女】が直々に？　ウチまでえ？」

「ほぼお主がこの世を去った直後、自主的にの。　聞いた話だと空港で【魔王】と一戦やらかしたとか報道されておったぞ」

「えええええ――――？」

情報の制限された有名人に対する一般人の反応など、得てしてこの程度である。　真実が表沙汰にされたりしようものなら大混乱に陥ること間違いない。　……ので、その辺りの事情はケーナに伝えないオプスだった。【魔王】と【聖女】が親しい友人同士だ、などと一般人は知る必要のない情報である。

叔父や従姉妹が悲しみに暮れていなければケーナとしても安堵するところだ。　ただひとつの心残りは、あれだけお世話になったのに最後の礼くらいは伝えられなかった事にある。

後日、この心残りはオプスの能力によってあっさり解決することになるが、このときはまだ知らない。

51話　そしてある邂逅

翌日、ケーナ達はエーリネ商隊とヘルシュペルを発った。

同行した立場は料金を払ってお客さん、である。　しかもオプスと言う精神的にも心強い仲間を得たケーナは、ただのお客さんではなかった。　自重と言う単語をどこかに置き忘れたかのように魔法を行使し、商隊の旅はとても早く、安全なものになった。

「のう、ケーナ。　ちょっとやりすぎではないのか？」
「そう？」

馬車の屋根に陣取るケーナは膝の上に座らせたルカを抱きかかえ、のんびりしたまま背後に立つオプスの問いにとても不思議そうな表情で答える。　周囲の風景は高速で流れていく。　はっきり言って馬車が持続するような速度ではない。　まあ、一番困惑しているのは商隊の主であるエーリネやそれを護衛する傭兵達だ。

商隊を構成するのは箱馬車が二台と幌馬車が三台の車列である。　その車列を先導するように、やや先を土煙上げて疾走しているモノがいた。　全長七メートル強もあり、岩が結集した表皮を持つ四足獣、大型トカゲ種モンスターに分類される岩トカゲ（ロックリザード）である。　言うまでもなく召喚獣で、喚び出したのはケーナに”お願い”されたオプス。　レベル三百五十にして、ゲーム中では定番の馬車を引く人材（？）であった。　今回の役目は商隊の露払い役で、コレの突進を受けて生きていられるモンスターはそういないだろう。　ソレに追従する商隊自体もケーナの【増幅（ブースト）】を付加した【行軍速度上昇（ムーブアップ）】により、馬車を引く馬は並足のように見えながら駆け足の速度である。　結局、本来掛かる日数より三日ほど短縮して、七日目の夕方

には村へ到着した。

「なんか途中で馬三頭に引きずられたミノムシがいたような気がしたんだけど？」

「そうだったか、見た覚えがないのう？」

「……じゃあ、気のせいかなー」

自宅に戻ったケーナとオプスとルカはメイド達の歓待を受け、一緒にくっついてきたエーリネから運搬してきた麦を買い取る。もう、暗くなって来ているので、蔵に運び込むのは翌日になるだろう。

とはいえども村の主要道路には外灯が設置され、夜中でも煌々と夜道を照らしていた。

「なんといいますか、この村だけ王都とは違った驚きを受けますね……」

「道は明るいわ、風呂は自由に入れるわ、防衛手段に事欠かないわ、一種の要塞だな……」

夕食をマレールの宿屋で共にしたエーリネとアービタは素直な感想を漏らす。意識しないで村の要塞化にメスを入れてしまっていたケーナの所業、おそるべしである。ルカは自宅にて夕食をとった後、疲れていたのか直ぐに寝入ってしまった。オプスは特に出歩く理由がないので、家で留守番である。ケーナがわざわざ宿屋まで出向いた訳は情報収集のためだ。

「なんでも後二十日もするとフェルスケイロで『闘技祭』というも

のがあるとか聞いたんですが……？」
「ああ、あるな。　なんだ嬢ちゃんひょっとして出る気か？」
「ケーナ殿でしたら優勝は確実でしょう。　公認の賭けもありますし、それはそれで稼げそうですね」

ケーナの実力を知っている二人は面白そうにニヤニヤしているが、彼女がそんな行動を起こすような者ではないと熟知している。

「生憎、弱いものイジメの趣味はありませんから」

きっぱりと断言するケーナ。

闘技祭と聞いて彼女が考えたのは『あまり娯楽のない村において、地球で言うオリンピック中継のような事が出来ないか？』だ。　そのためのアイテムは一応ある。　目玉のアイテムで『対の瞳』、片方の瞳で捉えた映像を片方の瞳を持つ人物に届ける魔道具である。
本来は個人同士の伝達用に使うものではあるが、多人数での観賞用に大画面映像化（プロジェクター）する補助アイテムも存在する。　但しこちらの補助アイテムはアイテム作成技能（スキル）で作り出すものではなく、店売りの一品物だ。　勿論、ゲーム時代の店はこの世界には存在せず、ケーナもそんな趣味アイテムは持っていない。　では何処にあるのか言うと、心当たりはギルド本拠地だ。　時々、メンバーが『対の瞳』を持って行き、一日の行動を暇つぶしに面白おかしく実況していた時があったのを覚えている。　これを持って行ったのがギルドサブリーダーのエベローペだった場合、即座に阿鼻叫喚の十八禁桃色空間実況中継となり、本拠地から成人未満立ち入り禁止として叩き出されたのもいい思い出である。

そんな考えは家に戻り、オプスに計画を話した所で頓挫した。

「くりーむちーずのギルド拠点？」

「私達に縁が深いものはこっちに来ているはずよね？　ヘルシュペルの最西端にあるはず……」

「ないぞ」

「……は？」

一言で切って捨てられ、沈黙がその場を支配する。　オプスは斜め四十五度の虚空を見上げて、思い出話を語る老人のような表情で淡々と事実を告げた。　老人なのか若者なのか男なのか女なのか、いまいちはっきりしない人物である。

「あれは……そう、リアデイル配信停止前日のことであった。『自分達もド派手なことをやりたいね』などとこぼしたメッシュマウトに原因はあるが、最後だからと乗ってしまったメンバーにも非はあろう。　つい最後の記念にと我等は……」

「……おい、まさか……」

「限界突破メンバー全員の魔力を結集して、合体魔法で拠点を吹っ飛ばしたのだ！　うん、綺麗な花火だったのう……」

「皆のバカあああああああああっ！！？！」

覆水盆に返らず。　そういえばそういうことを思いつきだけで実行に移すメンバーだったな、と今更ながらに実感したケーナであった。

合体魔法とは聞こえだけは格好いいが、同一目標に多人数で同じ魔法を撃ち込む技法（コンボ）の事である。　一番初めに魔法を撃ち込んだ人物の威力を基準として、参加人数分二倍していくだけだ。　通常通りであれば一番魔法の威力が高いケーナを基準とするのだが、当日には既に存在していなかった為、エルフ族で後衛補助兼回復要員のタルタロスがその役目を務めた。

ケーナに次ぐ魔力の爆炎魔法が二の十八乗され、綺麗なアーチ状の火柱でもって拠点を綺麗に吹き飛ばしたらしい。最後の一ヶ月だと言うことで建造物の破壊仕様ｖｅｒ．１．０３がアップデートされ、結構な数のギルドが似た様な事をやったとか。　後々に誰か使うという可能性を考えて欲しいと、ケーナは思った。　流石にゲーム世界が別の異世界に影響しているなどと誰が信じようか。

魂の抜けた顔でテーブルに突っ伏したケーナ。　腕組みをしたオプスは「ふむ」と頷き、そう言えばと切り出した。

「その前にギルド内で不要なアイテムを、まとめて引き取ったな。もしかしたらその中にお主の所望するアイテムが含まれていたのかもしれん。　適当に纏めたからリストも作らんと、隙間の出来た倉庫に突っ込まさせてもらったからのう」

「ホントッ！！」

がばあっ！　と即座に復活し、テーブルに身を乗り出したケーナは反対側のオプスに詰め寄った。　「さあ行こう、直ぐ行こう、とっとと行こう」と急かすケーナを呆れた目で見つめたオプスは窓の外を指差す。　お察しの通り綺麗な青く光る月が浮かぶ真夜中である。

「とりあえず、今夜は体を休めてまた明日よの」

「あ……、そういやーそうだっけ……」

興奮してすっかり忘れていたらしい。

翌日、遠足を待ちきれぬ子供のように早起きしたケーナ。　ロクシーヌやロクシリウスが目を丸くする中、オプスを叩き起こすと朝食や朝の諸々を手早く済ませて「早く行くの！」と急かす。

「九条の指輪があるじゃろう？　それで済む筈じゃ」

「九条んトコに突っ込んだの！？」

生産職専門と自称していただけあって、九条はスキルマスター内一番のアイテム持ちだった。　守護者の塔に常備されるアイテムボックスだけでは足りずに、課金してまでアイテムボックスを増やし「まだ足りない」とか、度々ボヤいていたのを覚えている。

「あ奴も最後だと色々、普段は作らないような物まで作って放出してのう。　通常運転のままに見えたレアの価格が随分と上下しとったぞ」

その時のプレイヤー反応を覚えているのか、楽しそうに語るオプス。　苦笑いを浮かべたケーナは、皆が最後までスキルマスターに振り回されたんだなぁ、と感慨深く呟いた。　ここにタルタロスでも居れば「お前も変わらんわ！」と突っ込んだろう。

指輪を引っ張り出すと、眠い目を擦りながら見送りに起きてきた

ルカに出掛ける旨を伝え、ロクシーヌ達に後の事を頼む。　キーワードを唱えてオプスと共にその場から掻き消えた。

目の前の光景がのどかな田舎から、書き割りに描かれた超高層ビル群と女神像に切り替わる。　背後にズラリと並ぶのは撮影用のカメラ群。　その中央、床から幾らか浮いている蓮の台座に金色の仏像が結跏趺坐をしていた。　ケーナとオプスの前に、音もなく空中を移動した蓮台座の上から、胸の前で手を合わせたまま仏像が深々と頭を下げた。

『これはオプス様、よくいらして下さいました。　このたびはｍｅにどのようなご用命でしょうか？』

「少々預けてある物を確かめにな。　それとこっちはここの指輪の持ち主となったケーナ。　スキルマスターＮｏ．３ぞ。　断りが後になった事は許せ」

「なんでそんな慇懃無礼なのよアンタは……。　それと、ごめんなさいね」

悪代官のように胸を張るオプスに呆れたケーナは、仏像に対して軽い会釈をした。　『これはご丁寧に、ｍｅこそ』とか言いながら更に頭を下げる仏像。　終わらない頭の下げあいループになりそうだったので、話を打ち切ったオプスは『関係者以外立ち入り禁止』と明記された扉を、指輪で鍵を解いて開け放つ。

後を追って部屋を覗き込んだケーナは、室内に並んでいるモノを見てげんなりする。

「うわあ、なによこれ……」

ケーナの塔であれば床に埋め込んである常備用のアイテムボックスが、床を埋め尽くした上では飽きたらず、壁にまでびっしりと張り付いている。　その総数、約五十個。　明らかにこれだけで追加料金を一万円以上食ってる計算になる。　廃人の執念恐るべしだ。

「……ウム、これじゃな」

一つ一つチェックしていたオプスが、床のボックスから横に長いラジカセみたいな物体を引っ張り出す。　中央には丸いモノがはめ込める窪みがある、ケーナご所望の大画面映像機（プロジェクター）だ。

「よしよし、これこれ。　ありがとうオプス」

「……普段からそう素直であれば可愛らしいものなのだが……」

「ん？　何か言った？」

「何も言っとらん」

適当に誤魔化すオプス。　こういった微妙な位置での関係が今の自分達に相応しいと考えていた、元が主従なだけに。

一度、室内から外へ移動した。　守護者の塔は一部を除けばメインルームとなる部屋に魔法無効の術式を備えているためである。大抵は複雑怪奇な迷路を通らないように塔の守護者に外へ送ってもらうのだが、この塔（施設）は大亀の背に乗せてあるだけなので室外へ出るだけで済む。

「って、ちょっと待て……」

ケーナの呟きも当然で、何かおかしいと思いきや風景が動いてないのである。　それもその筈、ここの大亀は前回のオウタロクエス都市侵攻時の後、クイズを勝ち抜き条件を満たした勝者の意を汲んで都市を離れ、本来のコースに戻る予定だった。　しかし、都市内部に入り込み、城に接近し過ぎたためにＵターンするスペースが無くなってしまったのである。　無理をすれば出来なくもないのだが、それには街の建造物をかなりの割合で破壊するというデメリットがある。　守護者もそれをするのは本意ではないので、城の裏手から少し向きを変えた地点で留まるという選択をするしかなかった、という訳だ。

『後退すればいいじゃないか？』とも言うが、木上生活を営む街の正規の住人は兎も角、地面にもスラム街ともいうべき町が広がっている。侵攻時は運よく避けられたが、バックした場合はそれすらも壊してしまう可能性が高いというので、前門の街後門のスラムといった所で足止めである。

これは一度室内に戻ったケーナが守護者の金箔仏像から聞いた。元はプレイヤーに関して知りたかったオプスの作戦だったので、ケーナの非難は当然オプスに向かう。　……そこに居ればの話だ、背後にいた筈のオプスの姿は無い。

「……あれ？　オプス何処行った？」

『オプス様でしたら、先ほど機材抱えてＦｌｙしてしまいましたが？』

「……ぬ？」

『……オプス様でしたら、先ほど機材抱えてＦｌｙしてしまいまし

たが？』

「まあぁぁた、人に問題を押し付けていったのねーっ！！」

うがー、と亀の頭の上で空中に向けて怒鳴るケーナ。　思えば無茶振りは何時もの事だなと瞬時に思考を切り替える。　戦争時に紫の国所属千二百人を一人で四時間食い止めろとか（そのあとアンケートで歴代一位を取る鬼畜ランキングに入賞する戦略を行った。悪質な罠とも言う）、ダンジョン作るから依頼者で留まっていてくれだとか、理不尽な思い出ばっかりが浮かんで消える。　こみ上げてくるのは、ほいほいとそれに了承してしまう自分の付き合いの良さだろう。　ギルドの皆にも良く「ケーナはオプスを甘やかしすぎだ」とか言われていたのを思い出す。　当時は「そうかな？」と自分でも不思議だったが、今となっては納得の出来る訳がある。　かつては主従であった、と言うのが心にすとんと落ちる理由だ。　きっとかつてのオプスは主従であるのを言い訳に、自分に頼み事をしなかったのだろう。　だから今になって我侭を言って来る。　ケーナの勝手な思い込みも多分に入っているが、コレが一番心にしっくり来るので、何時もの様に苦笑して済ますだけだ。

「帰ったら一発殴るとして、どうしようか？」

こんな小山のような巨体を動かすとして、手段は限られてくる。　あまりにもデカイ術を使うとすれば、この国の女王にケーナの存在を知られる可能性がありまくりだ。　それすらももしかしたらオプスの策なのかもしれないが。

【魔法技能（マジックスキル）】より【領域転移（アロケート）】を選択。　これも取得クエスト以外ではほぼ使用することのない技能である。　そのクエストとは、好奇心旺盛な子ドラゴン（召喚魔法以外ではゲーム上存在しないド

ラゴンだが、クエストなどで度々出演するＮＰＣ）がダンジョンにハマってしまったのを助け出すというモノだ。　使用上の注意として、五メートル四方以上の物体と使用者を何処かへ飛ばす、……という適当極まりない魔法である。　そしてその何処かから親ドラゴンまで子ドラゴンを護衛して、やっとクエストが終わるという非常に面倒極まりないクエストだった。　ちなみにケーナの場合、クエスト発生場所の青の国より隣の赤の国に飛ばされ、戻るのは非常に楽であった。　オプスの場合は黒の国まで飛ばされて行ったと言うから、人によってその苦労の度合いは様々であり、同じクエストを経過した者だけで話すときのいい話題にもなっていた。

　飛ばして遠くへ行くのはまあいいとして、一番危惧するのは街や村に出やしないか？　と言ったところだろう。　ゲーム中は絶対にそんな所へ落ちない安心感があったが、ここはもう現実（リアル）であるので、その可能性が無い訳ではない。　短縮呪文（ショートカットキー）へ浮遊を仕込み、さあ転移するぞーと、意気込んだところで城の窓越しに居た女性と視線が合った。　ちょっとマズイかと思い、慌てて魔法を起動させようかとしたところへ、その目線の合った女性が窓を開け放ち、ケーナのいる所へ飛んで来た。

「はぁ？　飛行魔法!?」
『ハイエルフ種族デスネ』

　紫のグラデーションでゆったりとしたドレスに身を包み、長い黒髪で前髪の一部に青い一房を持つ気品溢れる若い女性。　キーの見解の通り、短くとがった耳を持つケーナと同じくハイエルフ種族だった。　ふわりとケーナの前に着地したその女性は、胸に手を当てて軽く会釈をし、金色の瞳で見つめてきた。

「お久しぶりです、伯母上。　かれこれ二百年ぶりでしょうか？」

かつてのコミュで「お姉様お姉様」とえらく懐いてきた後輩そっくりな容姿を持つ女性に、ケーナも一度会った事がある。　その時はもう里子として外に出てしまっていたが。　この出会いはおそらくオプスが仕込んだか、オプスが計略したか、オプスの計画の内か、ただの偶然か……。　「やっぱりオプスを二発殴ろう」と心に決め、改めて二人目の姪と向き合う。

「庭先を騒がせてごめんなさいね、サハラシェード。　直ぐに飛ばすわ」

「『飛ばす』と言うのが何のことやら。　ここで会ったのも何かの縁、折角ですから一緒にお茶でも如何ですか？」

少し考えたが、遭遇してしまってはココで断るのも不自然かと思い、その申し出を受けることにした。　前回、あちらからわざわざやってきた使者の申し出を断ったこともあり。　これはお招きだからいいや、と思っておく。

「……と言うか、一国の女王が窓から飛び出すってどうなのよ？」

「はしたなくて申し訳ありません。　伯母上を見かけたものでつい、緊急事態だと判断致しまして……」

飛び出してきた窓へ目をやると、こっちを心配そうに見つめる侍女がいた。　自分もあそこからお邪魔しなければならないのだろうか、と別の意味で心配になるケーナ。　伯母の心の内を知ってか知らずか、「さあどうぞ」と姪が案内する先には窓があった。　サハナの娘ならコレくらい破天荒なのかもしれないと、微妙な納得をしておく。

飛び込んだ窓の先にあった部屋は、頑丈そうな机とそこに幾らか山になった書類、ソファとテーブルのセット。　どうやら執務室らしかった。　窓から見えるのは巨大な亀の横顔である。　景観も何もあったものではないと考えたケーナは、早急に移動させねばと思った。　部屋付きの侍女が恭しく頭を下げ、闖入者であるケーナを不審がりもせず、女王に言われるままに茶を振舞う。

（オプスの不手際の処理は何時も私に回ってくる気がするなあ……）

『ソノタビニ同ジコトヲ繰リ返シ言ッテイマスガ』

侍女に礼を言うと目を丸くされた。　湯気の立つオレンジっぽい液体に口をつけると、リアルの紅茶と似た味がする。　ふとゲーム中には食料としての紅茶が精神力（MND）を少し上げる効果があったなと思い出し、ティーカップの中身を【鑑定】してみるが何の表示も出てこなかった。　クスッと苦笑したサハラシェードが、やや呆れたような口調で尋ねてくる。

「お茶に何をなさっておいでですか、伯母上？」

「んー、ちょっと気になったんでね。　無作法だったかな？」

「里でしたら長老が何かを言ったでしょうが、ここでは伯母上のお好きになさいませ」

机の上の書類を片付ける姪を見て「お邪魔だった？」と聞いてみる。　サハラシェードは平然として「偶には誰かが居る環境で仕事

をするのもおつなものですよ」、軽く微笑みケーナに返答した。
要するに静かな部屋で延々と仕事をするだけなのが退屈だったらしい。　あの妹（サハナ）であれば細かい仕事を与えておくと奇声を上げて投げ出すので、その点だけは対照的なのかと思う。

しばらくは紙をめくる音と、時折交わす姪と伯母の会話だけで時間が流れていく。　ケーナが話すのは辺境の村からフェルスケイロに出てきて、今に至るまでの簡潔なあらすじを。　途中にサハラシエードが疑問を挟んで来るので、それに解説を加えていたくらいだ。
そうしていて、そろそろケーナがこの場を辞そうかな？　とした時、執務室を訪れた者がいた。

「失礼します、陛下。　先日の再編成の議題なのですが……」

ノックと共に部屋に入ってきた魔人族の騎士団長は、ケーナの姿を見ると目を丸くした。

52話　娯楽を提供しよう

「こんにちわ、小さな淑女（リトルレディ）さん。　陛下のお友達でしょうか？」

「リトッ……！？」

「ぷっ、くくくくっ」

初対面の挨拶が子供扱いな件について固まるケーナと、部下の酷い発言に笑い出すサハラシェード。　一体何の集まりなのか、自分の上司が腹を抱えて笑い出している現状にさっぱり着いていけない騎士団長。　片方の少女、――――言うまでもなく外見年齢十代中盤にしか見えないケーナのことである――――は面と向かっての『小さい』発言にボルテージ上昇気味だ。　即、手を出さないのは、ここが姪の国で自分の過剰なまでの攻撃力を自覚しての事。　内心、笑い転げている姪に、さっさと部下への間違いを正してもらいたいと思っていた。　その当てにしていた姪が再び笑いのつぼにハマるまでは。

「陛下？」

「あっはっははは……、はあ、ふう。　いや、すまないなカンコウ。　こちらのリトr……ぷっ、くっ」

「いや、もういいけどね」

こっちに来て以来、散々『嬢ちゃん嬢ちゃん』言われれば皮肉のひとつも出なくなるというものだ。　大人しく姪の発作が収まるのを待つ。　サハラシェードがなんとか呼吸を整えた頃にはすっかり不機嫌になったケーナが腕組みをして、眉をひそめそっぽを向いていた。　周囲に放たれる【威圧（プレッシャー）】が尋常のものでなく、カンコウが

脂汗を流しながら壁際に張り付いている。　流石のサハラシェードも身内と言えど怒らせてはならない存在だと思い出した。　理解するのが少し遅すぎたようである、事前に気軽に話しすぎたのも原因であろう。　これ以上のヤブヘビを避けるため、サハラシェードは簡潔に伯母を紹介した。

「ではカンコウ、こちらが先日協力体制を断られたケーナ伯母上ですわ」

「もの凄い私が悪いみたいに聞こえるわよ、それ」

「おお、貴女が……。　父からよくお話は伺っておりました」

「……父ィ？」

いや～な予感を感じて身構えるケーナ。　サハラシェードもそんな話は初耳なのか、興味深そうに耳を傾ける。

「ええ、カン・ウーと言います。　二十年程前に東へ旅立ったきり、音沙汰がないのですが……」

「え……、えええええっ！？　カン・ウーさんこっちに居たんだぁ！！」

聞き覚えどころか馴染み深い名前にびっくりし、カンコウなる息子の顔をまじまじと見つめるケーナ。

「お知り合いですか、伯母上？」

「うん、色々と」

『カン・ウー』とはそれなりに交流のあった人物で、まだ桂菜が存命中だったゲーム時代の後半時期に、色々なイベントやクエストで臨時ＰＴを組むことが多かったプレイヤーだ。　くろーむちーずギルドメンバーと一緒に最終クエストを請け負った外部協力者の内

一人で、千百レベルの限界突破メンバーである。　名前の通り三国志かぶれで、外部エディッタを駆使して外見をアジア系おっさんにした珍しい拘りを持つ、ある意味異色プレイヤーだ。　周囲に西洋系な顔立ちが多い中、一際目立っていたのをケーナは記憶している。

「しかし、二十年前？」

「はい。　まぁ、あの豪快な父ですから、何処へ行っても基本変わらないと思います」

その『カン・ウー』は人族な上に、設定年齢が三十歳を越えていたはずなので、旅先で根を張ったか、下手をすると何かの要因で亡くなっているかもしれない。　息子の言うように当人は豪快に竹を割った性格な人物なので、今ここで心配するものでもないかと、ネガティブな考えは横へ置いておく。

「東かぁ。　暇になったらそっちへ街道を作ってみるのもいいかもしんないね」

オプスの話からすれば、リアデイル地域に住み着いた者達は、夢にも導かれてあちこちから集ったと言う。　ならばこの地域以外にも国があって然るべきだろう。　かつてのゲーム中で東側未設定区域（ただのモンスター生息地なだけだった）が整備されていれば、もう一つくらい国が増えていたかもしれない。

「お帰りになる前に、伯母上に少々尋ねたいことがありまして。よろしいですか？」

腰を浮かしかけたケーナを引き留めるように、サハラシェードが声を掛ける。　そろそろおいとましようか、と思っていたケーナは「私に答えられるものならね」と頷いた。

「廃都の事なのですが……」
「あー、廃都かー。　ゴメン、そっちについては全然分からないんだ。　今度、オプスを締め上げるんで、何か分かったら連絡するね」
「オプス？　何者ですか？」
「オペケッテンシュルトハイマー・クロステッドボンバー、魔人族の男で腐れ縁の友人だよ」
「はあ、伯母上にも友人っているのですね」
「どーゆー意味よそれ……」

息子や娘、姪にもろくな認識を持ってもらえないことに涙するケーナだった。

少し他愛もない話を続けた後、サハラシェードとカンコウに帰る旨を伝え、窓の外に待たせっぱなしだった巨大な亀に移動する。来た時と同じく、出入りには窓を通って。　じわじわとオレンジ色に染まりつつある空を見上げ、急いで魔法を起動する。　城の窓からこちらを伺うサハラシェードに手を振った途端、その場にあった巨大な亀は忽然と姿を消した。

「あ、あれごと消えるとは……」
「まあ、伯母上だからね」

目の前で見たものに納得しかねる、と言った顔の騎士団長。　自分の事のように胸を張る女王。　開け放した窓からは、巨大な亀の存在が不意に消えたことに対する戸惑いや不安のざわめきが聞こえてくる。

「先に通達しておいた方が良かったかしら？」

「それは此方で騎士を動かしましょう。　にしても――――」

二人の視線は今さっきまでケーナがいたソファーへ、そこからテーブルの上に山と積まれた赤い液体瓶へ。　これはケーナが『そう言えば、騎士団に怪我人が出てたとか聞いたんだよね』と置いて行ったものだ。

『よく御存知ですね？』

『フェルスケイロ襲撃戦の後にスカルゴから聞いた。　作って溜まるばっかりだし、使ってね』

一本手に取ったカンコウが溜め息を吐きながら上司を見る。　この一本だけで、瀕死の重傷を負った兵士が四人以上跳ね起きるだろう。　里子であったサハラシェードやカンコウならよく知るこのポーションは、二百年前なら百五十ギル程度で流通していたごく一般的な物だ。　そのまま現在の価格に換算すると、金貨一枚と銀貨五十枚に相当する極上のアイテムとなってしまう。　今となっては製法が失われ、ひとたびダンジョン等で見つかれば争うように高値で取引される代物なのだ。　以前、ロプスがケーナに告げた危惧はこう言った理由からだ。　そんな一財産になるものをポンと置いていかれては、二人共唖然とするばかり。

「では陛下、自分はこれで。　亀についても通達して参ります」

「ええ、お願い」

呆けてばかりもいられない、彼等の仕事はまだ山積みなのだから。

騎士団長は当初この部屋に来た目的を果たすと、自らの役目を果たすべく慌ただしく出て行った。　薬瓶（ポーション）は侍女がおっかなびっくりと纏め、医療担当官の所へ持って行く。　景色がよく見渡せるようになった窓を閉めたサハラシェードは、自分の仕事を再開するため

に山積みの書類から一枚を取った。

「さて、後は伯母上任せ、としか言うしかないわね……」

――轟音、大瀑布

転移したケーナと巨大亀が出現した場所は、直前の心配し過ぎが空回りする海であった。　遠浅のそれ程深くない、巨大亀の脚半分が水に浸かる程度。　何も無い所に大質量が現れたものだから、砂や魚混じりの海水が下から上へ盛大に噴き上がった。　目の前に広がるは大海原で、後ろを振り返れば砂浜から緩やかに続く陸地が広がっていた。　ひじょーに既視感のある風景である。

「あ、なんか見覚えがあるような……」

『ルカ様ノ村デスネ』

キーの報告にもう一度振り返って視線を下に。　見覚えある配置の、人気（ひとけ）が絶えた村があった。　村の上に落ちなくて良かったと心の底から安堵するケーナは、一度守護者の塔に戻って金箔仏像に問い掛ける。

「このカメって常に動いてないといけないの？」
『いいえ、九条様の要望がありましたので。　今はケーナ様のご意向にｍｅは従う次第であります』
「なら、しばらくこの場で停止してもらえるかな」
『承りました』

浮いた蓮台座に結跏趺坐のまま深々とお辞儀をする金箔仏像。
転移魔法一回分のＭＰを残し、その他を中核である司会者の席に注ぎ込んだケーナは、守護者に別れを告げて村へと転移した。

家に帰ったケーナを迎えたのはルカとロクシーヌとロクシリウスの三人。

「おかえり、なさい……ケーナ、お母さん」
「「お帰りなさいませ」」
「ただいまー」

重ねて言うが三人だけだった。　二人、この場合重要になるのはたった一人の存在が感じられずに眉をひそめるケーナ。　ルカを撫でていたケーナにロクシーヌが切り出す。

「オプス様から伝言を預かっています」
「伝言？　オプスから？　やっぱり居ないのねっ！」

人を置いて行ったかと思えば、逃げたかのように姿が見えない。

きっと何か企んでいるんだとおぼろげに確信する。

「オプス、お兄さん……、四角いの、置いてった……」
「『七日後にフェルスケイロで待つ』だそうです」
「なんで七日後？」
「馬車に乗って行ったからではないでしょうか？」

ロクシーヌの話によれば、エーリネの商隊に同行して行ったらしい。その気になれば転移魔法で済むのに、彼にしては酔狂な行動だ。馬車で七日後となるならば、ケーナと同じように行軍魔法を駆使して商隊を届ける気のようである。何故かサイレンも連れて行ったようなので、何を企んでいるのか不安だ。

「あっちに着いてから、何かする前に取り押さえればいいか。今日はもうＭＰも無いし……」

例のアイテムも取り付けなければとか思いつつ、問題児への対処を後回しにするケーナ。この判断を後日、激しく後悔する羽目になる。

翌日は朝飯前とばかりに小屋に積まれていた麦をビール樽とウイスキー樽に変える。朝食を終えた後に大画面映像機を持って、マレールの所へ置いて貰えないかと交渉しに向かった。

「ケーナの好きにおし」

「いいんですか？！」

プレイヤーが見れば目玉がハマったラジカセとなるが、リアデイル大地側の人から見れば黒い台座にハマる目玉だ。　とてつもなく怪しい代物である。　それを持ってきたケーナが「これを置きたいんですが？」とマレールに伺ったところ、二つ返事でＯＫが出てしまったことに聞いた方がびっくりだ。　マレールからしてみれば、『無償で村に多大な貢献をしているケーナの提案を蹴ることは損をする』という認識から、理由も聞かずに承諾しただけである。　ケーナに同行したルカは一度使った事があるので、遠巻きに見ていたリットにアイテムの機能を説明していた。

「ケーナ、お母さんが……行った先の、ものが、見える……はず……」

「遠くが見えるもの？」

「うん、そんな……感じ？」

なんとも曖昧であるが間違ってはいない。　「実演しよう」と言って大画面映像機（プロジェクター）のスイッチを入れる。　機械自体は壁に視線を向けていたので、壁に投射された映像は目玉が今見ている光景である。

送信機の役目を持つ目玉はケーナの肩斜め上に浮いているので、映ったのは宿屋の内部だ。　それがケーナが動くのに従い視点を変えていく。　宿屋の外の風景から地面に変わり、村を上空から見る俯瞰図へ。　そして細い街道に沿って森が広がり、その中央にポツンと見えるのは小さい広場とまでに縮小された村。　言うまでもないが、飛行魔法を使ったケーナが見ている上空からの風景だ。　朝飯を食いに来ていた数人の村人が、勿論リットやマレールからもどよめきが上がる。　最終的に見て分かるものが、画面の九割を占める濃い緑の森と、その中をジグザグに抜けて走る細い川（ルッシド大河）だけになった。　一応範囲にはケーナの守護者の塔も入って

いるが、ただの点となっていて誰も分からない。　画面が何も映し出さなくなるとケーナが宿屋内に戻ってくる。

「まあ、こんな感じです。　もう少ししたらフェルスケイロで闘技祭があると聞いたので、その様子がこっちで見れないかなーと思いまして……」

「でもこれ、ケーナが見ているものじゃないと見えないんだろ？　席とか取るの大変なんじゃないかい？」

　確かに最前列の特等席でも確保しないと、試合の一部始終を捉えるのは難しいだろう。　普通であれば、だ。　ケーナにはそういった普通を覆す特権がある。

「――――てな訳で闘技祭中、ここの敷地内でやる試合の様子を『対の瞳』に選りすぐりの視点で観戦させて欲しいんだけど、お願い出来る？」

『特に支障はナいと。　この塔近辺でアれば、此方に視認出来ヌ場所等ありまセん』

　当てにしたのは闘技祭の舞台である円形闘技場（コロッセウム）そのものが、守護者の塔であるところだ。　煙の守護者にその旨を伝えると快く了承してくれた。　守護者がスキルマスターのお願いを断ることはまず無いと言っていい。　可か不可はきちんと言ってくれるので、その辺りは分かり易い。

ゲーム中では守護者（かれら）との会話パターンは数少なかったのに比べ、こちらに来てからはちゃんとした思考を持っていてくれる。ある程度の無茶も通してくれるので助かっていた。

守護者の指示で、中核となっている植木鉢に植えられた椛（もみじ）の脇に『対の瞳（ディスプレイ）』をそっと置くケーナ。その正面へ出現したのは空中固定された画面である。そこには貴族街側から見た、王都中央を流れるエッジド大河の様子が映し出されていた。小さく見えるものの、渡し舟からヤンマ便までくっきり映っている。後はそのまま村に戻り、この映像をあちらで確認すれば問題ない。

ケーナは守護者に闘技祭の本番が始まるまでは、王都の様子などを映して貰うようにお願いしておく。時間は午後からだいたい酒場が閉まるぐらいの時間までだ。再びフェルスケイロに出てくるまではそれで様子を見て、マレールと相談することになるだろう。

中核にたっぷりとＭＰを注ぎ込み、ケーナは守護者の指輪を使って一旦自分の塔へ戻る。そこから外へ送ってもらい転移魔法で村へと戻った。これは守護者の塔内部では転移魔法（守護者の指輪は例外）が使えないからだ。塔の外へ送ってもらうことも出来るが、出現場所が警備の厳重な円形闘技場（コロッセウム）外周付近になってしまう。

ぶっちゃけ見つかっても侯爵家の紋章を出すとか、シャイニングセイバーに頼るとか手はあるが、色々面倒なので遠回りな方法を選択した。

村に戻ってから確認したところ、きちんとフェルスケイロ側で見たものが映っていた。ついでに沢山の村人が押し寄せていて、酒場は黒山の人だかりだ。村からあまり出る者が居ない所なので、皆物珍しいのだろう。楽しんでくれれば何よりだと考えたケーナは、マレールに映し出される時間を伝え、問題があればその都度話

し合うと決めて、家に戻った。

「ここのところあちこち行ったり来たりしてたしなー。　オプスがフェルスケイロ着くまではのんびりと過ごすかなあ」
「そうですね。　ケーナ様もたまには一日中ゴロゴロするとかして過ごされたらどうでしょうか？」

昼食の席でロクシリウスにそう言われ、頷きかける。　すぐに隣でじっとこちらを見ているルカに気付き、咳払いをひとつ。　慌てて取り繕う。

「う……、狩りにでも行って来るよ」
「ええ。　ふふふ、ケーナ様のお好きなように。　家のことは万事抜かりなく私共にお任せを」

メイドと執事はぷっと吹き出すとニコニコしながら給仕を続けた。　不思議そうな顔になるルカはちょっと顔が赤いケーナに手を伸ばす。

「ケーナ、お母さん……風邪？」
「あああ、なんでもないなんでもない。　ルカも村の外へ行ってみる？」

恥ずかしさを誤魔化すようにルカに聞き返すケーナ。　てっきり以前の騒動で首を横に振られると思っていたケーナは、素直にこくーりと頷いたルカにぱっと破顔する。

「よし、じゃあ釣り……、でいいか。　ご飯食べたら大河まで足を伸ばして、お魚釣ろうね」

「うん」

そうしてちょっとした遠足っぽい午後を過ごしたケーナ一家。しかしその一行はロクシーヌとロクシリウスが一緒なのはまだいいとしても、過保護なケーナにより、召喚獣で喚び出されたわんこーズとぴーちゃんとヘイゲルが同行していた。　全員足して三千レベルを超えるという、迂闊に手を出すほうが可哀想なご一行様である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1247p/

リアデイルの大地にて

2011年12月17日07時23分発行